

## ベトナムの歴史地区古都ホイアンの保存に関する研究：文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事例を通して

著者	飛田 ちづる
発行年	2013
その他のタイトル	Conservation study on “Hoi An Ancient Town” historic area in Vietnam : Case study of cultural heritage conservation by Japan international cooperation
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6733号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00123655">http://hdl.handle.net/2241/00123655</a>

博士論文

ベトナムの歴史地区古都ホイアンの保存に関する研究

-文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事例を通して-

Conservation study on “Hoi An Ancient Town ” historic area in  
Vietnam

- Case study of cultural heritage conservation by Japan  
international cooperation-

人間総合科学研究科 博士後期課程

世界文化遺産学専攻

200830482 飛田 ちづる



# ベトナムの歴史地区古都ホイアンの保存に関する研究 -文化遺産保存を目的とした日本の国際協力を通して-

## <目次>

<b>第一章 研究の背景と目的</b>	<b>1</b>
1.1. 研究の背景	1
1.2. 研究の目的	2
1.3. 本研究の視点	3
1.3.1. 日本の歴史地区の保存制度	3
1.3.2. 歴史地区の保存整備の枠組みと国際的な組織の対応	6
1.3.3. 本論の視点	14
1.4. 研究対象	15
1.5. 研究方法	16
1.6. 既存研究	18
1.6.1. 古都ホイアンにおける日本の木造建造物保存への協力と 保存総合計画の研究	18
1.6.2. 古都ホイアン以外のベトナムにおける日本の木造建造物の文化遺産 としての保存への協力と建築史の研究	19
1.6.3. 東南アジア研究から見るベトナム及びホイアンへの視点	20
1.6.4. 文化遺産保存を目的とした国際協力-概論と事例-	21
1.6.5. 日本の歴史地区に関する研究	22
1.6.6. 本論の位置付け	23
 <b>第二章 歴史地区古都ホイアンにおける日本の国際協力による 木造建造物の文化遺産としての保存への取り組み</b>	 <b>27</b>
2.1. はじめに	27
2.2. 古都ホイアンの概要	27
2.3. ホイアン旧市街の成立と衰退	29
2.4. 歴史地区としての木造建造物保存整備の流れと日本の取り組み -ベトナム戦争後から世界遺産後の変容まで-	29
2.4.1. 第一期 1983～1989 年 保存整備事業準備期	33
2.4.2. 第二期 1990～1996 年 保存整備事業立上期	34

2.4.3.	第三期 1997～1999 年	保存整備事業変容期	・ ・ ・ ・ ・	35
2.4.4.	第四期 2000～2003 年	世界遺産後の保存管理期	・ ・ ・ ・ ・	36
2.4.5.	第五期 2004 年以降	保存整備事業の変容期 2	・ ・ ・ ・ ・	37
2.5.	考察と結論		・ ・ ・ ・ ・	38
<b>第三章 歴史地区の保存整備-保存整備のための枠組みから捉えた特徴-</b>				<b>・ ・ ・ ・ ・ 43</b>
3.1.	はじめに		・ ・ ・ ・ ・	43
3.2.	文化遺産保存のための法律及び条例の制定		・ ・ ・ ・ ・	43
3.2.1.	ベトナム全土の文化遺産保存のための法律		・ ・ ・ ・ ・	44
3.2.2.	古都ホイアンの保存に関する法律と条例		・ ・ ・ ・ ・	46
3.2.3.	ホイアン市における景観条例		・ ・ ・ ・ ・	50
3.2.4.	文化遺産保存のための法律と条例の制定の整備について		・ ・ ・ ・ ・	51
3.3.	文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置		・ ・ ・ ・ ・	52
3.3.1.	組織立ち上げから建築専門職員着任まで		・ ・ ・ ・ ・	52
3.3.2.	現行の組織		・ ・ ・ ・ ・	53
3.4.	文化遺産の調査及び研究と報告		・ ・ ・ ・ ・	54
3.4.1.	文化遺産の調査と研究		・ ・ ・ ・ ・	54
3.4.2.	報告及び目録の作成		・ ・ ・ ・ ・	57
3.5.	文化遺産保存のための修理技術と材料		・ ・ ・ ・ ・	58
3.5.1.	日本の建造物修理技術協力の概要		・ ・ ・ ・ ・	58
3.5.2.	古都ホイアンの修理方針			
	-古都ホイアンにおける文化遺産の等級と修理基準-		・ ・ ・ ・ ・	61
3.5.3.	修理および整備工事の費用		・ ・ ・ ・ ・	63
3.5.4.	古都ホイアンにおける建造物修理の流れ			
	-修理の許可を得るまで-		・ ・ ・ ・ ・	65
3.5.5.	古都ホイアンにおける建造物修理の流れ			
	-建造物修理及び整備工事の流れ-		・ ・ ・ ・ ・	66
3.5.6.	古都ホイアンの保存地区 I における建造物等修理及び整備工事		・ ・ ・ ・ ・	70
3.6.	枠組み全てにかかる人材育成		・ ・ ・ ・ ・	75
3.7.	考察 歴史地区古都ホイアンの保存整備の特徴		・ ・ ・ ・ ・	77
<b>第四章 歴史地区の保存整備 2-修理、整備内容から見る保存整備事業の特徴-</b>				<b>・ ・ ・ ・ ・ 83</b>
4.1.	はじめに		・ ・ ・ ・ ・	83
4.2.	修理及び整備済み建造物事例による修理と整備の傾向分析		・ ・ ・ ・ ・	84

4.2.1.	調査対象	・ ・ ・ ・ ・ 85
4.2.2.	調査手法	・ ・ ・ ・ ・ 89
4.2.3.	調査結果の分析方法	・ ・ ・ ・ ・ 89
4.2.4.	特級、等級 1 の建造物の修理	・ ・ ・ ・ ・ 91
4.2.5.	等級 3 及び等級 4 の整備内容	・ ・ ・ ・ ・ 108
4.3.	考察	・ ・ ・ ・ ・ 156
4.4.	小結	・ ・ ・ ・ ・ 158

<b>第五章</b>	<b>歴史地区ドゥオン・ラム村における日本の国際協力による 木造建造物の文化遺産としての保存への取り組み</b>	<b>・ ・ ・ ・ ・ 163</b>
5.1.	はじめに	・ ・ ・ ・ ・ 163
5.2.	歴史地区ドゥオン・ラム村の保存整備事業の概要	・ ・ ・ ・ ・ 163
5.2.1.	ドゥオン・ラム村の概要と事業の流れ	・ ・ ・ ・ ・ 163
5.2.2.	文化遺産保存のための法律及び条例の制定	・ ・ ・ ・ ・ 166
5.2.3.	文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置	・ ・ ・ ・ ・ 168
5.2.4.	文化遺産の調査と研究及び報告	・ ・ ・ ・ ・ 169
5.2.5.	文化遺産保存のための修理技術と材料	・ ・ ・ ・ ・ 170
5.2.6.	枠組み全てに係わる人材育成	・ ・ ・ ・ ・ 170
5.3.	修理及び補修内容の特徴	・ ・ ・ ・ ・ 171
5.3.1.	調査対象、調査手法と調査期間	・ ・ ・ ・ ・ 171
5.3.2.	調査結果の分析	・ ・ ・ ・ ・ 172
5.3.3.	ドゥオン・ラム村の修理及び補修傾向に対する考察	・ ・ ・ ・ ・ 186
5.4.	考察と結論 ドゥオン・ラム村の保存整備事業の特徴と課題	・ ・ ・ ・ ・ 187

<b>第六章</b>	<b>考察 ベトナムの歴史地区の保存整備の課題と日本の協力の成果</b>	<b>・ ・ ・ ・ ・ 191</b>
6.1.	はじめに	・ ・ ・ ・ ・ 191
6.2.	古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業の相違点	・ ・ ・ ・ ・ 192
6.3.	古都ホイアンの木造建造物修理技術における日本の協力の位置づけ	・ ・ ・ ・ ・ 194
6.4.	歴史地区保存整備を目的とした日本の国際協力の課題と ベトナムの課題	・ ・ ・ ・ ・ 195
6.5.	ベトナムの歴史地区保存整備の独自性	・ ・ ・ ・ ・ 199
6.6.	今後の展望-歴史地区保存整備におけるベトナムの課題と日本の課題-	・ ・ ・ ・ ・ 201

## < 図表目次 >

### 第一章 研究の背景と目的

表 1-1	歴史地区保存整備の枠組みと伝統的建造物群保存地区制度との対応	・ ・ ・ ・ 5
表 1-2	国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための法律と条例の制定」 に関する内容	・ ・ ・ ・ 7
表 1-3	国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」 に関する内容	・ ・ ・ ・ 9
表 1-4	国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための調査と研究及び報告」 に関する内容	・ ・ ・ ・ 11
表 1-5	国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための技術と材料」 に関する内容	・ ・ ・ ・ 12
表 1-6	国際条約や憲章に見られる「枠組み全てに係わる人材育成」 に関する内容	・ ・ ・ ・ 13
図 1-1	古都ホイアンとドゥオン・ラム村の位置	・ ・ ・ ・ 16

### 第二章 歴史地区古都ホイアンにおける日本の国際協力による 木造建造物の文化遺産としての保存への取り組み

表 2-1	ホイアン事業年表	・ ・ ・ ・ 32
表 2-2	ホイアン事業における歴史地区保存整備の枠組みの要素と 各事業の対応	・ ・ ・ ・ 40
表 2-3	歴史地区保存整備の枠組みに対応する日本側の協力内容と協力時期	・ ・ ・ ・ 40
図 2-1	ホイアン市全体の地図	・ ・ ・ ・ 28
図 2-2	古都ホイアンの保存地区	・ ・ ・ ・ 28
図 2-3	アジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業のうち ホイアンの事例における関係組織と関連図	・ ・ ・ ・ 31

### 第三章 歴史地区の保存整備—保存整備のための枠組みから捉えた特徴—

表 3-1	ベトナムの文化遺産保存に関する法律一覧	・ ・ ・ ・ ・ 44
表 3-2	1987 年「保存活用に関する規制」、1997 年「管理、保存と開発に関する規定」 及び伝統的建造物群保存地区制度の比較	・ ・ ・ ・ ・ 47
表 3-3	日本人専門家の建造物修理技術協力年表	・ ・ ・ ・ ・ 60
表 3-4	日本人専門家が伝えた建造物修理技術	・ ・ ・ ・ ・ 61
表 3-5	家屋の分類と修理基準	・ ・ ・ ・ ・ 63
表 3-6	古都ホイアンにおける修理費用補助の割合	・ ・ ・ ・ ・ 64
表 3-7	町並み保存ワークショップの概要内容	・ ・ ・ ・ ・ 77
表 3-8	歴史地区保存整備の枠組みに対応する事業内容	・ ・ ・ ・ ・ 78
図 3-1	組織の体制変化	・ ・ ・ ・ ・ 54
図 3-2	古都ホイアン保存地区Ⅰ内の各等級の実例	・ ・ ・ ・ ・ 56
図 3-3	古都ホイアンの家屋例	・ ・ ・ ・ ・ 61
図 3-4	陰陽瓦	・ ・ ・ ・ ・ 61
図 3-5	古都ホイアン内の修理の流れ	・ ・ ・ ・ ・ 65
図 3-6	コンサルタント事務所で見られる意匠見本と材料見本	・ ・ ・ ・ ・ 67
図 3-7	日本人専門家が伝えた継ぎ手「追掛け大栓継」	・ ・ ・ ・ ・ 69
図 3-8	ホイアンに元々あった継ぎ手「十字目違いほぞ」	・ ・ ・ ・ ・ 69
図 3-9	日本人専門家が伝えた修理方法	・ ・ ・ ・ ・ 70
図 3-10	ホイアに元々あった割れの補修「千切」	・ ・ ・ ・ ・ 70
図 3-11	全解体工事の様子	・ ・ ・ ・ ・ 71
図 3-12	部分解体工事の様子	・ ・ ・ ・ ・ 72
図 3-13	更地にして作る場合	・ ・ ・ ・ ・ 73
図 3-14	材料の保管状態	・ ・ ・ ・ ・ 74
図 3-15	番付の事例	・ ・ ・ ・ ・ 75

### 第四章 歴史地区の保存整備 2 —修理内容から見る維持管理—

表 4-1	修理及び整備済み建造物の立地別等級内訳(196 件)	・ ・ ・ ・ ・ 84
表 4-2	全体の等級の割合	・ ・ ・ ・ ・ 84
表 4-3	主要な通りの略称	・ ・ ・ ・ ・ 86
表 4-4	分類項目と内容の分け方	・ ・ ・ ・ ・ 90
表 4-5	特級、等級 1 の分類と件数及び事例	・ ・ ・ ・ ・ 91

表 4-6	等級 3、等級 4 の分類と件数及び事例	・ ・ ・ ・ ・ 109
表 4-7	分類のまとめ	・ ・ ・ ・ ・ 111
表 4-8	整備済み建造物の分類のまとめ	・ ・ ・ ・ ・ 114
表 4-9	通りごとの等級の割合	・ ・ ・ ・ ・ 114
表 4-10	主要な通りに面した整備済み建造物(a)内部、外観共に伝統的な様式	・ ・ ・ ・ ・ 116
表 4-11	主要な通りに面した整備済み建造物(b)外観のみ意匠見本 1	・ ・ ・ ・ ・ 121
表 4-12	主要な通りに面した整備済み建造物 (c)古都ホイアンの町家に準じる棟の構成	・ ・ ・ ・ ・ 126
表 4-13	主要な通りに面した整備済み建造物 (d)古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード	・ ・ ・ ・ ・ 131
表 4-14	主要な通りに面した整備済み建造物 (e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部 (前半)	・ ・ ・ ・ ・ 136
表 4-15	主要な通りに面した整備済み建造物 (e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部 (後半)	・ ・ ・ ・ ・ 137
表 4-16	路地に面した整備済み建造物 (A)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部	・ ・ ・ ・ ・ 144
表 4-17	主要な通りに面した整備済み建造物 (f)陰陽瓦を葺くのみ	・ ・ ・ ・ ・ 149
表 4-18	路地に面した整備済み建造物(B)陰陽瓦を葺くのみ	・ ・ ・ ・ ・ 153
表 4-19	修理申請のあった特級、等級 1、等級 2 の修理内容(1)	・ ・ ・ ・ ・ 155
表 4-20	修理申請のあった特級、等級 1、等級 2 の修理内容(2)	・ ・ ・ ・ ・ 156
表 4-21	修理申請のあった特級、等級 1、等級 2 の修理内容(3)	・ ・ ・ ・ ・ 157
図 4-1	修理申請建造物の推移	・ ・ ・ ・ ・ 85
図 4-2	調査対象の等級別分布	・ ・ ・ ・ ・ 87
図 4-3	調査対象の修理済み建造物の分布	・ ・ ・ ・ ・ 88
図 4-4	調査対象の修理済み建造物の分布 (特級、等級 1 を分類で色分け)	・ ・ ・ ・ ・ 92
 <u>事例 1 ①全公型 (26) グエン・タイ・ホック 81</u>		
図 4-5-1	グエン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học) 図面	・ ・ ・ ・ ・ 93
図 4-5-2	グエン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học) 図面	・ ・ ・ ・ ・ 94
図 4-6	グエン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học) 写真	・ ・ ・ ・ ・ 95
 <u>事例 2 ②費用個人型 (2) グエン・ティ・ミン・カイ 16</u>		
図 4-7	グエン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai)1 階調査時平面図	・ ・ ・ ・ ・ 96

図 4-8-1	グエン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai)写真	・ ・ ・ ・ ・ 96
図 4-8-2	グエン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai)写真	・ ・ ・ ・ ・ 97
 <u>事例 3 ③全個型 (6) チャン・フー77</u>		
図 4-9	平面図 (上 1 階、下 2 階)	・ ・ ・ ・ ・ 98
図 4-10-1	チャン・フー77 (77Trần Phú)	・ ・ ・ ・ ・ 98
図 4-10-2	チャン・フー77 (77Trần Phú)	・ ・ ・ ・ ・ 99
 <u>事例 4 ③全個型 (2) レ・ロイ 10/56</u>		
図 4-11	レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) 修理後平面図	・ ・ ・ ・ ・ 100
図 4-12-1	レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) 写真	・ ・ ・ ・ ・ 100
図 4-12-2	レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) 写真	・ ・ ・ ・ ・ 101
 <u>事例 5 ④費用公型 (9) ホア・ヴァン・トゥ 17</u>		
図 4-13	ホア・ヴァン・トゥ 17(17Hoàng Văn Thụ)修理前後の図面	・ ・ ・ ・ ・ 102
図 4-14	ホア・ヴァン・トゥ 17(17Hoàng Văn Thụ)写真	・ ・ ・ ・ ・ 103
 <u>事例 6 ⑤共公型 (37) チャン・フー84</u>		
図 4-15	チャン・フー84 (84Trần Phú)修理後図面	・ ・ ・ ・ ・ 104
図 4-16	チャン・フー84 (84Trần Phú)写真	・ ・ ・ ・ ・ 105
 <u>事例 7 ⑥共個型 (1) グエン・ティ・ミン・カイ 2/8</u>		
図 4-17	2011 年調査時平面図	・ ・ ・ ・ ・ 106
図 4-18	グエン・ティ・ミン・カイ 2/8 (2/8 Nguyễn Thị Minh Khai) 写真	・ ・ ・ ・ ・ 107
図 4-19	意匠見本 1 (伝統的な様式)	・ ・ ・ ・ ・ 110
図 4-20	意匠見本 2 (伝統的な様式と現代的な意匠の折衷)	・ ・ ・ ・ ・ 110
図 4-21	整備内容の分類	・ ・ ・ ・ ・ 112
図 4-22	調査対象の整備済み建造物の位置図	・ ・ ・ ・ ・ 113
図 4-23-1	(a)内部、外観共に伝統的な様式に整備した事例の拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 116
図 4-23-2	(a)内部、外観共に伝統的な様式に整備した事例の拡大位置図 2	・ ・ ・ ・ ・ 117
図 4-24	主要な通りに面した整備済み建造物	
	(a)内部、外観共に伝統的な様式の外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 117
図 4-25	主要な通りに面した整備済み建造物の位置図	
	(a) 内部、外観共に伝統的な様式に整備	・ ・ ・ ・ ・ 118

事例 ①全個型(112)グエン・タイ・ホック 9

図 4-26-1	グエン・タイ・ホック 9 (9Nguyễn Tha' i Hóc)写真 1	・ ・ ・ ・ ・ 119
図 4-26-2	グエン・タイ・ホック 9 (9Nguyễn Tha' i Hóc)写真 2	・ ・ ・ ・ ・ 120

図 4-27	主要な通りに面した整備済み建造物 (b)外観のみ伝統的な形式の外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 121
図 4-28	(b)外観のみ伝統的な形式に整備した事例の拡大位置図	・ ・ ・ ・ ・ 122
図 4-29	主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (b)外観のみ伝統的な形式	・ ・ ・ ・ ・ 123

事例 ②国公型(161)レ・ロイ 29

図 4-30	レ・ロイ 29 (29Lê Lợi)写真	・ ・ ・ ・ ・ 124
--------	----------------------	---------------

事例 ①全公型(167)チャン・フー51

図 4-31	チャン・フー51 (51Trần Phú)写真	・ ・ ・ ・ ・ 125
図 4-32	(c)古都ホイアンの町家に準じる棟の構成事例の拡大位置図	・ ・ ・ ・ ・ 127
図 4-33	主要な通りに面した整備済み建造物 (c)古都ホイアンの町家に準じる棟の構成の外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 127
図 4-34	主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (c)古都ホイアンの町家に準じる棟の構成	・ ・ ・ ・ ・ 128

事例 ①全公型(150)グエン・タイ・ホック 26

図 4-35	グエン・タイ・ホック 26 (26Nguyễn Tha' i Hóc)1 階平面図	・ ・ ・ ・ ・ 129
図 4-36	グエン・タイ・ホック 26 (26Nguyễn Tha' i Hóc)写真	・ ・ ・ ・ ・ 129
図 4-37-1	(d)古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード事例の 拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 131
図 4-37-2	(d)古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード事例の 拡大位置図 2	・ ・ ・ ・ ・ 132
図 4-38	主要な通りに面した整備済み建造物事例 (d)古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードの外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 132
図 4-39	主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (d)古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード	・ ・ ・ ・ ・ 133



### 事例 ③全個型(104)レ・ロイ 80

図 4-40	レ・ロイ 80 (80Lê Lợi)写真	・ ・ ・ ・ ・ 134
図 4-41-1	(e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部事例の拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 138
図 4-41-2	(e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部事例の拡大位置図 2	・ ・ ・ ・ ・ 139
図 4-42-1	主要な通りに面した整備済み建造物 (e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の外観一覧 1	・ ・ ・ ・ ・ 140
図 4-42-2	主要な通りに面した整備済み建造物 (e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の外観一覧 2	・ ・ ・ ・ ・ 141
図 4-43	主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (e)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部	・ ・ ・ ・ ・ 142

### 事例 レ・ロイ 61

図 4-44	レ・ロイ 61 (61Lê Lợi)写真	・ ・ ・ ・ ・ 143
図 4-45-1	(A)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の事例の拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 144
図 4-45-2	(A)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の事例の拡大位置図 2	・ ・ ・ ・ ・ 145
図 4-46	路地に面した整備済み建造物事例 (A)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 146
図 4-47	路地に面した整備済み建造物の位置図 (A)意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の位置図	・ ・ ・ ・ ・ 147

### 事例 ③全個型(16)ファン・チャウ・チン 4/47

図 4-48	ファン・チャウ・チン 4/47 (4/47Phan Châu Trinh)写真	・ ・ ・ ・ ・ 143
図 4-49-1	(f)陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 149
図 4-49-2	(f)陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 2	・ ・ ・ ・ ・ 150
図 4-50	主要な通りに面した整備済み建造物 (f)陰陽瓦を葺くのみ外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 150
図 4-51	主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (f)陰陽瓦を葺くのみ	・ ・ ・ ・ ・ 151

### 事例 ③全個型(148)ホアン・ディエウ 39

図 4-52	ホアン・ディエウ 39 (39Hòa`ng Diêu)写真	・ ・ ・ ・ ・ 152
図 4-53-1	(B)陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 153
図 4-53-2	(B)陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 1	・ ・ ・ ・ ・ 154
図 4-54	路地に面した整備済み建造物(B)陰陽瓦を葺くのみ外観一覧	・ ・ ・ ・ ・ 154
図 4-55	路地に面した整備済み建造物の位置図 (B) 陰陽瓦を葺くのみ	・ ・ ・ ・ ・ 155

事例 ③全個型(25)ファン・チャウ・チン 36/71

図 4-56	ファン・チャウ・チン 36/71 (36/71Phan Châu Trinh)写真	・ ・ ・ ・ ・ 156
--------	---	---------------

第五章 歴史地区ドゥオン・ラム村における日本の国際協力による木造建造物の文化遺産としての保存への取り組み

表 5-1	ドゥオン・ラム村の保存整備事業年表	・ ・ ・ ・ ・ 165
表 5-2	ドゥオン・ラム村保存条例と伝統的建造物群保存地区制度、 古都ホイアン 1997 年保存条例の比較	・ ・ ・ ・ ・ 167
表 5-3	専門家の指導内容	・ ・ ・ ・ ・ 171
表 5-4	所有者と修理費用負担者による分類	・ ・ ・ ・ ・ 173
表 5-5	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (1)管理事務所による修理	・ ・ ・ ・ ・ 175
表 5-6	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (2)管理事務所により修理が予定されている事例	・ ・ ・ ・ ・ 179
表 5-7	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (3)個人により修理が行われた事例	・ ・ ・ ・ ・ 182
表 5-8	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (4)修理予定が決まっていない事例	・ ・ ・ ・ ・ 185
表 5-9	ドゥオン・ラム村保存整備事業における 歴史地区保存整備の枠組み整備進捗	・ ・ ・ ・ ・ 189

図 5-1	調査対象建造物位置図	・ ・ ・ ・ ・ 166
図 5-2	ドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所組織図	・ ・ ・ ・ ・ 169
図 5-3-1	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (1)遺跡管理事務所による修理の外観一覧 1	・ ・ ・ ・ ・ 175
図 5-3-2	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (1)遺跡管理事務所による修理の外観一覧 2	・ ・ ・ ・ ・ 176

遺跡管理事務所による修理事例 1 (1)モン・フー門

図 5-4	モン・フー門写真	・ ・ ・ ・ ・ 176
-------	----------	---------------

遺跡管理事務所による修理事例 2 (11)ミア寺

図 5-5	ミア寺写真	・ ・ ・ ・ ・ 177
-------	-------	---------------

#### 遺跡管理事務所による修理事例 (17) ハー・ヴァ・ヴィン邸

図 5-6	ハー・ヴァ・ヴィン邸写真	・ ・ ・ ・ ・	178
図 5-7-1	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (2) 遺跡管理事務所により修理が予定されている事例の外観一覧 1	・ ・ ・ ・ ・	179
図 5-7-2	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (2) 遺跡管理事務所により修理が予定されている事例の外観一覧 2	・ ・ ・ ・ ・	180

#### 遺跡管理事務所により修理が予定されている事例 (29) キエウ・アイン・バン邸

図 5-8-1	キエウ・アイン・バン邸写真 1	・ ・ ・ ・ ・	180
図 5-8-2	キエウ・アイン・バン邸写真 2	・ ・ ・ ・ ・	181

#### 遺跡管理事務所により修理が予定されている事例 (14) ゴ・クエン廟

図 5-9	ゴ・クエン廟写真	・ ・ ・ ・ ・	181
図 5-10	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (3) 個人により修理が行われた事例の外観一覧	・ ・ ・ ・ ・	182

#### 個人により補修が行われた事例 (5) ホ・ファン祠堂

図 5-11	ホ・ファン祠堂写真	・ ・ ・ ・ ・	183
--------	-----------	-----------	-----

#### 個人により補修が行われた事例 (25) ハー・グエン・フエン邸

図 5-12	ハー・グエン・フエン邸写真	・ ・ ・ ・ ・	184
図 5-13	ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (4) 修理予定が決まっていない事例の外観一覧	・ ・ ・ ・ ・	185

#### 修理予定が決まっていない事例 (12) ドアイ・ザップ集落集会所

図 5-14	ドアイ・ザップ集落集会所写真	・ ・ ・ ・ ・	186
--------	----------------	-----------	-----

## 第六章 考察

### ベトナムの歴史地区の保存整備の課題と日本の協力の成果について

表 6-1	古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業の比較	・ ・ ・ ・ ・	194
-------	---------------------------	-----------	-----

## 用語の定義

1. 各章ごとに用いる用語は初出で定義する、もしくは注で説明し、以後は略称や通称を用いる。

2. 本論を通じて用いる用語は以下の通り定義する。

(1) 古都ホイアン

1999年に”Hoi An Ancient town”（古都ホイアン）としてユネスコ世界遺産リストに記載された地区の保存の中心地区（保存地区Ⅰ）である。従って、1999年以降は古都ホイアンの保存地区Ⅰとして扱うが、1998年以前はホイアン旧市街とする。

(2) ホイアン市

古都ホイアンの位置する行政地区を示す場合にホイアン市と書く。

(3) 古都ホイアンの事例における「日本側」

文化庁、外務省、JICA（当時）、昭和女子大学、千葉大学、東京都立大学（当時）、日本建築セミナー全てを指す。

(4) 古都ホイアンの事例における「ベトナム側」

文化省（当時）、ホイアン市人民委員会、ホイアン史跡管理事務所、建築系大学、キム・アン工務店全てを指す。

(5) 古都ホイアンの事例における「日本人専門家」

ホイアンの保存整備事業に携わった文化庁の調査官、都道府県の文化財担当者、日本建築セミナーの会員、大学の研究者全てを指す。

(6) ドゥオン・ラム村の事例における「日本側」

文化庁、奈良文化財研究所、JICA、昭和女子大学全てを指す。

(7) ドゥオン・ラム村の事例における「ベトナム側」

文化情報省（当時）、ソントイ市、ドゥオン・ラム村遺跡管理事務所全てを指す。

## 外国語表記

固有名詞等は越語、仏語、英語が用いられているため、初出に日本語表記の後に外国語表記を併記し、以後は日本語のみの表記とする。

## 翻訳

外国語表記の前に書かれている日本語は、特に注意書きがない限り、越語はベトナム語事典に準拠し、英語と仏語は日本語で一般的に使われている呼称を用いた。その他一般的に用いられていない用語などは、全て筆者が翻訳した。各章ごとに初出で翻訳の有無を示している。

## 第一章 研究の背景と目的

### 1. 研究の背景と目的

#### 1.1. 研究の背景

歴史地区は、歴史的建造物が一定量集積しており、歴史的建造物を中心に地割や工作物といった歴史的価値を持つものを一体として残す場所である<sup>注1)</sup>。歴史地区に残る建造物は地域と時代の特性を反映し、その材料や意匠に歴史性が見られる。個々の建造物の形式や用途は地域と時代の特性を表し、多様性と統一性を持つ。

1960年代の日本は高度経済成長に伴う歴史的な環境の破壊が著しく、歴史的建造物とその周辺の環境を一体として保存する活動が市民によって始められた。そうした中で1975年（昭和50年）に文化財保護法が改定されて伝統的建造物群保存地区制度<sup>注2)</sup>が策定された。この制度は、周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的建造物群を保存するために、市町村が該当範囲を都市計画もしくは条例で定める地域地区として保存する方法である。国指定有形文化財<sup>注3)</sup>の保存方法と比べると、保存地区を有する市町村と保存地区の住民が主体となり当該地区全体を文化遺産として保存していくことに重点が置かれているという特徴がある。

ベトナムは1983年から古都ホイアンの保存整備事業に着手し、翌1984年に同地区を国の文化財とした。1976年の南北統一後から国の文化遺産の保存活動が進められてきたが<sup>注4)</sup>、古都ホイアンの保存は、史跡や単体の建造物の保存とは異なる手法が必要であった。ベトナムは古都ホイアンの保存のために、伝統的な家屋の修理技術協力を1990年に日本に要請した。これを機に日本政府や文化財の専門家、大学の研究者などによる古都ホイアンにおける文化遺産保存のための協力が開始された。そして、古都ホイアンは1999年に世界遺産リストに「古都ホイアン<sup>注5)</sup>」として記載されることになった。古都ホイアンの伝統的建造物の大半は木造建造物である。これらの木造建造物に対して歴史地区の主要な構成要素として適した保存及び修理が行われるために、前述した日本の歴史地区保存の経験はベトナムにおいてどのように活かされたのだろうか。具体的には、社会主義国ベトナムで、ホイ

アン旧市街の保存体制はどのように整備されていったのだろうか。社会制度や文化的背景が異なる国への文化遺産保存のための日本の国際協力はどうに行われ、どのような効果や影響をもたらしたのだろうか。約 20 年の蓄積があるベトナムの歴史地区保存整備事業を改めて整理することは、今後日本が国際協力を通じて他国の歴史地区保存整備事業に関わり、効果をあげていくための新たな知見をもたらすと考えられる。

## 1. 2. 研究の目的

本研究は、ベトナムの歴史地区古都ホイアンを主な事例とし、ベトナムにおける歴史地区保存整備の特徴と課題を明らかにすることを目的とする。1999 年にホイアン旧市街は世界遺産古都ホイアンとして世界遺産リストに記載された。これはホイアン旧市街が世界遺産リストの記載基準である「ii 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又は文化圏内での価値観の交流を示すものであること。」「v あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態、若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本であること。又は、人類の環境とふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれていること。）」1)に該当すると評価された結果である。東南アジアでは多くの歴史都市或いは歴史地区が見られるが、世界遺産リストに記載されたものは限られている。よって、古都ホイアンで実施されている保存整備方法は、先進事例として他の東南アジアにおける歴史都市或いは歴史地区の保存整備の参考になると考えられる。

木造建造物から構成される歴史地区においては、木造建造物の保存及び修理の方法、歴史地区としての保存体制、改修や新築の管理による景観整備などが組み合わせられ、総合的に保存整備事業が行われる。本論で主な事例とするホイアン旧市街も同様であるといえる。ホイアン旧市街の保存整備体制が形成される過程で、日本はどのように協力し貢献したのだろうか。古都ホイアンで実施されている保存整備事業を整理し、社会主義国ベトナムで国際協力のもとに行われている歴史地区保存の特徴と課題を、古都ホイアンの保存整備事業から導き出す。そして、社会体制が異なる国の歴史地区古都ホイアン保存整備への日本の関わり方や協力における課題についても考察する。また、ベトナムの歴史地区保存の枠組みとして古都ホイアンの保存整備手法の継承可能性を確認するため、古都ホイアンと同様に日本が協力している歴史地区トゥオン・ラム村の保存整備事業についても特等を明らかにし、考察を行う。

### 1.3. 本研究の視点

#### 1.3.1. 日本の歴史地区の保存制度

日本による国際協力のもとに行われている歴史地区保存の特徴と課題を把握するため、まずは、歴史地区保存整備の枠組みを日本の歴史地区の保存制度から抽出する。

日本の歴史地区の保存整備手法は1975年に文化財保護法の中で制定された伝統的建造物群保存地区制度に基づく<sup>注7)</sup>。この制度は、歴史地区を保存するために市町村が調査を行い、保存条例を策定し、都市計画で保存地区を決定する。市町村は、保存条例に従い保存計画を策定し、保存地区の範囲、歴史的建造物の特定（特定物）と修理及び修景の基準、補助基準<sup>注8)</sup>を示す。歴史地区の保存整備事業は市町村だけではなく、保存地区の住民の協力をもって実施される。市町村は歴史的建造物の修理、保存計画や修理・修景基準を住民や施工業者に周知し、歴史地区の価値を損なわないよう保存整備事業を適切に実施する。すなわち、保存整備事業の適切な実施には、事業に携わる住民や関係者全てが保存に対する理解を深める必要がある。

歴史地区の保存条例は、保存地区の決定や保存計画策定の手続き、現状変更の規制内容や許可の基準、経費の補助や審議会を設置など、伝統的建造物群保存地区の保存のために必要な措置を定める<sup>注9)</sup>。保存計画は、保存の基本方針や保存物件の特定、保存地区内の建造物の保存整備計画、保存地区の環境整備計画、各建造物の所有者への助成措置などについて定めている。また、一般的に保存地区の建造物の許可基準、修理基準、修景基準も定めている。保存条例や保存計画は公表されるため、住民は特定物（伝統的建造物）と非特定物について知ることができ、保存整備事業の意識啓発につながる。文化財保存には所有者の積極的な保護活動が求められるが、伝統的建造物群保存地区制度においては、特定物の所有者に加え保存地区全体の住民による主体的な保存活動がなければ十分に歴史地区を保存できない<sup>注10)</sup>。所有者や住民による保存活動を適切な方法に誘導する仕組みが、市町村により策定された保存条例と保存計画である。保存に必要な法律と条例は、歴史地区で行われる保存整備事業を円滑に進めるための枠組みであり、保存活動を行う所有者と住民および市町村が協力するための取り決めである。以上より「文化遺産保存のための法律と条例」は、歴史地区の保存整備事業の基礎となとなっている。

文化遺産として歴史地区を保存するためには保存条例、保存計画が適切に実施されなければならない。保存整備事業が、補助事業<sup>注11)</sup>として実施されるために、文化財保存に関する業務を適切に指導し助言できる専門家（以下、専門家）が、市町村に配置されることが必要である。事業主体の市町村は、上述した保存対策調査や保存条例の制定、保存計画の策定を行うと同時に保存整備事業の責任を負う。専門家は、保存整備事業を適切に実施するための管理業務、個々の建造物の修理計画、修理事業の指導や助言、修理に必要な人材の手配や材料の調達、修理記録の作成と保管の業務を行う。また、保存整備事業を進めるために、専門家は保存地区で発生する問題の対処や住民への働きかけなどを行う。従っ

て「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」は、歴史地区の保存整備を実施していくために必要な要素である。

歴史地区を保存する根拠となる歴史的価値は、歴史地区の調査と研究によって明らかにされる。各建造物の調査に基づき、歴史的建造物及び、歴史地区の成立過程が整理・評価されて歴史的価値が明確になる。調査と研究によって明らかになる歴史地区や歴史的建造物の特徴は、修理計画や修理基準を定める根拠となる。調査と研究の成果は報告書としてまとめられ、日本の伝統的建造物群保存地区では保存対策報告書として出版される。調査と研究の成果は報告書により後世に伝えられ、保存の根拠も伝えられる。従って「文化遺産の調査と研究及び報告」は、歴史地区の保存整備事業を継続的に実施し、真正性を確保していくために必要な要素である。

歴史地区に位置する個々の建築物を文化遺産として修理し次世代へ継承していく行為は、歴史地区全体の真正性の確保と継承につながる、地域の特性に応じた個々の建築物の修理技術は、前述した調査と研究により明らかにされる。特に、伝統的建造物は、経年変化（劣化）していくものであり、歴史的価値を保つためには、建築物の修理・修復が必要となることが多い。修理は、明らかにされた伝統技術を用い、旧材を可能な限り継承することが求められる。修理に用いる新しい材料も、前述した調査と研究により判明した樹種を使用したり形式を再現したりする場合もある。これらの修理基準は、市町村が策定する保存計画や保存条例により決められている場合もある。実際に修理を担当する施工会社は、歴史地区の修理技術を熟知し、伝統工法で施工できる必要がある。そして、修理工事の記録に修理の具体的な内容が記され、文化遺産として修理されたことが記録される。従って「文化遺産保存のための技術と材料」は、歴史地区を継続的に保存していくために必要な要素である。

歴史地区を保存整備するためには、専門技術を必要とすることが多く、専門家として建造物を文化遺産として修理する技術を持つ人材、そして、歴史地区保存整備について理解している保存地区の住民の共同作業が求められる。保存地区の管理を行う専門家は文化財行政に精通してなければならず、文化財保存に関連する法律や保存条例、保存計画の実施及び改訂を行う。また彼等は開発行為の調整や地区内の他の整備事業との調整など、保存地区で発生する課題に対応しなければならない。修理技術者は、歴史地区の保存整備の手法を理解し、保存地区に適した修理を行わなければならない。

歴史地区保存に携わる専門家は、伝統的建造物群保護行政研修に参加している<sup>注12)</sup>。この研修は、地方公共団体の職員及び伝統的建造物群の保存に関わる専門家・技術者を対象とし、基礎と実践に分かれた内容で構成され、技術面と行政面の双方から行われている。

伝統的建造物群保存地区制度は、地区の住民と市町村が協力して主体的に保存に取り組む制度であり、地区内の住民における保存団体に適切な保存の取り組みと知識が求められる。全国伝統的建造物群保存地区協議会（伝建協）は、全国の保存地区の市町村による協議会で、保存のための情報収集や蓄積を行い、これらの情報を相互に共有することで保存



と活用に対する質の向上を試みている。市町村職員や保存団体は協議会に参加することによって、保存問題への対応や地域文化への取り組みについて意見交換を行っている。このような取り組みの実情から「枠組み全てに関わる人材育成」は歴史地区の保存整備に必要な要素といえる。

以上より歴史地区保存整備の枠組みを設定した（表 1-1）。

表 1-1 歴史地区保存整備の枠組みと伝統的建造物群保存地区制度との対応

伝統的建造物群保存地区制度	歴史地区保存整備の枠組みの要素の詳細	歴史地区保存整備の枠組み
保存条例制定（文化財保護法に基づき制定する。） ・保存計画策定 ・報告書に基づき保存対象を地方自治体が決定 ・経費の補助 ・審議会の設置	・当該地区を有する国の法律で、歴史地区が文化遺産として保護対象にされている。 ・当該地区を有する地方自治体、又は地方自治体に当たる組織が制定した保存条例がある。 ・保存計画が策定されている。 ・保存対象と保存理由が明確になっている。 ・保存対象が分類されている。 ・保存対象の修理及び整備費用に対する補助率が定められている。	文化遺産保存のための法律と条例の制定
地方自治体で保存管理 ・専門職員が配置されている場合もある ・修理報告書は作成されていない場合もある。	・当該地区の保存整備を担当する組織、或いは部署等が設置されている。 ・当該地区の保存対象物の特性を理解し、専門的知見を有する職員が勤務している ・管理組織は、保存地区で行われる修理や整備を保存計画に基づき管理している。 ・修理工事記録や工事写真など、保存対象の変遷を把握できる資料が作成、保管されている。	文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置
保存対策調査 ・調査報告書の作成が慣例	・当該地区の保存整備を担当する組織により調査が行われている。 ・調査により、当該地区の実態が把握され、保存対象や保存範囲が設定されている。 ・調査結果は報告書の作成と配布、報告会などで公表されている。 ・修理工事により発見された新たな事実は、報告及び記録され、後で閲覧できる。 ・修理工事の記録が作成されている。	文化遺産の調査と研究及び報告
修理及び修景事業の管理 ・修理技術の使用は重要文化財（建造物）以外は、地域の技術などを用いるなどが自主的に行われている。 ・修理、修景工事の記録作成 材料となる木の植林	・修理工事で用いる技術が決められている。 ・修理工事で用いる技術を施工会社が熟知している。 ・可能な限り旧材を継承する方針で工事を行う。 ・修理及び整備工事に用いる材料は、管理組織に指定されたものを使用している。 ・修理工事または整備工事の記録の作成により、工事の情報や工事で発見された新たな情報が次世代に伝えられる。	文化遺産保存のための技術と材料
地方自治体担当者への技術と行政研修 施工会社への技術研修 地域住民への情報公開 保存地区における任意団体の設立や勉強会など保存活動促進	・専門職員が自主的に研修に参加する。 ・施工会社社員が、文化遺産として建物を修理する技術を身に付ける。 ・保存地区居住者へ、保存の意義を説明する場を設けている。	枠組み全てに係わる人材育成

### 1.3.2. 歴史地区の保存整備の枠組みと国際的な組織の対応

上記で設定した歴史地区保存整備の枠組みと国際条約及び憲章等との対応をみる。対象とした国際条約等は、歴史地区保存整備に関する全てのものである。

「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に該当するものを見ると表 1-2 に示すように 14 件見られる。1931 年の「歴史的記念建造物修復のためのアテネ憲章 (Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments、以下アテネ憲章)」第 3 項で「各国は歴史的遺跡の保存に関する問題を国内法によって解決しなくてはならない」<sup>注 12)</sup> としている。また、1962 年発布の「風光の美と特性の保護に関する勧告 (Recommendation Concerning the Safeguarding of Beauty and Character of Landscapes and Sites)」では、保護するための法的強制力、法律について触れている。1972 年発布のユネスコ「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (Convention concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)」は、各国の法律に基づき文化遺産及び自然遺産の保護、保存、整備活用をあらゆる手段を用いて確保するべき、と述べている。1975 年にイコモスから提出された「小規模な歴史的都市の保存に関する国際シンポジウム決議 (Resolution on the Conservation of Smaller Historic Towns、以下和文のみ)」は、「小規模な歴史的都市の保存を奨励し (中略)、将来的にはより強力で、より包括的な法律や条例が制定されるべきである。」とし、法律による保護の必要性を示している。1976 年にユネスコ総会が採択した「歴史地区の保全及び現代的役割に関する勧告 (Recommendation Concerning the Safeguarding and Contemporary Role of Historic Areas)」は、「法律的、技術的、経済的及び社会的措置をとることができるように」としている。

このように、歴史地区の保存整備には、当該地区を有する国の法律で文化遺産の保護が担保される必要があるとしている。すなわち、日本におけるのと同様に「文化遺産保存のための法律と条例の制定」は、歴史地区の保存整備の基礎になる要素と認識されている。

表 1-2 国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に関する内容

年	名称	種類	組織	内容	備考
1931	歴史的記念建造物の修復のためのアテネ憲章 (Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments)	憲章	2	国内法による解決。管理体制の必要性。法的施策は地域の事情を鑑み、公共機関の権限が必要。	
1962	風光の美と特性の保護に関する勧告 (Recommendation concerning the Safeguarding of Beauty and Character of Landscapes and Sites)	勧告	1	風光地の保護を規制する基礎的規範及び原則は、法的強制力を有すべきで、これらの適用措置は、法律に基づいて、責任ある当局に委任されるべきである。	
1968	公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告 (Recommendation Concerning the Preservation of Cultural Property Endangered by Public or Private works)	勧告	1	保存及び救済の措置」として加盟国がそれぞれの領域内において、この勧告に定める規範及び基準の実施のために必要な立法その他の措置を執ることにより、「保存及び救済の措置」として「立法上の措置、財政上の措置、行政上の措置、文化財の保存及び救済のための手続、制裁、修理、報奨、助言、教育」を取ることを勧告する。これらの詳細は当該国の法令及び制度によって決定すべきである。 「都市または農村の中心部にある歴史地区及び伝統的建造物群については、保護地域を設定し、並びに当該文化財の環境及び特性を保存するために適切な規則（歴史的又は芸術的に重要な建造物を改変する事ができる程度についての規則、当該地区に建てることのできる新建造物の様式及び設計についての規則等）を採択すべきである」	
1972	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (Convention concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)	条約	1	保護のための科学的、技術的、行政的、法的及び財政的措置。 「国の方針として各国は、自国の法令に定めるところに従い、文化及び自然の遺産の効果的な保護、保存及び整備活用を確保するため、あらゆる科学的、技術的及び文化的手段その他の調整及び活用を主たる目的とする方針をできる限り設定し、発展させ及び適用する。」	
1975	アムステルダム宣言 (The Declaration of Amsterdam)	宣言	4	都市、地方計画の主目的とする法的、行政的措置の強化。 法規制、建築基準や規制の緩和	(ヨーロッパ建築遺産会議)
1975	ヨーロッパ建築遺産憲章 (European Charter for the Architectural Heritage)	憲章	4	・加盟国政府は、欧州会議の後援の下で1975年に行われた欧州建築遺産キャンペーンの結果を考慮し、建築遺産を対象とした総合的保存の政策を実施し、そのような政策への人々の関心を喚起するために必要な法制度的措置を取るべきことを勧告する。 ・総合的保存は法制度的支援等に依存する。 ・法制度的支援について 総合的保存は、建築遺産の保護及び保存に役立つすべての現行法規を十分に活用するべき。そのような法規がこの目的のために十分整っていない場所においては、国、地域及び地区レベルの適当な法制度によって補足されるべきである。	(欧州会議)
1975	小規模な歴史的都市の保存に関する国際シンポジウム決議 (Resolution on the Conservation of Smaller Historic Towns)	決議	2	小規模な歴史的都市の保存を奨励し(中略)、将来的にはより強力で、より包括的な法律や条例が制定されるべきである。」	
1975	アムステルダム宣言 (The Declaration of Amsterdam)	宣言	4	・すべての国において、必要な法的・行政的措置が強化され、いっそう有効なものとなるべきである。 ・総合的保存は法的・行政的措置の適用を必要とする。 ・建築遺産の概念は、個々の歴史的建物から都市や地方の建築複合体、あるいはこれまでよりも新しい時代の建物にまで徐々に拡張しつつあるので、行政的権限の拡大を伴った広汎な法改正をすることが効果的な行為を行うために必要である。 ・法改正は、地域計画法規と建築遺産保護のための法規との統一が必要だという認識に立つて行われなければならない。 ・建築基準・建築規制等は、総合的保存の必要性に合わせて可能な限り緩和されるべきである。 ・総合保存の経済的問題を解決するために、新しい建造物が周囲と調和するように容積や高さ(高さ、土地利用規制)などに関してある種の規制を加えることを根拠他法令を定めることが重要であり、決定要因である。	
1976	歴史的地区の保全及び現代的作用に関する勧告 (Recommendation Concerning the Safeguarding and Contemporary Role of Historic Areas)	勧告	1	法的、社会的措置ができるような政策。保全のための計画及び文書により定めるべきもの。保護すべき地区及び物件。適用される条件及び制限の詳細。維持、修復及び改良工事において従うべき基準。都市生活又は田園生活に必要な供給網及び施設の整備を規制する一般的条件。新築を規制する条件。	
1982	フィレンツェ歴史的庭園憲章 (The Florence Charter(Historic Gardens))	憲章	2	・法及び行政上の保護として「熟知した専門家の助言を得て、歴史的庭園を指定し、その目録を作り、歴史的庭園を保全するのに適した法的行政的規定を制定することが、責任ある権限を有する者の任務である」としている。	
1985	ヨーロッパ建築遺産のための保護協定 (Convention for the Protection of the Architectural Heritage of Europe)	協定	4	・建築遺産の保護を法的に制度化しなければならない。そうした制度また各々の国あるいは地方に特有のやり方に従って保護を確かなものにする。法的な保護要請に対し、適切な監督と認可の手続きを実行する。 ・法規には、破壊や改変される場合、環境に影響を与える場合の届け出	(欧州会議)
1989	伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告 (Recommendation on the Safeguarding of Traditional Culture and Folklore)	勧告	1	・勧告に明記されている原則及び措置を実行するため、各国の憲法上の慣行に従って要求される法律上の措置又は他の措置をとることにより、民間伝承の保護を行う。	
1990	考古学的遺産の管理・運営に関する国際憲章 (Charter for the Protection and Management of the Archaeological Heritage)	憲章	2	・立法は、現地での保護や研究ができるように備え、各国・各地域の要求や歴史、伝統に適切な考古学遺産の保護を与えるべき。 ・立法は全人類、そして民族集団の遺産としての考古学的遺産という概念に基づくべきであり、一個人や一国家に限定されてはならない。 ・立法は、しかるべき考古学関係当局の同意なしに、いかなる考古学的遺跡や記念建造物、及びその周辺環境の破壊や損傷、変更を禁じるべき。 ・立法は、考古学的遺産の破壊が許可される場合は、十分な考古学的調査と報告書の作成を原則的に必要とする。 ・立法は、考古学遺産の適切な維持や管理・運営と保存を必要とすべきで、そのための規定を設けるべき。法律違反に関しては、十分な法的制裁が規定されるべきである。 ・立法が公式な目録に登録されるような優れた遺産の保護しかできない場合には、規定は考古学的な評価が確立するまで、まだ保護されていない、或いは新しく発見された遺跡や記念建造物の暫定的な保護がなされるようにすべき。 ・立法上の適当な措置をとること。	
2003	無形文化遺産の保護に関する条約 (Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage)	条約	1		

(表中の数字の 1 はユネスコ、2 はイコモス、4 はその他を表す。)

「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」に該当するものは表 1-3 に示すように 21 件みられる。1904 年に出された「記念建造物の保存と修復 (The Preservation and Restoration of Architectural Monuments)」第 6 項は「歴史的、美的記念建造物を保存するための団体を各国につくるべきである」と記している。また、その団体は国や地方の文化遺産の目録の作成に共同であたるべきだ書かれている。1962 年発布の「風光の美と特性の保護に関する勧告」は、風光地の保護に関する機関の必要性を記している。1968 年に出された「公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告」は、国家機関ではなく、地方自治体における文化遺産保存のための組織設立の必要性を述べている。さらに、保存管理実施のための人員配置についても記している。1976 年にユネスコ総会が採択した「歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告」は、文化遺産保存のための組織に、公的な団体に加え、私的団体を加えている。1981 年にイコモスが提供した「文化的意義を持つ『場所』の保存のためのオーストラライコモス憲章 (以下、バラ憲章) (The Australia ICOMOS for conservation of places of cultural significance(The Burra charter))」第 26 条は、組織について、第 27 条は専門家の必要性について示している。1992 年発布の「アメリカ合衆国歴史的都市街区保存憲章 (A Preservation Charters for the Historic Towns and Areas of the U.S.)」は、歴史地区の保存整備のためには適切な団体を必要とし、団体が存在しない場合には設立するべきだと指摘している。

このようにいくつかの条約や勧告、憲章は、文化遺産の保存整備のために、保存管理組織の設立と専門家の必要性を指摘している。そして、年代を経るにつれて、歴史地区の保存管理組織を地方自治体に期待すること、保存の取り組みと住民などの私的団体の必要性を求める傾向が見られる。日本と同様「文化遺産保存のための保存管理組織設立と専門職員配置」は歴史地区の保存整備を実施していくために必要な要素と認識されている。

表 1-3 国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」に関する内容

年	名称	種別	組織	内容	備考
1904	記念建造物の保存と修復(The Preservation and Restoration of Architectural Monuments)		4	目録の作成に専門家の協力が必要である。歴史的、美的記念建造物を保存するための団体を各国につくるべきである	
1931	歴史的記念建造物の修復のためのアテナ憲章(Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments)	憲章	2	・各国、あるいはすでにある機関や、この目的に関して権限があると認められる機関が国内の歴史的記念建造物の説明を伴った調査目録を刊行する。 ・管理体制の必要性。法的施策は地域の事情を鑑み、公共機関の権限が必要。	
1956	考古学上の発掘に適用される国際的原則に関する勧告(Recommendation on International Principles Applicable to Archaeological Excavations)	勧告	1	考古学上の発掘に関する保護機関の設置	
1962	風光の美と特性の保護に関する勧告(Recommendation concerning the Safeguarding of Beauty and Character of Landscapes and Sites)	勧告	1	・風光地保護に責任を有する各種の公共機関の任務の達成を容易にするため、科学的研究機関が本件に適切な法律および規定を整備し法典化する目的で、権限を有する当局と協力するために設立されなくてはならない。 ・行政的ないし諮問的性格を有する専門的機関を設立すべきである。 ・行政的機関は、中央ないし地方の特殊機関であり保護措置の実施を委任される。 ・責任を有する当局による一般的監督 ・歴史的地区及びその環境保全について関係のある組織、機関及び団体の注意を喚起することを勧告する。	
1964	文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡の禁止及び防止の手段に関する勧告(Convention on the Means of Prohibiting and Preventing the Illicit Import, Export and Transfer of Ownership of Cultural Property)	勧告	1	各加盟国は、文化財の保護を適当な公的機関に所管させることを定め、かつ、必要な時は、文化財保護のための国内機関を設置するものとする。	
1968	公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告(Recommendation Concerning the Preservation of Cultural Property Endangered by Public or Private works)	勧告	1	・行政上の措置として、文化財の保存を目的とする特別の団体又は機関の設立。調整又は諮問のための機関設立。専門職員の配置。委員会の設置。 ・公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存又は救済の責任は、適当な公的団体に負わせるべきである。 ・このような機関が設置されていない場合には、(中略)特別の団体又は機関が新設されるべきである。 ・この団体又は組織は、県、市、その他の地方公共団体にも同様に設置されるべきである。 ・文化財の保存又は救済のために必要な専門職員を十分に配置すべき	
1972	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(Convention concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)	条約	1	・保護のための資料センターの設置、学術職員や技術職員、事務職員の養成と募集、妥当な職員体制と必要な手段を有する機関が必要である。 ・(中略)機関が設置されていない場合には、妥当な職員体制を備え、かつ、任務の遂行に必要な手段を有する機関を1又は2以上自国の領域内に設置する。	
1975	アムステルダム宣言(The Declaration of Amsterdam)	宣言	4	・永続的な保存政策を全体に展開するため、大がかりな地方分権の措置が必要である。そのため、計画決定の行われている全てのレベル(中央、地方、地区)に保存担当官が置かれなければならない。 ・当局の実行能力を増大させるために、文化遺産に対して責任を負う部局が適切なレベルに組織されるよう再検討されるべきである。 ・総合的保存政策に伴う経済的な要求を満たすための理想的な行政機構が、いまだヨーロッパ諸国に確立されていない。	(ヨーロッパ建築遺産会議)
1975	ヨーロッパ建築遺産憲章(European Charter for the Architectural Heritage)	憲章	4	・加盟国政府は、欧州会議の後援の下で1975年に行われた欧州建築遺産キャンペーンの結果を考慮し、建築遺産を対象とした総合的保存の政策を実施し、そのような政策への人々の関心を喚起するために必要な行政的措置を取るべきことを勧告する。 ・総合的保存は行政的支援などに依存する。 ・行政的支援 総合的保存に係る政策を実施するため、職員が適切に配置された行政サービスを設置するべきである。	(欧州会議)
1975	小規模な歴史的都市の保存に関する国際シンポジウム決議(Resolution on the Conservation of Smaller Historic Towns)	決議	2	・都市計画当局に責任と権威とを付与する必要性との双方について、各行政組織に認識させる。	
1976	歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告(Recommendation Concerning the Safeguarding and Contemporary Role of Historic Areas)	勧告	1	「保存の調整を行う組織の設立。」 ・国、地域又は地方の当局が歴史的地区及びその環境を保全 ・国、地域及び地方の公共機関又は私人の団体等すべての関係者の永続的調整を確保する責任を有する当局が設けられるべきである。	
1981	文化的意義を持つ「場所」の保存のためのオーストラリアイコモス憲章(バウラ憲章)(The Australia ICOMOS for Conservation of Places of Cultural Significance(The Burra charter))	憲章	3	第26条「保存方針決定に責任のある組織と個人が指名されなければならない」。 第27条「作業の全ての段階において専門家の適切な助言と方向付けがなされ続けなくてはならない。そして新たな証拠についての記録が続けられなくてはならない。	
1982	フィレンツェ歴史的庭園憲章(The Florence Charter(Historic Gardens))	憲章	2	・「修復や復元といった実践的な作業に取り掛かる前に調査が必要であり、先行調査とその承認のために専門家に従わなければならない。」と専門家の必要性を謳っている。 ・歴史的庭園を指定し、目録を作り、保全するのに適した法的行政的規定を制定する際に、熟知した専門家の助言を得ると、専門家の必要性を書いている。	
1982	小規模集落の再活性化に関するトスカラ宣言(TLAXCALA Declaration on the Revitalization of Small Settlements)	宣言	3	・公認された大学と建築学会は、保存に関する委員会を設立し、彼等に委ねられた責任がよりよく認識され、推進できるようにする。	
1985	ヨーロッパ建築遺産のための保護協定(Convention for the Protection of the Architectural Heritage of Europe)	協定	4	・建築遺産の同定、保護、修復、メンテナンス、管理運営、そしてその活用のための行政当局の活動を助けるため、意思決定の過程の各段階において、情報提供と諮問のための国、地方自治体、文化に関する機関や団体、そして公衆の間での共同作業のための適切な組織を設ける。 ・保存政策に関するヨーロッパ内での調整に必要なものとして「建築遺産の保存に関する経験と専門家の交換という形で相互に技術支援を提供する」「高等訓練の専門家の交換も含めて建築遺産の保存の専門家のヨーロッパ内での交換を奨励する」とあり、専門家の存在が前提である。 ・この協定に関しては、欧州会議の大臣委員会により専門委員会が設けられるとある。	(欧州会議)
1989	伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告(Recommendation on the Safeguarding of Traditional Culture and Folklore)	勧告	1	・マスメディアの中に民間伝承に携わる者のための職を創設することにより、収集された民間伝承に関する資料の適切な記録保存及び普及を確保することで、こうした機関の中に民間伝承に関する部門を設置することにより民間伝承の資料の幅広い報道を確保する。 ・民間伝承に携わる地域、地方自治体、協会及びその他の団体に対して、その地域における民間伝承活動を促進し、調整するため、民間伝承に携わる者に専任の仕事を与えるよう奨励すること。 ・ビデオフィルム教材を作成するための組織を支援し、教材が学校、民間伝承博物館、国内的及び国際的民間伝承フェスティバル及び天覧化において使用されるよう奨励する。	
1990	考古学的遺産の管理・運営に関する国際憲章(Charter for the Protection and Management of the Archaeological Heritage)	憲章	2	・立法は、しかるべき考古学関係当局の同意なしに、いかなる考古学的遺跡や記念建造物、及びその周辺環境の破壊や損傷、変更を禁じるべき。(考古学関係当局の存在が前提とされている。)	
1992	アメリカ合衆国歴史的都市街区保存憲章(A Preservation Charters for the Historic Towns and Areas of the U.S.)	憲章	3	保全団体の創設と支援 適切な保全団体の創設は支援されるべきである。	
1996	※記念物、建造物群と周辺環境の記録に関する原則(Principles for the Recording of Monuments, Groups of Buildings and Sites)	原則	2	行政的な措置と適切な調査の必要性。	
2003	無形文化遺産の保護に関する条約(Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage)	条約	1	・保護のための措置として、権限のある機関の指定又は設置を行う。 ・記録の作成のための機関を設置し、その機関の利用を促進する。	
2005	※遺産の構造、環境、地域といった周辺環境の保存のための西安宣言(Xi'an Declaration on the Conservation of the Setting of Heritage Structures, Sites and Areas)	宣言	2	保存のための地域共同体と国際的な共同体の協力が必要である。	

(※表中の数字の1はユネスコ、2はイコモス、3は各国のイコモス、4はその他を表す。名称に※印のあるものは著者の翻訳による。)

次に、「文化遺産の調査と研究及び報告」に該当するものは表 1-4 に示すように 23 件あった。国際的組織の条約において、1931 年発布の「歴史的記念建造物修復のためのアテネ憲章」第 7 項は記念建造物の保存と国際協力 c-1 で調査目録作成について示している。1964 年発布の「記念建造物及び遺跡の保全と修復のための国際憲章（ヴェニス憲章）」は、保存手順や方法、そして修理や整備の内容の報告書作成について述べている。1975 年にイコモスから発布された「小規模な歴史的都市の保存に関する国際シンポジウム決議」は 5 項目目で「小規模な歴史的都市を脅かしている危険を抑制するために、あらゆるレベルでの戦略や対策が必要である」と記し、その戦略や対策として調査の必要性が示されている。1987 年にイコモスから出された「歴史的都市街区保存憲章(Charter for the Conservation of Historic Towns and Urban Areas(Washington charter))」は、「歴史的な町や都市街区の保存事業の計画に先だって総合的な調査を実施すること」と記している。1999 年にイコモスから発布された「歴史的木造建造物保存の原則(Principles for the Preservation of Historic Timber Structures)」は、修理の際の調査と記録が必要であると述べている。

保存対象の調査と研究及び報告は、文化遺産の普遍的価値を説明する基本的枠組みの基盤となる。調査や研究成果は、歴史地区への開発圧力や保存に対する問題を解決するために学術的、科学的根拠を示すことによって、保存整備の作業方針や保存計画策定の基本となる情報を提供する。保存対象の調査と研究報告は、このように歴史地区を文化遺産として保存整備していくための保存の根拠と整備手法の枠組みに必要な基本的な視点となる。従って、日本と同様「文化遺産の調査と研究及び報告」は歴史地区の保存整備事業を継続的に実施していくために必要な要素である。



表 1-4 国際条約や憲章に見られる「文化遺産の調査と研究及び報告」に関する内容

年	名称	種類	組織	内容	備考
1904	記念建造物の保存と修復(The Preservation and Restoration of Architectural Monuments)		4	目録の作成に専門家の協力が必要である。 (記念建造物の保存と修復は)国家資格を与えられた建築家か国家により考古学的、技術的管理下で働く建築家にのみ委ねられるべきである。」とされ「その建築家は、国そして地方の財産の目録作成に際して共通の努力と共同作業を行う。	国際建築家会議
1931	歴史的記念建造物の修復のためのアテネ憲章(Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments)	憲章	2	・各国、あるいはすでにある機関や、この目的に関して権限があると認められる機関が、国内の歴史的記念建造物の、説明を伴った調査目録を刊行すること。 ・遺産を所有する国における調査目録作成	
1964	文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡の禁止及び防止の手段に関する勧告(Convention on the Means of Prohibiting and Preventing the Illicit Import, Export and Transfer of Ownership of Cultural Property)	勧告	1	目録の作成、文化財の保護のための機関、教育的活動	
1964	記念建造物及び遺跡の保全と修復のための国際憲章(ヴェニス憲章)(International Charter for the Conservation and Restoration of Monuments and Sites(The Venice Charter))	憲章	2	・全ての保存、修復、発掘の作業は、必ず図面、写真を入れた分析的で批判的な報告書の形で正確に記録しておかなければならない。記録は全ての作業段階に加え、作業中に確認された技術的特色、形態的特色も含めるべきである。作成された報告書は、公共機関の記録保存所に備え研究者が閲覧できるようにするべきである。記録は交換することが望ましい。	
1968	公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告(Recommendation Concerning the Preservation of Cultural Property Endangered by Public or Private works)	勧告	1	目録の作成。文化財の徹底的な調査。 「十分な時間的余裕において徹底的な調査を行うべきである」 「指定されているかどうかを問わず、その保護のための目録を整備すべき」であり「文化財の徹底的な調査を優先的に行うべきである」	
1972	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(Convention concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)	条約	1	遺産の保護目録作成。一覧表の作成。 「加盟国は、できる限り、自国の領域内に存在する文化及び自然の遺産の保護を確保するために必要な科学的、技術的、行政的、法的及財政的措置をとる。」としており、「いずれの科学的及び技術的措置についても、その重要性に応じ、作業前又は作業中に徹底的な研究を行う。」とし、「この研究は、関係分野の専門家の協力を得て又はその者によって実施される。」	
1975	アムステルダム宣言(The Declaration of Amsterdam)	宣言	4	・建造物、建築的複合体、それらを取り巻く保護区域に定められた地区の目録が必要である。この目録は、広く配布されるべきである。また、保存に値する建物や区域への注意を喚起するために、地域や地方の自治体、都市計画・地方計画に関与する当局には必ず配布されるべきである。 ・総合的保存は、修復・再生の方式、技術、技能の振興を必要とする。 ・歴史的な建築複合体の修復・再生の方式や技術はさらに開発され、その範囲が拡大されなければならない。 ・材料や技術に関する総合的な記録の作成や経費の記録作成が必要である。こうした記録はしかるべきセンターに集め保管されるべきである。 ・保存のための方法や技術の一覧表づくりのための調査が必要である。そのために科学的な研究機関が創設され、相互に緊密な協力を行うべきである。 都市、地方計画の主目的とする。法的、行政的措置の強化。個人、組織に対する財政援助。税の減免措置。 住民参加、交通網の整備時に考慮。通常の計画規制との協調性のための目録。遺産保存のため	
1975	小規模な歴史的都市の保存に関する国際シンポジウム決議(Resolution on the Conservation of Smaller Historic Towns)	決議	2	・特徴を調査し、評価し、保護するための手法を、その町を保存するための前提として作り上げなければならない。	
1976	歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告(Recommendation Concerning the Safeguarding and Contemporary Role of Historic Areas)	勧告	1	調査。情報。 歴史的地区の建造物又は建造物群の保存整備を進めて行く上での根拠となり得る「地区の総合調査(その空間的發展の分析を含む。)」が行われるべきである」 「組織的調査及び研究の奨励」	
1981	文化的意義を持つ「場所」の保存のためのオーストラライコス憲章(バラ憲章)(The Australia ICOMOS for Conservation of Places of Cultural Significance(The Burra charter))	憲章	3	何らかの作業を行う場合にはそれに先だって物的証拠、記録証拠、そしてその他の証拠について専門的研究が行われていなくてはならない。	
1982	フィレンツェ歴史的庭園憲章(The Florence Charter(Historic Gardens))	憲章	2	・歴史的庭園の保護は、庭園の選定と目録の作成に依拠する。 ・修復の前の調査の必要性。とりわけ復元作業は、発掘から関連庭園に関する全資料の収集に至る徹底した先行調査が必要。実践作業の計画は、先行調査を基礎に準備される。 ・熟知した専門家の助言を得て、歴史的庭園を指定し、その目録を作る」とある。	
1985	ヨーロッパ建築遺産のための保護協定(Convention for the Protection of the Architectural Heritage of Europe)	協定	4	・目録作成に努め、当該の資産が深刻な危機に瀕した場合にはなるべく早く適切な記録調査活動を行わねばならない。 ・公害の影響の分析と削減或いは除去のための科学研究を支援する。 ・保存政策に関するヨーロッパ内での調整として「資産の調査、保護そして保存のために採用されるべき方法」とあり保存の技術である。	
1987	歴史的都市街区保存憲章(Charter for the Conservation of Historic Towns and Urban Areas(Washington charter))	憲章	2	歴史的な町や都市街区の保存事業の計画に先だって総合的な調査を実施する。	
1989	伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告(Recommendation on the Safeguarding of Traditional Culture and Folklore)	勧告	1	・民間伝承の独自性を保つために、また、世界的な登録簿に記載するため、民間伝承に関する国内の機関についての目録を作成する。 ・収集した民間伝承を適切に蓄積し、利用可能にする国内記録保存所の設立。 ・資料作成、記録保存、調査等の分野における作業及び伝統の実践を支援する。 ・民間伝承の維持に関連した科学的調査の促進。	
1990	考古学的遺産の管理・運営に関する国際憲章(Charter for the Protection and Management of the Archaeological Heritage)	憲章	2	・考古学的調査は、考古学的遺産の保護及び管理・運営における基本的な義務となるべき。目録は学術的な調査と研究にとって主要な資源データを構成する。目録の作成は継続的、動的な過程と考えられるべき。また、様々なレベルでの情報を包括するべき。 ・調査は、非破壊の技術から全体的な発掘調査に至るまであらゆる方法の範囲を包括する。 ・発掘の対象は、開発や土地利用の変更、強奪、劣化の脅威にさらされている遺跡や記念建造物である。	
1993	※記念物や記念建造物群、周辺環境の保存における教育と訓練の指針(Guidelines for Education and Training in the Conservation of Monuments, Ensembles and Sites)	指針	2	調査の必要性。保存に関わる技能者養成と技術を記録する必要性。調査と記録を行う国家レベルの組織の必要性。	
1996	※記念物、建造物群と周辺環境の記録に関する原則(Principles for the Recording of Monuments, Groups of Buildings and Sites)	原則	2	・記録をする理由について(記録が前提である。) ・国家は記録を行う責任を有する。 行政的な措置と適切な調査の必要性。調査結果の公表	
1999	土地固有の遺産の建造に関する憲章(Chaepter on the Built Vernacular Heritage)	憲章	2	・調査と記録の必要性。記録は公に公開するべきである。 次世代の人材養成と技術の記録。	
1999	※歴史的木造建造物保存の原則(Principles for the Preservation of Historic Timber Structures)	原則	2	・調査、記録、報告書の作成について。報告書は、技術や材料の選択の参考になる。 監察と維持管理。	
2003	無形文化遺産の保護に関する条約(Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage)	条約	1	・目録の作成。 ・学術的、技術的及び芸術的な研究並びに調査の方法を促進すること。 一般的な政策をとる。意識の向上。能力形成。	
2003	※建築遺産の分析と保存、構造修復の原則のイコモス憲章(ICOMOS Charter-Principles for the Analysis, Conservation and Structural Restoration of Architectural Heritage)	憲章	2	建造物の保存のための手法について。構造の考え方や薬剤塗布についてなども含めた全体意の維持管理について。記録、報告書の作成。維持管理など	
2008	※文化的な道のイコモス憲章(ICOMOS Charter on cultural roads)	憲章	2	・調査時に注意すべき点。文化的な道は様々な要素が含まれるため、複合領域であり、自然のことも考慮しなくてはならないなど。	

(※表中の数字の 1 はユネスコ、2 はイコモス、3 は各国のイコモス、4 はその他を表す。名称に※印のあるものは著者の翻訳による。)

「文化遺産保存のための技術と材料」に該当するものは表 1-5 に示すように 13 件あった。1968 年にユネスコが発布した「公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告」は、修理に対して加盟国は地方当局又は重要な文化財の民間所有者に対し、必要に応じて技術的及び財政的援助を与えるとしている。1972 年にユネスコが発布した「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に示されている「文化及び自然遺産の保護、保存、整備活用及び機能回復によって生ずる美術上、科学上及び技術上の問題に関する研究」は、世界遺産委員会が実施する援助の根拠となっている。1976 年にユネスコ総会が採択した「歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告」は「修復工事は科学的原則に基づいて行われるべきである。」と述べている。1999 年にイコモスが発布した「歴史的木造建造物保存の原則」は、木造建造物を保存する技術について詳細に述べている。

このように文化遺産保存のための技術と材料は、歴史地区を維持、保存していくために必要な技術的体系であり、歴史地区を継続的に保存していくために必要な要素と認識されている。

表 1-5 国際条約や憲章に見られる「文化遺産保存のための技術と材料」に関する内容

年	名称	種類	組織	内容	備考
1968	公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告 (Recommendation Concerning the Preservation of Cultural Property Endangered by Public or Private works)	勧告	1	他国は、技術的援助を与え、または監督する。 当該文化財の修理、復旧又は再建のために必要な措置を執るべきである。加盟国は地方当局又は重要な文化財の民間所有者に対し、必要に応じて技術的及び財政的援助を与えて修理又は復旧を行わせることができるように、あらかじめ措置を執るべきである	
1972	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (Convention concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)	条約	1	・保護のための科学的、技術的措置。 ・文化及び自然遺産の保護、保存、整備活用及び機能回復によって生ずる美術上、科学上及び技術上の問題に関する研究	
1975	アムステルダム宣言 (The Declaration of Amsterdam)	宣言	4	・保たれ受け継がなければならない技能や専門知識を持った芸術家や熟練した技能者たちが、保存事業によって道を与えられている。 ・現在も入手できる伝統的建築材料や、現在も用いられ続けている伝統技術や技法の確保のために、手段が講ぜられなければならない。 ・材料や技術に関する総合的な記録がまとめられる必要がある。	ヨーロッパ建築遺産会議
1975	ヨーロッパ建築遺産憲章 (European Charter for the Architectural Heritage)	憲章	4	・建築家、あらゆる種類の技術者、専門企業及び技術職人があまりに少なく、すべての修理のニーズに応えることができない。適切な管理技術、専門的技術、職人的技術のための養成施設を造り、雇用機会を増やさなくてはならない。建設産業はこうしたニーズに適応できるよう勧告されるべきである。 ・伝統工芸は、消え去るよりもむしろ促進されるべき。	欧州会議
1976	文化財の国際交換に関する勧告 (Recommendation Concerning the International Exchange of Cultural Property)	勧告	1	技術的困難がある場合は、ユネスコ事務局長と協議し専門家の意見を求められる。	
1976	歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告 (Recommendation Concerning the Safeguarding and Contemporary Role of Historic Areas)	勧告	1	修復工事は科学的原則に基づいて行われるべきである。	
1982	フィレンツェ歴史的地園憲章 (The Florence Charter (Historic Gardens))	憲章	2	・定期的に更新すべき樹木、灌木、草本、花といった各種の種は、はじめに生育種を選定し研究するために、植物学や園芸といった分野において確証された公認の事実を考慮して厳選されなければならない。	
1982	小規模集落の再活性化に関するトスカラ宣言 (TLAXCALA Declation on the Revitalization of Small Settlements)	宣言	3	・伝統的材料及び技術は利用可能であり続けなければならない。	
1985	ヨーロッパ建築遺産のための保護協定 (Convention for the Protection of the Architectural Heritage of Europe)	協定	4	・建築遺産の将来のため重要ならば、伝統的な技術と材料の使用や開発を促進するような保存政策を取る。 ・保存政策に関するヨーロッパ内での調整に必要なものとして「新しい技術により支えられる建築遺産の同定や登録、材料の劣化の防止、科学的研究、修復作業そして管理運営や活性化のやり方に関わるような手段」「建築遺産の保存に関する経験と専門家の交換という形で相互に技術支援を提供する」	欧州会議
1990	考古学的遺産の管理・運営に関する国際憲章 (Charter for the Protection and Management of the Archaeological Heritage)	憲章	2	専門家が知識を最新のものにすることを可能にする為に、この分野において活動している専門家には時間の余裕が与えられるべきである。大学院レベルの養成計画は考古学的遺産の保護と管理・運営を特に強調して展開されるべきである。専門家スタッフ（及び行政関係者）の国際交流は、考古学的遺産の管理・運営の水準を向上させる手段としても展開されるべきである。	
1993	※記念物や記念建造物群、周辺環境の保存における教育と訓練の指針 (Guidelines for Education and Training in the Conservation of Monuments, Ensembles and Sites)	指針	2	保存に関わる技能者養成と技術を記録する必要性。	
1999	※歴史的木造建造物保存の原則 (Principles for the Preservation of Historic Timber Structures)	原則	2	・木造建造物の材料である森林を育てる必要性について。無論、森林は、対象となる建造物に適切なものである。 ・現代の材料と技術の使い方について	
2008	※文化遺産とその背景の保存と解説のためのイコモス憲章 (ICOMOS Charter for the Interpretation and Preservation of Cultural Heritage Sites)	憲章	2	遺産の解説のためには、その遺産への理解と敬意が必要である。そのために技術、訓練の必要性がある。	

(※表中の数字の 1 はユネスコ、2 はイコモス、3 は各国のイコモス、4 はその他を表す。名称に※印のあるものは著者の翻訳による。)



「枠組み全てに係わる人材育成」に該当するものは表 1-6 に示すように 16 件あった。1972 年にユネスコが発布した「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」は、「文化及び自然の遺産の保護、保存及び整備活用の分野における全国的又は地域的な研修センターの設置又は拡充を促進し、及びこれらの分野における科学研究を奨励する」ことを推進している。そして 1976 年にユネスコ総会が採択した「歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告」は、「歴史的地区及びその環境の都市計画上の側面、保全とすべての段階における計画との間の相互関連、歴史的地区に適用される保存方法、材料の変質、保存工事への近代的技術の適用」という人材育成の必要性を述べ、文化財保存修復研究センター、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）、国際博物館会議（ICOM）等の専門的国際機関と協力することを求めている。1999 年にイコモスが発布した「歴史的木造建造物保存の原則」は、歴史的木造建造物保存に関わる人材育成の必要性を述べている。

このように、文化遺産に関わる専門人材の養成と教育は件数は少ないものの比較的新しく、その必要性が認められている。保存管理組織の専門人材の養成と、歴史地区保存整備に関わる人たちの人材育成は歴史地区の保存整備に必要な要素となっている。

表 1-6 国際条約や憲章に見られる「枠組み全てに係わる人材育成」に関する内容

年	名称	種類	組織	内容	備考
1964	文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡の禁止及び防止の手段に関する勧告 (Convention on the Means of Prohibiting and Preventing the Illicit Import, Export and Transfer of Ownership of Cultural Property)	勧告	1	文化財の保護のための機関、教育的活動	
1972	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (Convention concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)	条約	1	地域住民の協力を求める。学術職員や技術職員、事務職員の養成と募集。文化及び自然の遺産の保護、保存及び整備活用の分野における全国的又は地域的な研修センターの設置又は拡充を促進し、及びこれらの分野における科学研究を奨励する	
1975	ヨーロッパ建築遺産憲章 (European Charter for the Architectural Heritage)	憲章	4	・加盟国政府は、欧州会議の後援の下で1975年に行われた欧州建築遺産キャンペーンの結果を考慮し、建築遺産を対象とした総合的保存の政策を実施し、そのような政策への人々の関心を喚起するために必要な教育的措置を取るべきことを勧告する。	欧州会議
1975	アムステルダム宣言 (The Declaration of Amsterdam)	宣言	4	・総合的保存は地方自治体の責任を伴い、市民の参加を要求する。 ・若者たちに環境に関する教育をし、彼等を保存事業に引きこむことは自治体が必要とするもっとも重要な事柄のひとつである。 ・技能を認定された人材育成のためのよりよい教育計画作成の必要性は大きい。現場での経験が得られる教程も含むべきである。	ヨーロッパ建築遺産会議
1976	歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告 (Recommendation Concerning the Safeguarding and Contemporary Role of Historic Areas)	勧告	1	研究と教育、情報。技術者の育成。 「歴史的地区及びその環境の都市計画上の側面、保全とすべての段階における計画との間の相互関連、歴史的地区に適用される保存方法、材料の変質、保存工事への近代的技術の適用」に関する人材育成の必要性	
1982	フィレンツェ歴史的庭園憲章 (The Florence Charter (Historic Gardens))	憲章	2	・歴史的庭園の存続には、資格ある人物による継続的な多大な配慮が必要とされる。歴史家、建築家、造園家、園芸家、植物学者などの人格形成を補償することが望ましい。	
1982	小規模集落の再活性化に関するトスカーナ宣言 (TLAXCALA Declaration on the Revitalization of Small Settlements)	宣言	3	・修復に関する芸術修士号、博士号を設置・維持する。基本的演習の講義は、建築及び都市計画の遺産の鑑賞、保全・修復の諸問題、土着の建築と伝統的建築技術の双方に関する知識に十分重きを置く。	
1983	※ローマ宣言 (Declaration of Rome)	宣言	2	・専門家養成の重要性について。全ての修理の仕事において雇用されなくてはならない専門家養成の重要性について。	
1985	ヨーロッパ建築遺産のための保護協定 (Convention for the Protection of the Architectural Heritage of Europe)	協定	4	・建築遺産の保存に関連する様々な職能や手工業的職業の育成を促進しなければならない。	欧州会議
1987	歴史的都市街区保存憲章 (Charter for the Conservation of Historic Towns and Urban Areas (Washington charter))	憲章	2	保存関係者への専門教育	
1989	伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告 (Recommendation on the Safeguarding of Traditional Culture and Folklore)	勧告	1	・物理的保存から分析取作業へわたる民間伝承の保存に関わる収集家、記録保存家、文書研究者及びその他の専門家訓練すること。 ・用語の最も広い意味での民間伝承に対する尊敬を強調する適当な方法により、民間伝承の教育及び研究を計画し、学校及び学校外での教育活動にそれらを導入する。	
1993	※記念物や記念建造物群、周辺環境の保存における教育と訓練の指針 (Guidelines for Education and Training in the Conservation of Monuments, Ensembles and Sites)	指針	2	保存に関わる技能者養成と技術を記録する必要性	
1999	※歴史的木造建造物保存の原則 (Principles for the Preservation of Historic Timber Structures)	原則	2	・教育と訓練について。歴史的木造建造物保存を教える組織の設立と人材育成の必要性。	
1999	土地固有の遺産の建造に関する憲章 (Charter on the Built Vernacular Heritage)	憲章	2	・政府や保存組織やグループなどの関係者に対する訓練の必要性。例えば、伝統的な建築システム、技術、若い世代に伝えていくこと、専門家の交流などが挙げられる。	
2003	無形文化遺産の保護に関する条約 (Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage)	条約	1	・無形文化遺産を創出し、維持し、伝承する社会、集団及び適当な場合には個人のできる限り広範な参加を確保するよう努め並びにこれらのものをその管理に積極的に参加させるよう努める。	
2008	※文化遺産とその背景の保存と解説のためのイコモス憲章 (ICOMOS Charter for the Interpretation and Preservation of Cultural Heritage Sites)	憲章	2	遺産の解説のためには、その遺産への理解と敬意が必要である。そのために技術、訓練の必要性がある。	

(※表中の数字の 1 はユネスコ、2 はイコモスを表す。名称に※印のあるものは著者の翻訳による。)

### 1.3.3. 本論の視点

本研究は、日本が歴史地区保存のための協力してきたベトナムの古都ホイアンの保存整備の特徴と課題を明らかにするために、日本の歴史地区の保存整備手法や国際的な組織の条約などから、保存整備のための枠組みとして5つの要素を設定した。5つの要素は「文化遺産保存のための法律と条例の制定」、「文化遺産保存のための管理組織の設立と専門職員の配置」、「文化遺産の調査と研究及び報告」、「文化遺産保存のための技術と材料」、そして「枠組み全てに係わる人材育成」である。以下、各要素の名称から「文化遺産保存のための」或いは「文化遺産の」を省略して説明する。

「法律と条例の制定」は、歴史的建造物と歴史地区を公共財として文化遺産にするための基本的な枠組みである。文化遺産保護制度は、文化的所産の価値の高いものを指定、登録などにより保護する制度で、管理や修理に公的助成が行われるが、文化遺産の現状変更や売買に許可や届け出を義務付け、財産として強い制約をかける。法律と条例は、文化遺産の保護体制を保証する枠組みであり、文化遺産保護と整備を実施していくために不可欠である。

「管理組織設立と専門職員の配置」は、文化遺産保護制度を円滑に実施するための公的機関の設置と文化遺産保護に係る専門家の配置である。文化遺産保護制度は法律に基づく行政措置であり、文化遺産の指定、登録等の業務、保護に必要な助成事業、保護のための許認可や指導業務、そしてこれらの業務を文化遺産の価値を欠くことなく適切に遂行する専門家の活動から構成される。歴史地区の保護は、美術品などと異なり、生活に使われるため所有者や住民と協議を経て、改造や更新をしながら保存していく必要がある。このため、保存業務に当たる専門家は、保存行政に必要な基本知識と共に歴史地区の保存に伴い起こる様々な問題に対処していく専門能力が求められる。

「調査と研究及び報告」は、文化遺産の普遍的価値、真実性に基づく歴史的価値を明らかにし、指定、登録の根拠を示すために必要な作業である。また、文化遺産の修理計画も調査と研究及び報告で明らかにされた文化遺産の特徴を根拠に実施される。そして、修理などの保存業務は報告書としてまとめられ、修理方針や後補が記述されることにより、後世に文化遺産の修理記録を伝えられる。これは、文化遺産の保護が適切に行われていることを外部に示し、保存業務の評価を得るために必要な活動である。

「技術と材料」は、歴史地区を文化遺産として保存していくために必要な修理技術、修理材料の選択などの技術的体系の維持である。文化的価値を持つ歴史的建造物は、伝統的技術と材料によって形づくられている。これらは、技術的な考え方を継承する技術者、大工などによって支えられている。しかし、建築施工技術や道具、材料は技術の進展に伴って変容するものであり、必ずしも伝統的技術だけで維持できるものではない。また、防災や現代的用途に合わせて補強や新しい材料の利用も必要なため、このような後補に関わる施工に対して、建造物の歴史的価値に与える影響を判断していく仕組みが必要である。

「枠組み全てに係わる人材育成」は、歴史地区を文化遺産として保存していくために関わる行政の専門家、保存技術、そして、文化遺産の所有者などの関係者の保存知識の向上と、技術的訓練の継続的な実施である。歴史地区の保存には、多くの人が関わりそれぞれの保存に対する行動が適切に行われる必要がある。関係者が代替わりしても、保存活動が円滑に行われるように、人材育成は継続的に行われなければならない。そして、これらの人材育成は、国や地方自治体による実施に加え、住民や所有者による自主的な活動も期待され、保存活動の一環として定着することが大切である。

この歴史地区の保存に必要な枠組みの要素は、先進国において保存活動の試みと共に蓄積、成立してきたものであり、歴史地区の保存体制に必要な枠組みといえる。歴史的建造物群と歴史的環境を一体として保存する方法は、その空間的な広がりから多くの関係者と行政の協力によって進められる。このため建造物単体の保存手法と異なり、地方自治体による条例や都市計画と連動して保存する体制が構築されることもあり、地方自治体の保存体制の整備が重要である。先進国で行われている歴史地区の保存方法は、新たに保存体制を構築する国において馴染みのないものである。国が指定する単体の文化財保存に比べ、様々な関係者と協力しながら、地方自治体が主体的に保存していく方法は様々な課題を孕む。本研究で設定した歴史地区保存整備のための枠組みを用いた歴史地区の保存整備事業に対する評価を、本研究の視点とする。

#### 1.4. 研究対象

主な研究対象事例は、1992年から日本の協力が開始され1999年に世界遺産となったベトナムの歴史地区古都ホイアンである。古都ホイアンは首都ハノイから660 km南にあるベトナム中部の地方都市に位置する歴史地区である。世界遺産として保存整備が行われている歴史地区は18～20世紀に形成され、1975年に終結したベトナム戦争後に、ベトナムの国家政策として文化遺産保存が進められた地区である。また、ベトナムで初めて行われた歴史地区保存整備事業事例でもある。保存整備事業は、1980年代初頭から30年近くに亘り実施されており、日本は1990年代初頭から参加した。この保存整備事業は、日本が行っている二国間協力のうち、初期のものであること、また文化庁やJICA<sup>注13)</sup>といった政府関係組織が関わり、並行して大学の研究者や建築士が現地へ赴き行われた大規模な事業の一つであること、対象とする文化遺産が歴史地区であり日本においても歴史地区保存整備の蓄積があることから、研究対象とした。

ドゥオン・ラム村は、ベトナムの歴史地区保存整備事業のうち、二番目の事例である。このドゥオン・ラム村は、ベトナムの首都ハノイ市中心部から約60 km離れた場所にあり、古都ホイアンと同様に歴史地区の保存整備における文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事業が行われている。古都ホイアンと異なる点は、事業開始当初から日本の協力が行

われており、ベトナム側も古都ホイアンの保存整備事業を経験している点である。従って、ドゥオン・ラム村を古都ホイアンにおける保存整備事業評価の比較対照とし、ベトナムの歴史地区保存整備における古都ホイアンにおける事業経験の継承可能性を検討した。



図 1-1 古都ホイアンとドゥオン・ラム村の位置<sup>注 6)</sup>

## 1.5. 研究方法

ベトナムの歴史地区古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業およびその変遷を枠組みを用いて整理し、歴史地区における個々の建造物の修理と整備の内容を明らかにすることで両地区の歴史地区保存に関する特徴と課題を考察する。

第二章から第四章は古都ホイアンを対象とする。第二章では、古都ホイアンの保存整備事業全体を把握するため、事業を内容から 5 つの時期に分け、各時期の特徴を歴史地区保存整備の枠組みとの対応から明らかにし、保存整備事業の全体的な変遷を整理する。

第三章では、古都ホイアンにおける歴史地区保存整備のための枠組みの各要素について、その内容が現在に至るまでどのように変化してきたのかを概観し、その背景を把握した上で現状の課題を明らかにする。

第二章と第三章は、主に文献調査による。用いる文献は、ホイアン市やホイアン史跡管理事務所が発行した書籍など、ホイアン旧市街に関する報告書、日本側の木造建造物修理報告書や関連論文、大学の報告書等である。また、文献等の裏付けや詳細な情報を得るため、日越関係者へのインタビューを適宜行い、保存整備事業全体の概要を把握する。

第四章では古都ホイアンにおける歴史地区保存整備に対する日本側の考えと実態の関係を見るため、歴史地区の保存整備の成果であり、その方針が見られる修理と整備の現状および日本側の関与を把握する。歴史地区の構成要素である個々の建造物の修理と整備の状況に、歴史地区を管理する組織の保存整備の方針が現れると考えた。古都ホイアンにおける個々の建造物の修理と整備状況を整理することで、日本側が伝えようとした歴史地区保存整備の考え方と保存整備の実態との相違点とその理由および課題を考察する。

修理と整備の内容の考察は、古都ホイアンの修理基準及び整備基準に則っているかを確認する。歴史地区の保存整備として適切かという視点に基づいて行った。具体的には、ホイアン史跡管理事務所（以下、史跡管理事務所）が所有する修理及び整備済建造物一覧表に基づき、保存地区Ⅰ内の修理及び整備内容を調査した。調査の際、史跡管理事務所に建造物の所有者から提出された修理申請書と修理計画図面を基にし、目視と写真撮影、必要に応じて居住者へインタビューを行った。修理と整備内容の分析に当たり建造物以外に次の３点を把握した。まず、修理基準及び整備基準が建造物自体の等級と共に周辺環境にも言及していることから、調査対象地区内における立地を把握した。次に、修理及び整備後の意匠は建造物の所有者の意向が反映されと考えられるため、所有者を把握した。そして、修理費用や整備費用をホイアン市等の公的機関が負担するか否かで、工事後の意匠の確認手続きが異なるため、修理及び整備費用負担者を把握した。立地は、建造物の住所及び現地における調査対象地区内の位置と周囲の建造物を確認した。所有者と修理および整備費用負担者は、史跡管理事務所が所有する建造物等の所有者と修理及び整備費用負担者の表から把握した。古都ホイアンの保存地区の建造物は、全て特級から等級４の５つに分類されている。文化遺産としての価値が最も高いものは特級、その下は等級１と続き、文化遺産としての価値がないものは等級４に分類される。従って、この分類に基づき分析することで古都ホイアン保存地区内の建造物の状況を把握できる。

第五章では、ドゥオン・ラム村を対象にして、古都ホイアンと同様の手法によって歴史地区保存整備の枠組みの整備状況と修理の現状を把握し、保存整備事業の特徴と課題を明らかにする。ドゥオン・ラム村はベトナムにおける二番目の歴史地区保存整備事例であり、古都ホイアンにおける保存整備との比較によりドゥオン・ラム村における保存整備の特徴と課題について考察する。

第六章では、ベトナムにおける歴史地区保存整備の特徴と課題を考察した。そして、古都ホイアンとドゥオン・ラム村各歴史地区の特徴と課題を踏まえ、全体から文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事業の今後に資する結論を導き出した。

## 1. 6. 既存研究

本項では、研究対象とする歴史地区古都ホイアンに関する研究と、ベトナムにおける文化遺産に関係した研究を取り上げ、本論の位置づけを説明する。なお、文化遺産保存においては各地域への理解が重要視されることから、地域学や歴史学としてベトナムを扱った研究も取り上げる。本論が文化遺産保存を目的とした日本の国際協力の視点から歴史地区古都ホイアンを扱うため、日本の文化遺産保存を目的とした国際協力における事業手法について、ベトナムを含めた東南アジアの代表的な事例研究を紹介する。また、日本の歴史地区保存制度である伝統的建造物群保存地区に関する研究も取上げ、本論の位置づけを説明する。

### 1. 6. 1. 古都ホイアンにおける日本の木造建造物保存への協力と保存総合計画の研究

古都ホイアンを扱った研究は、昭和女子大学の内海佐和子（2001 年）の研究が挙げられる。これは、保存地区内の通りの一つを例にとり、5 年間でファサードの変化が規制と共に変容していく様を明らかにした研究である<sup>1)</sup>。この研究は、古都ホイアンにおける景観規制と保存整備の過程を記録し考察したものである。景観条例による管理で看板及びファサードについて分析した。看板は、条例における抜け道を見つけて設置される事例が見られる、景観条例に色の規制がないこと、景観条例は住民との合意を経て作られる必要があることを指摘している。また、ファサードの変化について、元々深い庇の家屋が前後にずれて並ぶファサードは、フランス植民地時代に道路拡幅のために庇が切り取られ現在のようになった。つまり、深い庇は道路拡幅により切り取られたことが明らかになった。切り取られた箇所には壁を作ることによって 2 階建てに見えるファサードができ、そのファサードを真似ることによって、伝統的な様式の平屋で深い庇が受け継がれていかない点としている。また、伝統的な家屋の要素として、木壁、或いは白く塗装された煉瓦壁に扉は中央が両開きで左右に腰壁のある薮戸を挙げている。左右の開口部は、利便性から腰壁を撤去し掃き出し窓としていたこともあり、ファサードや色彩については基準が必要であることを指摘している。同時に、ホイアン史跡管理事務所の修理計画の確認体制を改善することや、ホイアン市独自に町並みを管理する必要性についても触れており、保存管理は 1993 年の調査開始前後と比較して、格段に進歩したとしている。

安藤勝洋（2002 年）は、古都ホイアンで開催した住民対象のワークショップの結果を用いて居住者と共に町並み保存を進めて行くための仕組みと、それを支援する方法の可能性を探った<sup>2)</sup>。

友田博通を中心とした昭和女子大学や千葉大学の調査チームは、古都ホイアンにおいて文化遺産としての評価を決めるための総合的な調査の一つとして家屋の図面作成や土地利

用台帳調査を行った。友田博通（2006 年）は「ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書」<sup>3)</sup>で述べているように、「この事業は経済面での支援を含んだものであり、文化庁の『アジア太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業』として実施された。1993 年から開始された古都ホイアンの町並み保存では、文化財単体の保存を主眼としたもので、街区の保存は単体の建造物を集めたものとして指定され、単体への修復費が集落保存の事業予算であった。観光化の進行が早く、資金ができ次第次々と単体修復を積み重ね、その時の状況に合わせてホイアン市が保存条例や景観規制を単発に追加実施していく形だった」と報告している<sup>4)</sup>。

#### 1.6.2. 古都ホイアン以外のベトナムにおける日本の木造建造物の文化遺産としての保存への協力と建築史の研究

古都ホイアン及びドゥオン・ラム村の保存対象は木造建造物であることから、ベトナムの建築に関する研究を取り上げる。既にベトナム全土にわたり建築史の分野において調査が進められている。王宮や寺院、廟の他に、伝統的な木造民家などもあるが、その多くはベトナムで最大多数を占めるキン族のものである。

藤森照信、村松伸（1992 年）は“Space Design”においてベトナム建築博覧会と題した特集ページを組んだ<sup>5)</sup>。

大山亜紀子（2004 年）<sup>6)</sup>は、北部ベトナムの寺院を取り上げ、柱間と小屋組み、伽藍配置の変遷を追った。Tran Thi Que Ha（2005 年）<sup>7)</sup>は「ベトナム・越族の伝統的木造民家に関する建築史的研究」の中で、越族<sup>注14)</sup>の伝統的木造民家を遺構から体系づけるを試みている。これは、1997 年から 2002 年までにベトナムの 10 省を対象に実施された伝統的木造民家調査で取り上げた 4287 軒と Tran 氏独自の調査 400 軒を対象に、歴史的、地理的な文脈の中で位置づけようとするものである。具体的には部材に使われている語彙や架構形式から北部、中部、南部の民家の形式の相違点を抽出している。また、敷地における棟の配置による空間構成を取上げ、北部、中部、南部の空間構成の相違点について述べている。調査対象地は北部 5 省（バク・ニン省（Tỉnh Bắc Ninh）、ハ・タイ省（Tỉnh Hà Tây）、ナム・ディン省（Tỉnh Nam Định）、タイン・ホア省（Tỉnh Thanh Hoá）、ゲ・アン省（Tỉnh Nghệ An）、中部 3 省（トゥア・ティエン・フエ省（Tỉnh Thừa Thiên Huế）、クアン・ナム省（Tỉnh Quảng Nam）、クアン・ガイ省（Tỉnh Quang Ngãi）、南部 2 省（ドン・ナイ省（Tỉnh Đồng Nai）、ティエン・ザン省（Tỉnh Tiền Giang））である。大山と Tran の研究はベトナム建築史の体系化に資する研究として位置付けられる。

林英昭（2009 年）<sup>8)</sup>は大山と Tran の研究をさらに発展させ「ベトナム中部の伝統木造の設計方法の特質」を明らかにした。林の研究手法は、技術保持者による実際の設計および施工過程を捉え、遺構との関連を分析することで中部ベトナムの木造伝統技術の形成過程

を考察するものである。現在も残る伝統技術を明らかにし、遺構と関連づけることで、中部の建築技術の形成過程が、北部ベトナムからの伝播ではなく独自の成立過程を持つことを立証した。研究対象は中部ベトナムに限っているが、現存する建造物の調査のみによらない建築史研究の手法として、木造建造物の建築技術を持つ他地域でも応用可能な調査手法である。また、ベトナム木造建築史の基礎資料となるものである。

### 1.6.3. 東南アジア研究から見るベトナム及びホイアンの研究

歴史地区は地域性に関わりが強いため、ベトナムおよびホイアンの歴史研究、さらに東南アジアの地域研究の事例を取り上げる。石井米雄や桜井由躬雄、古田元夫は歴史学、地域学の視点からベトナムを取り上げた研究<sup>9)</sup>を行った。これらの研究はベトナムをメコンデルタの一部とすることで中国文化の南端に位置づけず、現在のタイやラオス、カンボジアやインドネシアといった東南アジア文化の中に位置づけた<sup>10)</sup>。また、桃木至朗（2008 年）は港市に着目し、東南アジアの海域を結びつけるネットワークについて論じている<sup>11)</sup>。

建築史の分野で大田省一（2000 年）は、1887 年に成立した仏領インドシナ連邦 (Union Indochinoise Francaise)<sup>注15)</sup> の首都であったハノイを中心として植民地時代の都市計画と建築について述べている。入植したフランス人と現地人との関わり、例えば技術者として現地人が官僚に登用され、建築技術を取得して行く中での衛生管理、環境とフランス人の異文化（オリエンタリズム）への視点がベトナム人の伝統文化を意識する機会を作り出したことを述べている<sup>12)</sup>。大田は仏領インドシナ時代のフランス人建築家の視点<sup>注16)</sup>や、現地ベトナムの伝統の保存活動にも触れ、1886 年 7 月 3 日に政府令で設立されたトンキンアカデミー (Academie Tonkinoise) がその任に当たったことや、歴史的記念物の保存についても述べられている。その後 1898 年 12 月 15 日付の総督令によりインドシナ考古学調査団が設立された。後にトンキンアカデミーを拡大するために拠点をサイゴンからハノイに移し、1900 年 1 月 20 日トンキンアカデミーは、「フランス極東学院 (Ecole francaise d' Extreme-Orient)」(略称、EFE0) という名になった。論文内ではフランス極東学院の設立と活動を記述し、当時の図面や記録などが作成された経緯、フランスから見た現地文化保存の視点、フランスの支配者としての視点を明らかにしている。

その他に、フランス極東学院の成立とその文化的外交政策の研究は大宮朋子<sup>13)</sup>の「極東フランス学院の研究-フランスの対外政策における学術・文化機関の役割-」が挙げられる。これは、インドシナ支配における極東フランス学院の意義及びベトナムにおける文化財保護法成立に果たした役割について述べ、フランスのインドシナからの撤退に伴う同学院閉鎖及び、ベトナムにおいてフランス極東学院の残した業績を明らかにしている。

他に考古学の分野では、国際商業港であったホイアンの交流の実態を中国陶器の発掘から証明した菊池誠一（2004 年）らの研究<sup>14)</sup>がある。ベトナムや他の海岸線上にあった港市



が、西方や現在の中国、琉球との交流の拠点であったことを示している。

#### 1. 6. 4. 文化遺産保存を目的とした国際協力-概論と事例-

本論は、文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事例を通じて、ベトナムの歴史地区保存整備の課題を考察するため、文化遺産保存を目的とした日本の国際協力について書かれた文献と報告を取り上げる。取上げる事例は、本論と同様にベトナムと東南アジアの文化遺産を扱ったものである。さらに、文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事業を対象とする。

河野靖の「文化遺産の保存と国際協力」<sup>15)</sup>はユネスコの文化遺産保存の理念及び保存の過程と、日本が果たす役割を示した文献である。

ベトナムの文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事例は、早稲田大学中川武のチームのフエ阮朝王宮の復元的考察と復元工事の研究である<sup>16)</sup>。中部にあるミーソン聖跡は、日本大学の重枝豊を中心にして調査された。ものづくり大学の古川彬は、フエの水環境を調査し、歴史的な都市計画案を示している。東京大学の伊藤毅のチームは、フエの都市空間の成立に焦点を当て、都城内の伝統的な街区と住居の変容を明らかにしている。

ベトナム以外の事例を見ると、石澤良昭（2008 年）はアンコール寺院群の保存管理を行う事業と研究<sup>17)</sup>を実施し、アンコール・ワットについて、現地技術者と長期間にわたる関係構築を行い、人材育成と遺跡修理を実施している。ほかに西浦忠輝（2000 年）によるタイのアユタヤ<sup>18)</sup>に関する研究が挙げられる。

事例報告は、文化庁文化財部の事業の一環としてアジア各国に派遣された専門家による保存事業の報告が挙げられる<sup>19)</sup>。木造文化圏に所属していても、材料や保存に対する考え方が異なり、日本の専門家は最良の保存をするために協力を行ったことがわかる。

JICA の専門家派遣事業やボランティア派遣事業のうち青年海外協力隊及びシニアボランティア派遣事業でも、文化遺産保存のために専門家の派遣を行う場合がある。本論で対象とする古都ホイアンにおいて、文化庁はアジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業を行い、ホイアンに関する事業報告書を作成した<sup>20)</sup>。

また、國竹真由美（2008 年）<sup>21)</sup>は、文化遺産保存のために NGO の参入可能性を検討した「国際文化財保護支援における NGO の参入と文化財保護教育の効果に関する研究」を著した。これは海外における文化財保存という専門分野に非営利団体が協力していく事例を取り上げたものである。世界遺産教育により世界遺産の周知と理解を高める必要性を述べ、非営利団体が果たす役割を検討している。

### 1.6.5. 日本の歴史地区に関する研究

日本の歴史地区保存制度である伝統的建造物群保存地区に関する研究は、本論で設定した歴史地区保存整備の枠組みが必要であるという前提のもと、枠組みの各要素に対応する事業の実施手法や運営手法について検討している。

例えば、金ら（2000 年）の研究<sup>22)</sup>は、歴史地区の保存のために生活者の意向を整理したところ、外観に影響を与える主たる要因は駐車場であるとした。この研究は「文化遺産保存のための法律と条例の制定」にあたる保存条例の運用実態について扱っている。辻ら（2009 年）<sup>23)</sup>は、伝統的集落の景観保全の支援体制として、個々の建造物など景観を構成する要素を保存するために、地区の共同体が必要である場合と、専門的技術や知見が要求されるものがあるとしている。この研究は「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」にあたり、管理組織や専門職員が歴史地区の保存整備に関わる際の一つの知見となり得るといえる。さらに、保存地区に関わる一般人が保存整備に関わる必要性を述べている。西島（2004 年）<sup>24)</sup>や大島（2005 年）<sup>25)</sup>は、伝統的建造物群保存地区における居住者への住教育意向特性や住民意識に関して研究を行い、住民が歴史地区に対して積極的な関心を持っていることを明らかにしている。また、住民の積極的な関心の根拠は、経済的な理由のみならず地域への愛着も要因であるとしている。歴史地区の住民の意向を把握し、次世代に歴史地区を引き継ぐための手法を模索しているといえ、「枠組み全てに係る人材育成」にあたる。

牛谷直子（2002 年）らの研究<sup>26)</sup>は、各保存地区の行政の担当者にアンケートを行い、修理修景の実態を把握し、歴史地区の継承方法に対する考察を行った。これは保存計画の運用という観点から「文化遺産保存のための法律と条例」にあたり、修理修景の実態を把握することから「文化遺産保存のための技術と材料」にあたる。牛谷らはアンケートにより、保存計画の枠組みと基準運用の実態を抽出し、歴史地区の「規範」と「創造」の継承のあり方について知見を得た。保存計画の中では、隣地距離、屋根勾配、棟高を伝建物に似せるべきと考えられている。しかし、実際の運用においては隣地距離、壁面線、外壁仕様が伝建物に似せるべきと考えられている。つまり、保存計画に書かれていない壁面線と外壁仕様が運用上注目されている。牛谷は、保全を原則としながら創造の可能性が柱間装置に見られると指摘している。ゆえに、壁面線と外壁仕様は伝建物に似せながらも、柱間装置を個々の建造物の機能や用途における個性が見られる部分であるとし、新しいデザインの手法を必要とした。

#### 1.6.6. 本論の位置づけ

これまで述べた本研究分野に関する研究は、ベトナムに関する建築史や歴史学、そして考古学など物的な事象を分析する手法である。また、文化遺産協力について、主に協力の流れや現状の整理を主体にする手法であり、その多くは報告が占めている。これら既存研究の手法は、対象の記述を行い、歴史や文化を時系列に関連させ特徴を導き出していくものである。

本研究は、ベトナムの歴史地区古都ホイアンの文化遺産保護についての研究である。歴史地区の文化遺産保護の研究の蓄積は多くはない。それは、研究の視点で説明したように、文化遺産を守る社会体制や行政組織、保存に係る技術や人材といった要素が研究の対象に含まれ、歴史地区に位置する建造物の保存実態との関連を捉える総合的な研究手法を必要とするからである。本論で設定した歴史地区保存整備の枠組みの各要素に特化した研究は1.6.5で述べたように散見でき、歴史地区保存整備において枠組みの各要素が必要であるという前提で研究が行われている。しかし、枠組み全体を把握したものは見られない。歴史地区の保存状況を一般的に評価する方法はまだ確立されているとは言い難く、本研究は歴史地区の文化遺産保護制度の研究分野を進展させる役割を担っている。

また、文化遺産の国際協力の研究も蓄積は多くなく、評価手法も確立していない。国際協力による歴史的建造物の保存整備への影響を扱った研究も見られない。本研究では、古都ホイアンの保存体制の成立と日本の国際協力の関連を探ることを試み、文化遺産の国際協力の研究分野に貢献すると言えるであろう。

#### 注

- 1) 考古遺物や史跡が集積した場所も含まれる。
- 2) 文化庁のホームページから引用 <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/hozonchiku.html>
- 3) 本論では、国指定有形文化財（建造物）のみを指す。用語は、指定、選定、登録と様々であるが、便宜上「指定」に統一する。
- 4) 南北統一後の文化遺産保存は、仏領インドシナ時代のものを継承している部分がある。仏領インドシナ時代の文化遺産保存については、大田省一の「仏領期ベトナムにおける建築・都市計画の研究」2000年と大宮朋子の「極東フランス学院の研究-フランスの対外政策における学術・文化機関の役割-」2008年に詳しい。
- 5) 調査対象地区は世界遺産リスト上に“Hoi An Ancient Town”と記されており、日本語は一般的に用いられている「古都ホイアン」の保存地区Ⅰとする。
- 6) 筆者がベトナム全土の地図を白地図に準じたものに加工し、本論で対象としている古都ホイアンとドゥオン・ラム村の位置を書き加えた。
- 7) ほかに、都市計画区域の中にある地域地区として自然的景観を主体とした都市環境を維持するための

風致地区や平成 16 年に制定された景観法の中に書かれた人工物を主体とした景観地区が挙げられる。

また平成 20 年 5 月に 23 日に制定された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」も歴史地区の保存手法の一つと考えられる。

- 8) 日本政府から補助金が出される市町村が行う修理・修景事業，防災設備の設置事業，案内板の設置事業等の基準。
- 9) 文化庁作成の重要伝統的建造物群保存地区のパンフレットより引用した。  
[http://www.bunka.go.jp/bunkazai/pamphlet/pdf/pamphlet\\_ja\\_05.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkazai/pamphlet/pdf/pamphlet_ja_05.pdf)
- 10) 伝統的建造物群保存地区に関する論文は、保存地区の住民の意識の把握などを考える場合も多く見られることから、保存地区の維持管理には住民の参加が重要であるといえる。
- 11) 日本政府から補助金が出される市町村が行う修理・修景事業，防災設備の設置事業，案内板の設置事業等や税制優遇措置の支援を指す。
- 12) 翻訳は文部科学省サイトから引用した文書による。
- 13) 独立行政法人国際協力機構の英語名称である Japan International Cooperate Agency の略称。
- 14) ベトナム国内に 54 の民族がいるとされており、越族はそのうち 9 割以上を占める。キン族とも呼ばれている。
- 15) トンキン（北部ベトナム）、アンナン（中部ベトナム）、コーチシナ（南部ベトナム）にラオス、カンボジアを加えた 5 州から構成された。これにより 1888 年にハノイ市はフランスの直轄都市となりフランスによる都市経営が考えられるようになる。例えば、当時のフランスの都市計画の実施と、ベトナム人の施設の破壊、寺院を壊して跡地に教会を建設するといったことが挙げられる。トンキンはフランスが行政権を委任される保護領、安南とカンボジア王国、ラオスは保護国、コーチシナは併合という形が採られた。1900 年からは中国南部の広州湾租借地を加え、1907 年にはタイからカンボジア北西部のバットンバン、シエムリアップ、シソポンの三か所を得た。
- 16) 大田省一：「仏領期ベトナムにおける建築・都市計画の研究」東京大学博士論文, pp. 104, 2000 年から引用

## 参考文献

1. 内海佐和子：「ヴェトナム・ホイアンにおける町並み景観の変容に関する研究」昭和女子大学博士論文, 2001
2. 安藤勝洋：「ベトナムホイアンにおける住民との協働作業による町並み保存に関する研究」, 千葉大学自然科学研究科博士前期課程（修士）デザイン科学専攻（建築系）平成 14 年度論文梗概集など
3. 昭和女子大学国際文化研究所：「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 11 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書」, 昭和女子大学, pp. 212-214, 2006
4. 昭和女子大学国際文化研究所：「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 1 ベトナム・ホイアン特集」, 128 頁, 1994, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 3 ベトナム・ホイアンの町並みと建築」, 244 頁, 1996,

- 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 5 ベトナム伝統住居の保存と再生」, 120 頁, 2001, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 7 ベトナム伝統住居の体系的研究」, 165 頁, 2005, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 9 ベトナム・ホイアンの学際的研究-ホイアン国際シンポジウムの記録-」, 245 頁, 巻頭 3 頁, 2004, 以上、昭和女子大学発行
5. Space design, 「ベトナム建築大博覧会」, pp. 25-153, 鹿島出版会, 1996
  6. 大山亜紀子: 「北部ベトナム仏教寺院の伽藍の変遷過程に関する研究 : 14 世紀から 20 世紀における木造建築の技術史的考察を中心にして」, 日本大学博士論文, 2004
  7. Tran Thi Que Ha: 「ベトナム・越族の伝統的木造民家に関する建築史的研究」, 東京都立大学博士論文, 2005
  8. 林英昭: 「ベトナム中部の伝統木造建築の設計方法の特質」, 早稲田大学博士論文, 2009
  9. 桜井由躬雄: 「東南アジアの原史 東南アジア史 1」, pp. 1-25, 岩波書店, 2001
  10. 東南アジア学会監修: 「東南アジア史研究の展開」, 山川出版社, 232 頁, 2009
  11. 桃木至朗: 「海域アジア史研究入門」, 岩波書店, 292 頁, 2008
  12. 大田省一: 「仏領期ベトナムにおける建築・都市計画の研究」, 東京大学博士論文, 2000
  13. 大宮朋子: 「極東フランス学院の研究-フランスの対外政策における学術・文化機関の役割-」, 政策研究大学院大学博士論文, 2008
  14. 菊池誠一: 「ベトナム日本町の考古学」, 高志書院, 317 頁, 2004
  15. 河野靖: 「文化遺産の保存と国際協力」, 風響社, 633, 85 頁, 1995
  16. 中沢信一郎、中川武、他: 「ヴェトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究その 1」 学術講演梗概集 F2 建築歴史・意匠, pp. 527-528 など一連の報告及び研究による。
  17. 石澤良昭: 「講座 文明と環境 12『文化遺産の保存と環境』」, pp. 1-25, 朝倉書店, 2008
  18. 西浦忠輝: 「タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏の保存修復」, 建築雑誌, pp. 22-25 日本建築学会, 2000
  19. 林良彦他 7 名: 「特集『国際修復技術協力』」, 月刊文化財, pp. 4-49, 第一法規, 1999
  20. 文化庁文化財部: 「旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録 ベトナム社会主義共和国における協力事業-アジア・太平洋地域文化財建造物保存協力事業-」, 76 頁, 2003
  21. 國竹真由美: 「国際文化財保護支援における NGO の参入と文化財保護教育の効果に関する研究」, 熊本大学博士論文, 2008
  22. 金博己他 2 名: 「近江八幡市八幡伝建地区における居住者の建物の現状変更意向と世帯の特徴」, 日本建築学会計画系論文集, 第 527 号, pp. 217-223, 社団法人日本建築学会, 2000. 1
  23. 辻美沙緒他 2 名: 「伝統的集落における景観保全の支援体制に関する研究-徳島県三好市東祖谷の山間集落における伝統建造物を事例として-」, 日本建築学会計画系論文集, 第 635 号, pp. 91-97, 社団法人日本建築学会, 2009. 1
  24. 西島芳子: 「伝統的建造物群保存地区における居住者の住教育意向特性: 地域性を活かした住教育のための基礎的研究」, 日本建築学会計画系論文集, 第 581 号, pp. 143-149, 社団法人日本建築学会, 2004. 7
  25. 大島規江: 「伝統的建造物群保存地区における町並み保存に対する住民意識: 長野県檜川村奈良井を事

- 例として」，日本建築学会計画系論文集，第 590 号，pp. 81-85，2005. 4
26. 牛谷直子他 3 名：「重要伝統的建造物群保存地区における修景実態に関する研究」，日本建築学会計画系論文集 561 号，pp. 211-216，社団法人日本建築学会，2002. 11

## 第二章 歴史地区古都ホイアンにおける日本の国際協力による

### 木造建造物の文化遺産としての保存への取り組み

#### 2.1. はじめに

第二章では、歴史地区古都ホイアンの保存整備事業全体を、事業の内容を中心に 5 つの時期に分けて整理し、各時期における主に日本側の関わり方を整理し、把握した。保存整備事業<sup>注1)</sup> 全体を整理することで、第三章で扱う歴史地区保存整備の枠組みの現状と、第四章で扱う歴史地区に位置する建造物の修理と整備の現状が形成された過程や要因をつかむことができると考えた。

まず、古都ホイアンの形成過程を把握し、保存整備事業の関係者を概観した後、保存整備事業を内容から 5 つの時期に分けて、歴史地区保存整備の枠組みの視点から保存整備事業の変遷を整理する。

#### 2.2. 古都ホイアンの概要

本論で対象とする古都ホイアンは、ベトナム中部のホイアン市の南部に位置する世界遺産である。1999 年に「古都ホイアン」として世界遺産リストに記載され、観光地として有名である。古都ホイアンを有するホイアン市は、ベトナム中部のクアン・ナム省に位置し、首都ハノイから約 660 km の距離にある地方都市である。ホイアン市の人口は 83000 人（2006 年）、年間観光客数は約 103 万人（2007 年）<sup>注2)</sup>、世界遺産リストに記載された資産の範囲<sup>注3)</sup> は 30ha、緩衝地帯<sup>注4)</sup> は 280ha である。図 2-1 で示す通り本論で研究対象とする資産の範囲（以下、保存地区Ⅰ）は、東西に 4 本、南北に 8 本の街路に面して 1166 棟<sup>注5)</sup> の家屋や寺院などが建ち並ぶ。そのうち国所有の建造物は 194 軒、自治会等の共同所有の建造物は 12 軒、個人所有の建造物は 901 軒、所有者が不明のものが 59 軒である。個人所有の建造物

が最も多く、7割以上を占める。



図 2-1 ホイアン市全体の地図<sup>注6)</sup> (中央の黄色い線で囲んだ場所が古都ホイアン)

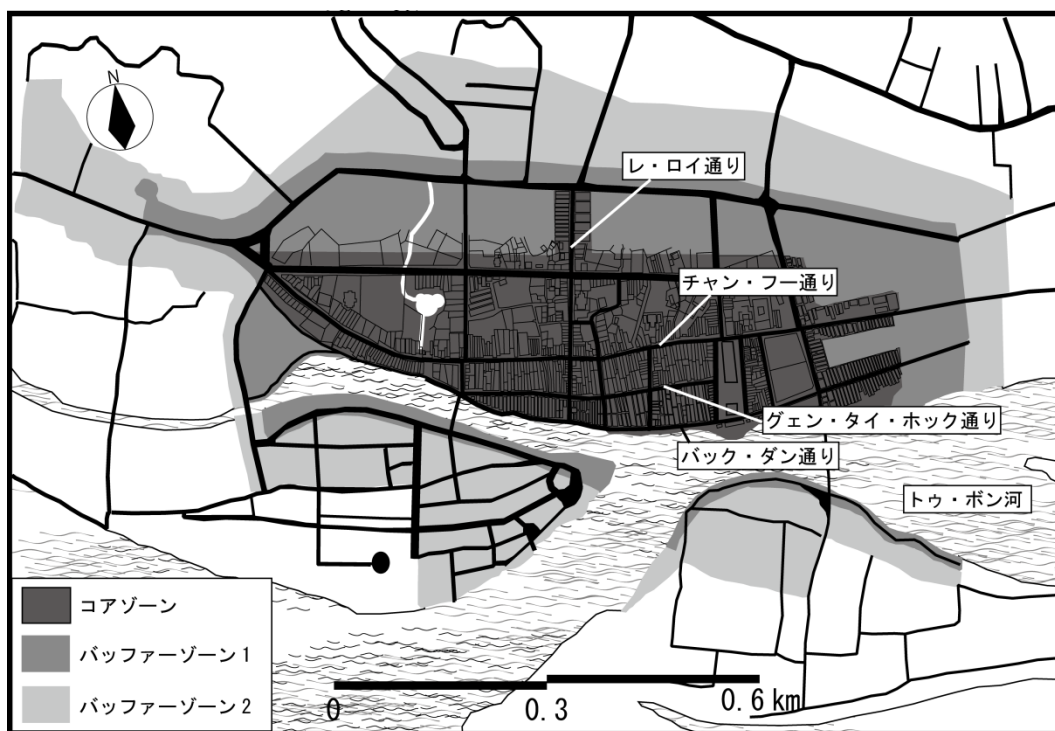


図 2-2 古都ホリアンの保存地区<sup>注 6)</sup>



## 2.3. 古都ホイアンの成立と衰退

古都ホイアンの保存整備事業が始まる以前の歴史を説明する。

ホイアンの名が歴史に登場したのはチャム族が居住していたチャンパ王国の貿易港だった頃である。16世紀には阮氏が新たな支配者となり、国際貿易に使用され、17世紀ごろに海のシルクロードの中継地点として栄えた。17世紀は日本や中国、オランダとの貿易を行い商業港として栄えた時期でもある。この時期に日本は朱印船貿易を通じて当時のホイアンに日本人町を形成した。当時の日本人町や中国人町の様子は、茶屋新六交趾国貿易渡海図の図絵に描かれている<sup>1)</sup>。18世紀後半に西山党の乱により町は破壊されたが、19世紀の阮朝により再興された。

こうしてホイアンは貿易による繁栄を誇り、トゥ・ボン河に土砂が堆積するに伴い市街域が拡大された。土砂の堆積した部分には新たに家屋が建てられ、町は拡張したが、土砂の堆積が原因で大型船の停泊が難しくなり、ダナンへその機能を譲ることとなった。19世紀末には現在も見られるトゥ・ボン川沿いのバック・ダン通りまでできていた。また、19世紀半ばに始まったヨーロッパ諸国による東南アジアの植民地化により、土砂の堆積した19世紀末にはホイアンも仏領インドシナの一部としてフランスの統治下に入った。

内海佐和子<sup>2)</sup>によれば保存地区Ⅰの中心を南北に貫くレ・ロイ通り (Đường Lê Lợi) はフランス統治下に作られた。保存地区Ⅰの東側に位置するファン・ボイ・チャウ通り (Đường Phan Bội Châu) には官庁街が置かれ、古都ホイアンのフレンチコロニアル様式<sup>注7)</sup>の住宅が連なる地区となった。保存地区Ⅰの中心部にあり、観光の中心であるチャン・フー通り (Đường Trần Phú) やグエン・タイ・ホック通り (Đường Nguyễn Thái Học) も馬車が通りやすいように、直線に作りかえられた。元々各家屋は深い庇を有しており、緩やかに曲がる道路に面した家屋の庇によって街路空間は構成されていた。その深い庇がフランス統治下に道路が直線に変更されると同時に切断された。切断された部分に壁が作られ今日の2階建のファサードが作られている。この形式は、今日、保存地区内で散見できる。また、古都ホイアンのフレンチコロニアル様式と呼ばれるファサードのみ或いは全体をモルタルで仕上げ黄色く塗られた建造物も、フランス統治下において作られた。そして白い壁に陰陽瓦を葺く伝統的な家屋と古都ホイアンのフレンチコロニアル様式が入り混じる町並みとなった<sup>3)</sup>。

## 2.4. 歴史地区としての木造建造物保存整備の流れと日本の取り組み

ーベトナム戦争後から世界遺産後の変容までー

ホイアン旧市街の保存整備事業は、ベトナム政府とホイアン市が市内にある古い建物を文化遺産として保存するために、海外の研究者の協力を得、徐々に文化遺産として保存す

るための体制を整備したものである。ここでは、関係者と全体の流れを概観する。

ベトナム政府から日本政府に、ホイアン旧市街保存に対する協力が要請されたのが 1990 年の国際会議「海のシルクロードとベトナム」である。

図 2-2 で示す通り、日本側の関係者は、政府（外務省、文化庁）、援助実施機関（JICA）、大学（昭和女子大学、千葉大学、東京都立大学（当時））、日本建築セミナー、財団法人文化財建造物保存協会、県の教育委員会が参加した。一方ベトナム側は、政府（建設省建築研究所、文化情報省（当時））、ホイアン史跡管理事務所、各建築大学、ハノイ国家大学、現地工務店である。これら関係者全てを指す場合、それぞれ「日本側」、「ベトナム側」とする。

図 2-2 に示す関係者のうち、日本側関係者の関わり方を事業内容と共に時系列に沿って整理する。

まず、ベトナム政府からホイアン旧市街における歴史的建造物修理への協力要請を受けた日本政府は、文化庁が「アジア太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業」の一つとして携わることとなった。文化庁は、文化庁や各府県の文化財保存（建築）専門家を、修理対象とした建造物の修理方法を決める時期に合わせ 1 人あたり 1 週間から 3 週間程度派遣した。また、日本側はホイアン史跡管理事務所（以下、史跡管理事務所）の職員等を必要に応じて日本に招聘した。

JICA は 1997 年から 2003 年まで建築、考古学等文化遺産の保存に関する専門家を派遣した後、建築を専門とする青年海外協力隊員やシニアボランティアを派遣した。外務省は所管組織の JICA と共に事業に関わった。

昭和女子大学は、文化庁からこの保存整備事業の日本側の事務局を依頼された。建造物修理技術を持つ人材を集め、人材を現地に派遣する時期の決定やシンポジウム開催等を行う一方で、ホイアン旧市街の保存整備事業を継続するために、研究助成金や学術助成金、寄付金等を集めた。また、ベトナムの民家の科学的調査の実施や資料作成等で学術面の支援も行った。現在も考古学調査やシンポジウム開催等においては、継続して関わり続けている。

昭和女子大学国際文化研究所は、ホイアン旧市街の保存整備事業を行ったことがきっかけで設立され、JICA 専門家として派遣された研究者は全員この大学に所属していた。

図 2-2 で示したように、当事業が建造物修理と調査、ワークショップを中心に進められていたことがわかる。また、日本は建築、文化財の専門家を中心に関わっており、ホイアン市側は管理責任者であるホイアン史跡管理事務所を窓口として現地工務店との協力事業を行った。

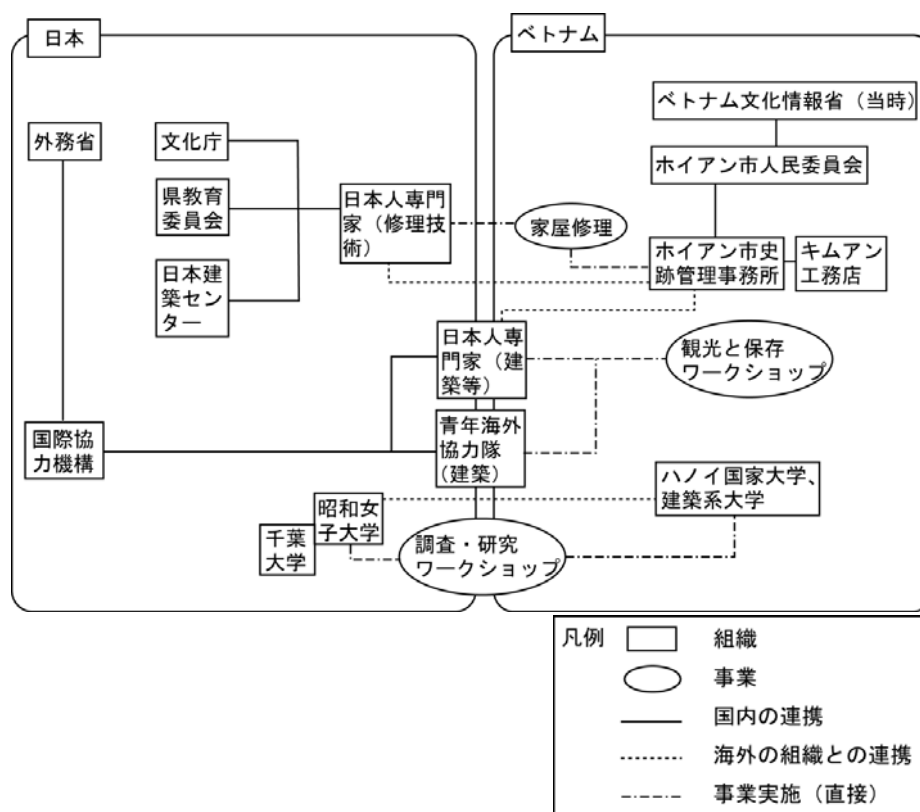


図 2-3 アジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業のうちホイアンの事例における関係組織と関連図

次に、ホイアン旧市街の保存整備事業を、保存整備事業の内容から 5 つの時期に分け、各時期で文化遺産保存のために行われた取り組みを把握し、ホイアン旧市街の保存整備事業の流れを整理する（表 2-1）。第一期は 1983～1989 年としベトナムが古都ホイアンの保存を決定し、国の文化財に指定したのちポーランドと共に古い建造物の調査を始めた時期であり、日本側が保存整備事業に参加する前であることから「保存整備事業準備期」とした。第二期は 1990～1996 年とし、日本側が参加し古都ホイアンの建造物の調査や修理が始められ、調査主体は日本からベトナムに委譲された時期であることから「保存整備事業立上期」とした。第三期は 1997～1999 年とし、日本人専門家による修理技術協力が行われながら、ホイアン史跡管理事務所独自の修理が行われていることから「保存整備事業変容期」とした。第四期は 2000～2003 年とし、1999 年に世界遺産リストに記載された後、ホイアン史跡管理事務所と日本側は修理を続けていることから「世界遺産後の保存管理期」とした。第五期は 2004 年以降とし、日本側は家屋修理技術を持つ専門家ではなくボランティアに変更し、「保存整備事業の変容期 2」とした。また、時期ごとに「1.3.1. 日本の歴史地区の保存制度」で設定した枠組みの要素との対応を見る。対象期間は、ベトナム政府により保存整備事業が開始された 1983 年から筆者が調査を行った 2010 年までとし、ホイアン旧市街の保存整備事業を「ホイアン事業」とする。

表 2-1 ホイアン事業年表

区分	シンボジウム、条例制定等の建造物保存管理・修理等と都市計画に關連するもの	日本側関係者の調査、働き	日越共同建造物修復	越独自建造物修復	条例等の作業部会、関連組織設立
1975	南北ベトナム統一				
1983-1989年【第一期】	1983 ベトナム遺跡・修復管理センターがホイアンの家屋調査を行い古建築データを作成 1984.3.31 「歴史文化遺跡（遺物）と名勝旧蹟の保護と利用に関する法令」（命令）決定、1984 クアンナム・ダナン省及びホイアン町人民委員会により「ホイアン旧市街保存管理規定」が發布 1985.3.19 上記命令に従う政府決議によりホイアンの町並みは国家文化財とされた 1985 ダナンでホイアンに関する国内シンポジウム「国際商業港ホイアン・国際シンポジウム」開催が開催 1986.2 ホイアン史跡管理事務所設立（人民委員会直属の独立組織） 1987 ユネスコ世界遺産条約をベトナムが締結 1987.7.6 クアンナム・ダナン省人民委員会よりホイアンの町並みの管理に対して規則が提示され、保存に関する法律の規定の施行と管理、調査責任を省の文化観光局とホイアン人民委員会主席（＝市長）が負うこととなる。				1985 ホイアンに関する国内シンポジウム組織。ホイアン人民委員会、旧クアンナム・ダナン省文化局、大学教授などが援助
	1990 ダナンにてホイアンに関する国際シンポジウム開催				米、仏、オーストラリア、イスラエル等から研究者が訪れる。シンポジウム運営の国家委員会組織。ベトナム国内の研究員と大学が協力し、ホイアンの調査を行う。
	1992.5 ホイアン史跡管理事務所がホイアン市文化局の下に組み込まれる	1991.12 日本文化庁視察（第一次調査） 1992.7 日本文化視察（文化庁第二次調査） 1992.9 昭和女子大学「町並み調査予備調査」 1993 日本隊（昭和女子大学）が民間企業から寄付金を募る 1993 日本隊「ホイアン町並み保存プロジェクト（チャン・フー通り保存踏査・建築・文献・考古他）」開始 1993.3 日本隊＜町並み調査＞第一次調査、＜考古学調査＞チャン・フー85裏庭予備調査 1993.9 日本隊＜町並み調査＞第二次調査、＜考古学調査＞チャン・フー85裏庭発掘調査			1992 昭和女子大学が国際文化研究所、ホイアン基金を設立
	1993.11 第一回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ホイアン町並み保護組織」（於：東京） 1994 スー市長により「観光税、売上税などによる財源の確保」「ミニホテルの禁止」「赤線による歩道はみ出しの規制」 1994.5 第二回ホイアン町並み保存国際シンポジウム（ハノイ）	1993 日本隊「ホイアン町並み保存プロジェクト（チャン・フー通り保存踏査・建築・文献・考古他）」（鹿島振興財団）終了 1994.1-7 ＜考古学調査＞ディン・カム・フォー、ディン・トゥレーなど発掘（肥前磁器出土） 1994.9 日本隊＜町並み調査＞第三次調査（ハノイ建築大学参加） 1994.9 日本隊＜町並み調査＞第四次調査（フエ民家調査も含む）	1993.9 チャン・フー80番橋家解体修理（～1994.2） 1994.9 チャン・フー121番前家解体格納及び全面修景		
		1995-1998 「ホイアン町並み保存プロジェクト（チャン・フー通り家屋修復）」	1995.1-3 ＜建物ほか修理＞チャン・フー80橋家以外修理		1995 ホイアン建築・文化遺産の保存会発足（グエン・ティ・ビン国家副主席が名誉主席。グエン・ディン・アン元クアンナム・ダナン省副知事が主席。）文化情報省、地方機関、人民委員会、ホイアン管理センター、ハノイ国家大学、建築大学、考古学院も関係
1990-1996年【第二期】	1995 ハノイ建築大学への調査移管を決定。昭和女子大学国際文化研究所とハノイ建築大学・建設省建築研究センターが研究協定を締結。日本文化庁アジア太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業のうちベトナムを開始 1995.3「歩道への溢れ出し禁止条例」 1995.4.10 ホイアン・ソサエティ設立決定にサイン 1995.6.14-24 建設省建築研究所がグエン・タイ・ホック通り、バックダン通りの40軒を調査 1995.6 ＜町並み調査＞ハノイ建築大学チーム第一次調査 1995.8 「歩道への付きだし看板の禁止条例」 1995.12.7-12 ベトナム側ホイアン事業関係者来日	1995.3＜町並み調査＞日本チーム第五次調査、＜考古学調査＞沈船予備調査 1995.4 日本隊＜考古学調査＞チャン・フー80発掘	1995.1 チャン・フー80番前家屋根葺替部分修理（～1995.3）、チャン・フー80番後家半解体修理（～1995.3） 1995.4 チャン・フー80番の考古学調査 1995.6.14-24 チャン・フー80番博物館への改修工事開始 1995.9.3-11 チャン・フー80番の考古学調査 1995.9.11 チャン・フー80番「貿易陶磁博物館」開館式 1996 チャン・フー121番前家修復。チャン・フー142番前家解体修復工事	1995 建設省建築研究所がグエン・タイ・ホック、バックダン通りの40件の調査を行う	1995.6 ホイアン・ソサエティ設立
	1996 ホイアンにて国際会議開催。日本人技術者の常駐要請有 1996 東京にて国際会議開催 1996 ベトナム政府はホイアン都市遺跡地区を保存・補修・開発の全体的プロジェクトを承認 1996.1 ユネスコアジア太平洋地域文化財調査官リチャード・エンゲハルト博士がフエとホイアンを調査 1996.1 チェットシステム開始により、入場料収入が保存地区内の建造物修理費用となる 1996.7 ベトナムがグエン・タイ・ホック通りの33軒を調査する 1996.7 ベトナム隊＜町並み調査＞ハノイ建築大学チーム第二次調査 1997.4.14 ベトナム政府はホイアン旧市街の遺跡の改修・開発への投資総合プロジェクトを承認 1997.5 「ホイアンの遺産と景観の管理、保存と開発に関する規定」「建築物の彩色許可制に関する条例」	1996-1999 日本隊「ベトナム・ホイアンにおける「肥前陶磁」を中心とする土器・陶磁器類の考古学的研究」 1996.3 日本隊＜町並み調査＞第七次調査（補足的調査）、＜考古学調査＞発掘品の整理 1996.9 日本隊＜町並み調査＞福建省民家調査等、＜考古学調査＞発掘品の整理	1997 チャン・フー48番修復 チャン・フー121復元、チャン・フー142修復 グエン・ティ・ミン・カイ6番修復設計		1995.12.9 第3回ベトナム・ホイアン国際シンポジウムが日本（昭和女子大学）にて開催 1996 政府予算で2軒、ホイアン市予算で5軒の家屋修復
	1997.7＜町並み調査＞ハノイ建築大学チーム第三次調査 1997.7 ベトナムがレ・ロイ通り、グエン・ティ・ミンカイ通り、バックダン通り、ホアン・バン・トゥ通りの51軒を調査する 1997.7 「業務用備品などの屋外設置禁止条例」「看板設置基準と許可制に関する条例」 1998.12 ベトナムはチャンフー通り、グエン・タイ・ホック通り、レ・ロイ通りの37軒を調査研究及び製図を行う 1999.9 ベトナムはチャンフー通り、グエン・タイ・ホック通りの10軒を調査する 1999.11.4 第五回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ベトナムにおける文化財保護」（於：昭和女子大学） 1999.12.4 世界遺産リスト記載	1997.7-9 ＜考古学調査＞発掘品の整理			1998 グエンタイホック113番修復 1999 グエンタイホック41番、43番修復
	2000 張氏廟修理 2000 「世界遺産「ホイアン展」1」 2000.3.16-20 第六回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ホイアン文化財修復セミナー」（於：ホイアン）	2000 JICA開発パートナー事業が採択される（カンナム省）			1998 JICA専門家派遣開始 1999 町並み保存賞の設置
	2004-現在【第五期】	2004 青年海外協力隊派遣開始			

#### 2.4.1. 第一期 1983～1989 年 保存整備事業準備期

第一期は 1983～1989 年でホイアン旧市街の保存整備体制が立ち上げられた時期である。ホイアン旧市街の調査が、ベトナム人研究者と文化情報省文化財保存計画修復センター、ポーランド歴史的遺跡保存公社により行われ、ホイアン市人民委員会の直轄組織としてホイアン旧市街の保存管理組織を行うホイアン史跡管理事務所（以下、史跡管理事務所）が設立された。なお、史跡管理事務所はその後、ホイアン市全域の文化遺産を管理するようになった。さらに、ベトナム政府が制定した法令により、ホイアン旧市街がベトナムの国家文化財とされた。

ホイアン旧市街保存整備事業の発端は 1983 年にベトナム文化情報省（当時）がホイアン市内の史跡調査や歴史的建造物の修理を始めたことである。ベトナム文化情報省附属中央遺跡設計補修センター（当時）に所属していたファン・ダオ・キンらは 1983 年から 1985 年の 3 年間にわたり、ポーランド人専門家のカジミエシュ・クヴィアトコフスキ (Kazimierz Kwiatkowski、ポーランド文化財保護アトリエ（当時））らと共に現地調査を行った。この調査は、(1)ホイアン旧市街の歴史研究と資料の目録作成、(2)ホイアン旧市街や近隣における重要な遺跡の調査及び歴史的建造物の調査、(3)ホイアン旧市街や近隣における代表的な家屋や遺跡の図面作成、(4)調査した歴史的建造物の歴史的価値や構造技術による建造物の分類、(5)調査した歴史的建造物の維持・修理のプログラム作成<sup>注8)</sup>であった。

1984 年にベトナム政府により「歴史文化遺跡（遺物）と名称旧跡の保護と利用に関する法令<sup>注9)</sup> (The ordinance on the protection and use of historical and cultural relics and places of interests)」が施行された。この法令は「歴史的な文化遺物」及び「名所旧跡」の保護と共に歴史地区の保存にも触れている。その後 1985 年 3 月に文化大臣（当時）から「ホイアン旧市街保存管理規定」が發布され、ホイアン旧市街が国家文化財となった。同年には調査結果が「第 1 回ホイアン旧市街保護国内シンポジウム」（於ベトナム）で発表され、翌 1986 年には来遠橋（日本橋）の緊急修理が行われた。同じく 1986 年に、ホイアン史跡管理事務所が設立された。同年、日本の組織である日越貿易協会等が現地調査を行った。

1987 年には「古都ホイアンの都市遺跡の保護と活用の条例<sup>注10)</sup> (Regulation on Protection and Use of Hoi An ancient urban vestige)」が制定された。この中では保存管理組織の設立、目録作成のための学術調査、文化遺産保存のための法律の制定という枠組み 4 つのうち 3 つに関わる内容が担保されている。

この時期はホイアン旧市街の歴史的建造物の認識と日本へ向けた保存整備事業への協力要請準備時期であり、歴史地区保存整備のための枠組みのうち、「文化遺産保存のための法律と条例の制定」、「文化遺産保存管理組織設立と専門職員の配置」、「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応する事業が行われたといえる。法律は、歴史地区の保存を実施するように書かれており、ベトナム政府のホイアン旧市街に対する保存整備への力の入れ方が窺える。

#### 2.4.2. 第二期 1990～1996 年 保存整備事業立上期

第二期は1990～1996年で、日本がホイアン旧市街の保存整備事業へ参加を開始し、建造物等の調査と修理への協力を行い始めた時期である。

ベトナム日本友好協会から日本政府やベトナム研究組織等に1990年の「第1回国際シンポジウム『海のシルクロードとベトナム』」開催への協力要請があり、外務省や日本ベトナム友好協会、民間企業が協力した。シンポジウムでは、1985年に定められた保存区域である東西方向の主要街路地区の拡大が要請された。同時に1990年から2000年までの保存計画及び世界遺産リスト記載に向けた準備について「第1回国際シンポジウム『海のシルクロードとベトナム』」で宣言された。またホイアン旧市街の歴史的建造物が、修理における新材の使用や、現代住宅への建替えにより危機に瀕していること、建造物等の保存にあたり、居住者の理解が必要であることにも言及している。

このシンポジウムの後、ベトナム文化情報省から日本の文化庁へ、ベトナム人技術者の木造家屋修理技術向上のための協力が要請され、事務局が昭和女子大学に設置された。

1992年に要請された協力と並行して建築学、都市計画学、考古学、歴史学分野での調査が開始された。日本の大学（昭和女子大学、千葉大学、東京都立大学（当時））は1995年に町並み調査の主体をベトナムの建設省建築研究所（当時）とハノイ建築大学に移譲した。

日本の文化庁は修理技術指導を行う専門家派遣を断続的に行った<sup>注11)</sup>。1993年9月にベトナム側は日本人専門家の技術助言を受けながら、「チャン・フー80番（80Trần Phú）（現貿易陶磁博物館）」の解体修理を行った。チャン・フー80番は解体修理工事を経て1995年9月11日に博物館として開館した。この博物館開館は、ホイアン旧市街居住者にとって歴史的建造物等の修理と活用方法を具体的に知る機会になったと考えられる<sup>注12)</sup>。

修理作業は表2-1に示すように、このチャン・フー80番を皮切りに定期的に行われていった。1993年から1995年にわたり修理軒数が1軒である理由は、当時のホイアン市長スー氏が「日本人専門家が修理技術指導を行う現場が終了するまで、他の家屋修理を行ってはいけない」と通達を出したからである<sup>2)</sup>。従ってこの2年間は日本人専門家が技術面での助言を行い、ベトナム側が建造物等の修理技術を習得する時期だったといえる。

修理費用は、建造物修理費用は日本側の事務局の役割を担っていた昭和女子大学が、企業や個人から寄付金を集め賄った<sup>注13)</sup>。昭和女子大学に加え、1995年にベトナム政府より認可された日本人による組織「ホイアン・ソサエティ」<sup>注14)</sup>を窓口として、寄付が募られた。同時に日本国内で一般から寄付を募るため、昭和女子大学「ホイアン町並み保存プロジェクトを支援する会」が発足した。

ホイアン市の変化としては、1992年にホイアン史跡管理事務所がホイアン市文化局（当時）に移管されたこと、増加した観光客に対する商売によりホイアンの様相が変わることを防ぐために1995年から数度にわたり看板や路上での物品販売の規制などが出されたことが挙げられる<sup>3)</sup>。

また、歴史地区保存整備事業の内容として、日本側の建造物等の修理技術協力時にホイアン市の工務店が現場で修理技術習得をしたり、日本の大学の調査チームに対して調査状況を整えたりといったことも挙げられる。

なお 1996 年 1 月にはユネスコの調査官がホイアン旧市街を訪問し、世界遺産への申請準備が開始された。

以上から、この時期は日本側の協力が始まりベトナム側と共に建造物修理や調査を行い、地域住民に対してその成果を示した時期だったと言える。歴史地区保存整備の枠組みの要素との対応でみると、ホイアン市の工務店に対する日本人専門家による家屋修理技術協力は「文化遺産保存のための技術と材料」と「枠組み全てに係わる人材育成」に、日本側の大学とベトナム側の大学によるホイアン旧市街の建造物の調査は、「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応する。「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に対応する法律や条例は既に整備されており、保存整備事業の拠り所となった。「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」の管理組織に対応する史跡管理事務所も既に設立されており、日本側が協力を行った際に現地の相手機関だった。史跡管理事務所に建築専門職員が配置されていない点は、現地の人材等の課題によるものであると思われる。すなわち、日本側の協力は「文化遺産の調査と研究及び報告」「文化遺産保存のための修理技術と材料」「枠組み全てに係わる人材育成」に対応する技術協力と人材育成を中心としていた。

#### 2.4.3. 第三期 1997～1999 年 保存整備事業変容期

第三期は 1997～1999 年で事業内容が第二期までと比較して変容した時期である。

この時期の大きな出来事は 1997 年にホイアン市が制定した「ホイアンの遺産と景観の管理、保存と開発に関する規定<sup>注 15)</sup> (Regulation on Management, Conservation and Exploitation of Hoi An Monuments and Landscapes)」の制定である。詳細は第三章の 3.2. 文化遺産保存のための法律及び条例の制定に記述するが、1987 年に出された条例と比較すると、ホイアン市の文化遺産保存に対する姿勢や考え方が具体的かつ詳細なものに変化したことが窺える。

この時期も日本人専門家による特定の建造物等修理に対する助言は続いていたが、ハノイ建築大学は独自の建物調査を始め、史跡管理事務所は独自の建造物修理を再開した。昭和女子大学は、財団法人や文部省（当時）からの研究補助金を申請し、大学関係者で構成された調査隊の現地派遣と建造物等調査を行った<sup>4)</sup>。調査は、ホイアン市内にある日本人墓地周辺の発掘や、昭和女子大学が申請した研究補助金によるベトナムの全国民家調査、JICA 開発パートナー事業による全国 6 省での伝統木造民家文化財保存修復工事を含み、ベトナムの全国民家調査を含み、日本側のベトナムにおける活動範囲は広がっていた。ハノイ建築大学はホイアン旧市街で「グエン・ティ・ミンカイ 7 番 (7Nguyễn Thị Minh Khai)」 「グ

エン・タイ・ホック 115 番 (115 Nguyễn Thái Học)」「張氏祠堂」の歴史的建造物調査を実施した。1997 年にホイアン旧市街の居住者から建造物修理の建築確認申請が 100 件近く出された。この申請数増加の理由は、観光客数増加に伴う収入増が要因である。

こうして保存整備事業が進められてきたホイアン旧市街は 1999 年 12 月の世界遺産委員会で「古都ホイアン」として世界遺産リストに記載された。

以上より、この時期はベトナム側のホイアン旧市街の保存に対する考え方や姿勢の変化が 1997 年制定の条例により明確にされ、建造物修理技術の習得と並行して独自の修理を行い、世界遺産リストへの記載が行われた時期だったといえる。歴史地区保存整備の枠組みとの対応から見ると、「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に対応する 1997 年に古都ホイアンの保存条例が再度制定された点大きい。保存条例の内容は、ホイアン旧市街の保存整備事業の進行に伴い、具体的に保存整備の実施手法を書いたものに変えられた。他にも、「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応するベトナム側の建物調査「文化遺産の保存のための技術と材料」に対応する家屋修理、「全てに係わる人材育成」に対応する建物調査と家屋修理技術協力が継続して実施されている。いずれの歴史地区保存整備の枠組みに対応する事業も、短期間で終わらせず、継続的に、また必要に応じて再度実施するものであることが窺える。

#### 2.4.4. 第四期 2000～2003 年 世界遺産後の保存管理期

第四期は 2000 年～2003 年で継続して保存管理がなされた時期である。

古都ホイアンとして世界遺産リストに記載された後も、建造物修理に対する日本の技術協力は続いていた。2002 年に修理が終了した張氏廟は、日本人専門家が技術面の助言を行った最後の建造物である。張氏廟の修理が行われた時期には、既にベトナム側の資金により、他の場所でも建造物等の修理が行われていた。日本人専門家が関わった建造物修理は、表 2-1 の他にベトナムとの共同で設計を行った「グエン・ティ・ミン・カイ 6 番 (6 Nguyễn Thị Minh Khai)」がある。

また、日本の大学関係者は古都ホイアン居住者の代表に対し、今後の保存整備事業を進める手法や方向性の検討のためのワークショップを行い、日本の経験を活かし古都ホイアンに合わせた手法や方向性を考えた<sup>注16)</sup>。

2002 年に張氏廟の修理が終了した後、日本側はベトナム側から修理技術を含めた文化遺産保存への助言を引き続き現地専門家に行うよう要請された。この要請を受け 1998 年から派遣が開始された JICA 専門家としての派遣を 2003 年まで断続的に行った。

そして 2000 年には史跡管理事務所に建築専門職員が初めて着任した。2003 年までに家屋修理を日本人専門家と共に行った史跡管理事務所職員は、文化遺産としての木造建造物の修理方法を学んだ<sup>注17)</sup>。



以上より、この時期は世界遺産リスト記載後も古都ホイアンの保存整備事業が引き続き行われていたことがわかる。世界遺産リスト記載は一つの通過点であり、その前から行われていた保存整備は、世界遺産となった後も続けられる。

歴史地区保存整備の枠組みのうち、「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に対応する古都ホイアンを文化財として指定する法律と、古都ホイアンの保存管理を定めた条例は引き続き施行されていた。「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」に対応する史跡管理事務所への建築専門職員の着任と、「文化遺産保存のための技術と材料」に対応する文化遺産保存のための技術協力が行われた。建築専門職員は、古都ホイアンの保存整備事業が 1983 年に開始されてから 17 年後に初めて着任した。それまでは、日本人専門家が技術協力をを行い、建築専門職員の役割を補っていた。また、文化遺産保存のための技術に関しては継続的に行うことが必要であるといえる。「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応する日本側の建物調査も古都ホイアンを含めたベトナム全土を対象としたプロジェクトの形を取り、引き続き行われていた。「枠組み全てに係わる人材育成」に対応する家屋修理技術協力と建物調査も行われていた。

#### 2.4.5. 第五期 2004 年以降 保存整備事業の変容期 2

2004 年以降の日本人専門家の派遣が終了した後を第五期とし、保存整備事業を記す。

2004 年から 2012 年まで JICA から派遣される青年海外協力隊員<sup>注 18)</sup>（建築）がホイアン史跡管理事務所に常駐し、修理やまちづくりなど各自のテーマをもって関わっていた。2008 年にはシニアボランティア（観光）が約半年間 JICA からホイアン史跡管理事務所に派遣された。その後、青年海外協力隊員の派遣分野は、建築に加え環境教育、シニアボランティアの跡を継ぐ形で観光も加わり幅広い課題に取り組んでいる。昭和女子大学関係者は、考古学調査や町並み調査、建築関係の調査、古都ホイアン居住者向けのワークショップ、ホイアン祭りの開催等で同事業に関わり続けている。

ホイアン事業で蓄積された建造物の修理に関する経験や情報は、2008 年 3 月にユネスコから発行された「Heritage Homeowner's Preservation Manual of Hoi An World Heritage Site, Viet Nam（古都ホイアンにおける文化遺産の家屋所有者のための保存の手引」、以下、保存の手引き）<sup>注 19)</sup>」に掲載されている。古都ホイアンの家屋修理の流れや歴史的建造物の修理方法が書かれた保存の手引は、ホイアン史跡管理事務所、ユネスコ、昭和女子大学の三者で作成され 2008 年に出版された。この冊子は、世界遺産リストに記載された古都ホイアンの保存地区に位置する建造物の所有者に対し文化遺産としての修理や改修を行う際の注意点、方法の説明、修理の流れ、修理資金援助、材料の選び方、修理計画の作り方等が書かれている。日本側が協力してきた家屋修理の方法や考え方は図面と共に部位別に掲載されている。ユネスコはこの冊子の他に IMPACT シリーズ<sup>注 20)</sup>で古都ホイアンを取り上げ、

観光地化に伴う課題や修理後の家屋の使用形態について述べている。

以上から、この時期は青年海外協力隊の派遣が開始され、協力分野と人数が増加し、古都ホイアンの現況がユネスコの冊子になり一般に広く周知された時期である。これらは世界遺産にするための文化遺産保存整備事業から、保存管理事業へと目的と内容が変容していることが窺える。

歴史地区の保存整備の枠組みの要素に対応する事業を見ると、「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に対応する保存条例は引き続き施行されており 2006 年に再度制定された。

「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」に対応する事業として、ホイアン史跡管理事務所内の組織改編が 2010 年に行われ、古都ホイアンの修理や管理を専門に行う部署、情報管理と海外対応を行う部署が増設された。「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応する事業として、ユネスコが英語及び越語でホイアン事業の成果をまとめた保存の手引作成が挙げられる。既に日本側の関係者である昭和女子大学により、主に日本側の調査に関しては報告書が作成されていた。2008 年にユネスコから出された保存の手引きは、古都ホイアンで行われた調査と研究の最終的な成果として、また、保存整備を実際に行う指針として作成された。保存の手引きは古都ホイアンの保存地区Ⅰ内の各戸に配布され、歴史地区保存整備事業に対する情報が住民にも広がった。「文化遺産保存のための技術と材料」に対応する事業として、史跡管理事務所独自の家屋修理事業が行われている。そして、「枠組み全てに係わる人材育成」に対応する家屋修理が行われている。古都ホイアン内の家屋修理が継続して行われることで、史跡管理事務所の職員の管理能力及び施工会社の施工能力が維持されている。

## 2.5. 考察と結論

ホイアン旧市街の保存整備事業は様々な関係者により、多様な手法が組み合わせられ、文化遺産として保存するための事業が行われてきたことがわかった。保存整備事業の立ち上げはベトナム政府が行った。ベトナム政府は史跡管理事務所を立ち上げると共に保存整備事業を進めるために海外の協力を受けることを決め、まず特定のポーランド人研究者と調査を始めた。彼の死亡により日本が協力する機会が巡ってきた。日本側はその機会を活かして着実に協力を進め、今日まで関わる礎を築いた。また、日本側の協力を時系列に沿ってみると、一定期間経過したのちに、ベトナム側に事業主体を移管した点から、日本側は、最終的にはベトナム側のみで事業を実施できるように意図していたことが窺える。日本側は事業の進捗状況と現地の状況に応じ、ホイアン旧市街を世界遺産にするという目標に向けて様々な事業を展開させてきた。

表 2-2 に歴史地区保存整備の枠組みをもってその変遷を整理した。

第一期と第二期で保存整備事業の基盤固めと体制作りを行った。第三期の条例改定によ

って基盤固めから体制作りが進み、第四期は第三期までの状況を継続し、第五期に第四期までの保存整備事業を調整しながら事業を進めた。

また、日本側は第二期に現地へ事業の主体を委譲した。つまり日本側は、日本側の協力が主体となりホイアン事業を進めて行くのではなく、現地の組織や関係者が主体となるように配慮したことがわかる。保存整備事業が一定程度進められた時点で現地へ事業主体を譲る手法は、歴史地区保存整備の枠組みに直接関係しない。しかし、ホイアン事業の継続性を考慮すると、現地の組織が事業主体であれば、対象となる旧市街への接しやすく望ましいものといえる。2004年以降日本側の協力は、JICAのボランティアや大学の研究者の研究という形でのみ続けられており、保存整備事業への協力は永続的に行われるものではない。従って、現地に適した人材がいない期間のみ枠組みの必要な部分を補完する形で協力することは、当該地区の保存整備事業の持続性を確保する点から適した手法が取られたと言える。このように、ホイアン事業における歴史地区保存整備の枠組み形成の特徴は、ベトナム側単独では不足している枠組みの要素を日本側の協力により補っていたことが挙げられる。例えば文化遺産保存のための管理組織に配置される専門職員<sup>注21)</sup>は、保存整備事業が始められてから17年後に初めて配属された。それまでは日本人専門家により、建築専門職員の仕事の一部である保存地区の建造物修理が行われていたと考えられる。

ただし、建築専門職員の配置と家屋修理技術協力は、日本側の協力の可能性の視点からは異なる性質を持つ。文化遺産保存のための専門職員の配置は、保存地区或いは、保存地区のある国が采配するものであり、他国は直接関われない。一方で、家屋修理技術協力は、現地の施工会社と共に家屋修理が行えるため、日本人専門家は、家屋の修理を進めることができる。そして、施工会社の社員に対して文化遺産としての木造建造物の修理方針や修理方法を伝えるといった人材育成を行った。つまり、日本側は、日本の事例紹介などによる情報提供や、建物調査、家屋修理技術協力による技術的知見の提供は行えるが、社会制度に関する法律や条例の制定、組織の設立や人員配置は行えない<sup>注22)</sup>。

結論として、日本側の協力は歴史地区保存整備の枠組（表2-3）において、現地に不足している人材や技術を補う形で行われ、ベトナム側が単独で歴史地区の保存整備が実施できる体制になるまで協力が行われていた。従って、ホイアン事業は、一定期間日本側の手法で行われていた。ただし、日本側の直接的な協力は「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応する保存地区の建造物の調査と研究、報告書の作成、そして「文化遺産保存のための技術と材料」に対応する建造物修理技術協力に限られる。また、日本側は間接的に「文化遺産保存のための法律と条例の制定」に対応する日本の事例紹介を行った。

表 2-2 ホイアン事業における歴史地区保存整備の枠組みの要素と各事業の対応

	期間	事業内容	歴史地区保存整備のための枠組みと事業の対応					日本側の協力内容	
			①	②	③	④	⑤	技術や情報提供	現地の人材育成
第一期 保存整備事業 準備期	1983 ~ 1989 年	ベトナムがホイアン旧市街の調査を実施。	○	○	○				
第二期 保存整備事業 立上期	1990 ~ 1996 年	日本人関係者がホイアン旧市街の保存事業に参加	↓	↓	●	○	○	調査 修理図面、 報告書	現地への 調査主体 委譲 管理組織、施工 会社の人材育成
第三期 保存整備事業 変容期	1997 ~ 1999 年	保存条例を再度制定。 世界遺産リストに「古都 ホイアン」として記載さ れる。	●	↓	↓	↓	○	↓	↓
第四期 世界遺産リスト 記載後の保存 管理期	2000 ~ 2003 年	日本人専門家の協力継続。 住民へのワークショップ 開催。	↓	↓	↓	↓	●		↓
第五期 保存整備事業 変容期 2	2004 年 以降	協力内容が建築以外に環 境、観光まで広がる。今 までの保存整備事業の成 果がまとめられる。	↓	↓	↓	↓	●		ボランティア

凡例

○ 新規事業立上

↓ 継続事業

● 事業内容変更

表中の「歴史地区保存整備のための枠組みとの対応」の項目は次の通り。①文化遺産保存のための法律と条例の制定、②文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置、③文化遺産の調査と研究及び報告、④文化遺産保存のための技術と材料、⑤枠組み全てに係わる人材育成。

表 2-3 歴史地区保存整備の枠組みに対応する日本側の協力内容と協力時期

歴史地区保存整備の枠組みの要素

間 接 関 与	文化遺産保存のための 法律と条例の整備	日本の歴史地区保存整備事例紹介（第二期以降） 保存の手引作成協力（第五期）
	文化遺産保存のための 保存管理組織設立 専門職員の配置	建築専門職員の代替（日本人専門家による修理図面、 修理報告書作成）（第一期～第三期）
直 接 関 与	文化遺産の調査と 研究及び報告	修理図面、修理報告書作成（第一期～第三期） 古都ホイアンの建物調査（第一期～第三期）
	文化遺産保存のための技術と材料	史跡管理事務所建築担当職員及び施工会社社員への 技術協力（第一期～第三期）
	枠組み全てに係わる人材育成	修理図面、修理報告書作成（第一期～第三期） 現地におけるワークショップ開催（第四期以降） 史跡管理事務所建築担当職員及び施工会社社員への 技術協力（第一期～第三期） 現地への事業委譲（日本側の調査や修理から、ホイ アン史跡管理事務所による修理へ）（第二期）

## 注

- 1) 歴史地区古都ホイアンの保存整備事業を省略して「保存整備事業」と書く。
- 2) UNESCO “IMPACT” より引用したが、あくまでも入場券等を元に数えているため、実際の数値とは異なる場合がある。
- 3) 保存の中心となる地区
- 4) 保存の中心となる地区の周辺にある緩衝地帯
- 5) ユネスコが 2008 年に出版した保存の手引に書かれている 1146 軒に、ホイアン史跡管理事務所が所有する修理済み建造物一覧表に掲載されている家屋のうち、変更点を加え、数えた。
- 6) “IMPACT” の地図に建物などの書き込みを加えた。
- 7) 本論でのみ用いるため「古都ホイアンのフレンチコロニアル様式」とする。
- 8) 日本ベトナム研究者会議編「海のシルクロードとベトナム・ホイアン国際シンポジウム・(アジア文化叢書 (10))」, pp. 390-489, 1993 より抜粋
- 9) 国立文化財研究所ホームページ掲載の翻訳より引用
- 10) 筆者訳
- 11) 文化庁文化財部「旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録・ベトナム社会主義共和国における協力事業-アジア・太平洋地域文化財建造物保存協力事業-」 2003 年に修理記録が書かれている。
- 12) 筆者の関係者へのインタビューによる。
- 13) 筆者の昭和女子大学友田博通教授へのインタビューによる。研究助成金として「文部省科学研究費」「鹿島学術振興財団」「建築技術教育普及基金」「建築技術教育普及センター」、学術研究寄付金として「清水建設技術研究所」「戸田建設」「資生堂・求龍堂」、「住友財団文化財維持・修復事業助成」「日本建築セミナー」「キャノン販売株式会社学術研究寄付金」「川村茂邦学術研究寄付金」「関口欣也学術研究寄付金」「岩井一郎学術研究寄付金」、学術研究振興資金として「日本私立学校振興・共済事業団」。寄付金として「大成建設自然・歴史環境基金」「住友財団（文化財維持・修復事業助成）」「電源開発株式会社」「安田火災海上保険株式会社」「日本ユネスコ協会連盟」、募金として「昭和女子大付属中後部生徒教職員有志」「株式会社日建エンジニアリング」「製菓卸問屋株式会社まるやす」「株式会社エティ」「青木朗・青和特許法律事務所」「アートワンインテリジェンス」「シータス」及び個人からの寄付及び募金が集められた。これらは家屋修理及び調査渡航費用や報告書の印刷代、シンポジウムの開催費用の補助やホイアン史跡管理事務所への補助等に当てられた。成果品は文化庁及び昭和女子大学国際文化研究所、JICA 専門家報告書等の冊子となっている。
- 14) 1995 年 4 月 10 日にベトナム副首相が書類に署名し、同年 6 月 9 日に設立会議が開催。地方の団体が中央政府に認可された第 1 号となる。(昭和女子大学国際文化研究所発行「ホイアン新聞 vol.1」1 より引用)
- 15) 筆者訳
- 16) 筆者の関係者へのインタビューによる。
- 17) 筆者の関係者へのインタビューによる。
- 18) JICA のボランティア派遣事業で事業対象国に派遣され、現地に 2 年間滞在しボランティア活動を行う

人員。職種は建築や観光、野菜栽培、音楽、スポーツ、村落開発普及員など多岐にわたる。

19) 筆者訳

20) ユネスコが発行する、世界遺産を訪れる観光客と遺産管理者に向けた本。これまでに4冊が出ている。

古都ホイアンのほかにラオスのルアン・パヴァーン、ルアン・ナムタオ、フィリピンのイフガオを扱っている。

21) 古都ホイアンの場合は、文化遺産の構成要素の中心が建築であるため、建築専門職員である。

22) 日本の国際協力により、ベトナムの法整備支援が行われているが、協力内容は現地の法曹家育成などで、実際に法律の制定にまでは携わっていない。

#### 参考文献

1. 昭和女子大学国際文化研究所:「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.1 1 ベトナム・ホイアン特集」, pp. 1-103, 昭和女子大学, 1994,
2. 内海佐和子:「ヴェトナム・ホイアンにおける町並みの景観変容に関する研究」, 昭和女子大学博士論文, 2001
3. 昭和女子大学国際文化研究所:「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.3 ベトナム・ホイアンの町並みと建築」, pp. 1-30, 昭和女子大学, 1996
4. 昭和女子大学国際文化研究所:「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.1 1 ベトナム・ホイアン特集」, 128 頁, 1994, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.3, ベトナム・ホイアンの町並みと建築」, 1996, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.5 ベトナム伝統住居の保存と再生」, 120 頁, 1999, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.7, ベトナム伝統住居の体系的研究」, 165 頁, 2005, 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.9 ベトナム・ホイアンの学際的研究-ホイアン国際シンポジウムの記録-」, 245 頁, 巻頭3 頁, 2004, 以上昭和女子大学発行

## 第三章 歴史地区の保存整備

### －保存整備のための枠組みから捉えた特徴－

#### 3.1. はじめに

第三章では、2012 年現在の古都ホイアンの保存整備事業を、本論で歴史地区保存整備の枠組みの要素として設定した「文化遺産保存のための法律と条例の制定」、「文化遺産保存のための管理組織の設立と専門職員の配置」、「文化遺産の調査と研究及び報告」、「文化遺産保存のための技術と材料」「枠組み全てに関わる人材育成」の要素ごとに整理し、現状の特徴と課題を考察する。

#### 3.2. 文化遺産保存のための法律及び条例の制定<sup>注1)</sup>

ベトナムでは国会が唯一の立法機関である。ただし、憲法の規定により法律を国会に提出する権限を与えられている機関は、国家主席、国会常務委員会、国会民族評議会、国会各委員会、政府、最高人民裁判所及び最高人民検察院である。大衆団体であるベトナム祖国戦線及びその構成組織も同等の権限を有する。法律を国会に提出できる8つの組織の一つである国会民族評議会は日本の地方議会に相当する。つまりベトナムの地方級の国家組織である。また、ベトナムは日本の県に該当する省と、市町村に該当する市<sup>注2)</sup>が設置され、省もしくは市ごとに人民委員会が設けられている。これら人民委員会は、日本の地方自治体の行政機関にあたる。

日本と異なる点は、国会民族評議会が国家組織の一つとして位置付けられる点である。国会民族評議会は、日本の行政組織に当てはめると、日本の地方議会と同等に位置づけられるが、日本とは異なり自治が認められている組織ではなく、中央政府の地方支部と捉えられる。人民委員会も同様である。

また、ベトナム政府の法律体系は、上位組織が決めたものと下位組織が決めたものに齟齬がある場合は、上位組織が決めたものに従う。つまり、古都ホイアンの保存条例と、ベトナムの文化遺産に関連した法律に齟齬がなければ、古都ホイアンの保存条例は、ホイアン市において条例の文言通り執行されていると考えられる。よって本章では、初めにベトナム全体の文化遺産保存に関連する法律を把握し、ベトナム政府の文化遺産の扱いを整理する。次に、古都ホイアンを対象とした文化遺産保存に関する条例を整理し、ベトナム全体の文化遺産保存に関する法律と齟齬の有無を明らかにする。

なお、法令の訳語は日本に倣い、中央政府級の組織が制定したものを法律、地方自治体にあたる組織が制定したものを条例とする。ただし、本論では便宜上国家民族評議会と各省、各市の人民委員会以外の組織は中央政府級の組織として扱う。よって、国家民族評議会と、各省、各市の人民委員会以外の組織が制定する法令を法律と翻訳し、人民評議会、各省と各市の人民委員会が制定する法令を条例とする。

### 3.2.1. ベトナム全土の文化遺産保存のための法律

本項では、歴史地区保存が行われる前にベトナムで保存対象とされてきた文化遺産や文化遺産の扱い方を、文化遺産保存のための法律の中から整理し、古都ホイアンの保存整備が始められる前の状況を整理する。歴史地区の保存整備が行われる前に、ベトナムで保存対象とされてきた文化遺産や文化遺産の扱い方を見ることで、ベトナムにおける歴史地区保存の体制や考え方の形成過程の一端を窺うことができ、歴史地区保存整備の現状の課題の要因を探ることができると考えた。

まず、ベトナムの文化遺産保存のための法律をベトナム戦争前後から扱い、文化遺産の対象や、その保存方法、文化遺産の管理責任者を中心に法律の変遷を追い、文化遺産に対する考え方を明らかにする。

ベトナムの文化遺産保存に関する法律を表 3-1 に示す。

表 3-1 ベトナムの文化遺産保存に関する法律一覧

施行日	名称
1945年9月8日	ベトナム東洋協会、博物館、公共図書館及び研究所の国家教育省への編入に関する1945年9月8日付布告No. 13
1945年11月23日	ベトナム東洋研究所の一定の責務を規定する1945年11月23日付布告No. 65
1956年10月28日	史跡の保護に関する1996年6月28日付回状No. 38-TT/TW
1956年7月3日	史跡の保護について
1957年10月29日	史跡及び観光地の保存に関する行政命令No. 519-TTg
1958年1月1日	史跡及び観光地の保存に関する行政命令の宛先追加
1962年8月22日	岩山の保存及び保護に関して
1984年4月4日	歴史的文化的遺物及び名所の保護及び利用に関する布告
1996年6月28日	史跡の保護に関する1996年6月28日付回状No. 38-TT/TW
2002年1月1日	文化遺産に関する法律
2005年※	文化遺産に関する法律

(※2005年の法律は施行日が不明。東京文化財研究所の資料及び昭和女子大学報告書より作成)



年代順に見ると、1945 年 11 月 20 日に公布された「東洋研究所の一定の責務を規定する法律」は、歴史的な建造物であるが寺院や廟と異なり、これまで保護されてこなかった王宮、砦、墓地も保護の対象としており、文化遺産としての保存対象が拡大したといえる。

1945 年は、現在のベトナムにあたる場所の政治状況が目まぐるしく変わった。まず、仏領インドシナを支配していたフランスの立場は、本国の政権交代により微妙なものとなった。そして、日本は 1945 年 3 月 9 日にフランス植民地政府の解体を行い新たな支配者となった。同年 8 月 15 日に日本がポツダム宣言を受諾し、9 月 2 日にホー・チ・ミン氏が現在の首都ハノイでベトナムの独立宣言を行った。しかしフランス軍は現ベトナムに進軍し、ベトナムを再度支配下に置くことを試み、ベトナム独立戦争につながっていった。

「東洋研究所の一定の責務を規定する法律」は、その最中にベトナムの暫定政府大統領から出された。法律の内容は、フランス植民地時代の東洋研究所（現在のフランス極東学院）の成果を引き継ぎ、ベトナムの王朝を含めた歴史的遺物を保護するものである。フランス植民地時代には、宗主国であるフランスが、住民の管理のために、民衆の集まる寺院等の宗教施設で催された儀式や参加した人数、宗教団体の数などを調べていた<sup>注 3)</sup>。そのために、共同体の集会所、パゴダ、寺院、霊廟、その他の礼拝所は保護対象とされていた。共同体の集会所は共同体の会合が行われる場所であり、共同体の中心的な位置を占める。他に、宗教施設も保護対象とされている。つまり単体の建造物のうち、住居以外の用途を持つ施設を保護対象としていることがわかる。

1954 年にディエン・ビエン・フーの戦いにベトナムが勝利し、フランスはジュネーブ協定に基づき仏領インドシナの解体に合意した。その後ベトナムは北緯 17 度線で南北に分断された。

そして 1956 年に「史跡の保護について」がベトナム民主主義共和国<sup>注 4)</sup>より公布され、歴史的な建造物や記念碑の保護と、それらの建材への転用が禁じられた。同時に、文化遺産とみなされる観光地の保護を人民<sup>注 5)</sup>に教育することとなった。しかし、具体的に保存対象とする歴史的建造物のリストが作られたかどうか、また建材としての使用を禁止するために取られた措置は不明である。ただし、法律の内容は、文化遺産として保護する対象が広がった点、建材の転用を禁じ、文化遺産の破壊や劣化の進行を阻止する姿勢が表れた点から、文化遺産保存の実施に対して踏み込んだものになった。

1958 年に、「史跡及び観光地の保存命令に関する宛先追加」の施行によって、国から省、市等に対して社会基盤インフラや農場建設に当たり必要に応じて、閣僚が文化遺産に対して保護要請を出せることになった。この法律では、国土整備の際に文化遺産とされる歴史的な建造物や記念碑の保護が定められており、開発と文化遺産保存の折り合いの付け方を示したといえる。

1962 年に「岩山の保存及び保護に関して」が公布された。これは、史跡保護を行う一方で開発が経済活動にとって重要であるため、場合によっては保存と開発を並行して行えると書かれ、岩山が保護対象であると同時に、経済開発のために岩山を採掘する場合は開発

を容認すると解釈できる。ただし、法律の対象は岩山のみであり、他の文化遺産に対しては言及されていない。文化遺産の保存と開発という、他の場所でも共通の課題が見られる。

そして、1975 年 4 月 30 日にベトナム戦争が終わり、南北に分断されていた国土が統一された。

その後決定された 1984 年 3 月 31 日付の「歴史文化遺跡（遺物）と名勝旧蹟の保護と利用に関する法令」で、一定の面積を持つ保護区、文化財の目録作り、管理者の義務などが定められた。つまり、歴史地区を文化遺産として保護することが、ベトナムの法律で初めて決められた。この法律の施行を受けて、同年にホイアン旧市街はベトナムの国家文化財に指定された。また、文化遺産に対して省、市レベルで管理者を定めることとされ、文化遺産の保存には、管理責任者が必要であることが明確にされた。1996 年に「史跡の保護に関する法律」が改訂、施行された。内容は 1956 年の「史跡の保護に関する法律」とほぼ変わらない。2 番に史跡を建築行為に使用することを戒め、『建築及び堤防のためには』別の場所から石材を取ってこなければならない。」と目的を具体的に書いている。3 番は文化省が史跡等の調査と分類を行い、復旧及び修復計画を作成した後に「中央委員会の承認を求めるべきである」と行為の承認先を具体的に書いている。計画を作成するのみならず承認することで実施が促進されている。

その後、2002 年に出された「文化遺産に関する法律」では、これまでとは異なり文化遺産保存実施のための体制や手法が網羅されている。例えば、文化遺産の管理者や所有者が明記され、博物館の設置に触れ、さらに文化遺産保存への国際協力や保存の財源についても触れている。そして、2005 年にベトナム政府はそれまで文化財と認めていなかった農村集落を、初めて文化財であると明記した<sup>注 6)</sup>。

### 3.2.2. 古都ホイアンの保存に関する法律と条例

ベトナム戦争終結後の 1984 年にベトナム政府により「ホイアン旧市街保存管理規定」が発布され、1985 年 3 月 19 日にこの規定に従う政府決議によりホイアン旧市街は国家文化財とされた。

1987 年にベトナムはユネスコの世界遺産条約を締結し、同年 7 月 6 日にホイアン旧市街のあるホイアン市を所管するクアンナム・ダナン省人民委員会は、ホイアンの町並みの管理に対しての規則“Decision on issuance of regulation on protection and use of Hoi An ancient urban center vestige（古都ホイアンの保存活用に関する条例決定<sup>注 5)</sup>（以下、1987 年条例）”を定めた。この条例により、クアンナム・ダナン省の文化観光局とホイアン市人民委員会主席（市長）は、ホイアン旧市街の保存に関する条例の施行と調査の責任を負うことになった。同時に建造物は歴史的な視点から等級 1、等級 2、等級 3、等級 4 の 4 種類に分類され、分類に応じて管理方針が定められた。1997 年に“Regulation on

management conservation and exploitation of Hoi An”（ホイアンの遺産と景観の管理、保存と開発に関する条例<sup>注7)</sup>、以下「1997 年条例」）が施行された。

1993 年から開始された日本側の協力の影響を考察するために、1987 年条例と 1997 年条例の内容および、日本の伝統的建造物群保存地区制度を比較した（表 3-2）。表 3-2 の項目 1～13 は、1987 年条例と 1997 年条例の内容から設定した。歴史地区の保存管理は、文化遺産として指定された地区内に位置する個々の歴史的な建造物や工作物、自然環境の維持管理と同時に、住民の生活の場としての地区の運営と管理が求められる。従って、歴史地区の範囲と管理責任者を明記すると同時に、個々の建造物の分類や管理方法と、歴史地区としての管理方針、維持管理のための財源の確保など複合的な視点が必要である。また、表 3-2 からベトナムと日本に共通の視点がみられる。1987 年条例と 1997 年条例は、伝統的建造物群保存地区制度により担保していない内容を扱っており、古都ホイアンの状況に合わせたものであるといえる。

表 3-2 1987 年「保存活用に関する条例」、1997 年「管理、保存と開発に関する規定」及び伝統的建造物群保存地区制度の比較

古都ホイアンの保存条例の項目	1987 年条例の内容	1997 年条例の内容	伝統的建造物群保存地区制度
1. 保存管理者の明記	—	保存管理者として人民委員会とその管轄下にあるホイアン史跡管理事務所が明記されている。文化財に関する情報提供やサービスについても両社が責任を持つとあり、1987 年版では管理者が明確ではない。	市町村など、対象地域が位置する自治体
2. 保存地区の設定	—	第一地区、第二地区、第三地区に分けられる。	保存地区としてのみ指定。周辺を風致地区指定を行い、緩衝地域として定める場合もある。
3. 等級分類の変更	等級一：建築的、美的な特別な価値のある遺物 等級二：建築的、美的、歴史に関する価値のある遺物 等級三：あまり価値のない私的もしくは公共建築 等級四：建築的、美的価値のないもの	特級、等級一、等級二、等級三、その他に分類。その他が修理規制より 1987 年の等級四にあたると思われる。	特定物件：修理基準 環境物件：修景基準 その他：修景基準 全ての建造物が保存対象として特定されるわけではない。 保存地区内に国宝や国指定重要文化財、国登録有形文化財が立地する場合もある。全ての建造物が保存対象として特定されるわけではない。
4. 分類ごとの修理基準の設定	等級一から等級三までは、修理に必要な資金と資材を等級に応じて国から提供される。等級四は利用価値があれば維持するが、なければ取り壊す。	特級と等級一はできるだけ元の状態を維持する。等級四は周辺環境に調和させ、屋根は陰陽瓦を葺くことある。2008 年出版のユネスコの手引書と類する。修理時に熟練技術者と契約を結ぶことが推奨されている。	国宝や国指定重要文化財、登録有形文化財は国の基準に従う。県指定、市指定重要文化財も同様である。他は、当該地の方針に従う。独自の町並み協定を作成している地区もある。
5. 高さ規制の設定	—	第二地区では、13.5m、第三地区では 16m まで。	地区の協定や風致地区の設定で行う。
6. 遺物の活用方法	—	商業を粉う上での許可制と、伝統的な行事の奨励	特に明記されない。
7. 保存関係者の明記	—	ホイアン市人民委員会とホイアン史跡管理事務所以外に、保存地区内の住民、労働者、観光客も含む。	教育委員会とは別に、保存地区の修理や活用を実際に担う NPO や委員会などが設けられる場合もある。
8. 調査責任者の明記	—	ホイアン市人民委員会	市町村から大学等の研究機関へ依頼する。
9. 交通手段への注意	—	保存地区 I 内での車両の使用の禁止。その他騒音の大きいものの禁止。	都市計画上に組み込まれる。或いは地区指定や地域協定区組み込まれる。
10. 遺物の売買と譲渡	売買や譲渡を行う場合、第一の権利は国にある。	遺物の価値と景観を破壊する行為の禁止	自治体への通知義務
11. 報奨と罰則の設定	—	保存に貢献したものは表彰され、報奨が与えられる。違反したものは罰せられるか断えられる。保存規制に違反しているものは撤去される。	—
12. 緑地の扱い	—	既存樹木の保存と新たに植える場合の許可設定	環境物件として特定される。その他は緑地計画で指定する。
13. 修理費用	等級一から等級三までは一部国から補助される。	観光場所への入場券収入が修理基金となる	伝統的建造物群保存地区内の建造物及び工作物の修理、修景時に県及び国から補助金が出る。

まず、条例ごとに見ると、1987 年条例では保存対象を定め、4 種類に分類したことでホイアン市の文化遺産保存に対する姿勢が分かる。ホイアン市は、保存地区内の全ての建造物を保存対象として、各建造物の建築的、芸術的、歴史的な価値、当初部材を残しているかどうかにより<sup>注7)</sup> 等級 1、等級 2、等級 3、等級 4 のいずれかに分類した。各建造物の文化遺産としての評価を定め、保存整備の方向性と具体的な保存方法を示したといえる。

また、保存対象とされているものは、埋蔵文化財や建造物、史跡の混在したものだが、保存管理者がホイアン市人民委員会である点や、管理と調査をホイアン市人民委員会と文化情報局局長と協議する点、新たに保存すべき遺物や建造物などを発見した場合、ただちに市や省の担当部局を通じて国に知らせるといったように、ホイアン市とクアンナム・ダナン省、ベトナム中央政府が連携した管理体制が書かれている。保存のための目録の作成にも触れており、本論で設定した歴史地区保存整備の枠組みの中で「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員の配置」「文化遺産の調査と研究及び報告」に該当する項目が、既に条例に書かれていたことがわかる。

ただし、新たな保存対象を探るための調査費用や組織については触れられておらず、実施のためには前章で示したように文化遺産保存を目的とした他国からの国際協力に頼ることとなった。なお、元々国宝級の単体の建造物や遺跡については保存が進められており、現在も修理技術者が全国の建造物を修理している<sup>注8)</sup>。

歴史地区保存整備の枠組みの「文化遺産保存のための修理技術と材料」のうち技術に当たる修理手法についても、可能な限り元の状態を保つことが書かれ、歴史を継承する考え方が表れている。等級 4 の整備方法は、協議の上解体してもやむを得ないとされており、解体した後に建てられる家屋については触れられていない。

以上から、1987 年条例において、歴史地区保存整備の枠組みには、一部対応しているにとどまっている。また、保存対象を 4 種類に分類し、新たに保存対象となる建造物や遺物を発見した場合は、クアンナム・ダナン省やホイアン市の担当部局を通じて国に知らせるといった、行政上の仕組みが整備されている。

1997 年条例<sup>注9)</sup>について、1987 年条例から追加・修正された事項を中心にみていく。

1997 年条例で初めて追加されたことは、保存管理者と保存地区、高さ規制、調査責任者、交通手段、報奨と罰則、緑地についてである。追加された事項から、ユネスコの条約やイコモスの憲章の中で述べられ、本論でも分析の視点とした文化遺産の対象範囲や、対象の保存方法、管理責任者が窺える。これらは枠組みの「文化遺産保存のための管理組織と専門職員配置」のうち管理組織にあたる。

変更された項目は、保存対象の分類と分類ごとの修理及び整備基準である。保存対象は 4 種類から 5 種類に増やされた。これは等級 1 を特級と等級 1 に分ける提言を日本人専門家が行ったことが影響しているといえる。等級 4 の整備基準も 1987 年条例においては利用価値がなければ取り壊すと書かれていたが、1997 年条例では陰陽瓦を葺き周囲と調和させると書かれている。保存地区 I 内の建造物等は全て保存対象とされていたにも関わらず、1987

年条例では取り壊しを認めていた。そして、1997 年条例では陰陽瓦を葺いて建造物自体を調和させることに変更された。1997 年条例において、等級 4 は保存地区の保存対象物件として、整備手法が明確にされたことが指摘できる。つまり、保存地区内の文化遺産の保存手法が変化したといえる。しかし、1987 年条例、1997 年条例共に保存対象とする建造物等の一覧表はなく、保存対象は明確にされていない。

既存の文章に追加された文言は、文化遺産の売買と譲渡、修理基金である。文化遺産の売買と譲渡については、1987 年条例でも、売買時或いは譲渡時に第一の権利は国にあるとされていたが、文化遺産の破壊も禁止された。破壊の禁止は書かれていなかったため、文化遺産保存の視点から見ると、さらに古都ホイアンの保存整備体制が整えられと言える。また、等級 1 から等級 3 までの修理費用の一部が国から補助されると決められていた点は、保存対象の分類増加に伴い、特級が対象に加えられている。さらに、保存地区内の観光対象の入場券の売り上げが修理基金となるとされ、1987 年条例では修理費用の補助があるものの、費用が実際に補助されるのか、費用をどのように集めるのかは明示されていなかったが、具体化された。ベトナムでは、新しい条例と古い条例で内容が矛盾すれば新しいものを優先させる。矛盾がない場合は古い条例に加えた形で新しい条例が適用される。つまり、1997 年条例が出されたことで、修理基金の支払い対象は特級、等級 1、等級 2、等級 3 まであり、修理基金はホイアン旧市街にある観光対象とされる物件への入場料から賄われるという仕組みがはっきりと明示されたことがわかる。

このことから、古都ホイアンの歴史地区の保存整備の根拠となる条例において、保存整備手法が徐々に具体化されたといえる。その具体化の過程においては、後述するように日本側の協力も行われた。

日本人専門家は 1997 年条例において、国内の伝統的建造物群保存地区制度や自らが伝統的建造物群保存地区選定に関わった経験を紹介した。しかし、1987 年条例と 1997 年条例、日本の伝統的建造物群保存地区制度を比較すると、伝統的建造物群保存地区制度に加え、都市計画制度上の地域地区、他の文化財保護法により保存整備が行われるものなどを加えた形になっている。具体的には、伝統的建造物群保存地区制度では扱っていない項目である「5. 高さ規制」「6. 遺物の活用方法」「9. 交通手段への注意」「12. 緑地の扱い」が一条の中に含まれている。これらは、日本の場合都市計画で扱われる。「2. 保存地区の設定」は、高さ規制が厳しく通りに面した棟は 6m 以下である保存地区Ⅰと 13m まで許されている保存地区ⅡA、その周囲で 18m まで許されている保存地区ⅡB で構成されている。これらは日本の場合、保存地区Ⅰは伝統的建造物群保存地区であり、都市計画上地域地区として扱われ、周囲に高さ規制を加える場合は、風致地区として指定する。つまり、伝統的建造物群保存地区の維持管理を行うために、歴史地区の位置する市町村が都市計画制度を用いて調整する。しかし、古都ホイアンにおいては、一条の中に含み運用している。

つまり、日本人専門家が紹介した事例は、一定の地区の保存整備を行う際に、歴史地区の保存を行う伝統的建造物群保存地区制度と、都市計画制度、文化財保護法など様々な手

法を組み合わせる保存整備を進めて行くものであった。それに対し、ホイアン市は一条の中で古都ホイアンの実態に適合するようにして歴史地区の保存条例を制定したといえる。また、伝統的建造物群保存地区制度とは異なり、1997 年条例においては、ベトナム政府主導で保存地区と保存対象の決定が行われ<sup>注10)</sup>、保存対象の分類、歴史地区保存整備事業の過程で保存対象の所有者、保存地区内の居住者に情報公開が行われていない。歴史地区の外観を整備する景観条例もホイアン市によって断続的に制定された。前述した 1997 年条例が古都ホイアンの保存整備実施体制を整え、景観条例は古都ホイアンの保存地区 I 内の外観を整えるための具体的な方策だと言える。

次に、実際の保存整備の手法を見て行く。ホイアン旧市街は、歴史的な建造物が特定の地区に集中して立地するため、1997 年条例を作る際に 1975 年（昭和 50 年）に日本で制定された伝統的建造物群保存地区制度等の考え方が応用されたと考えられ、日本側の関係者からも、制度の紹介を行った旨が述べられている<sup>注11)</sup>。

保存地区の設定は 1987 年条例では触れられず、1990 年の「第 1 回国際シンポジウム『海のシルクロードとベトナム』」で当時のベトナム文化省職員から提言され、1997 年条例に盛り込まれた。保存地区を設定した理由としては、古都ホイアンが世界遺産に登録されたことが挙げられる。1999 年にユネスコの世界遺産となったため、申請準備をする際に必要な保存の中心地区（コアゾーン）と緩衝地区（バッファゾーン）を書く必要があり、当時の史跡管理事務所職員もこれを参考にしたとも考えられる。

全体として、歴史地区保存整備に必要な枠組みのうち、「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」「文化遺産保存の技術と材料」の中の、保存管理組織と技術について述べられていることがわかる。また、1987 年条例と、1997 年条例を比較すると、全体の構成は同じであるものの、1997 年条例は保存整備に必要な具体的な手法が追加され文化遺産保存条例が制度として進化したといえる。追加された点は、歴史地区の保存整備を進めるうちに、現状との齟齬や補足が求められた事項だと考えられる。二つの保存条例の比較から、歴史地区保存整備のための枠組みの要素の一つである条例の制定により、他の枠組みの要素が担保されるようになったといえる。

### 3.2.3. ホイアン市における景観条例

ベトナム側は歴史的地区の保存整備にあたり、古都ホイアンの歴史を継承するため、1987 年及び 1997 年に条例を制定した。これらに加え、ホイアン市の保存地区における景観や観光に関する条例が 1995 年から 1997 年にかけて制定された。この景観や観光に関する条例は、看板の色や大きさ、道路における物品販売に対する規制であり、保存地区の景観を乱さないことを目的としている。これらの条例に関して、内海佐和子（1999 年）は次の様に指摘している。「1995 年から 1997 年の短期間に 5 つの条例が出され、その効果は上がって

いる。5つの条例が出された経緯は、商売の利益をあげるために客を呼び込もうと目立つ工夫をする商店主と、観光地として歴史的市街地の様相を保護することが将来的にホイアンのためであると考えているホイアン市市長の計画と実施のせめぎあいであった。住民の動きに対して規制する条例を出すことで、目立った看板の設置は減り、道路での物販も歩道に書かれた赤線内で行うよう定められた。」<sup>注12)</sup>なお、赤線内における路上での物品販売は、店舗を構えることができない人たちへの配慮だと言う。この景観条例を見ると、ホイアン市長が、日本側が行おうとしていた保存活動の理念や指針、歴史的景観の形成に共感し、市長の立場から行政面で保存事業を主導していったと言える。

ホイアン市は、ホテルの立地規制も行った。例えば隣接するホテルは一定の距離を保ち、道路からも一定の距離を保つよう定めた。ホテル同士の距離や道路からの距離に配慮することで景観や環境を保っている。ホイアン市内に入るためには、ベトナム中部の都市ダナンを経由してくるのだが、ダナンの海岸沿いにリゾートホテルが立ち並び、海岸が見えなくなっている。これに対しホイアン市内では水辺がホテルで埋まることもない。ただし、この規制は大規模ホテルに対してのみ適用される。

### 3.2.4. 文化遺産保存のための法律と条例の制定の整備について

ベトナムにおいて文化遺産保存関連の法律は、未整備な部分を補完する形で施行されてきたといえる。歴史地区保存整備について書かれた法律は1975年に南北戦争が終結した後、1984年に公布された「歴史的文化的遺跡（遺物）と名所旧跡の保護及び利用に関する布告」である。この法令で保護地区の決定、文化財の目録作りの推奨、管理者の保存管理義務、省や市レベルで管理者を定めることが決められた。つまり、歴史地区の保護の必要性が謳われ、管理者も決められた。その後の変化として2005年には集落保存が可能になったことが挙げられる。この変化は、第5章で扱う、歴史地区のドゥオ・ンラム村という著名人を輩出した集落の保存を行うためである。

古都ホイアンの保存においては、ベトナム政府によりホイアン旧市街は国家文化財とされたが、具体的な保存整備はホイアン市が行っていることがわかる。ベトナム戦争後に国策として文化財保存を進めるため1984年にベトナム政府により「ホイアン旧市街保存管理規定」が發布され、1985年に文化大臣（当時）から「ホイアン旧市街保存管理規定」が發布され、ホイアン旧市街が国家文化財<sup>注13)</sup>とされた。古都ホイアンを国の文化財として指定した後、古都ホイアンを有する1987年にクアンナム・ダナン省（当時）から「古都ホイアンの保存活用に関する規制決定」が出され、1997年にホイアン市人民委員会から「ホイアンの遺産と景観の管理、保存と開発に関する規定」が出された。

つまり、ベトナムの文化遺産保存に対する姿勢として、対象を文化遺産として決めるのは中央組織だが、実際に保存整備を行うのは、保存対象を日常的に管理できる地方組織<sup>注14)</sup>

である。また、規定の項目の立て方は、日本人専門家が紹介した日本の歴史地区保存整備手法である伝統的建造物群保存地区制度と都市計画制度を組み合わせたものに類似している部分があることから全体を日本人により紹介された事例をベトナム人が使用したことも指摘できる。

課題は、文化遺産保存と開発の兼ね合いが条例で担保されていない点である。例えば保存地区Ⅰの西側に位置する日本橋は古都ホイアンの観光対象物として有名だが、周囲は河岸整備が行われている。歴史地区古都ホイアンとして指定された区域内で保存対象とされているのは建造物のほかに橋、井戸である。しかし、イコモスがユネスコに提出した評価書によれば「東アジア及び東南アジアで港町の様子をよく伝える。個々の建造物ではなく、全体としてよく残っていることに価値がある」と評価されている。また、ユネスコの基準に該当するものとして「2. 国際港の様子をよく残す」「5. ホイアンは、伝統的なアジアの貿易港の様子がよく残されている」ことが挙げられており、建造物のみならず、全体として価値があるものとされている。しかし、特級から等級4の保存対象物に河岸の状態や樹木は含まれていず、変更が行える。保存対象ではないため、歴史地区を構成する要素でありながら、変更が加えられ、結果として歴史地区の価値を失う可能性のある状況である。

規定は、生活しながら保存するために変更が加えられるものの、古都ホイアンの価値を関係者が共有し継承していく内容でないために、歴史地区の価値を失う行為を止める抑止力はない。違反者には処罰がくだされるが、具体的な内容は書かれていないため歴史地区保存への効果は不明である。

### 3.3. 文化遺産保存のための管理組織の設立と専門職員の配置

1983年のホイアン旧市街の保存整備事業開始後、間もなく1986年にホイアン史跡管理事務所(Trung tâm Quản lý Bảo tồn Di tích Hội An / Hoi An Center for Monuments Management and Preservation) (以下、史跡管理事務所) が設立され、ホイアン市内の文化遺産の保存整備を担ってきた。歴史地区保存整備の枠組の一つである保存管理組織の変遷を辿ることで、ベトナム側のホイアン旧市街<sup>注 15)</sup>の保存整備事業に対する関わり方や考え方の変遷を明らかにする。

#### 3.3.1. 組織立ち上げから建築専門職員着任まで

1986年2月、ホイアン市では文化遺産を管理していくための管理組織としてホイアン史跡管理事務所が新たに設立された。当初はホイアン市人民委員会直属の独立組織であり、1992年5月にホイアン市文化局管轄下の組織となった。2010年時点では、ホイアン市人民



委員会直属の組織だった。ホイアン旧市街に位置する保存対象は建造物が中心だが、元々は建築専門職員が不在であり、2000年に初めて着任した。

ホイアン旧市街の保存整備事業において、日本側<sup>注16)</sup>は家屋修理を中心とした協力事業を行い、結果として歴史地区の保存整備へつながった。従って、協力する人材も建築や文化財の専門家が中心だったが、ホイアン市に建築専門職員がいなかった。3.2.で述べたように、日本側が協力を開始する前にホイアン市で制定された法律や条例の内容を見ても、建造物に特化した内容ではないことから、ベトナム側<sup>注17)</sup>は、ホイアン旧市街を文化遺産として保存整備するに当たり、保存の中心を建造物としていなかった可能性が指摘できる。従って、日本側が建造物保存を中心とした協力を行う中で、ベトナム側に建築専門職員の配置が必要だという認識が生まれた可能性を指摘できる。建築専門職員が着任するまで、日本人専門家が代わりを務めていた。

なお、建築専門職員は2000年に着任後、随時採用され、現在は2、3名の建築専門職員が勤務している。また、建築専門職員は適宜ベトナム国内外でフランス政府や日本の文化財保存関係機関が主催する研修を受ける等の知識や技術の向上を図っており、古都ホイアンの保存整備に資する環境は整っている。

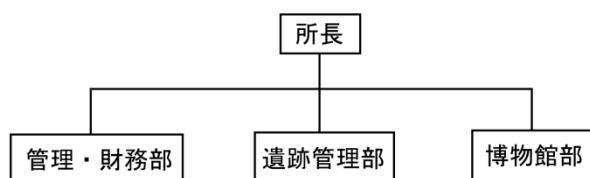
### 3.3.2. 現行の組織

ホイアン史跡管理事務所はホイアン市人民委員会の管轄下に設置された組織であり2011年時点で71名が勤務する<sup>注18)</sup>。所長一人、副所長二人の下、2009年までは管理・財務部といった事務処理を担当する部署と、遺跡管理部、博物館部の3部署だった。2010年に組織が改変され、「古都の遺跡修理管理部」「遺跡修理部」「公文書保管、情報・海外部」が新設された。古都の遺跡修理管理部は、古都ホイアン保存地区内の文化遺産修理において修理、整備工事後の図面の確認を行う。遺跡修理部は、ホイアン市に位置する国及び共同体所有の文化遺産修理を行う。公文書保管及び情報・海外部は、海外とのやり取りや史跡管理事務所が管轄する文化遺産の図面の管理などを行う。

古都ホイアン保存地区内の文化遺産修理図面の確認を行う部署や、国や共同体所有の文化遺産修理を担当する部署を分けたことから、修理、整備工事時の図面確認の重要性が増し、国や共同体の文化遺産修理、整備の比重がホイアン史跡管理事務所において大きくなったことが窺える。海外とのやり取りや公文書の保管部署の増設は、世界遺産リスト記載後10年近くが経過して、海外からの来客や問い合わせが増えていること、図面を含む書類の保管の重要性が増加したことなどを示している。また、古都の遺跡修理管理部、遺跡修理部は、共にホイアン市内の文化遺産の修理、整備や管理に関わる部署であり、業務量が増加したため、古都ホイアンのみを担当する部署を設ける必要性が生まれた。部署の編成に対して日本側が働きかけた様子はなく、ベトナム側が、業務量の増加に応じて部署を増

やした。

#### A. 1986 年から 2009 年までの組織図



#### B. 2010 年に改変した後の組織図

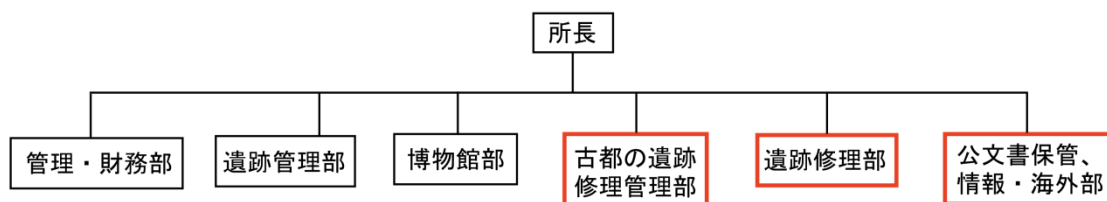


図 3-1 組織の体制変化

(赤枠が 2010 年に新設された部署。ホイアン史跡管理事務所へのインタビュー及び情報提供より作成)

### 3.4. 文化遺産の調査と研究及び報告

歴史地区の保存整備を行う際は、初めに保存整備対象となるものの調査と研究を行う。調査は、当該国や当該地域における歴史的な位置づけを目的とし、調査成果は保存対象を決定するための基礎資料となる。研究は当該地域の位置づけや特徴を把握する。また、調査成果を周知するために報告書を作成する。

歴史地区における保存対象の目録作成は、調査開始当初から行われていた<sup>注 19)</sup>。しかし、保存地区 I の建造物等全ての目録を作成したのは、日本人専門家の協力後である。

次項に古都ホイアンの保存整備事業において、基礎となる学術調査と文化遺産としての評価が定められた過程を記述し、歴史地区の保存整備事業における、文化遺産の調査と研究及び報告の位置づけを明らかにする。

#### 3.4.1. 文化遺産の調査と研究

歴史地区の保存整備で実施する調査と研究は、保存対象の歴史的な評価や位置づけ、保

存対象とするものの決定を目的として行われる。古都ホイアンの調査と研究、そして報告書の作成も同じ目的を持って行われたと考え、本論で対象としている建造物調査に注目しながら調査の体制や成果について記述する。

1983 年にベトナム遺跡・保存管理センター（当時）が現在の保存地区Ⅰ内の建造物等の調査を行い、古建築データを作成した。1990 年にベトナムで開催された国際シンポジウム「海のシルクロードとベトナム」の中で、文化省文化財保存計画修復センター（当時）のホアン・ダオ・キンらがホイアン旧市街における文化財の保存と活用に関する提言の中で 1987 年にクアンナム・ダナン省（当時）が制定した「古都ホイアンの保存活用に関する規制決定」に従い保存地区を設定し、調査した 504 軒の家屋を技術的な状態と保存の可能性<sup>20)</sup> から 4 種類に分類した。既に目録を作成すること、建造物調査には図面作成が必要であることが認識されている。ただし、予算や人員の都合上、国や省、市の指定文化財に対しては調査や保存が行われているが、代わりに企業や個人所有のものに対しては調査が行われたとの記録がない。

ここまですが日本側が協力する前の状況である。

1991 年 12 月に日本の文化庁が視察を行い、1992 年 9 月から昭和女子大学が町並み調査の予備調査を行った。1993 年から本格的に日本側の協力事業が開始され、町並み調査と考古学調査が行われた。1993 年から本格的に開始された町並み調査は、日本とベトナムの大学が共に行った。日本側は昭和女子大学、千葉大学が参加し、ベトナム側はハノイ建築大学のほか、建築系の大学関係者が参加した。1993 年から 1996 年の間に町並み調査と銘打った調査は 6 回行われ、日本側の主導により計 264 軒が調査された。その図面は史跡管理事務所に保管されている。1995 年に日本側は調査の主体をハノイ建築大学に移管することを決め、昭和女子大学国際文化研究所とハノイ建築大学・建設省建築研究センター（当時）が研究協定を締結した。その後 1995 年 6 月に建設省建築研究所、ハノイ建築大学が第一次調査としてグエン・タイ・ホック通りとバク・ダン通りの建造物 40 軒を調査した。1996 年 7 月には第二次調査が、1997 年 7 月には第三次調査が行われ、1998 年、1999 年と調査は続き、合計 171 軒の建造物の調査が行われた。

1993 年から 1999 年までの調査軒数を合計すると 435 軒となり、保存の手引に掲載されている 1146 軒の半分近くがこの時点までに調査されていたことがわかる。なお、調査主体をベトナムの大学に移管した後も、日本側の大学関係者は適宜関わり、調査を通じて歴史的建造物に対する日本の調査手法をベトナム側に伝えていた。

この一連の建造物調査の最後の年である 1997 年に制定された「ホイアンの遺産と景観の管理、保存と開発に関する条例」の中で、保存対象のうち歴史的価値の高いものをさらに分類するため、特級と等級 1 に分け、保存地区を指定し、高さ規制と建造物の等級ごとに保存基準が決められている保存地区Ⅰ、高さ規制と外観及び内装の一部に規制のある保存地区Ⅱに分けた。保存地区Ⅰ内の保存対象物は、全てを特級、等級 1、等級 2、等級 3、等級 4 の 5 段階のいずれかに分類した（図 3-2～3-7）。5 段階に分けたのは日本側の提案であ

る<sup>注21)</sup>。日本側は調査結果に基づき、等級1と分類された建造物をさらに二つに分けることでより重要な建造物を示すことを意図した<sup>注21)</sup>。また、日本側が協力した学術調査が元になり、古都ホイアンの建造物の分類に変化が見られたといえる。

つまり、ベトナム側の歴史地区保存整備の考え方は、保存地区内の全ての保存対象物を5つの等級に分け、地区全体の価値を維持するものである。全ての保存対象物を5種類のうちいずれかの等級に分類すれば、等級ごとに修理、整備基準が決められているためその基準に従い整備される。そして、徐々に、歴史地区全体の調和がとれた様相になる。なお、等級4は歴史的建造物ではないが、修理時に陰陽瓦を葺くことが義務付けられている。つまり、歴史的建造物ではない建造物も、保存地区Iに立地していれば古都ホイアンの構成要素として保存整備の対象にするという、歴史的地区の保存整備に対するベトナム側の考え方が窺える。

調査と研究の内容は歴史地区の保存整備を始めると同時に報告書の作成が開始され、文化遺産として承認される根拠として用いられた。一方で、歴史地区の保存整備事業が進められるうちに、保存対象となる建造物等の分割や敷地の分割により住所が変更になる可能性もあり、データベースの細かい変更が適切な保存整備には必要である。なお、敷地割りに関する規定はみられない。



A. 特級(チャン・フー80  
(貿易陶磁博物館))  
(H23. 3. 23 撮影)



B. 等級1(チャン・フー60  
(飲食店)(H23. 2. 22 撮影)



C. 等級2(グエン・タイ・  
ホック 28 (店舗兼住居)  
(H. 23. 2. 23 撮影)



D. 等級3(バク・ダン 84b  
(店舗兼住居)(H23. 2. 28  
撮影)



E. 等級4(ファン・チャ  
ウ・チン 14 (修理工場兼  
住居)(H23. 8. 8 撮影)



F. 等級4(ファン・チャ  
ウ・チン 97 (住居)  
(H. 23. 2. 25 撮影)

図 3-2 古都ホイアン保存地区 I 内の各等級の実例

### 3.4.2. 報告書及び目録の作成

古都ホイアンの文化遺産を一般に公表することは、保存地区に居住する住民や関係者に対し、文化遺産とされているものへの認識や理解を高め、保存活動に資するものである。また、文化遺産ごとの保存管理方法を同時に公表することにより、住民や関係者は保存活動に貢献できる可能性もある。

古都ホイアン内の文化遺産の情報を得られる文書や冊子は、三点ある。そのうち、二点是一般に公表されており、一点はホイアン市の内部文書である。公開されている文書のうち一点目は、古都ホイアンを世界遺産に申請した際の手続き書類である。この書類の中に、保存地区Ⅰに位置する80軒の寺院や同郷會館等と674軒の家屋が明記されている。ユネスコのホームページ上から閲覧することができる。二点目は2008年にユネスコから発行された「保存の手引き」である。「保存の手引き」には、保存地区Ⅰ内の保存対象物件全てが等級と共に明記されている。全1146軒だが、筆者が調査を行った2010年秋から2011年春にかけて史跡管理事務所で作成された修理申請書類提出家屋表によれば、2008年に出版された「保存の手引き」の目録に掲載されていない家屋がある。目録を作成したのが2008年であるから、その後に敷地や建築物の分割等で建築物に影響はなくとも、戸数が増えた場合がある。例えば、住所表記の中で数字の後にアルファベットが付いているもののうち、「保存の手引き」の巻末に掲載された一覧表に掲載されていないものは、「保存の手引き」発行以後に建築物や敷地を分割されたといえる。こうした建造物の分割や敷地の変更は史跡管理事務所内で全て把握されてない。史跡管理事務所は、申請書類が上がってきってから認識する。建造物が、国所有ではなく個人所有の家屋の場合は、特に家屋の増減を把握することが難しいようだ<sup>22)</sup>。ホイアン市内の都市管理局で管轄しているのだが、古都ホイアンの保存の中心が建造物であることを考えると、史跡管理事務所にも同様の情報が挙げられることが望ましい。三点目は、2000年にホイアン市人民委員会から発行された目録「ホイアンの遺産リスト」<sup>2)</sup>である。この冊子には、ホイアン市内の文化遺産の住所と等級、所有者が示されている。目録の改訂は2011年調査時まで行われていない。また、この目録は史跡管理事務所内の資料であり、保存地区全域に配布されているものではない。1999年に古都ホイアンとしてユネスコに申請され、世界遺産となった後に、史跡管理事務所が保存対象を明確にするために作ったと推察される。

古都ホイアンの文化遺産を一般に公開する意義に、二点目の「保存の手引き」を保存地区内の居住者に配布した成果を挙げられる。「保存の手引き」を保存地区内の居住者に対して配布することは、古都ホイアンの保存整備事業の理由や保存手法を周知につながった。例えば、筆者が調査に訪れた家庭で、「保存の手引き」が保管され、さらに「保存の手引き」に書かれている内容である修理基準や整備基準、家屋を保存する意義や合理性などを説明する住民も見られた。つまり、古都ホイアンの保存整備事業に関する情報を公開することが、古都ホイアンの保存整備事業において、居住者の意識醸成に資するといえる。

### 3.5. 文化遺産保存のための修理技術と材料

#### 3.5.1. 日本の建造物修理技術協力の概要

1990 年に開催された「第 1 回国際シンポジウム『海のシルクロードとベトナム』」<sup>3)</sup>で発表したベトナム文化省文化財保存計画修復センターのホアン・ダオ・キンらによると、ホイアン市の建造物の修理方法として、腐朽した箇所は部材ごと取り換える、あるいは切断するといった手法が採られていた<sup>注 23)</sup>。また、当初材を多く遺すという考え方はなく、通常の建造物と同じ修理をする方針だった。

ベトナム側からの要請を受ける形で、日本側は 1993 年から 2002 年まで「アジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業」の一環として建造物修理技術協力を行った。修理した建造物の図面や修理記録は文化庁文化財部が作成した「旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録」<sup>4)</sup>にまとめられている。

日本側のホイアン旧市街に対する技術協力事業の目的の一つは、ベトナム人専門家や大工が文化遺産としての木造建造物の修理技術や考え方を習得することにあった。そのため、建造物修理技術協力時に、日本人専門家は日本の手法・考え方を示すが、最終的な修理設計の決定はベトナム側で行い、原則として日本から道具・材料を持ち込まないことを基本方針とした。この方針を決めた理由は、ベトナム側に、現地の材料と道具で修理が十分行えることを伝えるためだった<sup>注 24)</sup>。歴史地区の保存整備のように、継続的に修理を行って建造物を維持・管理するに当たっては、地元で材料と道具の調達ができることも、事業が続く要因の一つだと日本側の関係者が考えていたことが窺える。技術面での助言は、修理にあたり部材の全面取り替えをせず、なるべく元の部材を残すこと、修理は部材の痕跡、家屋の歴史に基づくこと、部材を変えた部分を隠すことなどだった。例えば仕口を例にとると、協力時に日本人専門家は、複雑な仕口を教えることもできたが、仕口を用いた修理技法や複雑な仕口を使用して木造建造物を修理していく考え方自体が日本独自のものであり、これを教えることでホイアンの独自性を失う恐れがあることから伝えていない<sup>注 25)</sup>。

いずれの技術を使うにしても、当初材をできるだけ遺すという考えに基づいている。

1993 年に日本人専門家が建造物の修理技術協力を始めた際には、建築専門職員は勤務しておらず、2000 年に初めて着任したことは前章で述べた。ゆえに、日本と同じ方法で修理や整備を行うならば、修理及び整備工事を管理する史跡管理事務所所員に対して協力を行うことが望ましいが、日本人専門家は、現場で施工を担当する人たちに対して修理技術協力を行った。

当時修理技術協力を行った日本人専門家たちは、ホイアンにある材料や道具を用い、現地の技術者と共に建造物修理工事を行うことで、木造建造物の腐朽箇所等を直し、構造の健全性を回復する修理方針を伝えた。表 3-3 は 1993 年から 2004 年まで断続的に累計 53 名が派遣され、家屋の修理過程を共有していることを示したものである。修理技術協力の合間にシンポジウムを開き、協力内容をまとめ、情報を日越間で共有している。既存の報告

書<sup>5)6)7)</sup>から修理方針を抜き出すと表 3-4 のように日本側はホイアンに元々ある大工道具や材料を尊重し、用い使いながら（項目 1、3）、ホイアンの技術者が持っている技術を尊重し（2）、日本側の文化遺産としての建造物の保存に対する考え方を伝えていることがわかる（4）。また、今後の技術移転の際の留意事項や（5、6）ホイアンの修理の体制や新築の意匠などにも言及し（7）、技術移転を中心としながら現地における修理体制の構築といった、保存事業の継続性にも配慮していることがわかる。

表 3-3 日本人専門家の建造物修理技術協力年表

	ワークショップ等の開催	日本人専門家の派遣実績	家屋修理技術協力	日本側の調査(建築、都市に関係するもののみ)
【第二期】保存整備事業立上	1993.1-8 11 第一回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ホイアン町並み保存研究会」(於：東京)	専門家2名派遣 (1993. 1) 専門家2名派遣 (1993. 7)	第一次事前調査 第二次事前調査	1993-1994「ホイアン町並み保存プロジェクト(チャン・フー通り保存踏査・建築・文献・考古他)」 1993. 3 <町並み調査>日本チーム第一次調査
	1993.9-11. 11 第一回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ホイアン町並み保存研究会」(於：東京)	専門家2名派遣 (1993. 9. 9-17) 専門家1名派遣 ((1993. 12. 16-24) 専門家1名派遣 (1993. 12. 20-1994. 1. 20) 専門家1名派遣	チャン・フー80修復事業(橋家解体修理工事技術協力(～1994. 2))	1993. 9<町並み調査>日本チーム第二次調査
	1994 1994. 6 第二回ホイアン町並み保存国際シンポジウムホイアン町並み保存シンポジウム「(ハノイ)	専門家1名派遣 (1994. 1. 18-28) 専門家1名派遣 (1994. 9. 6-15)	チャン・フー80修復事業(橋家復原) チャン・フー121緊急解体修復 チャン・フー142修復事業	1994 「日本人町ホイアンの町並み保存調査」 1994. 3<町並み調査>日本チーム第三次調査(ハノイ建築大学参加) 1994. 4-1998. 3「17世紀の日本人町ホイアンの町並み保存調査」開始
	1995 3. 赤線による歩道張り出し規制 12. 第三回ホイアン町並み保存国際シンポジウム開催(昭和女子大学)	専門家1名派遣 (1995. 1. 20-2. 20) (1995. 1. 14-21) (1995. 2. 16-22) (1995. 2. 16-3. 19) (1995. 2. 25-3. 2) (1995. 3. 15-23)	チャン・フー80修復事業 チャン・フー80修復事業(後家解体修理工事、前家屋根葺き替え、部分修理技術協力)	1995-1998「ホイアン町並み保存プロジェクト(チャン・フー通り家屋修復)」1 1995. 3<町並み調査>日本チーム第五次調査、 1995. 4チャン・フー 80発掘(考古) 1995. 6<町並み調査>ハノイ建築大学チーム第一次調査 1995. 9<町並み保存調査>日本チーム第六次調査(北ベトナム民家調査)
	1996 ホイアン・ソサエティ設立 貿易陶磁博物館開館 チケットシステム開始、ユネスコ視察(世界遺産)	専門家1名派遣 (1996. 1. 25-2. 28) (1996. 1. 17-27) (1996. 2. 23-3. 24) (1996. 3. 21-3. 29) 専門家2名を専門家会議への派遣(1996. 9. 25-10. 1)	チャン・フー80博物館転換整備工事技術協力 チャン・フー121前家復原 チャン・フー142前家半解体修理工事技術協力 チャン・フー142前家解体修理(塗装工事) チャン・フー142修復(残工事)(1996. 8)	1996. 3<町並み調査>日本チーム第七次調査(補足的調査) 1996. 7<町並み調査>ハノイ建築大学チーム第二次調査 1996. 9<町並み調査>福建省民家調査等
	1997 第四回ホイアン町並み国際シンポジウム「ホイアン町並み保存専門家会議」(於：ホイアン) 1997. 5ホイアン市保存条例	専門家3名派遣 専門家3名派遣 (1997. 2. 17-3. 15) 専門家1名派遣(1997. 3. 10-29)	チャン・フー48後家半解体修理工事及び橋家解体修理工事技術協力(1月～3月) グエン・ティ・ミン・カイ6修復設計(1997)	1997. 2<建物ほか修理>日本人墓地周辺発掘 1997. 3<町並み調査>中部ベトナム民家調査等 1997. 7<町並み調査>ハノイ建築大学チーム第三次調査
【第三期】保存事業変容期	1998 「ホイアン町並みプロジェクト(関連人材育成事業)」	専門家3名派遣(1998. 2. 23-3. 2) 専門家1名派遣 (1998. 2. 23-3. 18)(JICA専門家) 専門家1名派遣 (1998. 3. 10-31)(1998. 4. 3-25) (1998. 4. 9-20)	チャン・フー48橋家解体修復事業技術協力、後家中途解体修復事業技術協力(西側基礎防水工事防蟻工事) グエン・ティ・ミン・カイ6全解体修理 1998 来達橋 現況調査	1998-2001「ホイアン町並み保存プロジェクト(グエンタイホック通り家屋修復)」
	1999 1999. 11. 4 第五回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ベトナムにおける文化財保存について」(於：昭和女子大学) 12. 世界文化遺産リストに記載	専門家3名派遣(1999. 3. 8-16) 専門家1名派遣 (1999. 2-9) 専門家1名派遣(1999. 3. 8-27) (1999. 4. 5-12) (1999. 4. 5-25)	グエン・タイ・ホック 113 前家解体修理(1999) (ハノイ修復設計センター、JICA専門家活動) 1999 グエン・タイ・ホック 115 前家解体修理技術協力(東レンガ壁補強工事)(JICA専門家活動) グエン・タイ・ホック41、43修理事業	
	2000 世界遺産「ホイアン展」3 2000. 3. 第六回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「ホイアン文化財修復セミナー」 2000. 3. 21-22 第七回町並み保存国際シンポジウム「ベトナム木造建築文化財日越シンポジウム」(於：ハノイ) 2000. 1013-14 第八回ホイアン町並み保存国際シンポジウム「世界遺産へ向けたベトナムとホイアンの取組」(於：昭和女子大学)	専門家2名派遣 専門家1名派遣(2000. 3. 6-25) (2000. 3. 14-25) (2000. 3. 17-23) (2000. 3. 18-25)	グエン・タイ・ホック115前 面家屋解体修復工事	
【第四期】世界遺産後の保存管理	2001	専門家1名派遣 (2001. 2. 4-10) 専門家1名派遣 (2001. 2. 4-25) 専門家1名派遣 (2001. 2. 22-28) 専門家1名派遣 (2001. 2. 22-3. 15) 専門家1名派遣 (2001. 11. 20-29) 専門家1名派遣 (2001-2002) 専門家1名派遣 (2001. 3. 12-22)	レ・ロイ21(張家)主屋、集会場、霊廟の全解体修復事業技術協力 ファン・チャウ・チン69/1(2001 「JICA開発パートナー事業」) グエン・タイ・ホック117前家解体修理技術協力(西レンガ壁補強工事)(JICA専門家活動)	
	2002	専門家1名派遣 (2002. 5. JICA開発パートナー事業(歴史的建造物の修復事業))		
	2003	専門家2名派遣(2002. 7. 28-8. 4)		
	2003	専門家1名派遣 (2003. 2-5)	2003 グエン・タイ・ホック103 前家、後家全解体修理、橋家新設(JICA専門家活動)	日越国交樹立30周年「ホイアンシンポジウムI」
【第五期】	2004	2004-2006 青年海外協力隊開始		

(第2章表 2-1 から建造物修理協力の日本人専門家派遣のみを抜き出し、必要な情報を補足した。)



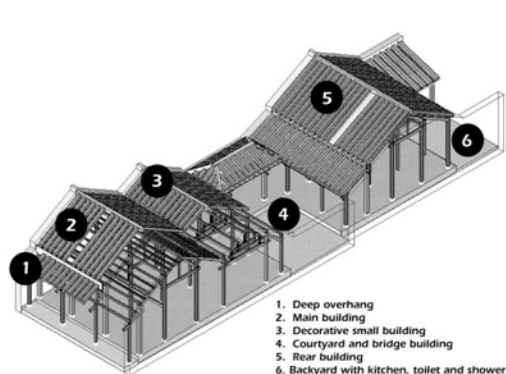
表 3-4 日本人専門家が伝えた建造物修理技術

No.	内容
1	出来る限り旧材を使用する重要性を説く。
2	速やかな技術移転を目指し、機材は持ち込まず、現地の技術者と工務店、現地の技術・道具・材料を用いる。
3	ホイアンに残っている、またはホイアンの技術者が知っている技術のみを使って修理する。
4	調査・修復工事等は技術移転を最優先課題とし、日本側技術者はベトナム側技術者を支援する形をとる。
5	必ずしも日本の保存修復の手法がベトナムで全て妥当とは断定できないが、今ここで何を保存することが重要なのか確認する。 気候風土その他の条件を熟知する地元の意見を尊重しつつ、ホイアンにおける保存修復のあり方を検討する
6	修理後の状態は、必ずしも綺麗とはいえない例もある。この点がホイアンの技術者の理解を得るのに一番苦労した点
7	文化財として貴重な建物(等級3以上)は、修復保存を原則とする。等級4の建物(あるいは空き地の場合)が建て替えを行う場合、新築の建物はどのようなデザインとすべきかが問題となる。そのために個別建物の保存に関するオープンな原則を確立し、その原則が守られるようなシステムを構築することが必要になる。

(参考文献 3、5～7 より該当箇所を抜粋し表を作成)

### 3.5.2. 古都ホイアンの修理方針-古都ホイアンにおける文化遺産の等級と修理基準-

古都ホイアンにおける家屋の典型的な例は、保存の手引きによると図 3-2 となり、道路に面して建つ平入の前家、入母屋造りの屋根を持つ橋家、前家と並行に建つ後家から構成され、前家と後家の間には中庭を、後家の後部には後庭を有する。中庭は噴水や植栽が配され、家屋の中での応接空間であると同時に採光や通風機能を持つ。また、屋根は陰陽瓦（図 3-4 参照）と呼ばれる瓦を葺いた間を、表裏を返した陰陽瓦数枚を重ねる瓦葺きである。



- ①深い庇
- ②前家
- ③付属屋
- ④中庭と橋家
- ⑤後家
- ⑥後庭（台所、便所、風呂）



図 3-4 陰陽瓦  
陰陽瓦を葺いた屋根は古都ホイアンの特徴である。

図 3-3 古都ホイアンの家屋例（「IMPACT」<sup>注 26）</sup> p. 16 より転載。中庭は一段低く、屋根の谷間は傷みやすい。）

図 3-3 で示した典型的な家屋は、間口が狭く細長い敷地の形状で保存地区 I を東西に走る道路に面している家屋で多く見られる。南北に走る道路に面している場合は、前家のみが多い。中には敷地が広く主屋と付属屋から構成される貴族型住宅や、入り口は狭いが内部は広い敷地形状のものなども見られる。

保存地区内の建造物は学術的な調査を経て、5 つの等級に分けられ（図 3-2 参照）、等級ごとに修理及び整備基準が決められた（表 3-5 参照）。特級と等級 1 では歴史的な要素が多く、修理もそれらの価値を保つように行われる。等級 2 では、前家の全ての当初の要素、外観、瓦が保存対象となり、橋家や後家の内部は立地と周辺の建築様式に沿って建て直しができる。ただし、階高を上げたり、増築したりといったことはできない。等級 2 も、橋家と後家の内部は周辺の建築様式に沿って立て直しができるが外部の改変はできず、そのまま維持するか現代的なものにする。等級 3 は、陰陽瓦といくつかの当初の要素、歴史的、文化的なものは維持する。そして、前家は陰陽瓦とファサード、外部の望見できる壁 2 方向と内装を維持する、或いは伝統的な様式にする。他の棟は、屋根を陰陽瓦で葺き、内装は、立地と周辺の建築様式に合わせ、増築や階高を増やす時に保存の手引きに沿う。等級 4 は、歴史的な要素のないもので、修理の際には前家は陰陽瓦で葺き、ファサードと階高は周辺に調和させる。前家以外の棟は、立地や周辺の建築様式を考慮して増築及び階高を増やす。ただし、特級、等級 1、等級 2 を隠してはいけない。

全ての等級に共通している点は、道路に面する棟（前家）を陰陽瓦で葺くことである。また、等級 3、等級 4 に対しては、立地に関わらず伝統的な様式を用いることを奨励している。この手法を本論では「伝統的な外観に整備する」と記述する。並行して、外観を周囲に合わせることも書かれている。ただし、この手法は義務ではない。

表 3-5 家屋の分類と修理基準

	分類基準	修理基準
特別級	全ての当初の要素は一致的に維持される。これらの要素は特別に歴史的、文化的、科学的価値を持つ。	修理は遺産を維持するために必要かつ緊急の場合に見実施される。修理を実施する際には、各棟及び工作物の詳細及び建物全体のオーセンティシティは厳密に確保する。まだ使用できる建物の構成要素は、建物の古い様相や歴史的価値を維持するために使う。これらのオーセンティシティの美しさもまた、担保する。当初部分／当初の材料が新しい部分／新しい材料と交換される場合、家屋の所有者は交換が必要であり、化学的根拠に基づき実施されることを確認する。部分の変更／部材の変更は当初部分／当初部材を壊してはならない。
等級1	全ての当初の要素は一致的に維持される。これらの要素は特別に歴史的、文化的、科学的価値を持つ。	修理は遺産を維持するために必要かつ緊急の場合に見実施される。修理を実施する際には、各棟及び工作物の詳細及び建物全体のオーセンティシティは厳密に確保する。まだ使用できる建物の構成要素は、建物の古い様相や歴史的価値を維持するために使う。これらのオーセンティシティの美しさもまた、担保する。当初部分／当初の材料が新しい部分／新しい材料と交換される場合、家屋の所有者は交換が必要であり、化学的根拠に基づき実施されることを確認する。部分の変更／部材の変更は当初部分／当初部材を壊してはならない。
等級2	前家の全ての当初要素、ファサード、瓦は総合的に維持される。これらの要素は歴史的、文化的、科学的価値を持つ。	前家の当初の要素全ては維持される。別の棟の内部は各家屋の立地と周辺の建築様式により再建される。しかし、屋根は陰陽瓦で葺かれなくてはならない。いずれの拡張もできない。十分に科学的証拠が示されれば、当初の建物に対して有効であり、建物の腐朽した部分を修復するために必要だろう。
等級3	陰陽瓦の屋根といくつかの当初の要素はそのまま持たれなくてはならない。これらの要素は歴史的、文化的、科学的価値をいくらか持つ。	A. 前家：屋根瓦、ファサード、外部の壁二方向（望み出来るもの）と家屋の内装は維持されるか、保存地区Ⅰの伝統的な家屋の様式で修復されなくてはならない。 B. その他の棟：建物の立地と周辺の建築様式によって、内装は改装されるべきであり、古都の規則に従って拡張されるべきである。屋根は陰陽瓦で葺かれなくてはならない。
等級4	これらの家屋はコンクリートのような現代的な部材を用いて建てられている。屋根は鉄筋コンクリート化別の現代的な部材によって葺かれている（陰陽瓦ではない）。	修理、修復の際に、前家の屋根は陰陽瓦で葺かれなくてはならない。ファサードと高さは都市景観と調和させなくてはならない。家屋の別の棟は、その立地、高さ周辺の建築様式によって拡張されるべきである。その方法は、建築的に価値のある他の建造物（特別級と第一級、二級）を隠さないという都市景観に規制されている方法である。
再建もしくは延長されたもの		建物は8mを超えてはいけない（道路面から屋根の上まで）。建物や建物の部分は、負の影響を景観に及ぼしたり、遺産を侵害したりする部品や陳列ですら建設してはいけない。もし、既に建てられているならば、そうしたものは、都市景観に調和させるために解体が改築されるべきである。
等級2、3、4の家屋	築2 Aに隣接した等級2、3、4の後側の2階建てとして拡張もしくは再建が許可されたもの。これらはファン・チャウ・チン通りの偶数番号の家屋、ホアン・ディエウ通りの奇数番地、ファン・ボイ・チャウ通りの偶数番号、レ・ロイ通り（ファン・チャウ・チン通りからチャン・フン・ダオ通りまで延長している）と、グエン・デウイ・ヒエウ通りの家屋を含む。	各家屋の立地に依って、再建された2階建ては、艶が抑えられ、セラミック製の一式（灰色、茶色、深みのある茶色のいずれか）を使用した（舗床）コンクリートの床であるべきだ。景観、外部の建築構造と望み出来る部分（屋根、扉、窓及び窓枠等一式、部材、木の色、壁等）は条例9、細目2、3、4の方針に従わなくてはならない。
完全に劣化した建造物／建造物の一部		特別級、等級1、2といった各遺産の価値によって、再建は条例9の細目に調和させる。遺産的的確な状況により別の建物は、都市景観に調和させた等級1又は2の規則に従い修復されるべきである。
特級、等級1、2の家屋を除く		別の家屋は古都ホイアンの伝統的な建築様式で修復もしくは修理されることが奨励される。

（「古都ホイアンの家屋所有者のための保存の手引き」<sup>注27)</sup> pp. 34-36, pp. 38-41 より引用、翻訳し、表を作成した。）

### 3.5.3. 修理及び整備工事の費用

古都ホイアンの保存地区Ⅰ内の建造物の修理及び整備工事の費用は、等級や立地により25%から75%の間で補助される（表3-6参照）。主要な通りに面している建造物のうち、特級と等級1はホイアン市の補助が60%、主要な通り<sup>注28)</sup>に面していない場合は75%出る。主要な通りに面していない方が補助率を高く設定されている理由は、主要な通りに面していれば商業収入が見込めるが、面していない場合は商業収入が見込みにくいため補助率を上げているためである<sup>注29)</sup>。費用補助を受けられるのは、保存の手引きによると家屋の所有者や家族の経済状況が、修理費用を捻出できる状態ではない場合、特級、等級1、等級2、等級3の歴史的、文化的価値を有する建造物の場合、建造物の劣化の状態、立地といった4点が基準となる。これらに該当しない等級4の場合、もしくは補助金不足で補助が受けられない場合は、所有者自身の費用で修理及び整備工事を行うこともある。

保存地区Ⅰ内では、計 1166 軒の保存対象のうち<sup>注 30)</sup> 特級 41 軒、等級 1 は 98 軒、等級 2 は 232 軒、等級 3 は 345 軒、等級 4 は 450 軒である。従って全体の約 4 割を占める等級 4 に対して公的な整備費用が出にくいといえる。特級、等級 1、等級 2 の修理費用は人工費用が 1 日当たり 33 万 7264 ドン（約 1700 円（平成 23 年時点））、防虫費用が 30 万 5000 ドン/㎡（約 1525 円（平成 23 年時点））、これに材料代が加わる。

修理費用は、1996 年から保存地区Ⅰ内に立地する博物館や見学用家屋の入場券の売り上げから出されている。入場券の売り上げを修理費用に充てる手法も日本人専門家の助言を参考にしたものである。入場券は、保存地区Ⅰ内に立地する博物館 4 か所、家屋 4 か所、同郷會館、その他の 4 種類に分けられた見学場所のうち、各種類から 1 か所ずつ見学できる。有効期間は、入場券にはさみを入れた日付を含めて三日間である。つまり、全ての見学場所を訪れようとした場合、入場券を 4 枚購入しなくてはならない。一枚 9 万ドン（約 450 円、平成 23 年時点）である。入場券売り場は保存地区Ⅰ内に 4 か所あり、史跡管理事務所の職員が販売にあたっている。

なお、保存地区Ⅰ内のチャン・フー通り（Đường Trần Phú）の 57 番には史跡管理事務所の管轄下にあるコンサルタント事務所があり、一般向けに古都ホイアンで行われたワークショップの資料や写真が保管されている。主たる業務は修理家屋の図面作成であり、瓦や床材、窓枠などの材料見本が置かれ、家屋の意匠見本が貼られている。

表 3-6 古都ホイアンにおける修理費用補助の割合

	通り		路地	
等級	政府の支援(%)	遺産の貢献(%)	政府の支援(%)	遺産の貢献(%)
特級	60	40	75	25
等級1, 2	45	55	65	35
等級3, 4	40	60	60	40

（ホイアン史跡管理事務所所員発表資料より転載）

### 3.5.4. 古都ホイアンにおける建造物修理の流れ-修理の許可を得るまで-

古都ホイアンにおける文化遺産の修理<sup>注31)</sup>の流れを、ホイアン史跡管理事務所の資料、筆者のホイアン史跡管理事務所職員へのインタビュー、筆者の現地で見た修理工事、及び保存の手引きから整理する」。

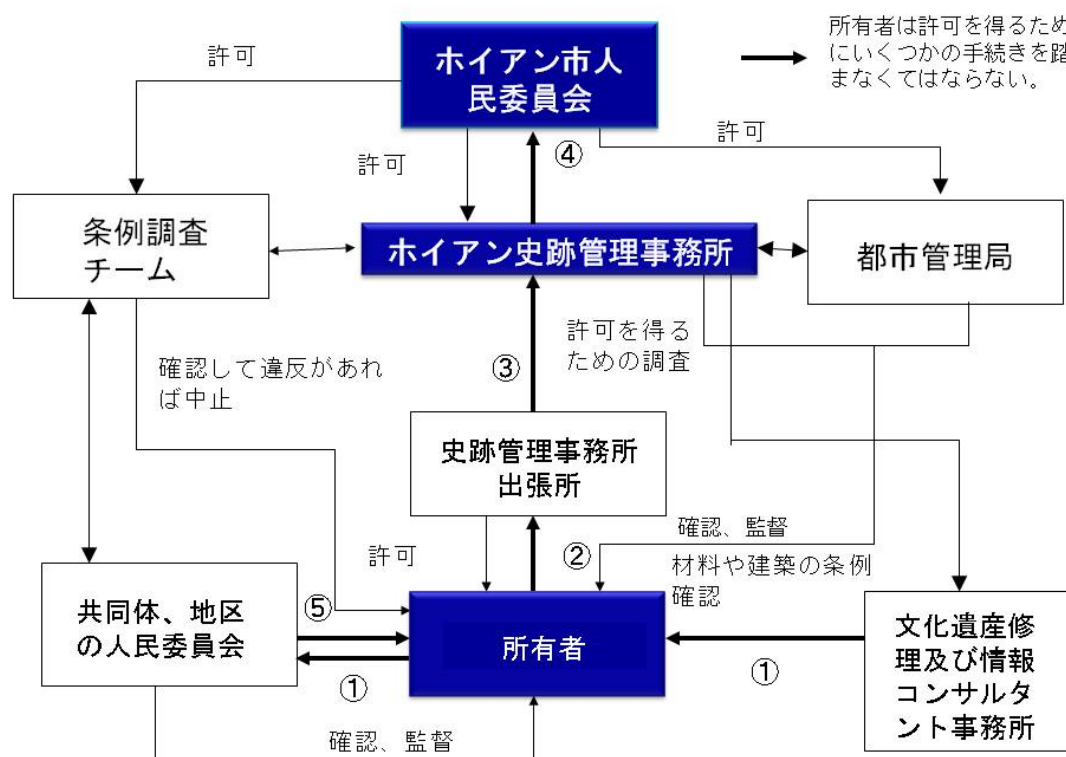


図 3-5 古都ホイアン内の保存修理の流れ

(出典：ホイアン史跡管理事務所” Bao Tan KPC Hoi An de bao cao” より転載)

最初に建造物の所有者は修理申請書類を作成する。定型書類をホイアン史跡管理事務所の出張所から受け取り、自分の名前や住所、修理を希望する内容を書く。そして希望する意匠をコンサルタント会社に作成してもらい書類を整える (①)。それらの書類を、地区の人民委員会<sup>注32)</sup>に提出する。同時に、ホイアン史跡管理事務所の出張所に提出し (②)、そこからホイアン史跡管理事務所に提出される (③)。事務所の中では、条例を確認する部署と意匠や材料を確認する部署に書類が回される。並行して都市管理局にも確認がいく。全てから許可が下りたのちホイアン市人民委員会へ書類が提出される (④)。最終的にはホイアン市人民委員会の許可が必要となる (⑤)。各部署で条例や都市計画、等級ごとの修理規制に沿ったものかが確認される。ただし、等級や修理予算により確認の程度は異なる。ク

アン・ナム省やホイアン市の予算で行われる修理は材料の本数や意匠を細かく確認するが、個人の資金で行われる修理は意匠に着目して修理図面の確認のみを行う<sup>注33)</sup>。旧材をできるだけ多く遺すといった方針の実施や確認は現場で施工に携わる人が行う。

### 3.5.5. 古都ホイアンにおける建造物修理の流れ-建造物修理及び整備工事の流れ-

保存地区内で行われている一般的な修理及び整備工事の流れを説明する<sup>注34)</sup>。

「3.5.4. の古都ホイアンにおける建造物修理の流れ-修理の許可を得るまで-」で記述したように、所有者から出された修理もしくは整備申請書を元に史跡管理事務所は保存地区Ⅰ内の修理もしくは整備工事の管理を行う。なお、ベトナムの行政手続き上、工事認可を得るためには計画の策定が要求されており、一度認可された計画の変更は難しい。

日本国内の場合は、文化財を修理する場合、歴史を継承するという視点から旧材を多く残しながら腐朽した箇所を補修することを基本としているため、解体前と解体後に調査を行い、修理方針を決める。一方、古都ホイアンは等級ごとに修理基準が決められている。修理工事前に修理図面が作成され、その図面には修理方針が書きこまれており、図面に則って修理が進められている。つまり着工前に、解体後の修理方法、再使用材・取替え材の判定、再用材の修理方法が大筋で決まっている。史跡管理事務所の古都の遺跡修理管理部の職員（建築士か建築技師）は、その方針に従っていることを解体後に確認する。

材料の発注は施工会社が行う。その後、遺跡管理部の職員（歴史、文化、考古学、民俗学専門）が、現場で痕跡の確認を行い記録する。ただ、この確認作業が工事内容に影響を及ぼすことはない。つまり、修理計画を作成するコンサルタント会社の判断が古都ホイアンの修理に大きく影響を及ぼしている。

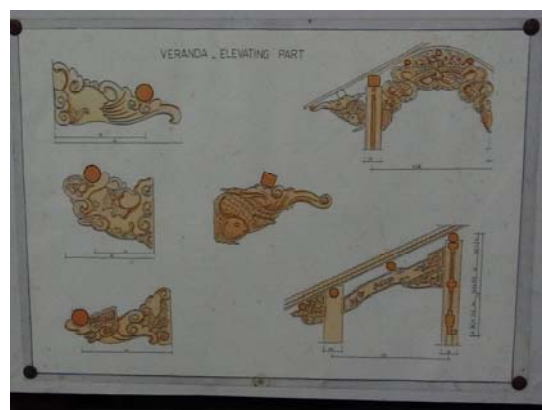
このコンサルタント会社は保存地区Ⅰ内のチャン・フー57 にあり、材料や意匠の見本が置かれている（図 3-6）。保存地区Ⅰ内の家屋の類例や彫刻、建具の類例もあり、これらの見本と住民の要望に基づき修理計画図面が作成される。見本とされている家屋や建具、彫刻は保存地区Ⅰ内の家屋を用いられており、修理計画図面を作成する際は実際に現場へ足を運ぶこともできる。見本では、陰陽瓦を葺き、伝統的な形式に合わせたファサードも作られている。なお、修理工事記録の処理や報告書は平成23年の調査時点では作られていなかった。工事中の新たな発見による修理計画の変更は理解されているが、現在の体制の中では難しい<sup>注35)</sup>。

ベトナム側の課題は、修理記録や整備記録が残されていないため工事中に失われる歴史的な要素が継承されない点を挙げられる。例えば、修理及び整備計画図面上に取り替える部材の位置や取り替える理由が書きこまれるが、実際に修理や整備を行った上での記録は作成されていないため、現場での発見や対処は記録に残されず、継承されない。現状ではこのように記録が残らないまま時間が経過することで、古都ホイアンの真正性が揺らぐ懸

念がある。こうした事態を防ぐためにも、修理及び整備工事の記録作成が必要と考えられる。



**A. 家屋のファサードの事例** コンサルタント事務所内に、家屋の住所と共に示されている (H22. 11. 10 撮影)



**B. 端部の彫刻事例**  
同じくコンサルタント事務所内に家屋の住所と共に示されている。(H22. 11. 10 撮影)



**C. 材料見本 1**  
コンサルタント事務所内に瓦、タイルなどの床材、瓦など材料見本が並べられている。(H22. 11. 10 撮影)



**D. 材料見本 2**  
木材の見本も同じコンサルタント事務所内に並ぶ。(H22. 11. 10 撮影)

図 3-6 コンサルタント事務所で見られる意匠見本と材料見本

日本人専門家による建造物修理の技術協力が行われた後、当初材をできるだけ残す手法や考え方が、現場を通じて継承されている。なお、大工の教育の場合は管理事務所で設けず、現場で覚えるとの談である<sup>注36)</sup>。

現在確認できる継手の手法は、2種類ある。一つはホイアンに元々ある技術を活かし、日本で行われている腐朽箇所のみを除去する考え方を日本人専門家が伝えたもの（図 3-7。以下「追掛け大栓継」<sup>注37)</sup>）である。もう一つはホイアンで家具の修理などに用いられていた技術を建造物修理に用いたもの（図 3-8。以下「十字目違いほぞ」<sup>注37)</sup>）である。加工費用は、日本型は 70 万ドン（約 3500 円（平成 23 年））、「十字目違いほぞ」は 20 万ドン（約 1000 円（平成 23 年））と、「十字目違いほぞ」の方が安く加工できる。「十字目違いほぞ」は、十字に切り込みを入れた材と受け取る材を小口で組み合わせ、糊で接続している。この手法は、材の切り込み部分から割れが生じる場合もある。また、「十字目違いほぞ」の加工技術は日本人専門家の協力が入らない家屋でも見られた。旧材を可能な限り残す考え方が古都ホイアンの修理として浸透していることが窺える。また、「追掛け大栓継」と「十字目違いほぞ」は同じ家屋で併用されている。それぞれの加工技術が用いられている場所に、目立った傾向はないため、修理費用の都合で二つの手法が用いられていると思われる。加工費用が高くても、日本型の手法が用いられている点からは、旧材を出来る限り残す日本人専門家が伝えた文化遺産である木造建造物の修理の考え方がホイアンに根付いていると考えられる。

ほかに、材料の内部が蟻害により空洞化した場合に、木くずとエポキシを入れて再利用する手法がある（図 3-9）。表面に内部の状況が分かるような症状が見られる場合は材料を叩いて音で腐った箇所を確認する。これは、材料を再利用するために用いられている手法である。通常、建物の構造を支える材料の内部が空洞化すると、建物の安全性に問題が生じるため、材料自体を取り替える。しかし、旧材をできるだけ残し再利用するという点から、空洞化した内部に木くずとエポキシを混ぜたものを入れて、材料の表層部分を継承していく手法が取られている。修理工事現場で保管している材料の中に、内側が空洞化したものが置かれていたことから、内側が空洞化した場合でも、日本人専門家が伝えたように、木くずとエポキシを入れて再利用していると言える。また、図 3-10 の通り千切を材料の割れに用いている。これも、旧材を利用するための手法だといえる。従って日本人専門家の木造建造物を文化遺産の修理は、旧材を可能な限り残すという考え方が伝わり、古都ホイアンの修理方法として受け継がれているといえる。

ホイアン市の地理条件に関わる保存管理方法として、水害及び蟻害対策が挙げられる。水害対策のために数年おきに壁面の仕上げ材を塗り直す。また、蟻害対策のために、木材に無色のワニスを塗布する。蟻害対策として当初は保存地区 I を囲むように薬剤を撒いたり、人体に影響のある薬剤を小屋組みに塗布していたりと試行錯誤していたが、調査時は人体に害のない無色透明の薬剤を木材に塗布することで蟻害を防ぐ手法が採用されていた。それでも蟻害に遭った場合は図 3-7 から 3-10 の手法を用いて文化遺産としての保存を行う。



壁の内部に用いられている煉瓦についても、工事の際に古いものを再利用するように心がけている。

つまり、日本人専門家による木造建造物の修理技術協力の際に、旧材を可能な限り残す考え方が伝わり、古都ホイアンの修理方針として用いられているといえる。そして、ホイアン市の木造建造物の保存は、当初の材料を残して行くことと、水害及び蟻害のある自然条件下で材料の耐久性を高めることに着目していることがわかった。当初材を可能な限り残すという日本の文化財建造物の修理方法と共通する部分もあるが、水害及び蟻害対策はホイアン市独自の方法である。また、材料の調達については、保存の手引きにより調達地が指定されている<sup>注38)</sup>。

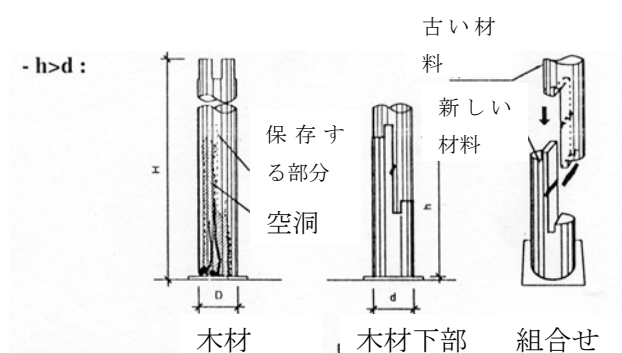


図 3-7 日本人専門家が伝えた継ぎ手「追掛け大栓継」<sup>注37)</sup> (ホイアン史跡管理事務所内部資料より転載<sup>注39)</sup>。)

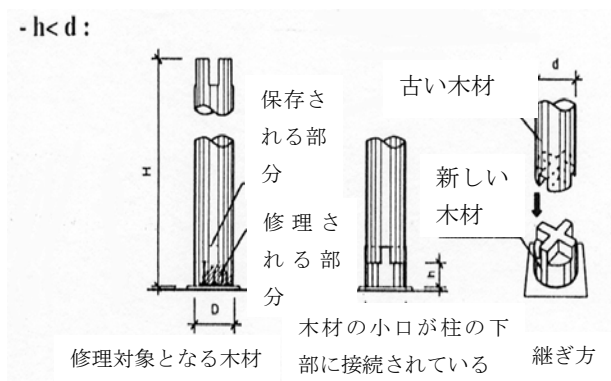


図 3-8 ホイアンに元々あった継ぎ手「十字目違いほぞ」<sup>注37)</sup> (ホイアン史跡管理事務所内部資料より転載<sup>注39)</sup>)

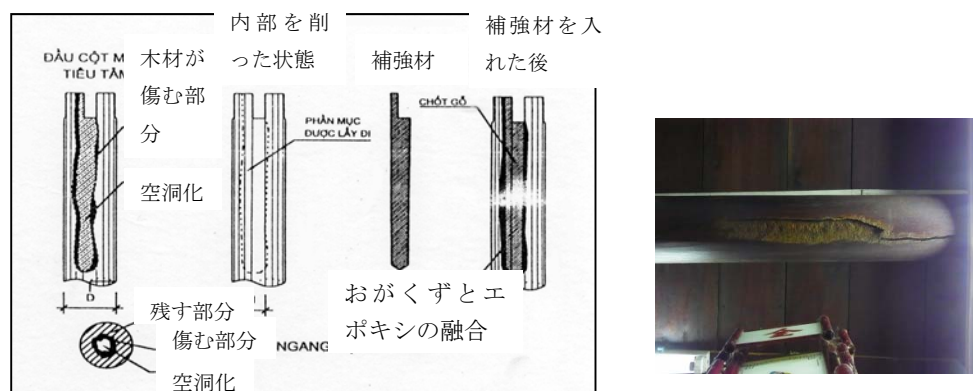


図 3-9 日本人専門家が伝えた修理方法 (ホイアン史跡管理事務所内部資料より転載<sup>注39)</sup>)

右の写真は蟻害の事例

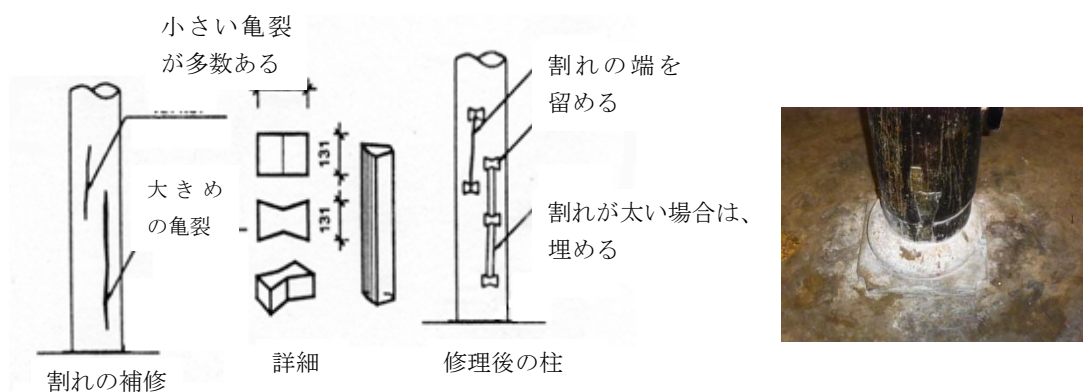


図 3-10 ホイアンに元々あった割れの補修「千切」<sup>注37)</sup> (ホイアン史跡管理事務所資料より転載<sup>注39)</sup>)

### 3.5.6. 古都ホイアンの保存地区Ⅰにおける建造物等修理及び整備工事

#### 全解体工事 (図 3-11)

以下にチャン・フー78の等級2で個人所有の建造物の修理を事例として、筆者による修理工事現場の撮影写真を用いて全解体工事を説明する。

古都ホイアンにおける建造物の修理は、まず所有者がコンサルタント事務所に修理計画図面の作成を依頼し、申請書類を作る。等級が異なってもその手続きは変わらない。等級2の場合は、前家にある歴史的な要素は維持すると手引書にあるため、前家の意匠を中心に確認が行われる。国や公的機関が修理費用を負担する場合は、修理費用の負担割合を示した看板が出るが、今回の現場は個人で修理費用を負担しているため看板が出ていない。

修理工事は、前家の構造材は傷みが激しくほぼ全て取替えられた。陰陽瓦も同様に全て取り替えられていた。雨季のあるホイアンでは傷みやすい部位である。



#### A. 修理前の解体

全て解体されている。この時点で史跡管理事務所の古都の遺跡修理管理部と遺跡管理部から調査が入る<sup>注 40)</sup>。材料は敷地内に置かれ、保管されている。(H23. 2. 23 撮影)



#### B. 工事中の雨避け

工事中は雨を凌ぐために建物はビニルシートやむしろで覆われている。(H23. 11. 13 撮影)



#### C. 木工事を終えた内部

修理は修理計画に沿って行われるため、現場で材料を見て判断することは行われていない<sup>注 40)</sup>。写真には写っていないが既に再用材の継などは終えている。(H23. 4. 5 撮影)



#### D. 柱

柱を先に建て、礎石部分を切って後から入れる(H23. 4. 5 撮影)



#### E. 屋根工事

上から瓦を入れ脇はコテを使ってモルタルで養生している。(H23. 4. 5 撮影)



#### F. 屋根工事終了後

屋根工事が終わると新築のようになる。年月を経ると左右の家屋の様に町並みになじむ色合いになる。(H23. 4. 5 撮影)

図 3-11 全解体工事の様子



### 部分解体工事(図 3-12)

バク・ダン 102 にある等級 1 の建造物の修理事例を例にとり説明する。等級 1 のため、前家、後家、橋家という全ての棟にある歴史的要素は維持する必要がある。全解体工事とほぼ同じで、部分的に解体した時点で史跡管理事務所の古都の遺跡修理管理部と遺跡管理部から調査が入る。工事の過程では、壁や再用できる材料を残していることが分かる。



#### A. 木造部分を解体して組み立てた様子

壁の仕上げがこれからである。史跡管理事務所の材料の確認作業は既に終わり、再利用する材料は、現場近くに保管されている。(H23. 8. 10 撮影)



#### B. 上部に荷揚げ用の枠が残る

材料も表面の色から旧材を多く残していることがわかる。(H23. 8. 10 撮影)



#### C. 木工事現場前に掲げられている看板

上から住所と施工社名、修理費用とその負担者、負担割合が書かれている。(H23. 8. 10 撮影)



#### D. 工事現場外観

工事現場はトタンで覆われている。陰陽瓦を葺く作業中である(H23. 8. 10 撮影)。

図 3-12 部分解体工事の様子

### 更地にして作る場合（図 3-13）

チャン・フー通り 132 番横の路地を入る位置にあるチャン・フー132B にある等級 4 の個人所有の建造物で、整備費用を個人で負担している事例を用いる。周囲は等級 4 及び等級 3 の家屋である。等級 4 の整備基準は、建造物に陰陽瓦を葺くことであり、維持すべき要素等はない。整備手続きは、前出の 2 軒と同様に個人が作成して史跡管理事務所へ提出する。史跡管理事務所は、個人所有で且つ個人の費用で修理する場合は、意匠が整備基準に則っているかを確認するのみとなる。

また、この建造物は隣家と壁を共有していないこともあり、壁も含めた全てを解体し現場を更地にしている。なお、壁も解体した場合は、木工事の前に壁を作ることとなる。壁を作り、木工事を終われば、伝統的なファサードに合わせて意匠を作る点を以外は現代的な建造物の建設の過程と同様である。

以下、写真で説明する。



**A. 更地にした現場**

周囲はトタンで覆われている。  
(チャン・フー132B、H23. 8. 9 撮影)



**B. 壁を最初に作る例**

別の家屋の例だが、壁を最初に作る。切妻の破風の部分も煉瓦が積まれている。(チャン・フー146、H22. 11. 9 撮影)



**C. 壁の作り方**

壁を作る際はこのような煉瓦を積み上げモルタルを塗っていく。(チャン・フー132B、H23. 8. 9)



**D. 高さの確認**

(チャン・フー132B、H23. 8. 9 撮影)

図 3-13 更地にして作る場合

### 材料（図 3-14）

再利用する旧材は、工事現場或いは工事現場の周囲に保管されている<sup>注 41)</sup>。



#### A. 工事現場で保管される材料

工事現場に置かれている煉瓦や木材<sup>注 41)</sup>。現場で保管されていることがわかる（チャン・フー146、H22. 11. 9 撮影）。



#### B. 再利用する材料の保管

工事現場の横に置かれ保管されている場合もある。屋根をかけておらず、傷みや盗難への配慮が必要である（バク・ダン 102、H23. 8. 12 撮影）。



#### C. 次の工程で使用する材料

次の工程で使用するための瓦と礎石が積まれている（チャン・フー78、H23. 4. 5 撮影）。

図 3-14 材料の保管状態

### 番付 (図 3-15)

古都ホイアンでは小さい板材を打ちつけてそこに番号を書く方法と、塗料を用いて材料に直接描きつける方法が用いられている。



A. 番付 1  
グエン・タイ・ホック 33 (博物館、等級 1) に残る番付は板が打ちつけられている (H22. 11. 3 撮影)



B. 番付 2  
チャン・フー 89 (店舗兼住宅、等級 3) に残る番付は直接書き込みをしている (H23. 2. 18 撮影)

図 3-15 番付の事例

### 3. 6. 枠組み全てに係わる人材育成

枠組み全てに係わる人材育成は、各要素と関係するため重複する部分もあるが、改めて整理する。なお、日本の協力以前は、ポーランド人研究者カジミエシュ・クヴィアトコフスキ（ポーランド文化財保護アトリエ（当時））がベトナム側と共に調査を行っていたが、ベトナム側の人材育成に寄与していたかは不明である。

まず、ホイアン旧市街の調査をした人材育成が挙げられる。ホイアン旧市街の全容を把握するために日本側とベトナム側で 1993 年から 1999 年まで建造物合計 264 軒が調査された。1993 年から 1995 年前半までは日本とベトナムの大学関係者の合同調査となり、日本側が主体となって調査が行われた。その後 1995 年後半から調査範囲は資金の都合もありベトナム全土に広がり、調査主体もベトナム側に変更された。また、1995 年後半からベトナム側単独の調査も行われた。日本側の研究者が調査時に作成した図面は、史跡管理事務所に保管され修理時に参考にできる資料とされた。図面は現在も史跡管理事務所において建造物ごとに保管されている。調査成果は報告書にまとめられ、シンポジウムなどで公表された。こうした過程は、今後ベトナムにおいて調査と研究を担当すると思われる、ベトナムの大学関係者にとって、歴史地区の調査と研究手法が移転される機会の一つになり得たと思われる。

次に、日本人専門家による建造物修理技術協力時の人材育成が挙げられる。日本人専門家は、1993 年から 2003 年まで現地の施工会社社員に対する木造建造物の修理技術協力を行った。現場で修理の手法などを話し合う中で施工会社社員は、木造建造物の文化遺産とし



での修理方針と、当初材を可能な限り残す修理方法を学んだ。2000年に史跡管理事務所に建築専門職員が着任した後は、建築専門職員も同様に学んだ。「3.5. 文化遺産保存のための修理技術と材料」でも述べたが、当初材を多く残す手法は古都ホイアンの修理方法の一つとして用いられており<sup>注42)</sup>、歴史地区古都ホイアンの保存整備に資する人材育成に携わった。

そして、史跡管理事務所の職員は、自主的にベトナム国内の研修に参加している。また、日本側が開催するワークショップやシンポジウムに招待されて新しい知識や情報を得ている。ホイアン市の職員が参加する研修やワークショップ、シンポジウムはベトナムが独自に開催するものではなく、日本やフランスといった海外の組織で行われている<sup>注43)</sup>。古都ホイアンの保存整備を担う史跡管理事務所職員の技能向上は、古都ホイアンの保存の継続性や質の向上につながるため重要である。海外の組織によるワークショップやセミナーも多様な情報や技術を得るという点では有益だが、事業の継続性という観点からは、今後はベトナム側も自主的にワークショップやセミナー、シンポジウムを行える環境整備が必要である。

次に日本人専門家による保存地区住民へのワークショップと、青年海外協力隊員による商店主へのワークショップが挙げられる。史跡管理事務所職員に対するシンポジウムとは異なり、保存地区内の建造物を日常的に使用する人たちへの情報提供の場である。二種類のワークショップはいずれも、日本人専門家の建造物修理技術協力が終わった後に行われた。

日本人専門家が行ったワークショップは、表3-7で示すように全三回行われた<sup>注44)</sup>。

第一回目は2001年8月29日から9月13日、第二回目は2002年5月22日から25日、第三回目は2002年9月2日から9日に催された。第一回目は「町づくり方針のまとめと町家のデザイン作成」、第二回目は「前回の提案の再検討」、第三回目は「町づくりの方針作り」が目的とされ、日本人専門家と史跡管理事務所がワークショップの準備や調整を行った。参加者は毎回30名前後いた。ただし、住民の参加者は、史跡管理事務所が選び、また、元々保存活動に関係していたため歴史地区の保存整備の知識があった。従って、日本のように情報を公開する際に、住民側から意見を出したり、意見交換を行ったりといった場ではない<sup>注45)</sup>。

その後日本祭りというイベントの一環で日本人専門家と青年海外協力隊員がベトナム側と共同で2009年8月16日に「ホイアン旧市街における店舗・景観改善ワークショップ」を行った。参加者は全体で15名おり、そのうち店舗経営者<sup>注46)</sup>が7名、残りは史跡管理事務所関係機関の職員だった。このワークショップの議題は、店舗における商品陳列などが景観に及ぼす影響を踏まえた商品陳列方法や内装についてだった。参加した店舗経営者はホイアン市観光商業局に選定されたため自主的な参加とは言い難いが、歴史地区の管理者と生活の場とする店舗経営者の間で議論の場が作られた。



表 3-7 町並み保存ワークショップの概要

	第一回	第二回	第三回
開催日	2001年8月29日から9月13日	2002年5月22日から25日	2002年9月2日から9日
参加人数と内訳	合計27名 ・住民13名 ・史跡管理事務所5名 ・地元建築家1名 ・日本人専門家2名 ・日本人学生6名	合計25名 ・住民12名 ・史跡管理事務所6名 ・ベトナム文化情報省(当時)2名 ・日本人専門家1名 ・日本人学生4名	合計37名 ・住民13名 ・史跡管理事務所8名 ・ハノイ建築大学5名 ・日本人専門家2名 ・日本人学生9名
目的	町づくり方針のまとめと町家のデザイン作成	前回の提案の再検討	トレイルマップの協同作成(小中学生がホイアンの環境について学習する際に手引として使用するものと想定)
内容	・町並みの視点について共通認識を持つ ・町歩きによる診断 ・アンケート ・活動を考える ・町家のデザインを考える	・史跡管理事務所との協同の準備 ・パタンの評価 ・パタンによる診断 ・改装対象とする店舗の調査 ・店作りデザイン	・観光客へのアンケート ・準備 ・写真から町を観察する ・町並みを総合的に評価する ・トレイルマップの設計 ・トレイルマップを使ってみる
成果	町づくりの方針の抽出と提案	町づくりの方針の抽出と提案、並びに町家のデザイン作成	町づくりの方針作り
ワークショップの段階	発見	確認	具体化

(安藤勝洋「ベトナムホイアンにおける住民との協同作業による町並み保存に関する研究」千葉大学修士論文(平成14年度論文梗概集)による。)

また、2012年の8月のホイアン祭りでは青年海外協力隊員(建築)が保存地区内を巡るスタンプラリーを開催し、保存地区内を歩く仕掛けを作ることもあった。ワークショップとは異なるが、保存地区に親しみ、知識を得る試みの一つである。

つまり日本側は、ベトナムで歴史地区保存整備に対して実施可能な範囲を考慮し、技術協力や調査研究を主軸に協力しながら史跡管理事務所の職員や施工会社の社員といった、保存地区の管理運営に直接携わる人材に加え、保存地区内外の住民や商店主、学生のように保存地区を生活或いは仕事の場に行っている人たちに対し、情報提供や意識啓発を試みているといえる。日本側は、日本の歴史地区保存整備において住民や関係者に対する意識啓発の重要性を認識しているため、ベトナムでも同様の試みを行っている。

以上から日本側は、古都ホイアンの保存整備事業において技術や情報提供を行う際に現地の人材と共に作業を行い、人材育成に寄与している。さらに、歴史地区の住民や関係者に対し情報提供を行う機会を作り、専門家以外の保存整備事業への参加を促す試みを行っている。

### 3.7. 考察 歴史地区古都ホイアンの保存整備の特徴

現在、日本側は古都ホイアンの保存整備事業において、ベトナム側の手法や社会体制を尊重しつつ、部外者として協力可能な範囲で協力を行っている。

課題は二つある。まず「文化遺産の調査と研究及び報告」に対応する課題は、新たに保存地区の建造物の調査が行われていないため、情報が更新されていないことである。「文化遺産保存のための技術と材料」に対応する課題は、修理及び整備工事図面は作成されているが工事の報告書が作成されていない点が挙げられる。修理及び整備工事報告書は、管理組織の担当者や施工会社が前回の修理工事や整備工事の内容を知り、建造物の歴史を継承するための判断を行う資料として重要である。個々の建造物を文化遺産として保存することは、歴史地区全体の真正性の担保につながる。よって工事記録の作成は、早急に対応することが望まれる。また、工事時の旧材の保管方法に適切でない場合が見られる。旧材は歴史地区を構成する個々の建造物の真正性を保つために重要であり、工事中の適切な保管が要求される。

表 3-8 歴史地区保存整備の枠組みに対応する事業内容

	現状	課題
文化遺産保存のための法律と条例の制定	・1984年「歴史的文化的遺物及び名所の保護及び利用に関する布告」 ・1997年「ホイアンの遺産と景観の管理、保存と開発に関する規定」	—
文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置	・史跡管理事務所は6部署体制。 ・古都ホイアンの修理を管理する専門の部署がある。 ・建築専門職員の配置 ・修理及び整備工事の体制設立(申請書、写真、図面に修理予定書きこみ)	—
文化遺産の調査と研究及び報告	・ホイアン市の文化遺産目録(史跡管理事務所内部資料) ・保存の手引きにおける、保存対象の一覧と分類の公開	・新たな調査が行われていないため情報が更新されていない。
文化遺産保存のための技術と材料	・修理図面に修理予定書きこみ。 ・一部は工事前の写真を保存	・修理時の材料の保管方法に難有。 ・修理、整備記録作成が不十分。
枠組み全てに係る人材育成	・史跡管理事務所職員の自主的な研修参加	—

## 注

- 1) ベトナムは、地方自治体が存在せず、省や市を管轄する組織も、ベトナム政府の地方組織である。しかし、本論では便宜上、日本の法制度に倣い、ベトナム政府が制定したものは法律、各地域を管轄する組織が制定したものは条例とする。
- 2) 規模は地方自治体に相当するが、全て国の組織である。
- 3) 筆者の関係者へのインタビュー及び大田省一の論文による。
- 4) 1945年に初代国家主席であるホー・チ・ミン主席が独立宣言をした際の国名。
- 5) ベトナムが社会主義国であるため、日本において社会主義国国民の一般的な翻訳である人民とした。
- 6) 筆者訳
- 7) 日本ベトナム研究者会議・編：「海のシルクロードとベトナム-ホイアン国際シンポジウム-（アジア文化叢書・10）」，穂高書店，pp. 390-489, 1993
- 8) 筆者の当時専門家として派遣された人へのインタビューによる。
- 9) 筆者訳
- 10) ホイアン市もベトナム政府の地方組織である。
- 11) 千葉大学福川裕一教授へのインタビューによる（平成21年4月）。
- 12) 昭和女子大学国際文化研究所紀要3，ホイアン町並み調査報告書1999，pp. 167-168による。
- 13) ベトナムの文化財。翻訳は既出の報告書等に従う。
- 14) ベトナムでは各地域を担当するベトナム政府の組織が存在する。本論では、地方組織と記述する。
- 15) 1998年まではホイアン旧市街とし、1999年に世界遺産となつてからは古都ホイアンとする。
- 16) ホイアン旧市街保存整備事業に参加した日本側の関係組織及び関係者を指す。具体的には、文化庁、地方自治体や研究機関の文化財担当者、外務省、独立行政法人国際協力機構(JICA)、JICAから派遣される専門家、ボランティアとして派遣される青年海外協力隊、シニアボランティア、日本建築セミナー及び日本建築セミナーに所属する一級建築士、昭和女子大学、千葉大学、首都大学の研究者及び学生。
- 17) ベトナム政府として、文化情報省（当時）、ホイアン史跡管理事務所、ホイアン市の工務店、ハノイの建築系大学の研究者
- 18) 筆者のホイアン史跡管理事務所へのインタビューによる。
- 19) 1990年にベトナム中部の都市ダナンで開催された「海のシルクロードとベトナム」の記録で確認できる。
- 20) 日本ベトナム研究者会議「海のシルクロードとベトナム-ホイアン国際シンポジウム」（アジア文化叢書）
- 21) 筆者の関係者へのインタビューによる。
- 22) 筆者の管理事務所所員への聞き取りによる。
- 23) 筆者の関係者へのインタビューによる（平成23年7月）。なお、昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 5「ベトナム伝統住居の保存と再生」p. 75にも同様の内容が書かれている。
- 24) 筆者の関係者へのインタビューや報告書等による。

- 25) 筆者の関係者へのインタビューや報告書等による。
- 26) IMPACT はユネスコから出版された世界遺産の地区の概要を記した冊子である。
- 27) UNESCO “Heritage Homeowner’ s Preservation Manual-Hoi An World Heritage Site, Vietnam-” 2008 を翻訳したもの。本論では「保存の手引き」とする。
- 28) 保存地区 I の名称が付けられている通りを指す。
- 29) 平成 23 年 8 月に行われたワークショップより。
- 30) 保存の手引き pp. 121-127 に掲載されている目録に、筆者が修理済み家屋を調査した際に用いた修理申請家屋リスト（ホイアン史跡管理事務所作成）に書かれていたものを合わせた数字。等級は筆者がホイアン史跡管理事務所へ聞き取りをして確認した（平成 23 年 4 月）。
- 31) 文化遺産としての修理と、歴史地区の様相に合わせた整備の二通りがあるが、便宜上「修理」と記述する。
- 32) 筆者のホイアン史跡管理事務所職員への聞き取りによる（平成 23 年 2 月）。
- 33) 筆者のホイアン史跡管理事務所職員への聞き取りによる（平成 23 年 2 月）。
- 34) 筆者がホイアン史跡管理事務所に勤務していた青年海外協力隊員（建築）の高田弥生さん、職員の Tu Tuoc 氏に聞き取りをしたもの（平成 23 年 2 月、平成 23 年 8 月）。
- 35) 筆者のホイアン史跡管理事務所職員への聞き取りによる（平成 23 年 2 月）。
- 36) ホイアンで家屋修理を請け負う施工会社社長への筆者の聞き取りによる（平成 23 年 4 月）
- 37) 日本の木造建造物の継手の名称に準じて、本論でのみ用いる。ただし、あくまでも、ホイアン史跡管理事務所で作成された図面や現地調査に基づくものであり、日本の手法と全く同様であることを示すものではない。
- 38) ユネスコが 2008 年に出版した保存の手引きによると、古都ホイアンで用いる材料の生産地は次の通り指定されている。煉瓦はタイン・ハー村（窯業の村）もしくは近隣の村で生産されたもの。瓦は、タイン・ハー村或いは近隣の村で生産されたもの。石灰は、主にタイン・ハー村で生産されたもの。カム・チャウ地区で生産されたものも含む。木材は、クアン・ナム省の西部で採れるもの。石材は、以前は、クエ・ソン、ザイ・ロック、ズイ・スエン産のものだった。近年では、クアン・ガイ省、クアン・ナム省、タイン・ホア省で生産されたものを用いている。
- 39) 図中のベトナム語は筆者が日本語に翻訳し書きこんだ。
- 40) ホイアン史跡管理事務所職員及び青年海外協力隊員（建築）高田弥生さんに筆者がインタビューしたもの。
- 41) 調査中に見学できた修理現場数か所から。
- 42) ただし、日本で用いられているように、建物の場所により使い分けているのではなく、費用の面から使い分けていると思われる。
- 43) ホイアン史跡管理事務所職員へのインタビューによる。
- 44) 安藤勝洋「ベトナムホイアンにおける住民との協同作業による町並み保存に関する研究」千葉大学修士論文（平成 14 年度論文梗概集）による。インタビューは、福川裕一教授（千葉大学）、安藤勝洋氏（JICA 専門家）双方に行った。

- 45) 実際にワークショップを開催した日本人専門家へのインタビューによる。
- 46) 観光客を対象とする店舗
- 47) 毎年夏にホイアンで行われているイベントの一つである。青年海外協力隊員も、活動内容に関わるワークショップなどを行うことが多い。

#### 参考文献

1. UNESCO: “Heritage Homeowner’ s Preservation Manual-Hoi An World Heritage Site, Vietnam-” (ホイアンの文化遺産の家屋所有者のための保存の手引き), 131 頁, 2008
2. ホイアン市人民委員会、ホイアン史跡管理事務所: “Muc Luc di tich Hoi An”, ホイアン史跡管理事務所, 120 頁, 2000,
3. 昭和女子大学国際文化研究所: 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 3 ベトナム・ホイアンの町並みと建築」, 昭和女子大学, pp. 65-83, 1996
4. 文化庁文化財部: 「旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録・ベトナム社会主義共和国における協力事業-アジア・太平洋地域文化財建造物 保存協力事業-」, 76 頁, 平成 15 年
5. 昭和女子大学国際文化研究所: 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 1 ベトナム・ホイアン特集」 pp. 1-103, 昭和女子大学, 1994
6. 昭和女子大学国際文化研究所: 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 3 ベトナム・ホイアンの町並みと建築」, pp. 1-30, 昭和女子大学, 1996
7. 昭和女子大学国際文化研究所: 「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 5 ベトナム伝統住居の保存と再生」, pp. 54-56, pp. 61-64, pp. 75-79, pp. 88-102, 昭和女子大学, 1999

## 第四章 歴史地区の保存整備 2

### -修理、整備内容から見る保存整備事業の特徴-

#### 4.1. はじめに

本章では、歴史地区古都ホイアンの保存整備の枠組みのうち、文化遺産保存の成果である修理及び整備内容を調査対象とし、調査結果から得られた特徴と課題を考察する。ホイアン史跡管理事務所（以下、史跡管理事務所）の歴史的地区保存整備の手法を明らかにし、日本人専門家の協力が、古都ホイアンの保存整備事業においてどのように位置づけられているのかを、古都ホイアンの建造物の修理と整備の内容から明らかにする。

古都ホイアンでは、日本人専門家により 1993 年から 2003 年まで木造家屋修理技術協力が行われた。修理と整備の内容を調査する対象は、古都ホイアンの保存地区 I 内にある建造物のうち、1997 年から 2010 年に修理、整備申請のあった 196 件（表 4-1）である。

前章で示した通り史跡管理事務所では修理記録や整備記録が作成されていないため、調査手法は、基本的に修理・整備済み建造物の修理及び整備状況の目視調査、史跡管理事務所へのインタビューとした。必要に応じて修理、整備前後の図面を用いた。なお、「主要な通り」は名前の付けられた通り、「路地」は街区内の生活道路を意味する。各通りの位置と名称を表 4-3 及び図 4-2 で示す。また、第一章で示した通り現地に建造物修理への技術協力を行うために滞在した文化庁の調査官や各都道府県の文化財担当者、日本建築士セミナーの会員を「日本人専門家」とする。

## 4.2. 修理及び整備済み建造物事例による修理と整備の傾向分析

古都ホイアンの保存地区Ⅰでは等級によって修理及び整備基準が決められているが、修理計画は着工前に作成され、現場では計画通りに施工することになっている。つまり、工事中の発見により修理や整備の方針や内容が変わることはなく、工事着工前の修理もしくは整備計画図面が修理と整備内容を決めている点が特徴であり、歴史的地区の保存整備手法としては改善の余地がある。日本の歴史地区における修理工事は、個々の建造物の歴史や修理の痕跡を調べた上で、当該の建造物の修理方針や修理方法を決めることが一般的であり、古都ホイアンにおける修理及び整備工事は日本と異なる流れである。

第三章で述べたように保存地区内の全ての建造物は特級、等級1、等級2、等級3、等級4の5種類に分類され、等級が高ければ歴史的要素が多く、等級が低い場合は保存される歴史的要素が少ないか、全くない。特級及び等級1、等級2は、保存すべき要素が多く残る。修理において、特級と等級1を担当する施工会社は文化遺産としての修理の経験を積んだ会社が担当しているため、修理内容は一定の水準が保たれていると考えられる<sup>注1)</sup>。しかし、等級3及び等級4は保存すべき要素が少ないか全くなく、伝統的な様式に整備することが奨励されている<sup>注2)</sup>ため、家屋によって整備内容に差異があると考えられる。保存地区Ⅰ内の等級の割合を見ると、表4-2の通り等級3及び等級4は、全体の7割弱を占めるため、これらの管理方法が古都ホイアンの文化遺産としての評価に影響する。

日本人専門家は、家屋修理技術協力時に等級3以上を対象として歴史的な木造建造物等の修理方針を伝え、等級4については、ホイアン市で方針を定めて行くことが必要であるとしている。つまり、等級4について整備傾向を把握することは、ホイアン市による古都ホイアンの文化遺産としての保存管理方法を具体的に明示することができる。

表 4-1 修理及び整備済み建造物の立地別等級内訳（196 件）

	特級	等級1	等級2	等級3	等級4	合計
主要な通り	7	31	55	48	27	168
路地	1	4	3	10	10	28
合計	8	35	58	58	38	196

（調査データより作成）

表 4-2 全体の等級の割合

等級	特級	等級1	等級2	等級3	等級4	合計
軒数	41	98	232	345	450	1166
割合	4%	8%	20%	30%	39%	100%

（調査データ及び史跡管理事務所への聞き取りより作成）

#### 4.2.1. 調査対象

調査対象は、古都ホイアンの保存地区Ⅰ内に立地し 1997 年から 2010 年までの間にホイアン史跡管理事務所に修理及び整備申請が行われた建造物等 196 件である。修理及び整備件数の推移を図 4-1 に示す。なお、同じ家屋を別の年に修理した場合はそれぞれその年に 1 件として数えている。2001 年が最も多く、それ以降は 10 件から 25 件の間を推移している。2010 年のみ 10 件に満たないが、これは、筆者が史跡管理事務所から修理及び整備された建造物等のデータを取得した際に、データ整備が途中であったためだと考えられる。

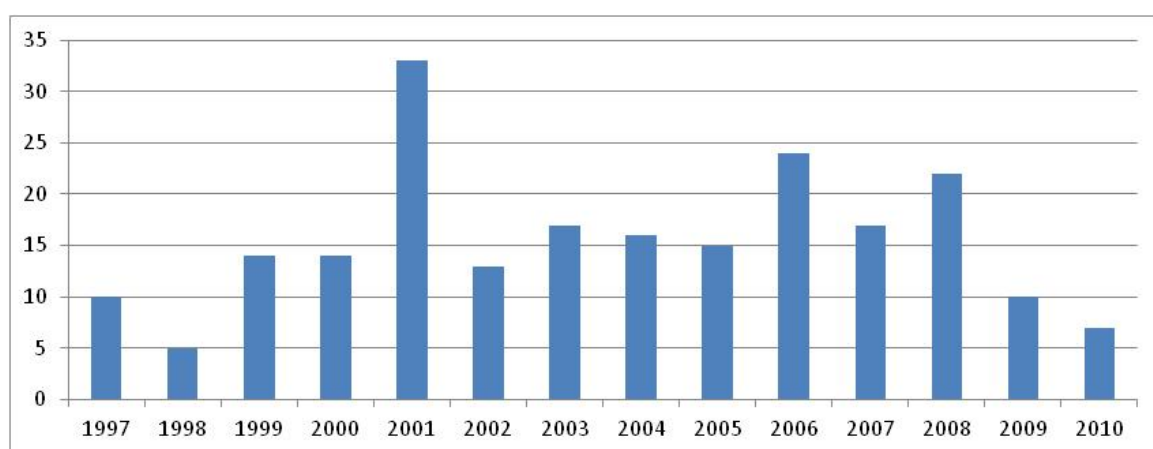


図 4-1 修理申請建造物の推移（ホイアン史跡管理事務所の修理申請家屋名簿より筆者作成）

表 4-3 は保存地区Ⅰ内の道路の名称で、図 4-2 の道路名称に付けた番号と対応している。1 番のバク・ダン通りは保存地区Ⅰの最南部を東西に走る川沿いの道である。川沿いのため、通りの北側にのみ家屋が建ち並ぶ。2 番のホアン・ディエウ通りは保存地区Ⅰの東側を南北に走る通りで、この通りを境にして東側には古都ホイアンのフレンチコロニア様式の看板建築が並ぶファン・ボイ・チャウ通りがある。3 番のホア・ヴァン・トゥ通りは保存地区Ⅰの南側にあり、川沿いのバク・ダン通りからグエン・タイ・ホック通りを抜けて、チャン・フー通りまでをつないでいる。4 番のレ・ロイ通りは保存地区Ⅰの中央を南から北まで突き抜けている。5 番のグエン・フエ通りは、保存地区Ⅰの東部に位置する市場の北部から南へ上がる短い通りである。6 番のグエン・タイ・ホック通りは、来遠橋から東側の保存地区Ⅰのうち、南側を東西に走る観光の中心となっている通りの一つである。7 番のグエ・ティ・ミン・カイ通りは保存地区Ⅰの来遠橋より西側に唯一ある東西方向に走る通りである。8 番のファン・チャウ・チン通りは保存地区Ⅰ最東部に東西に走る通りで、古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築が複数位置する。9 番のファン・ボイ・チャウ通りは、保存地区Ⅰの最北に位置する東西方向の通りであり、意匠見本に倣った外観の家屋が多く見



られる点に特徴がある。10 番のティエウ・ラ通りは保存地区Ⅰ内唯一の市場が立地し、保存地区Ⅰ内で最も幅の広い通りである。11 番のチャン・フー通りは来遠橋より東側の保存地区Ⅰ内を東西方向に走る、観光の中心となる通りの一つである。

図 4-3 は調査対象建造物等の分布になる。対象となる建造物は保存地区Ⅰ全体に広がっているが、保存地区Ⅰを、ホアン・ディエウ通りと来遠橋で区切ると、中央の南側に最も多く調査対象家屋が立地している。つまり、修理及び整備された家屋等が保存地区Ⅰの中央南側に多い。これは、保存地区Ⅰの南側に位置するトゥ・ボン河が毎年 9 月から 10 月ごろに訪れる台風で増水し、河が保存地区Ⅰを浸水するためである。浸水は、雨量が多ければチャン・フー通りまで及ぶ。

表 4-3 主要な通りの略称

No.	略称	日本語	ベトナム語
1	BD	バック・ダン	Bạch Đằng
2	HD	ホアン・ディエウ	Hoàng Diệu
3	HVT	ホアン・ヴァン・トゥ	Hoàng Văn Thụ
4	LL	レ・ロイ	Lê Lợi
5	NH	グエン・フエ	Nguyễn Huệ
6	NTH	グエン・タイ・ホック	Nguyễn Thái Học
7	NTM	グエン・ティ・ミン・カイ	Nguyễn Thị Minh Khai
8	PBC	ファン・ボイ・チャウ	Phan Bội Châu
9	PCT	ファン・チャウ・チン	Phan Châu Trinh
10	TL	ティエウ・ラ（チャン・クイ・カップ）	Tiểu La(Trần Quý Cáp)
11	TP	チャン・フー	Trần Phú

(No. 1, 4, 7, 9, 11 は路地も調査対象である。略称は、表 4-19 から表 4-22 の住所に用いた)



図 4-2 調査対象の等級別分布

(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

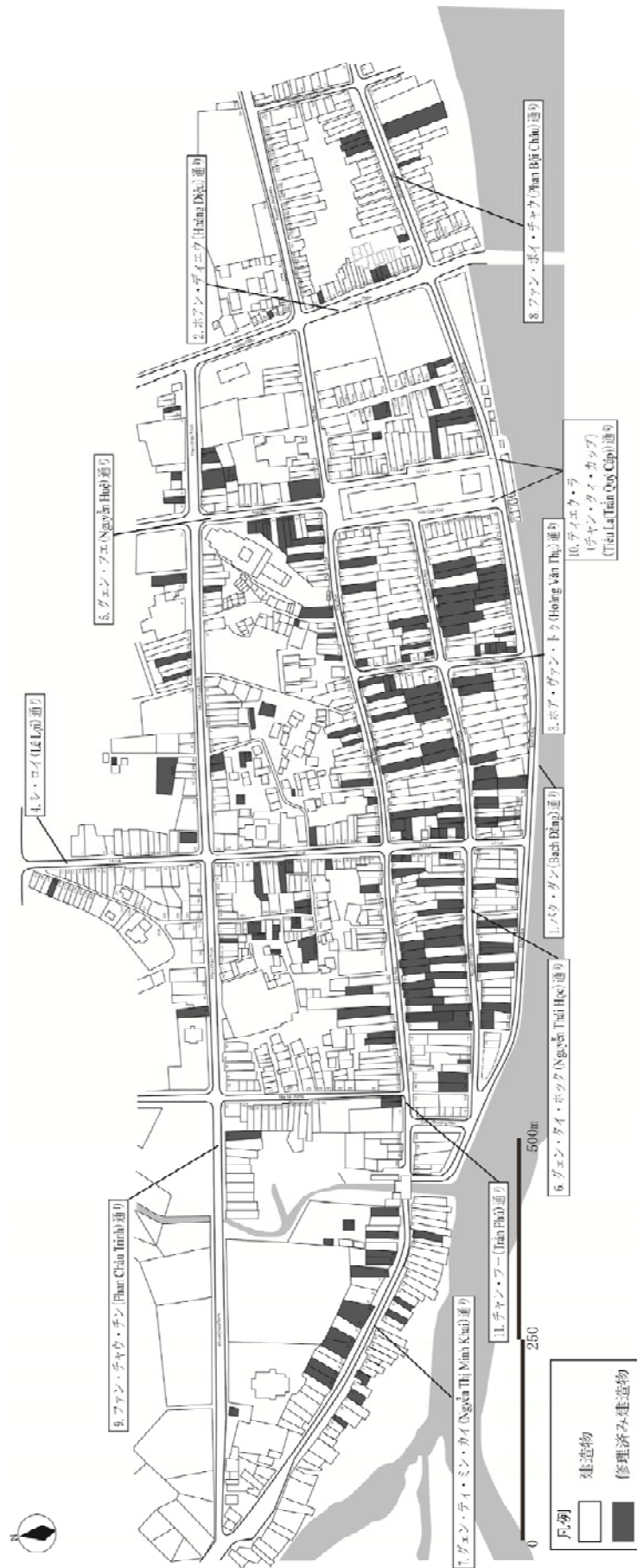


図 4-3 調査対象の修理済み建造物の分布  
(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

#### 4.2.2. 調査手法

特級及び等級 1、等級 4 の一部<sup>注 2)</sup> は史跡管理事務所に提出された修理及び整備計画図面を参照しながら目視調査と写真撮影を行い、必要に応じて図面を作成し、木造建造物の修理及び整備がどのように行われているかを調査した。等級 2、等級 3 については修理済み家屋の修理箇所を目視調査し、同じく修理箇所の写真撮影と、修理内容を把握した。目視調査は図 3-8「古都ホイアンの家屋例」で示した古都ホイアンの伝統的家屋を基準に調査対象とした建造物の伝統的な要素の有無（扉や窓の材料と意匠、構造材の材料と見せ方形、壁の材料と位置、梁の材料と端部の意匠、棟の構成、屋根の材料、陰陽瓦を用いている棟）や整備状況を調査した。なお、番地に枝番号が付いている場合は、路地に面していることを示す。表記は、日本語で示した後、ベトナム語でも示した。住所の前の括弧書きの番号は、資料編に合わせている。

#### 4.2.3. 調査結果の分析方法

古都ホイアンでは、建造物の所有者が修理計画図面をコンサルタント会社等に依頼して作成するため、所有者の意向が修理内容に大きく関わり、かつ公的組織か個人かといった修理費用負担者の違いにより史跡管理事務所の修理計画図面の確認の程度が異なる。例えば、公的機関が整備費用を負担する場合は、史跡管理事務所で図面と材料、意匠の整合性を確認する。一方で、整備費用負担者が個人の場合は、整備後の意匠が整備基準に沿っているかどうかを確認するのみである。つまり、個人が整備費用を負担する場合史跡管理事務所は、所有者の意向に沿う判断を行う仕組みである。

また、修理・整備基準で「周囲の建物と合わせる」とある。特級、等級 1、等級 2、等級 3 の修理・整備費用は、公的機関から立地に応じて補助される（第三章表 3-6「古都ホイアンにおける修理補助の割合」）。従って、本項では歴史的木造建造物の修理及び整備に影響を与える要因として等級以外に建造物の立地及び所有者、修理及び整備費用負担者を想定し、修理及び整備内容を分類した上で分析を行う。分析対象は、1997 年から 2010 年までに史跡管理事務所に修理及び整備申請のあった特級及び等級 1 と等級 3、等級 4 の建造物とした。等級 2 は、文化遺産としての評価や修理時の歴史的要素の維持手法について中間にあるため分析対象から外した。

まず、修理及び整備を分析するための前提条件としての分類の方法を述べる。建造物の立地は保存地区 I 内の主要な通り 11 本と路地 5 本（表 4-3 参照）に分けた。主要な通りは東西に 6 本、南北に 5 本あり、通りごとに立地する建造物の等級の割合が異なる。次に、建造物の所有者と修理及び整備費用負担者の組み合わせにより修理及び整備対象を表 4-4 の通り 6 種類に分けた。全公型は、国が所有し、公的な組織が修理及び整備費用を負担す

る、国個型は、国が所有しているが修理もしくは整備費用を個人が負担する、全個型は、全公型の逆で、所有者が個人であり、修理もしくは整備費用も個人が負担している、個公型は、費用個型の逆で個人が所有し、公的な組織が修理費用を負担する、共公型は、地区の自治会が所有し、公的な組織が修理費用を負担する、共個型は、地区の自治会が所有し修理もしくは整備費用を個人が負担するものとした。所有者が 3 通り、立地が 2 通り、修理費用負担者が 3 通りあり、組合せと古都ホイアンで実際に行われている修理、整備の現状から 6 通りの組合せとなる（表 4-4）。例えば、全公型の立地を見ると、表 4-3 で示した名前の付いた 11 本の通りに面している。路地に面したものがある場合は、枝番号を付けた。以下、他の分類も同様に、所有者、修理費用負担者、立地によって 6 通りに分けた。

表 4-4 分類項目と内容の分け方

名称	所有者			修理費用	
	国	共同体	個人	公的組織	個人
①全公型	○			○	
②国個型	○				○
③全個型			○		○
④個公型			○	○	
⑤共公型		○		○	
⑥共個型		○			○

（所有者の種類、修理費用負担者の種類はいずれもホイアン史跡管理事務所の資料を参照した。古都ホイアンには借家もあるが、修理は所有者の意向によるため全て表に則った。）

この分類に基づいて特級と等級 1、そして等級 3 と等級 4 の修理及び整備内容を分析した。特級と等級 1 は、修理基準や修理方法を確認するため等級と立地に基づいて分析した。等級 3 と等級 4 は整備の傾向を全体的に把握するため、整備後の外観と立地に基づいて分析した。

#### 4.2.4 特級、等級1の建造物の修理

##### (1) 所有及び費用負担と土地

特級と等級1の修理内容は、修理基準に沿っているかに着目した。理由として特級と等級1の修理基準は、周囲の環境に合わせるのではなく、歴史的要素が多いという対象の現状を可能な限り維持するように修理することを心がけるためである。従って、対象の修理内容を把握することにより、史跡管理事務所の方針がわかると考えられる。その方針を分析する前提として、表4-4と4-5で示した所有者、修理費用負担者、立地を用いて各事例を分類した。調査対象である修理済み建造物196件<sup>注3)</sup>中43件が該当する。

所有者、修理費用負担者、立地で特級と等級1の修理事例を見ると表4-5となる。①全公型が20件と最も多く、全て主要な通りに面している。次に多いのが③全個型の13件である。そのうち12件が通りに、1件が路地に立地している。②国個型が1件のみで、このタイプはホイアン市においても稀であるといえる。公的機関から修理費用が補助されるまで待たず、補助がなくとも修理が可能であったと考えられる。④個公型は個人所有で所有する建造物は等級が高く修理することが望ましいものの、修理費用が出せない経済状況のため公的機関が補助を出した、或いは、公的機関（共産党）とのつながりが強い所有者であると推察される。⑤共公型は祠堂のような公的な性質を持つ建造物であるがゆえに、公的機関が補助を出したと思われる。⑥共個型は、所有する組織に充分修理費用が負担できる状況だったと思われる。なお、修理費用を負担している個人は所有者である。

次に、古都ホイアンの特級及び等級1の修理内容を説明するため、日本人専門家の修理技術協力が終わった後の修理事例を各分類から1もしくは2事例取り上げる。取上げる事例は、①全公型はゲン・タイ・ホック81、②国個型はゲン・ティ・ミン・カイ16、③全個型は、チャン・フー77、路地に面しているものをレ・ロイ10/56、④個公型はホア・ヴァン・トゥ17、⑤共公型はチャン・フー84、⑥共個型は路地に面しているゲン・ティ・ミン・カイ2/8とした。なお、ベトナムでは住所を通常、通り名と番地で示すため、本論でもこれに倣い、事例は通り名と番地で示した。

表4-5で示した分類を地図にしたものが図4-4である。1997年から2010年までの修理は主に、保存地区Iの中央に位置することがわかる。

表4-5 特級、等級1の分類と件数及び事例

名称	特級		等級1		立地		事例
	通り (件)	路地 (件)	通り (件)	路地 (件)	通り (件)	路地 (件)	
①全公型	3	0	17	0	20	0	【事例1】ゲン・タイ・ホック81(等級1)
②国個型	0	0	1	0	1	0	【事例2】ゲン・ティ・ミン・カイ16(特級)
③全個型	3	0	9	1	12	1	【事例3】チャン・フー77(特級) 【事例4】レ・ロイ10/56(路地、等級1)
④個公型	1	0	3	2	4	2	【事例5】ホア・ヴァン・トゥ17(等級1)
⑤共公型	0	0	1	1	1	1	【事例6】チャン・フー84(等級1)
⑥共個型	0	1	0	0	0	1	【事例7】ゲン・ティ・ミン・カイ2/8(路地、特級)
合計	7	1	31	4	38	5	



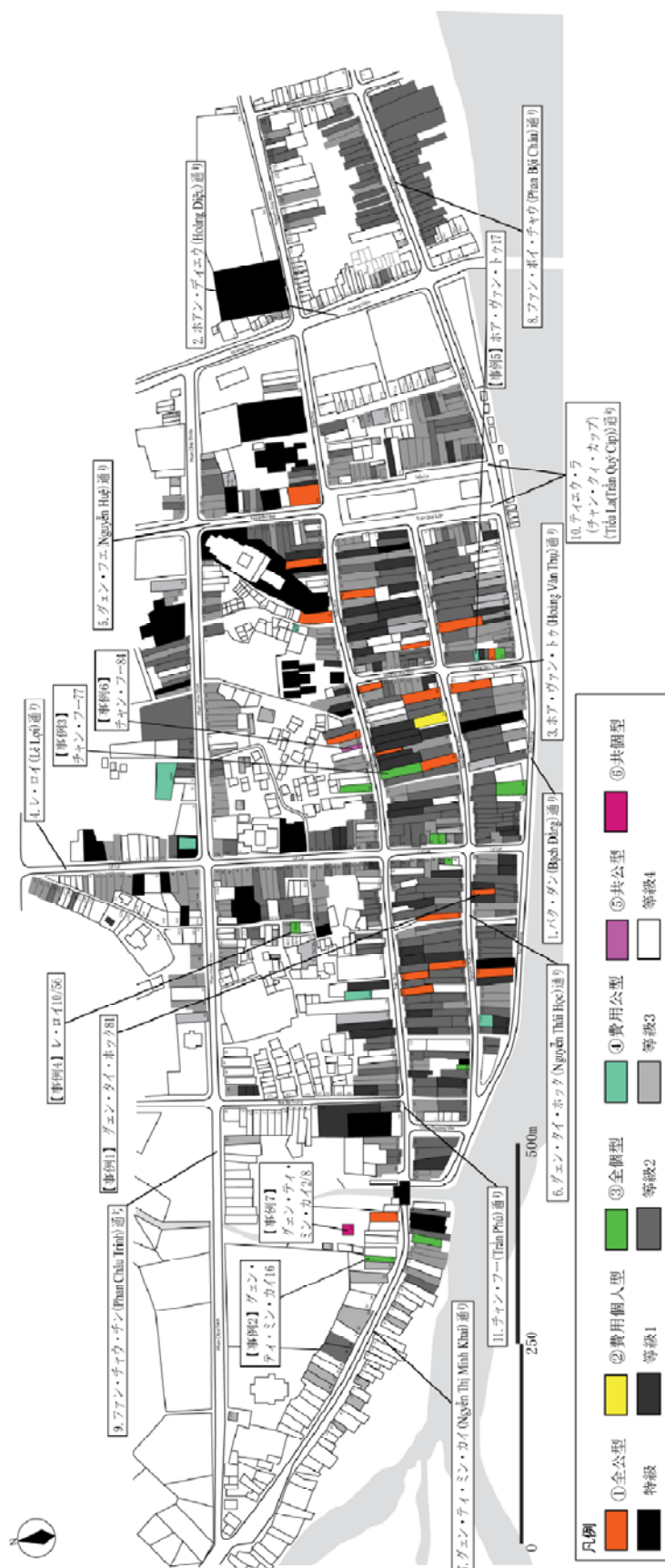


図 4-4 調査対象の修理済み建造物の分布 (特級、等級 1 を分類で色分け)  
(ホイヤン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

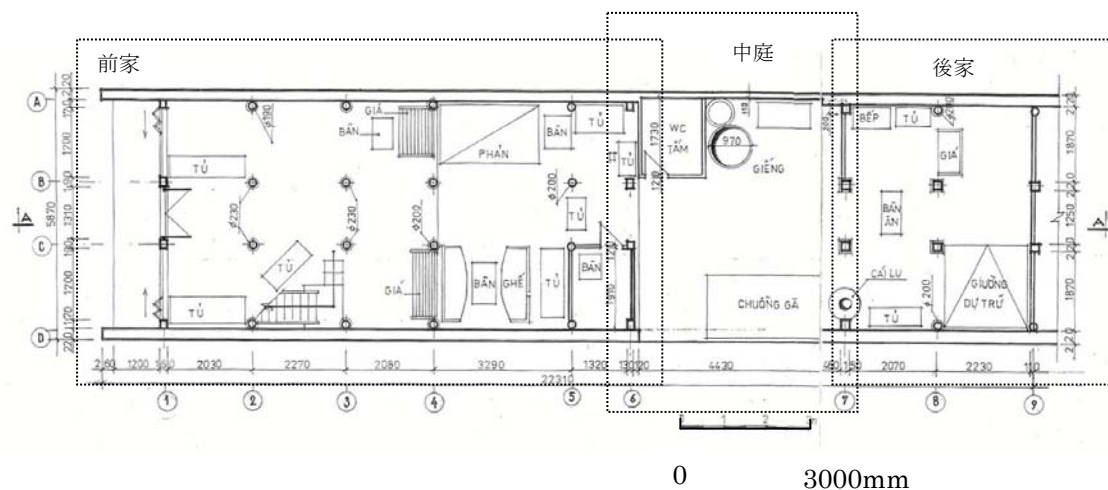
## (2) 修理状況

### 事例 1 ①全公型 (26) グエン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học) (図 4-5、4-6)

等級 1、国所有の家屋で 2005 年と 2008 年にホイアン市の予算で修理された。資料集の主要な通りに面したものの 20 番である。

店舗として前家を使い洋服屋を営んでいる。前家のみ 2 階建てで、橋家及び後家は平屋である。中庭に井戸を有し、便所や風呂が設置され、後家は台所がおかれている。前家の柱は開口部と中庭に面した箇所以外は丸柱であるが、後家は壁際の 4 本を除いて角柱である。柱は壁際にも立っているが、東西は煉瓦造モルタル壁で覆われている合掌造りの陰陽瓦葺きである。1 階天井には洪水時に荷物を 1 階から 2 階へ上げる荷揚げ用の杵が維持されている。

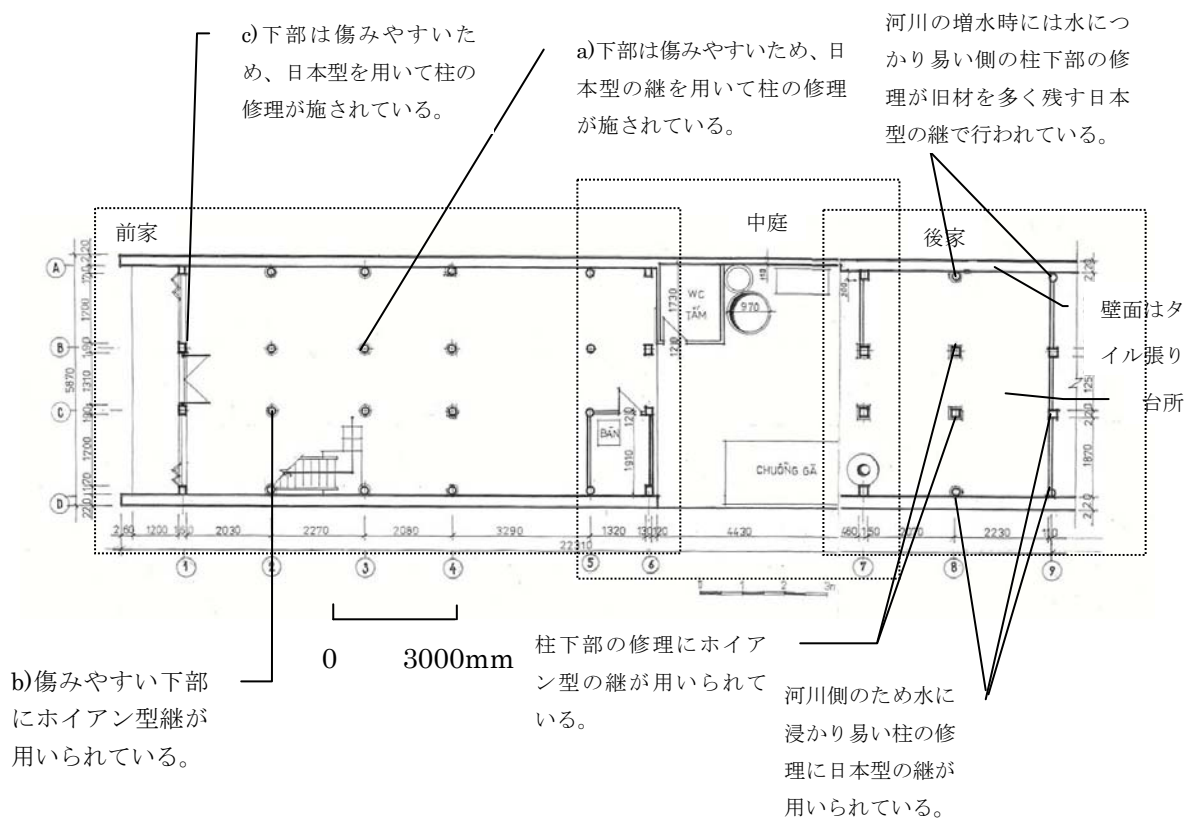
修理後も全体の構造は変化せず、前家、橋家、後家と中庭を保つ歴史的な家屋である。主に水害等で腐朽しやすい構造材の下部の修理が行われている。またファサードの開口部の形式は、2 回目の修理で伝統的な様式に変更されたことが図面からわかる。断面図にある彫刻等は調査時も見られ、歴史的な要素として維持されていることがわかる。



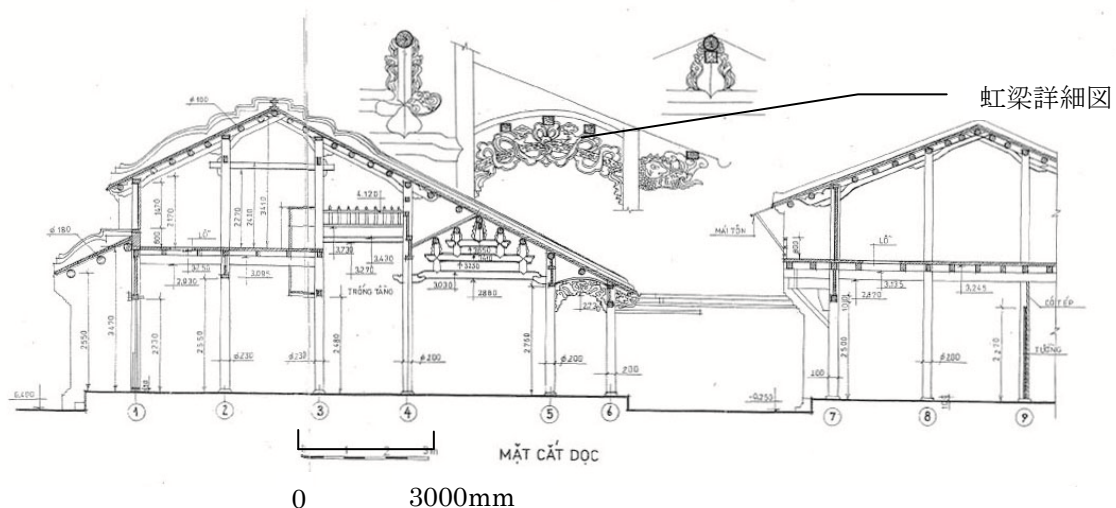
1 階平面図 (ホイアン史跡管理事務所資料より転載、翻訳)

図 4-5-1 グエン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học) 図面 1





A. 2010 年調査時 1 階平面図（ホイアン史跡管理事務所資料に筆者の調査を書き加えた）



B. 修理前断面図（ホイアン史跡管理事務所資料より転載し、筆者が情報を加えた）

図 4-5-2 グエン・タイ・ホック 81 (81 Nguyễn Thái Học) 図面 2



#### A. 外観

家屋の側壁はモルタル仕上げで前面は木材を使用した蔀戸となっている。2005 年の図面上では縦に材料が入っているが、2008 年に変更されたと考えられる。(H22. 11. 4 撮影)



#### B. a) 柱の修理方法 1

柱下部の傷みやすい部分を、材料を多く残す継方をしている。家屋の外側内側に関わらず旧材を多く残すように配慮されている。材料表面に用いられた無色透明の防蟻剤の色の変化も見られる。(H23. 4. 16 撮影)



#### C. b) 柱の修理方法 2

ホイアン型を使用している。一つの棟の中に異なる手法が混在しているのは、工期や予算の都合だと推察される。床は右側がタイル、左側が煉瓦を用いられている。(H23. 4. 16 撮影)



#### D. c) 材料の部分的な取替

1 階梁下部の材料の色が他と異なるため、取替えられたことが分かる。装飾の部分も、修理され、歴史的な要素が受け継がれ修理が施されていることがわかる。(H23. 4. 16 撮影)

図 4-6 ゲン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học) 写真

修理事例 2 ②国個型(2) ゲン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai) (図 4-7、4-8)

特級、国所有の家屋で 2006 年から 2008 年にかけて所有者の個人負担で修理された家屋である。資料集の主要な通りに面したものの 2 番である。門を持ち、道路から 30 度ほど傾

いた敷地に建っている。前家と付属屋、後庭で構成され、後庭に台所や便所、風呂が位置する。付属屋のみ 2 階建てである。前家と門の横の空間は店舗として使用され、床は意匠見本のタイルが用いられている。水回りは後庭に設けられ、床はやはり意匠見本と同様のタイルが張られている。後庭に台所便所、風呂場などの水回りが作られる形式は、構造上合理的であり、かつ伝統的な様式でもある。

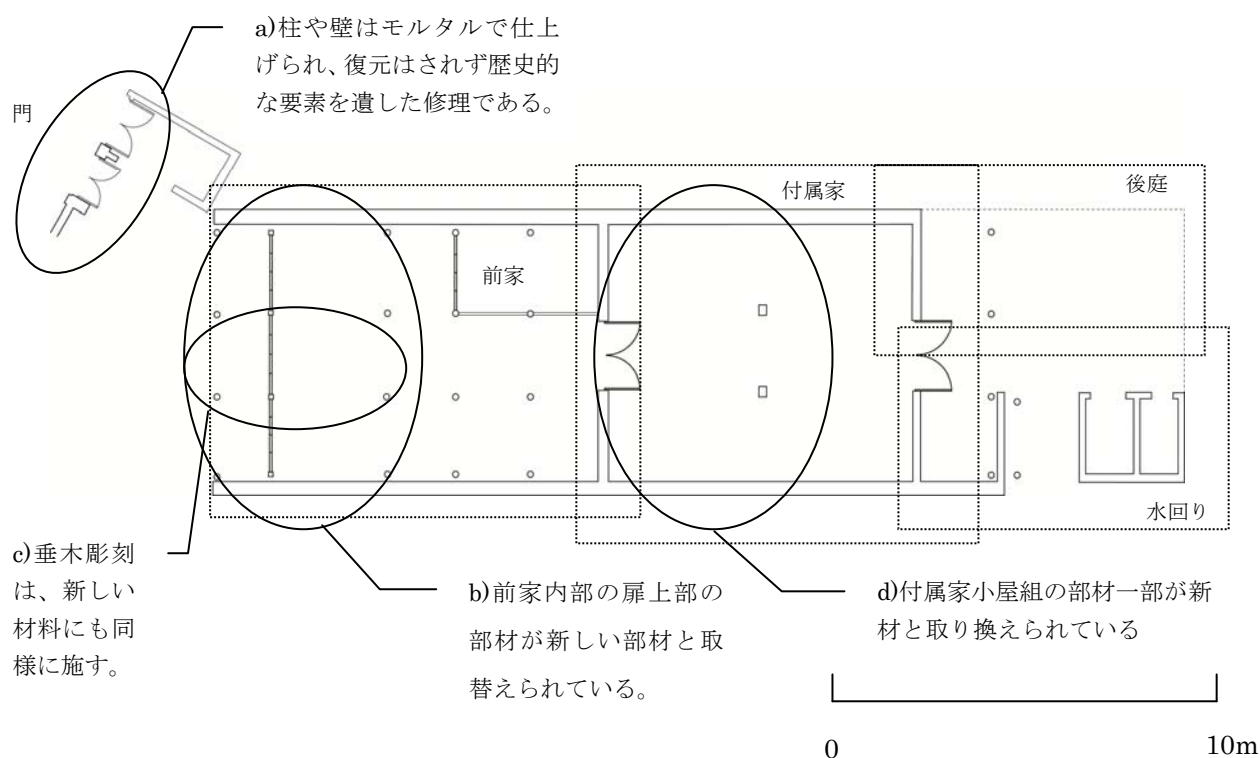


図 4-7 ゲン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai)1 階調査時平面図



A. a)外観

道路からは二段の屋根が見える。生垣と門を構えた形式は珍しいが、内部は前家と付属屋及び後庭で構成され、古都ホイアンの標準的な形式に近い。(H23. 2. 25 撮影)



B. b)前家内部

桁に付けられた扉の部材が取替えられている。タイルは意匠見本の通り正方形の茶色いものを用いている。(H23. 2. 20 撮影)

図 4-8-1 ゲン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai)写真



**A. c)垂木と彫刻**

垂木の一部が取り替えられ、彫刻が復原されていることがわかる。瓦も葺きかえられている。(H23. 2. 20 撮影)



**B. d)付属屋の小屋組**

モルタル壁に掛けられた壁構造である。屋根瓦は葺きかえられている。(H23. 2. 20 撮影)

**図 4-8-2 ゲン・ティ・ミン・カイ 16(16 Nguyễn Thị Minh Khai)写真**

**事例 3 ③全個型 (6) チャン・フー77 (77Trần Phú) (図 4-9、10)**

主要な通りに面した特級の建造物であり、2003 年、2008 年、2009 年に所有者個人の予算負担で修理された個人所有の家屋である。資料集の主要な通りに面したものの 6 番である。国所有のものは日本人専門家により修理が終わり、ホイアン市独自で修理をする際に、個人所有で文化遺産としての価値が高い家屋の修理が行われた。保存地区 I 内に 5 か所ある、内部の見学を行える家屋の一つであり、居住者自らが案内を行う。生活空間はそのまま公開され、家屋の中で土産物も売っている。

修理箇所は前家や橋家の構造材に継が残ることから、構造材を取り替えたと推測できる。毎年秋に古都ホイアンに面するトゥ・ボン川が増水することや雨季で雨の続く時期があること、湿度が高く通気が悪いといった気候条件から、部材は傷み易い。

なお、修理時期は 2003 年で、ホイアン市独自の修理を初めてから比較的初期のものであるため木材の表面が黒く艶のある化学的な塗装を施されていることが特徴的である。この時期はまだ、ホイアン市の修理方針として化学塗料の使用の可否についてははっきり定まっていなかったことが窺える。2011 年に聞き取り調査をした史跡管理事務所職員によれば、こうした化学的な塗料を木部に塗装する作業は既に行っていない。他の修理事例で同様の仕上げを施されているものは、特級で 2 軒（ゲン・ティ・ミン・カイ 2/8、チャン・フー77）である。

家屋は前家、橋家、後家から構成され、橋家と後家には 2 階があるが、台風等により破損した。中庭を囲む棟に装飾が施されている点も特徴的である。個人所有ながら伝統的な棟の構成が維持されている。中庭と前家、中庭と後家の段差を見ると、中庭と前家の段差がより大きく、チャン・フー通り(đường Trần Phú)が南側のバック・ダン通り(đường Bạch Đàn)よりも高い位置にあることが分かる。



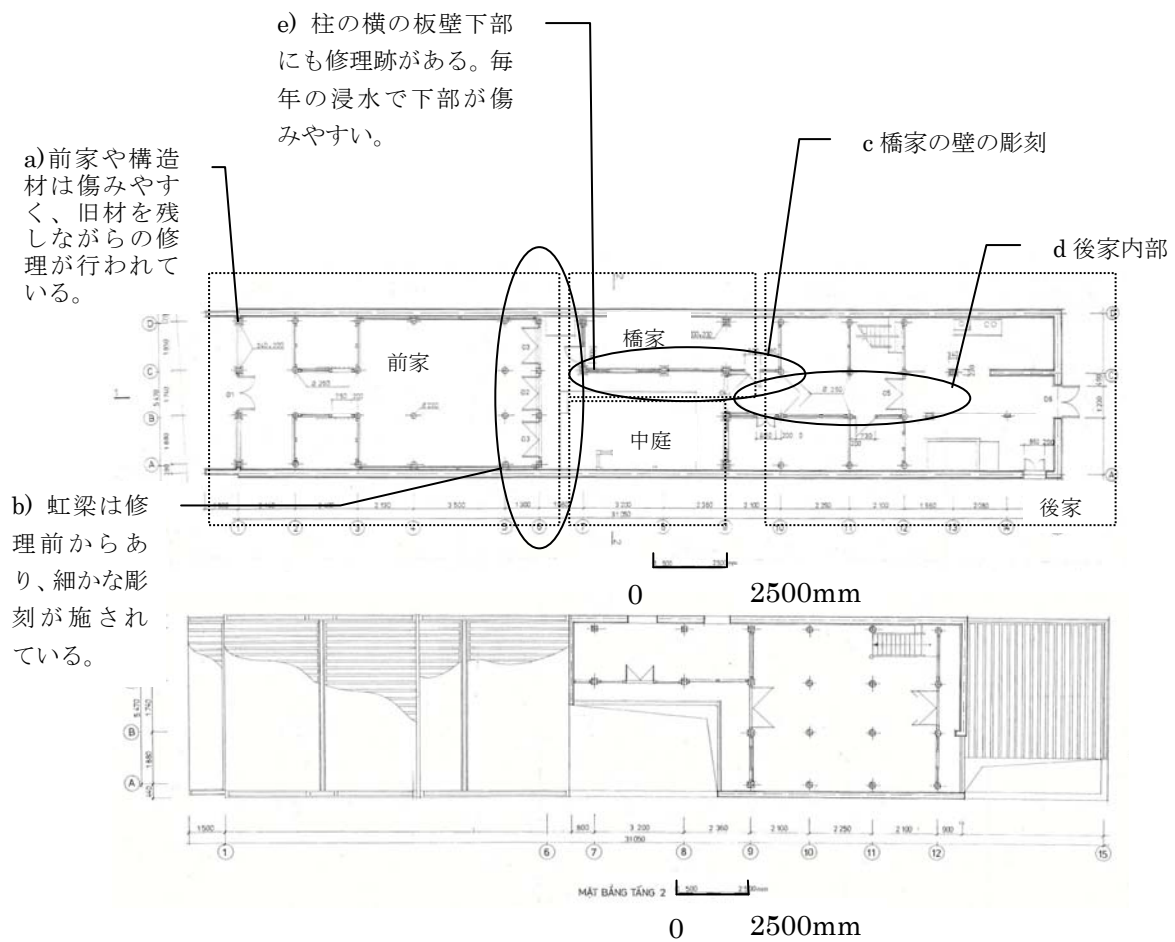


図 4-9 平面図（上 1 階、下 2 階）



#### A. 正面

木材を使用した扉や部戸であり、伝統的な様式を保っている。壁も漆喰を用いている。(H23. 2. 26 撮影)



#### B. a) ファサード部分の柱

水害等で傷みやすいため、継ぎを用いて旧材を残しながら修理していく。(H22. 11. 11 撮影)

図 4-10-1 チャン・フー77 (77Trần Phú) 写真 1



C. b) 前家の虹梁に施された彫刻  
元々あるものを維持している。  
(H23. 2. 26 撮影)



D. c) 橋家の彫刻  
橋家があっても壁面の彫刻が残る事例は少なく貴重である。個人所有ながら、見学用の家屋である影響が大きい。  
(H22. 11. 2 撮影)



E. d) 後家側の棟  
奥は生活空間となっている。扉に彫刻が施されているが表面の塗装は化学的な黒く艶のあるもので、修理方針がはっきり定まっていない時期の修理であることが窺える。(H23. 2. 26 撮影)



F. e) 柱横の板壁  
枠に見られる日本型。下部は傷みやすいが水害があり、湿度の高い気候風土では、旧材を多く遺す手法を用いて、等級が高いことに配慮しながら修理が行われる。  
(H23. 2. 26 撮影)

図 4-10-2 チャン・フー77 (77Trần Phú) 写真 2

#### 事例 4 ③全個型 (2) レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) (図 4-11、12)

個人所有の等級 1 の家屋で 2002 年に所有者個人の費用負担で修理された。資料集の路地に面しているものの 2 番である。

前家と橋家、後家を持つ町家ではなく、路地を入った場所にある祠堂も兼ねた家屋である。桁行 5 間、梁行 4 間となり柱は木製、四方を煉瓦造りモルタル仕上げの壁で囲われ陰

陽瓦が葺かれている。修理されたのは付属屋の方で祠堂は現状維持と書かれている。祠堂はおおむね歴史的、伝統的な様式だが扉の色や形状が異なる。修理の際にこうした歴史的、伝統的ではない部分を残している。

等級 1 の家屋の場合は、国所有で公的な組織の費用を用いて修理された建造物と、個人所有で個人の費用で修理された建造物は同じ方法の修理が行われている。

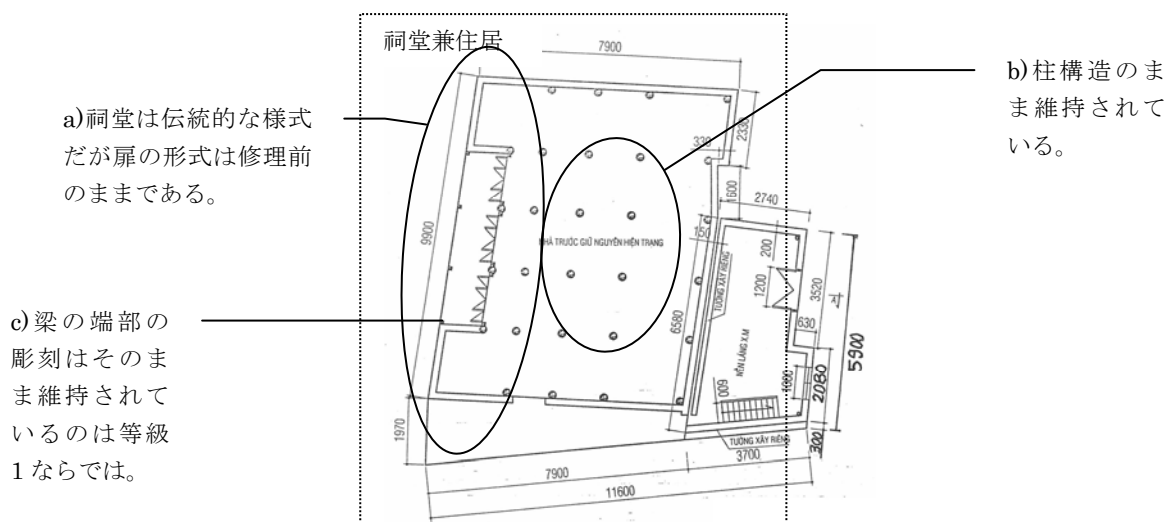
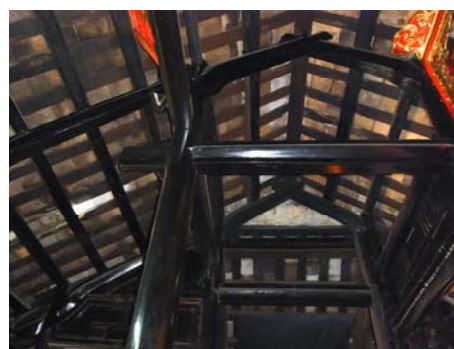


図 4-11 レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) 修理後平面図  
(ホイアン史跡管理事務所より転載)



#### A. a) 外観

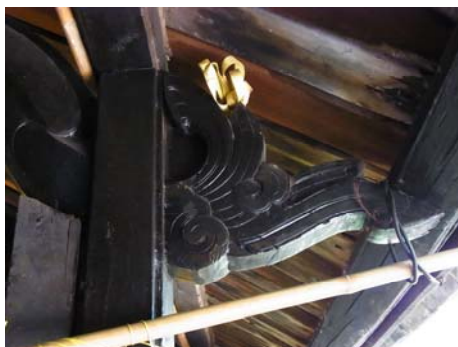
伝統的な形式でありながら、扉が青く塗られている。等級 1 の場合は修理時に元の伝統的な様式に戻す事例が多いが、所有者の利便性からか金属製の扉である。(H23. 2. 9 撮影)



#### B. b) 小屋組

桁方向に見た小屋組みは、町家のような壁構造と柱梁構造の組み合わせではなく柱梁構造である。修理はされていないが全体が黒く、艶のある化学的な塗料が用いられている。(H23. 2. 9 撮影)

図 4-12-1 レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) 写真



#### C. 端部の彫刻

垂木などの端部には彫刻が施されているのも等級1ならではの。(H23. 2. 9 撮影)



#### D. 床

コンクリートが敷かれており、修理基準が定められる前は床材としてコンクリートを用いることが一般的だったことが窺える。(H23. 2. 9 撮影)



#### E. 内部

壁を作らずに布をかけて部屋を区切っているのは、予算的な側面もあるが必要な時だけ個室が持てるという利便性もある。(H23. 2. 9 撮影)

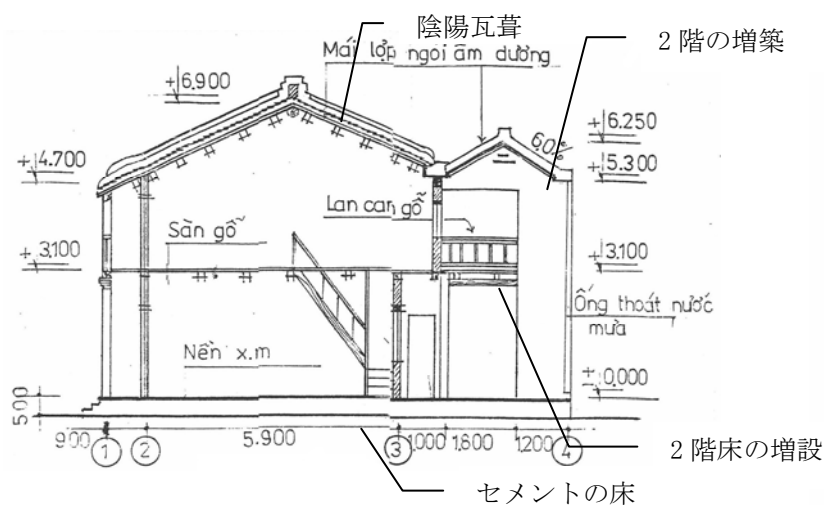
図 4-12-2 レ・ロイ 10/56 (10/56 Lê Lợi) 写真

### 事例 5 ④国個型 (9)ホア・ヴァン・トゥ 17(17Hoàng Văn Thụ) (図 4-13、14)

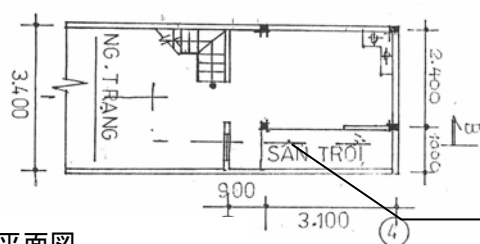
資料集の主要な通りに面したものの9番である。2001年に修理が行われた等級1、個人所有の家屋であり、修理費用は公的機関が負担した。等級1に分類されるには歴史的要素が少ない。修理前も2階建てだったが1階は全面が開口部で2階はモルタル壁だった。修理後は1階の壁はモルタル仕上げで開口部は木製の腰窓である。2階はベランダが設けられ、1階の底はトタンで伸ばされている。伝統的な様式は深い庇だが、伝統的な様式が採用されていない点は等級1であるためだと推察される。取り外し可能なトタンで庇を伸ばしている点からは、家屋が西向きで、庇を伸ばさないと部屋の中にも日差しが入るためだといえ



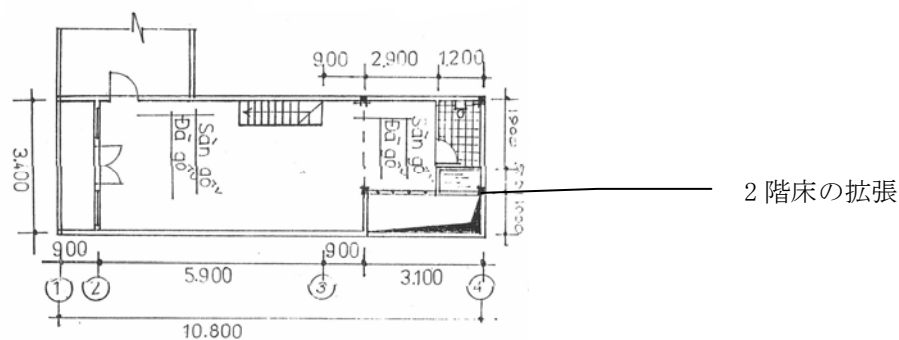
る。つまり、伝統的な様式の整備は行わないが、生活の利便性から取り外し可能なトタンを用いたと推察される。1階天井には根太が張られており、伝統的な様式である。また、増築は、前家の付属屋のみで、前面からは見えない棟である。この家屋は等級1に分離されているため、全てのものをそのまま維持するという視点からすると、付属屋は通りからは見えないが、増築もしない方がよいといえる。しかし、古都ホイアンでは、見えない箇所の整備は、等級1でも可能であるという解釈をされていることがわかる。



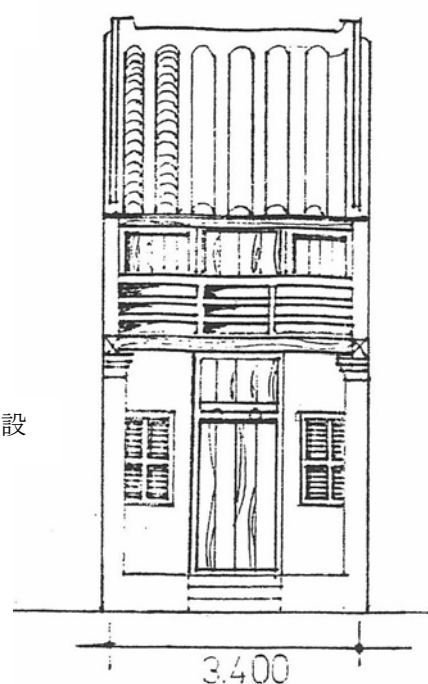
A. 修理後断面図



B. 修理後1階平面図



C. 修理後2階平面図



D. 修理後立面図

図 4-13 ホア・ヴァン・トゥ 17(17Hoàng Văn Thụ)修理前後の図面



#### A. 外観

修理後の 1 階の壁はモルタル仕上げで開口部は木製の腰窓である。2 階はベランダが設けられている。1 階の底はトタンで伸ばされている。



#### B. 1 階天井

根太が張られており、伝統的な形式である。



#### C. 1 階床

床はコンクリートである。河に近いので増水時の対応ではないか。



#### D. 2 階の壁

木材を使用。天井は張らずに壁を設置して居室化或いはしきりとしている。壁を外せば元に戻せ、個室や常設の仕切りがほしいという現代的な生活の要望に応じている。

図 4-14 ホア・ヴァン・トゥ 17(17Hoàng Văn Thụ)写真

### 事例 6 ⑤共公型 (37) チャン・フー84 (84Trần Phú) (図 4-15、16)

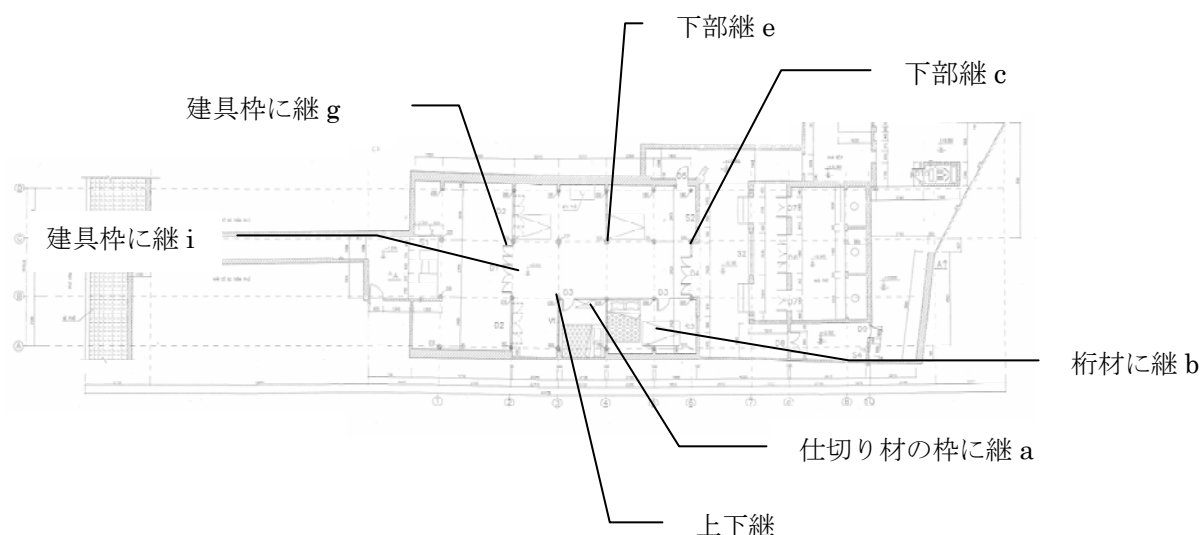
資料集の主要な通りに面したものの 37 番である。2007 年から 2010 年に所有者個人の負担で毎年修理が行われた等級 1、共同体所有の祠堂と家屋である。Trần Phú (チャン・フー) 通りに面したアクセス道路があるが、町家形式ではないため、前家、橋家、後家の構造は見られない。主屋の後に祠堂が置かれ、祠堂の後は中庭となっている。祠堂は陰陽瓦であるが、主屋の底部分は陰陽瓦ではない。小屋組は主屋、祠堂でそれぞれ異なり、主屋

は合掌造り、祠堂は和小屋に似た作りとなっている。主屋の扉や垂木など部材が部分的に取替えられている。店舗としては使用されていない。ただし、内職で服飾品をミシンで縫う光景が見られた。主屋は生活空間として使用されているが、台所や風呂、便所は後部に別に設けられている。番付がいくつかの部材に残る。

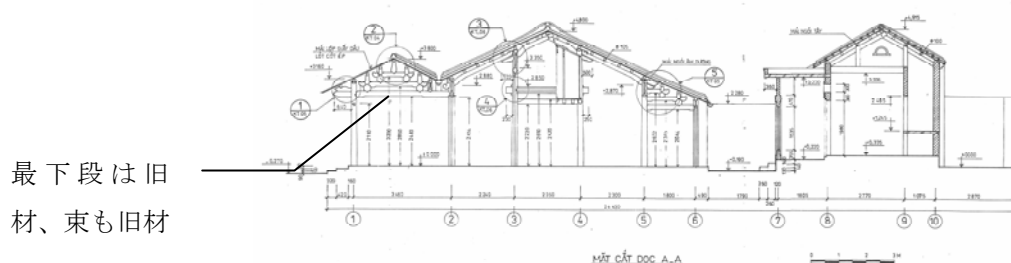
主屋は桁行 3 間、梁間 3 間の合掌造り。祠堂は桁行、梁行 1 間の合掌造りである。主屋の前に壁を持たない空間が作られ、小屋組は貴族の邸宅であるレ・ロイ 21 (21 Lê Lợi) と類似の様式である。

中庭はないが、チャン・フー通り (đường Trần Phú) からアクセスする道路が細く、主屋前面に空間がある。また、祠堂と主屋の間にも空間があり装飾が施された壁面がある。

地表面は、全体的に見て北部の方が高い。断面図によると祠堂は主屋より 0.335cm 高く、主屋前の道路は主屋より 0.27cm 低い。主屋は、生活の空間としてのみならず、前面が縫製の作業場となっている。



A. 修理後平面図



B. 修理後断面図 1999 年 2 月

図 4-15 チャン・フー84 (84Trần Phú)修理後図面



#### A. 入り口の祠堂の看板

李家の祠堂。下部は現代ベトナム語表記で、祠堂や教会などを意味する。



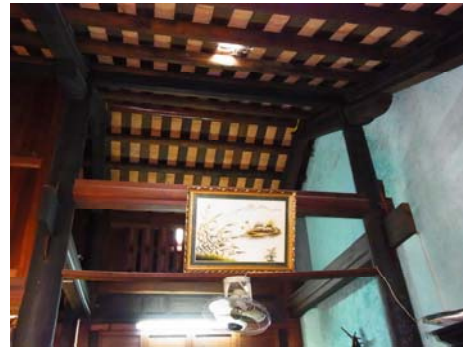
#### B. 主屋ファサード

下屋部分。地表面から高い場所に建てられていることが、手前に設けられたスロープからわかる。



#### C. b)主屋の小屋組

部材の表面の色が異なるため、修理した時期が異なると思われる。



#### D. 主屋の小屋組 2

天井が張られず小屋組が見え、壁際にも小屋組がある伝統的な様式が見られる。



#### E. 端部の彫刻

複雑な模様が彫られており、修理時にも予算を割いていることが窺える。



#### F. 祠堂のファサード

塗装が施され、修理が行われていることが分かる。

図 4-16 チャン・フー84 (84Trần Phú)写真

事例 7 ⑥共個型 (1) グェン・ティ・ミン・カイ 2/8 (2/8 Nguyễn Thị Minh Khai) (図 4-17、18)

共同体所有の特級の建造物で、2006 年に所有者個人の資金で修理された。資料集の路地に面したものの 1 番である。祠堂であり、隣接する家屋に管理者が居住している。個人所有で個人が修理費用を負担した特級の家屋の事例はないために、この祠堂を事例とする。修理対象とされているのは祠堂のみである。梁間 6 間、桁行 6 間の正方形となっている。中央に祠堂を配置し、周囲を板壁で囲う。正面に扉を配している。出入り口は北と南に 1 か所、東西に 2 か所ずつあり、対称的に配置されている。祠堂は提灯作りなどの作業場としても使用されている。地表面から数段盛り土した上に建てられ、小屋組は合掌造りである。南側一間は虹梁が、その北側は下屋に天井のように垂木が張られている。

修理は柱下部を中心に行われている。毎年秋の河川の増水被害を受けにくい位置にあるが、柱下部は傷みやすい。また、柱上部に見られる梁等を通した穴は埋められている。

正面入り口側の下屋の小屋組みの一部を修理した際には、形状を旧材と同様にして化学的な塗料を施している。塗料は色が明るく、他の材料との見分けが付きやすい。調査当時に用いられていた無色透明の化学的な防蟻剤とは異なるものであり、ホイアン市の修理方法の変遷が窺える。

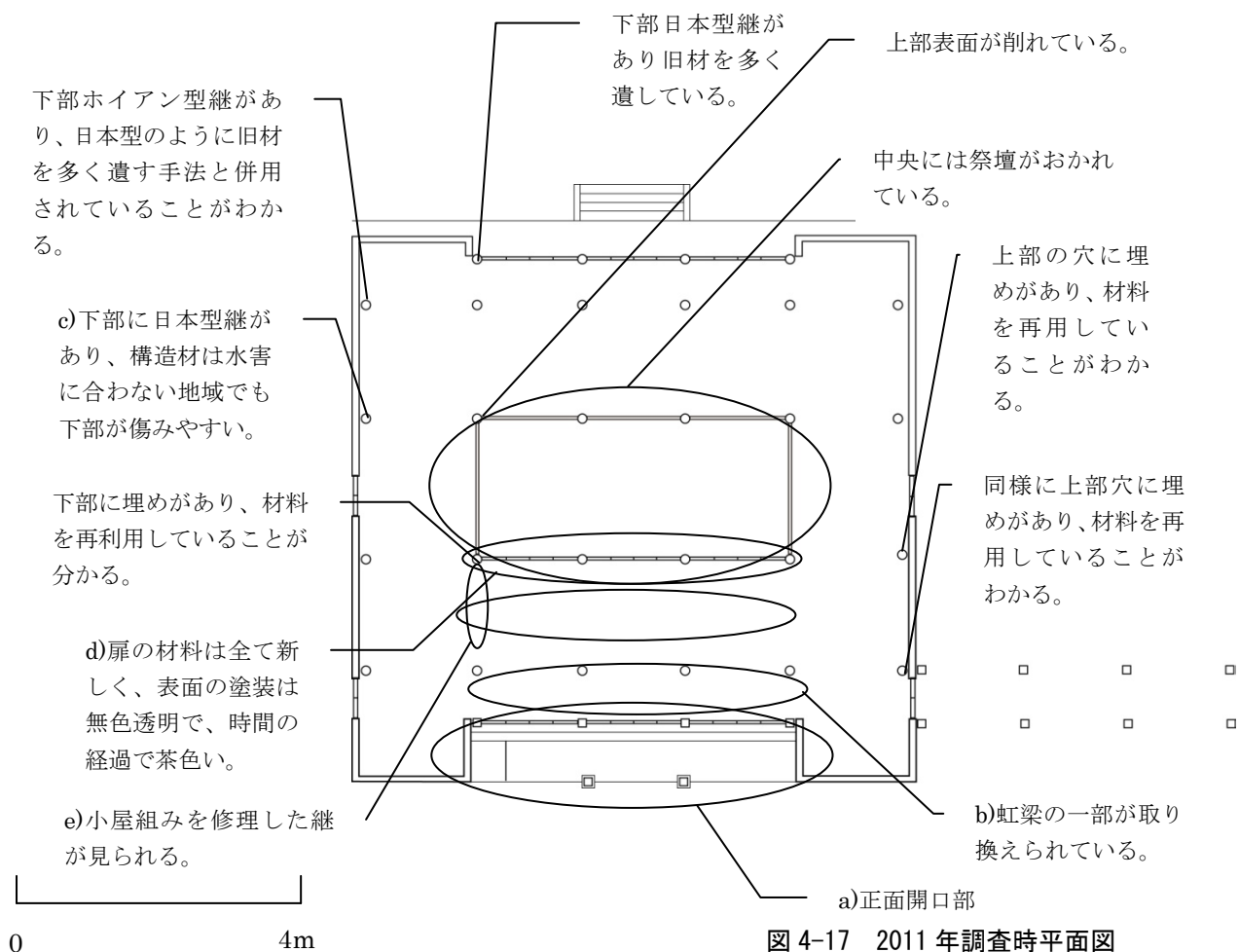


図 4-17 2011 年調査時平面図





**A. a)外観**

右手が正面となる。周囲は等級4の建造物が並ぶ。(H23. 2. 19 撮影)



**B. b)虹梁のある天井**

部分の天井が一部取替えられている。防蟻対策として無色透明の化学塗料を塗った材料は異なる色である。(H23. 2. 19 撮影)



**C. c)柱下部の継ぎ**

下部が新材で上部が旧材。裏側は平らなため、日本型だとわかる。また、下部の表面塗装の色は他の修理された木部と同様の色が施されているため、修理時期が同じだとわかる。(H23. 2. 19 撮影)



**D. d)祠堂を囲む板戸**

壁材は他の材料と色が異なり取替えられたとわかる。2010年調査時には等級の高い家屋の修理には用いられていない化学的な塗料である。また、扉の形式は伝統的な様式である。(H23. 2. 19 撮影)



**E. e)下屋の小屋組**

下屋の小屋組みの一部は新しい材料で継がれ、形状は旧材に合わせていることがわかる。陰陽瓦は、葺きかえられている。旧材は黒く艶のある化学的な塗料が用いられている。(H23. 2. 19 撮影)

図4-18 グエン・ティ・ミン・カイ 2/8 (2/8Nguyễn Thị Minh Khai) 写真

以上 7 つの事例からわかるように、特級、等級 1 については立地が異なっても修理内容は変わらず木造建造物の歴史的要素を受け継いでいく方針が窺える。また、所有者や修理費用負担者によっても修理内容は変わらないことが分かる。これは、施工会社が文化遺産の修理経験を積んだ 3 社から選ばれているためである。古都ホイアンの修理において、特級及び等級 1 においては、旧材を可能な限り残し、建造物の歴史を継承するという日本人専門家の協力した木造建造物の修理方針が受け入れられていると解釈できる。

#### 4.2.5. 等級 3 及び等級 4 の整備内容

##### (1) 所有及び費用負担と立地

等級 3 及び等級 4 の整備済み建造物等は全修理及び整備済み建造物等が 196 件あるうちの 94 件である。整備内容の分析を行うために、前提として特級及び等級 1 と同様に所有者、整備費用負担者、立地から整備済建造物等を分類すると表 4-6 となる。整備費用負担者は原則として建造物を所有する組織または個人である。

全個型が通りに 34 件、路地に 19 件の合計 53 件と最も多い。次に多い分類が、全公型の 32 軒である。国個型は通りに 3 件、個公型が主要な通りに 5 件、路地に 1 件の合計 6 件である。つまり、国個型と個公型は稀な場合である。国個型は、国が所有しているにもかかわらず、整備費用を個人が負担している例外的な事例であると考えられる。建造物の借用人に十分な収入があり、かつ公的機関が修理費用の補助金を負担するまで待つことができずに整備を行った事例だと思われる。一方個公型の件数が少ない理由としては、整備費用補助率が考えられる。公的機関から修理及び整備費用に対する補助が出るのは、特級、等級 1、等級 2、等級 3 までであり、等級 4 に対しては基本的に補助が出ない。個公型に等級 4 が合計 4 件含まれているのは、所有者の経済状況を考慮して公的機関が例外的に整備費用を負担したものであると考えられる。

また、全個型が最も多いのは、等級 4 に対しては補助が出ないため、個人所有の場合は個人で整備費用を負担せざるを得ないという理由のみならず、建造物が通りに面していれば所有者が個人で整備費用を負担できるくらいの収入があるとも考えられる。また、全個型は路地に位置している整備事例が最も多い。保存地区内の建造物の所有者の収入と歴史地区保存整備への意識だと考えられる。

意匠の決定権は整備費用負担者であるため、全公型と個公型は、公的機関、つまり史跡管理事務所の意向が反映されている。他方で、国個型と全個型は、個人の意向が反映されていると考えられる。従って、歴史地区の保存整備に影響を及ぼす外観を中心に整備内容を分析することで、史跡管理事務所と個人の意向が現れる。なお、全公型と個公型の合計は 38 件、国個型と全個型の合計は 56 件であり、整備内容を個人が決定する事例がやや多い。等級 3 と等級 4 において共公型と共個型に該当する事例は見られなかった。

表 4-6 等級 3、等級 4 の分類と件数及び事例

名称	等級3		等級4		立地		事例
	通り (件)	路地 (件)	通り (件)	路地 (件)	通り (件)	路地 (件)	
①全公型	27	0	5	0	32	0	【事例1】(a)内部、外観共に伝統的な形式（グエン・タイ・ホック9（等級3）） 【事例3】(b)外観のみ伝統的な形式（チャン・フー51） 【事例4】(c)古都ホイアンの町家に準じる棟の構成（グエン・タイ・ホック26） 【事例6】(e)意匠見本2に倣った外観と現代的な内部（レ・ロイ61）
②国個型	1	1	2	0	3	0	【事例2】(b)外観のみ伝統的な形式（レ・ロイ29（等級3）） 【事例2】グエン・ティ・ミン・カイ16(特級)
③全個型	17	9	17	10	34	19	【事例5】(d)古都ホイアンのフレンチコロニアル形式のファサード（レ・ロイ80） 【事例7】(A)意匠見本2に倣った外観と現代的な内部（ファン・チャウ・チン4/47） 【事例8】(f)陰陽瓦を葺くのみ（ホアン・ディエウ39） 【事例9】(B)陰陽瓦を葺くのみ（ファン・チャウ・チン36/71）
④個公型	2	0	3	1	5	1	—
⑤共公型	0	0	0	0	0	0	—
⑥共個型	0	0	0	0	0	0	—
合計					74	20	

## (2) 整備状況

整備内容を分析するに当たり具体的に調査対象としたものは、目視調査可能な外観、構造（柱、小屋組）、屋根、床、建具（階段を含む）、中庭と後庭、水回り、棟の構成である。特級や等級 1 と異なり等級 3 及び等級 4 の整備基準は、保存の手引きによれば「周囲の環境に合わせること、伝統的な様式で再建すること」と書かれている。また、整備費用負担者の違いにより、整備後の意匠の許可基準が異なる。

そこで、等級 3 と等級 4 について、意匠意本に倣っているかを確認した。意匠見本 1 は保存地区 I 内にある特級や等級等の歴史的な建造物で 12 通りある（図 4-19）。意匠見本 2 は、歴史的な家屋と古都ホイアンのフレンチコロニアル様式を折衷し、庇の柱や開口部の形式、数等を現代的な要求に合わせたもので、12 通りある（図 4-20）。外観を意匠見本 2 に合わせた場合は、特級や等級 1 と異なることが明確に分かり、歴史地区の様相に合わせた外観となる。意匠見本 1 に合わせた場合は、特級や等級 1 と同様の外観に仕上げられる。





A.



B.

図 4-19 意匠見本 1（伝統的な様式）

保存地区 I 内にある家屋を事例にしている。壁面は板壁、開口部は木製で蔀戸を用いている。特級や等級 1 の修理の際の参照事例を意図していたと思われる。



A.



B.

図 4-20 意匠見本 2（伝統的な様式と現代的な意匠の折衷）

保存地区 I 内の歴史的建造物を模しているが、壁面はモルタル仕上げで黄色く塗装され、開口部の形式が歴史的な建造物と異なるため、全体の印象が異なる。

これら意匠見本の二通りを基本に、整備内容を分析したところ、整備手法は表 4-7 にまとめた通り六通りに分けられる。具体的に示したものが図 4-21 である。

(a)は 内部、外観とも伝統的な様式に整備した事例である。これは、意匠見本 1 にあるように、保存地区内の歴史的な建造物等に倣い外観と内部を整備するものである。具体的には、古都ホイアンの典型的な様式、つまり前家、橋家、後家で構成され、前家の道路に面した中央開口部は観音開きの木製の扉が設けられ、左右の開口部は板一枚分を残し蔀戸

が設けられる。左右の壁は前家から後家まで連続し、モルタルで仕上げられている。内部は、天井に荷揚げ用の穴が設置される。荷揚げ用の穴は、常時開いている場合もあるが、格子状の蓋が置かれている場合もある。虹梁には、動物の彫刻が施される。階段は、規模により異なるが、各棟に一か所ずつ設けられる。橋家の壁面には彫刻が施される。

(b)は外観のみ伝統的な様式を用いて整備し内部を現代的にする。(a)と異なり、伝統的な様式に整備した箇所は外観のみであり、内部は現代的である。

(c)は、前家、橋家、後家の構成を用いている。つまり、古都ホイアンの町家に準じる棟の構成は、外観に関わらず棟の構成が伝統的な配置を維持している事例である。事例は主に東西に走る道路に面している町家で見られる。古都ホイアンの町家は、平入の前家、中庭を挟んで並行に配置された後家、前家と後家をつなぐ橋家から構成されるため、歴史地区の保存整備手法として外観を整えて行くと同時に、地区の伝統的な要素を維持するという視点が史跡管理事務所にあることがわかる。なお、等級4の場合は元々伝統的な要素がないものであり、棟の構成が古都ホイアンの町家に準じている場合でも整備されたものだと言える。しかし、等級3の場合は伝統的な要素を維持するという整備基準があるため、棟の構成の維持が伝統的な要素の維持にあたる可能性もある。

以上から、(a)から(c)を伝統的な要素を整備するとした。

(d)は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式<sup>注4)</sup>のファサードを整備している事例である。古都ホイアンの伝統的な町家の形式ではないが、外壁をモルタルでフレンチコロニアル風に仕上げ、黄色と白で塗装する。屋根を見ると、陰陽瓦が葺かれている。フランス植民地時代という一定の時代を示しているため、古都ホイアンの歴史を表していると捉え「歴史的な要素を整備」するとした。

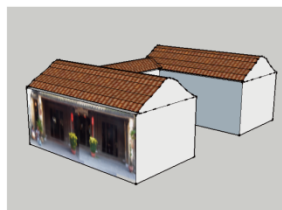
(e)及び(A)は意匠見本2に倣った外観と現代的な内部であり、歴史地区として統一性を保つ外観に整備するものである。

(f)及び(B)は陰陽瓦を葺くのみで、意匠見本に倣わない外観と内部である。歴史地区内に位置しているが、陰陽瓦を葺く以外は、保存地区I内に立地する建造物等としての整備は行われていない。

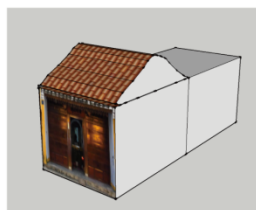
表 4-7 分類のまとめ

立地	表記	内容	整備の傾向
主要な通り	a	内部、外観共に伝統的な様式	伝統的な要素を整備
	b	外観のみ意匠見本1	
	c	棟の構成が伝統的	
	d	古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード	歴史的な要素を整備
	e	外観を意匠見本2	
	f	陰陽瓦を葺くのみ	
路地	A	外観を意匠見本2	
	B	陰陽瓦を葺くのみ	

#### 主要な通りに面した建造物（全 74 件）



(a) 内部、外観共に伝統的な様式  
9 件（①7 件、③2 件）



(b) 外観のみ意匠見本 1  
4 件（①2 件、③2 件）



(c) 棟の構成が伝統的  
6 件（①6 件）



(d) 古都ホイアンのフレンチ  
コロニアル様式のファサード  
9 件（①6 件、③3 件）



(e) 外観を意匠見本 2 37 件  
（①11 件、②3 件、③21 件、  
④2 件）

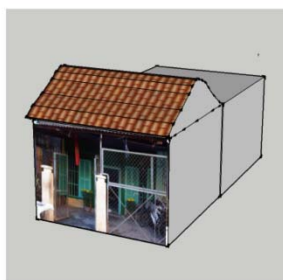


(f) 陰陽瓦を葺くのみ 10 件  
（③7 件、④3 件）

#### 路地に面した建造物（全 20 件）



(A) 外観を意匠見本 2  
11 件（②1 件、③10 件）



(B) 陰陽瓦を葺くのみ  
9 件（③8 件、④1 件）

図 4-21 整備内容の分類

（①②③④は分類①～④に該当。分類①全公型、分類②費用個人型、分類③全個型、分類④費用公型）

全体として、整備事例は、伝統的な様式に整備する (a) (b) (c)、歴史的な要素を持つ (d)、意匠見本 2 に倣ったファサードと現代的な内部の (e) 及び (A)、陰陽瓦を葺くのみである (f) 及び (B) の 6 通りである。

この結果を地図に示したものが図 4-22 である。凡例では (a) (b) を意匠見本 1 に倣い伝統的な様式に整備するため「伝統的な様式」とし、(c) は棟の構成のみ伝統的なため、「棟の構成を維持」とし、(d) は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のため「フレンチコロニアル」とし、(e) (A) は伝統的な様式と現代的な意匠の折衷の意匠見本 2 に倣った外観のため「意匠見本」とし (f) (B) は陰陽瓦を葺くのみであるため「意匠見本に倣わない」と表記した。以下、本章の図 4-59、65、75、83、93、99、113 共同様である。

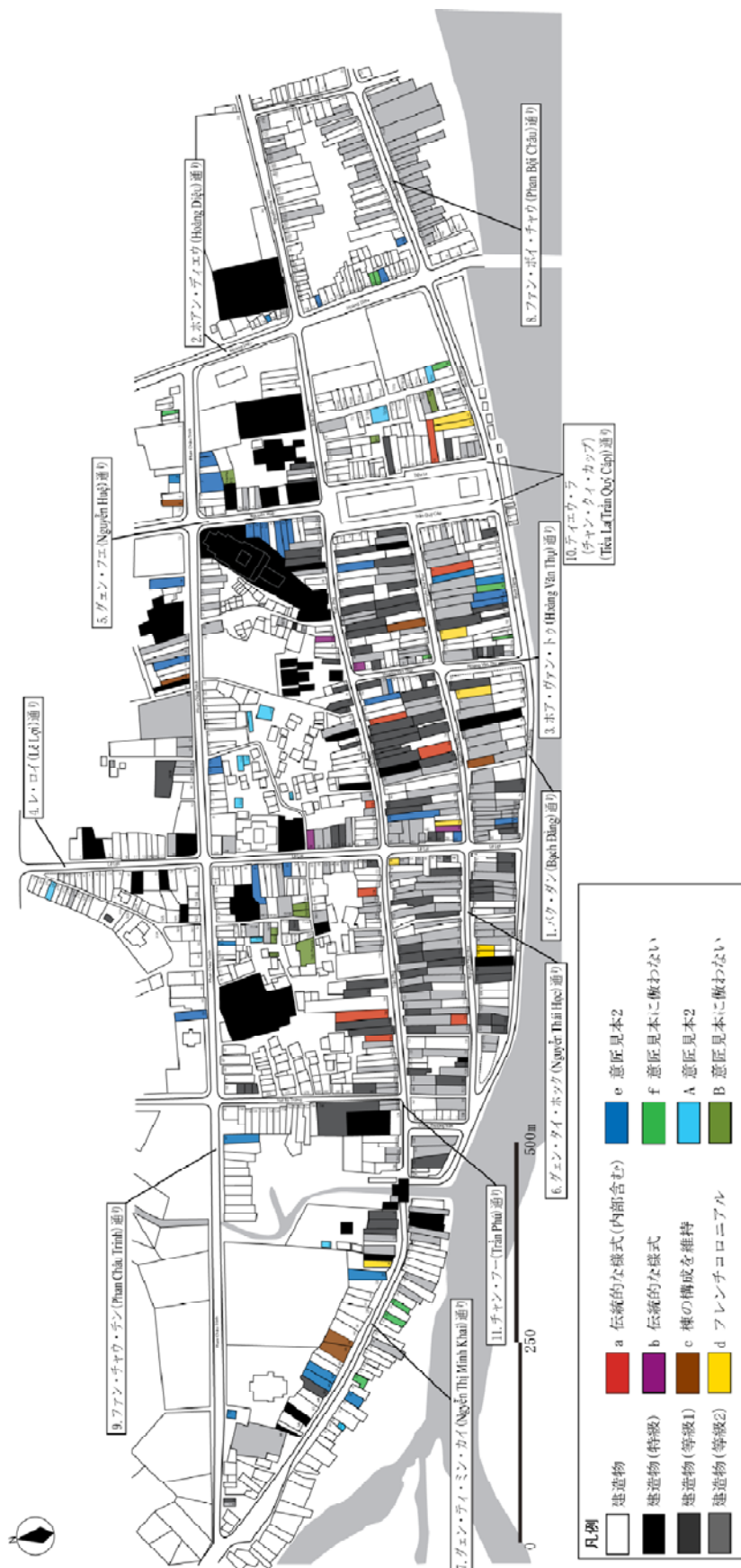


図 4-22 調査対象の整備済み建造物の位置図

(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

整備内容を元に、(a)から(f)及び(A)(B)に分類した整備事例を、表 4-8 の通り分類の前提条件である①全公型から④費用個型の 4 通りに分け、さらに、図 4-22 で示した立地や周囲の建造物等の等級、表 4-9 で示した通りごとの等級の割合に着目して、これらの要素が整備に影響を及ぼしたことを記述する。なお、(c) と (A)、(d) と (B) は通りと路地という立地の違いがあるものの整備内容が同じであるため、同時に扱う。事例は「事例 分類資料集」に対応している番号「住所」のように示す。

表 4-8 整備済み建造物の分類のまとめ

修理 内容  所有者と 修理費用負担者	等級	立地								合計
		主要な通り						路地		
		a 外観、内部共に伝統的な様式	b 外観のみ意見本1	c 棟の構成が伝統的	d 古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード	e 意見本2に倣った外観と現代的な内部	f 陰陽瓦を葺くのみ	A 意見本2に倣った外観と現代的な内部	B 意見本に倣わない外観と内部	
全公型	3	5	1	4	6	11	－	－	－	27
	4	2	1	2	－	－		－		
国個型	3	－	－	－	－	1	－	1	－	2
	4	－	－	－	－	2		－	－	
全個型	3	2	1	－	3	9	2	5	4	26
	4	－	1	－	－	12	4	5	4	
個公型	3	－	－	－	－	－	2	－	－	2
	4	－	－	－	－	2	1	－	1	
合計		9	4	6	9	37	9	11	9	94

表 4-9 通りごとの等級の割合

No.	通り	特級	等級1	等級2	等級3	等級4	合計	数値
1	バク・ダン	8	12	25	55	100	軒数	
		8%	12%	25%	55%	割合		
2	チャオ・トゥオン・ヴァン			1	3	4	軒数	
				25%	75%	割合		
3	ハイ・ヴァ・チュン	2			17	19	軒数	
		11%			89%	割合		
4	ホアン・ディウ			4	23	27	軒数	
				15%	85%	割合		
5	ホア・ヴァン・トゥ	5	5	10		20	軒数	
		25%	25%	50%		割合		
6	レ・ロイ	6	8	20	55	15	104	軒数
		6%	8%	19%	53%	14%	割合	
7	ゲン・デウイ・ヒエウ	2		6	4	14	26	軒数
		8%	0%	23%	15%	54%	割合	
8	ゲン・フエ	2		2	13	2	19	軒数
		11%	0%	11%	68%	11%	割合	
9	ゲン・タイ・ホック	4	24	63	29	17	137	軒数
		3%	18%	46%	21%	12%	割合	
10	ゲン・ティ・ミン・カイ	7	6	9	28	85	135	軒数
		5%	4%	7%	21%	63%	割合	
11	ファン・ボイ・チャウ			33	11	12	56	軒数
				59%	20%	21%	割合	
12	ファン・チャウ・チン	6	3	18	66	97	190	軒数
		3%	2%	9%	35%	51%	割合	
13	ティエウ・ラ		2	4	14	2	22	軒数
			9%	18%	64%	9%	割合	
14	トゥオン・ミン・ルオン					8	8	軒数
						100%	割合	
15	チャン・フー	17	39	57	80	84	277	軒数
		6%	14%	21%	29%	30%	割合	
16	チャン・クィ・カップ			2	12	6	20	軒数
				10%	60%	30%	割合	

#### (a) 内部、外観共に伝統的な様式

古都ホイアンの伝統的な様式である前家、橋家、後家と中庭を有した様式に整備されている。外観は木製の板壁を用い、左右は蔀戸、出入り口は観音開きである。内部の構造も合掌造りを用いている。さらに、古都ホイアンの伝統的な建造物の様式である前家、橋家、後家を有し、中庭もある。表 4-10 で示すように床は、六角形のタイルか、四角いタイルが用いられているものが 9 件中 8 件で、9 割である。建具なども復元されている。つまり、古都ホイアンの伝統的な町家の様式を整備した事例である。

ファサードと内部が伝統的な様式で整備された事例で、表 4-8 に示すように等級 3 及び等級 4 の整備済み建造物 74 件中 9 件が該当する。立地もチャン・フー通り（表 4-10 では TP）及びグエン・タイ・ホック通り（表 4-10 では NTH）といった、通りに立地する建造物数に対し、特級から等級 2 の建造物が多く、観光の中心となる通りに集中している。通りごとに見ると、グエン・タイ・ホック通りは 3 件、チャン・フー通りは 5 件、その他が 1 件である。所有者と修理費用負担者を見ると、9 件中 7 件が①全公型で、残り 2 件が③全個型にあたる。

周囲の環境を見ると、図 4-56、図 4-57 で示す通り等級 1、等級 2 に囲まれているか隣接している。周囲の環境に合わせるという整備基準があるため、等級 1 や等級 2 に囲まれている場合は、伝統的な様式に整備することは、基準に従ったといえる。

しかし、No. 134 ティェウ・ラ 31 のように等級の高い建造物に隣接していなくても、伝統的な様式に整備する事例もある。No. 134 は③全個型のため、史跡管理事務所の意向ではなく、個人の意向で伝統的な様式に整備していることがわかる。

また、No. 135 チャン・フー152 も全個型のため、伝統的な様式に個人の判断で整備したといえる。東側が等級 1、西側が等級 2、道路挟んで南側に等級 1 が位置しているため、周囲に合わせるという等級 3 及び等級 4 の整備方針に従い伝統的な様式に整備した、或いは、チャン・フー通りという観光客の多い立地上、伝統的な様式に整備した方がより観光客に効果的だと考えたと推察できる。或いは、元々国が所有し、史跡管理事務所により伝統的な様式に整備された家屋を、譲り受けたとも考えられる。

以上から、文化遺産としての価値が高い建造物の多い通りに立地する等級 3 及び等級 4 でかつ全公型にあたるホイアン市やホイアン史跡管理事務所が修理内容を管理しやすい建造物においては、外観、内部共に全て伝統的な様式に整備されているといえる。整備基準に沿っており、違反はしていない。しかし、史跡管理事務所では、整備記録や整備工事報告書が作成されないため、整備した後、特級、等級 1 の建造物との区別がつかなくなる恐れがあり、歴史的地区の保存整備の視点からは課題である。史跡管理事務所には整備申請をした記録がファサードの写真と共に保管されているため、整備を行ったこと、及び整備前の様相は一部分かる。しかし、工事の報告書が作成されないため、伝統的な外観に整備した場所や、工事の際の方針がわからないまま建造物が継承されていく可能性が指摘できる。また、整備後の用途は、博物館や店舗、人民委員会のような住居以外の用途に加え、



住居としても使用されている。つまり、史跡管理事務所は、用途を考えて伝統的な様式に整備しているのではないといえる。

事例として博物館として使用されているグエン・タイ・ホック9を取り上げる。

表 4-10 主要な通りに面した整備済み建造物(a)内部、外観共に伝統的な形式

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成
112	NTH9	C3	1999	博物館	①	復元	復元	復元	復元	陰陽瓦葺	中庭	内部に設けられている	前家、橋家、後家各2階建て
115	NTH116	C3	2002	店舗兼住居	①	復元	小屋組み、柱共に復元	タイル	復元	陰陽瓦葺			前家
119	NTH58	C3	2004	店舗	①	復元	復元。柱梁構造と壁構造の折衷。	タイル	復元	陰陽瓦葺	有り。店舗として使用		前家、橋家
134	TL31	C3	2006/2008	店舗兼住居	③-1	復元	復元	六角形の灰色のタイル	復元	陰陽瓦葺	有り。室内化	後部に設けられている	前家、橋家、後家。2階建て
135	TP152	C3	2000	店舗兼住居	③-1	復元	一部復元。壁構造。小屋組みあり。	タイル(意匠見本)	復元	陰陽瓦葺	あり	内部に設けられている	前家(2階建)、橋家、後家
136	TP100	C3	2002	店舗	①	復元	前家復元。後部は現代的	前家：タイル(意匠見本)、後部：タイル(柄入り)	前家：復元。後部：復元なし	前家：陰陽瓦葺	なし	後部に設けられている	前家、後部
140	TP118	C3	2005	画廊(兼住居)	①	復元	復元	タイル(意匠見本)	復元	陰陽瓦葺			前家、橋家、後家
166	TP63	C4	2002	店舗兼住居	①	復元	壁構造。小屋組み復元	1階：タイル 2階：板張り	復元	陰陽瓦葺き	中庭	後家の後部に置かれている	前家、橋家、後家(2階)
168	TP146	C4	2007	人民委員会	①	復元	復元(柱梁構造と壁構造の折衷)	タイル(意匠見本)	復元	陰陽瓦葺	中庭、後庭		前家、橋家、後家各2階建て

建造物の所有者と修理費用負担者による分類は①全公型、③全個型。No.は資料目次と対応。

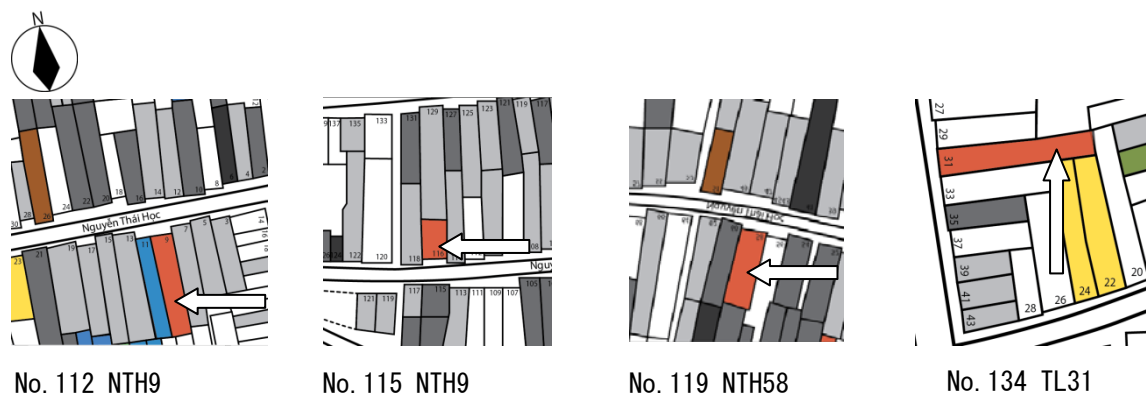


図 4-23-1 (a)内部、外観共に伝統的な様式に整備した事例の拡大位置図

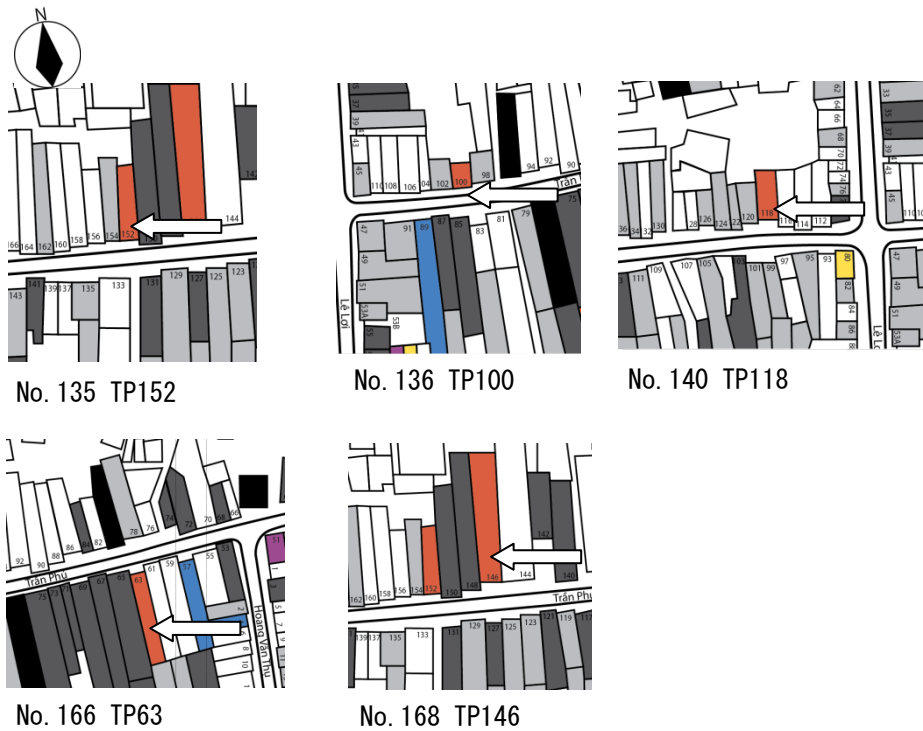


図 4-23-2 (a) 内部、外観共に伝統的な様式に整備した事例の拡大位置図 2

等級 3



(112) グエン・タイ・ホック 9  
(9 Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 23 撮影)



(115) グエン・タイ・ホック 116  
(116 Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 22 撮影)



(119) グエン・タイ・ホック 58  
(58 Nguyễn Thái Học)  
(H22. 11. 3 撮影)



(134) ティエウ・ラ 31  
(31 Tiểu Lai (Trần Quý Cáp))  
(H23. 2. 8 撮影)

等級 3



(135) チャン・フー 152  
(152 Trần Phú)  
(H22. 11. 8 撮影)



(136) チャン・フー 100  
(100 Trần Phú) (H23. 2. 23 撮影)



(140) チャン・フー 118  
(118 Trần Phú)  
(H22. 11. 8 撮影)



(166) チャン・フー 63  
(63 Trần Phú) (H23. 2. 23 撮影)

等級 4



(168) チャン・フー 146  
(146 Trần Phú)  
(H22. 11. 8 撮影)

等級 4

図 4-24 主要な通りに面した整備済み建造物  
(a) 内部、外観共に伝統的な様式の外観一覧



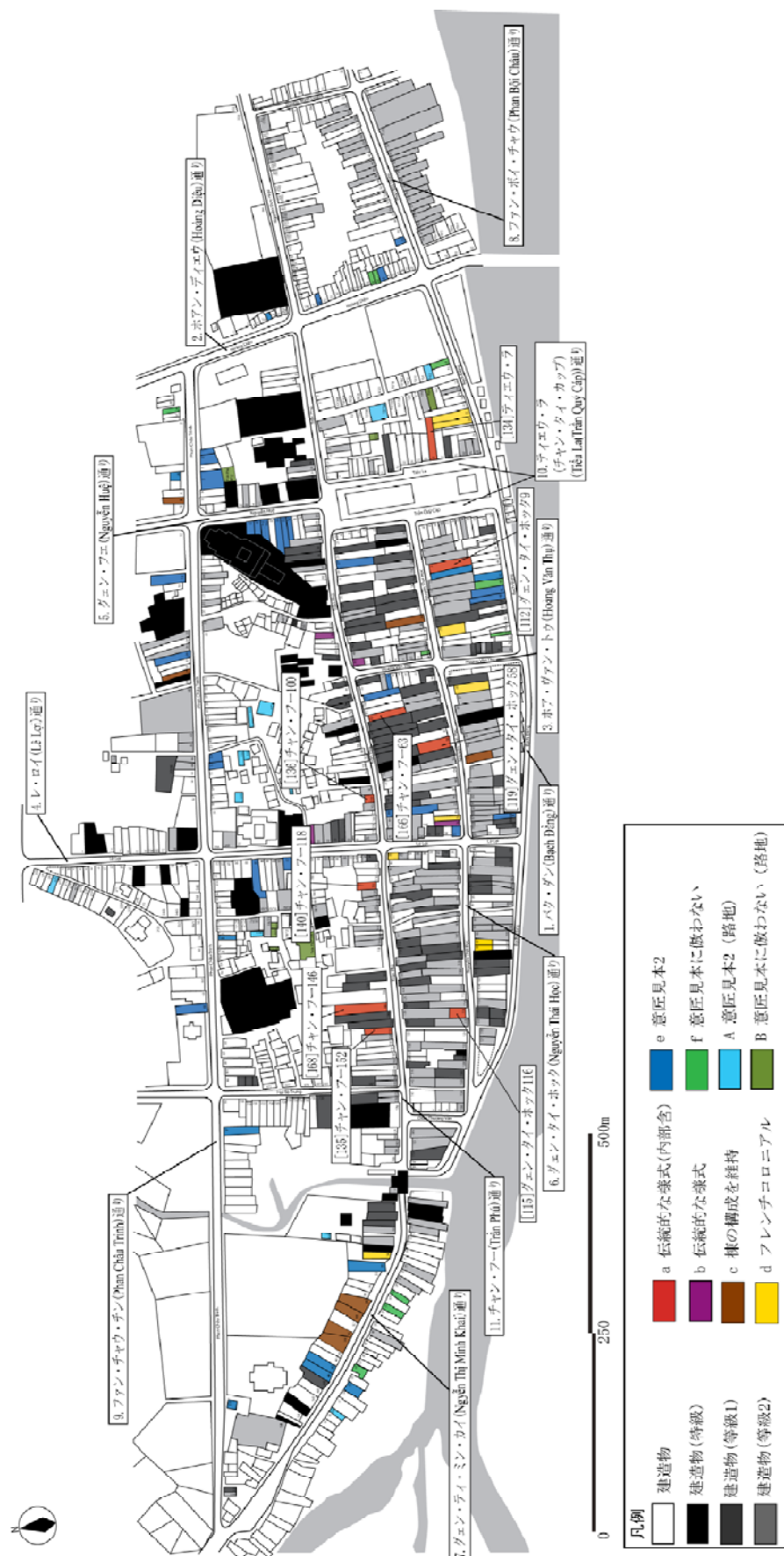


図 4-25 主要な通りに面した整備済み建造物の位置図(a)内部、外観共に伝統的な形式に整備  
(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋の位置を引き出し線で示しや縮尺、方位などの情報を加えた)

### 事例 全個型 (112) グェン・タイ・ホック 9 (9Nguyễn Tha'í Hóc)

グェン・タイ・ホック 9 は主要な通りに面した家屋である (資料集 112 番)。

保存地区 I の中央南側に位置する博物館として使われている等級 3 の町家で、1999 年に整備工事が行われた。図 4-26 の通り、外観は側壁がモルタル仕上げで、前面が木製の壁、陰陽瓦で葺かれるという伝統的な様式が用いられている。内部も前家、橋家、後家で構成され、中庭を有する伝統的な様式で整備されている。

全体が博物館として使用されているため居住空間はない。ただし、博物館の来館者や博物館の職員が使用する水回りは整備されている。他の整備点として前家の天井に伝統的な要素の一つである荷揚げ用の杵と囲いを設けている点が挙げられる。この荷揚げ用の杵は、他の格子状の蓋を被せている事例もあるが、グェン・タイ・ホック 9 のように常時開けている場合もある。後家の小屋組みは合掌造りである。また、部材の色から工事により部材ごと取り替えられていることが分かる。

外観は特級や等級 1 のように見えるが、実際には等級 3 である。整備内容を見ると材料の色から、整備後に加えたであろう部分が散見される。ただし、構造や床も伝統的な様式に整備されているため等級 3 には見えない。等級 3 は歴史的な価値が部分的に残るものであるため、全てが復元されたものではないが、周囲の環境に合わせて伝統的な様式に整備した部分が多いといえる。

整備報告書がなく、このまま継承されていくと、グェン・タイ・ホック 9 が等級 3 の家屋であることはわかなくなる恐れがある。

歴史的地区保存整備の手法として、伝統的な様式に外観を復元する手法を用いる場合、当初の建造物の状態を記すことが、歴史的地区全体の保存管理に必要だといえる事例である。



#### A. 外観

ファサードには側壁がモルタル仕上げで、前面が木製の壁、陰陽瓦で葺かれるという伝統的な意匠が用いられている。(撮影 H23.4.1)



#### B. 両隣の家屋

手前は等級 2、奥は等級 4 の家屋(e に該当)。等級 2 の家屋は前家の外側の塗装は薄い黄色、内部は青く維持管理に課題がある (撮影 H23.8.8)。

図 4-26-1 グェン・タイ・ホック 9 (9Nguyễn Tha'í Hóc)写真 1



#### A. 後家の小屋組

合掌造りである。また、部材の色から工により部材ごと取り替えられていることが分かる。(撮影 H23.4.1)



#### B. 前家荷揚げ用の枠

伝統的な要素の一つである荷揚げ用の枠に囲いを付けている。格子状の蓋を被せていることもあるが、常時開けている場合もある。(撮影 H23.4.1)

図 4-26-2 ゲン・タイ・ホック 9 (9Nguyễn Tha'í Hợc)写真 2

#### (b)外観のみ意匠見本 1

外観、特にファサードが伝統的な様式に整備された建造物である。等級 3 及び等級 4 の整備済み建造物 74 件中 4 件が該当する（表 4-8 参照）。立地はチャン・フー通り（表 4-12 では TP）が 2 件、レ・ロイ通り（表 4-11 では LL）、ゲン・タイ・ホック通り（表 4-12 では NTH）は各 1 件でと来遠橋から東側の地区に散らばっている。外観は図 4-27 で示す通り陰陽瓦を葺き木製の扉と壁、蔀戸を用い、中央或いは左右どちらかに板戸が設けられている。床の仕上げは利便性の点からか、土間や磚ではなく、タイルかコンクリートが用いられている。外観のみ整備するため、該当する事例は敷地の大きさに関わらない。

所有者と整備費用負担者で見るとチャン・フー通りの整備済み建造物の 2 件は、①全個型であることに注目できる。つまり、史跡管理事務所は整備手法として、外観を伝統的な整備にすることを選択している。

一方、レ・ロイ通りとゲン・タイ・ホック通りの整備済み建造物の 2 件は、③全個型のため、個人の意向で外観を伝統的な様式に整備した。立地を見ると図 4-64、図 4-65 で示す通り 101 番のレ・ロイ 29（LL29）は北側が特級、南側が等級 2 となっており、周囲の環境に合わせるという整備基準に忠実である。151 番のゲン・タイ・ホック 78（NTH78）は東側、西側共に等級 3 であるが、道路を挟んで南側は等級 2 が並び、さらにゲン・タイ・ホック通りは特級から等級 2 の建造物等が全体の 70 パーセント近くを占め、観光客が多い通りであるため、観光客を意識して伝統的な様式に整備したと考えられる。

用途は、表 4-11 で示す通り全ての建造物において店舗兼住居と共通している。具体的には、前家や前家の前部を店舗や画廊として用い、後部を住居としている。

以上から、史跡管理事務所は、観光客の多い通りに位置する等級 3 と等級 4 の外観を伝統的な様式に整備しており、観光客を意識した整備手法といえる。個人で整備する場合も史跡管理事務所と同様に外観を伝統的な様式に整備しており、観光客を意識した整備手法となっている。

事例として資料集の主要な通りに面した家屋のうち 101 番のレ・ロイ 29 と 167 番のチャン・フー 51 番を扱う。

表 4-11 主要な通りに面した整備済み建造物(b) 外観をのみ意匠見本 1

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成
101	LL29	C3	2004	店舗兼住居	③-1	復元。壁面、開口部共に木材	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	不明	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家平屋。付属屋
137	TP54	C3	2004	画廊(兼住居)	①	復元	不明	不明	不明	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家
151	NTH78	C4	2003	画廊兼住居	③-1	復元	壁構造	コンクリート	不明	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家2階建
167	TP51	C4	2004	店舗兼住居	①	復元	壁構造で小屋組み復元	タイル	復元なし	陰陽瓦葺き	なし	なし	前家中2階

建築物の所有者と修理費用負担者による分類は①全公型、③全個型。No.は資料目次と対応。

### 等級 3



(101)レ・ロイ29(29Lê Lợi)  
(H23. 2. 1 撮影)



(137) チャン・フー 54  
(54Trần Phú)  
(H23. 2. 23 撮影)

### 等級 4



(151)グエン・タイ・ホック78  
(78Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 22 撮影)



(167) チャン・フー 51  
(51Trần Phú)  
(H23. 2. 23 撮影)

図 4-27 主要な通りに面した整備済み建造物事例(b) 外観のみ意匠見本 1 の外観一覧



図 4-28 (b) 外観のみ意見見本 1 に整備した事例の拡大位置図



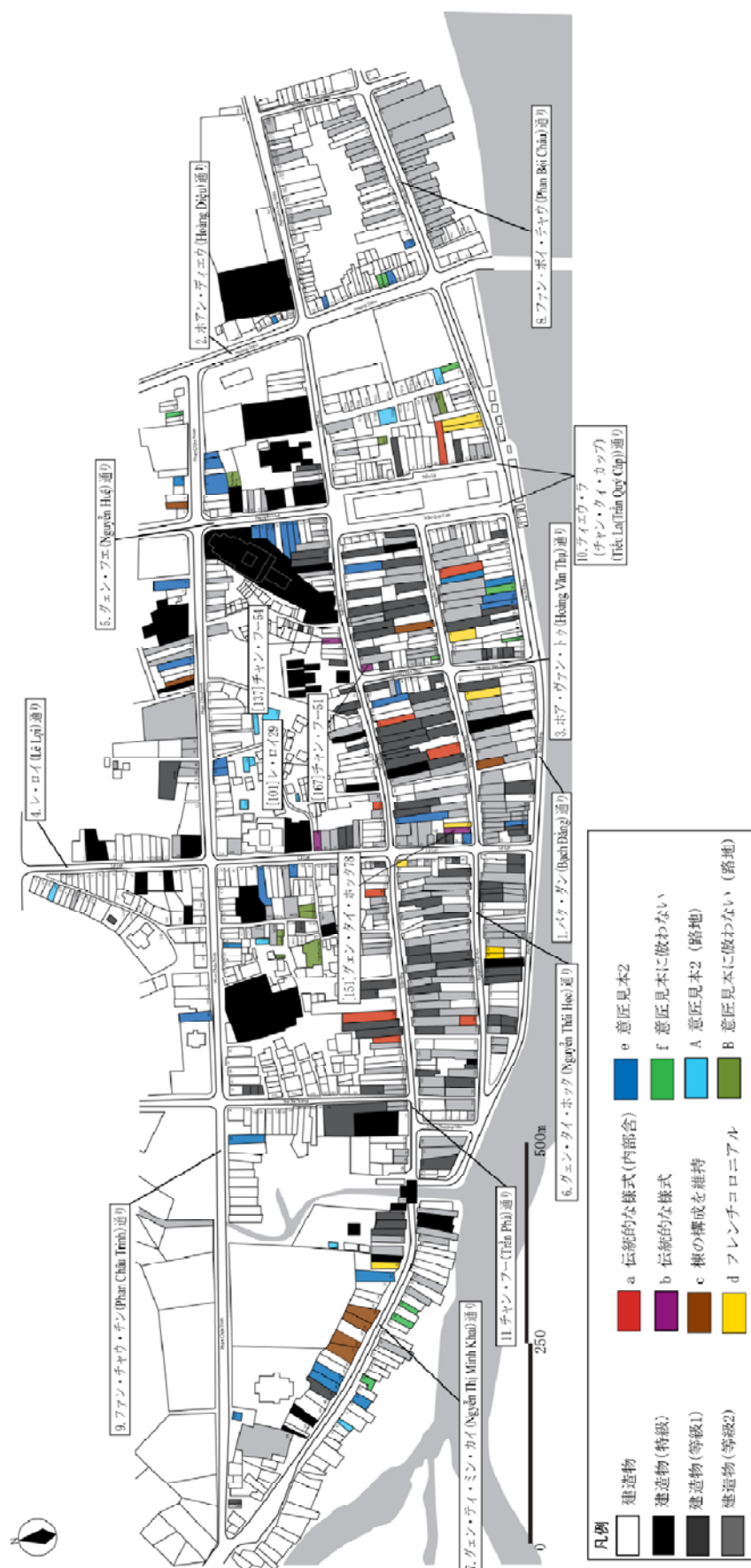


図 4-29 主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (b) 外観のみ意匠見本 1

(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

### 事例 国個型 (101) レ・ロイ 29 (29Lê Loi)

主要な通りに面した事例で等級3の建造物で2004年に整備工事が行われた。保存地区Ⅰの中央を南北に貫くレ・ロイ通りに面して位置する。図4-30A及びCで示す通り外観は側壁をモルタル仕上げ、前部壁面は板壁で、左右は蔀戸である。左右の蔀戸は伝統的な様式の場合は腰壁を設けているものも見られるが、レ・ロイ29では腰壁を設けていない(図4-30C)。蔀戸をあけると前面は全て解放される(図4-30D)。後部には橋家はなく、直接2階建ての付属屋が付く。南北方向の主要な通りに面している場合、敷地は間口が広く奥に長い形式ではなく、東西の通りの敷地の余白を埋めるように建てられているため変形している。このレ・ロイ29も同様に変形した敷地である。図4-30Aのように外観は伝統的な様式だが、図4-30Dのように内部はトラス構造である。



#### A. 外観

側壁はモルタル仕上げ、前面は板を使用した蔀戸で、両側に敷居を設けず全て解放するという、伝統的な要素を保ちながらも利便性を考慮した形である。(撮影 H23.4.7)



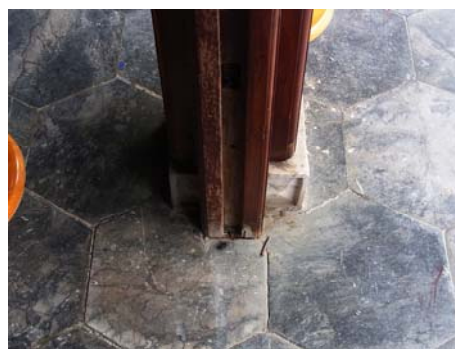
#### B. 前家の小屋組

前家の小屋組みは天井を張らずに見せているが、トラスになっており、伝統的なものとは異なる。(撮影 H23.4.7)



#### C. 外観北面

前家に付属屋があり、付属屋は2階建てになっており、整備基準を維持しながら、居住者の利便性を高めている。(撮影 H23.4.7)



#### D. 正面開口部下部

正面開口部に設けられた蔀戸用の溝。床のタイルは六角形。腰壁がなく伝統的な様式とは異なるが、利便性と伝統的な要素を両立させていると言える。(撮影 H23.4.7)

図4-30 レ・ロイ29 (29Lê Loi)写真

#### 事例 全公型 (167) チャン・フー51 (51Trần Phú)

主要な通りに面した等級4の建造物である(資料集167番)。2004年に整備工事が行われた。図4-31A、Bで示す通り外観は板壁、腰壁の付いた落し戸を用い、陰陽瓦が葺かれている。内部の構造を見るとCの通り合掌造りが整備されているものの建具などは整備されていない。等級4のため全て新たに整備したと考え、史跡管理事務所が観光客の多いチャン・フー通りに位置しているため、外観を伝統的な様式に整備したと考えられる。



##### A. 外観

側壁はモルタル、前壁は木材を使用し、陰陽瓦を葺いた。周囲に調和させたファサード。(撮影 H23.2.20)



##### B. 西側からの外観

西側からの外観。切妻屋根に陰陽瓦が葺かれている。敷地の大きさ制約上、前家と付属屋のみである。(撮影 H23.2.20)



##### C. 小屋組み

内部も小屋組みが復元されているが内装や棟の構成の点から、内部と外観の両方を伝統的な様式に整備したものではないとした(撮影 23.2.20)。

図4-31 チャン・フー51 (51Trần Phú)写真



### (c) 古都ホイアンの町家に準じる棟の構成

この分類は、等級3及び等級4の整備事例のうち、主要な通りに面したものにのみ該当する。外観は管理事務所が提示した古都ホイアンに調和させた意匠見本2を採用していないが、棟の構成を見ると伝統的な町家と同様に前家、橋家、後家、中庭を持つ事例である。なお、中庭も室内化し、前家、橋家、後家全てが一体化している事例も含める。床はタイルが敷かれている。全94件中、5件と少なく、図4-32、図4-34で示す通りゲン・ティ・ミン・カイ通り（表4-12ではNTM）が1件、ファン・チャウ・チン通り（表4-12ではPCT）が2件、ゲン・タイ・ホック通り（表4-12ではNTH）が2件と点在している。

等級で見ると等級3が3件、等級4が2件である。所有者と整備費用を見ると、全てが全公型である。建造物の用途は表4-12で示す通り店舗兼住居や店舗、工場、人民委員会などで、住居としては使用されていない。棟の構成が古都ホイアンの町家に準じるほど規模が大きいため店舗や人民委員会、工場といった公的な用途に用いるといえる。

(c)に該当する事例全ては、全公型にあたり、史跡管理事務所が整備内容を管理していることから、棟の構成も史跡管理事務所では歴史的な要素の一つとして捉えられていることがわかる

つまり、史跡管理事務所は、図4-33で示すように見た目では分かりにくい棟の構成を歴史的要素として捉え、継承している、或いは整備していることがわかる。ここで課題となるのはやはり整備記録の作成が行われていないことである。何を継承しているか、何を整備したかという記録がないと、整備されたものが経年変化により歴史的な要素として捉えられ、歴史的地区の継承として課題が生まれる懸念がある。

表4-12 主要な通りに面した整備済み建造物(c) 古都ホイアンの町家に準じる棟の構成

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具（階段含む）	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成	備考
123	NTM34	C3	2003	店舗兼住居	①	壁面モルタル。開口部を木材。	壁構造。小屋組み一部復元。1階根太天井垂木端部彫刻復元	タイル	木製。復元なし	陰陽瓦	中庭と後庭あり。	後庭に設置。井戸も後庭にあるが隣家と半分にして使用している	前家、橋家、後家	NTM36と井戸及び橋家を共同使用。
125	NTM36	C3	2003	店舗兼住居	①	フレンチコロニアルを基本とした意匠見本の開口部	壁構造	意匠見本タイル	木製。復元なし	陰陽瓦	中庭、後庭あり	後庭に設置。井戸も隣家と共同	前家、橋家、後家。いずれも平屋	NTM34と井戸及び橋家を共同使用。
129	PCT8	C3	2005	飲食店兼店舗	①	壁面モルタル仕上げ。開口部は木材	壁構造	タイル（意匠見本）	木製。復元なし	陰陽瓦葺	中庭あり。ただし、屋根が掛けられている	中庭部分にある	前家2階建て。中庭あり。	—
130	PCT34	C3	2004	店舗	①	フレンチコロニアル	壁構造	タイル（柄入り）	木製。復元なし	陰陽瓦葺	中庭あり。ただし、屋根が掛けられている	不明	前家、橋家、中庭	—
150	NTH26	C4	1997	人民委員会	①	現代的。復元なし	壁構造	1階：2階：板張り	木製。復元なし	陰陽瓦葺	中庭：室内化	内部に設けられている。	前家、橋家、後家（各2階建て）	—
152	NTH51	C4	2004	工場	①	フレンチコロニアル	壁構造。橋家トラス構造	1階：タイル 2階：タイル、板張り	木製。復元なし	陰陽瓦葺	中庭	内部に設けられている。井戸が中庭にある	前家、橋家、各2階建て	—

建築物の所有者と修理費用負担者による分類は①全公型。No.は資料目次と対応。

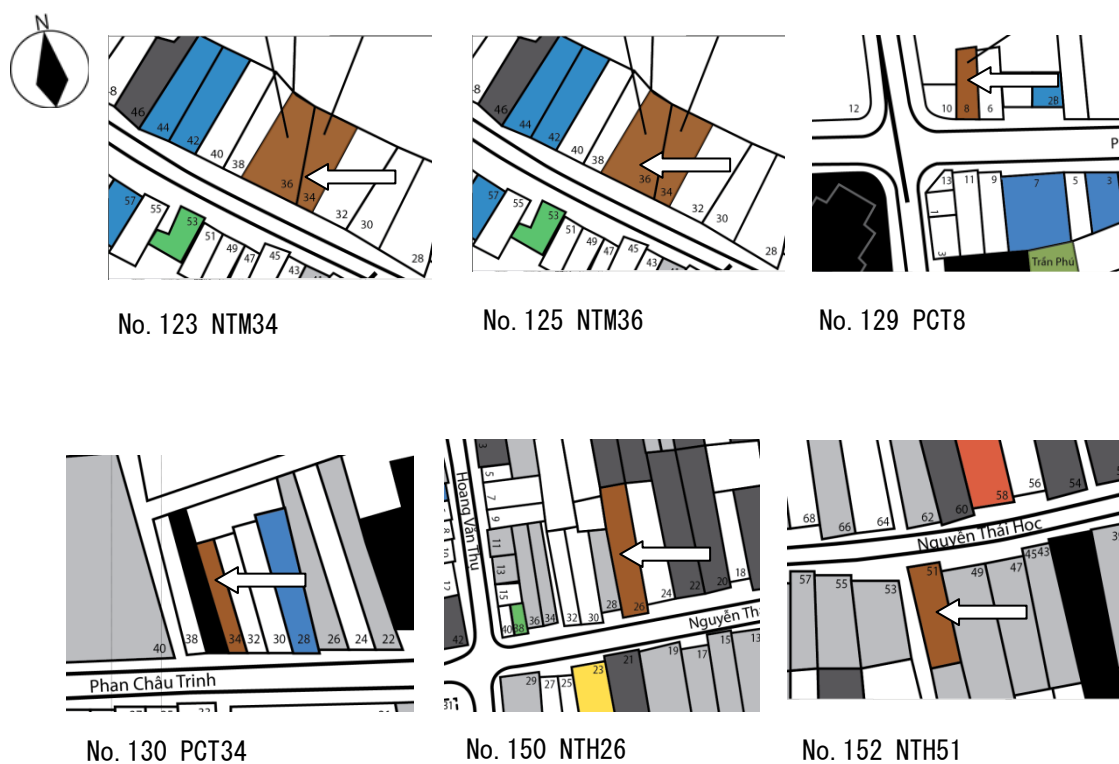


図 4-32 (c) 古都ホイアンの町家に準じる棟の構成事例の拡大位置図

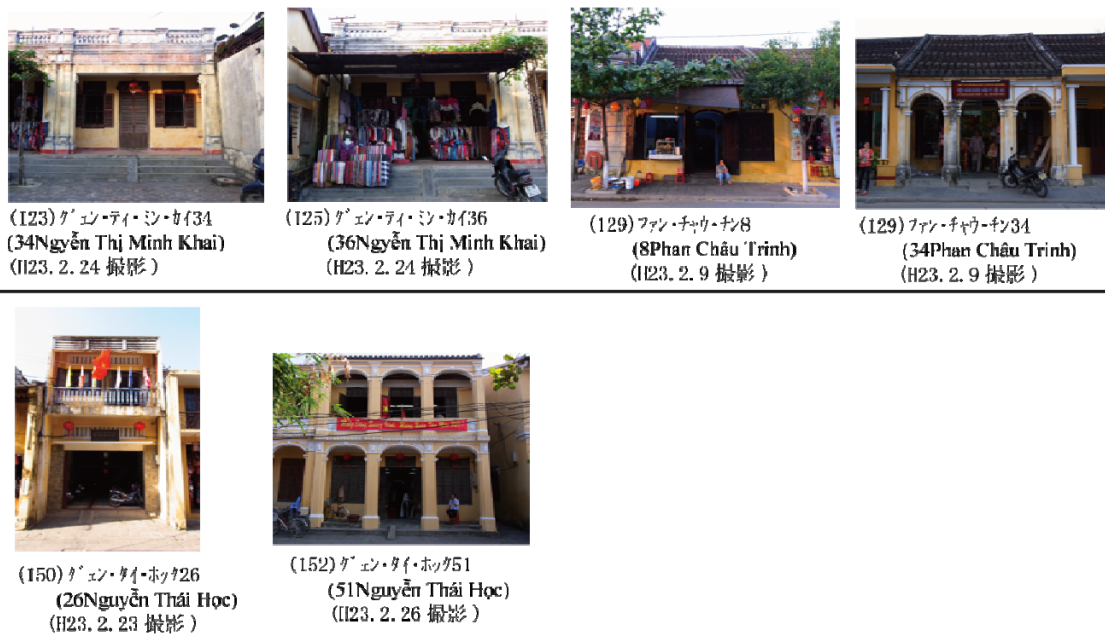


図 4-33 主要な通りに面した整備済み建造物  
(c) 古都ホイアンの町家に準じる棟の構成の外観一覧

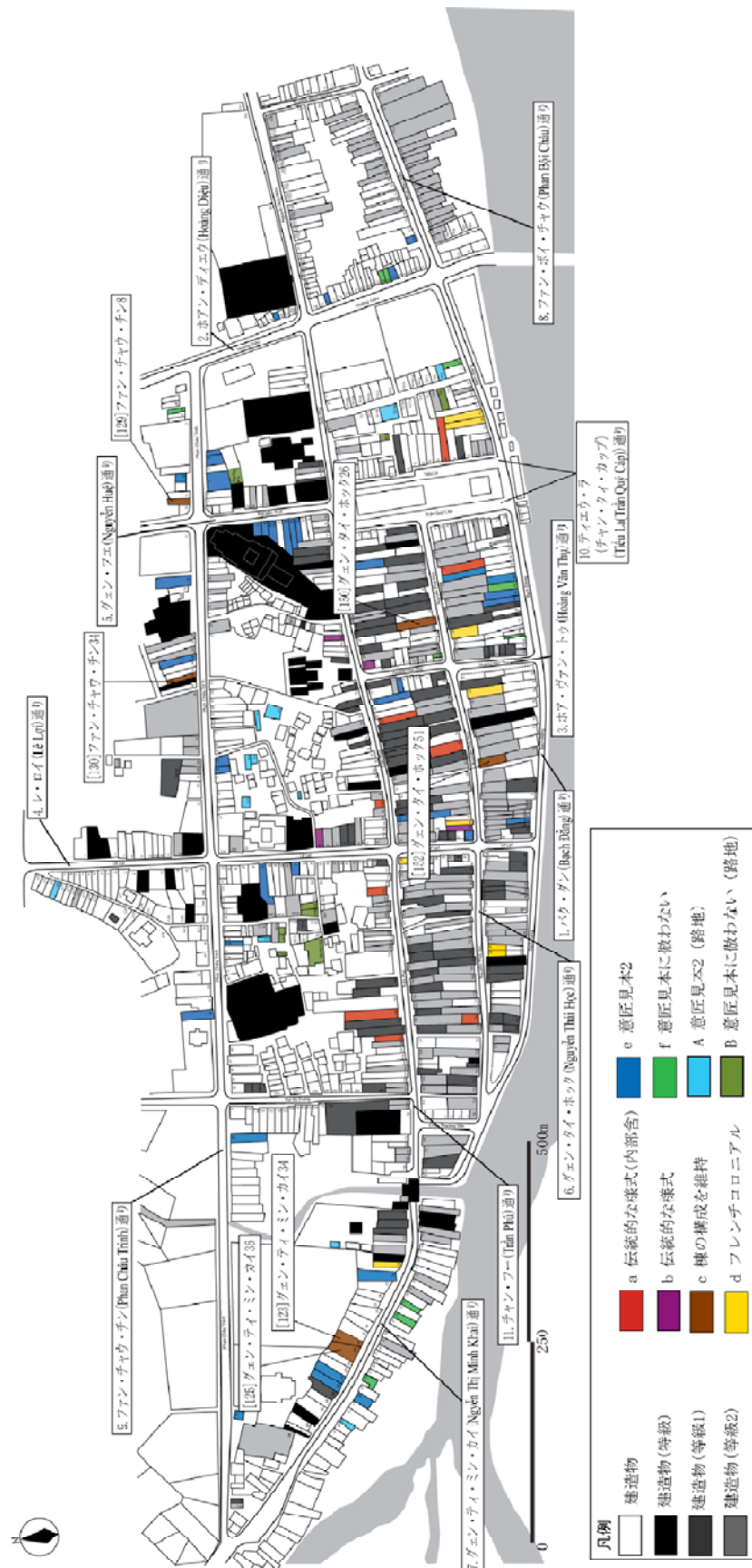


図 4-34 主要な通りに面した整備済み建造物の位置図(c) 古都ホイアンの町家に準じる棟の構成  
(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

## 事例 全公型 (150) グェン・タイ・ホック 26 (26Nguyễn Thị Học)

主要な通りに面した等級 4 の建造物である（資料集 150 番）。①全公型で 1997 年に整備工事が行われた。1997 年以降は修理を施された跡が見られない。建物全体が人民委員会の事務所として使われており、前家、橋家、後家が維持されているが。前家と後家は 2 階建てとなり、橋家部分は通路として屋根をかけられている。中庭にも屋根が掛けられ、室内化している。つまり、伝統的な家屋のように棟が別個に設けられ、屋根も棟ごとに掛けられているが、中庭にも屋根が掛けられ屋内化されることで全体が一つの建物となっている。図 4-35 で示す通り壁の位置などで、前家、橋家、後家、中庭がわかる。道路の北側に位置しており、図面左の入り口が南側、右が北側である。外観は図 4-36A で示すように伝統的な様式ではない。内部も図 4-36B で示す通り伝統的な様式の整備は行われていない。また、図 4-36C で示すように屋根瓦の一部をガラスにして採光に配慮され事業所として使い易い。

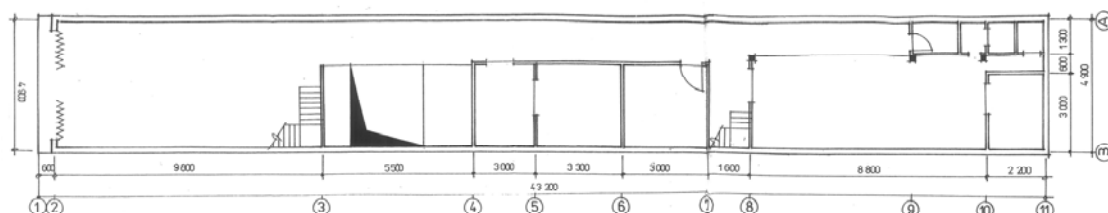


図 4-35 グェン・タイ・ホック 26 (26Nguyễn Thị Học) 1 階平面図



### A 外観

側壁、前壁共にモルタル仕上げ。ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式。開口部等は伝統的な様式とは異なる（平成 23 年 2 月 23 日撮影）。



### B 内部

中庭は室内化しているが 1 階から 3 階まで吹き抜けがあり、中庭による換気や採光は維持され、機能は受け継がれている（平成 22 年 11 月 3 日撮影）。



### C 屋根瓦

屋根は陰陽瓦葺で一部ガラスが張られ採光機能を持たせている（平成 22 年 11 月 3 日撮影）。

図 4-36 グェン・タイ・ホック 26 (26Nguyễn Thị Học) 写真

#### (d) 古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード

意匠見本 1 や意匠見本 2 の中では明示されていないにも関わらず、図 4-82 で示す通り、ファサードをフランス植民地時代に作られたフレンチコロニアル様式に変更した事例である。従って、内部は現代的であり、壁構造で 1 階床はタイルが敷かれているものが表 4-13 で示す通り 9 件中 6 件である。建具を伝統的な様式で整備している場合もあるが、階段の手すりが 4 件、荷揚げ杵が 1 件と部分的である。

この事例の内訳は、①全公型が 6 件、③全個型が 3 件である。立地は、図 4-80、図 4-83 で示す通りグエン・タイ・ホック通りが 5 件、バク・ダン通りが 2 件、レ・ロイ通りが 1 件、グエン・ティ・ミン・カイ通りが 1 件となり、主要な通りの建造物数に対して等級の高い建造物が多いグエン・タイ・ホック通りに最も多く立地している。

歴史地区の保存整備と、当該地区の歴史を継承するという点で、フレンチコロニアル様式のファサードを、伝統的な様式に戻すことが望ましいという考え方がある。一方で、地区の歴史としてフレンチコロニアル様式を残す選択もある。9 件の事例が見られることから、この看板建築を史跡管理事務所は歴史的な要素と捉えている。しかし、古都ホイアンの成立時期に作られていなかったものを増やすことは、当初の状態と異なるものを作り出すこととなり、フレンチコロニアル様式のファサード整備を進めることは歴史地区の継承の観点から望ましくない。

なお、意匠見本 2 の陰陽瓦と黄色いモルタル仕上げの壁は、このフレンチコロニアル様式の影響を受けていると考えられる。



表 4-13 主要な通りに面した整備済み建造物

(d) 古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具（階段含む）	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成
96	BD22	C3	2003/2004	不明	①	フレンチコロニアル	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
97	BD24	C3	2003/2004	不明	①	フレンチコロニアル	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
104	LL80	C3	2006	店舗兼住居	③-1	フレンチコロニアル	根太天井。小屋組み一部復元。柱梁構造と壁構造の折衷	2階：板張り 1階：	階段の手すり復元	陰陽瓦葺き	なし	2階内部	前家のみ2階建て
113	NTH76	C3	2000	店舗	③-1	フレンチコロニアル	壁構造	タイル	階段の手すり復元	陰陽瓦葺き	中庭	不明	前家（2階建）、橋家、後家平屋
116	NTH35	C3	2003	店舗兼住居	①	フレンチコロニアル	壁構造。1階前家は根太天井	2階：板張り 1階：タイル	階段手すり復元	陰陽瓦葺き	中庭	不明	前家と付属屋（2階建）、橋家（2階建て）、後家（平屋）
117	NTH97	C3	2003	店舗（兼住居）	①	フレンチコロニアル	1階前家天井根太。柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	前家階段復元なし	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家2階
118	NTH99	C3	2003	店舗（兼住居）	①	フレンチコロニアル	1階根太天井。	1階：タイル 2階：不明	階段手すり復元	陰陽瓦葺き	中庭	不明	前家、橋家、後家。前家は2階建て
120	NTH23	C3	2005/2005	店舗	①	フレンチコロニアル	復元。柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	復元	陰陽瓦葺き	なし	不明	前家
126	NTM18	C3	2006	画廊兼店舗	③-1	フレンチコロニアル	壁構造。根太天井	タイル	復元（荷揚げ枠）	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家、橋家、後家総2階建

建築物の所有者と修理費用負担者による分類は①全公型、③全個型。No. は資料目次と対応。

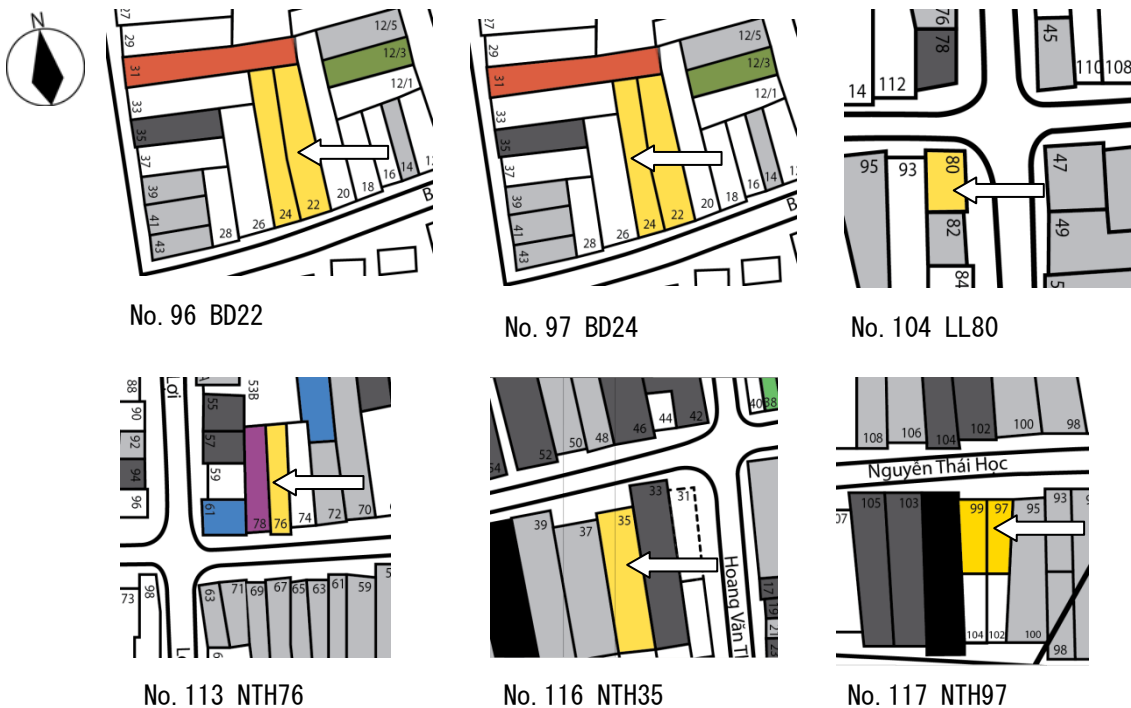


図 4-37-1 (d) 古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサード事例の拡大位置図 1



図 4-37-2 (d) 古都ホイアンのフレンチコロニアル様式ファサード事例の拡大位置図 2

### 等級 3



(96) Bạch Đằng 22, 24  
(22, 24 Bạch Đằng)  
(H23. 2. 13 撮影)



(104) Lê Lợi 80 (80 Lê Lợi)  
(H23. 2. 8 撮影)



(113) Nguyễn Thái Học 76  
(76 Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 22 撮影)



(116) Nguyễn Thái Học 35  
(35 Nguyễn Thái Học)  
(H22. 11. 3 撮影)



(117) Nguyễn Thái Học 97  
(97 Nguyễn Thái Học)  
(H22. 11. 4 撮影)



(118) Nguyễn Thái Học 99  
(99 Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 23 撮影)



(120) Nguyễn Thái Học 23  
(23 Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 23 撮影)



(126) Nguyễn Thị Minh Khai 18  
(18 Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 1. 29 撮影)

図 4-38 主要な通りに面した整備済み建造物事例  
(d) 古都ホイアンのフレンチコロニアル様式ファサードの外観一覧

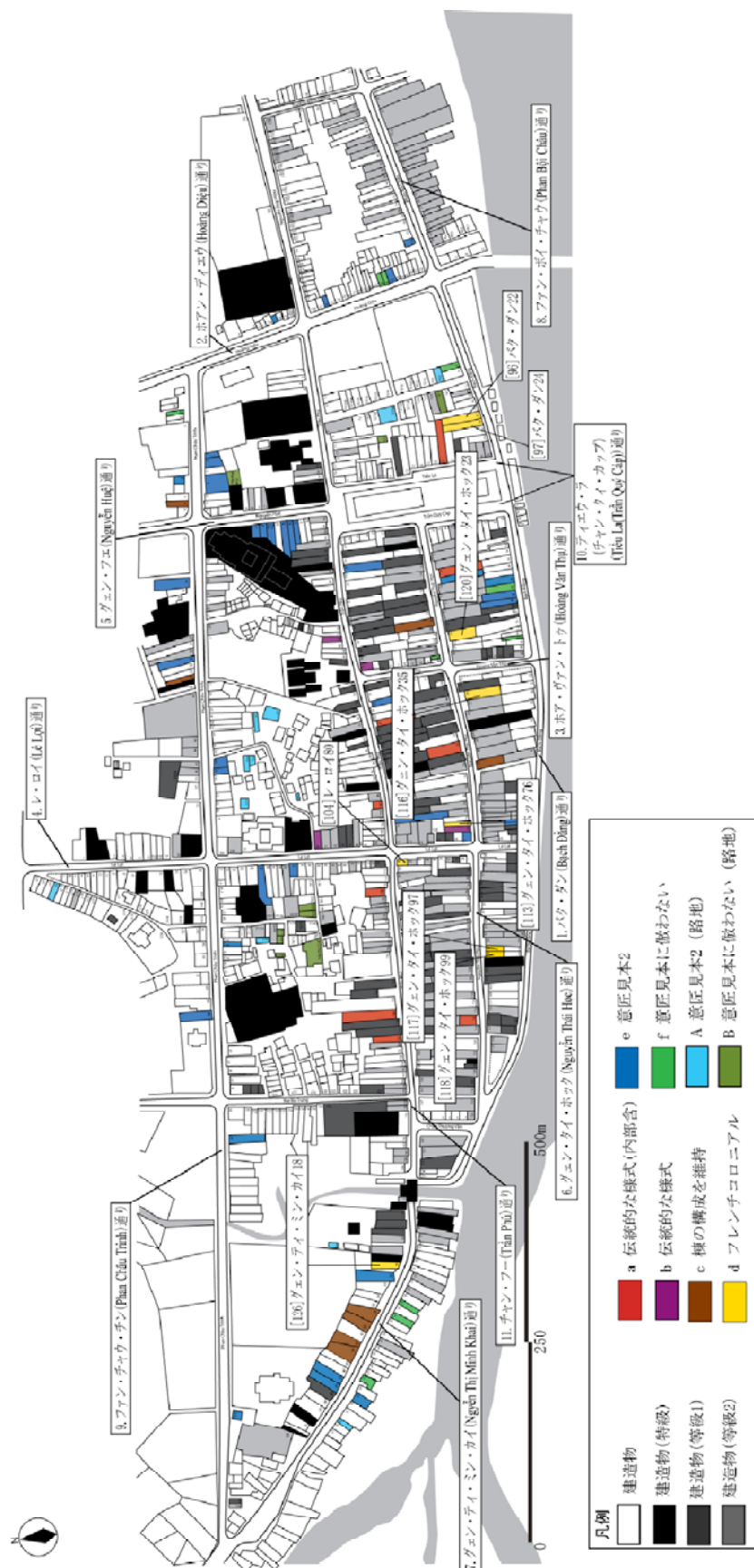


図 4-39 主要な通りに面した整備済み建造物の位置図

(d) 古都ホイアンのフレンチコロン様式のファサード

(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)



### 事例 全個型(104)レ・ロイ 80 (80Lê Lợi)

事例として主要な通りに面した家屋のレ・ロイ 80 (資料集 80 番) を取り上げる。

2006 年に整備された等級 3 の家屋であり、全個型の事例である。店舗兼住居として使用されている。レ・ロイ通りとチャン・フー通りの交差点の南西に位置するため、図 4-84 で示す通り二つの通りに位置する外観が整備されている。図 4-85 から 88 で示すように木材で仕上げられた内部は、根太が張られた天井は歴史的な要素があると言えるが、他の部分では、木材を使用しながらも現代的な手法、合板を用いるなどがされ、保存する要素は見られない。



#### A. 外観

敷地の角に位置し、両面がフレンチコロニアル様式である。



#### B. 1 階天井

根太が張られており伝統的な要素の一つと思われる。



#### C. 小屋組

天井が張られずに小屋組みが見える形式で作られ、伝統的な考え方が用いられている。



#### D. 2 階上部

壁を作り個室が作られていることがわかる。開放的な室内で個室を持つことが要求されている。



#### E. 柱と梁の処理

伝統的な工法ではない箇所も多い。

図 4-40 レ・ロイ 80 (80Lê Lợi)写真

#### (e) 及び (A) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部

外観を意匠見本 2 に倣い整備された事例であり、通りに面したものは(c) (表 4-14, 4-15)、路地に面したものを (A) (表 4-16) とした。

(c) は、通りに面した等級 3 及び等級 4 の整備済み建造物全 74 件中 37 件の建造物が該当する。路地に面したものにおいては、20 件中 13 件が該当する。合計すると 50 件となり、整備内容を分類した中で最も多い。(c) を所有者と整備費用負担者でみると、全公型が 11 件、国個型が 3 件、全個型が 21 件、個公型が 2 件である。(A) は、路地に面した等級 3 及び等級 4 の整備済み建造物全 20 件中 12 件が該当し、12 件全てが全個型である。

つまり、整備費用だけを見ると個人による整備費用の負担事例が 50 件中 36 件と半分を超え、個人が整備費用を負担する場合は、伝統的な様式に整備されていない事例が最も多いといえる。整備済建造物等の立地がチャン・フー通り以外は周囲に特級、等級 1、等級 2 の建造物等が見られないことから ((c) は図 4-89、図 4-90、図 4-93。(A) は図 4-96、図 4-97、図 4-99)、周囲に合わせるという基準が伝統的な様式に整備する必要はなく陰陽瓦を葺くという最低限の規則を守っていれば問題ないと解釈できるためである。ただし、整備基準を最低限守る手法として、等級 3 は部分的に残る歴史的要素を継承し、道路に面した棟に陰陽瓦を葺く、等級 4 は道路に面した棟に陰陽瓦を葺くのみで、意匠見本に倣う必要がないにもかかわらず、外観を意匠見本 2 のように、古都ホイアンの伝統的な様式を現代的につくりかえたものに整備しているという基準に沿っており、歴史的地区保存整備への関心が見られる整備だともいえる (図 4-91、図 4-92、図 4-98)。

また、史跡管理事務所が整備内容を管理しやすい場合全公型であっても、伝統的な様式に整備せずに意匠見本 2 を採用している点にも注目できる。つまり、史跡管理事務所は、史跡管理事務所が整備後の意匠を決められる場合、全てを伝統的な様式に整備するのではなく、周囲の環境に合わせて、伝統的な様式に整備する建造物かどうかを判断していると言える。この事例は、11 件あり、位置を確認すると周囲に等級の高い建造物が見られないことが分かる。また、通りごとに合計すると、ファン・チャウ・チン通りが 11 件と最も多い。

意匠見本 2 の共通点は、壁面をモルタルで仕上げ、フレンチコロニアルを真似た黄色い化学塗料を用いて塗装し、開口部は木材を使用し、茶色い塗料で仕上げている点である。黄色い塗料の色味は実際のフレンチコロニアル様式の家屋で用いられているものよりも濃い。木部は、2010 年の時点では防蟻剤と防水剤を兼ねた無色透明のワニス仕上げである。このワニスは時間の経過と共に赤い色を経て薄い茶色から濃い茶色になる。このワニス仕上げとはやや色味の異なる、白が入った仕上げがファン・チャウ・チン通りの 2 件 (ファン・チャウ・チン 1、ファン・チャウ・チン 3) に見られた。ファサードにおける開口部の様式は主に観音開きで、中央と左右の合計 3 箇所設けられる。中央の開口部は基本的に建造物の出入りに使用され、左右の開口部は通風や採光に用いられる。建造物が 2 階建ての場合は 2 階の開口部にガラスを用いているが、1 階の開口部にガラスを用いている例もファ

ン・チャウ・チン通りに1件見られた。

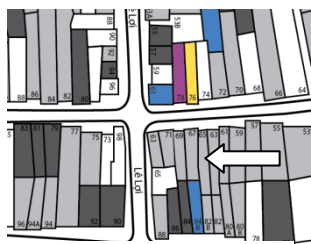
表 4-14 主要な通りに面した整備済み建造物  
(e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部 (前半)

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成
95	BD84b	C3	2001	店舗兼住居	③-1	2階は木製で復元。1階開口部は鉄製。	壁構造。復元なし	コンクリート	2階ベランダは木製の手すり	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家2階建
98	HD41	C3	2005	店舗兼住居	③-1	意匠見本2。壁面モルタル仕上げ。開口部は木材。	壁構造。1階は根太天井	1階店舗部分はコンクリート。居住部分はタイル。2階はタイル	階段の手すりは歴史的、伝統的	陰陽瓦葺き	なし	2階	前家のみ2階建て
99	HVT4	C3	2004	店舗兼住居	①	一部復元。壁面、開口部共に木材	壁構造。前家付属屋に中2階あり	前家は四角いタイル	前家と橋家の境目は復元	陰陽瓦葺き			前家平屋
100	LL52	C3	2001	店舗(兼住居)	③-1	意匠見本2。壁面モルタル仕上げ。開口部は木材。	壁構造	コンクリートとタイル	復元なし	陰陽瓦葺き	なし	不明	前家のみ
102	LL61	C3	2004	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木材	壁構造	タイル	復元なし	陰陽瓦葺き	なし	内部に設けられている	前家、付属屋2階建て
103	LL42	C3	2006	店舗倉庫	③-1	壁面モルタル仕上げ。意匠見本2。中央観音扉。2階ベランダは木製。	壁構造	タイル	後部扉復元なし。	陰陽瓦葺き	なし	後部に設けられている	前家のみ2階建て
106	NH16	C3	2005	店舗(兼住居)	①	意匠見本2	不明	不明	不明	不明	不明	不明	前家
107	NH20	C3	2005	店舗(兼住居)	①	左右開口部部戸復元	不明	タイル	不明	陰陽瓦	不明	不明	前家平屋
108	NH22	C3	2005	飲食店兼店舗	①	開口部復元。柱はモルタル仕上げ	小屋組み復元。壁際は省略している。柱はなく壁構造。	タイル	付属屋との境目は木製で一部復元。	陰陽瓦葺き	不明	後部に飲食店の調理場	前家のみ。後部は中2階を設けている。
109	NH24	C3	2005	店舗(兼住居)	①	壁面モルタル仕上げ。開口部は左右が蔀戸、中央は観音開きの復元	壁構造	タイル	—	陰陽瓦葺き	—	—	前家のみ
110	NH14	C3	2005	店舗(兼住居)	①		壁構造	タイル	—	陰陽瓦葺き	—	—	—
111	NH12	C3	2006/2008	店舗(兼住居)	①	壁面モルタル仕上げ。復元なし。	小屋組はあるが壁構造。中2階あり	灰色のタイル	なし	陰陽瓦葺き	不明	不明	前家、付属屋平屋
122	NTM20	C3	2003	店舗兼住居	③-1	壁面モルタル仕上げ	壁構造	タイル	階段手すり、歴史的、伝統的	陰陽瓦葺き	—	不明	前家(中2階)、後家
127	NTM44	C3	2006	住居	③-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木材	一部復元。壁構造。小屋組みあり。	タイル	階段手すり復元。1階根太天井。	陰陽瓦葺き	なし	内部に設けられている	前家と付属屋
128	PCT7	C3	1997/2007/2008	店舗兼住居	②-1	壁面モルタル仕上げ。開口は木材	壁構造。中2階あり	柄入りタイル	階段手すり歴史的、伝統的要素あり	陰陽瓦葺き	なし	内部に設けられている	前家のみ
131	PCT3	C3	2006	住居	③-1	壁面モルタル仕上げ。開口部は木材	壁構造。中2階あり。中2階は根太天井	タイル	復元なし	陰陽瓦葺き	なし	内部に設けられている	前家の連棟
132	PCT28	C3	2006	住居	③-1	意匠見本2	壁構造	タイル	復元なし	陰陽瓦葺き	なし	内部に設けられている	前家。後部は2階あり

表 4-15 主要な通りに面した整備済み建造物  
(e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部(後半)

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成
133	PCT53	C3	2006/2008/2010	公安	①	意匠見本2	壁構造	タイル	復元なし	陰陽瓦葺	なし	内部に設けられている	東側は平屋。西側は2階建て
138	TP27	C3	2005	飲食店(兼住居)	③-1	壁面モルタル仕上げ。開口部は木材	一部復元。小屋組み、柱など	コンクリート	なし	陰陽瓦葺	不明	後部に設けられている	前家
139	TP57	C3	2005/2008	事務所	①	フレンチコロニアル	1階根太天井。	タイル(意匠見本)	復元	陰陽瓦葺	中庭	内部に設けられている	前家、橋家、後家(2階建て)
141	TP89	C3	2007	店舗兼住居	①	意匠見本2	壁構造。小屋組み復元。1階根太天井	1階:タイル張り(意匠見本)、2階板張り	荷揚げ枠	陰陽瓦葺	中庭	内部に設けられている	前家、橋家、後家2階建て
142	BD46	C4	2004	飲食店兼住居	④-1	フレンチコロニアル	小屋組み一部復元。壁構造	前家:コンクリート、タイル	一部復元。扉、後家の荷揚げ枠	陰陽瓦葺	中庭	内部に設けられている	前家、橋家、後家、橋家2、後家2。後家2階建て
143	BD48	C4	2004/2006	飲食店兼住居	②-1	意匠見本2	一部復元。前家:後家:根太天井	前家:後家:タイル(意匠見本)	一部復元。後家の荷揚げ枠、階段の手すり	陰陽瓦葺	中庭	中庭部分にある	前家、橋家、後家2階建て
144	BD42	C4	2006/2008	店舗(兼住居)	③-1	フレンチコロニアル	壁構造	前家:タイル(意匠見本)	階段の手すり復元	陰陽瓦葺	—	不明	前家2階建て
147	HD19	C4	2004	店舗兼住居	③-1	壁面モルタル仕上げ。開口部は木材	壁構造	コンクリート	—	陰陽瓦葺	中庭	中庭	前家のみ2階建て
149	HD13	C4	2009	店舗兼住居	③-1	フレンチコロニアルと意匠見本2の組み合わせ	壁構造	1階:タイル	復元:階段手すり	陰陽瓦葺	なし	内部に設けられている	前家のみ2階建て
153	NTH11	C4	2006	店舗兼住居	③-1	意匠見本2	壁構造	1階:コンクリート	復元なし	陰陽瓦葺	なし	内部に設けられている	前家部分
154	NTM42	C4	2006	画廊(兼住居)	③-1	フレンチコロニアルと意匠見本2の組み合わせ	壁構造。小屋組み復元	前家:タイル、後家:タイル	—	陰陽瓦葺	後庭	不明	前家、後家各2階
156	NTM57	C4	2007/2008	画廊(兼住居)	③-1	意匠見本2とフレンチコロニアル	壁構造。小屋組み復元	コンクリート	階段手すり復元	陰陽瓦葺	不明	不明	前家、橋家、後家(後家のみ2階)
157	PBC64	C4	2003	店舗兼住居	③-1	フレンチコロニアル	壁構造。小屋組み一部復元。1階根太天井	1階:コンクリート、中2階:板張り	—	陰陽瓦葺	外に共用らしき井戸がある。	1階後部	前家2階建て
159	PCT133	C4	2004	住居	④-1	意匠見本2	不明	不明	不明	陰陽瓦葺き	敷地内に庭がある	内部に設けられている	戸建
160	PCT14	C4	2005	工場兼住居	③-1	意匠見本2	壁構造。前家中2階。	中2階の手すりは復元	復元なし	陰陽瓦葺	なし	内部に設けられている	前家:平屋、橋家2階建て
161	PCT1	C4	2006	住居	②-1	意匠見本2	壁構造。前家		階段手すり復元	陰陽瓦葺	なし	内部、後部に設けられている	前家、付属屋
162	PCT71B	C4	2006	店舗	③-1	意匠見本2	壁構造	コンクリート	復元なし	陰陽瓦葺	—	—	—
163	PCT97	C4	2006	住居	③-1	意匠見本2	壁構造	前面駐車場:コンクリート 室内:タイル	階段手すり復元	陰陽瓦葺き	室内化	内部に設置	前家、後家
164	PCT68	C4	2008	住居	③-1	意匠見本2	壁構造。小屋組み一部復元	タイル	復元なし	陰陽瓦葺	なし	内部に設置	前家
165	PCT2B	C4	2009	店舗兼住居	③-1	意匠見本2	壁構造(中2階)	タイル	復元なし	陰陽瓦葺	不明	内部に設置	前家、付属屋

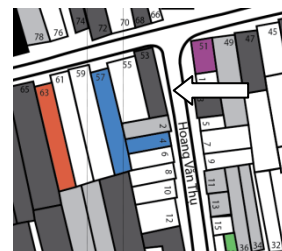
建造物の所有者と修理費用負担者による分類は①全公型、②国個性、③全個性。No.は資料目次と対応。



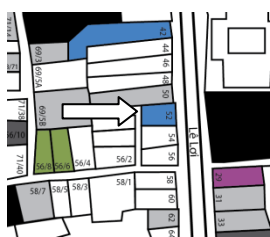
No. 95 バック・ダン 84B



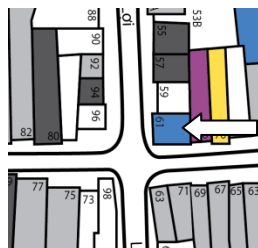
No. 98 ホアン・デ・イウ 41



No. 99 ホア・テウ・アン・トゥ 4



No. 100 レ・ロ 52



No. 102 レ・ロイ 61



No. 103 レ・ロ 42



No. 106 ケン・フイ 16



No. 107 ケン・フイ 20



No. 108 ケン・フイ 22



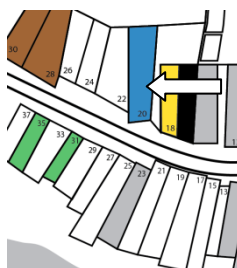
No. 109 ケン・フイ 24



No. 110 ケン・フイ 14



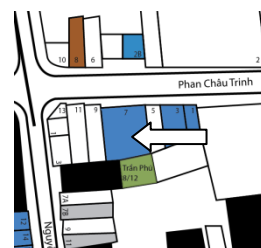
No. 112 ケン・フイ 12



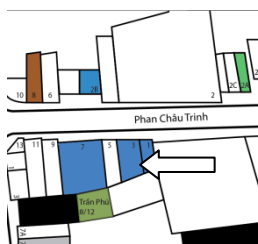
No. 122 ケン・ティ・ミン・カイ 20



No. 127 ケン・ティ・ミン・カイ 44



No. 128 ファン・チャウ・チン 7



No. 131 ファン・チャウ・チン 3



No. 132 ファン・チャウ・チン 28

図 4-41-1 (e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部事例の拡大位置図 1

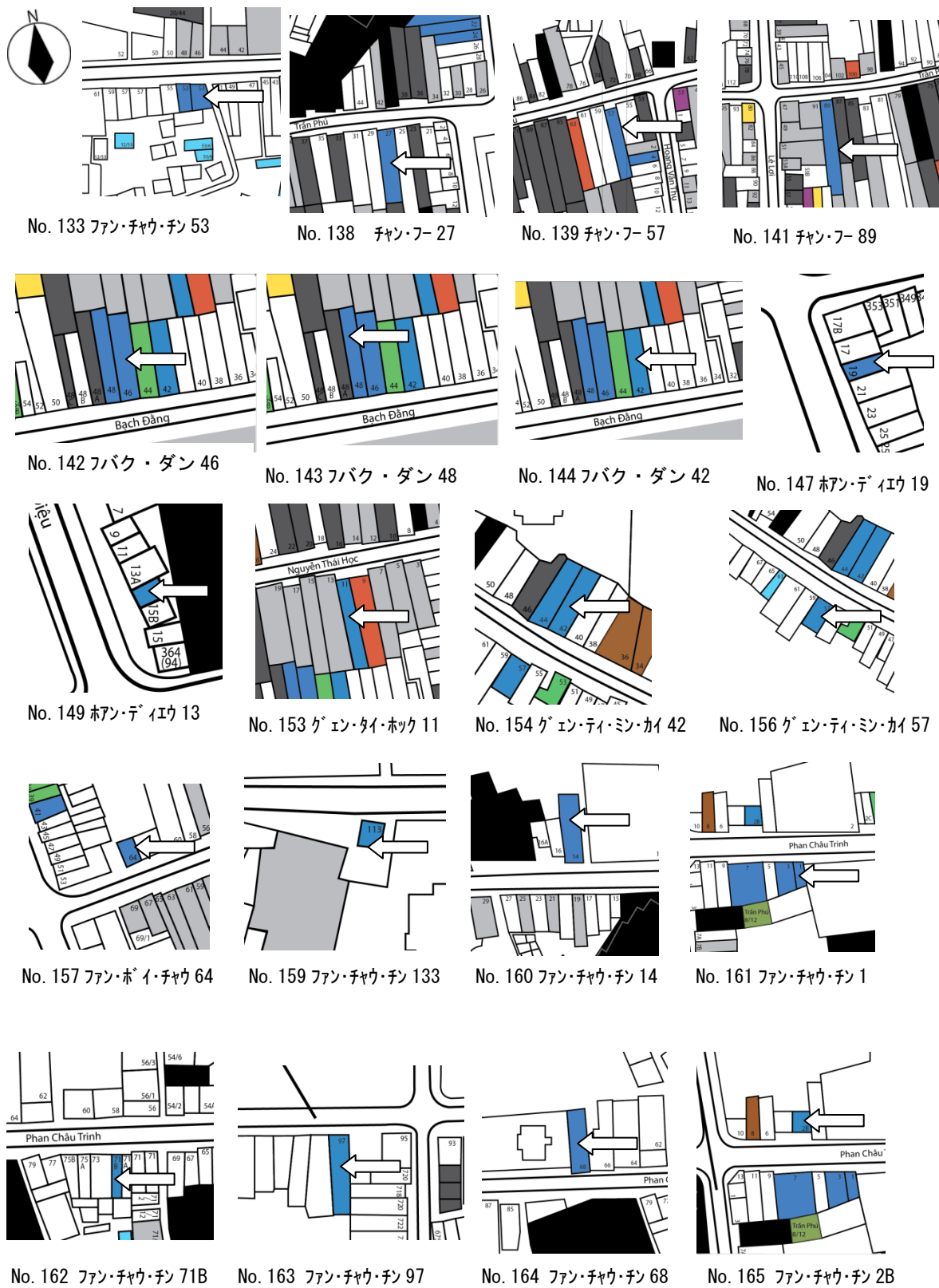


図 4-41-2 (e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部事例の拡大位置図 2



等級 3



(95) バク・ダン 84b  
(84b Bạch Đằng)  
(H23. 2. 8 撮影)



(98) ホアン・ディエウ 41  
(41 Hoàng Diệu)  
(H23. 1. 27 撮影)



(99) ホアン・ヴァ・トゥ 4  
(4 Hoàng Văn Thụ)  
(H23. 1. 27 撮影)



(100) レ・コイ 52 (52 Lê Lợi)  
(H23. 2. 7 撮影)



(102) レ・ロ (61) (61 Lê Lợi)  
(H23. 2. 7 撮影)

等級 3



(103) シン・フエ 42 (42 Lê Lợi)  
(H23. 2. 24 撮影)



(106) グエン・フエ 16  
(16 Nguyễn Huệ)  
(H23. 2. 26 撮影)



(107) グエン・フエ 20  
(20 Nguyễn Huệ)  
(H23. 1. 28 撮影)



(108) グエン・フエ 22  
(22 Nguyễn Huệ)  
(H23. 1. 28 撮影)



(109) グエン・フエ 24  
(24 Nguyễn Huệ)  
(H23. 1. 28 撮影)

等級 3



(110) グエン・フエ 14  
(14 Nguyễn Huệ)  
(H23. 2. 26 撮影)



(111) グエン・フエ 12  
(12 Nguyễn Huệ)  
(H23. 1. 27 撮影)



(122) グエン・ティン・カイ 20  
(20 Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 2. 24 撮影)



(127) グエン・ティン・カイ 44  
(44 Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 2. 10 撮影)



(128) ファン・チュウ・チン 7  
(7 Phan Châu Trinh)  
(H23. 1. 28 撮影)

等級 3



(131) ファン・チュウ・チン 3  
(3 Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 25 撮影)



(132) ファン・チュウ・チン 28  
(28 Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 10 撮影)

図 4-42-1 主要な通りに面した整備済み建造物

(e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の外観一覧 1

等級 3



(133) ファン・チャウ・チン53  
(53Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 25 撮影)



(138) チャン・フー 27  
(27Trần Phú)  
(H23. 2. 23 撮影)



(139) チャン・フー 57  
(57Trần Phú)  
(H23. 2. 23 撮影)



(141) チャン・フー 89  
(89Trần Phú)  
(H23. 2. 26 撮影)

等級 4



(142) バク・ダン 46  
(46Hách Đăng)  
(H23. 8. 10 撮影)

等級 4



(143) バク・ダン 48  
(48Hách Đăng)  
(H23. 2. 27 撮影)



(144) バク・ダン 42  
(42Hách Đăng)  
(H23. 2. 8 撮影)



(147) ホン・ティ・ニウ19  
(19Hoàng Diệu)  
(H23. 2. 25 撮影)



(149) ホン・ティ・ニウ13  
(13Hoàng Diệu)  
(H23. 2. 23 撮影)



(153) グエン・タイ・ホック11  
(11Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 23 撮影)

等級 4



(154) グエン・タイ・ミン42  
(42Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 2. 24 撮影)



(156) グエン・タイ・ミン57  
(57Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 1. 30 撮影)



(157) ファン・ボイ・チュウ64  
(64Phan Bội Châu)  
(H23. 2. 1 撮影)



(159) ファン・チャウ・チン133  
(133Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 25 撮影)



(160) ファン・チャウ・チン14  
(14Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 24 撮影)

等級 4



(161) ファン・チャウ・チン1  
(1Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 25 撮影)



(162) ファン・チャウ・チン71B  
(71BPhan Châu Trinh)  
(H23. 2. 25 撮影)



(163) ファン・チャウ・チン97  
(97Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 10 撮影)



(164) ファン・チャウ・チン68  
(68Phan Châu Trinh)  
(H23. 2. 11 撮影)



(164) ファン・チャウ・チン2B  
(2BPhan Châu Trinh)  
(H23. 2. 23 撮影)

図 4-42-2 主要な通りに面した整備済み建造物

(e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の外観一覧 2



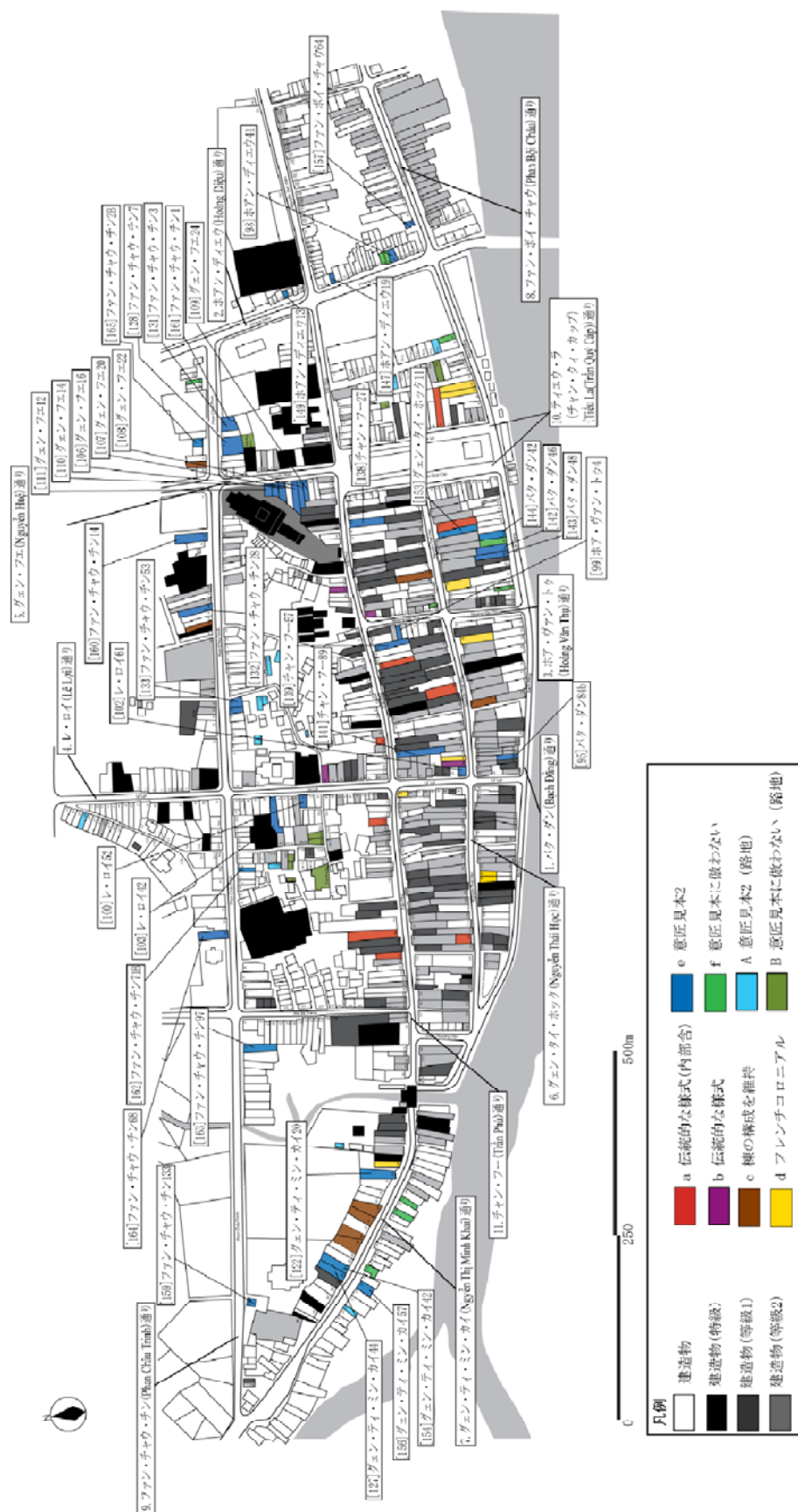


図 4-43 主要な通りに面した整備済み建造物の位置図

(e) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部

(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

#### 事例 全公型 (102) レ・ロイ 61 (61Lê Lợi)

主要な通りに面しており、2004年にクアン・ナム・ダナン省の予算で修理された等級3、国所有の家屋で店舗兼住居として使用されている(資料集102番)。レ・ロイ通りとグエン・タイ・ホック通りの交差点の角に立っている。

棟の構成は、保存地区Ⅰの中央を南北に貫くレ・ロイ通りに面しているため図4-44 Aで示すように前家と付属屋のみである。外観は、伝統的な様式と現代的な意匠と調和させた意匠見本2に倣い整備されている。全体的に歴史的な要素は図4-44 Bのように天井やその棟の構成、屋根の形にしか見られないが、現代的な棟に作りかえられておらず、その点で等級3と判断されたと考えられる。南北方向の通りに面した家屋が東西方向から見られる事例である。



A. 側壁、前面壁

共にモルタル仕上げで、開口部は木材を使用し、陰陽瓦が葺かれた典型的なものである。



B. 前家の天井

根太が張られ、伝統的な要素が維持されていると言える。

図 4-44 レ・ロイ 61 (61Lê Lợi)写真

表 4-16 路地に面した整備済み建造物 (A) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	屋根	床	建具等柱間装置 (階段含む)	中庭、後庭	水回り	棟の構成
9	LL8/2	C3	2001	画廊兼 住居	③-2	開口部木製。壁面 モルタル仕上げ	壁構造	陰陽瓦葺		階段手すり復 元。	なし	内部に設けら れている	前家、後家。 総2階建て
12	NTM2/63	C3	2005	住居	③-2	意匠見本。観音開 きの木製と上部に 欄間が設けられて いる	前家小屋組み省略さ れ、壁構造。中2階 有。他の棟はトタンぶ き	前家陰陽 瓦葺	コンク リート	前家に建具はない。	後部には細 長い版戸外 の空間があ る。	半戸外の空間 が通風と採光 機能を持っ ている。	前家に現代的 な後部
13	PCT5B/51	C3	2003	住居	③-2	意匠見本。伝統 的、歴史的ではな い。	壁構造。小屋組は省略 されている。1階は根 太天井。	陰陽瓦葺	タイル	階段の手すりは 復元	なし	内部に設けら れている。	前家のみ。2 階建て
15	PCT12/53	C3	2005 /2008 /2009	住居	③-2	祠堂：歴史的、伝 統的 住居棟：意匠見本	祠堂：小屋組み、垂木 端部の彫刻復元が見ら れる。後部の柱はモル タルで仕上げられてい る。	陰陽瓦葺	祠堂：六 角形のタ イル	なし	敷地内の指 導や居住棟 の間に余裕 がある	住居棟にある と推測され る。	祠堂と居住 部。
16	PCT4/47	C3	2007	住居	②-2	意匠見本。壁面モ ルタル仕上げで開 口部は木製。	壁構造。小屋組は省略 されている。	陰陽瓦葺	タイル	一部木製。	なし	内部に設けら れている。	平屋の前家と 後部の棟。後 部には中2階 がある
17	PCT6/53	C3	2009	住居	③-2	意匠見本。壁面モ ルタル仕上げ、開 口部は木製	小屋組みが省略された 壁構造。	陰陽瓦葺	コンク リート	階段の手すりに 歴史的、伝統的 意匠が復元され ている。	前に庭があ る。	内部に設けら れている。	2つの棟。南 側が狭く北側 が広い。
20	BD2/10	C4	2001	住居	③-2	意匠見本に倣う。	壁構造	確認でき ない	コンク リート	特になし	なし	内部にある	前家のみ
21	BD19A/12	C4	2008 /2009	住居	③-2	フレンチコロニア ルと意匠見本（開 口部は木製の観音 扉。左右や底を支 える柱をモルタル で仕上げ黄色く塗 装）	壁構造。柱の一部が木 製。一本のみ。	陰陽瓦葺	タイル	欄間は木製で、 伝統的、歴史的 な復元がなされ ている。	後部に庭あ り	内部	前家のみ。2 階建て
22	NTM5/10	C4	2010	住居	③-2	意匠見本。壁面モ ルタル仕上げで開 口部は木製。2階ベ ランダは木製	壁構造。小屋組は省 略。1階天井には根太 が張られている。	陰陽瓦葺	1階床は 意匠見本 と同様	2階の壁は合板 もしくはモルタル 仕上げ。	なし	内部。	前家のみ。2 階建て2階建 て
23	PCT3/51	C4	2001	住居	③-2	意匠見本	小屋組み省略。前家に 中2階あり。	陰陽瓦葺	タイル	木製。歴史的、 伝統的なものでは ない。	主屋までの 細長い通路 が庭の役割 を果たして いる。	後部に台所な どの水回り。	前家と細長い 後部。
25	PCT28/71	C4	2003	住居	③-2	意匠見本。伝統 的、歴史的な形式 ではない。	壁構造。柱はない。1 階天井はプラスチック が用いられている	陰陽瓦葺 き	柄入りタ イル	復元なし	なし	内部に設けら れている。	前家のみ。2 階建て

(建造物の所有者と修理費用負担者による分類は②国個型、③全個型。No.は資料目次と対応。)



No. 9 レ・ロイ 8/2

No. 12 ケン・ティ・ミン・カイ 2/63

No. 13 ファン・ボイ・チャウ 5B/51 No. 15 ファン・チャウ・チン 12/53

図 4-45-1 (A) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の事例の拡大位置図 1



No. 16 ファン・チャウ・チン 4/47



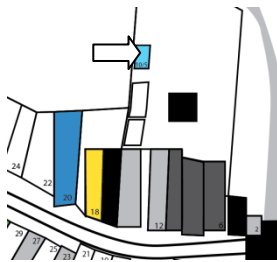
No. 17 ファン・チャウ・チン 6/53



No. 20 バク・ダン 2/10



No. 21 バク・ダン 19A/12



No. 22 ケン・ティ・ミン・カイ 5/10



No. 23 ファン・チャウ・チン 3/51



No. 25 ファン・チャウ・チン 28/71

図 4-45-2 (A) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の事例の拡大位置図 2

### 等級 3



(9) ケン・ティ・ミン・カイ 2/8(2/8) 1/10  
H23. 2. 22 撮影



(12) ケン・ティ・ミン・カイ 2/63(2/63) Nguyễn Thị Minh Khai  
H23. 2. 24 撮影



(13) ファン・チャウ・チン 56/51  
(51/51) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 25 撮影



(15) ファン・チャウ・チン 12/53  
(12/53) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 12 撮影



(16) ファン・チャウ・チン 4/47  
(4/47) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 10 撮影

### 等級 3



(17) ファン・チャウ・チン 6/53  
(6/53) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 25 撮影

### 等級 4



(20) バク・ダン 2/10  
(2/10) Bạch Đằng  
H23. 2. 26 撮影



(21) バク・ダン 19A/12  
(19A/12) Bạch Đằng  
H23. 2. 6 撮影



(22) ケン・ティ・ミン・カイ 5/10(5/10) Nguyễn Thị Minh Khai  
H23. 2. 20 撮影



(23) ファン・チャウ・チン 3/51  
(3/51) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 10 撮影



(25) ファン・チャウ・チン 28/71  
(28/71) Phan Châu Trinh

図 4-46 路地に面した整備済み建造物

(A) 意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部の外観一覧



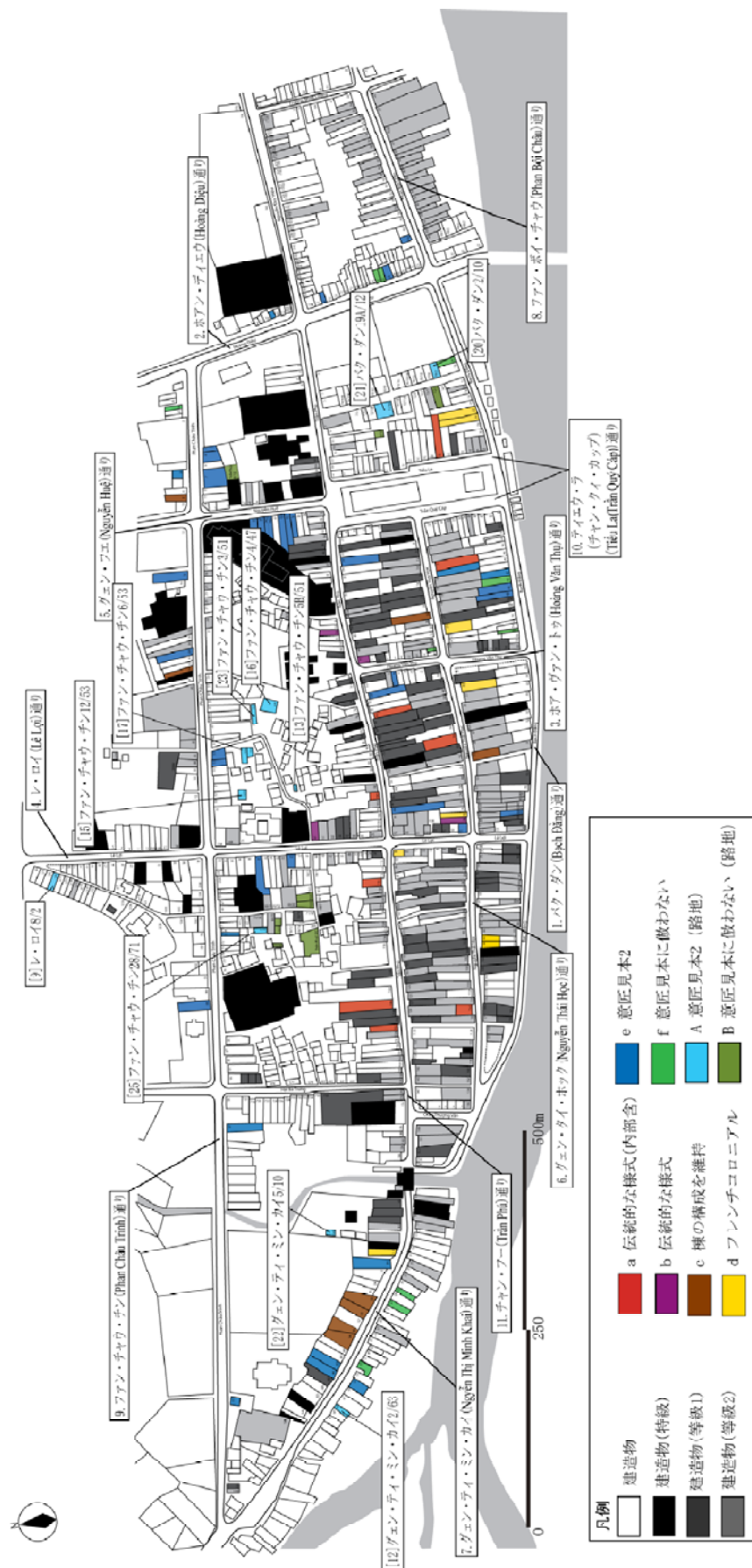


図 4-47 路地に面した整備済み建造物の位置図

(A) 外観を意匠見本 2 に倣った外観と現代的な内部

(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

#### 事例 全個型 (16) ファン・チャウ・チン 4/47 (4/47Phan Châu Trinh)

路地に面した等級3のファン・チャウ・チン 4/47 である（資料集 16 番）。これは、ファン・チャウ・チン通りから路地に入ったところに位置する。全個型で主要な通りではなく路地に面しているため、観光客の視線を意識した整備ではないが、意匠見本 2 を用いて歴史的地区全体の調和を図る外観に整備し、陰陽瓦を葺いている。写真の棟に加え別棟がある。別棟の小屋組みは壁構造であり、陰陽瓦は葺かれていない。路地に面した家屋でも、路地から見える部分は等級ごとの基準に沿って整備され、見えない棟は基準に沿った整備は行われていないことがわかる。



##### A. 外観

側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた意匠見本 2 を用いた典型的な事例。



##### B. 小屋組

省略され壁構造である。

図 4-48 ファン・チャウ・チン 4/47 (4/47Phan Châu Trinh)写真

#### (f) 及び (B) 陰陽瓦を葺くのみ

陰陽瓦を葺くのみで、史跡管理事務所が提示した意匠見本 1、2 に倣わない外観である。全 74 件中、主要な通りに面したもの (f) では 9 件あり、路地に面したもの (B) では 8 件あるため、合計 17 件が該当する。立地を見ると、図 4-51、図 4-55 の通り保存地区 I 内に点在している。具体的には、等級 3 はバク・ダン通りに 1 件、グエン・タイ・ホック通りに 1 件、グエン・ティ・ミン・カイ通りに 2 件である。等級 4 はバク・ダン通りに 2 件、ホアン・ディエウ通り、ファン・チャウ・チン通りに各 1 件ずつである。つまり、等級の高い建造物の多い通りに立地している例はグエン・タイ・ホック 38 の 1 件のみである。

所有者と整備費用負担者を見ると、(f)の全個型が 6 件、個公型が 3 件であり、ほとんどが個人で整備費用を負担している。(B)は全個型が 8 件、個公型が 1 件と、やはりほとんどが個人で整備費用を負担している。

各建造物の外観を見ると、図 4-50、図 4-54 で示すように意匠見本 2 に近いものもあるが、

1 階の扉にシャッターを用いる事例(No. 25)や、意匠見本 1、2 にはない開口部を採用した事(No. 114)も見られる。中には、陰陽瓦を葺くという等級 3 及び等級 4 の整備基準が確保されていないものもあり、所有者が自分の所有する建造物を、等級の高いものではないとし整備基準を考慮していない事例もある<sup>注 4)</sup>。

意匠見本を採用しない理由は、1 件を除き個人の費用で整備が行われており、意匠見本に倣い整備しなくとも、整備基準に違反していないためだといえる。なお、この分類に該当する建造物はほとんどが等級の高い建造物が少ない主要な通りに立地しており等級の低い建造物に囲まれている ((f) は図 4-48 A、B、図 4-49-1、図 4-49-2。(B) は図 4-52-1、図 4-52-1、図 4-55)。つまり整備基準にある「周囲の環境に合わせる」ために、外観を伝統的な様式に整備せずとも整備基準に違反しているとはみなされないためといえる。開口部の位置や底下の柱の形状、色等全てが所有者の裁量で自由に決められる。保存地区内の規則は階高および周辺の特級や等級 1 を隠さないという制限があるのみである。従って整備に用いられている意匠や材料も多様である。

整備手法は伝統的な様式に整備しないため、経年変化により特級や等級 1、等級 2 と間違えられる恐れはない。しかし、歴史地区の様相を調和させていく視点からは、陰陽瓦を葺くのみであとは所有者の裁量に委ねられており、周囲と大きく異なる形式、例えば、煉瓦を積んだ状態のままにする、モルタルで仕上げない、壁面の色が白や黄色のように古都ホイアンで使われている色ではないものを採用するといった事例が多くなると、地区全体の統一性を維持することが難しくなる恐れがあると言える。また、陰陽瓦を葺くという最低限の基準を守る事例がほとんどだが、中には陰陽瓦を葺いていないものが見られ、歴史地区全体の調和を図る点において悪影響を与える可能性のある事例が見られる。

意匠見本はあくまでも推奨であり、周囲に合わせるという基準が明確ではない規制も、意匠決定の自由度を高めている。個人が整備する場合は、史跡管理事務所による図面確認の時点で意匠に対してほとんど修正がされないという点から、今後は、確認する際にある程度規制をかけていくことも検討の余地がある。また、歴史地区の統一性を維持するために陰陽瓦を葺くのみだが、外観の整備において他の手法も採用を検討することが望まれる。



表 4-17 主要な通りに面した整備済み建造物(f) 陰陽瓦を葺くのみ

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成	備考
94	BD44	C3	2001	店舗兼住居	③-1	フレンチコロニアル	壁構造	前家：コンクリート、後部：タイル	なし	陰陽瓦葺	なし	後部	前家、後家(2階)	
114	NTH38	C3	2001	店舗兼住居	③-1	現代的。復元なし	壁構造	—	—	一部陰陽瓦葺き。陸屋根	—	—	前家、付属屋総2階建(変形版)	
121	NTM31	C3	1992-2004	画廊(兼住居)	④-1	フレンチコロニアル	壁構造	—	なし	—	—	—	前家	
124	NTM35	C3	2003	住居	④-1	フレンチコロニアル	壁構造	コンクリート	—	—	—	—	前家	
145	BD8	C4	2009	住居	③-1	復元なし	壁構造	1階：コンクリート、中2階：板張り	復元なし	不明	なし	内部に設けられている	前家のみ。中2階と2階	
146	BD54B	C4	2009	店舗兼住居	③-1	不明	不明	コンクリート	不明	不明	不明	不明	前家、橋家、後家	所有者の意向により内部調査ができなかった。
148	HD39	C4	2008	店舗兼住居	③-1	北側：フレンチコロニアル変形 南側：意匠見本(壁面モルタル仕上げ、開口部は木材)	北側：壁構造、南側：壁構造	北側：1階タイル(白と黒) 南側：2階は板張り	北側：復元なし 南側：階段手すり復元	北側：陰陽瓦葺 南側：陰陽瓦葺	北側：なし 南側：なし	北側：内部に設けられている 南側：なし	北側：前家のみ2階建て 南側：前家のみ2階建て	
155	NTM53	C4	2007	店舗(兼住居)	③-1	復元なし	—	—	—	陰陽瓦葺	—	—	前家2階建て	
158	PCT2A	C4	2004	店舗兼住居	④-1	復元なし	壁構造	タイル(意匠見本。斜めに設置)	復元なし	陰陽瓦葺き	棟の後部に空間がある	棟の後部外側に設けられている	—	

建築物の所有者と修理費用負担者による分類は③全個型、④個公型。No.は資料目次と対応。

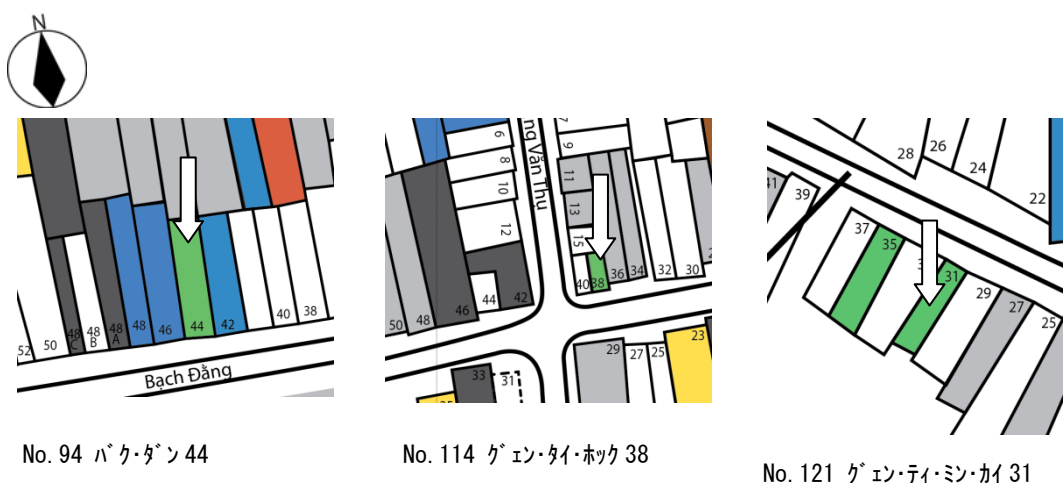


図 4-49-1 (f) 陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 1

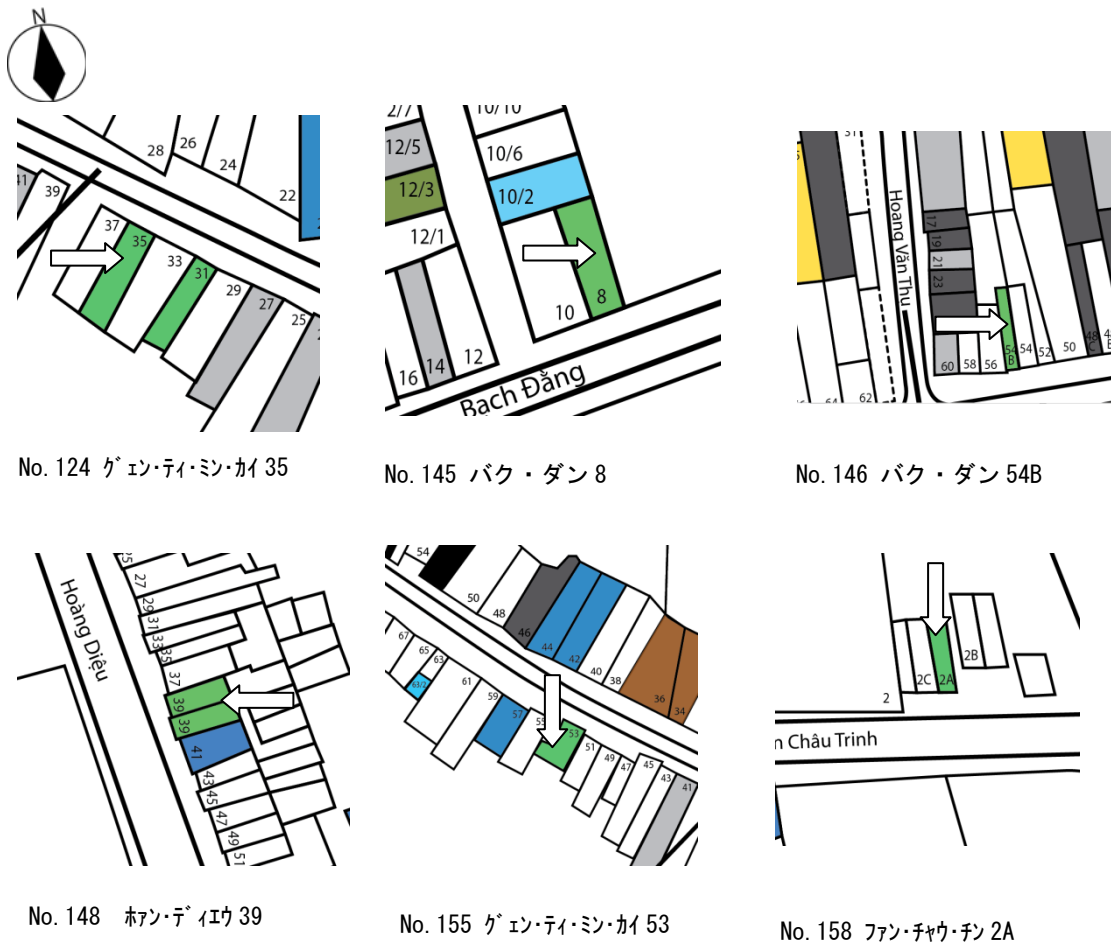


図 4-49-2 (f) 陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 2

### 等級 3



(94) バク・ダン 44  
(44Bach Dang)  
(H23. 2. 21 撮影)



(114) ゲン・タイ・ミン・カイ 38  
(38Nguyễn Thái Học)  
(H23. 2. 22 撮影)



(121) ゲン・タイ・ミン・カイ 31  
(31Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 2. 9 撮影)



(124) ゲン・タイ・ミン・カイ 35  
(35Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 4. 12 撮影)

### 等級 4



(146) バク・ダン 54B  
(54BBach Dang)  
(H23. 2. 26 撮影)



(148) ホアン・ディエウ 39  
(39Hoàng Diệu)  
(H23. 1. 27 撮影)



(155) ゲン・タイ・ミン・カイ 53  
(53Nguyễn Thị Minh Khai)  
(H23. 2. 24 撮影)



(158) ファン・チャウ・チン 2A  
(2APhan Châu Trinh)  
(H23. 2. 25 撮影)

図 4-50 主要な通りに面した整備済み建造物(f) 陰陽瓦を葺くのための外観一覧



図 4-51 主要な通りに面した整備済み建造物の位置図 (f) 陰陽瓦を葺くのみ  
(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)

### 事例 全個型 (148) ホアン・ディエウ 39 (39Hoa`ng Diêu)

主要な通りに面した建造物（資料集 148 番）である。図 4-52A と B で示すように南側と北側の棟に分かれている。ホアン・ディエウ通りが南北方向の通りであるため、前家のみで構成されている。

整備工事は 2008 年に個人の資金で行われた。等級 4、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。北側の棟の外観はフレンチコロニアルの看板建築であり、南側は古都ホイアンの伝統的、歴史的な要素を部分的に整備しているが、内部は壁構造で現代的な作りである。北側の棟の内部（図 4-52 C）は現代的だが、南側の棟（図 4-52 D）は階段の手すりが伝統的な様式に整備されていた。整備記録が作成されない場合、整備工事で作られた伝統的な意匠や部材がオリジナルなものとして扱われる恐れがある。この事例のように等級 4 は歴史的な要素がないため等級から判断は可能であるが、分類が間違っているという解釈をされないように注意が必要である。床は、1 階はいずれの棟もコンクリートである。



A. 北の棟

フレンチコロニアルを模した外観



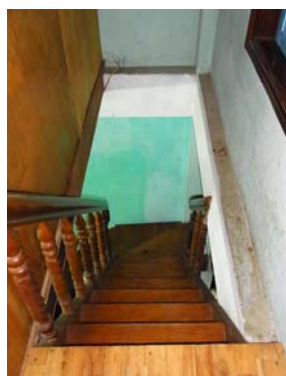
B. 南の棟

古都ホイアンの典型的な 2 階建ての家屋である。



C. 2 階の内部

柱はなく、天井が張られた現代的な作り（北側の棟）



D. 階段（南側の棟）

伝統的な形式に整備されている。

図 4-52 ホアン・ディエウ 39 (39Hoa`ng Diêu)写真

## B 陰陽瓦を葺くのみ

陰陽瓦を葺くのかみの建造物等うち、路地に面したものである。

表 4-18 路地に面した整備済み建造物 (B) 陰陽瓦を葺くのみ

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	屋根	床	建具等柱間装置 (階段含む)	中庭、後庭	水回り	棟の構成	備考
10	LL6/56	C3	2008	住居	③-2	壁面モルタル仕上げ。開口部は木製だが青く塗装。意匠見本では色まで言及されていないためか。	小屋組みの材は等級1と同じ程度の太さ。モルタル壁に埋め込まれている。前部には中2階を設けている。	陰陽瓦葺	タイル	復元なし	なし	後部2階建ての現代的な部分に設置。	前家のみ。前部は平屋後部は現代的な2階建て。	現代的な建築は規制がかかる前に作られたと推測される。
11	LL56-8	C3	2008	住居	③-2	意匠見本とほぼ同じだが観音開きの青い扉	小屋組みが等級1と同じ程度の太さの材。壁構造。中2階を設置	陰陽瓦葺	タイル。中2階は木製	階段の手すりは古都ホイアン様式で復元	—	前家後部1階が水回り	連棟の最西端。前家のみ	—
14	PCT26/71	C3	2003	住居	③-2	モルタル仕上げの壁に木製の開口部。	不明	一部陰陽瓦葺	不明	不明	前に庭が設けられている	不明（戸建のため内部にあると推測できる）	戸建	—
18	TP2 C/132	C3	2008	飲食店兼住居	③-2	モルタル仕上げの壁に木製の開口部。	不明	陰陽瓦葺	不明	不明	庭に池が設けられている	棟の内部にあり、飲食店は便所が別棟にある	一棟のみ。飲食店部分は2棟に分かれている。	—
19	BD3/12	C4	1997	住居	④-2	開口部は木材を使用。観音開き。塗装は緑色	小屋組は根太天井が張られ見えない。壁構造だと推測される。	陰陽瓦葺	タイル（柄入り）	内部建具は特になし	後部にあり。	後部に井戸があり、その周辺に設けられている。	前家のみ。中2階が設けられている。	—
24	PCT22/71	C4	2001	住居	③-2	住居棟：現代的祠堂：中央開口部は木製観音開きの扉。左右は壁面モルタル仕上げに木製のガラス入り	住宅：壁構造で表面に木材は使用されていない。祠堂：小屋組みの材は等級1よりも細いが、歴史的、伝統的な要素あり。柱はコンクリートが敷かれた床に直接建てられている。柱梁構造と壁構造の折衷。木材部分の劣化が全体的に激しい。	陰陽瓦葺き	現代的な住宅：タイル 祠堂：コンクリート	現代的な住宅：現代的な材料。復元なし。 祠堂：なし	祠堂の前に中庭	中庭及び現代的な住宅に設けられている。	現代的な住宅棟と、伝統的、歴史的な要素を残した祠堂	—
26	PCT36	C4	2005	住居	③-2	煉瓦が使用されモルタル部分は青く塗装。	小屋組を一部持つが、伝統的、歴史的な形式ではない。壁構造。天井に根太が張られている。	陰陽瓦葺ではない。	タイル	復元なし	なし	内部	2棟が横に並ぶ	—
27	TP4/11	C4	2005	住居	③-2	開口部は木材を使用。歴史的、伝統的な形式ではない	不明	陰陽瓦葺き	不明	ベランダ手すり：木材を使用し歴史的、伝統的な形式を復元	なし	（内部に設けられている）	2階建て。町家型の後部、細長い。	—
28	TP8/12	C4	2006	住居	③-2	フレンチコロニアル	壁構造。小屋組は一部を除き省略。	陰陽瓦葺き	タイル	復元なし	前に庭あり	内部に設けられている	2階建て。戸建住宅	—

(建造物の所有者と修理費用負担者による分類は③全個型、④個公型。No.は資料目次と対応。)



図 4-53-1 (B) 陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 1



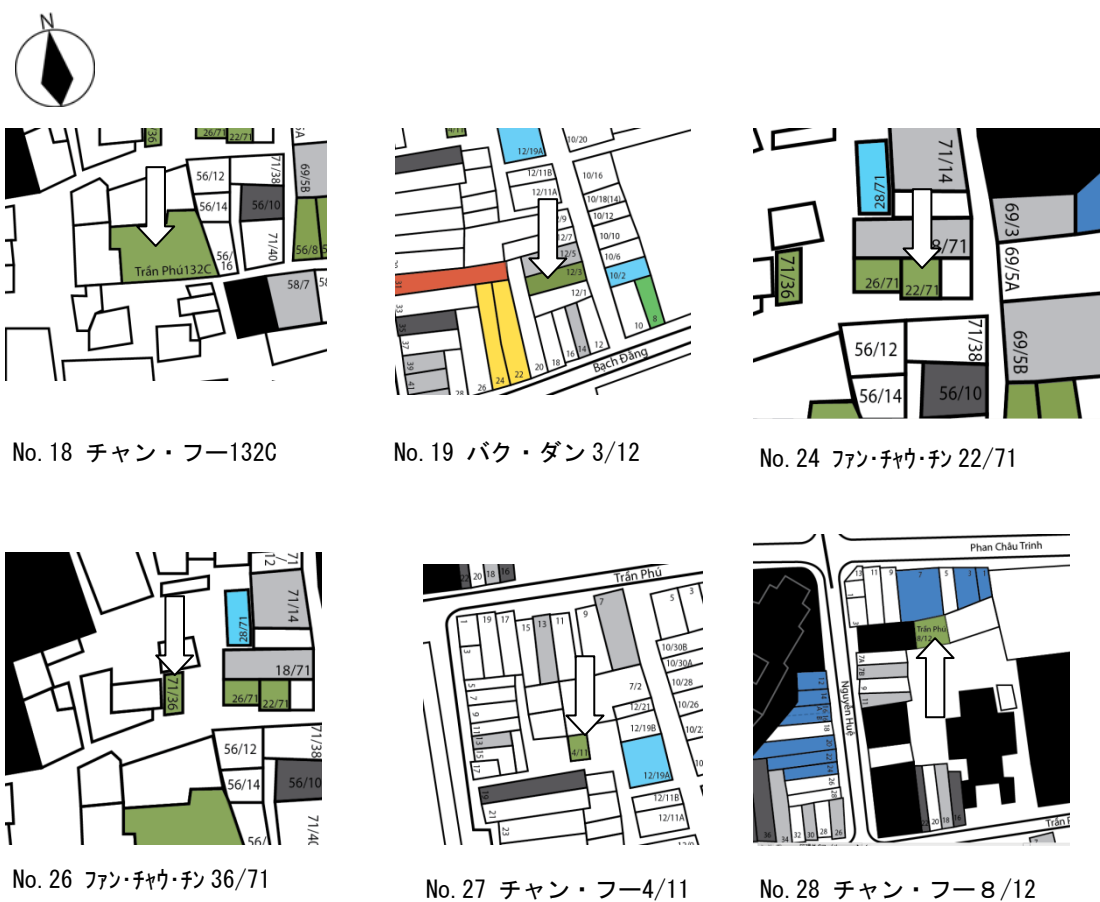


図 4-53-2 (B) 陰陽瓦を葺くのみ事例の拡大位置図 2

等級 3



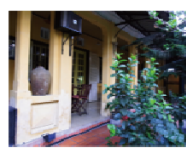
(10) レ・ロイ 6/58  
(6/56) Lê Lợi  
H23. 2. 9 撮影



(11) レ・ロイ 8/56  
(8/56) Lê Lợi  
H23. 2. 24 撮影



(14) ファン・チャウ・チン 26/71  
(26/71) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 25 撮影



(18) チャン・フー 132C  
(132C) Trần Phú  
H23. 8. 9 撮影

等級 4



(19) バク・ダン 3/12  
(3/12) Bạch Đằng  
H23. 2. 6 撮影



(24) ファン・チャウ・チン 22/71  
(22/71) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 25 撮影

等級 4



(25) ファン・チャウ・チン 36/71  
(36/71) Phan Châu Trinh  
H23. 2. 11 撮影



(27) チャン・フー 4/11  
(4/11) Trần Phú  
H23. 2. 23 撮影



(28) チャン・フー 8/12  
(8/12) Trần Phú  
H23. 2. 22 撮影

図 4-54 路地に面した整備済み建造物 (B) 陰陽瓦を葺くのみ の外観一覧

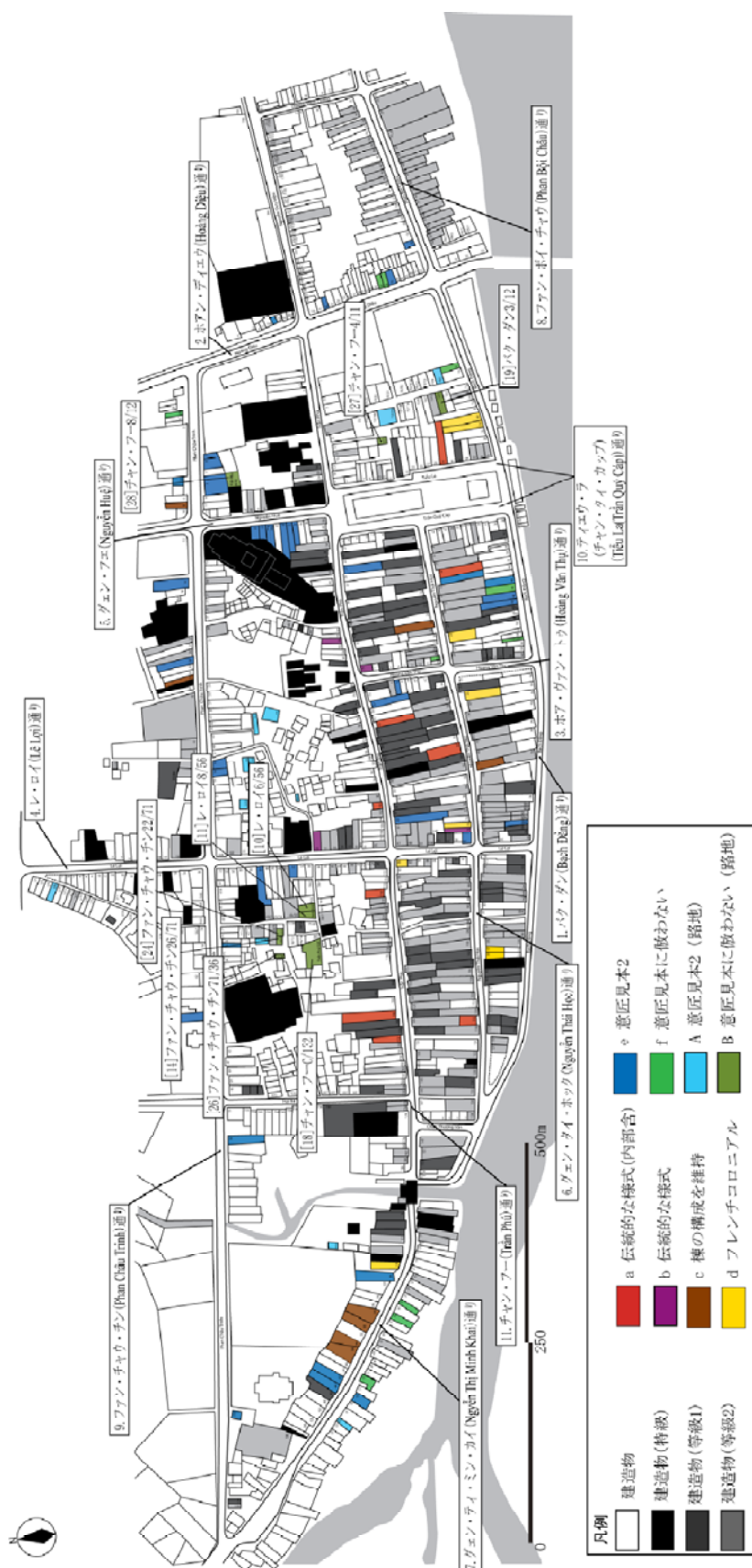


図 4-55 路地に面した整備済み建造物の位置図 (B) 陰陽瓦を葺くのみ  
(ホイアン史跡管理事務所の資料に調査済み家屋や縮尺、方位などの情報を加えた)



#### 事例 全個型 (25) ファン・チャウ・チン 36/71 (36/71Phan Châu Trinh)

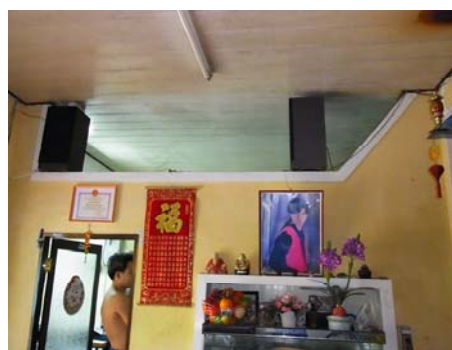
路地に面した建造物（資料集 25 番）のうち、ファン・チャウ・チン通りから路地に入った場所にある個人所有で個人が整備費用を負担している全個型の事例である。

2005 年に個人の資金で整備された等級 4、個人所有の家屋である。路地の奥にあり周囲の環境に合わせる場合も、陰陽瓦を葺けば整備基準が満足されるため、外観、内部共に現代的である（図 4-56 A、B）。煉瓦を積み上げた壁面や左右と前面の色彩が異なるなど、所有者の意向が反映され屋根の形が通常の町家の前家と異なる。いずれの整備手法も整備基準に違反していないものの、多様性を持ちながら、統一した様相を保つ歴史地区の保存整備の考え方とは異なる。



A. 外観

側壁、前壁共にモルタル仕上げで、陰陽瓦が葺かれている。ただし、前壁には煉瓦が使用されるなど。



B. 内部

壁はモルタル、天井がプラスチックで張られており、現代的な内装。

図 4-56 ファン・チャウ・チン 36/71 (36/71Phan Châu Trinh)写真

#### 4.3. 考察

古都ホイアンの保存整備事業では、日本の国際協力を通して、家屋修理技術協力が行われた。そこで、調査結果から得られた修理及び整備内容から、歴史地区古都ホイアンの保存整備の特徴と課題を考察する。

日本人専門家の家屋修理技術協力は、特級と等級 1、等級 2 の建造物に対して行われていた。特級と等級 1 の修理基準は、建造物の歴史的な要素を全て残すことである。調査結果から、可能な限り旧材を残し、再利用するという日本人専門家が伝えた手法や考え方で修理が行われていることがわかった。

等級 3 と等級 4 は、保存地区 I 内における建造物全体の 7 割を占める。従って、これら

の整備手法は、古都ホイアンの保存管理において重要である。しかし、調査結果から、等級 3 と等級 4 の整備の一部は、整備基準に沿っているが、歴史地区の継承の視点からは課題がある。

課題は、チャン・フー通りやグエン・タイ・ホック通りといった、観光の中心となる主要な通りで伝統的な様式を「新築」する事例が見られることである。伝統的な様式を新築する事例は、史跡管理事務所が整備内容を管理できる場合に行われている。よって、史跡管理事務所の保存地区 I における等級 3 と等級 4 の整備方針は、観光客が多く歴史的な建造物の多い通りでは、伝統的な様式へ整備することだといえる。しかし、歴史的な建造物の多い通りにおいて、本来の状態を確認せずに伝統的な様式へ整備する工事を続けていれば、いずれ当初の状態と異なる様相になる。よって、伝統的な様式への整備は、歴史地区を継承する真正性の考え方とは異なるものとなり、再検討の余地がある。

また、修理工事や整備工事の記録が作成されていないため、記録から当初の状態を読み説くこともできなくなる。歴史地区の保存整備にあたり、文書で記録を作成することは重要な保存手法の一つである。この点も、実施できるように検討する余地がある。

もう一つの課題はベトナムの歴史地区保存整備事業の手法との関連が指摘できる。ベトナム政府により保存地区と保存対象が決定され、ホイアン市により保存対象の分類と修理、整備方法が決められた。決定過程に、保存地区内の住民や建造物の所有者は関わらない。住民や所有者は、日本とは異なり、予め決められた方針に従い、修理や整備工事を行う。

日本の歴史地区の保存整備においては、保存地区内の居住者や建造物の所有者の合意を得ることや、歴史地区関係者の積極的な関与は重要な要件である。そうすることで、歴史地区の関係者が、個々の建造物の保存に合意する過程において、歴史地区保存整備の制度や意義、具体的な保存管理に理解を深め、積極的に関与する可能性が出てくる。また、個々の建造物の居住者の日常的な手入れや関係者の建造物の使い方は歴史地区全体の継承につながるため、時間は要するものの、重要な点である。

しかし、古都ホイアンでは、居住者や商店主などの関係者は、歴史地区保存整備に対する理解を深め、積極的な関与をする機会はない。2008 年に保存の手引きが出版され、個々の建造物の保存整備や等級が公表された。保存の手引きは、保存地区 I の各戸に配布され、そこで初めて、保存地区 I 内の居住者は、自分たちの居住する個々の建造物の保存整備が、古都ホイアンとしての真正性の一端を担うものであると知った。それ以前も、日本人研究者による住民向けワークショップの開催が行われたが、参加者はホイアン市により選択された。従って日本の歴史地区保存整備で行われるような、住民の意見を自由に出し合う場ではなかった。こうした状況の中で、青年海外協力隊の建築隊員による店主への店の看板や商品の並べ方のワークショップなどが行われ、日本側はベトナムの社会制度に合わせながら、歴史地区保存整備に必要な居住者の意識醸成を試みている。

こうした保存地区や保存対象決定過程の相違があるため、日本側が古都ホイアンの保存整備への協力を行うにあたり、日本の歴史地区保存整備における蓄積を活かすことが難し

かったと推察される。

ベトナム側が作り上げた歴史地区保存整備手法のもう一つの特徴は、独自のものと言える防水・防蟻対策である。調査で防水・防蟻剤は、材へ直接塗布されていることがわかった。毎年秋に、保存地区Ⅰの南側に位置するトゥ・ボン河が増水し、保存地区Ⅰの半分に床上浸水以上の被害が出るため、防水対策は重要である。また、木材の腐朽の要因は水害に加え、蟻害が大きい。従って、木材に防水・防蟻剤を塗布し、壁面塗装を数年おきに塗り替える手法は、ホイアン史跡管理事務所による試行錯誤の成果であり、かつ古都ホイアンの気候風土に沿ったものであり、ホイアン市の文化遺産保存の一つの手法として形成されたものだといえる。つまり、自然環境への対応については、現地の自然環境を把握しているホイアン市が独自に手法を形成してきた。

#### 4.4. 小結

古都ホイアンの保存整備事業における修理技術に対する日本側の協力内容は、現在の古都ホイアンでも用いられており、保存整備事業に貢献している。

日本の協力姿勢は、可能な限り歴史を継承する手法や考え方を伝えるが、ベトナムの社会体制を尊重し、ベトナムが自主的にやり方を検討できるよう、日本の手法や考え方を伝えるに留めていた。今後日本側は、社会体制を変えずに、文化遺産として、より歴史を継承できる修理や整備手法の検討が行える。

課題は、歴史的地区保存整備の方針や考え方が、社会制度の違いはあるものの十分に伝わっていなかった点であり、今後の文化遺産保存を目的とした日本の国際協力における協力実施が望まれる。

表 4-19 修理申請のあった特級、等級 1、等級 2 の修理内容 (1)

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成	備考
1	LL21	S	1992-2004	祠堂兼住居兼見学場所	④-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	保存	保存	陰陽瓦葺	貴族型住宅で前庭、後	居住棟に設けられている	祠堂及び居住棟	日本人専門家の修理協
2	NTM16	S	2006/2007/2008	祠堂兼住居	③-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	タイルに張り替え	保存	陰陽瓦葺	後庭	後庭に台所、便所、風呂が設け	前家、付属屋	—
3	TP80	S	1993-1995	博物館	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：磚 2階：板張	保存	陰陽瓦葺	祠堂との間に空間があ	別棟に設けられている	居住棟及び祠堂	日本人専門家の修理協
4	TP48	S	1997/1998	店舗、画廊兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	タイル	保存	陰陽瓦葺	中庭、後庭	後庭に設けられている	前家、橋家、後家	日本人専門家の修理協
5	TP24	S	2001	寺院	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	タイル	保存	陰陽瓦葺	中央に庭が設けられている	不明	左右と奥に棟を設け、庭を開	—
6	TP77	S	2003/2008/2009	住居（見学場所）	③-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：コンクリート	保存	陰陽瓦葺	中庭、後庭	後家後部に設けられて	前家、橋家、後家全	見学可能な家屋
7	TP96	S	2008	祠堂兼住居	③-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	コンクリート	現代的	陰陽瓦葺	—	後部に設けられている	前家平屋	—
8	BD76	C1	2007/2008/2009	店舗兼住居	③-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	コンクリート	現代的	陰陽瓦葺	—	付属屋に設けられてい	前家、付属屋共に平屋	—
9	HVT17	C1	2001	店舗兼住居	④-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：コンクリート	現代的	陰陽瓦葺	—	後部に設けられている	前家総2階建て	—
10	HVT23	C1	2000	店舗兼住居	①	木製観音開きと、板壁	不明	不明	復元	陰陽瓦葺	—	1階後部に設けられて	前家総2階建て	—
11	HVT25	C1	2006	店舗兼住居	③-1	木製観音開きと、板壁	柱梁構造と壁構造の折	1階：コンクリート	木製 観音開き	陰陽瓦葺	—	後部に設けられている	前家総2階建て	—
12	LL57	C1	2003	店舗	③-1	三か所とも木製折戸	壁構造と柱梁構造の折	コンクリート	木製	陰陽瓦葺	—	—	前家、付属屋	—
13	LL55	C1	2004	飲食店	③-1	中央を木戸で観音開き、両側を四枚板扉	柱梁構造と壁構造の折	タイル	中庭側は四枚の板戸を用いる。	陰陽瓦葺	中庭	後家後部に設けられている（飲食店の調理場	前家、後家	—
14	LL94	C1	2006	店舗兼住居	③-1	木製の折戸	壁構造と柱梁構造の折	タイル	1階板戸	陰陽瓦葺	—	付属屋に設けられてい	前家、付属屋の2階建	—
15	NTH60	C1	1998	飲食店	①	保存。ガラス入りの窓	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル 2階：板	保存	陰陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家、後家の総2階建て	—
16	NTH21	C1	1999	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：柱梁構造と壁構造の折 2階：板張	保存、一部合板等	陰陽瓦葺	中庭	中庭に設けられている	前家、橋家、後家	—
17	NTH33	C1	1999	博物館	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル	保存	陰陽瓦葺	中庭、後庭	中庭に設けられている	前家、橋家、後家	—
18	NTH46	C1	1999	画廊	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル	保存	陰陽瓦葺	中庭	中庭に便所	前家、橋家、後家の総2階建て	—
19	NTH92	C1	1999	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル 2階：板張	保存	陰陽瓦葺	中庭	中庭に設けられている	前家、橋家、後家の総2階建て	—
20	NTH115	C1	2000/2001	店舗兼住居	④-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	タイル	保存	陰陽瓦葺	バック・ダン通り側の家屋との間にある	バック・ダン通り側の家屋との間に設けられ	前家、付属屋（中2階あり）	—
21	NTH132	C1	2001/2001	店舗兼住居	①	開口部のみ保存。壁面はモルタル	柱梁構造と壁構造の折	コンクリート	一部保存	陰陽瓦葺	後庭	不明	前家（中2階あり）、付属屋	—
22	NTH52	C1	2002	店舗兼住居	②-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル	一部保存	陰陽瓦葺	後庭	後庭	前家、付属屋の総2階	—
23	NTH104	C1	2002	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル	保存	陰陽瓦葺	後庭	不明	前家1平屋、付属屋	—
24	NTH126	C1	2002	祠堂兼住居	③-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	主屋：コンクリート	保存	陰陽瓦葺	前庭、後庭	前庭に別棟、後庭に別棟	前家、橋家、後家の総2階建て	—
25	NTH103	C1	2003	店舗	①	開口部は木製観音開き、左右は1、2階とも窓（壁面モルタル仕上	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル 2階：板張り	保存	陰陽瓦葺	中庭、後庭	後庭	前家、橋家、後家の総2階建て	—
26	NTH81	C1	2005/2008	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	タイル、一部磚	保存	陰陽瓦葺	後庭	後庭	前家平屋。後庭に別棟で台所や居間が設けら	—
27	NTM6	C1	1999	店舗	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階：タイル 2階：板張	保存、階段は移動	陰陽瓦葺	中庭は室内化。後庭	後庭	前家、橋家、後家のみ2	—
28	NTM11	C1	2006	店舗兼住居	③-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	コンクリート	保存	陰陽瓦葺	不明	不明	前家、付属屋は2階建	—
29	TP121	C1	1994/1996	飲食店兼十他盧	①	保存	柱梁構造と壁構造の折	1階タイル 2階：板張り	保存	陰陽瓦葺	中庭	後部に設けられてい	前家平屋、後部増築は2階建て	日本人専門家の修理協力有
30	TP142	C1	1996	店舗兼住居	④-1	保存	柱梁構造と壁構造の折	コンクリート	保存	陰陽瓦葺	後庭	後庭	前家、付属屋、後庭に水回りや物置を増築	—

建造物の所有者と修理費用負担者による分類は①全公型、②国個型、③全個型、④個公型、⑤共公型。

いずれも枝番の 1 は主要な通りに、枝番の 2 は路地に面している。表の見方については以下同様。

表 4-20 修理申請のあった特級、等級 1、等級 2 の修理内容 (2)

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階段含む)	屋根	中庭、後庭	水回り	棟の構成	備考
31	TP71	C1	2001	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折衷	1階：コンクリートと柄の入った灰色のタイル 2階：板張り	保存	陰陽瓦葺	中庭、後庭	後庭	前家、橋家、後家	—
32	TP117	C1	2003	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	保存	陰陽瓦葺	不明	不明	前家平屋	—
33	TP38	C1	2004	飲食店兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折衷	六角形の灰色のタイル	保存	陰陽瓦葺	中庭	後家1階にあり	前家、橋家、後家	—
34	TP53	C1	2004	店舗兼住居	①	保存	柱梁構造と壁構造の折衷	1階：タイル	保存	陰陽瓦葺	中庭	後部にあり	前家、橋家、後家	—
35	TP62	C1	2006	店舗兼住居	③-1	板壁、部戸	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	保存していない	陰陽瓦葺	—	後部にあり	前家平屋	—
36	TP33	C1	2007/2008/2010	店舗	①	板壁、部戸	不明	不明	不明	陰陽瓦葺	不明	不明	前家平屋、他は不明	—
37	TP84	C1	2007/2008/2009/2010	祠堂兼住居	⑤-1	保存	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル（意匠見本）	保存（木製）	陰陽瓦葺	後庭	後部に別棟であり	主屋、祠堂各平屋	—
38	TP113	C1	2007	店舗兼住居	③-1	左右木製部戸、中央木製観音開き、板壁	柱梁構造と壁構造の折衷	コンクリート	保存	陰陽瓦葺	後庭	不明	前家平屋	—
39	BD94	C2	1999/2001	飲食店	④-1		柱梁構造と壁構造の折衷	コンクリート	木製	陰陽瓦葺	—	後部にあり	前家平屋	—
40	BD60	C2	2006	店舗兼住居	③-1	壁面モルタル仕上げ、1階開口部は木製百葉開きの扉、2階開口部	不明	コンクリート	不明	陰陽瓦葺	—	不明	前家、橋家、後家の総2階建	—
41	HVT2	C2	1997	店舗	①	板壁、開き戸	柱梁構造と壁構造の折衷	コンクリート	不明	陰陽瓦葺	不明	不明	前家平屋	—
42	HVT11	C2	2004	店舗兼住居	①	板壁、部戸	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	保存	陰陽瓦葺	不明	不明	前家平屋	—
43	HVT21	C2	2005	店舗兼住居	③-1	モルタル仕上げのフレンチコロニアル形式	壁構造	コンクリート	保存	陰陽瓦葺	不明	不明	前家2階建て。	—
44	LL45	C2	2003	旅行代理店	①	板壁	柱梁構造と壁構造の折衷	1階：タイル	保存	陰陽瓦葺	—	内部便所あり	前家2階建て	—
45	LL49	C2	2005	店舗兼住居	①	板壁、中央は観音開きの扉、左右は折戸	柱梁構造と壁構造の折衷	六角形の灰色のタイル	保存	陰陽瓦葺	中庭	内部	前家平屋。後家は中庭を挟み中庭に南側が正面。中庭に2階建ての増築（モルタル）	—
46	LL62	C2	2005	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、左右開口部は木製、中央開口部は観音開き、2階開口部も通りがない	柱梁構造と壁構造の折衷。柱は一部壁の中に塗りこめられている	1階：タイル 2階：板張り	保存	陰陽瓦葺	不明	1階奥	前家2階建	—
47	LL82	C2	2006	店舗兼住居	③-1	1階：板壁、3か所とも観音扉、2階：壁面モルタル	柱梁構造と壁構造の折衷	1階：タイル 2階：板張り	一部保存	陰陽瓦葺	—	不明	前家2階建	—
48	LL92	C2	2006	店舗兼住居	③-1	1階：板壁、折戸 2階：板壁、観音扉	壁構造で、2階は柱が用いられ小屋組みがある	1階：タイル 2階：板張り	一部保存	陰陽瓦葺	—	不明	前家2階建	—
49	LL50	C2	2007	店舗（兼住居）	③-1	壁面モルタル仕上げ、中央木製観音扉、左右	不明	六角形の灰色のタイル	木製	陰陽瓦葺	—	—	前家平屋、付属屋2階建	—
50	NTH90	C2	1997/2004	画廊兼住居	①	フレンチコロニアル	壁構造	1階：タイル	一部木製	陰陽瓦葺	中庭	不明	前家、付属屋、橋家、後家総2階	—
51	NTH113	C2	1998	店舗	④-1	板壁、左右部戸、中央観音開き	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	保存	陰陽瓦葺	中庭	不明	前家、付属屋平屋	—
52	NTH114	C2	1999	住居	①	板壁、部戸	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	調査拒否
53	NTH100	C2	1999/2004	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木材でいずれも観音開き	後家：壁構造	1階：タイル 2階：板張り	木製	陰陽瓦葺	中庭、後庭	1階後家後部、後庭	前家、橋家、後家総2階建	—
54	NTH28	C2	2000/2005	店舗	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製	不明	コンクリート	木製	陰陽瓦葺	中庭	不明	前家2階建、他は不明	—
55	NTH55	C2	2000	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製観音開き	柱梁構造と壁構造の折衷	1階：タイル	保存	陰陽瓦葺	不明	不明	前家2階建、他は不明	—
56	NTH84	C2	2000	店舗兼住居	①	板壁、中央観音開き、左右は部戸	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	保存	前家、付属屋共に平屋	中庭	不明	前家、後家総平屋建	—
57	NTH15	C2	2001	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、1階3箇所共に板戸観音開き、2階	柱構造と壁構造の折衷	1階：タイル 2階：板張り	一部保存	陰陽瓦葺	中庭、後庭	不明	前家、橋家、後家の総2階建	—
58	NTH17	C2	2001	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、1階3箇所共に板戸観音開き、2階中央のみ板窓。1階左右には木製	柱構造と壁構造の折衷	1階：前家はタイル、橋家より後はコンクリート 2階板張り	板戸（折戸）。	陰陽瓦葺	中庭	中庭	前家、橋家、後家の総2階建	—

表 4-21 修理申請のあった特級、等級 1、等級 2 の修理内容 (3)

No.	住所	等級	修理年	用途	分類	ファサード	構造	床	建具(階 段含む)	屋根	中庭、 後庭	水回り	棟の構成
59	NTH117	C2	2001 /2002	画廊兼住居	④-1	板壁板戸(中央観音開き、左右部戸)	柱梁構造と壁構造の折衷	1階:コンクリート、中2階:板張り(材料が細い)	木製	除陽瓦葺	—	付属屋2階	前家、付属屋総2階建
60	NTH53	C2	2001	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は板戸、板窓(観音開き)	柱梁構造と壁構造の折衷	1階:コンクリート、2階:板張り	木製	除陽瓦葺 (室内化)	不明	不明	前家、橋家、後家総2階建
61	NTH19	C2	2002	空き家	①	壁面モルタル仕上げ。中央観音開きの板戸、左右板窓。2階中央のみ板窓	不明	不明	不明	除陽瓦葺	不明	不明	不明
62	NTH130	C2	2002	博物館	①	壁面モルタル仕上げ、中央観音開き	柱構造と壁構造の折衷	1階:コンクリート 2階:板張り	木製及び鉄製	除陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家総2階建
63	NTH98	C2	2003	飲食店兼住居	④-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木材でいずれも観音開き	壁構造	1階:コンクリート 2階:板張り	木製観音開き	除陽瓦葺	後庭	中庭に当たる部分に設置	前家、付属屋総2階建
64	NTH48	C2	2004	店舗(兼住居)	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木材でいずれも観音開き	壁構造	1階:タイル 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	中庭	不明	前家2階建、後家平屋建
65	NTH50	C2	2004	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製でいずれも観音開き	壁構造	1階:コンクリート	不明	除陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家2階建
66	NTH61	C2	2004	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製でいずれも観音開き。2階開口部は格子が縦に入っている	柱構造と壁構造の折衷	1階:タイル 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	中庭	中庭	前家、橋家2階建て、後家平屋
67	NTH118	C2	2005	店舗兼住居	①	板壁、部戸、2階板窓、板壁	柱構造と壁構造の折衷	1階:タイル、2階:板張り	保存	除陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家2階建
68	NTH91	C2	2006	店舗(兼住居)	③-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製でいずれも観音開き	壁構造	1階:コンクリート	木製	除陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家総2階建
69	NTH34	C2	2007	店舗兼住居	③-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製の観音開き	壁構造	1階:コンクリート 2階:板張り、一部タイル	木製	除陽瓦葺	—	不明	前家、付属屋2階建
70	NTH59	C2	2007	飲食店	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製の観音開き	壁構造	1階:タイル 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	—	1階後部	前家、付属屋総2階建
71	NTH69	C2	2007/2008	店舗兼住居	③-1	板壁、木製折戸	壁構造	前家コンクリート、中2階板張り	木製	除陽瓦葺	中庭	1階後家	前家中2階あり、橋家、後家総2階建
72	NTH72	C2	2007	病院	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製の観音開き	壁構造	1階:コンクリート 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	後庭	後庭	前家2階建
73	NTH108	C2	2007	飲食店	①	壁面モルタル仕上げ、開口部はいずれも木製。フレンチコロニアル	壁構造	1階前家:六角形のタイル、1階橋家、後家:タイル	木製	除陽瓦葺	中庭	前家1階、後家2階	前家、橋家、後家総2階建
74	NTH67	C2	2008/2009/2010	店舗	①	板壁、木製折戸	前家:柱構造と壁構造の折衷、橋家及び後家:壁構造	タイル	木製	除陽瓦葺	—	不明	前家、橋家、後家中階
75	NTM12	C2	2006	画廊(兼住居)	②-1	板壁、左右の開口部は腰壁のある観音開き、中央観音開き	壁構造	前家:コンクリート	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家平屋
76	PBC36	C2	2001/2004	店舗兼住居	④-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は観音開きで木製	柱構造と壁構造の折衷	1階:タイル、2階:板張り	木製	除陽瓦葺	後庭	台所:後家2階	前家平屋、後家2階建、後家付属屋平屋
77	PBC33	C2	2002	観光局事務所	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製。フレンチコロニアル	壁構造	タイル	木製	除陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家、後家(PBC35と共通)
78	PBC34	C2	2002/2005	診療所	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製、フレンチコロニアル	壁構造	1階:六角形のタイル、2階:板張り	木製	除陽瓦葺	中庭	後庭に使用	前家及び橋家は平屋、後家は2階建
79	PBC35	C2	2002	観光局事務所	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製。フレンチコロニアル	壁構造	タイル	木製	除陽瓦葺	中庭	不明	前家、橋家、後家(PBC35と共通)
80	PBC45	C2	2005	店舗兼住居	①	壁面モルタル仕上げ	壁構造	六角形の灰色のタイル	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家平屋
81	PBC38	C2	2006	店舗兼住居	③-1	板壁、柱はモルタル仕上げ、開口部は木製観音開き	柱構造と壁構造の折衷	コンクリート	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家平屋
82	PCT21	C2	2002/2007/2008	祠堂兼住居	③-1	板壁、部戸、中央は木製観音開き	柱構造と壁構造の折衷	タイル	木製	除陽瓦葺	後庭	後庭	前家平屋
83	TP115	C2	1999/2000	店舗兼住居	④-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製でいずれも観音開き	柱構造と壁構造の折衷	1階:タイル 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	中庭(室内化)、後庭	後庭	前家(2階建)、橋家、後家
84	TP125	C2	1999/2000	店舗兼住居	②-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製観音開き	壁構造	1階:コンクリート 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	不明	1階後部	前家2階建
85	TP34	C2	2001	店舗(兼住居)	③-1	欄間木製、板戸、壁面モルタル仕上げ	不明	不明	不明	除陽瓦葺	不明	不明	前家平屋
86	TP95	C2	2001	画廊(兼住居)	③-1	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製	壁構造	1階:コンクリート	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家2階建
87	TP154	C2	2001	店舗(兼住居)	①	フレンチコロニアル	不明	1階:タイル	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家平屋
88	TP174	C2	2002	店舗(兼住居)	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製観音開き	壁構造	タイル	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家2階建
89	TP30	C2	2003	入場券売り場	①	板壁、板戸	壁構造	1階:タイル 2階:板張り	木製	除陽瓦葺	—	—	前家2階建
90	TP91	C2	2004	店舗	①	板壁、木製部戸	柱構造と壁構造の折衷	六角形の灰色のタイル	木製	除陽瓦葺	—	—	前家平屋
91	TP123	C2	2004	店舗(兼住居)	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製観音開き	壁構造	タイル	木製	除陽瓦葺	不明	不明	前家2階建
92	TP172	C2	2004	店舗(兼住居)	①	壁面モルタル仕上げ、開口部は木製観音開き	壁構造	タイル	木製	除陽瓦葺	中庭	中庭	前家2階建て、橋家
93	TP129	C2	2006	見学場所兼住居	④-1	板壁、木製部戸	柱構造と壁構造の折衷	1階タイル	木製	除陽瓦葺	中庭、後庭	後庭	前家、橋家、後家2階建



## 注

- 1) ホイアン史跡管理事務所職員へのインタビューによる。
- 2) 調査時に図面を管理する部署から借用して複写したが、一部保管していない図面もあったため。
- 3) 史跡管理事務所の所有する修理済み建造物一覧表は修理件数が書かれているため、準じる。
- 4) あくまで本論で用いる古都ホイアンのフレンチコロニアル様式である。

## 第五章 歴史地区ドゥオン・ラム村における日本の国際協力による 木造建造物の文化遺産としての保存への取り組み

### 5.1. はじめに

本章では、ベトナムの歴史的地区保存整備事業の二番目の事例であるドゥオン・ラム (Đường Lâm) 村の保存整備を取り上げ、古都ホイアンの保存整備事業と同様に整理し特徴と課題を考察する。ドゥオン・ラム村は、ベトナム北部に位置する農村集落であり、保存整備事業の始まった 2003 年から古都ホイアンと同様に日本の国際協力が行われている。従って、古都ホイアンの保存整備事業における経験が活かされているのか、日本側の協力手法は変化したのかという点も合わせて考察する。

初めに、ドゥオン・ラム村の保存整備事業の概要と経緯を整理し、歴史地区保存整備の枠組との対応を明らかにする。次に、ドゥオン・ラム村で行われている家屋修理の状況を明らかにし、第一章で設定した歴史地区保存整備の枠組みと修理の内容からドゥオン・ラム村保存整備事業の特徴と課題を考察する。

### 5.2. 歴史地区ドゥオン・ラム村の保存整備事業の概要

#### 5.2.1. ドゥオン・ラム村の概要と事業の流れ

ドゥオン・ラム村の歴史地区保存整備事業は、2003 年にベトナム政府が日本政府に協力を要請し、日本政府が要請を受けて開始された。1999 年に日本政府の協力により世界遺産となったホイアンの成果を鑑みた日本への協力要請だったとされている。ドゥオン・ラム村保存整備事業の事務局は古都ホイアンと同様に昭和女子大学が担っている。

ドゥオン・ラム村は、ベトナムの首都ハノイ市内に位置するが、中心部から西に約 60 キロの距離にあり、フン・フンやゴ・クエンといったベトナムの歴史上の人物<sup>注 1)</sup>を輩出した

土地である。歴史的地区保存事業開始前からドゥオン・ラム村内にある寺院や廟は、国に指定された文化財<sup>注2)</sup>であり、ベトナム政府により保存が行われていた。フランス植民地時代の保存対象は寺院や廟単体であり、1984年「歴史的文化的遺物及び名所の保護及び利用に関する布告」において一定の範囲や景観を保存することになったが、農村集落を保存対象とすることが、2005年の「文化遺産に関する法律」で初めて明記された<sup>注3)</sup>。同年、農村集落としてドゥオン・ラム村内の5つの集落が初めて国家文化財となった。管理は2006年に設立されたドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所（以下、遺跡保存管理事務所）の責任となった<sup>注4)</sup>。人口9000人<sup>注5)</sup>、住宅及び寺院などは、1182軒<sup>注6)</sup>だった。古都ホイアンとは異なり、ベトナム北部の農家型住宅や集会所などが密集している地区と、廟などが田んぼや畑の横に建つ地区がある。

ドゥオン・ラム村保存整備事業全体の流れを表5-1に示した。2003年に文化庁、奈良文化財研究所、昭和女子大学の調査チームが、建造物調査としてモン・フー集落350軒とカム・ティン集落165軒の民家調査、約50軒の公共物件調査と街路調査を実施した。また、建築・都市分野とあわせて、考古、民俗、衣服、食物等の専門家の参加する学際的研究体制を組み、地上に残る建造物でなく、有形無形の文化遺産を含めた保存調査の中間報告、保存計画案を提案した。調査の後に開催されたシンポジウムなどを経て、2005年11月にはベトナムで初めて農村集落として国家文化財となった<sup>1)</sup>。

保存整備事業の立ち上げ時には、既にベトナム政府により国家文化財として指定されており、その後保存条例が制定された。また、ドゥオン・ラム村の保存整備事業が開始されるとほぼ同時に、ドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所が設立された。ベトナム側は、歴史地区保存管理のために、専門組織の設立が必要だと考えていることが分かる。さらに、調査と研究も日本側の協力を得て行われ、2009年に報告書が作成された。日本側の調査内容は、民俗、衣服、食物といった村民が日常的に作り出すものや生活に密着した分野にもおよんでいることが窺える。これは、同時期の青年海外協力隊員（村落開発普及員）やシニアボランティア（行政サービス）の活動目的が観光地整備であることを踏まえると<sup>1)2)</sup>、調査の段階から観光地整備などを視野にいていたと考えられる。また、ドゥオン・ラム村では当初から日本人ボランティアとして青年海外協力隊員が常駐し、日本人専門家は年に何度かワークショップ等や視察で派遣されている。日本側の人材が常駐し、ベトナム側と緊密な関係を築くことが、保存整備事業実施に必要なと考えていることがわかる。

表 5-1 ドゥオン・ラム村保存整備事業年表

年月	施策	調査、建築物修理等
2003. 3	日本とベトナム、集落保存協力協定ROD (Record of Discussion) 締結 (昭和 女子大学国際文化研究所を事務局に奈良文化財研究所等と国際 協力を実施)	
2003～	様々な住民ワークショップ・各人民委員会・国文化財審議会・ユネス コを招いての国際シンポジウム等での討論	民家、新住宅調査開始
2005. 11	2005年11月に文化財保護法を改正	
	<b>ドンラム村農村集落でベトナム初の国家文化財</b>	
2006. 5	ソントイ市保存条例発布、ドゥオンラム村保存計画作成 保存地区Ⅰ (モンフー集落)	
2006. 7	保存地区Ⅱ (ドンサン、ドザイサップ、カムティン、カムラムの4集落) 遺跡保存管理事務所開設	日本からの文化財保存技術者の国際交流基金等によ る短期派遣
2006. 8	保存計画ワーク ショップ、伝統食品再興の講習会、伝統衣装に関する 住民説明会	
2007. 3	ユネスコ・イコモスと世界遺産準備会	
2007. 10～		建物修復工事開始 (Nu, Am, Vinh, Hung邸等)
2008. 1		JICAの青年海外協力隊員 (建築) 派遣、「人が住む 家の補修管理」 (～2010. 1)
2008. 3	第1回観光推進ワークショップ	
2008. 4		JICAの青年海外協力隊員 (観光)、「生きている村 の観光」 (～2010. 3)
2008. 8、9	第2回観光推進ワークショップ	
2008. 1		JICAシニアボランティア派遣 (～2008. 11)
2008. 12		青年海外協力隊、行政サービス (～2008. 11) JICA短期シニアボランティア (伝統建築) (～ 2009. 1)
2009. 2	ベトナム文化スポーツ観光省、日本の6団体、3個人を表彰	
2009. 3		伝統衣服調査 (国家大学ハノイ、ソントイ市遺跡管 理事務所、青年海外協力隊等)
2009. 9	青年海外協力隊 (建築) 派遣 (2011. 9)	青年海外協力隊 (建築) 派遣 (2011. 9)
2009. 12		JICAシニアボランティア (伝統建築) 派遣 (～ 2010. 1)
2010. 3	「草の根協力事業ヘリテージツーリズムプロジェクト」が採択される (2011年2月から3年間) (昭和女子大学実施、対象はドゥオンラム 村、フックティック村、ドンホアヒエップ村)	
2010. 3		青年海外協力隊 (村落開発普及員) 派遣 (～2012. 3)
2010. 9		シニアボランティア (地域振興) 派遣 (～2010. 10)
2010. 9	国家文化財5周年記念祭、ワークショップ (9月20日) ゴクエン祭礼、シンポジウム (9月21日)	
2010. 1	ハノイ建都1000年祭 (10月1日～10日)	
2011. 3	「草の根協力事業ヘリテージツーリズムプロジェクト」キックオフ	

(JICA シニアボランティア (行政サービス) として赴任した岩田正晴氏の報告書<sup>注7)</sup> より引用)

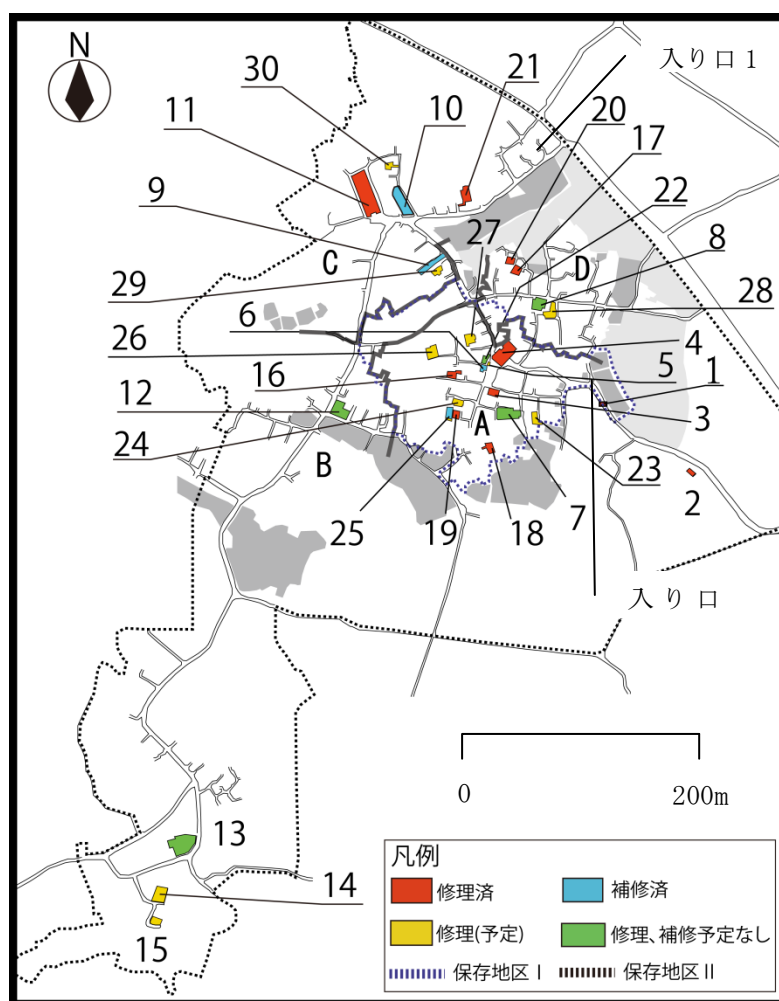


図 5-1 調査対象建築物位置図

(ドゥオン・ラム村に入村した人へ配布される観光用の地図を、本論で調査対象とした建築物の一覧表と対応できるよう番号を書き替え、色分けした。なお、建築物は調査対象のみを取り出し色分けしている。点線で囲んだ部分が保存地区。保存地区 I は青い点線内と観光対象として色塗りした箇所。保存地区 II は黒い点線で囲んだ保存地区 I 以外)

## 5.2.2. 文化遺産保存のための法律及び条例の制定

2005 年の文化遺産保護法の改正で農村集落も保存の対象となったことを受け、2006 年 5 月にはソン・タイ市<sup>注 8)</sup>が「ドゥオンラム古村遺跡の管理・保存・補修・活用に関する条例」(以下、保存条例)を公布した。その中で保存地区を重点的に保存する地域(保存地区 I)とその周囲の緩衝地帯(保存地区 II)の二種類に分けた。保存対象は保存地区内にある全てのものとなり、農村集落を生きたまま伝えたい<sup>注 9)</sup>というベトナム側の希望が書かれた。表 5-2 の通り、伝統的建造物群保存地区制度、古都ホイアンの保存条例である「1997 年条

例」と比較すると、文化遺産の譲渡と売買、調査責任者以外は譲渡と売買が書かれていず、条例自体が、ドゥオン・ラム村全体を保存する方針と、個々の保存対象の保存方法が混在しているといえる。なお、保存地区内の建造物は、類 1、2、3、新築、門の 5 種類に分けられ、対象となる建造物の材料や構造、色が書かれている。分類された類 1、2、3、新築、門はどの建造物かは明示されていない。しかし、保存対象は建造物以外に文書や考古遺跡、伝統職業等も挙げられており、村の歴史全体を保存する方針となっている。さらに、保存地区Ⅰ内では、エンジン付きの交通手段やトラクターの曳く荷車などの通行を禁止し、騒音・振動・火災・公害をもたらす工業技術の適用を禁止している。保存手法は、保存地区Ⅰ、Ⅱ共に家屋の平面構成を保つとある点で、様々な形の敷地に門と主屋、その他の棟で構成されるドゥオン・ラム村の建造物に合わせている。

ドゥオン・ラム村の保存整備事業は完了しておらず、古都ホイアンの事例を踏まえると今後保存を進めて行く中で集落の状況に沿った形に条例が改定されていくと考えられる。また、罰則規定はあるものの、既に現代的なものに建て替えている例も見られ、歴史地区の保存手法の一つは、当初の状態をできるだけ維持し継承することである点からも、ドゥオン・ラム村を歴史地区として文化財に指定した状態を維持し続けられるような、保存対象と保存方法の公開を行い、保存地区住民や関係者の協力を得やすい環境作りが望まれる。

表 5-2 ドゥオン・ラム村保存条例と伝統的建造物群保存地区制度、古都ホイアン 1997 年保存条例の比較

伝統的建造物群保存地区制度の項目	ドゥオン・ラム村の保存条例の内容	1997 年の内容	伝統的建造物群保存地区制度
1. 保存管理者	ドゥオン・ラム村遺跡管理事務所	保存管理者として人民委員会とその管轄下にあるホイアン史跡管理事務所が明記されている。文化財に関する情報提供やサービスについても両社が責任を持つとあり、1987 年版では管理者が明確ではない。	市町村など、対象地域が位置する自治体
2. 保存地区の設定	保存地区Ⅰ：モンフー集落全ての建築物、指定されたまたは指定されていない歴史、文化遺物、無形文化財を含んでいる。 保存地区Ⅱ：指定された、また指定されていない各歴史・文化遺跡、取上げられた代表的な価値を有する家屋、各無形文化財などを含めているドンサン、ドアイザップ、カムティンの三集落全ての建造物。	第一地区、第二地区、第三地区に分けられる。	保存地区としてのみ指定。周辺を風致地区指定を行い、緩衝地域として定める場合もある。
3. 保存対象の特定	1. 古い建築物（集会所、寺、廟、監視所、井戸、市場、古民家）、2. 地方の歴史、文化、伝統に關いた志士、名人をそうおするのために建設された他の文化的遺物、3. 各遺跡、遺物、古物・原物の資料・文書またドゥオン・ラム村の人民の愛国運動、革命運動を反映する、歴史・文学・芸術的価値を有する作品など 4. 各遺址、考古遺跡、5. 保存すべき伝統職業、祭り	特級、等級一、等級二、等級三、その他に分類。その他が修理規制より 1987 年の等級四にあたると思われる。	特定物件：修理基準 環境物件：修景基準 その他：修景基準 全ての建造物が保存対象として特定されるわけではない。 保存地区内に国宝や国指定重要文化財、国登録有形文化財が立地する場合もある。全ての建造物が保存対象として特定されるわけではない。
4. 対象分類ごとの修理基準の設定	建築物、技術的インフラストラクチャー建築物、宣伝的建築物全ての改造、新築、補修 保存修復補修に際する、建材、形、色に関する規定 歴史、文化、宗教、信仰の遺跡の場合 道路に関する規定	特級と等級一はできるだけ元の状態を維持する。等級四は周辺環境に調和させ、屋根は陰陽瓦を葺くことある。2008 年出版のユネスコの手引書と類する。 修理時に熟練技術者と契約を結ぶことが推奨されている。	国宝や国指定重要文化財、登録有形文化財は国の基準に従う。県指定、市指定重要文化財も同様である。他は、当該地の方針に従う。独自の町並み協定を作成している地区もある。
5. 高さ規制	保存地区Ⅱにおける、位置による	第二地区では、13.5m、第三地区では10mまで	地区の協定や風致地区の設定で行う。
6. 活用方法	—	商業を粉う上での許可制と、伝統的な行事の奨励	特に明記されない。
7. 関係者	ハタイ省人民委員会→ソントイ市人民委員会→ドゥオン・ラム村遺跡管理委員会。ドゥオン・ラム村人民委員会。ソントイ市文化情報所、ハタイ省遺跡管理委員会、経済・都市インフラストラクチャー所、資源環境所、ソントイ市司法所	ホイアン市人民委員会とホイアン史跡管理事務所以外に、保存地区内の住民、労働者、観光客も含む。	教育委員会とは別に、保存地区の修理や活用を実際に担う NPO や委員会などが設けられる場合もある。
8. 調査者	—	ホイアン市人民委員会	市町村から大学等の研究機関へ依頼する。
9. 交通手段	保存地区Ⅰ内におけるエンジン付きの交通手段、トラクターの曳く荷車などの通行禁止。 法的権限を有する機関によって定められた標準を超えた騒音・振動・火災・公害をもたらす工業技術の適用を禁止。	保存地区Ⅰ内での車両の使用の禁止。その他騒音の大きいものの禁止。	都市計画上に組み込まれる。或いは地区指定や地域協定区組み込まれる。
10. 保存対象物件の売買と譲渡	—	遺物の価値と景観を破壊する行為の禁止	自治体への通知義務
11. 罰則規定、報奨	ソントイ市人民委員会に、ベトナム政府の規制に応じて報奨される。本条例に違反した場合は、行政違反処罰法令に応じて処罰される。また法律上での処罰をされる。	保存に貢献したものは表彰され、報奨が与えられる。違反したものは罰せられるか訴えられる。保存規制に違反しているものは撤去される。	—
12. 緑地	各地区の樹木は注意深く保護する。 保存地区Ⅰ：植樹などは認可された計画通り。伐採に関しては、ドゥオン・ラム村遺跡管理委員会の許可が必要。緊急の場合は許可を得なくともよいが、伐採後に委員会に連絡する。	既存樹木の保存と新たに植える場合の許可設定	環境物件として特定される。その他は緑地計画で指定する。
13. 補助金もしくは修理費用	遺跡を用いて経済活動をおむ組織は、ソントイ市人民委員会によるドゥオン・ラム村遺跡修復基金に寄付する義務を持つ。個人、集団による遺跡修復基金は、ドゥオン・ラム村遺跡管理委員会を通してソントイ市人民委員会によって管理される。	観光場所への入場券収入が修理基金となる	伝統的建造物群保存地区内の建造物及び工作物の修理、修景時に県及び国から補助金が出る。

### 5.2.3. 文化遺産保存のための管理組織の設立と専門職員の配置

保存管理組織として 2006 年にソン・タイ市人民委員会の下にドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所（以下、遺跡保存管理事務所）が設立された（図 5-2）。遺跡保存管理事務所の構成は、所長の下に副所長 2 名を長にした部署、ドゥオン・ラム村の入り口にある管理事務所、ソン・タイ城担当部署、バー寺担当部署に分かれている。全体で公務員が 8～10 人、ガイドや警備員などが 2、30 人勤務している。ベトナム人の建築専門職員は 2012 年までに一人から二人に増員された<sup>注 10)</sup>。

歴史地区の保存整備事業の初期段階において、保存管理組織にドゥオン・ラム村専門の部署が設けられ、また、保存整備の中心となる家屋などに関する建築専門職員が勤務し、保存整備を進めている。よって、建築専門職員は古都ホイアンより早い段階から建造物等の修理や管理に関わることができる。また、日本人専門家がドゥオン・ラム村専門部署の職員へ協力することにより、古都ホイアンでは難しかった歴史的地区の保存整備に対する管理者の視点も伝えられる。

さらに、2008 年 1 月から JICA の青年海外協力隊員（建築及び村落開発普及員）が遺跡保存管理事務所に勤務している。同年 10 月から同じくシニアボランティア（文化財、行政サービス等）の断続的な滞在、日本人の観光専門家も含めた協力により家屋の保存とドゥオン・ラム村村民への意識啓発、博物館の展示準備などが進められている。2009 年にはドゥオン・ラム村のマスタープランが作成され、2010 年 9 月には文化財 5 周年記念祭とワークショップが行われた。観光地区として設定された地区の二か所ある入り口では、入場券の販売と観光できる建造物や工作物を明記した地図（図 5-1）を配布している<sup>注 11)</sup>。常駐できる JICA の青年海外協力隊員により、日本側はベトナム側の人間関係を把握しやすいと思われる。ただし、青年海外協力隊員は副所長管轄下の部署に配属されており、建築専門職員との協力はほぼ行われていない<sup>注 12)</sup>。今後、建築専門職員と同じ部署に配属されれば、業務上の連携も検討できる。

以上から、歴史地区の保存管理を行う組織について次の二点が明らかになった。まず、保存整備事業開始から 3 年後に遺跡保存管理事務所が設立されたことで、管理者が明確にされている。また、保存整備事業開始後、間を開けずに保存管理組織内部にドゥオン・ラム村を専門に扱う部署が設けられ、建築専門職員が着任している点からも、保存体制が整えられているといえる。



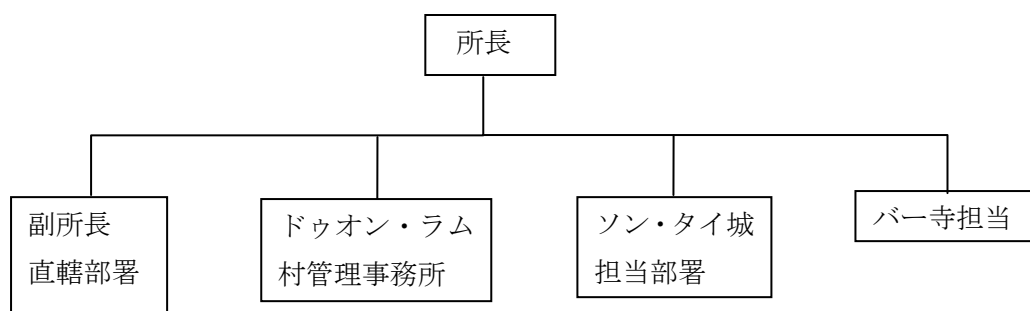


図 5-2 ドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所組織図

(青年海外協力隊員への聞き取りにより筆者作成)

#### 5.2.4. 文化遺産の調査と研究及び報告

日本の協力事業が始まると、古都ホイアンと同様に、日本とベトナムの共同体制で政府機関や大学の専門家による調査が行われた。日本側は、奈良文化財研究所や昭和女子大学を中心とした研究者が主な参加者だった。ベトナム側の参加者は、文化情報省文化遺産局、ハタイ省文化情報局、ソントイ市、ドゥオン・ラム村、国家大学ハノイ歴史学科、地理学科、建設省建築研究所が参加者だった。調査内容は、建造物のほかに地形、歴史、考古学、被服、食物と多岐にわたり、村の歴史や現状を明確にした。例えば、建造物を調査する場合は対象物件の図面を作成し、地形図を作製して集落の全景を明らかにした。また、調査成果は報告書としてまとめられた<sup>2)</sup>。

ドゥオン・ラム村の保存条例をみると、ドゥオン・ラム村において保存対象となる建造物は全部で5種類に分けられる。類1、類2、類3、門、新築とされている。各種類別に保存対象となるもの、各種類別の具体的な保存方法も書かれている。ただ、具体的な対象は明記されていず、保存対象を明記した一覧表等も公表されていないため保存地区の住民や関係者は保存整備事業に対する協力や保存活動への協力を行えない。

調査の成果は、その後、保存整備事業を進める上で基礎資料となる。例えば、村の住民が普段摂取している食物や着衣の調査は、後に村の名産としての料理や土産物の検討、土地と結びついた生活様式の評価につなげられ、同時に農村集落を建造物のみならず生活領域および様式も含めた保存を進めるというベトナム政府の意向<sup>注13)</sup>を反映できる。実際に、青年海外協力隊員（村落開発普及員）が行っている土産物の開発や、住民の歴史地区保存整備事業への参加を目的とした、観光客向けの郷土料理のワークショップ開催などにつながっている。以上からドゥオン・ラム村でも古都ホイアンと同様に、日本側の調査成果が歴史地区保存整備に用いられていると考えられる。

### 5.2.5. 文化遺産保存のための修理技術と材料

ドゥオン・ラム村の建造物の修理は、保存整備事業開始後は原則として遺跡保存管理事務所が実施している<sup>注14)</sup>。修理費用は基本的にソン・タイ市（現ハノイ市）の負担で行われる<sup>注16)</sup>が、建造物の所有者が負担する場合もある。建造物の所有者が負担する場合は、遺跡保存管理事務所の指導に基づかない補修<sup>注17)</sup>が行われる。ドゥオン・ラム村は文化遺産として保存地区が決定されたが、遺跡保存管理事務所は保存地区内の家屋の補修工事を全て把握しておらず、保存地区内の補修工事時における申請手続きなどについては未整備だと推察される。歴史地区として指定される前から、建造物の補修は元々ドゥオン・ラム村の住民が行っていたという<sup>注18)</sup>。調査時も、村内で住民が自主的に補修を行っている様子が見られた<sup>注18)</sup>が、持続的な歴史地区の保存整備という視点からは、遺跡保存管理事務所が全ての工事を把握していることが望まれるところである。

調査で見られた村で用いられている補修方法は、腐朽した箇所がある部材を全て取り替える、或いはコンクリートなどで埋めるというものだった。ただし、国指定の文化財である建造物においては、腐朽した箇所のみを切り取り新材と継ぐという手法が用いられている。

この手法は歴史的な建造物の真正性を担保するために旧材を可能な限り残す考え方だといえ、ドゥオン・ラム村に旧材を残す考え方があるといえる。今後、遺跡保存管理事務所がドゥオン・ラム村の修理工事を全て管理すれば、日本人専門家の修理技術指導協力により、ドゥオン・ラム村の修理工事を担当する遺跡保存管理事務所の建築専門職員や施工会社の社員に歴史的な建造物の文化財としての修理方法が伝わる。そして、ドゥオン・ラム村保存地区内の建造物全てが文化遺産としての修理を行われるようになる。

従って、遺跡保存管理事務所は保存地区内で行われる修理や補修を含めた工事全てを把握し管理する体制づくりと、住民からの協力を得られるよう、保存対象や文化遺産としての価値付け、保存方法などの情報公開が必要である。

建造物の所有者は、個人の家屋は屋主だが、門や集会所、寺院は、それらが位置する集落であり<sup>注20)</sup>住民の歴史地区保存整備に向けた行動が重要であり、住民への情報公開において、歴史地区保存整備の意義や保存地区内の構成要素全てが重要であることへの周知が検討できる。

### 5.2.6. 枠組み全てに係わる人材育成

2006 年から昭和女子大学が事務局となり、ドゥオン・ラム村へ建造物の修理技術協力を行う日本人専門家の派遣が開始された。調査時までに 9 件の建造物等への協力が行われた。その後、ドゥオン・ラム村の象徴とされている集落の境界を示す門や寺院の修理が行われ

た。こうした修理技術協力に加え、シンポジウム、ワークショップ等を通じて日本人専門家は文化遺産保存修理方針や修理計画の立て方などを伝えている。

表 5-3 に、ドゥオン・ラム村に派遣された、或いは視察した日本人専門家が発表したシンポジウムでの内容をまとめた。全体としてドゥオン・ラム村の技術を踏まえながら行われており、日本人専門家は現地の技術を尊重している。並行して木造建造物において旧材を多く遺しながら使い続ける考え方や修理方法、木造建造物の歴史を継承する修理に対する考え方や修理計画の立て方を始めとして、現場での具体的な技術などを伝えている。また、修理だけではなく、日本の歴史的地区保存整備で求められる保存対象の建造物の所有者との付き合い方にも言及している点が指摘できる。

表 5-3 専門家の指導内容

No.	項目	内容
1	文化財修理に対する考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当初材及び旧材の保存等の方法を考えるべき。材を調べて様々なことが分かる。</li> <li>・古いものを残す意識のもとに進めることが大切。</li> <li>・新築と修理のシステムは違う。</li> <li>・文化財はどれくらい古いものを残せるにかかっている。残すことを意識していないと残せない。</li> </ul>
2	修理の仕組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予算取りのための設計と解体後の変更実施設計の必要性がある。</li> </ul>
3	修理計画の立て方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修理の予算は、対象を解体した時点で想定外のことがある。そうしたことも考えて修理計画を立てる。</li> <li>・修理計画の立て方は、まず情報（対話）収集をし、修理対象物一覧表を作る。コード番号を付け、写真付きの記録を作る。これを経て、予算修理計画を立てる。</li> <li>・よく歩いて建物状況をつかみ修理の優先順位を決定する。</li> <li>・建っている状態ではわからないことが多い。</li> </ul>
4	材料の扱い方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二本しか旧材がないなら一本は必ず使う。同じものなら半分は使う基準を作る。旧材、当初材をタワシ、真鍮ブラシ等で水洗いしきれいにする。釘を早く抜く。</li> <li>・旧材を大切にしてお本を残す。設計業者は取り換えた方が楽だが、これでは古い材がなくなり、価値が下がる。</li> <li>・使わない当初材及び旧材で特徴的なものは、今後人に見せられるように、保存しておくが良い。</li> </ul>
5	所有者や地域住民に対する考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住人との関係が大変重要である。会話をたくさんすることで情報が多くなり、相手の考えも把握できる。</li> <li>・他の住民を説得してもらい、市行政との仲介をする住民を見つけることも大切である。</li> <li>・人によって「解体」の捉え方が違う。それぞれの解釈があるので、管理事務所や日本側が解体ではないといっても、所有者はそうは思わないかもしれない。具体的に、例えば「両妻側の通りの柱は一時取り外します」等の説明をして、同意を得ることが大切である。</li> </ul>
6	日本人専門家による修理技術指導	(技術指導は) 管理者である職員だけではなく、設計者に行うことが、より大切である。
7	現場での具体的な指導内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲りの大きいものは糸を張るなどして、数値化した基準で判断する。</li> <li>・雨の当たる可能性のある中心部に赤身の多い母屋材を使用する。</li> <li>・（木材検収経過で）曲りが大きいもの、丸太の径が小さいものは駄目だとしても、数値基準を設定し誰が検査者となっても品質が同じになるようにすべき。</li> <li>・古い仕口には傷をつけない。いらない仕口は埋めるが傷をつけない。</li> </ul>
8	その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・重要な建物は、ある程度修理トレーニングをしてから行うほうが良い。</li> <li>・建築専門職でなくとも管理事務所の職員全員が（対象を）状態をよく見る。所員が良いか悪いかを見ていないと、地域の人や設計者と話ができない。</li> <li>・日本側は様々な意見、方法を投げかけるが、最終的には管理事務所が判断したほうがよい。</li> </ul>

### 5.3. 修理及び補修内容の特徴

#### 5.3.1. 調査対象、調査手法と調査期間

古都ホイアンの修理と同様に、ドゥオン・ラム村の建造物において立地や所有者、修理費用負担者によって修理及び補修内容を分析する。

調査対象は、平成 22 年 10 月に観光用の場所として地図<sup>注 11)</sup>に掲載されていた建造物等 30 軒のうち、調査ができた 28 軒とする。古都ホイアンにおいて、調査対象とした建造物は、

修理及び整備済みのもののみだったが、ドゥオン・ラム村の保存整備事業は、完了していないことから、建造物の修理手法や現状を確認するために観光対象とされている建造物全てを対象とする。

調査期間は平成 22 年 10 月から平成 23 年 1 月の間の 10 日間である。

調査手法は、目視調査と写真撮影を用いた。必要に応じて既出の報告書に掲載されている図面を用いた。修理及び補修内容の調査は、古都ホイアンと同様に、目視により確認できる継ぎや材料の表面の色から部材の取替えを判断し、旧材をできるだけ残す修理が行われているかという点に特に注目した。

### 5.3.2. 調査結果の分析

#### (1) 調査結果の分析方法

ドゥオン・ラム村の修理状況の分析を古都ホイアンと同様に行った。分析項目は、表 5-4 の通り建造物の所有者と修理費用負担者を取り上げた。分析項目の選択理由はドゥオン・ラム村を管理する遺跡保存管理事務所が全ての修理を管理できていず、また既存の報告書<sup>2)</sup>に書かれている類 1、2、3、新築、門の 5 種類に分けられた建造物は公表されておらず、分類および修理状況ごとの保存内容に沿っているかの判断ができないためである。遺跡保存管理事務所が修理を管理している場合は、修理費用は公的機関により負担される。一方、遺跡保存管理事務所による管理が行われない場合は、建造物の所有者が修理費用を負担している。つまり、遺跡保存管理事務所により実施されている修理と、それ以外により実施される修理が並立している。徐々に遺跡保存管理事務所が全ての修理を管理する体制が作られていくと思われるが、現時点での状況を整理し明らかにすることは、今後ドゥオン・ラム村の保存整備事業を進めて行く上で必要である。また、遺跡保存管理事務所の歴史地区の管理方針とそれ以外の手法の相違点を整理することで、日本側の協力時の参考にもなる。なお、ドゥオン・ラム村は農村集落であるため、古都ホイアンと異なり通りと路地という立地による分類は行わず、いずれの建造物も集落内にあれば同じ条件であるとして扱った。

修理内容を分析する際の組み合わせは、表 5-4 の通り 8 通りとなる。所有者は、家屋の場合は居住者、寺院や集会所は集落等になる。今後修理が予定されているものは名称部分に括弧で予定と記し、日本人専門家が関わらない場合は修理ではなく補修と記述した。

調査結果として取上げる事例は表 5-4 の大分類ごとに扱い、既に修理が行われたものは事例紹介において修理期間を記した。

表 5-4 の各分類の内容は次の通りである。既に修理が行われたもののうち共同体が所有し、修理費用を公的機関が負担している事例は共公型、個人所有で修理費用を公的機関が

負担している場合は個公型とした。遺跡保存管理事務所により修理が予定されているものは、共同体所有で修理費用を公的機関が負担している場合は共公型（予定）、修理が予定されているもので、個人所有で補修費用を個人が負担している場合は個公型（予定）とした。住民により補修が行われたもののうち、共同体所有で補修費用を個人が負担している場合は共個型、個人所有で補修費用を個人が負担している場合は全個型とした。修理が予定されていないもので共同体所有の場合は共型、修理が予定されていないもので個人所有の場合は個型とした。古都ホイアンにおいては、修理及び整備済み建造物のみを調査対象とした。しかし、ドゥオン・ラム村は、保存整備体制が未整備であり、ドゥオン・ラム村に元々ある補修の方法や建造物の状況を把握するために、観光地図に掲載されている建造物全てを調査、分析の対象とした。

古都ホイアンにおいてみられた国が所有し公的機関が修理費用を負担する全公型が、ドゥオン・ラム村においては見られない。つまり、国が所有する建造物が存在しない。古都ホイアンにおける国が所有する建造物は、当初から国所有の建造物もあるものの、保存整備事業の過程で住民が家屋を売却し、1997 年条例にある通り国が買い取ったものである。ドゥオン・ラム村の条例においては、国の買い取り措置について明記されていず、売却や譲渡の際に新たな所有者の保存整備事業への理解や協力が見られない事態の発生が想定される。

調査対象とした 30 件中 16 件の修理が 2011 年の調査時点で既に終わっており、修理が予定されているものは 9 件ある。また、修理年を見ると日本人専門家の建造物への修理技術協力が始まった後も、遺跡保存管理事務所による修理 11 件中 2 件は、遺跡保存管理事務所のみで修理が行われ、日本人専門家の協力はドゥオン・ラム村の保存整備事業の一部であることがわかる。

表 5-4 所有者と修理費用負担者による分類

大分類	分類	名称	内容
修理済み	①	共公型	共同体所有で修理費用を公的機関が負担している。
	②	個公型	個人所有で修理費用を公的機関が負担している。
修理予定	③	共公型(予定)	修理が予定されているもので、共同体所有で修理費用を公的機関が負担している。
	④	個公型(予定)	修理が予定されているもので、個人所有で修理費用を公的機関が負担している。
個人で補修	⑤	共個型	共同体所有で補修費用を個人が負担している。
	⑥	全個型	個人所有で補修費用を個人が負担している。
修理が予定されていない	⑦	共型	修理が予定されていないもので、共同体所有のもの
	⑧	個型	修理が予定されていないもので、個人所有のもの

次に、表 5-4 の 8 つの分類を用いてドゥオン・ラム村の修理と補修の内容を分析し、日本人専門家の修理協力とドゥオン・ラム村住民の補修の傾向を比較し、歴史地区保存整備の視点から考察する。

個別の事例の題名は「所有者と費用負担者による分類番号、図 5-2、表 5-4～5-7 及び資料集で用いられている番号、建造物の名称」とする。

#### (1) 遺跡保存管理事務所により行われた修理

28 件中 11 件が該当する。内訳は、11 件中 5 件が共同体所有、6 件が個人所有である。また、日本人専門家により修理が行われた事例は、3 件である。外観の違いはほとんど見られない。

旧材の残し方を見ると、遺跡保存管理事務所で行われた場合と日本人専門家により修理が行われている場合（図 5-5）とでは、異なるといえる。例えば、遺跡保存管理事務所のみで修理が行われる場合は、腐朽した箇所がある部材は全て取り替えるために白い部材が多い。一方、日本人専門家が修理協力を行う場合は、継ぎが見られ旧材を多く遺すという修理方針になっていることが窺える。一方、表 5-5 及び図 5-3 で示すように開口部の形式や屋根の形式といった点では相違が見られない。

また、主屋の床や庭の床が土間や磚の場合が 2 件と、タイルの場合が 4 件ある。タイルは最近使われ始めた素材と考えられるため、土間や磚が歴史的な価値を持つ保存対象とは認識されにくくなると考えられる。

敷地境界の壁は、この分類においては、全て同じだった。住宅の場合、敷地内の棟の構成については主屋と水回り、物置から構成されており、敷地の大きさによって物置が見られない場合もあった。屋根瓦は、形式の異なるものは特に見られなかった。

表 5-5 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容(1) 管理事務所による修理

No.	管理事務所による修理		所有者	名称	集落	文化財指定	主屋				構成	他の棟	庭の床	門	敷地境界の壁
	日本人専門家の修理協力	修理年					構造	床	建具	屋根		床、建具、屋根			
1	—	2008. 6 / 2010	①	モンフー門 (Cổng Mông Phụ)	モン・フー	国指定	柱梁構造と壁構造の折衷	—	維持（木製開口部）	瓦葺き	門	—	—	—	—
2	—	2010	①	オン寺(Chùa Ôn)	モン・フー	指定なし	維持（柱構造と壁構造の折衷）	タイル	—	瓦葺き	主屋	—	土	—	—
3	—	2010	①	ザン・ヴァン・ミン祠堂 (Nhà Thờ Thảm Hoa Giang Văn Minh)	モン・フー	国指定	維持（柱構造と壁構造の折衷）	石	維持（木製開口部）	瓦葺き	主屋、祠堂	柱梁構造、瓦葺、壁面モルタル仕上げ	タイル	瓦葺、壁面漆喰、板戸（観音開き）	石積
4	—	2004-2005	①	モンフー集落集会所 (Đình Mông Phụ)	モン・フー	国指定	維持（柱梁構造）	主屋：板、左右の棟；石	維持（木製開口部）	瓦葺	主屋、左右	瓦葺	タイル	モルタル製柱	石積
11	—	2000, 2009-2010	①	ミア寺(Chùa Mía)	ドン・サン	国指定	維持（柱梁構造と壁構造）	タイル	維持（木製開口部）	瓦葺	住居棟、回廊、門	住居棟：壁面モルタル仕上げ、木製開口部、瓦葺回廊：柱梁構造と壁構造の折衷。壁面モルタル仕上げ	タイル	瓦葺、壁面漆喰、板戸（観音開き）	石積
16	2008. 10	—	②	ハー・ヴァン・ヴィン邸 (Nhà Cô Ông Hà Văn Vĩn)	モン・フー	市指定	維持柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	維持（板壁、板戸）	瓦葺	物置、水回り等	瓦葺	タイル	壁面モルタル、木製開口部	石積
17	2008. 10	—	②	カオ・ティ・バイ邸(Nhà Cao Thị Bai)	カム・ティン	指定なし	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
18	2008. 12	—	②	グエン・ヴァン・フン邸 (Nhà Cô Ông Nguyễn Văn Hùng)	モン・フー	市指定	維持（柱梁構造（側室の柱は一部部ごと取替））	土間	維持（板壁、板戸（側室の建具は部材ごと取替））	瓦葺（葺き替え）	主屋、水回り	瓦葺	タイル	モルタル壁、木製開口部	石積
19	2009. 2	—	②	ファン・ヴァン・トゥ邸 (Nhà Phan Văn Thu)	モン・フー	指定なし	柱梁構造と壁構造の折衷（小屋組みを遺した壁構造。柱はある）	タイル	壁面モルタル仕上げ、木製開口部（形状は現代的）	瓦葺	主屋、水回り	瓦葺、壁面モルタル仕上げ、木製開口部	タイル	不明	不明
20	2009. 2	—	②	チュオン・ティ・ヌ邸 (Nhà Trương Thị Nu)	カム・ティン	市指定	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
21	2009. 2	—	②	ヴ・ティ・アム邸 (Nhà Vu Thị Am)	ドン・サン	市指定	柱梁構造つ壁構造の折衷	不明	板壁、板戸	瓦葺	主屋、水回り	瓦葺	タイル	壁面モルタル仕上げ	石積

所有者と費用負担の分類は①共公型)、②個公型。表の no.は図 5-3 において個別の写真に付けられた番号及び資料集と対応する。

#### 共同体の所有している建築物等



(1) モンフー門  
(Cổng Mông Phụ)  
H22. 12. 28 撮影



(2) オン寺 (Chùa Ôn)  
H22. 12. 28 撮影



(3) ザン・ヴァン・ミン祠堂  
(Nhà Thờ Thảm Hoa Giang Văn Minh)  
H22. 12. 30 撮影

図 5-3-1 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容(1) 管理事務所による修理の外観一覧 1





(4) モンフー集落集会所  
(Đình Mông Phụ)  
H22. 12. 30 撮影



(11) ミア寺 (Chùa Mia)  
H22. 12. 30 撮影



#### 個人の所有している建築物等



(16) ハン・ヴァン・ヴィン邸  
(Nhà Cô Ông Hà Văn Vĩn)  
H22. 12. 28 撮影



(18) グエン・ヴァン・フン邸  
(Nhà Cô Ông Nguyễn Văn Hùng)  
H22. 12. 28 撮影



(19) ファン・ヴァン・トゥー邸  
(Nhà Phan Van Thu)  
H22. 12. 28 撮影



(21) ヴ・ティ・アム邸  
(Nhà Vu Thi Am)  
H22. 12. 30 撮影

図 5-3-2 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (1) 管理事務所による修理の外観一覧 2

#### 遺跡保存管理事務所による修理事例 1 (1) モン・フー門

集落の入り口に位置する門である。国指定文化財であり 2008 年と 2010 年に日本人専門家の協力を受けながら修理された。もう一か所の門と比較すると規模は小さいが図 5-4 A で示すように門と木の組み合わせはドゥオン・ラム村の象徴的な位置づけにある。図 5-5 B のように構造材の腐朽箇所の修理を中心に行われた。



##### A. 外観

側壁はモルタル仕上げが内部は木材が使用されている。(H22.12.28 撮影)



##### B. 小屋組

修理の跡が散見できる。旧材を多く遺す丁寧な修理である。(H23.8.17 撮影)

図 5-4 モン・フー門写真

## 遺跡保存管理事務所による修理事例2 (11) ミア寺

2000 年、2004 年から 2005 年に修理されたドン・サン集落に位置する国指定文化財の寺院である。敷地は緩やかな斜面にあり、細長い（図 5-5 A）。門の位置が最も低く、門と回廊を介して建つ二つの棟、その前に建つ棟、両脇に建つ宿坊で構成されている。国指定文化財であるためか日本人線も科による協力ではないものの丁寧な修理が施されている。材料が太く家屋とは異なる雰囲気である（図 5-5 B～D）。回廊と腐朽部分は木粉を練ったものを塗りこめている。2010 年にも修理された。旧材を残す修理方針は窺えるが、柱によっては部材を切断している。一方で腐朽部分に埋めを施しているものも見られる。



A. 正面の門

2 階が設けられている。下部の屋根は瓦の色が異なり葺きかえられているとわかる。（H22.12.30 撮影）



B. 本殿柱

下部が継がれていることが分かる。（H22.12.30 撮影）



C. 柱の劣化

下部に色の退化や表面の剥離が見られる。（H22.12.30 撮影）



D. 柱下部の補修

塗装が施されている。（H22.12.30 撮影）

図 5-5 ミア寺写真

### 遺跡保存管理事務所による修理事例 3 (17) ハー・ヴァ・ヴィン邸

モン・フー集落に位置する市指定の文化財である。2008 年に日本人専門家の協力で修理された。敷地の左手に主屋が位置する。所有者は学校の先生だった。主屋には中心となる部屋の左右に側室が設けられている。正面にモルタル仕上げの壁のある、特徴的な外観を持つ家屋である。部材の取替えは材料表面の色の違いから見られた。



#### **A. 正面外観**

底部分に壁をモルタルで設けている点に特徴がある。庭の床は煉瓦が敷かれ、使い易くしている。  
(H22.12.28 撮影)



#### **B. 側室の柱**

色が白く取替えていることが分かる。天井はビニルシート等で代替している。(H22.12.28 撮影)

図 5-6 ハー・ヴァ・ヴィン邸写真

### (2) 遺跡保存管理事務所により修理が予定されている事例

28 件中 10 件が該当する。10 件中 3 件が共同体所有で、7 件が個人所有である（表 5-5）。

これから遺跡保存管理事務所により修理が予定されている事例だが、既に住民による補修が行われていた建造物もあった。補修内容を見ると、風雨により劣化しやすい庇を支える柱の下部がセメントで補強されているといった例（表 5-5 23 番）が挙げられる。また、個人所有の家屋は、主屋の左右と前面は板壁と板戸、背面のみ煉瓦積モルタル仕上げだが、共同体所有の廟などでは壁面が全てモルタル仕上げで、黄色い塗装が用いられており、補修内容に個人所有の家屋との違いが見られる（図 5-7-1、図 5-7-2）。補修の場合、歴史的な要素を可能な限り残すという意図は見られない。

表 5-6 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容 (2) 管理事務所により修理が予定されている事例

No.	管理事務所による修理 日本人専門家の修理協力		所有者	名称	集落	文化財指定	主屋				構成	他の棟の床、建具、屋根	庭の床	門	敷地境界の壁
	日本人専門家の修理協力	修理年					構造	床	建具	屋根					
5	—	予定	③	シック・ハウ(Xích Hâu)	モン・フー	指定なし	保存	タイル	—	瓦葺	主屋	—	—	—	—
14	—	予定	③	ゴクエン廟 (Đền và Lăng Ngô Quyền)	カム・ラム	国指定	柱梁構造	磚	板戸、板壁	瓦葺	主屋、住居棟	壁構造と柱構造の折衷	磚	モルタル仕上げの柱	—
15	—	予定	③	ゴクエン稜 (Đền và Lăng Ngô Quyền)	カム・ラム	国指定	不明	不明	不明	瓦葺	主屋のみ	—	—	—	モルタル仕上げ
23	—	予定	④	ザン・ヴァン・トゥアン邸 (Nhà Cô Ông Gian Văn Thuận)	モン・フー	市指定	柱梁構造と壁構造の折衷	磚	板壁、板戸	瓦葺	主屋、水回り等	物置等：壁構造	タイル	板戸	石積
24	—	予定	④	ハ・ヴァン・テ邸 (Nhà Ha Van The)	モン・フー	市指定	柱梁構造と壁構造の折衷	磚	板壁、板戸	瓦葺	主屋、水回り等	瓦葺	タイル	モルタル仕上げ、板戸	石積
26	—	2012	④	ゲン・ゴック・レ邸 (Nhà Cô Ông Nguyễn Ngọc Lê)	モン・フー	指定なし	梁ら梁構造等壁構造の折衷	磚	板壁、板戸	瓦葺	主屋、水回り	瓦葺	タイル	モルタル仕上げ	石積
27	—	予定	④	ドゥオン・ティ・ラン邸 (Nhà Cô Bà Dương Thị Lan)	モン・フー	市指定	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	板壁、板戸	瓦葺	主屋	水回り	磚	モルタル仕上げ	石積
28	—	予定	⑥	カオ・ヴァン・トアン邸 (Nhà Cô Ông Cao Văn Toàn)	カム・ティン	市指定	柱梁構造と壁構造の折衷	磚	板壁、板戸	瓦葺	主屋、水回り	瓦葺	タイル	不明	石積
29	—	予定 (2012)	④	キエウ・アイン・バン邸 (Nhà Cô Ông Kiều Anh Ban)	ドン・サン	市指定	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	板壁、板戸	瓦葺	主屋、水回り	瓦葺	タイル	モルタル仕上げ	石積
30	—	予定	④	ゲン・フィ・チュオン邸 (Nhà Cô Ông Huy Truong)	ドン・サン	市指定	柱梁構造等壁構造の折衷	磚	板壁、板戸、左右と後の壁はモルタル仕上げ	瓦葺	主屋、水回り	瓦葺	磚	モルタル壁	石積

③共公型（予定）、④個公型（予定）に該当するもの。修理予定は管理事務所にヒアリングした。表の番号は図 5-2 及び外観の写真で個別に付けられた番号と対応する。

#### 共同体所有



(5) シック・ハウ(Xích Hâu)  
H22. 12. 30 撮影



(14) ゴクエン廟  
(Đền và Lăng Ngô Quyền)  
H23. 1. 9 撮影



(15) ゴクエン稜  
(Đền và Lăng Ngô Quyền)  
H23. 1. 9 撮影

#### 個人所有



(23) ザン・ヴァン・トゥアン邸  
(Nhà Cô Ông Gian Văn Thuận)  
H23. 1. 9 撮影



(24) ハ・ヴァン・テ邸  
(Nhà Ha Van The)  
H23. 1. 4 撮影



(26) ゲン・ゴック・レ邸  
(Nhà Cô Ông Nguyễn Ngọc Lê)  
H23. 1. 4 撮影



(27) ドゥオン・ティ・ラン邸  
(Nhà Cô Bà Dương Thị Lan)  
H23. 1. 4 撮影

図 5-7-1 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容

(2) 遺跡保存管理事務所により修理が予定されている事例の外観一覧 1





(28) カオ・ヴァン・トアン邸  
(Nhà Cổ Ông Cao Văn Toàn)  
H23. 1. 4 撮影



(29) キエウ・アイン・バン邸  
(Nhà Cổ Ông Kiều Anh Ban)  
H23. 1. 4 撮影



(30) グエン・フイ・チュオン邸  
(Nhà Cổ Ông Huy Truong)  
H. 23. 1. 9 撮影

図 5-7-2 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容

(2) 遺跡管理事務所により修理が予定されている事例の外観一覧 2

#### 遺跡保存管理事務所により修理が予定されている事例 (29)キエウ・アイン・バン邸

主屋は中央に主室があり、左右に側室がある（図 5-8-1 A）。材料は部材ごと取り換えられている（図 5-8-1 B）。また、主屋の主室奥の壁面には彫刻のような模様が描かれている（図 5-8-2 A）。修理を予定しているためか、材料の表面が剥離しているがそのままにしている。また、古い材料が敷地内で廃棄される（図 5-8-2 B）。古い材料は建造物の歴史を担保するために再利用するか保管することが望まれるが、廃棄している点からドゥオン・ラム村に、歴史的地区保存整備手法が浸透していないといえる。また、旧材を残しておくよう住民に依頼することも必要である。



#### A. 主屋

平屋で中央に主室があり、両脇に側室を持つ。



#### B. 主屋の主室小屋組み

桁が一部白く材料が取替えられている。小壁や梁も白く後補だとわかる。全体的に表面が剥離する木材の性質が分かる。

図 5-8-1 キエウ・アイン・バン邸写真 1



A. 主屋主室の後側

壁に装飾が描かれている。本来は木材を使用して作られるところを絵画で代用している。



B. 古い材料の扱い

古い材料は処分するためにゴミ置き場に置いている。家屋の材料は保管すべき。

図 5-8-2 キエウ・アイン・バン邸写真 2

遺跡保存管理事務所により修理が予定されている事例 (14)ゴ・クエン廟

ベトナム史上著名な人物を祀った廟である。主屋の底を支える柱はモルタル製だが、内部は木製柱梁構造の瓦葺である（図 5-9 A）。小屋組みに細かな彫刻が施され、修理後の部材にも同様に彫刻が施されている（図 5-9 B）。部材ごと取り換えられている箇所もあるが（図 5-9 C）、劣化した虹梁の内部に補強材を入れるなど、旧材を残した修理も行われている。本殿正面に線香立てがあり、内部に置いている他の宗教施設とは異なる。



A. 本殿正面

敷地の奥に位置するのは他の公共施設と同様である。



B. 小屋組み

木造で瓦を葺いているため屋根は伝統的なものだが、壁面はモルタルを使用している。



C. 扉

全て取り替えられている。扉に番号が打たれているのは、外した際に順番が分からなくなるからだと思う。

図 5-9 ゴ・クエン廟写真

### (3) 個人により修理が行われた事例

全4件中3件が共同体所有のものだが修理内容は各々異なり（表5-6）用途が異なるため外観も異なる（図5-18）。

例えば、6番のホ・ファン祠堂では、風雨の影響を受けやすい庇を支える木材の柱の下部にセメントで補強された跡が残る。10番のドン・サン集落集会所では、棟の構成は他の集会所と同様だが、主屋は壁面がモルタル仕上げで開口部もガラスが用いられた現代的な建具の使用が見られる。9番のミア神社は国の指定文化財であるため、他と修理内容が異なり、旧材を多く残し、建造物の歴史を継承する修理が行われている。遺跡保存管理事務所による修理ではない点からこの分類に入れた。こうした修理が、他の建造物でも行われるようになることが望まれる。25番ハ・グエン・フエン邸では、主屋の小屋組みの仕上げ材にの一部に艶のある塗料が用いられ、他の家屋では見られない仕上げとなっており、家屋の歴史の継承の観点からは検討の必要な手法である。

表5-7 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容(3)個人により修理が行われた事例

No.	所有者による修理	所有者	名称	集落	文化財指定	主屋				構成	他の棟の床、建具、屋根	庭の床	門	敷地境界の壁
						構造	床	建具	屋根					
6	済	⑤	ホ・ファン祠堂 (Thờ Họ Phan)	モン・フー	指定なし	和小屋	タイル	4枚戸	瓦葺	祠堂、前の棟	タイル、瓦葺	タイル	石積	石積
9	済(2010)	⑤	ミア神社 (Đền Thờ Bà Chúa Mía)	ドン・サン	指定なし	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	板戸、板壁	瓦葺	主屋、前の棟、住居棟、回廊	壁面モルタル仕上げ	タイル	モルタル仕上げの柱	石積
10	済(2012)	⑤	ドンサン集落集会所 (Đình Đông Sáng)	ドン・サン	指定なし	壁構造	タイル	モルタル壁、板戸	瓦葺	主屋、住居棟	壁面モルタル仕上げ	タイル	モルタル仕上げの柱	
25	済	⑥	ハ・グエン・フエン邸 (Nhà Cô Ông Hà Nguyễn Huyền)	モン・フー	市指定	柱梁構造と壁構造の折衷	タイル	板戸、板壁	瓦葺	主屋、水回り、客棟	壁面モルタル仕上げ、柱梁構造	タイル	モルタル仕上げ、板戸、瓦葺	石積み

⑤共個型（共同体所有で修理費用を個人が負担している）、⑥全個型（個人所有で修理費用を個人が負担している）。表の番号は図5-2及び外観の写真で個別に付けられた番号と対応

#### 共同体所有



(6) ホ・ファン祠堂  
(Thờ Họ Phan)  
H22. 12. 28 撮影



(9) ミア神社  
(Đền Thờ Bà Chúa Mía)  
H22. 12. 30 撮影



(10) ドンサン集落集会所  
(Đình Đông Sáng)  
H22. 12. 30 撮影

#### 個人所有



(25) ハー・グエン・フエン邸 (Nhà Cô Ông Hà Nguyễn Huyền)  
H22. 12. 28 撮影



図5-10 ドゥオン・ラム村観光対象建造物の修理内容  
(3)個人により修理が行われた事例の外観一覧



#### 個人により補修が行われた事例 (5) ホ・ファン祠堂

モン・フー集落の集会所の北側に位置する祠堂である。修理年は不明。平行に配置された棟から構成されている。木製の柱の腐朽部分にモルタルを塗りこめた跡が見られた（図 5-11 B、図 5-11 C）。入り口の左右に設けられた柱は煉瓦造で新しく作られたと思われ（図 5-11 A）、祠堂の底を支える柱の下部にセメントで埋めが見られるため、腐朽箇所の修理と柱の新設を行ったと考えられる。



A. 正面入り口

左右に煉瓦を積みあげられた柱が底を支えている。(H22.12.28 撮影)



B. 内部の棟の小屋組

右側の柱下部が補修されている。(H22.12.28 撮影)



C. 側室

底を支える柱にモルタルが塗り込められた跡が見られる。(H22.12.28 撮影)

図 5-11 ホ・ファン祠堂写真

#### 個人により補修が行われた事例 (25) ハー・グエン・フエン邸

調査した中でも規模の大きな家屋である(図 5-12 A)。通常的生活空間と見られる主屋と、来客用の棟がある。庭には麴が入った壺が並んでいる。部材ごと取り換えられている箇所が見られ(図 5-12 B)、一部部材は艶のある塗料で仕上げられている。図 5-12 C で示すように垂木端部の彫刻など丁寧な意匠が見られる部分もある。図 5-12 D で示すように柱下部からの劣化の様子が窺えた。ドゥオン・ラム村の補修方法と家屋の所有者の意向が反映されている。



#### A. 主屋正面外観

中央は開口部、左右に出入り口が設けられている。



#### B. 主屋の側室

壁面と天井、垂木、桁が白く、取替えられていることが分かる。継は見られない。



#### C. 垂木端部の彫刻

下から見る。薄い板であることがわかる。



#### D. 礎石の上に乗る柱

下部から劣化が生じている。

図 5-12 ハー・グエン・フェン邸写真

#### (4) 修理予定が決まっていない事例

全 5 件中 4 件が共同体所有の建造物で、1 件が個人所有の家屋である。既に管理事務所か個人に補修が行われた事例であり、当面は修理が必要ないと判断された事例でもある。また、ドゥオン・ラム村の保存整備事業が開始される前の補修が行われている場合も考えられることから、ドゥオン・ラム村の修理の傾向を示す（表 5-7、図 5-13）。

まず、7 番の教会は、壁面がモルタル仕上げで開口部も現代的な材料を用いた特殊な事例である。他の建造物が木造か石造である点を考えれば、比較的新しいものであり、過去の補修事例の参考にはならない。

カム・ティン集落集会所とドアイ・ザップ集落集会所は、中庭に磚が引かれ、屋根は瓦葺で木製の開口部を用いている。また、両脇以外の壁面の仕上げにモルタルを用いられている。遺跡保存管理事務所が修理を管理し、建造物の歴史性を配慮して修理が行われれば、ドゥオン・ラム村の歴史の継承に寄与できる状態だと思われる。

表 5-8 ドウオン・ラム村観光対象建造物の修理内容(4) 修理予定が決まっていない事例

No.	管理事務所による 日本人専門家の修 理協力		所有者に よる修理	所有者	名称	集落	文化財 指定	主屋				構成	他の棟の床、 建具、屋根	庭の床	門	敷地境界 の壁
	修理年	修理協力						構造	床	建具	屋根					
7	—	—	—	⑦	教会(Nhà Thờ)	モン・フー	指定なし	壁構造	タイル	現代的	不明	主屋	不明	タイル	石積、板 戸(観音 開き)	石積
8	—	—	—	⑦	カムティン集落集会所 (Dinh Cam Thịnh)	カム・ティン	市指定	柱梁構 造	一部磚、 板張り	板戸、板 壁	瓦葺	主屋、住 居棟	住居棟：壁面 モルタル仕上 げ、木製開口 部、瓦葺	磚	モルタル 仕上げの 柱が左右 に建つ	石積
12	—	—	—	⑦	ドアイザップ集落集会所 (Dinh Đoài Giáp)	ドン・サン	国指定	不明	不明	板戸	瓦葺	主屋、前 の棟	壁面モルタル 仕上げ	磚	—	—
13	—	—	—	⑦	フンフン廟 (Dinh Phùng Hùn)	カム・ラム	国指定	柱梁構 造	磚	不明	瓦葺	廟	壁面モルタル 仕上げ	磚	—	—
22	—	—	—	⑧	グエン・ヴァン・フン邸 (Nhà Cô Ông Nguyễn Văn Hùng)	モン・フー	指定なし	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明

⑦共型、⑧個型に該当するもの。22 番は所有者不在で調査ができなかったもの。表の番号は図 5-2 及び  
外観の写真で個別に付けられた番号と対応する。

#### 共同体所有



(7) 教会 (Nhà Thờ)  
H22. 12. 30 撮影



(8) カムティン集落集会所  
(Dinh Cam Thịnh) H23. 1. 4 撮影



(12) ドアイザップ集落集会所  
(Dinh Đoài Giáp) H23. 1. 9 撮影



(13) フンフン廟  
(Dinh Phùng Hùn) H23. 1. 9 撮影

図 5-13 ドウオン・ラム村観光対象建造物の修理内容

#### (4) 修理予定が決まっていない事例の外観一覧

#### 修理予定が決まっていない事例 (12) ドアイ・ザップ集落集会所

道路の交差する角に位置する集会所である。図 5-14 A で示すように前面に広場があり、  
屋根と柱のみの棟を持ち、奥には主屋に相当する棟が位置している。壁面は煉瓦造でモル  
タル仕上げ、柱は木製である。図 5-14 B、図 5-14 C で示すように柱の補修はモルタルで埋  
めたり、下部を切り取り四角く模ったモルタルを入れたりという方法が取られ、旧材を可  
能な限り残すという考え方は見られない。



#### A. 正面

他の集会所と同様に広い空間が設けられている。



#### B. 継ぎとモルタル

中央の柱下部に継ぎがある。左奥の柱は、モルタルの直方体の上に柱が載っている。中央奥は、モルタルで埋めている。



#### C. 主屋から正面広場方向

柱下部がモルタルや木材で補修されている。下部の腐朽のしやすさと、補修方法が場合に応じることがわかる。

図 5-14 ドアイ・ザップ集落集会所写真

### 5.3.3. ドゥオン・ラム村の修理及び補修傾向に対する考察

調査を行った 2011 年 1 月までに 8 軒で家屋修理技術協力が行われていた。結果として、修理と補修の内容は、ドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所で修理を管理したものと日本人専門家が協力したもの、そしてそれ以外（個人等）で異なった。大きな違いは、遺跡保存管理事務所が管理しない補修の場合は、腐朽した箇所を補修にモルタルを使用している点である。また、遺跡保存管理事務所が修理を管理したもの及び日本人専門家が協力した場合は、部材を多く残すことを意図したと推察される継ぎも見られ、旧材をできるだけ残す手法が見られた。逆に、木材をモルタルで補修する点は見られなかった。従って、住民による独自の補修が行われ続けると、文化遺産として評価される価値が減失する恐れがある。補修する際には修理申請を必ず遺跡保存管理事務所に出すような仕組み作りが求められるといえる。

全体として、ドゥオン・ラム村は家屋修理技術協力の過程にあり、ドゥオン・ラム村独

自の修理方法もまだ確立していない。

課題は、ドゥオン・ラム村の保存地区内における全ての修理が遺跡保存管理事務所で実施されていない点と、建造物の分類が公表されていないため修理基準との対応が不明瞭な点である。他に、今回の分析の結果から今後のドゥオン・ラム村の修理手法の確立の際の検討事項として、既に日本人専門家の注意事項に書かれているが、修理の考え方や方針を遺跡保存管理事務所と住民、そして日本人専門家で共有する重要性を改めて指摘できる。従ってドゥオン・ラム村で修理及び整備基準が作成され村内に周知されるために、日本側は今後も協力を続ける必要があるといえる。今後の協力により、木造建造物の修理及び整備手法が、ドゥオン・ラム村に沿った形で作られていくと予想できる。

#### 5.4. 考察と結論

##### ドゥオン・ラム村の保存整備事業の特徴と課題

2003 年から始められたドゥオン・ラム村の保存整備事業は、独自の保存整備手法の確立過程にあるといえる。ドゥオン・ラム村の保存整備事業を整理した結果、歴史地区保存整備の枠組みとして設定した「文化遺産保存のための法律と条例の制定」「文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置」「文化遺産の調査と研究及び報告」「文化遺産保存のための修理技術と材料」と対応していることがわかった。しかし、枠組みにおける日本側とベトナム側の対応は、古都ホイアンと異なる。

これまでの保存整備事業を枠組みから見ると表 5-8 となる。下線を引いたものが日本人専門家あるいは日本の組織の協力により行われたものである。

まず、日本側は、ドゥオン・ラム村の調査及び研究と報告を最初に行い、その後日本人専門家と日本人ボランティア（建築、文化財保存、行政サービス、村落開発普及員）を派遣し技術協力等を実施している。調査の内容は、建築や土地利用、考古学に加え、食物や被服も調査対象に含まれている。日本人ボランティアの専門性は、建築と文化財保存に加え、行政サービスと村落開発普及員<sup>注 21)</sup>である。行政サービスと村落開発普及員の活動内容はドゥオン・ラム村の観光地整備であり、調査内容と合わせると、調査の段階からドゥオン・ラム村の観光地化への対応を、日本側の協力により行うことを視野に入れていたといえる。また、日本人専門家とボランティアを並行して派遣している点も注目できる。原則として、日本人専門家は断続的に滞在し、ボランティアは常駐している。ドゥオン・ラム村の保存整備事業におけるボランティアは、事業開始当初から派遣されており、現地に常駐する日本側の人材を保存整備事業への協力当初から考慮している。つまり、日本側は現地との緊密な関係を築き、現地の状況を把握している人材の必要性を考えている。

一方、ベトナム側は、文化遺産保存のための条例の制定にあたる「ドゥオン・ラム古村遺跡の管理・保存・補修・活用に関する条例」を公布した。また、保存整備事業開始当初



から文化遺産保存のための管理組織としてドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所を設立し、所内にドゥオン・ラム村専門の部署を設け、建築専門職員を配置した。さらに、日本側と行った文化遺産の調査及び研究を行った。また、日本人専門家やボランティアが協力している家屋修理術を実施している。つまり、実施項目を挙げると歴史地区保存整備の枠組みとして設定した 5 つの要素が対応していることがわかる。ただ、建造物の修理や補修の調査結果からドゥオン・ラム村の保存整備事業はまだ半ばであり、充分ではない。

課題は、保存対象が明確化されていない点と、遺跡保存管理事務所が全ての修理を管理していない点である。既存の報告書において、ドゥオン・ラム村の保存対象は 5 種類に分けられ、修理基準も公表されている。しかし、保存対象と分類が公表されていない。よって、住民は居住する家屋や日常的に使用する集会所の分類や修理基準が不明なままであり、住民が独自に補修を行う場合もみられた。保存対象とその分類を公表することは、住民が居住する家屋の分類を認識し歴史地区保存整備事業への積極的な関与を促すため、遺跡保存管理事務所に対して分類の公表が望まれる。そして、保存地区内の修理全てを遺跡保存管理事務所が管理しておらず、住民独自の補修が行われている。前述の通り、保存対象とその分類が公表されない中での住民独自の補修は、個々の建造物の当初の材料を可能な限り残すものではなく、歴史地区保存整備の手法としては課題があり、ドゥオン・ラム村の修理体制は未整備といえる。従って、今後修理体制の整備が必要である。

なお、2005 年にはハタイ省の予算で電線の地下埋設工事と街灯整備が行われ、2005 年から 2006 年には国の単体指定文化財保存修復事業として、モン・フー集落の集会所の解体修復工事を実施するなどドゥオン・ラムの保存整備事業において日本人が直接関わらないこともしばしばある。

今後、日本側が協力できる点は、ドゥオン・ラム村において全ての建造物が遺跡保存管理事務所申請をした後、修理もしくは補修に入るという体制が確立されるまで、個々の建造物等の保存整備を文化遺産として確実に行うことだといえる。個々の建造物の保存整備を確実に行うことは、歴史地区全体の保存整備につながる。そして、保存地区の調査結果を踏まえ、それらを活かした観光地整備、例えば博物館や飲食店の内容作り、観光と村の生活を両立する方法の検討などが行えるのではないだろうか。また、ドゥオン・ラム村独自の歴史的地区保存整備手法が確立する中で、歴史地区として継承する手法を全ての建造物に適用させる方法、例えば、修理の仕組み作り、修理工事記録作成の仕組み作り、ドゥオン・ラム村住民全体に対する歴史地区保存整備の意識啓発活動への協力などが日本側の協力としてできることだといえる。さらに、個々の建造物の修理記録に加え、保存整備事業全ての記録を残していくことが望ましい。

ドゥオン・ラム村の保存整備事業は途中であるが、日本側は集落保存の一つの軸となる家屋修理に対して協力を続け、同時に観光地化等その活用のあり方の検討に対しても協力することで、ドゥオン・ラム村の実情に即した形で持続的に歴史的地区保存整備に貢献できる。

ドゥオン・ラム村の保存整備が進められれば、ベトナムにおいて初めて農村集落が文化財となった事例として、今後ベトナムの他の農村集落保存の前例となる可能性がある。

表 5-9 ドゥオン・ラム村保存整備事業における歴史地区保存整備の枠組み整備（2012 年現在）

枠組	事業内容	課題
文化遺産保存のための法律と条例の制定	1.2005年の法律により農村集落を文化遺産として制定 2.2005年「ドゥオン・ラム古村遺跡の管理・保存・補修・活用に関する条例」制定	—
文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置	1.2006年にドゥオン・ラム村遺跡管理事務所設立 ・ドゥオン・ラム村専門部署設置 2.専門職員配置済み 3.JOCV配置（副所長の元。（2008年から青年海外協力隊勤務（建築、村落開発普及員））	保存地区内の修理全てを遺跡管理事務所管理できていない。
文化遺産の調査と研究及び報告	1. <u>日越共同調査（図面の作成含む）</u> 。 ・建物（モン・フー集落350件とカム・ティン集落165件の民家調査・約50件の公共物件調査・街路調査）、考古学、被服、食物 2.報告書の作成、報告 ・博物館の設立準備（JOCVの協力有）	保存対象と分類は公開されていない。
文化遺産保存のための技術と材料	<u>日本人専門家による修理技術協力</u> 一部のみ実施。	村民による補修は、文化遺産としての修理ではない。 材料に関しては不明。
全てに係る人材育成	1. <u>日本人専門家による修理技術協力</u> 2. <u>日本人専門家によるワークショップ</u> 3.JOCVによるワークショップ	協力は断続的。JOCVと遺跡管理事務所の建築専門職員との連携が不十分。

（下線を引いた事業内容は、日本側が行った。）



## 注

- 1) フン・フンは、766年から791年に当時の支配者だった唐に対抗し、王朝を起こしたが息子の代で唐に再度制圧される。ゴ・クエン（呉権）は、939年に呉朝を創設し、現在のハノイに都を移したドゥオン・ラム村出身の人物。
- 2) 昭和女子大学国際文化研究所紀要の訳に倣う。
- 3) 昭和女子大学国際文化研究所紀要 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書 2006年 p. 14
- 4) 昭和女子大学国際文化研究所紀要 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書 2006年 p. 20
- 5) 日本の協力で行われた調査時の数値。
- 6) 日本の協力で行われた調査時の数値。
- 7) シニアボランティアとしてドゥオン・ラム村に2010年9月から10月の1ヶ月間、行政サービス担当として派遣された岩田正晴氏の提案書から引用。
- 8) 2008年にハノイ市域が拡大してソンタイ市はハノイ市となり、ドゥオン・ラム村もハノイ市内となった。
- 9) 昭和女子大学国際文化研究所紀要 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書 2006年 p. 212
- 10) 筆者のドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所関係者への聞き取りによる。
- 11) ドゥオン・ラム村に駐在している青年海外協力隊員が作成し、JICAの費用により印刷された。
- 12) 筆者のドゥオン・ラム村遺跡保存管理事務所関係者への聞き取りによる。
- 13) 昭和女子大学国際文化研究所：「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 11 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書」, 昭和女子大学, 2006
- 14) 昭和女子大学国際文化研究所：「昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol. 11 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書」 pp. 184-193, 昭和女子大学, 2006
- 15) 青年海外協力隊員へのインタビューによる。
- 16) 青年海外協力隊員へのインタビューによる。
- 17) 村民により文化遺産としての配慮をされていない手法を本論では補修とする。
- 18) 青年海外協力隊員へのインタビューによる。
- 19) 青年海外協力隊員へのインタビューと筆者の現地調査時の確認による。
- 20) 遺跡保存管理事務所員へのインタビューによる。
- 21) JICAの名称に準じる。

## 参考文献

1. 岩田正晴：「今後のドンラム村の地域振興」, 18頁, 2010
2. 昭和女子大学国際文化研究所紀要：「ハタイ省ドゥオンラム村集落保存調査報告書」, 昭和女子大学, 254頁, 図巻頭8頁, 2006

## 第六章 考察

### ベトナムの歴史地区の保存整備の課題と

### 日本の協力の成果

#### 6.1. はじめに

歴史地区は、一般的に文化財として保護されていなくても歴史的な建造物が一定量集積している場所である。建造物のほかに、歴史的な地割、緑地などが含まれる場合もある。歴史地区において個々の建造物は、独自性と共に材料や意匠の共通性を持つ。共通性は同じ時代に作られる、或いは同じ地域に位置するために生まれる。歴史地区の魅力の一つは、そうした個々の建造物の多様性と統一性を併せ持つ点である。

1960年代以降、経済成長に伴い都市開発が進む中で、イギリスやフランスでは単体の建造物の保存に加え、特定の街区や地区も文化財として保存の対象とした。同時期に、国際機関のユネスコや国際専門家組織のイコモスなどで、歴史地区に関する条約や勧告、憲章が出された。

日本では、1975年（昭和50年）に伝統的建造物群保存地区が設けられ、都市計画制度においては、地域地区の一つとして位置付けられた。本論で研究対象としたベトナムでは、1984年に文化財関連の法律の中で一定の歴史的な地区が保存対象とされた。翌1985年に、ベトナム政府（文化観光省）によりホイアン旧市街<sup>注1)</sup>は、ベトナムの文化財として指定された。

1990年にベトナム中部の都市ダナンで開催された国際会議「海のシルクロードとベトナム」において、ベトナムは、ホイアン旧市街の保存整備事業における木造建造物の修理技術協力を日本に要請した。日本は要請に応え1993年から協力を開始した。日本側<sup>注2)</sup>は、1975年に制定された伝統的建造物群保存地区の保存整備の経験を蓄積しており、その蓄積をベトナムにおいて活かそうと試みたことは想像に難くない。

本章では、五章までの結果をふまえ、ベトナム独自の歴史地区保存整備手法の形成理由

及び保存整備手法の特徴と課題について考察し、今後の文化遺産保存を目的とした日本の国際協力を通じた歴史地区の保存整備の展望について述べる。まず、事例として取り上げた歴史地区古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業について、事業の流れと本論で設定した歴史地区保存整備の枠組み、歴史地区の構成要素である建造物の修理状況から、歴史地区保存整備事業の特徴と課題を考察する。次に歴史地区保存整備を目的とした日本の国際協力の課題とベトナムの課題を、古都ホイアンとドゥオン・ラム村を事例に述べる。最後に、文化遺産保存を目的とした日本の国際協力の今後を展望する。

## 6.2. 古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業の相違点

第二章から第五章まで古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業について特徴と課題をそれぞれ考察した。日本の協力を得て事業は進められ、両地域とも歴史地区保存整備の枠組みの要素に対応した事業が行われている。各要素において細かな点が異なるため、その相違点と理由を考察する。

### (1) 保存整備事業の流れ

古都ホイアンとドゥオン・ラム村が異なる点は、日本側が派遣した人材の専門性と派遣時期である。古都ホイアンでは、文化財保存の専門家が断続的に派遣され、次にボランティアが派遣され、現在に至る。しかし、ドゥオン・ラム村では長期ボランティアが最初に派遣され、並行して文化財保存の専門家や短期ボランティアが断続的に派遣された。現地に長期滞在できる人材を派遣し、保存地区と緊密な関係を築くことを重視していると考えられる。

### (2) 歴史地区保存整備の枠組みの要素についての相違点（表 6-1）

#### ①「文化遺産の保存のための法律と条例の制定」

古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存は同じような過程をたどっている。古都ホイアンは、1983年に調査が開始され、1984年に歴史地区として文化遺産に指定され、同年国の文化財となった。1987年にホイアン旧市街の保存条例が制定され、保存対象の分類と保存方法が明記された。ドゥオン・ラム村は、2003年に保存整備事業が始まり、2005年に農村集落が文化遺産として指定され、同年国の文化財となった。2006年にドゥオン・ラム村の保存条例が制定され、保存対象の分類と保存方法が明記された。

#### ②「文化遺産保存のための組織設立と専門職員の配置」

古都ホイアンとドゥオン・ラム村の整備体制は事業開始後間もなく保存管理組織が設立されたが、保存地区を専門に担当する部署の設立時期と建築専門職員の配置時期が異なっ

ている。古都ホイアンは、保存整備を担当する専門部署を管理組織設立から 24 年後の 2010 年に設立した。また、建築専門職員が配置された時期は、管理組織設立から 14 年後の 2000 年である。一方ドゥオン・ラム村は、管理組織設立当初にドゥオン・ラム村の保存整備専門部署を設立した。建築専門職員も同部署に配置されている。ベトナム側は、古都ホイアンの保存整備事業において、途中から管理組織の中に専門部署と建築専門職員の必要性を認識し設置した。二番目の事例であるドゥオン・ラム村の事業においては、開始当初からドゥオン・ラム村専門部署を設立し建築専門職員を配置した。

### ③「文化遺産の調査と研究及び報告」

古都ホイアンの調査は、当初はポーランド側が中心に行い、その後日本側に引き継がれた。古都ホイアンの調査対象が保存地区内の建造物に集中しているのに対し、ドゥオン・ラム村の調査対象は被服や食物まで広がり、生きた農村集落を保存するベトナム側の意向に沿ったものであった。また、ドゥオン・ラム村に赴任した青年海外協力隊員（村落開発普及員）やシニアボランティア（行政サービス）の活動は、ドゥオン・ラム村の観光地整備である。この活動を考慮すると、ドゥオン・ラム村の被服や食物調査は観光地整備の一環で行われ、古都ホイアンにおいて保存地区の商店主の自主的な活動で行われた観光振興が、ドゥオン・ラム村において遺跡管理事務所を中心に管理していく姿勢が窺える。

古都ホイアンは、調査・研究成果を利用して世界遺産の申請書類を作成し、史跡管理事務所の管理用目録を作成し、また保存の手引きを作成している。保存の手引きは古都ホイアン保存地区の住民に配布され、保存整備事業の周知に貢献している。

ドゥオン・ラム村の調査報告書は作成されたが、保存対象物件の一覧表を公表していない。修理基準は公開されており、その中で保存対象は 5 種類に分けられ、種類ごとに保存すべきものや修理基準を決めている。保存対象物件が公表されていないために、保存地区の住民は自身の所有する家屋の保存条件、修理基準を知らない状態にある。

### ④「文化遺産保存のための技術と材料」

古都ホイアンは独自の修理、整備手法を決めていて、保存地区で行われるすべての修理は史跡管理事務所に申請され許可を得なければならない。ドゥオン・ラム村を管理する遺跡管理事務所は保存地区内の修理工事全てを管理していないため、一定の水準で修理を実施しているわけではない。

### ⑤「枠組み全てに関わる人材育成」

古都ホイアンの場合、史跡管理事務所職員の研修の自主的な参加が行われている。また、日本側の専門家や青年海外協力隊員により保存地区住民や関係者に対するワークショップが行われている。ドゥオン・ラム村の場合、遺跡管理事務所職員に対する研修に対して、日本人専門家によるシンポジウムが提供されている。また日本人専門家等は観光地整備事

業を行うために住民が参加するワークショップを設け、その中で保存整備事業への理解が進んでいると思われる。

以上から古都ホイアンにおける保存整備事業は、本論で設定した歴史地区保存整備の枠組み全ての要素に対応して事業が行われているといえる。一方、ドゥオン・ラム村における保存整備事業は、「文化遺産保存のための技術と材料」以外の要素に対応して事業が行われている。相違点を生み出している要因は二点挙げられる。一点は、日本側が最初から保存整備事業に参加しているかどうかということ、そしてもう一点は、ドゥオン・ラム村は二番目の事例であるため、古都ホイアンの事業を参考にして、事業を検討していることが挙げられる。

表 6-1 古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業の比較

	古都ホイアン		ドゥオン・ラム村
	1992年まで	1993年以降(日本の協力開始後)	
歴史地区保存整備の枠組み	文化遺産保存のための法律と条例の制定	1.1997年の条例 ・日本人専門家による事例紹介 2.保存の手引出版による修理と整備規則開示 ・5種類に分けられた文化遺産	1.2005年の法律により農村集落を文化遺産として制定 2.2005年「ドゥオン・ラム古村遺跡の管理・保存・補修・活用に関する条例」制定
	文化遺産保存のための管理組織設立と専門職員配置	1.部署の増設 2.専門職員の配置 3.修理及び整備の体制設立(申請書、写真、図面に修理予定書きこみ)	1.2006年にドゥオン・ラム村遺跡管理事務所設立 ・ドゥオン・ラム村専門部署設置 2.専門職員配置済み 3.JOCV配置(副所長の元。(2008年から青年海外協力隊勤務(建築、村落開発普及員))
	文化遺産の調査と研究及び報告	ポーランドの協力による一部の調査(図面作成含む)	1.日越共同調査(図面の作成含む) ・建物(モン・フー集落350件とカム・ティン集落165件の民家調査・約50件の公共物件調査・街路調査)、考古学、被服、食物 2.報告書の作成、報告 ・博物館の設立準備(JOCVの協力有)
	文化遺産保存のための技術と材料	—	日本人専門家による修理技術協力 ・一部のみ実施。
	全てに関わる人材育成	—	1.日本人専門家による修理技術協力 2.日本人専門家によるワークショップ 3.JOCVによるワークショップ
課題		<ul style="list-style-type: none"> <li>調査が更新されていない。</li> <li>特定の場所に伝統的な家屋の新築が行われる。</li> <li>個別の家屋の多様性が見られない。</li> <li>修理時の材料の保管方法に難有。</li> <li>修理、整備記録作成が不十分。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保存地区内の修理全てを遺跡管理事務所で管理できていない。</li> <li>保存対象と分類は公開されていない。</li> <li>住民による補修は、文化遺産としての修理ではない。</li> <li>材料に関しては不明。</li> <li>協力は断続的。JOCVと遺跡管理事務所の建築専門職員との連携が不十分。</li> </ul>

(下線を引いたものは日本側の協力)

### 6.3. 古都ホイアンの木造建造物修理技術における日本の協力の位置づけ

本論で対象とした歴史地区古都ホイアンの保存の中心となる建造物は木造である。

日本では、文化財とされた木造建造物の修理において、建造物の歴史を継承するために旧材をできるだけ再利用し、材料の歴史を継承する方針を採っている。

第三章において、古都ホイアンで用いられている技術についてまとめた。古都ホイアンの保存整備事業において、日本人専門家の協力を受けた施工会社によると、日本人専門家

がホイアン旧市街で木造建造物修理技術協力を開始した時点で、当初の材料を可能な限り残すために旧材の腐朽箇所を取り除いて新材を接いだり、材料を再利用したりという手法は見られなかった<sup>注3)</sup>。修理技術協りに携わった施工会社は、日本人専門家の協力により、旧材を残すために新材を接ぐことや、旧材を再利用する方針を学んだという<sup>注3)</sup>。

次にホイアン史跡管理事務所職員が作成した部材の加工方法 4 種類から、日本人専門家の考え方と古都ホイアンの考え方の差異を考察する。一つ目の「追掛け大栓継」<sup>注4)</sup>は、日本人専門家が伝えた手法である。二つ目の「十字目違いほぞ」<sup>注5)</sup>は、ホイアンで家具の修理に用いられていた手法である。両手法とも、材料の腐朽箇所を取り除き、新材と継ぐ際に用いられる。これら二つの手法の違いは、横方向、ひっぱり力に対する強さ、地震に対する考え方、そして旧材を残す割合などである。しかし、ホイアンで用いられている箇所は、日本と異なる。例えば、両手法が一軒の同じ空間で並行して位置する柱の同じ箇所、あるいは梁に併用されている。また、二つの手法の加工費用を比べると「十字目違いほぞ」の方が 50 万ドン（約 2500 円（平成 23 年））安い。従って、二つの手法は加工費用によって使い分けられている可能性がある。つまり、ホイアン史跡管理事務所や施工会社は、可能な限り旧材を残したいが、修理費用の関係で安い手法を使っていると考えられる。木造建造物を文化遺産として修理する考え方は、古都ホイアンの保存管理の関係者に定着しているといえるが、経済的理由により加工方式が選択されている。三つ目の手法は、部材の内側が蟻害で空洞化した場合に、おがくずとエポキシをまぜたものを内部に入れて補強し、部材の表面を再利用する手法である。建造物の構造の安全性を考慮すれば、内側が空洞化した部材は新材と取り替えられることが望ましい。しかし、旧材の内側を補強し再利用することは、日本人専門家が伝えた旧材をできるだけ残すという方針に沿っており、古都ホイアンの関係者の間に定着している考えといえる。四つ目は、部材の割れを留める「千切」<sup>注4)</sup>である。これも、割れが生じ、構造上取り替えた方が良いものを、利用し続ける考え方が現れている。日本人専門家が伝えた手法ではないが、旧材をできるだけ残す考えに基づいているといえる。

木造建造物の文化遺産としての修理方針は、ホイアン旧市街において日本人専門家が協力するまで一般的に行われてこなかった。しかし、日本人専門家の木造建造物修理協技術協力により、修理費用や材料の性質を踏まえた。古都ホイアンの修理手法が確立していったといえる。

#### 6. 4. 歴史地区保存整備を目的とした日本の国際協力の課題とベトナムの課題

古都ホイアンとドゥオン・ラム村の保存整備事業を事例として、事業の成果、歴史地区保存整備を目的とした日本の国際協力の課題とベトナムの課題について述べる。



### (1) 古都ホイアンの保存整備事業を事例として

#### 日本による古都ホイアンの保存整備事業の協力の成果

①文化遺産としての価値が高い特級、等級 1 の修理は、日本側が提示した建造物の歴史性を継承する手法で行われている。保存地区内の歴史的建造物が適切に修理され継承されることは重要であり、日本側の協力の成果である。

②日本とベトナムの大学を中心に行われた保存地区内の建造物を対象とした建物調査と、調査結果に基づく整備見本が作成された。保存地区内の建物調査は、古都ホイアンの家屋の歴史や構造の合理性が明確になり、家屋の歴史的な分類を明らかにした。さらに、調査は住民へのインタビューを行い、ホイアン旧市街に残る土地台帳を分析して町の構造や道路の拡幅など、町の形成過程を明らかにした。ホイアン旧市街の歴史を明らかにすることで、文化遺産としての価値を明確にし、保存整備を行う根拠を補強したといえる。

日本とベトナムが共同で行った建物調査による家屋の外観の分類は、保存地区内の等級 3、等級 4 の整備見本を作る際の参考になった。また、史跡管理事務所職員によると、日本人専門家の家屋修理技術協力の助言に従って特級や等級 1 の事例収集と意匠見本の作成が行われた。これら事例収集や意匠見本は、特級や等級 1 の修理に用いられているが、等級 3 や等級 4 を伝統的な形式に整備するための見本に用いられている<sup>注 6)</sup>。

③日本人専門家による日本の歴史地区の保存整備事例の紹介が、古都ホイアンの保存条例に影響を与えている。日本人専門家は、日本国内で歴史地区保存整備に関わった経験を紹介した。このような日本の経験の紹介を通してベトナム側は、伝統的建造物群保存地区制度の運用方法や、歴史地区保存手法の知見を得た。例えば、1997 年に制定された古都ホイアンの保存条例「ホイアンの管理保存と開発の規則」において、古都ホイアンの保存対象となる建造物等の等級分類が 4 つから 5 つに増えた点や、都市計画的な視点が加えられたことが挙げられる。等級の増加は、等級 1 の中から、文化遺産として特に価値の高いものを特級に指定し、より厳格に保存することで、古都ホイアンの歴史価値を明確にできるように考慮したと思われる。都市計画的な視点は、緑地や交通規制などを加えている点が挙げられる。つまり、ベトナム側は、歴史地区保存整備を、個々の建造物の保存整備に限定せず、地区全域を保存し、その管理を行うものと解釈していたと思われる。

#### 課題

①古都ホイアンの保存地区 I において、史跡管理事務所が、歴史的要素の少ない等級 3、歴史的要素のない等級 4 の建造物の整備で、伝統的な形式の町家を新築することである。特に、チャン・フー通りやグエン・タイ・ホック通りといった観光の中心となる通りで、か

つ、等級 2 以上の建造物が通りの建造物全体の 4 割以上を占める場所で顕著に見られる。

等級 3 と等級 4 の調査対象とした建造物 94 件中 13 件が伝統的な様式に外観に整備していた。そのうち 12 件がチャン・フー通りとグエン・タイ・ホック通りに位置する。路地に位置する家屋は 94 件中 20 件だが、伝統的な様式に外観を整備した事例や歴史的な要素が見られる事例はない。つまり、史跡管理事務所は、観光客の多い通りの等級 3、等級 4 の建造物は伝統的な様式に整備し、路地では伝統的な様式に整備しない、観光客を意識した整備を行っているといえる。等級 3 と等級 4 の整備基準は、「周囲の環境と調和させる」「伝統的な様式への整備を奨励する」となっており、周囲の立地に対して適切な外観としてか、また、歴史的な建造物の多い場所においては伝統的な形式に整備してよいとなっており、伝統的な町家の新築は整備基準に違反していない。しかし、地区の真正性という観点からすると歴史地区を継承する視点からは検討の余地が残る。

②等級ごとに整備基準が決められ、整備後の外観を、予め決められた意匠見本の中から選ぶ手法は、歴史地区の町並みの真正性の観点から問題が生じる。

日本側の家屋修理技術協力は、特級、等級 1、等級 2 の家屋を対象として行われ、等級 3 と等級 4 の整備手法について検討されていない。等級 3 と等級 4 を対象としなかった理由は、ベトナムの歴史地区保存整備手法と日本の手法が異なるためといえる。ベトナムでは、建造物の所有者或いは住民は、保存条例や修理及び整備基準に従い、修理や整備後の意匠を、意匠見本などを用いて決める。特級や等級 1、等級 2 は当初の状態を可能な限り残すため、予め修理後の外観は決まっている。等級 3 や等級 4 は、意匠見本を用いて外観が決められるため、整備後の外観の選択余地がほぼない。歴史地区の魅力の一つは、歴史的な建造物が集積している場所であり、個々の歴史的な建造物は、建設された時代や地域の特徴を持つため、多様性と共通性を持つ点である。等級 3 と等級 4 は、古都ホイアンの保存地区 I の建造物の 7 割を占めるため、整備手法の古都ホイアンに与える影響は大きく、再考の余地があると思われる。

③修理工事や整備工事の記録作成は文化遺産の継承において重要だが作成されていないため、早急な対応が望まれる。

## (2) ドゥオン・ラム村の保存整備事業を事例として

### 修理及び補修内容の調査結果

①ドゥオン・ラム村遺跡管理事務所により行われた修理は 28 件中 11 件が確認できた。日本人専門家により行われた修理は 3 件である。日本人専門家が修理協力を行う場合、旧材を多く残す修理方針であった。遺跡管理事務所による修理が予定されている事例は 10 件で

あったが、既に補修が行われているものもあり、セメントで柱の下部が補強されている事例もあった。所有者が補修を行った事例は、所有者の意向で意匠が加えられたり、現代的な建具に変更されたり、歴史的建造物の修理方法に適していないやり方が見られた。

## 課題

①保存地区内の建造物の修理及び補修内容から、ドゥオン・ラム村の保存整備体制が未整備であるといえる。調査結果から、ドゥオン・ラム村の遺跡管理事務所が行った修理 11 件は、歴史的建造物に適した修理が行われ、遺跡管理事務所が行っていない補修 15 件<sup>注 7)</sup>は、建造物の歴史を継承するような修理が行われていない。所有者が行う補修は、部材ごと取り換える手法や、腐朽箇所にもルタルを塗りこめるといった手法が見られた。保存地区内の一部の歴史的建造物は、遺跡管理事務所によって管理されておらず、これらの建造物は所有者により補修され、歴史を継承しない手法が取られている。よって、保存地区内の全ての建造物の修理や補修は遺跡管理事務所によって管理される仕組みを作ることが必要である。また、所有者による補修も文化遺産としてふさわしい修理を行えるように、所有者に修理手法を紹介する必要がある。

②日本側が報告書を作成した点は古都ホイアンと同様だが、保存対象と分類は公開されていない。ベトナム側は古都ホイアンの保存整備事業における情報公開の役割を認識していない、或いは、時期尚早と判断している可能性もある。情報公開は、歴史地区保存整備において一定の役割を果たし、前述した建造物の修理にも重要である。例えば、保存対象と分類の公開は、保存地区の住民や関係者が、個々の建造物の保存方法や保存の意義を理解することにつながり、歴史地区全体の継承につながる。建造物の修理及び整備記録の作成は、個々の建造物の修理や整備の考え方を後世に残す役割を持ち、記録自体が文化遺産を構成する大切な要素の一つでもある。古都ホイアンの保存整備事業を踏まえると、ドゥオン・ラム村の保存整備事業は、歴史地区保存整備事業に住民が積極的に関わられるよう、住民に対して早い段階で建造物の分類や修理手法の情報公開を行うべきである。

③現地に常駐している、日本側の人材である青年海外協力隊員と、遺跡管理事務所建築職員の業務上の連携は見られず<sup>注 8)</sup>、今後検討する余地がある。

④ドゥオン・ラム村の保存整備事業において、古都ホイアンの保存整備事業の成果の継承を考えるならば、日本側がベトナム側に歴史地区保存整備事業の周知活動の必要性を伝えることが大切である。

⑤保存整備記録の作成自体が文化遺産保存において重要であることから、修理工事記録を含むドゥオン・ラム村保存整備事業の記録作成が望まれる。

## 6.5. ベトナムの歴史地区保存整備手法の独自性

ベトナムの歴史地区古都ホイアンの保存整備事業において、日本は20年以上にわたり協力を行ってきた。しかし、古都ホイアンの保存整備手法と日本の歴史地区の保存整備手法は、保存地区及び保存対象の決定過程における住民への情報公開、保存地区の範囲、保存対象の分類と管理方針において異なる。異なる点と、その理由にベトナムの歴史地区保存整備手法の独自性があると思われる。

### (1) 情報公開

日本の歴史地区は、歴史地区を有する地方自治体により調査が行われ、保存範囲と保存対象とする建造物が決定される。その過程で、歴史地区保存整備を滞りなく進めるために、保存地区内外の住民に説明会を行う地方自治体は少なくない<sup>1)</sup>。つまり住民は、歴史地区の保存整備過程において、保存整備事業の情報を得ることができる。情報公開の場が設けられることで住民は、保存地区決定による自分たちの生活への影響などの疑問を解決し、住民全体の総意を確認し、保存地区の運営に関与する意思を醸成し易い。また、歴史地区保存整備において、自分たちの行動が重要であると理解しやすく、保存整備事業の意義を認識する機会を持てる。

①ベトナムの歴史地区古都ホイアンでは、ベトナム政府（当時の文化情報省）が保存地区と保存対象となる建造物を決定した。ベトナム政府は保存地区決定過程において、保存地区や保存地区に関係する住民に対する説明会の場を設けず、保存対象と保存地区を決定し、住民はベトナム政府からの通達に従った。つまり、住民は歴史地区の保存整備過程において、保存整備事業の詳細な情報を得られなかった。

②古都ホイアンの保存整備事業において、日本側の木造建造物修理技術協力が終了する頃、住民や関係者への保存整備周知活動が行われた。周知活動は、2000年に行われた日本人研究者による保存地区内のワークショップや、2010年に行われたJICAの青年海外協力隊員による保存地区内の店舗経営者とのワークショップなどである。こうした保存地区内住民や関係者への周知活動は、古都ホイアンの保存整備事業に合わせた日本側の住民への情報提供の試みである。

③日本の歴史地区保存整備において、住民同士の歴史地区に対する意識確認や、住民の歴史地区保存意義の認識は重要である。日本側は、古都ホイアンの歴史地区保存整備事業において、日本の歴史地区保存整備に必要とされる、保存地区の住民に対する情報公開や、住民の関与を活かした保存整備事業手法を、ベトナムで定着させることができなかった可能性がある。

## (2) 保存地区の範囲

保存地区の範囲を見ると、日本の歴史地区における保存地区は、伝統的建造物群保存地区として決定された区域である。自治体によって、伝統的建造物群保存地区の周囲に風致地区を設定し、歴史地区の景観への影響を緩和するようにしている。

ベトナムの歴史地区は、保存地区が広く、2 種類に分けられている。ベトナムの手法は、世界遺産の保存管理に対応するものであり、文化遺産の法律を制定した際に、国際機関の手法を参考にしたものと考えられる。

## (3) 保存対象の分類と管理方針

保存地区内の保存対象を見ると、日本は保存地区内の建造物全てを保存していない<sup>注 9)</sup>。保存対象は、伝統的建造物に特定された歴史的建造物と、環境物件に特定された池や緑地などである。特定されていない建造物を、新築または改築する場合は、修景の対象となる。地方自治体は、建造物を保存対象として特定する場合、保存整備事業を効果的に行うため手続きの過程で当該建造物の所有者の了承を得る。地方自治体は、歴史的な価値があり伝統的建造物になり得るものを、所有者の了承のもとに、伝統的建造物として保存していく。さらに、伝統的建造物は歴史を継承する修理が行われる。保存地区内の非特定建造物の新築または改築は、伝統的建造物や保存地区の歴史的風致と調和した意匠に修景され、歴史地区全体の整備が図られる。つまり、地方自治体は個々の修理と修景を組み合わせながら、歴史地区の風致を整える。修景の方法は、保存計画の中に記述されるが、修景の基準や実施方法は歴史地区により異なる。また、歴史地区で行われる修景は、補助の対象であるが、修景事業は、当然所有者の協力を必要とする。

古都ホイアンの保存対象の詳細は以下の通りである。

①古都ホイアンの保存地区に位置する建造物は、全て上から特級、等級 1、等級 2、等級 3、等級 4 の 5 種類のいずれかに分類されている。分類は、ホイアン市により古都ホイアンの都市遺跡の保護と活用の条例の中で明記されている。保存対象を決定する過程で、建造物の所有者や住民の了承は得られていない。

②等級ごとの修理もしくは整備<sup>注 10)</sup>の基準は保存条例により決められている。2008 年にユネスコから保存の手引き<sup>注 11)</sup>が出版され、その中でより詳しい修理及び整備基準が示された。修理及び整備基準の中で、各等級の保存対象が書かれている。

③等級 3 の部分的に歴史的な要素が残る建造物や、等級 4 の歴史的な要素がない建造物に対して、保存の手引きに整備後の外観の見本が提示されている。等級 3 と等級 4 の整備基準は、「周囲に合わせること」と「伝統的な様式への整備を奨励する」ことであり、意匠見本に従わなくてもよいとしている。

④整備費用負担者が、整備後の外観を決めるため、所有者が整備費用を負担する場合、意匠見本に従うか、従わないかは自分で決められる。ただし、必ずホイアン市が決めた等級の整備基準に従う。保存地区内の全ての建造物は保存対象とされており、修理もしくは整備基準に則り保存されなければならない。古都ホイアンは、保存地区内全ての建造物を文化遺産として分類し、分類ごとに修理もしくは整備方法を決め管理している点に特徴がある。

## 6. 6. 今後の展望-歴史地区保存整備におけるベトナム側の課題と日本側の課題-

日本側はベトナムの社会体制をふまえ、家屋修理技術協力を中心に協力事業を行った。そして、ベトナム側は、歴史的な建造物を実施しているが、課題も残る。その課題についてベトナム側と日本側それぞれから述べる。

### (1) ベトナム側の課題

#### ①情報公開

情報公開は、住民や所有者の歴史地区保存整備事業への理解を促進し、住民による建造物の修理や整備行為を積極的に推進することにつながる。日本の歴史地区保存整備において、自治体の担当者は、保存地区の住民の保存意識啓発や勉強会などにも取り組んでいる。しかし、ベトナムでは、政府<sup>注12)</sup>により保存地区や家屋の分類が決められ、住民や所有者に歴史地区保存整備の情報公開をあまり積極的に行っていない。古都ホイアンの事例を見ると、住民への情報公開は保存整備事業開始 25 年後に行われた。ドウオン・ラム村は、修理や補修状況を見ると住民の保存の認識は不十分である。

古都ホイアンの保存整備事業において、日本側の協力として行われた住民への働きかけは、大学の研究者による住民代表者へのインタビューや、青年海外協力隊員による商店主を集めたワークショップの開催である。日本側の研究者によると、こうした日本側の協力の場においてベトナムは、住民代表者もワークショップ参加者も政府に協力的な住民が集められる<sup>注13)</sup>。日本のワークショップや公聴会のように意見交換の場ではない。住民との会合も 2001 年時点では、修理工事の感想を住民から聞くといった内容だった<sup>注13)</sup>。様々な目的で住民との協議が行われている。しかし、整備内容を踏まえると、整備基準に従った手法が採られていることが重要視されており、かつ、観光客に向けた整備が行われていることから、歴史地区を保存する意義が周知されていない。可能であれば古都ホイアンでも、保存地区の住民や商店主が歴史地区保存の意義を理解し、積極的に保存整備に取り組めるよう、住民への意識啓発や自らが納得するまで議論を重ねる場を作り出すことが望ましい。ベトナムの他の地域における歴史地区保存整備へ協力する場合、住民が保存整備に納得し、

積極的に参加する、保存整備知識の普及に日本は注意深く協力するべきであろう。

古都ホイアンの保存整備事業において、保存地区内の住民へ建造物の等級の情報公開が行われた時期は、2008 年の保存の手引き出版後である。古都ホイアンの保存整備事業が始められて 25 年経ち、初めて建造物の等級の情報公開が行われた。既に保存整備事業が進行しており、住民の積極的な参加を促す時期としては遅いように思われる。しかし、現地調査の際に居住者や所有者に対して歴史地区保存整備に対する意識の聞取りを行った限りでは、保存の手引きは、各等級に合わせた整備手法があること、保存地区内全ての家屋が保存対象となることを周知する役割を担ったといえる。

## ②記録の作成

歴史地区の構成要素の中心をなす建造物の修理及び整備記録作成は文化遺産の継承になくてはならない。ゆえに、古都ホイアンとドゥオン・ラム村両地区において、修理工事や保存整備事業の記録作成と公表が望まれる。

古都ホイアンの保存整備事業は、ベトナムにおける歴史地区保存整備事業の初めての事例である。これまでに生じた課題を検討し、解決を試みながら同国の他の歴史地区へ応用することが望まれる。

## (3) 日本側の課題

日本側は、古都ホイアンの保存整備事業を、文化遺産保存を目的とした日本の国際協力をういた歴史地区保存整備事業の先駆事例として位置付けられる。同事業の課題の解決を試みながら、ベトナムのみならず他の歴史地区保存整備事業への協力を行える。

日本は、文化遺産保存を目的とした国際協力において、木造建造物の調査や修理技術に対する協力、つまり、技術的な協力は実施できた。一方で、協力相手の国の社会制度に関わる広報、周知活動の協力は継続的ではなく、情報提供を行うのみであった<sup>注14)</sup>。当然、文化遺産保存を目的とした国際協力は、相手国に対して実施可能な範囲が限られている。その範囲で、日本側は歴史地区保存整備事業へ協力を行わざるを得ない。しかし、本研究で明らかにしたように、なぜ歴史地区を保存しなければならないのかといった住民や所有者への普及活動はその範囲内であり、国際協力を通して取り組んでいくべき活動である。



## 注

- 1) 1999年に世界遺産リストに古都ホイアンとして記載されるまでは、同地区をホイアン旧市街とする。
- 2) 第2章と同様に、外務省、文化庁、独立行政法人国際協力機構（当時）、各都道府県教育委員会、日本建築センター、昭和女子大学、千葉大学、東京都立大学（当時）、青年海外協力隊員とする。
- 3) 筆者のインタビューによる。
- 4) 日本の木造建造物の継手の名称に準じて、本論でのみ用いる。ただし、あくまでも、ホイアン史跡管理事務所で作成された図面や現地調査に基づくものであり、日本の手法と全く同様であることを示すものではない。
- 5) 日本の木造建造物の継手の名称に準じて、本論でのみ用いる。ただし、あくまでも、ホイアン史跡管理事務所で作成された図面や現地調査に基づくものであり、日本の手法と全く同様であることを示すものではない。本論で用いている「追いかけ栓継」は、継方が日本と類似の場合と、蟻口に近い場合がある。
- 6) 等級4は陰陽瓦を葺くのみでも構わないのだが、意匠見本に合わせて整備されている事例が多い。
- 7) 遺跡管理事務所で修理が予定されていても、既に補修が行われている場合もある。従って、15軒には、第5章で扱った（2）管理事務所により修理が予定されている事例と（3）個人により修理が行われた事例が含まれる。
- 8) 筆者の青年海外協力隊員へのインタビューによる。
- 9) 特定は地方自治体が行う。
- 10) 保存地区内の歴史地区の様相に合わせた外観もしくは外観と内部に整えることを指す。歴史的な要素を残すことを考慮する特級、等級1、等級2と区別するために用いる。なお修景は、日本の歴史地区独自の手法であり、厳密には古都ホイアンの等級3、等級4の扱い方と異なる。従って、本論では、古都ホイアンで歴史的要素の少ない等級3と歴史的要素のない等級4を歴史地区に合わせる工事を行う場合は整備とする。
- 11) 2008年にユネスコから出版された“Heritage Homeowner’s Preservation Manual-Hoi An World Heritage Site, Viet Nam”を指す。文中では「保存の手引き」と記述する。
- 12) 古都ホイアンを国家文化財とした時点では、文化情報省だったが、組織改編により文化・スポーツ・観光省(Bộ Văn hóa Thể thao và Du lịch / Ministry of Culture, Sports and Tourism)になった。
- 13) 筆者の関係者へのインタビューによる。
- 14) ベトナムにおいて JICA により法整備支援は行われているが、あくまでも法曹人材に対する支援である。

## 参考文献

1. 伊藤延男、他 10 名：「8 歴史的環境の保存」, 新建築学体系 50 歴史的建造物の保存, pp. 401-473, 彰国社, 1999.4 など

< 資料目次 >

1. 古都ホイアン

主要な通りに面した修理済み建造物	1
路地に面した修理済み建造物	321

2. ドゥオンラム村

共同体所有の建造物等	361
個人所有の建造物等	399

3. タイン・チュオン邸

427

## 1. 古都ホイアン資料の見方

立地別に調査家屋（ホイアン史跡管理事務所に修理申請のあった家屋）をまとめた。

### ・建造物の住所

通り名と番地で示した（例 チャン・フー77(Trần Phú)は「TP77」）。通り名は略称をアルファベットで記したので下記表を参照し、位置は下図を参照。表番号は、図の番号と対応している。

表 通りの名称と略称

No.	略称	日本語	ベトナム語
1	BD	バック・ダン	Bạch Đằng
2	HD	ホアン・ディエウ	Hoàng Diệu
3	HVT	ホアン・ヴァン・トゥ	Hoàng Văn Thụ
4	LL	レ・ロイ	Lê Lợi
5	NH	グエン・フエ	Nguyễn Huệ
6	NTH	グエン・タイ・ホック	Nguyễn Thái Học
7	NTM	グエン・ティ・ミン・カイ	Nguyễn Thị Minh Khai
8	PBC	ファン・ボイ・チャウ	Phan Bội Châu
9	PCT	ファン・チャウ・チン	Phan Châu Trinh
10	TL	ティエウ・ラ (チャン・クイ・カプ)	Tiểu La(Trần Quý Cáp)
11	TP	チャン・フー	Trần Phú

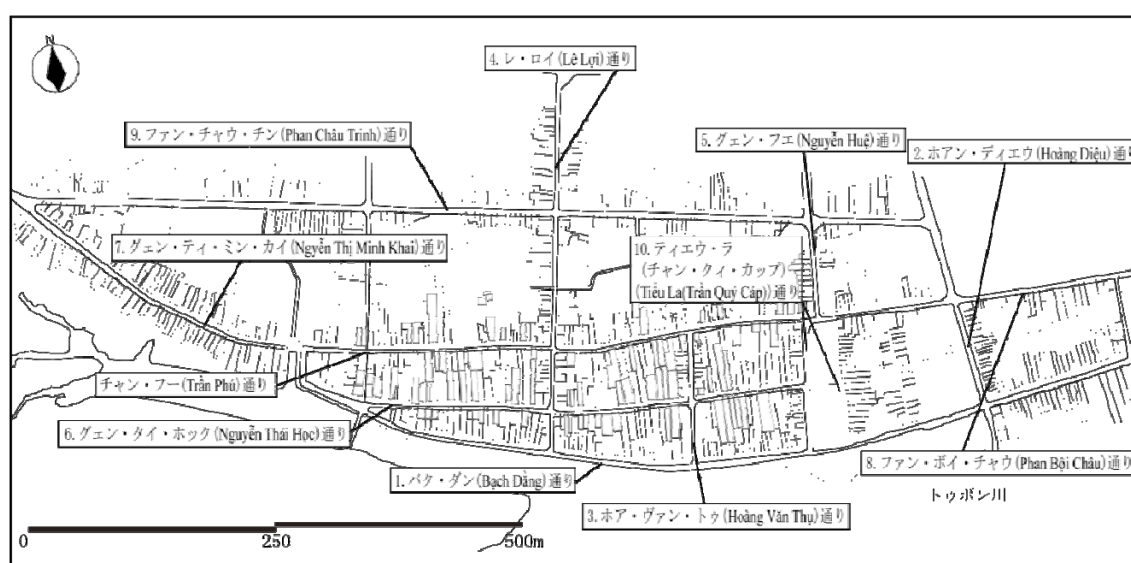


図 通りの位置

・等級はアルファベットと数字で記した。内容は以下の通り。

S：特級、C1：等級 1、C2：等級 2、C3：等級 3、C4：等級 4

・修理年

ホイアン史跡管理事務所所有の修理申請家屋表に準じる。修理年が複数の場合は修理が複数年にわたる、或いは複数回行われていることを示す。

・分類

所有者、修理費用負担者、立地により下記の通り分類した。

No.	分類	内容		
		所有	修理費用負担者	立地
1	①全公型	国	公的機関（クアンナム・ダナン省、ホイアン市、海外組織（日本からの寄付等））	道路
2	②-1費用個人型道路	国	個人	道路
3	②-2費用個人型路地	国	個人	路地
4	③-1全個型道路	個人	個人	道路
5	③-2全個型路地	個人	個人	路地
6	④-1費用公型道路	個人	公的機関（クアンナム・ダナン省、ホイアン市、海外組織（日本からの寄付等））	道路
7	④-2費用公型路地	個人	公的機関（クアンナム・ダナン省、ホイアン市、海外組織（日本からの寄付等））	路地
8	⑤-2共公型路地	共同体	公的機関（クアンナム・ダナン省、ホイアン市、海外組織（日本からの寄付等））	路地
9	⑥-1共個型道路	共同体	個人	道路
10	⑥-2共個型路地	共同体	個人	路地

古都ホイアンの修理済み家屋（主要な通りに面しているもの 1/3）

No.	住所	等級	修理年	用途	分類
1	LL21	S	1992-2004	祠堂兼住居兼見学場所	④-1
2	NTM16	S	2006/2007/2008	祠堂兼住居	③-1
3	TP80	S	1993-1995	博物館	①
4	TP48	S	1997/1998	店舗、画廊兼住居	①
5	TP24	S	2001	寺院	①
6	TP77	S	2003/2008/2009	住居（見学場所）	③-1
7	TP96	S	2008	祠堂兼住居	③-1
8	BD76	C1	2007/2008/2009	店舗兼住居	③-1
9	HVT17	C1	2001	店舗兼住居	④-1
10	HVT23	C1	2000	店舗兼住居	①
11	HVT25	C1	2006	店舗兼住居	③-1
12	LL57	C1	2003	店舗	③-1
13	LL55	C1	2004	飲食店	③-1
14	LL94	C1	2006	店舗兼住居	③-1
15	NTH60	C1	1998	飲食店	①
16	NTH21	C1	1999	店舗兼住居	①
17	NTH33	C1	1999	博物館	①
18	NTH46	C1	1999	画廊	①
19	NTH92	C1	1999	店舗兼住居	①
20	NTH115	C1	2000/2001	店舗兼住居	④-1
21	NTH132	C1	2001/2001	店舗兼住居	①
22	NTH52	C1	2002	店舗兼住居	②-1
23	NTH104	C1	2002	店舗兼住居	①
24	NTH126	C1	2002	祠堂兼住居	③-1
25	NTH103	C1	2003	店舗	①
26	NTH81	C1	2005/2008	店舗兼住居	①
27	NTM6	C1	1999	店舗	①
28	NTM11	C1	2006	店舗兼住居	③-1
29	TP121	C1	1994/1996	飲食店兼十他虚	①
30	TP142	C1	1996	店舗兼住居	④-1
31	TP71	C1	2001	店舗兼住居	①
32	TP117	C1	2003	店舗兼住居	①
33	TP38	C1	2004	飲食店兼住居	①
34	TP53	C1	2004	店舗兼住居	①
35	TP62	C1	2006	店舗兼住居	③-1
36	TP33	C1	2007/2008/2010	店舗	①
37	TP84	C1	2007/2008/2009/2010	祠堂兼住居	⑤-1
38	TP113	C1	2007	店舗兼住居	③-1
39	BD94	C2	1999/2001	飲食店	④-1
40	BD60	C2	2006	店舗兼住居	③-1
41	HVT2	C2	1997	店舗	①
42	HVT11	C2	2004	店舗兼住居	①
43	HVT21	C2	2005	店舗兼住居	③-1
44	LL45	C2	2003	旅行代理店	①
45	LL49	C2	2005	店舗兼住居	①
46	LL62	C2	2005	店舗兼住居	①
47	LL82	C2	2006	店舗兼住居	③-1
48	LL92	C2	2006	店舗兼住居	③-1
49	LL50	C2	2007	店舗（兼住居）	③-1
50	NTH90	C2	1997/2004	画廊兼住居	①
51	NTH113	C2	1998	店舗	④-1
52	NTH114	C2	1999	住居	①
53	NTH100	C2	1999/2004	店舗兼住居	①
54	NTH28	C2	2000/2005	店舗	①
55	NTH55	C2	2000	店舗兼住居	①
56	NTH84	C2	2000	店舗兼住居	①
57	NTH15	C2	2001	店舗兼住居	①
58	NTH17	C2	2001	店舗兼住居	①

※住所は道路名の略称と番地の組み合わせ。

※No. 52 NTH114 は所有者の意向により撮影、調査ができなかったため資料には掲載していない。

古都ホリアンの修理済み家屋（主要な通りに面しているもの 2/3）

No.	住所	等級	修理年	用途	分類
59	NTH117	C2	2001/2002	画廊兼住居	④-1
60	NTH53	C2	2001	店舗兼住居	①
61	NTH19	C2	2002	空き家	①
62	NTH130	C2	2002	博物館	①
63	NTH98	C2	2003	飲食店兼住居	④-1
64	NTH48	C2	2004	店舗（兼住居）	①
65	NTH50	C2	2004	店舗兼住居	①
66	NTH61	C2	2004	店舗兼住居	①
67	NTH118	C2	2005	店舗兼住居	①
68	NTH91	C2	2006	店舗（兼住居）	③-1
69	NTH34	C2	2007	店舗兼住居	③-1
70	NTH59	C2	2007	飲食店	①
71	NTH69	C2	2007/2008	店舗兼住居	③-1
72	NTH72	C2	2007	病院	①
73	NTH108	C2	2007	飲食店	①
74	NTH67	C2	2008/2009/2010	店舗	①
75	NTM12	C2	2006	画廊（兼住居）	②-1
76	PBC36	C2	2001/2004	店舗兼住居	④-1
77	PBC33	C2	2002	観光局事務所	①
78	PBC34	C2	2002/2005	診療所	①
79	PBC35	C2	2002	観光局事務所	①
80	PBC45	C2	2005	店舗兼住居	①
81	PBC38	C2	2006	店舗兼住居	③-1
82	PCT21	C2	2002/2007/2008	祠堂兼住居	③-1
83	TP115	C2	1999/2000	店舗兼住居	④-1
84	TP125	C2	1999/2000	店舗兼住居	②-1
85	TP34	C2	2001	店舗（兼住居）	③-1
86	TP95	C2	2001	画廊（兼住居）	③-1
87	TP154	C2	2001	店舗（兼住居）	①
88	TP174	C2	2002	店舗（兼住居）	①
89	TP30	C2	2003	入場券売り場	①
90	TP91	C2	2004	店舗	①
91	TP123	C2	2004	店舗（兼住居）	①
92	TP172	C2	2004	店舗（兼住居）	①
93	TP129	C2	2006	見学場所兼住居	④-1
94	BD44	C3	2001	店舗兼住居	③-1
95	BD84b	C3	2001	店舗兼住居	③-1
96	BD22	C3	2003/2004	不明	①
97	BD24	C3	2003/2004	不明	①
98	HD41	C3	2005	店舗兼住居	③-1
99	HVT4	C3	2004	店舗兼住居	①
100	LL52	C3	2001	店舗（兼住居）	③-1
101	LL29	C3	2004	店舗兼住居	③-1
102	LL61	C3	2004	店舗兼住居	①
103	LL42	C3	2006	店舗倉庫	③-1
104	LL80	C3	2006	店舗兼住居	③-1
105	NH14B	C3	1999	店舗（兼住居）	—
106	NH16	C3	2005	店舗（兼住居）	①
107	NH20	C3	2005	店舗（兼住居）	①
108	NH22	C3	2005	飲食店兼店舗	①
109	NH24	C3	2005	店舗（兼住居）	①
110	NH14	C3	2005	店舗（兼住居）	①
111	NH12	C3	2006/2008	店舗（兼住居）	①
112	NTH9	C3	1999	博物館	①
113	NTH76	C3	2000	店舗	③-1
114	NTH38	C3	2001	店舗兼住居	③-1
115	NTH116	C3	2002	店舗兼住居	①
116	NTH35	C3	2003	店舗兼住居	①

※住所は道路名の略称と番地の組み合わせ。

古都ホイアンの修理済み家屋（主要な通りに面しているもの 3/3）

No.	住所	等級	修理年	用途	分類
117	NTH97	C3	2003	店舗（兼住居）	①
118	NTH99	C3	2003	店舗（兼住居）	①
119	NTH58	C3	2004	店舗	①
120	NTH23	C3	2005/2005	店舗	①
121	NTM31	C3	1992-2004	画廊（兼住居）	④-1
122	NTM20	C3	2003	店舗兼住居	③-1
123	NTM34	C3	2003	店舗兼住居	①
124	NTM35	C3	2003	住居	④-1
125	NTM36	C3	2003	店舗兼住居	①
126	NTM18	C3	2006	画廊兼店舗	③-1
127	NTM44	C3	2006	住居	③-1
128	PCT7	C3	1997/2007/2008	店舗兼住居	②-1
129	PCT8	C3	2005	飲食店兼店舗	①
130	PCT34	C3	2004	店舗	①
131	PCT3	C3	2006	住居	③-1
132	PCT28	C3	2006	住居	③-1
133	PCT53	C3	2006/2008/2010	公安	①
134	TL31	C3	2006/2008	店舗兼住居	③-1
135	TP152	C3	2000	店舗兼住居	③-1
136	TP100	C3	2002	店舗	①
137	TP54	C3	2004	画廊（兼住居）	①
138	TP27	C3	2005	飲食店（兼住居）	③-1
139	TP57	C3	2005/2008	事務所	①
140	TP118	C3	2005	画廊（兼住居）	①
141	TP89	C3	2007	店舗兼住居	①
142	BD46	C4	2004	飲食店兼住居	④-1
143	BD48	C4	2004/2006	飲食店兼住居	②-1
144	BD42	C4	2006/2008	店舗（兼住居）	③-1
145	BD8	C4	2009	住居	③-1
146	BD54B	C4	2009	店舗兼住居	③-1
147	HD19	C4	2004	店舗兼住居	③-1
148	HD39	C4	2008	店舗兼住居	③-1
149	HD13	C4	2009	店舗兼住居	③-1
150	NTH26	C4	1997	人民委員会	①
151	NTH78	C4	2003	画廊兼住居	③-1
152	NTH51	C4	2004	工場	①
153	NTH11	C4	2006	店舗兼住居	③-1
154	NTM42	C4	2006	画廊（兼住居）	③-1
155	NTM53	C4	2007	店舗（兼住居）	③-1
156	NTM57	C4	2007/2008	画廊（兼住居）	③-1
157	PBC64	C4	2003	店舗兼住居	③-1
158	PCT2A	C4	2004	店舗兼住居	④-1
159	PCT133	C4	2004	住居	④-1
160	PCT14	C4	2005	工場兼住居	③-1
161	PCT1	C4	2006	住居	②-1
162	PCT71B	C4	2006	店舗	③-1
163	PCT97	C4	2006	住居	③-1
164	PCT68	C4	2008	住居	③-1
165	PCT2B	C4	2009	店舗兼住居	③-1
166	TP63	C4	2002	店舗兼住居	①
167	TP51	C4	2004	店舗兼住居	①
168	TP146	C4	2007	人民委員会	①

※住所は道路名の略称と番地の組み合わせ。



1) レ・ロイ 21 (21 Lê Lợi)

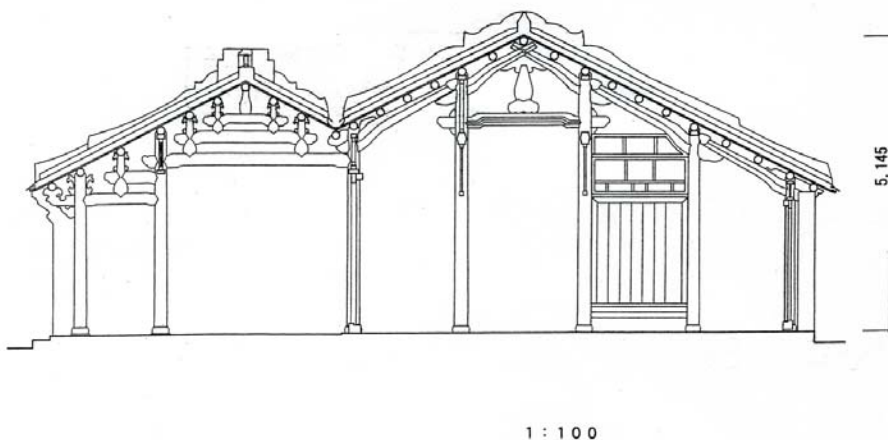
特級の個人所有の家屋。1992 年から 2004 年まで日本人専門家に依り修理協力が行われた。資金も日本側が提供している。

ホイアン保存地区内に 5 か所ある見学可能な家屋のうち一つである。ただし、大多数を占める町家型家屋ではなく、祠堂と前庭を有する形式で、祠堂を中央に配し、居住空間はその南に位置している。

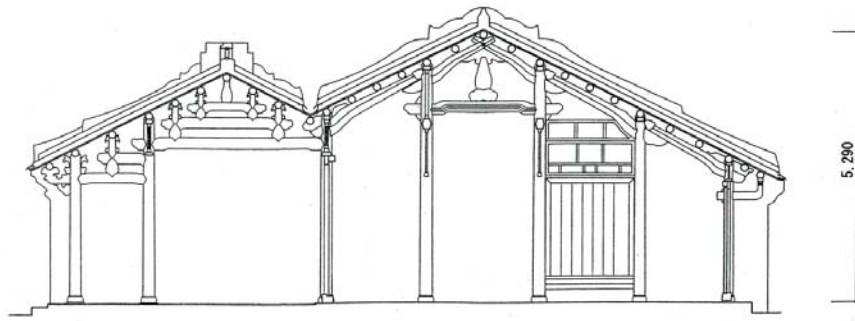
「所有者の張氏は中国福建省から移ってきたと伝えられ、グエン朝の役人を勤めた。かつては、現在の敷地から東北方向に向かってレロイ通りに面する敷地を有したが、張家所蔵文書によれば、1906 年に、ファンチューチン通りの拡張に伴い、現在の敷地に縮小されて、主屋・祖堂ともに現在地に移築されたと伝える。祖堂の梁下に年代が刻まれており、1848 年の建築であることがわかり、主屋もほぼその頃の建築と思われる。」<sup>注 1)</sup>

「背面側の軒は切り縮められていたが、側柱には前面と同様に軒桁を受ける腕木の大入の穴があり、腕木で軒桁を受ける形式とし、軒の出も前面を参考に旧状に復した。

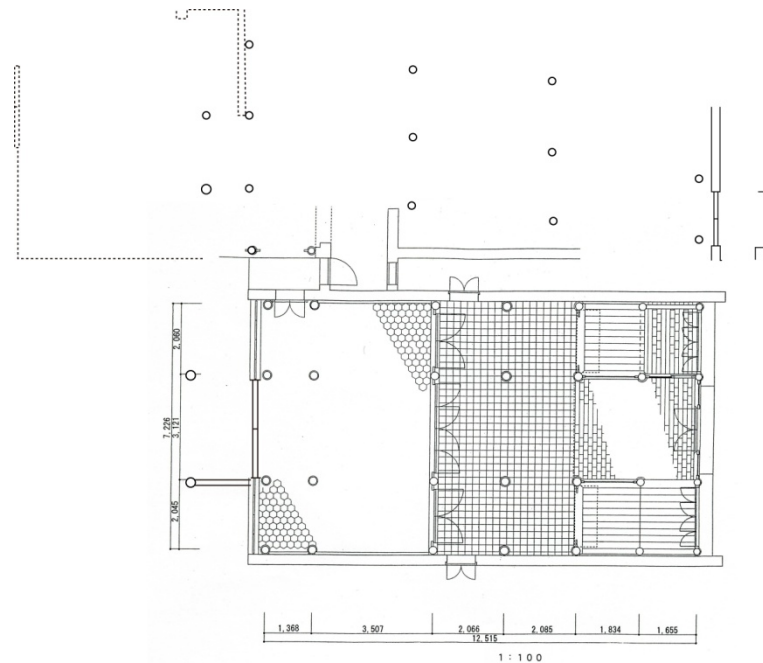
構造的に重要な梁も蟻害が大きく、そのまま使用するのは不可能であったが、彫刻が施されたものについては、彫刻部分を可能な限り残して部材の繕いをおこなったり、梁の表面の彫刻部分を切り取って新材に貼り付ける等して、彫刻の保存に努めた。」と日本人専門家が調査を行いながら修理方針を決めている様子が窺える。



修理前祖堂断面図<sup>注 1)</sup>



修理後祖堂断面図<sup>注1)</sup>



祠堂 2011 年調査時平面図<sup>注2)</sup>



敷地内部から見る正面のファサードは、簾が掛けられている。庭があり美しく整えられ、ゆったりとした作り。



正面にある門を中庭から見ると、門の様式も伝統的な瓦を葺き、モルタル仕上げの壁を持つ家屋と共通した造りだとわかる。

1) レ・ロイ 21 (21 Lê Lợi)



正面の門を外側から見る。壁はモルタル仕上げで黄色い塗装が施され、門と一体化していることが分かる。



中庭から見た敷地南側の入り口。正面の門とは異なり屋根を持たず、扉のみである。



南側の門は外から見ると壁の一部に設けられたようである。



南西から見た外観は敷地が広く、棟の階高を変えずに保存していることがよくわかる。



左が側対象家屋である。棟の高さや屋根の形状がよく保存されていることが分かる。



祠堂の扉は赤く塗られ、簾が掛けられており日中の日差しがよけられる。



柱の上部にある溝を埋めている。丁寧な仕上げをしている。



同様に別の柱の溝を埋めている。こうした手法が用いられている柱はあまりなく、日本人専門家の影響が窺える。



やはり、柱下部の埋めも珍しい。



同じ柱の上部



別の柱下部の溝も丁寧に埋めている。全体的に細やかな印象を受ける。



同じ柱の上部を見ると、モルタルが柱の横にあり屋根の荷重を受けて理うことがわかる。





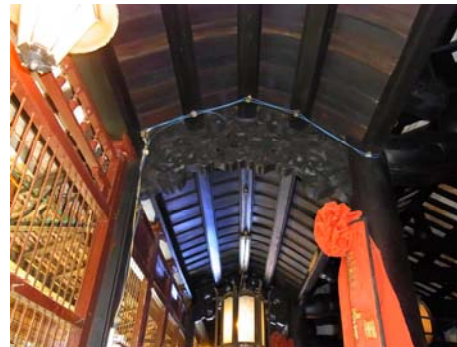
こちらの柱の溝もやはり埋められ散る。



柱の表面に見られる割れは、材料の特性か、内部の虫食いなのだろうか。他の柱には見られない。



上屋小屋組みも特級のため天井が張られず、見ることができる。屋根瓦も陰陽瓦であることが分かる。



祠堂の虹梁に施された彫刻は細かく美しい。



束を使った付属屋の小屋組みは等級1でも散見できる。特級のため壁際まで小屋組みがある。



前庭も庭木や植木鉢が置かれ、快適な生活を送るための重要な空間である。特に、密集した市街地でこれほど広い空間を持つことは、採光や通風のみならず快適性を保持するためでもある。



後庭。祖先の納骨や胎盤などが埋められていると、住民により説明される。

注1 文化庁文化財部「旧国際商業港ホイアンにおける国際協力事業の記録」平成15年より転載。縮尺は報告書のまま。

注2 文化庁文化財部「旧国際商業港ホイアンにおける国際協力事業の記録」平成15年掲載の図面に筆者が書き加えた。

2) グエン・ティ・ミン・カイ 16 (16 Nguyễn Thị Minh Khai)

特級の個人所有の家屋。2006 年、2007 年、2008 年に個人の資金で修理された。

調査時には、ホイアン史跡事務所の管理下に移っており、芸術家夫妻が借りている。住居と兼用であり 1 階は画廊と土産物屋である。

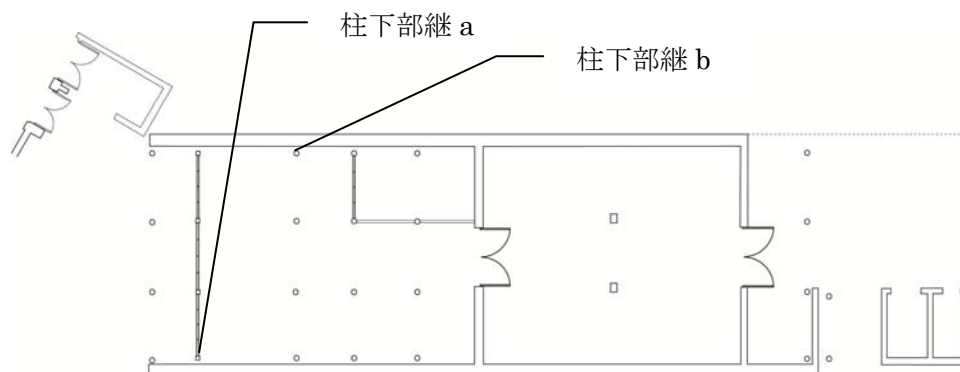
敷地は通りに面しているが、他の町家形式と異なり、門を有する。門は敷地に対して西に振れている。前家と付属屋、後家から構成され後家のみ 2 階建てである。後庭を有し、西側にも通路があるため、他の町家よりもゆったりとした敷地構成となっている。

台所や風呂、便所は後庭に別棟で設置され、洗濯物干し場なども兼ねている。

構造は前家、後家共に合掌造り。

中庭はないが、前と後に空間を有し、後は庭となっている。

店舗として使用されているのは、門と前家及び付属屋であり、後家 2 階はアトリエとして使用されている。



2011 年調査時平面図



通りに面した門。左側が店舗、右側が通路である。



前家の前面部分の小屋組み。合掌造りで壁際まで小屋組みがあるのは特級だからだろう。





小屋組みの材料が一部新しいものに取り替えられている。また、垂木、母屋共に新しい材料に取替え。



後家 2 階部分の小屋組みは合掌造り。生活空間だが天井を張らずに見せているのは、特級だからだろう。



a) 柱下部の継。ベトナムの手法を用いている。国所有でも旧材を多く起こす手法を常に用いるわけではない。



b) 入り口に近い場所の柱下部の継もベトナムの手法を用いている。



端部の彫刻は復原されており、伝統的な様式を保つという修理方針に沿ったものである。



床はタイルが敷かれており、使用者の利便性を優先させたとと言える。壁面の色の選択肢も黄色、青、白と多く、伝統的な様式の中に含まれていないようだ。

## 3) チャン・フー80 (80 Trần Phú)

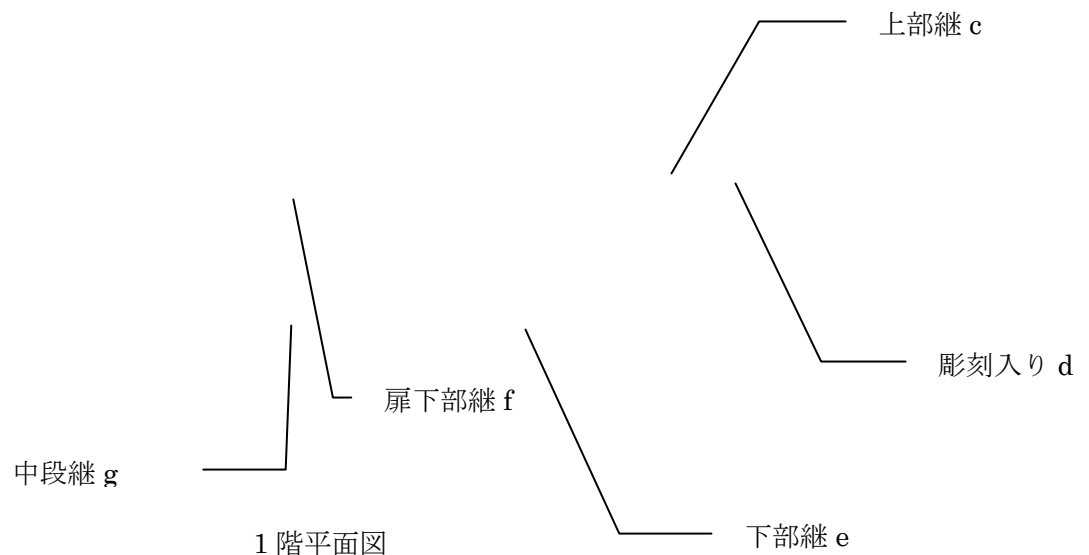
「貿易陶磁博物館」として使用されている。日本側の技術協力により文化遺産として修理された第一号の家屋である。

「前家、中庭を隔てて後家を敷地幅いっぱい建て、中庭西側に橋家を構えて逆コの字型に前・後家を連絡する。総2階建てで、2階の床レベルは同一である。前家は桁行3間、播磨3間、棟を道路に並行に置く切妻造で、2階は全面と背面の橋家の取りつく西半分以外にベランダを張り出す。前後のベランダは2階の床張りを持ち出し、先端にベランダ柱を立てるので、梁間は5間となる。通し柱は正面の両端と背面の両端及び西から2本めのみで、他派2階床梁高さで上下が切れている。」<sup>1)</sup>

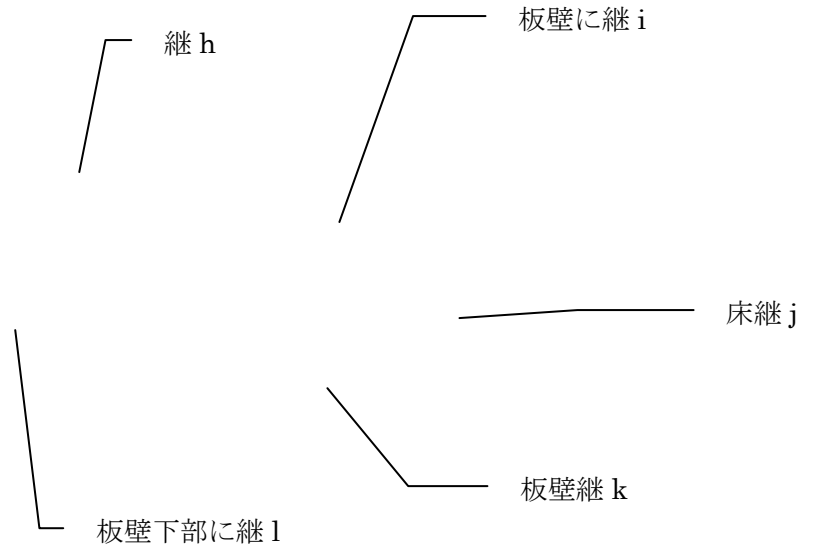
「修理前の破損状況は、全体に瓦の破損やずれにより雨漏りを生じ、それに起因する木部の腐朽や蟻害が随所に生じていた。橋家と前・後家の造り合い部分の水平の谷は、雨水が集中して弱点となりやすい場所であり、小規模な橋家が最も破損が大きかった。特に後家側の階段室は腐朽破損が著しく、分解大破して原型をとどめない状態であった。西側煉瓦壁沿いの2本の柱は内部が空洞化していたほか、柱、梁、根太、床板、母屋桁、垂木、壁板等全ての部位に蟻害が生じていた。」<sup>2)</sup>後家では「蟻害を受けた部材が随所に見られ、特に2階部分の被害が重篤で、2階東妻の正面から第3柱の上部には巨大な白蟻の営巣が認められ、柱の欠損した部分にはモルタルが詰められて補強されていた。」<sup>3)</sup>

「後家2階全面西間の柱間装置は類例に倣い整備した。傾斜している後家の背面煉瓦壁には鉄筋コンクリートの補強柱を各柱位置の背後に添え、妻面の窓には硝子戸を仮設した。

後庭に見学者用便所を新築、後家東側の差しかけは管理人用の住居として改装。中庭東寄りにあった竈と釜屋の痕跡から桁行3間、梁間1間の釜屋を新築した。」<sup>4)</sup>



3) チャン・フー80 (80 Trần Phú)



2階平面図

修理後断面図



正面は壁、扉、ベランダ共に木製で、階鼓舞は伝統的な蔀戸ではなく観音開きである。



ホイアン貿易陶磁博物館の看板が正面右手に建てられている。日本人の協力により修理されたが、中に入らないと日本人の協力があったことは分からない。

注 1～4.文化庁文化財部「旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録」平成 15 年 3 月,pp.11-12 より引用。図面も同様。図中の寸法は図面のものを転載。



a) 柱中段には鍵型の継が見られ材料を多く遺す手法が採られていることがわかる。



b) 建具の横材にも継が用いられ、旧材を多く遺すとう方針が窺える。



c) 柱上部に継があり、材料を多く遺す方針こちらでも窺える。



d) 根太に彫刻が入っているのは珍しい。



e) 柱下部にある継。この家屋の壁面仕上げの色は白が用いられており、珍しい。



f) 建具下部に見られる継。旧材をできるだけ遺す配慮が分かるが、他の家屋ではここまで細やかに修理を行う事例は見つけられなかった。





g) 柱中段に継が見られる。壁面は修理時に直しているはずだが、既に剥落が始まっている。



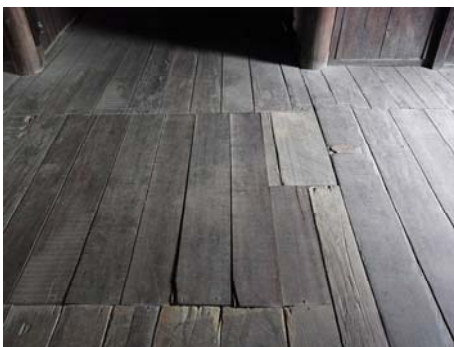
h) 柱下部継



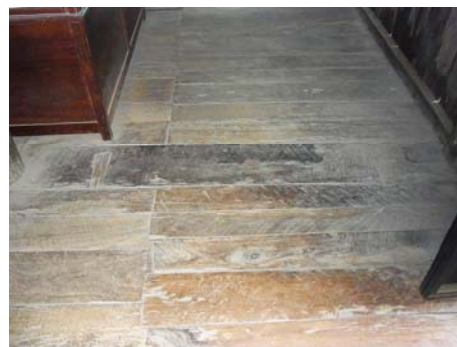
i) 後家と橋家の間の板壁下部の継。ここまで細かく旧材を残している事例は日本人専門家の協力があった家屋の中でのみ見られる。



i) 同じ場所を東側から撮影。細やかな継方をしている。



j) 床の継。左側は荷揚げ用の杵跡だと推測できる。右側は継。



j) 別の個所にある継。床が継がれている例は珍しい。



k) 部材に番付が残り解体修理工事が行われたことが分かる。



k) 右側、縦の部分が継がれている。旧材を残すことがどういうものかを家屋で説明している事例だといえる。



k) 腰壁が数か所直されている。構造材のみならず建具にもこうした配慮がなされている。



k) 左側、縦の部材が継がれている。この修理事例が、古都ホイアンの最初の事例として学びの場となることを想定しているといえる。



l) 板壁下部の部材が継がれている。等級 1 でもこうした細やかな修理の事例はなかなか見られない。



l) 同じ箇所の柱に近い部分が継がれている。全ての旧材が家屋を構成する重要な要素であるという考え方を示したものである。

4) チャン・フー48 (48Trần Phú)

特級で日本の予算で 1997 年から 1998 年にかけて修理された国所有の家屋である。

画廊と住居が共存している平屋の家屋であり、中庭を有し、橋家部分に彫刻がある貴重なものとされている。

大学調査時断面図

大学調査時平面図



4) チャン・フー48 (Trần Phú48)



道路に面した箇所虹梁。継がれている。



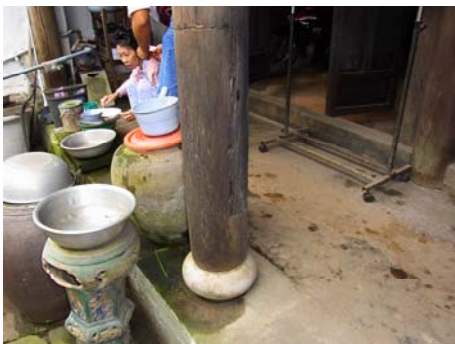
別の虹梁。表面の風合いが異なり、修理されたことが分かる。



現在も、左右の開口部に合わせて床が張られている。



前家から見た中庭。中央は通路として開けられている。



中庭に面した柱。下部に継があるが、継方から旧材を多く遺すようにしていることがわかる。



橋家の壁。橋家に彫刻が残る例は貴重であると、修理記録にも書かれている。左右の柱の下部及び壁面の下部に継ぎ目がある。下部の材料が新しい。



台所の一部であり、植栽もある中庭は維持されている。通風と採光と接客が元々も機能だったが、水回りも加わり維持されている。



材料の色が欄間と開口部で異なり枠が取替えられていることがわかる。



住人の仕事上、壁が増設されている。が撤去しやすいものであり、建造物を保存する配慮がされている。



床面の段差を見ると左手に張られたタイルは、意匠見本とは異なる。



天井も一部新しい材料が見られるが、一部壊れても全てを取り替えず、残していく、新しい材料は古い材料に合わせるといった考え方が窺える。



後家の小屋裏に置かれている木材は、以前、この家屋で使用されていたものを保管していると推測される。

5) チャン・フー24 (24Trần Phú)

2001年にホイアン市の予算で修理された国所有の特級の廟。古都ホイアンの伝統的な家屋とは異なり、門を手前に置き、二つの棟が並行して並ぶ配置である。後部には付属屋があり、他の家屋と同様に南北に長い。旧正月には初詣で賑わう地域に密着した寺院である。柱の腐朽部分が埋められていることや敷居が細かく補修されている点など、他の家屋とは異なる手法が用いられている。

平面図

断面図



正面は家屋と異なり寺院であるために装飾が施され色づかいも鮮やかである。



柱の腐朽部分に埋められている。他の家屋では見られない修理方法である。



柱の下部にある修理の跡。傷んだ箇所を木くずなどで練ったもので埋めている。



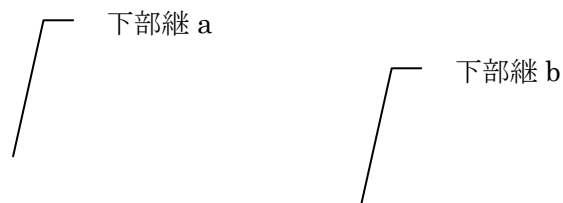
修理された敷居。細かく修理されているが、家屋ではあまり見られない修理方法である。

6) チャン・フー77 (77 Trần Phú)

個人所有の特級の家屋。2003、2008、2009 年に修理をした。いずれも個人の資金である。ホイアン保存地区内に 5 か所ある見学できる家屋の一つである。従って生活空間はそのまま見学空間となる。家屋の中で土産物も扱っている。

前家、橋家、後家から構成され、橋家と後家には 2 階があるが、台風等により破損していた。この家屋は、木材の表面が黒く塗装されていることが特徴的である。また、中庭を囲む棟に装飾が施されている。

中庭と前家、中庭と後家の段差を見ると、中庭と前家の方が差が大きく、チャン・フー通り(đường Trần Phú)が南側のバック・ダン通り(đường Bạch Đằng)よりも高い位置にあることが分かる。



1 階平面図

2 階平面図





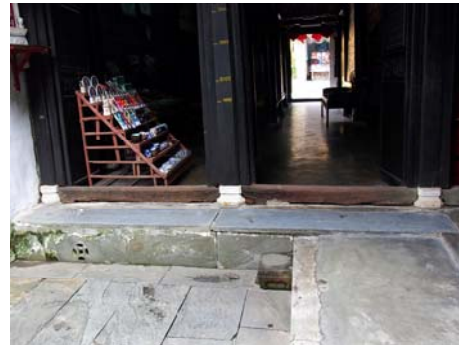
正面は木材を使用した扉や蔀戸であり、伝統的な様式を保っている。壁も黄色が多い中、白を用いている。



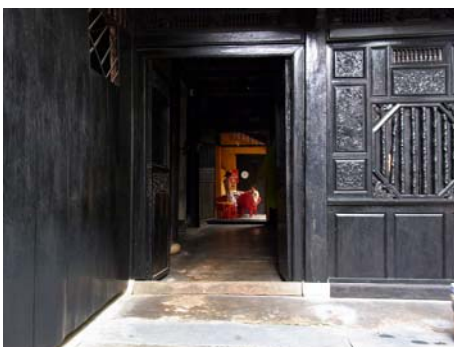
a) ファサード部分の柱下部は水害で傷みやすく、修理した後(日本型の継)が見られる。



b) 柱横の板壁の枠も、元の材料をできるだけ残すようにした修理が行われている。



中庭は棟部分よりも地表面が低い。水はけのよさからか。写真中央の柱の文字は、川の増水量が記されたもの。



後家側の棟。奥は生活空間となっている。扉に彫刻が施されているが表面の塗装は黒く艶のあるもので、修理方針がはっきり定まっていない時期の修理であることが窺える。



橋家の壁。格子が見える。意図的に残しているようである。橋家の彫刻も残されており、個人の資金で修理しているが、伝統的な様式を保つことに注意を払っていることが窺える。



前家の虹梁に施された彫刻は元のもの  
を継承している。



中庭から見た 2 階のベランダはモル  
タル仕上げで、模様は共同会館に用い  
られているものと同様である。華人の  
子孫であるためか。



橋家の彫刻も残されている。橋家があ  
っても壁面の彫刻が残る事例は少な  
く貴重である。個人所有ながら、見学  
可能な家屋である影響が大きい。



中庭から見た前家の 2 階。腐朽してい  
るため調査時は使われていなかった。



毎年秋の浸水の高さを記した柱。等級  
1 の家屋にこうした記入をすること  
へ保存上からの疑問はあるが、地域の  
歴史を記したものでもある。



7) チャン・フー96 (96Trần Phú)

チャン・フー通りの北側に位置する特級の個人所有の家屋。所有者によると前家のみであるという。外から見える後の棟は別の所有者がいるということだ。2008年に個人の資金で修理された。

前面は店舗として使用されており、後部は台所等の生活空間がある。

(1) 構造

和小屋に近い、レ・ロイ 21 でも見られる小屋組である。

(2) 中庭

中庭はない。

(3) その他

柱の中心部が礎石とずれる、屋根瓦の破損が散見できるなど、調査時は手入れが必要な状況であった。2008年に修理が行われたとあるが、こうした構造的な部分は修理されなかったのか、修理されたが、再度ずれたのかは不明である。



正面から見ると、平屋の棟で底は浅いが、他の家屋で見られるようなトタン等による底の伸長していない。



ファサードの柱は礎石と柱の中心がずれている。修理されないままか、修理後に、さらにずれたか。



中心のずれた柱



壁構造のため、また利便性を高めるためか柱が途中で切断されている。

7) チャン・フー96 (96Trần Phú)



コンクリートの梁が用いられている。



小屋組みは和小屋に近い束を持つ。瓦は陰陽瓦が用いられていることが分かる。



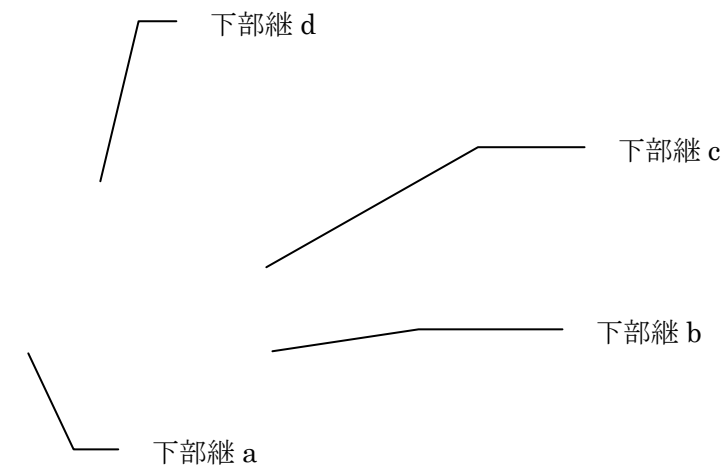
チャン・フー通りからの外観。前家の後にさらに棟が続くことが分かる。内部調査は前家のみ行えた。

8) バク・ダン 76 (76 Bạch đàn)

等級 1 の個人所有の家屋。2007 年、2008 年、2009 年に個人の資金で修理された。桁行 3 間で前家は平屋、付属屋が 2 階建の家屋である。中庭、橋家、後家はない。伝統的な様式であるのは前家のみであり、付属屋は 2 階建ての壁構造である。

現在は、前家がレストランとして使用されている。調理場は付属屋におかれている。道路から見た部分は屋根が陰陽瓦で葺かれており伝統の様式に倣ったものとなっている。前家は礎石に丸柱が建てられ、継木された様子が見える。柱表面から 20 本中 10 本が新しい柱であり、継ぎが施されているものは 3 本だった。

修理されたのは付属屋の部分である。図面によると前家は現状のまま、付属屋を計画すると記載されている。壁構造で小屋組は和小屋に近い。小屋梁を束で支える構造である。



1 階現状平面図

2 階現状平面図



陰陽瓦が葺かれ、木製の開口部や柱の伝統的な様式の意匠である。



a) 柱の下部に継ぎがある。壁面は薄い青か黄色、白が使われる。



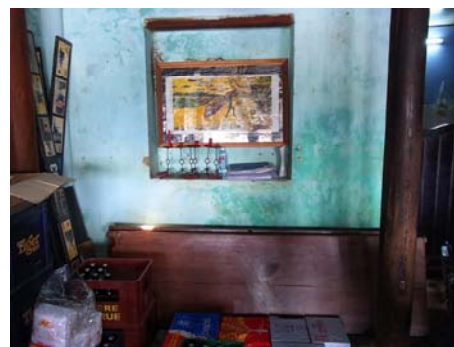
b) 柱下部の継ぎにはベトナムの伝統的な手法が用いられている。個人の資金で修理すると、この手法が選択されることが多いようだ。



c) 別の柱の継ぎも、ベトナムの伝統的な手法を用いている。



d) さらに別の柱の継ぎである。やはりベトナムの伝統的な手法を用いている。



前家奥の壁に作られた棚。壁の厚さで作られている。伝統的な様式ではないものが認められるが、生活の利便性との折衷案だろう



前家の小屋組みは天井が張られていないため見られる。和小屋に近い作りである。



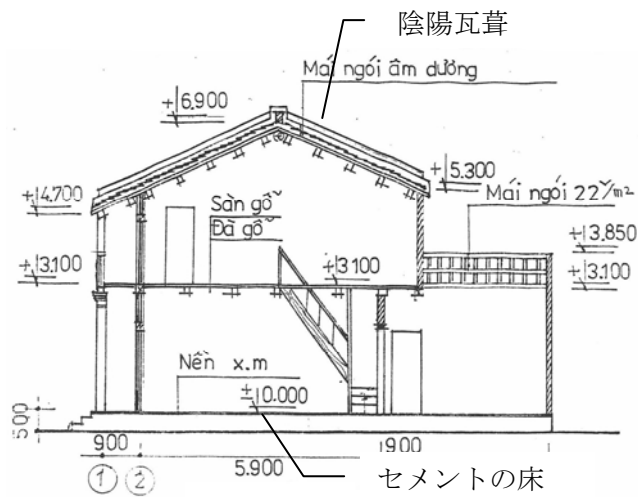
前家下屋部分の梁に施された彫刻は、古都ホイアンの家屋でも散見できるが、等級の高いものに特に凝ったものが見られる。



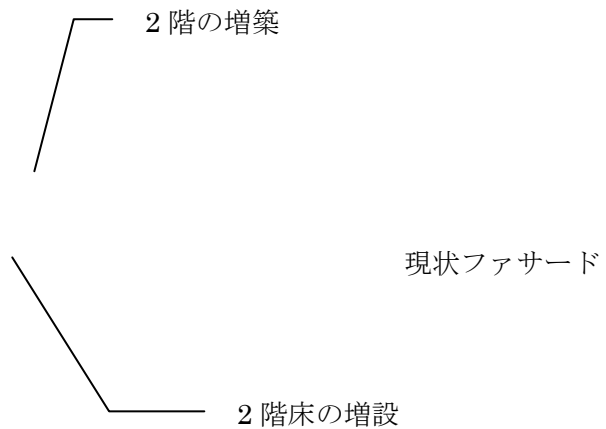
同様に前家下屋部分の梁。左側の比較的新しい材料にも、彫刻が施されており、修理時に復原したことが窺える。

9) ホアン・ヴァン・トゥ 17 (17Hoàng Văn Thụ)

個人所有の等級 1 の家屋。2001 年に個人の資金で修理された。




現状断面図



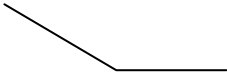
修理後断面図





セメントが  
敷かれた床


現状 1 階平面図



吹き抜けの設置

修理後 1 階平面図

現状 2 階平面図



2 階床の拡張

修理計画 2 階平面図



修理後は 1 階の壁はモルタル仕上げで開口部は木製の腰窓である。2 階はベランダが設けられている。1 階の底はトタンで伸ばされている。



修理前も 2 階建てだったが 1 階は全面が開口部で 2 階はモルタル壁だった。



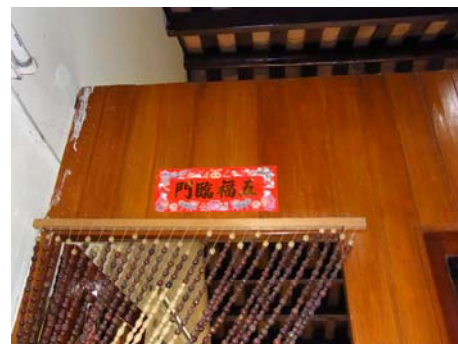
1 階天井。根太が張られており、伝統的な形式である。



1 階底。修理前から底は浅いが、西向きの開口部は底を伸ばさないと部屋の中にも日差しが入るためだろう。伝統的な形式は深い底だが、採用されていない。



床はコンクリートである。河に近いので増水時の対応ではないか。



2 階の壁は木材を使用している。天井は張らずに壁を設置して居室化或いはしきりとしている。壁を外せば元に戻せ、個室や常設の仕切りがほしいという現代的な生活の要望に応えている。

10) ホアン・ヴァン・トゥ 23 (23Hoàng Văn Thụ)

国所有の等級 1 の家屋。2000 年に省の予算で修理された。桁行 3 間、梁行 3 間だが、底部分を入れると 4 軒となる。後に付属屋として桁行 3 間、梁行 3 間 2 階建ての棟がある。柱は全て丸柱だが、1 階と 2 階で柱の位置が異なる。中央に柱が立照られ両側は煉瓦造モルタル塗りの壁である。一方、付属屋は壁構造となっている。

断面図

1 階平面図

2 階平面図

ファサード



修理前のファサードは 1 階が前面開口部であり、2 階はモルタル壁である。内部が伝統的な様式であると思われるが、修理後にはファサードに木材を使用し伝統的な様式を採用した。



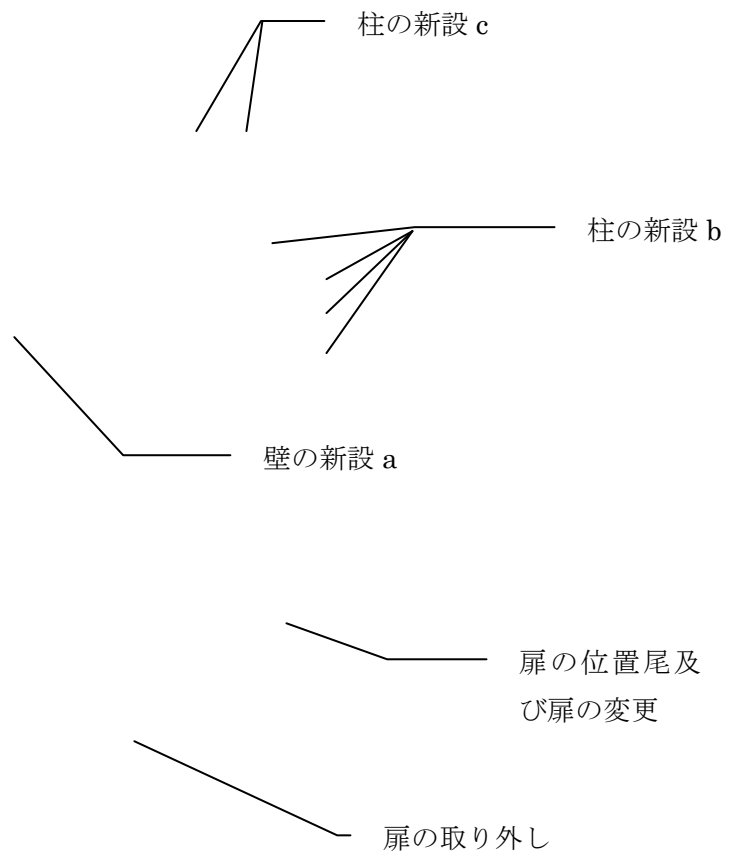
ファサード。1 階屋根部分にトタンで軒を伸ばし、簾を設置することで、日差しを防いでいる。南北方向の道路に面するために、西日があたるためだと思われる。

11) ホアン・ヴァン・トゥ 25 (25Hoàng Văn Thụ)

個人所有の等級 1 の家屋で 2006 年に個人の予算で修理された。前家ではなく付属屋が平屋から二階建てに変更された。その際に屋根の形式や天井などを見ると、現代的な作りとなっており、等級 1 の家屋で元々伝統的ではない部分は、復原するという選択をされない。台所や風呂、便所といった水回りであり、通常は採光と通風の機能がもたれる場であるため、2 階は一部ベランダのように作られ密集した地域での快適性を保つ機能は維持されている。個人所有の家屋と国所有の家屋では、同じ等級 1 で修理基準や方針が同じであっても実際には、伝統的な様式の復原や新しく作られる部分を伝統的な様式を用いるということは少ないようだ。要因としては、生活空間であるため人の目にも触れず、伝統的な様式にすることがお客の数を増やすといった効果もないため、所有者に直接の利益ももたらさないという点が考えられる。

断面図

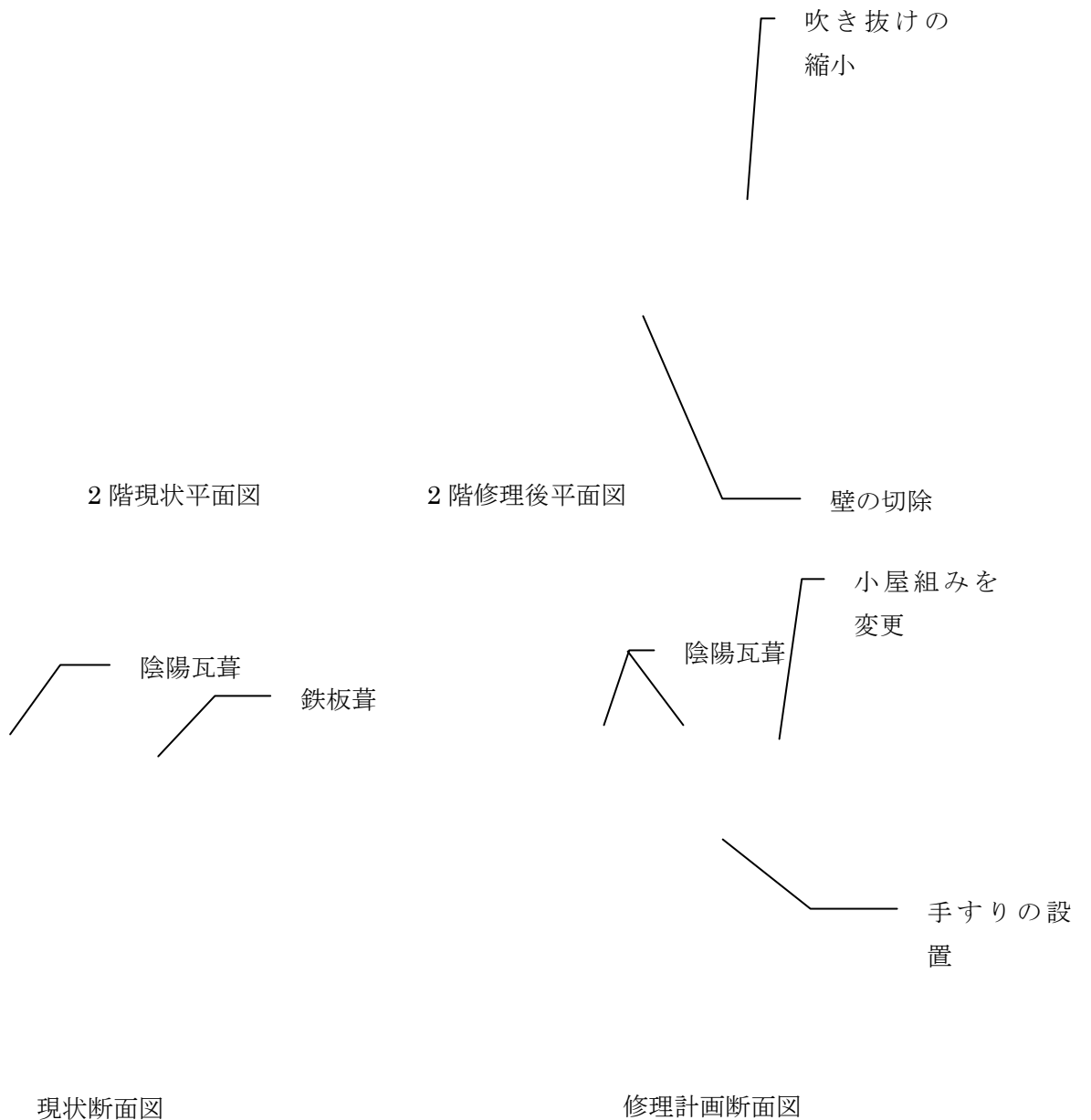
1 階平面図



2011 年 8 月調査 1 階平面図



2011 年 8 月調査時 2 階平面図



ファサード



正面は 1 階は伝統的な様式で 2 階の壁はモルタル仕上げで黄色く塗られている。



a) 新設された壁には商品が陳列されている。



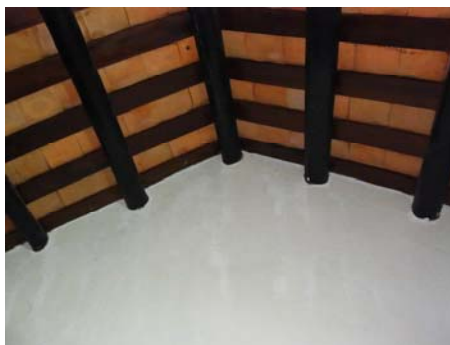
b) 2 階を設けるためだと思われる柱の増設が見られる。



c) 柱が増設され、表面にタイルが張られている。付属屋で元々伝統的な様式ではないためにこうしたものとなっている。



2 階は天井を張らず小屋組みが見えるようになっている。これも歴史の継承である。



両側は小屋組みがなく、壁構造である。等級1の場合は、壁構造と柱梁構造との折衷でも壁際に柱や小屋組みがあるが、この家屋は異なる。



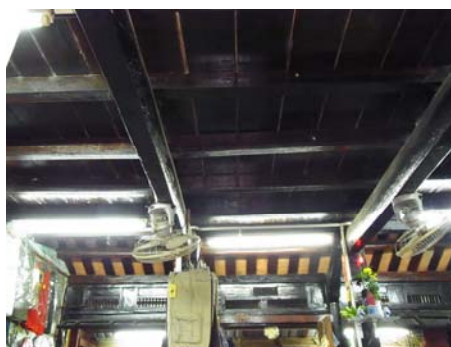
2 階の床は旧材と新材が混在している。材料の選択は旧材を使用にするという点と予算の問題があるように思える。



2 階床。階段のある後部と、前家の接続部分。前家の床の方が高い。コンクリートと木材の接続の一種。



1 階後部の天井。増設した 2 階床は伝統的な形式ではない。



1 階前家部分の天井。根太が張られており付属屋とは異なる。

12) レ・ロイ 57 (57 Lê Lợi)

個人所有の等級 1 の家屋。2003 年に個人の資金で修理された。

借家として貸し出されており、フランス語圏の経営者が服飾店を営んでいる。

(1)構造

敷地境界に設けられた壁の高さが 1993 年調査時と、2000 年以降では異なる。1999 年時点では、屋根が壁に掛けられていたが、2000 年移行には壁が屋根の最高部よりも高い。ただし、屋根はトタン葺かれている。その後修理計画では後部に 2 階が設けられ陰陽瓦が葺かれている。2 階増設に伴い壁の高さも高くなり、2 階には木製の床が設けられた。床はセメント製、2 階開口部は木製である。服飾店としては物置として使用されている。

(2)その他

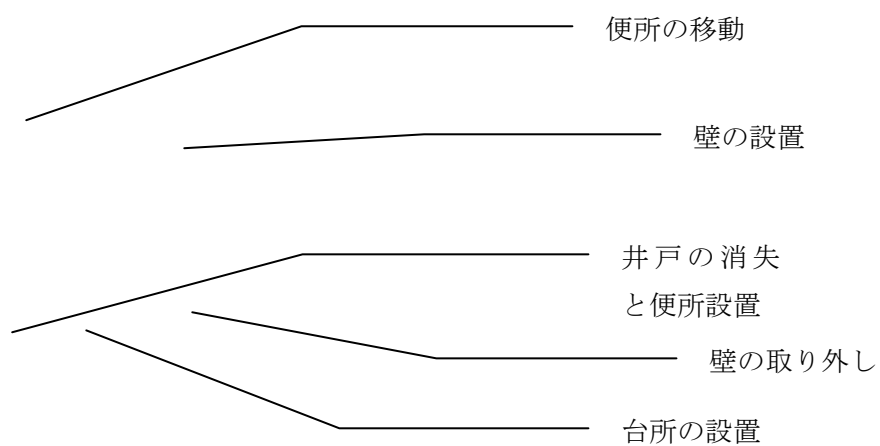
1993 年から 1999 年の間に壁面の増設、取り外し、移動が見られる。また、井戸が作られた。北側に開口部があったが、埋められた。また、板壁だった部分にモルタル壁となっている。便所の扉は外開きから内開きに変更された。南側には壁面の増設と居室が作られたことが分かる。開口部を見ると扉の形も変更されている。中央の観音開きの扉は同様の形式だと推測できるが、最南部及び最北部の扉は折戸から通常の板戸に変更された。その後、北側の壁面にあった開口部が亡くなった。最新の修理計画図では 2 階が設けられ階段が設置された。現在は壁が全て取り払われ、台所と便所もなく、一間として使用されている。奥は試着室として使用されている。

修理後は 2 階部分が増築されたためファサードにも変化が見られる。

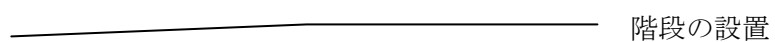
1993 年 3 月調査時平面図

1999 年平面図

現状平面図



修理計画平面図



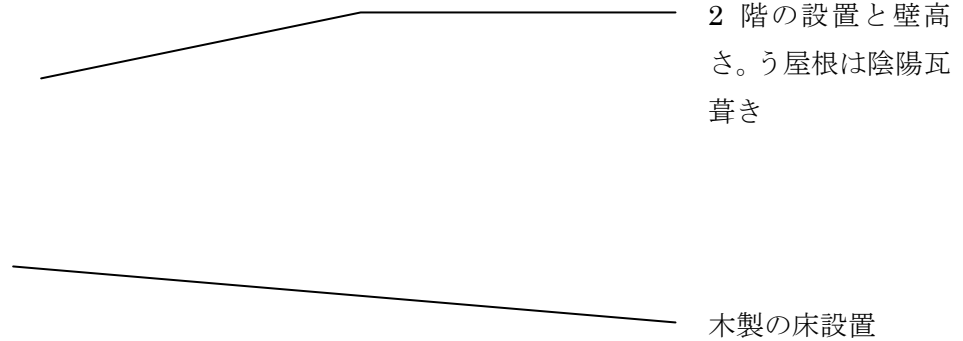
1993 年 3 月調査時断面図

現状断面図



壁高を高く

修理計画断面図



2 階の設置と壁高さ。う屋根は陰陽瓦葺き

木製の床設置



現状ファサード

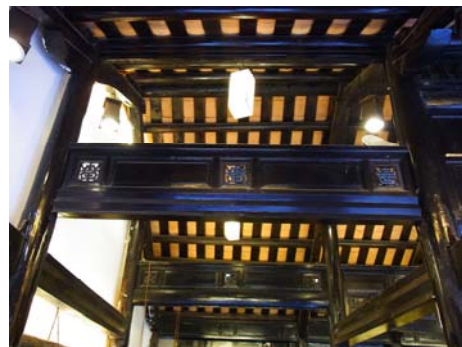
修理計画ファサード

2 階の設置  
に伴う屋根

開口部の統一



伝統的な形式の扉と屋根を持つ。等級  
1 の伝統的な形式をそのまま維持し、  
後部の棟を高くするという伝統的  
であるが使い勝手も考慮したもの。



内部に入ると天井が張られていない  
ため小屋組みが見える。これも伝統的  
な形式である。



屋根を壁でも支えているが、壁際にも小屋組みがある点が他の等級と異なる。



ベトナムの方法である小口を床と水平に切る方法で継がれている。



柱の下部が継がれている。地面と水平に切られているベトナムの方法である。



柱の下部が継がれている。ベトナムの伝統的な方法である。継の大きさは関係なくベトナムの手法が用いられている。



柱下部が継がれている。ベトナムの方法で継がれている。



前家後部の梁は、コンクリートと木材で接続されている。個人所有であり個人の資金で修理された点が、等級 1 でもこうした材料の使い方をすることとなったのだろう。



柱の下部が継がれている。やはり、ベトナムの伝統的な手法を用いられている。色が異なるため継だとはっきりわかる。

13) レ・ロイ 55 (55 Lê Lợi)

個人所有、等級 1 の家屋。2005 年に個人の資金で修理された。全面がレストランとして使用されている。

敷地は奥が南北に長い変形型である。

(1)構造

日本の大学の調査時の断面図を見ると、合掌造りである。大学の調査時と 1999 年を比較すると、柱の位置に変化はほぼ変化はないが、増減は見られる。前家部分では最北の列左から 2, 3 番目の柱が消失している。代わりに 4 番目の柱が増えている。構造上、柱からモルタル製の柱と同じ役割を果たす凸部が作られている。4 番目の位置は元々柱がない部分に設けられている。レストランとして使用されている現在は、2 階の位置は変わらない。

(2)庭

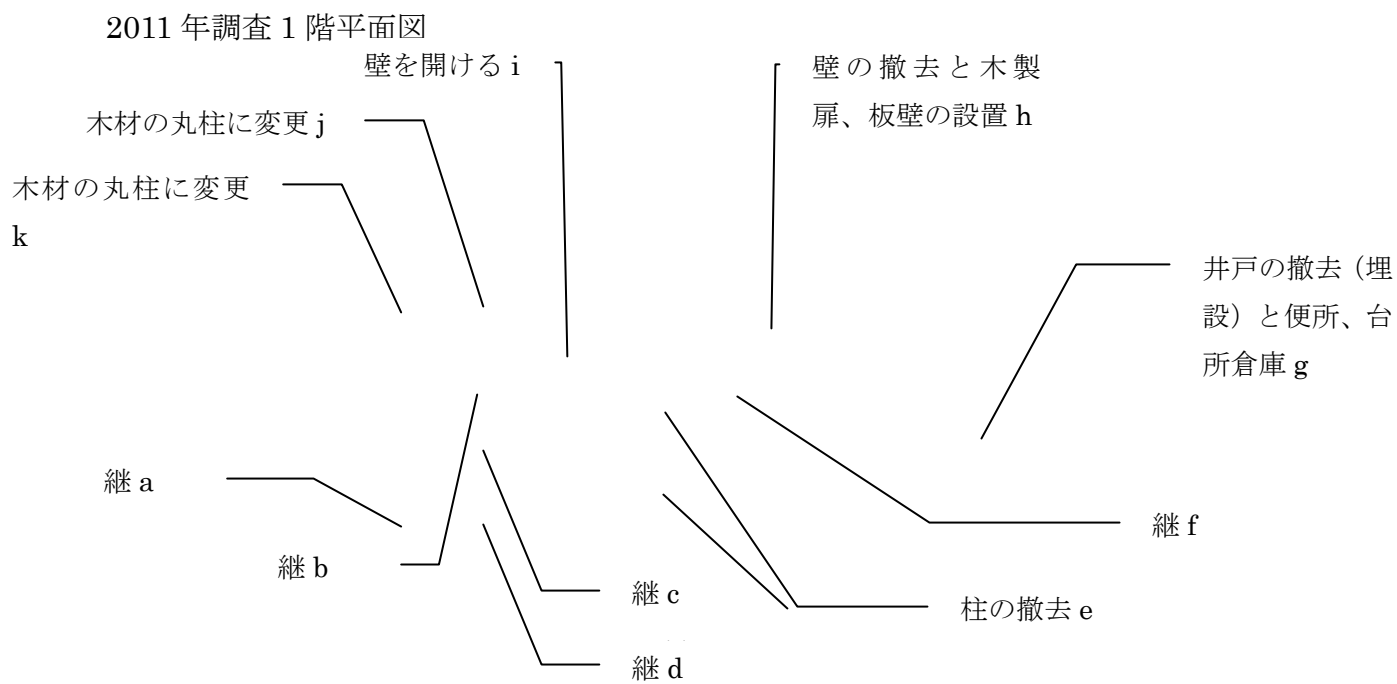
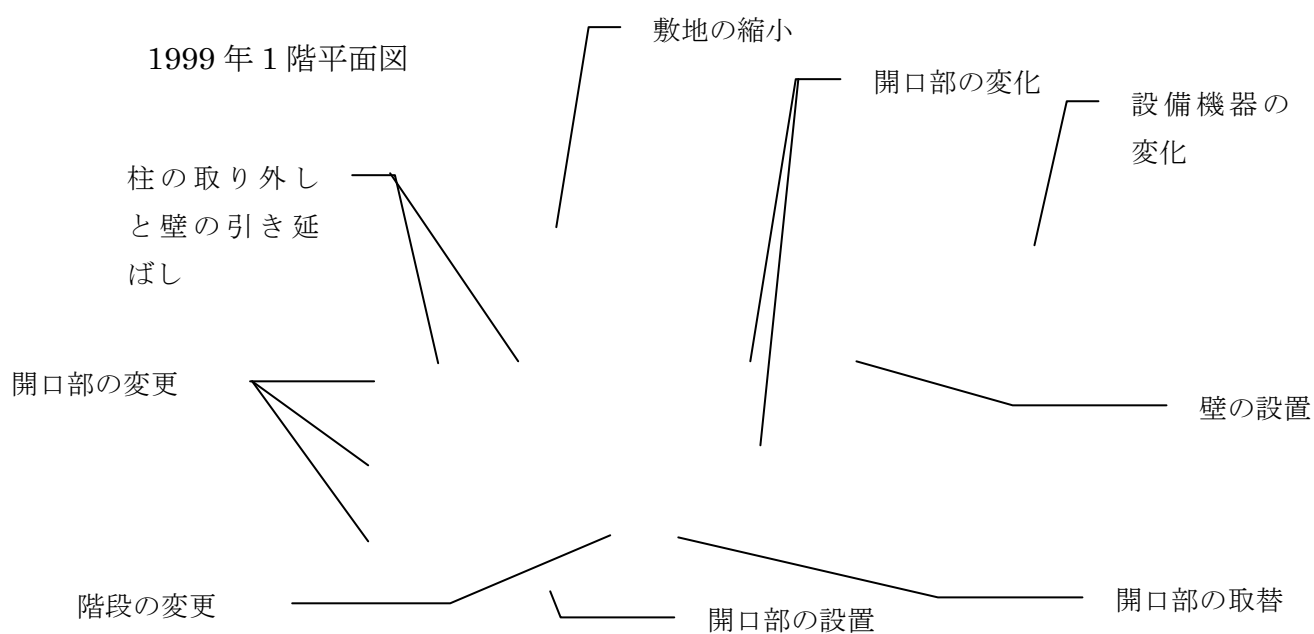
2010 年の調査時点で、庭は客席として使用されるようになった。後庭には井戸があったが、撤去或いは埋設され便所と調理場が設置されている。庭として採光や通風の機能はなくなり居室化されたが、他の家屋に見られる水回りの機能が設けられたとも解釈できる。

(2)その他

最も大きい変化は敷地が削られたことである。当初は北西部の長方形部分も含まれたが、1999 年時点では含まれていない。前家東側北部の開口部は消失している。倉庫部分に設けられた小部屋の開口部の位置は同じだが、北部は両開きから引き戸に変更されている。また、小部屋の北西部の柱が増設されている。便所の位置は変わらないが設備に変更が見られる。道路に面した開口部の柱間装置も変更されている。大学調査時点では両開きの扉が設置されているが、1999 年では折戸である。

現在はレストランとして使用されており、平面にかなり変更が見られる。最東部の庭は、台所と便所が設けられている。小部屋は壁が取り払われ客席として使用されている。庭は屋外の客席となっている。便所部分は物置に変更された。

調査時 1 階平面図



1999 年 2 階平面図

調査時断面図



陰陽瓦が葺かれ、木製の扉は伝統的な形式則り作られている。



a) 継。ベトナムの手法を用いている。



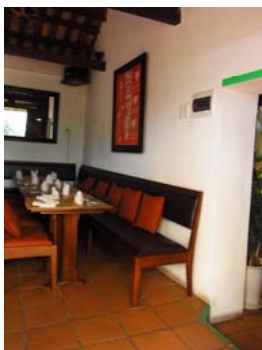
b) 柱の継はベトナムの手法を用いており旧材を多く遺す手法が用いられている箇所が少ない。



c) 継。材料を止める部分がベトナムの手法を用いていることがよくわかる。



d) 柱の継方はやはり材料を止める部分にベトナムの手法を用いている。



e) 壁際の柱が撤去されて煉瓦造モルタル仕上げの壁に変えられている。伝統的な形式では壁面は木製だが利便性向上のためだと思われる。





f) 継がやはりベトナムの手法を用いている。



g) 井戸があった後庭を便所に変更した。後庭であった後はどこにも残らない。



g) 便所への通路も図面がなければ後庭であったことは分らない。



g) 扉の内側。飲食店として使用するために改築を行ったと言える。前家のみが残る等級 1 でも他の等級と同様に修理が施されている。



g) さらに内側。便所の扉は引き戸。



h) 庭に面した部分は板壁と板製の開口部が作られている。図面を見ると開口部が増やされ飲食店としての使用を優先させたことが分かる。



h) 同様に、庭に面した開口部は木製である。床にはタイルが敷かれ、飲食店としての意匠を重視している。



h) 折戸は、伝統的な形式を保つことと、家屋の使用目的に合わせた利便性の向上で、元の形とは異なるが、伝統的なものに近い意匠を用いるという折衷案かと思われる。



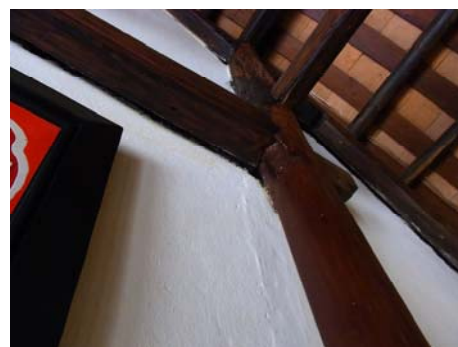
i) 壁に穴を開け、前家と橋家をつなぐ通路となっている。



i) 前家と橋家より後ろには床面の高さが異なる。河に対して平行な敷地で段差があるのは珍しい。



j) モルタル仕上げから木製の丸い柱に変更した箇所である。礎石も丸型を用いている。可能な範囲で伝統的な形式を復元している。



j) 同じ柱の上部。天井が張られず高さを保ち使用されているのは等級1の修理方針が守られているためだと言える。



k) 木製の柱が設置されている。壁構造と柱構造の折衷のため不要だが、伝統的な形式を保つためか、柱があることで空間が広く使えないという利便性は選ばなかった。



k) 同じ柱の上部には継が施され、旧材を残すという考え方が見られる。

14) レ・ロイ 94 (94 Lê Lợi)

等級 1 の個人所有の家屋。2006 年に個人の資金で修理された。

1 階は仕立て屋、2 階は居住空間として使われている。

(1) 構造

修理前後で柱の位置は変わらない。中央の柱南側のうち、通りから見て最後部の柱の横に支えが置かれた。2 階柱に梁が掛けられている。

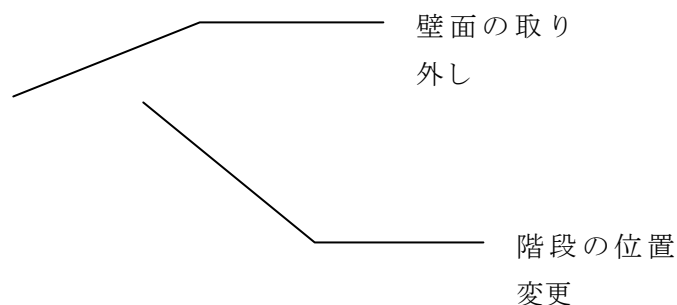
(2) その他

便所と風呂の位置は変わらないが、壁面の位置を移動させた。また、台所も北側に位置しているが、設備の変更が見られる。階段の位置が変更された。修理前は、中央に 3 本有る柱のうち、後部に置かれていたが、修理後は最後部の柱の手前に置かれている。

また、水回りと前部の間に観音開きの扉が設置されていたが、修理後は扉がなく通路となっている。前家の壁面は取り外された。

2 階も階段の位置が変更され、2 階に手すりが付けられた。また、壁面の移動と取り外しが見られる。後部の洗面所は中央の柱に壁が設けられ、狭くなった。寝室は、壁が取り外された。バルコニーに出る開口部 3 か所は、当初中央のみ観音開きだったが、修理後は 3 か所とも観音開きとなっている。開口部の変更に伴い柱が設置された。また、バルコニーのテラスも新しく柱が設置されている。壁面は修理前後共に同じである。床は木製である。水回り部分の屋根は架け替えられた。

修理前 1 階平面図

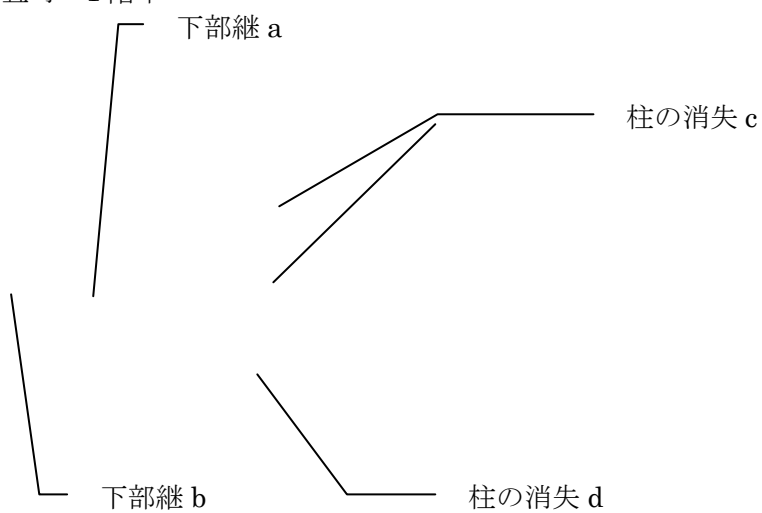


修理計画平面図 1 階

風呂、便所

台所

2011 年 8 月調査時 1 階平面図

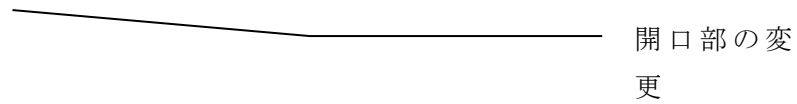


修理前 2 階平面図

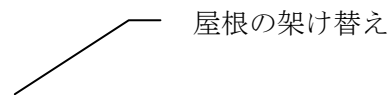
階段の位置  
変更

壁面の取り  
外し

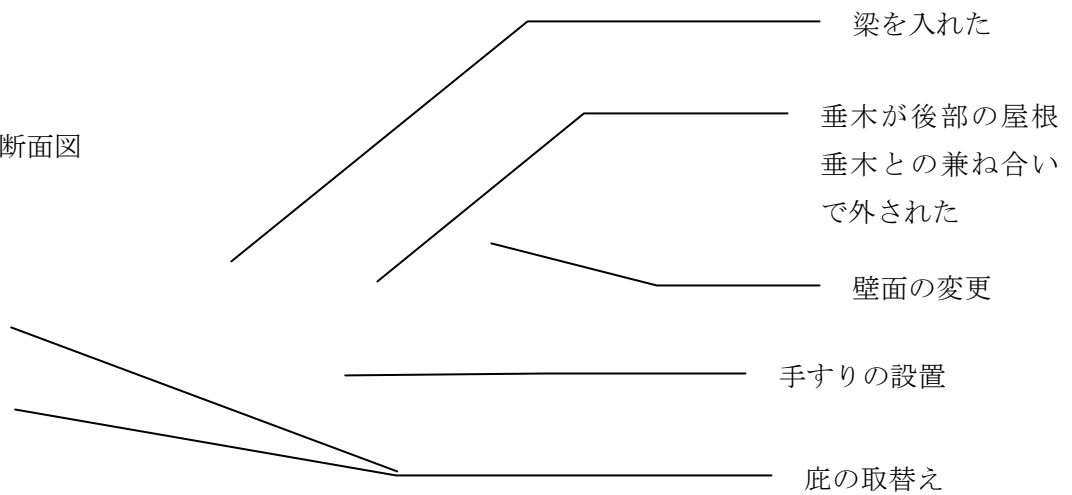
修理計画平面図 2 階



修理前断面図



修理計画断面図





正面は 2 階建てのベランダが設けられた木製の開口部を持つ。



a) 柱下部の継にはベトナムの伝統的な手法を用いられている。個人の資金で修理されているため、予算の問題が大きいのではないだろうか。



b) 別の柱下部の継もベトナムの伝統的な手法が用いられている。



c) 利便性の向上や構造上の問題などは見受けられないが、柱が外されている。



d) 同様に柱が外された場所である。こちらは店舗として使用するために利便性を優先させたと考えられる。



d) この柱の取り外しも利便性を向上させたと考えられる。個人で修理する場合は伝統的な様式に復原するより利便性を優先させる傾向がある。



15) グエン・タイ・ホック 60 (60 Nguyễn Thái Học)

1998 年にホイアン市の予算で修理された国所有の等級 1 の家屋である。

図面がないため、写真のみとなる。調査当時は画廊兼カフェとして全面が使用されていた。ファサードが六角形に突出しているところに特徴がある。それに合わせて入り口両側の開口部はガラス張りの窓である。床面は道路よりも高くなっている。

前家、橋家、後家で構成され、総 2 階である。橋家に設置された階段から上がれる。部材の補修は材料を多く遺すような継が見られ、日本人専門家の影響が見られる。橋家階段横の角柱は、下部に継がありこの家屋で珍しい。

1 階天井は根太が張られ、洪水時に荷物を 2 階に上げる枠が格子でふさがれている。全体的に材料の劣化は見られず、伝統的な形式を保ちつつもファサードの意匠や床には独自の使いやすさを求めたものである。



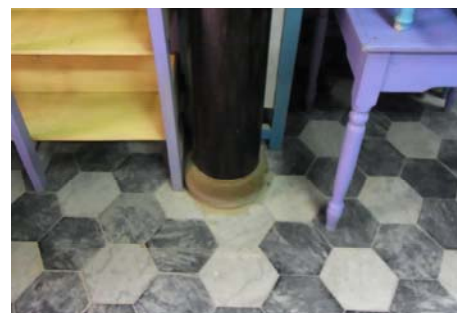
根太が張られた天井。2 階がある家屋の伝統的な形式の典型例である。



伝統的な家屋に見られる洪水時の荷揚げ用の枠。通常は格子でふさがれている。



道路に面した部分は他の家屋と比較して独特の形状をしている。伝統的な形式ではないが、この意匠が採用されているのは、所有者の意向だろうか。



六角形のタイルがはられた床。伝統的な形式は保つとあっても、室内の印象を左右する床は実用性の面からも手入れのしやすいものに変えられたのではないかな。



全体的に黒く艶のある塗料が使用されている。塗料は、日本人専門家が入る前は黒が使用されていたという。



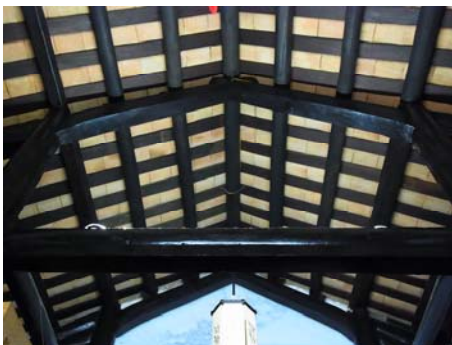
中庭が維持されている。全面が店舗として使用されているため、伝統的な形式を維持しやすい。



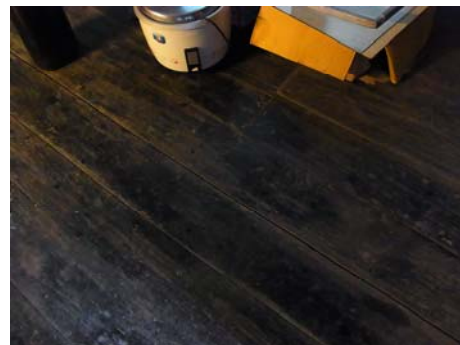
中庭に階段が設置されている。階段全てが木材で作られているのは、等級1だからだろう。



部材は、ほぞ穴などが多くみられ、点用材が多い。



小屋組は合掌造りである。天井は張られず、伝統的な形式である。



2階の床は板張りであり、やはり伝統的な形式を維持する修理基準がよくわかる。



1 階から 2 階への通り柱ではなく、2 階部分で継がれているものもある。壁際の柱は省略されている事例も散見できるが、この家屋は省略していない。



手すりが作られている 2 階から見た荷揚げ用の格子部分。お客が入るためにあえて、設置したと考えられる。お客のために塞ぐのではなく、お客の安全を考えながら維持している。



接続部が細くなっている小屋組みの束。この形は珍しい。

16) グエン・タイ・ホック 21 (21 Nguyễn Thái Học)

等級 1 の国所有の家屋。1999 年に省の資金で修理された。その後屋根瓦の腐朽や柱の劣化が報告されているが、現時点まで修理は行われていない。1999 年の修理は主に居住空間を拡大するために行われたと言える。

前家、橋家、後家から構成される。前家 1 階のうち前面は店舗として使用されている。東側が書を扱う店、西側は洋服屋、他は居住空間である。台所は中庭にあるコンロから 2 か所あるといえる。小屋組は前家、後家共に合掌造りとなるが、後家は柱の数が少なく建築年代が異なると得考えられる。ファサードは白い石灰層の上に黄色い塗料の層で塗装され、修理前後で区変わらない。修理費用は 45530 万ドン（約 22765 米ドル）である。調査時には 4 世帯が暮らしていた。

(1) 構造

構造に大きく変更が加えられた点は、前屋と橋屋が接する箇所に前屋 1 階にあった補助柱と頬杖が撤去されたことだている。これは前屋 2 階の軒の重量に 2 階床が耐えられず補助柱を 1 階に入れていたものと思われるが、建設当初のものではない構造のために傷んだ部分を修理した後、撤去したものと思われる。

修理計画では、後家の垂木と桁に 8 か所虫食いがあり（図 5(1)-1）、取替えが指示されている（図 5(2)-1）。ホイアンは高温多湿に加えて雨が多く、薄い瓦を雨水が浸透し（ての）屋根架構の木材腐朽、シロアリによる食害が見られる。本修理事物においても 2 階屋根架構の修理が行われている。なお木材部分には、白蟻の被害を防ぐワニスを塗布している。なお、シロアリ等の食害が見つかった場合、新しい木材に取り替えられ、蟻害防止のために薬剤ラッカーが塗られることが多い。

(2) 中庭の変更について

修理前の資料を見ると、中庭には杏の木、花が四かぶ、その西側にお茶を飲む座席があった。また壁には伝統的な装飾が施され、中庭の中央には石が置かれていた。修理前の詳細図面に中庭壁面や石等の塗料の色や材料も明記されている（図 5(3)-5）。中庭を東西方向に見た断面図によれば、中庭の床材は煉瓦造りで古くあるべきだとあるが、修理後は、中庭の床はコンクリートで仕上げられ厨房がおかれるなど、現代的な生活に沿う形に改修された（図 5(3)-4, (4)-6）。伝統的な生活では中庭は採光や通風に重要な機能を担い、その空間を楽しむような意匠が施され、家屋の中の文化的空間であった。おそらく複数の家族による共同使用のため、厨房等の生活機能が不足し中庭を機能的に改修したと思われるが、等級 1 の保存家屋として適切な保護の仕方であったかどうかは検討される必要があるだろう。

(3) 建具・意匠

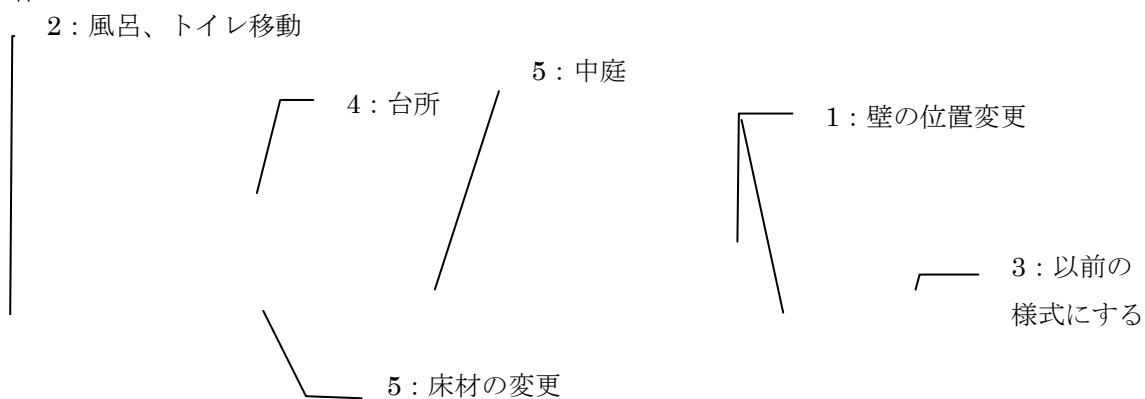
個室空間の拡大は、家屋の架構に影響を与えない建具の設置で行われている。前家 1 階の個室空間は中心の通路を狭め、個室空間を拡大させた。1 階天井には 2 階に 1 階の家具や荷物を上げ

るための開口部があるが、1階の壁を狭めたために開口部の間口よりも通路が狭くなってしまっている(図5(4)-2)。通路と居室空間を仕切る壁を、リニューアルした古い木製の壁と指定し(図4-4-7)、前家の西側の開口部は、伝統的様式のものに替える指定を行う(図5(3)-3)など等級1であるため修理後も建具の保存に努めたことが分かる。

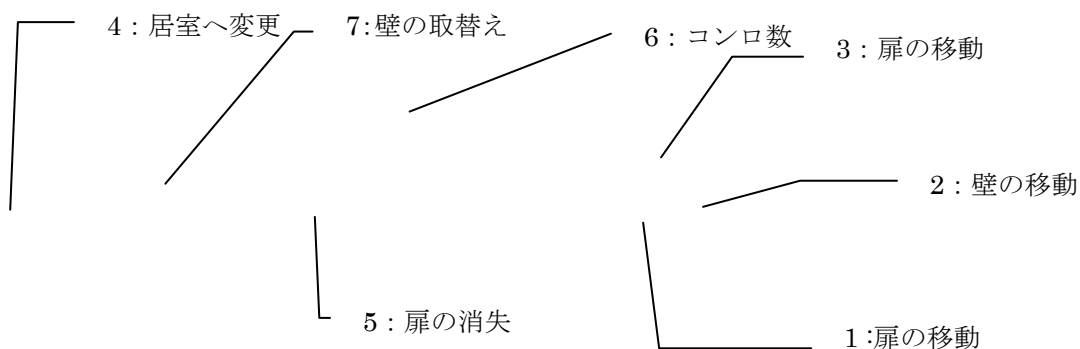
(3) その他

水害や湿度の高い気候により、瓦は腐食しやすく、前家、橋家、後家全ての棟で葺き替えが指示されている(図5(1)-4)。加えて前家2階の壁面塗装の剥落(図5(1)-5)、床材の劣化が指摘されている(図5(1)-6)。後家1階の床材の煉瓦も変更が望ましいとい書かれており(図5(3)-5)、調査時にはコンクリートであった。

修理前 1 階平面図

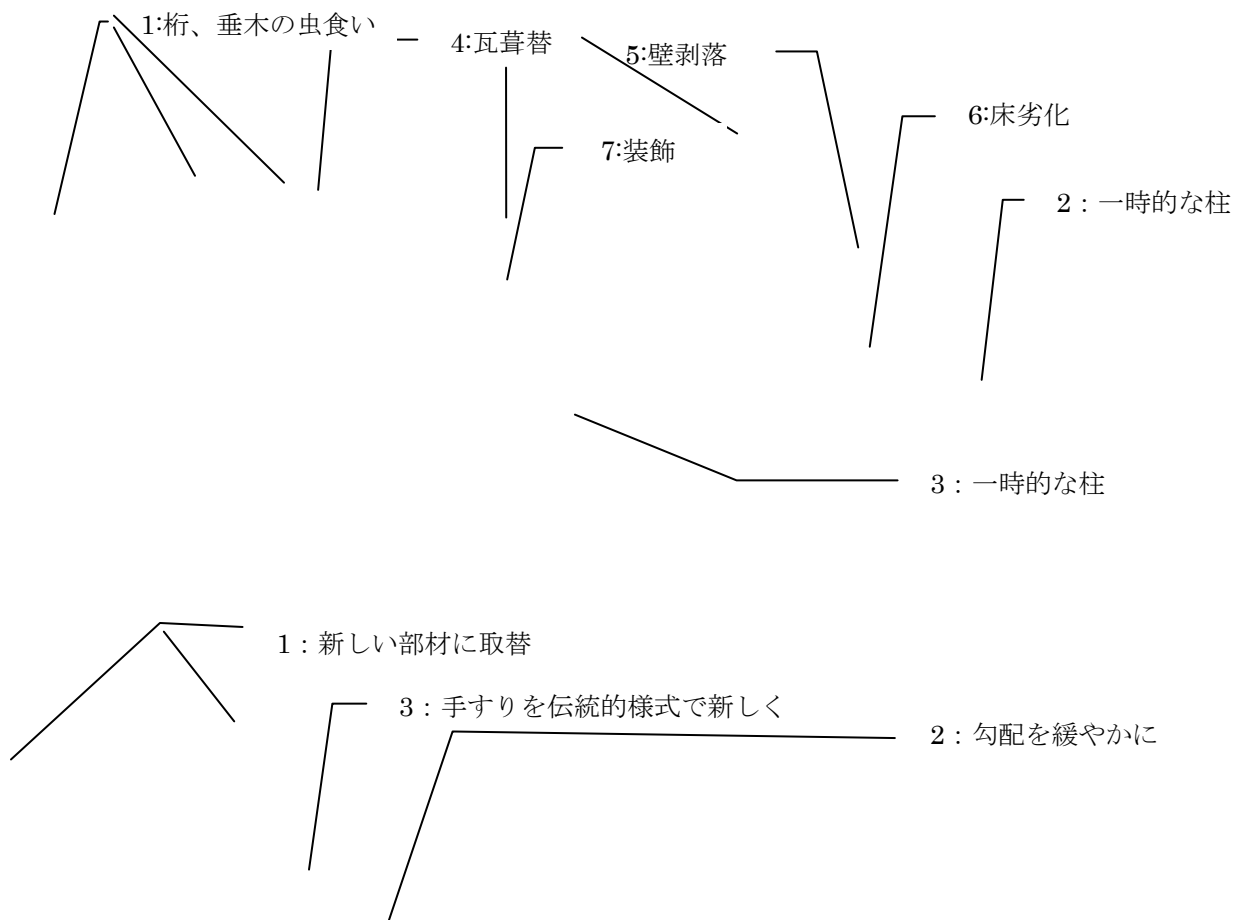


修理後 1 階平面図



修理前 2 階平面図

修理後 2 階平面図







ファサードは、壁面がモルタル仕上げで、開口部は1階に三か所あり木製。開口部は観音開きだが腰壁がついている点が歴史を継承している。



前家1階から見る2階部分。板の表面の色が異なり、修理されたことが分かる。



中庭の様子。水回りとして使われていることが分かる。水回りの壁はトタンや細かい材料を用いており、本体とは異なる。



2階部分は壁や細い柱が設置され個室が作られている。構造は変えずに、住まい方の変化に合わせている。



中庭には壁面の装飾と泉が残されている。中庭が接客や家族でくつろぐ空間として使われていた名残である。歴史の継承を行っている事例。



図面上から右手2階を支える柱が取り外されたところ。床に柱の跡は残っていないため、修理時に床も取替えられたことが分かる。





1 階店舗の後の居住部分。柱に沿って壁が設けられ、個室を設けている。個室にはそれぞれ別の世帯が居住している。



壁面の劣化の様子。黄色く仕上げた塗装がはげて白い面を見せている。



後家小屋組みは、壁面になく壁構造と柱構造の折衷である。



前家小屋組みは、後家小屋組みと異なる。

17) グエン・タイ・ホック 33 (33 Nguyễn Thái Học)

国所有、等級 1 の町家形式の家屋。ホイアン史跡管理事務所の管理下にあり、全面的に博物館として使用されている。1999 年に省の資金で修理された。

前家、橋家、後家で構成され、Bạch đàn (バク・ダン) 通りまで続いている。博物館の入り口は Nguyễn Thái Học (グエン・タイ・ホック) 通りにある。1986 年の計画図では 1 階の食堂や受付、2 階の便所と風呂のついた個室がいくつもあることからホテルとしての使用が計画されていたことが分かる。現在は博物館として使用されている。

(1)構造

86 年の計画当時と 1990 年代の調査時では柱の本数が異なる。特に、前家部分の柱が取り外された。これは、中庭を作るために取り外されたと言える。2011 年の調査では中庭はより明確に前家と橋家、後家に囲まれていることがわかる。伝統的な形式の構成である。

(2)中庭

2 か所に中庭が設置されていたが、1990 年代の調査時点では消失している。その後もないが、2010 年の調査時点では 2 か所に中庭ができている。そのうちバック・ダン通りに近い中庭は便所が設置されている。ホテルとして計画された当時の機能は、歴史的な中庭と同様で装飾の意味合いも持っていたが、博物館として使われている現在でも休憩場所としてお茶を提供するなど歴史的な意味合いを体験できるようになっている。ただし、便所の前でお茶を提供する形となっているため、若干改善の余地があるように見える。

(3)その他

壁は、柱の消失や居室の消失に伴い外されているものが多い。また、柱の間に板壁を設置したと見られるものから、両側のモルタル壁を伸ばしたものに変更されている。しかし、現在の平面図及び調査からはモルタル壁を伸ばした壁は取り払われたことがわかる。1986 年の修理計画及び 1990 年代の調査ではバック・ダン通り側の開口部もあるが、その後は消失している。博物館として使われている現在では、復活している。

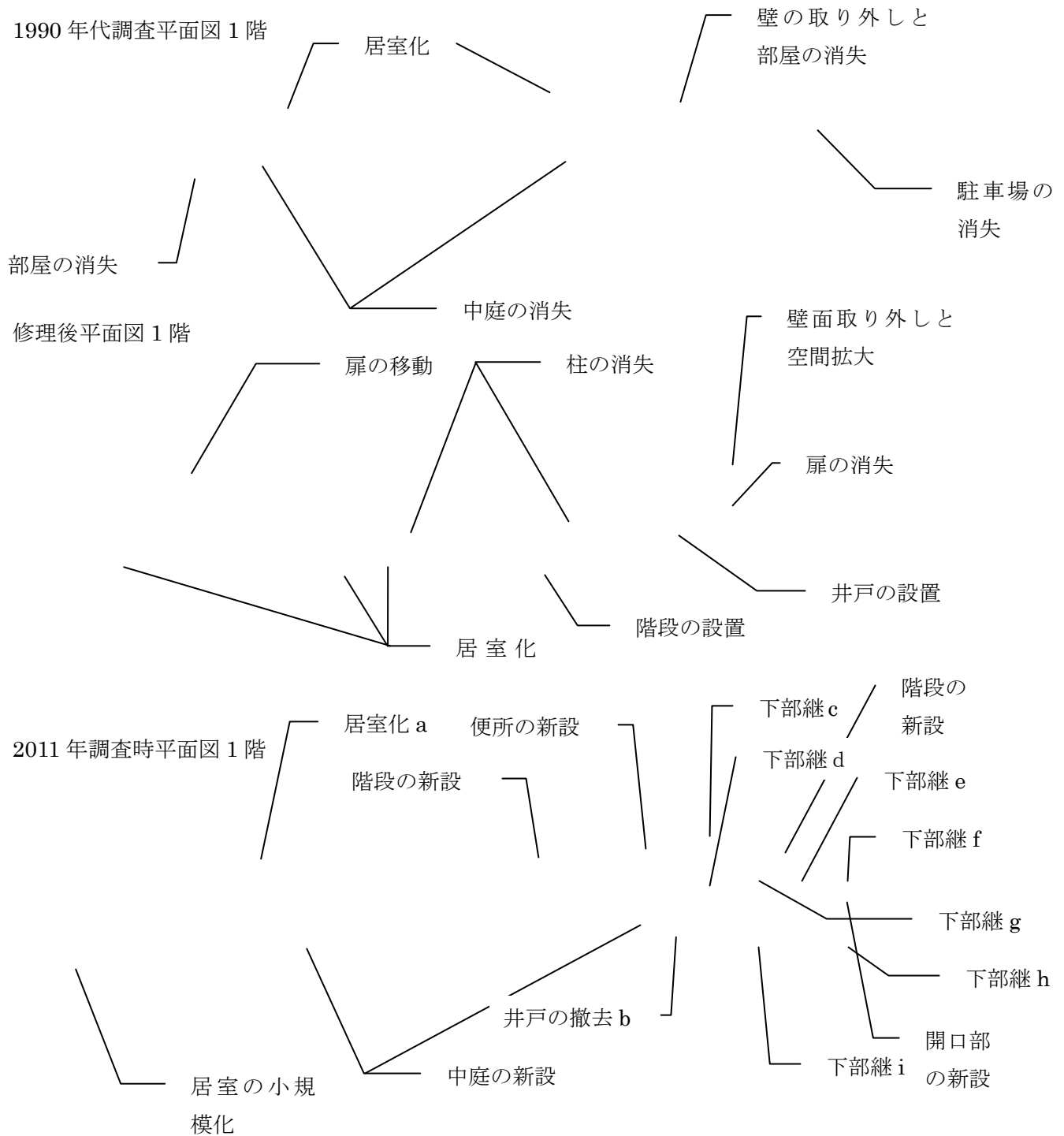
正面入り口は、道路から約 1.5 メートル奥まっていたが、1990 年の調査時点では入り口の位置を変えず、居室内に 1.5 メートル分が取りこまれている。

ホテルとして計画された 1986 年当時は駐車場が設けられていたが、その後駐車場はなくなった。

階段の位置も当初の中庭手前から、道路側に移動され、後家にも増設されている。現在は、位置は異なるものの、前家と後家一か所ずつ設置されている。

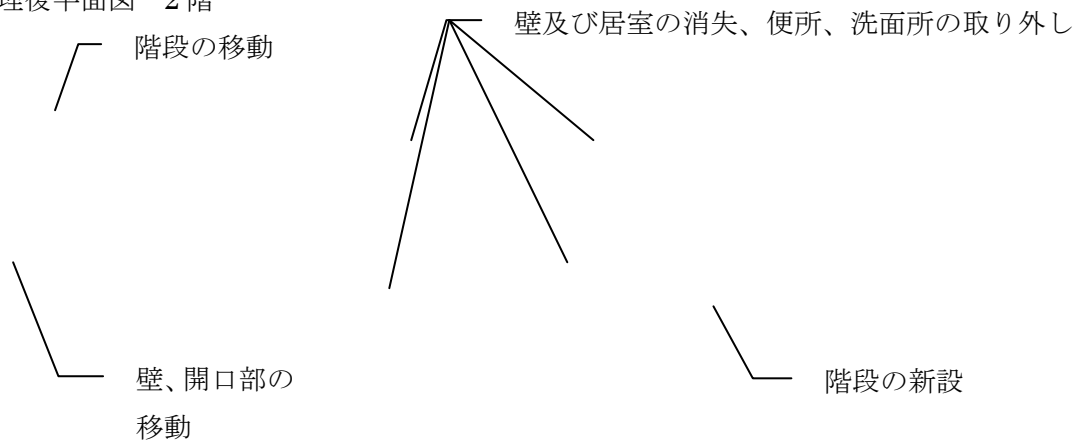
変更されていないものが、前家天井にある洪水時の荷揚げ用の空間である。1990 年第調査時の図面には描かれていないが他の図面には通して描かれており、中庭と同様に洪水対策の一環であるこの機能は、ホイアンの家屋に欠かせないものであるといえる。

修理前平面図 1 階

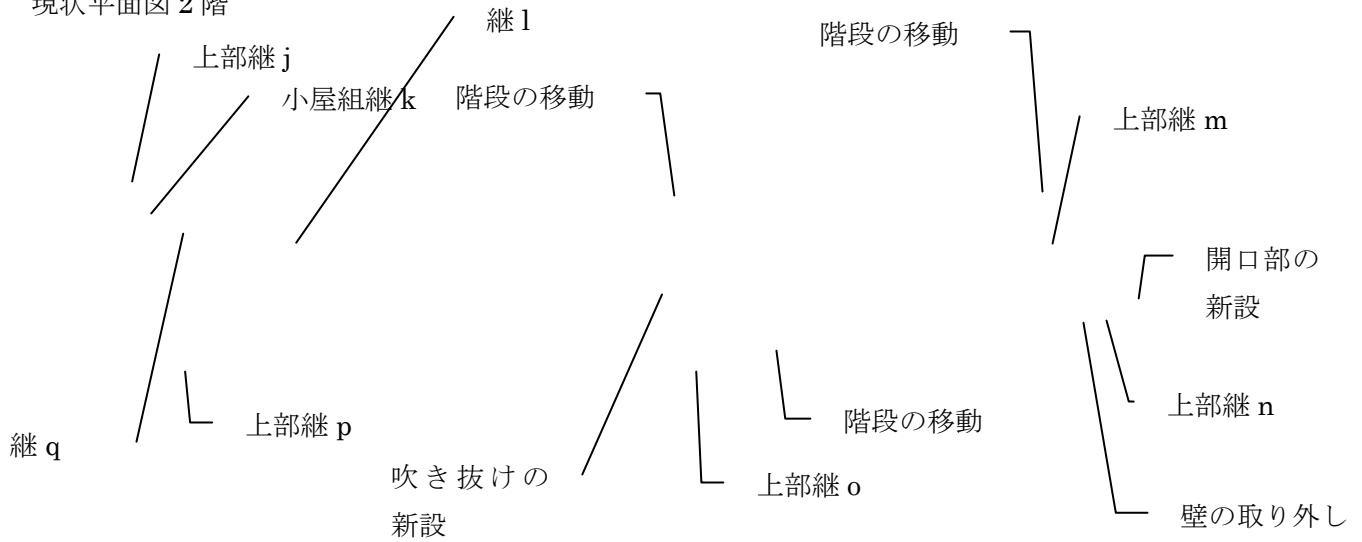


修理前平面図 2 階 1986 年

修理後平面図 2 階



現状平面図 2 階



修理前断面図



正面の開口部はいずれも伝統的な形式ではないが、この型式は散見できる。



a) 壁が設置されて居室化が図られている。伝統的な形式を意識したもののだろう。



b) 井戸の撤去。地面は磚敷きのため、井戸の跡をみることはできない。



c) 中段に継の見られる柱がある。外に接する面は腐朽しやすいが旧材を多く遺す方針が取られていることがわかる。



d) 下部に継跡が見られる柱である。



e) 下部に継のある柱が左手に見える。



f) 下部継。開口部は両側に継同じ高さである。バク・ダン通りに面している棟で河に近いので、浸水の影響と思われる。



f) 室内側から見た様子。同様に旧材を多く遺す手法だと言える。



g) 下部継



h) 下部継。反対側の柱の継と同じ高さである。やはり浸水の影響があると思われる。





h) 室内側から見た様子。後側は継の低さのため、旧材を多く遺す手法だといえる。



後家のバック・ダン通り側から見た開口部。両側の柱の継が同じ高さであることが分かる。



j) 柱上部継。梁端部に施された彫刻は周囲の同様の家屋の意匠を参考にしている。伝統的な形式を保存或いは復元する方針が窺える。



k) 2階前家の小屋組み、手前から3本目に継ぎ目がある。国所有の家屋に省の予算で修理されたため、細かな配慮が見て取れる。



k) 同じ柱を別の角度から見ると、東側の継方が大きく、西側が小さい。



l) 同じ柱を別の角度から見ると、腐朽した部分のみを取り替えていることが分かる。





l) 柱の一部のみ修理されている。通り柱を旧材を残しながら使用していることがわかる。



l) 異なる方向から見ると、材料が鍵型に継がれていることが分かる。旧材を多く遺す手法だとわかる。



m) 柱上部に継がある



n) 柱上部継。柱頭部と垂木が組み合わせられるように調整されている。



o) 柱 2 階床部分に継。通り柱ではないからだとも思われるが、この場合は修理だと判断した。



p) 柱中段に溝がある。図面からは壁や扉の設置が有ったことは読み取れないので、材料が転用材なのだろうか。



q) 2階の荷揚げ用の枠を囲む柱である。旧材を多く遺す継方をしている。



前家の荷揚げ用の吹き抜けには装飾が施されている。通常は格子が嵌められていることが多いが見学者用のためだと思われる。



バク・ダン通り(đường Bạch đàn)と後家の間の橋家の小屋組み。合掌造りである。



後家小屋組み。合掌造りでありグエン・タイ・ホック通り側の後家と同様であることから同じ時期に建てられたのではないかな。

18) グエン・タイ・ホック 46 (46Nguyễn Thái Học)

国所有等級 1 の家屋。1999 年に省の予算で修理された。ホイアン史跡管理事務所の管理下にあり、画廊として使われている。

以前は共用住宅として使用されていたことが修理後の平面図に風呂が 3 箇所増築されていることから窺える。現在は、風呂は撤去されている。二つ目の中庭部分から地表面が高くなっている。

大学調査時平面図 1 階

調査時平面図 2 階

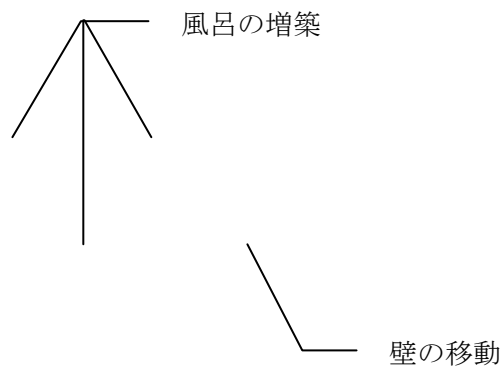
現状平面図 2 階

現状 2 階平面図

居室化 —————

修理前 1 階平面図

修理後 1 階平面図



ファサード



壁面、開口部共に木製である。1 階左右の開口部は腰壁があり、歴史を継承している。



前家庇の柱のうち、最東側の修理。材料を多く遺すように継がれている



同じく前家庇の柱の修理。表面部分だけが新しい材料になっていることが分かる。裏側も下部が同様に修理されている。



同じく前家庇の柱の修理。継が見られる。ベトナムの伝統的な継方で一部ではなく、下部が切断されている。



最南部の庇の柱。水害が多いため傷みやすい下部が継がれている。



荷揚げ用の穴が格子でふさがれている。歴史的なものであると同時に、実利的である。



同じく荷揚げ用に穴があいている。これは二階部分に手すりを付け、常時開いている。

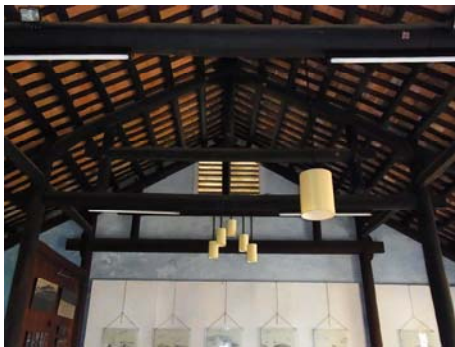




前家桁材。材料の一部のみを修理していることがわかる。



前家のうち、中庭に面した開口部の柱。下部に継が見られる。



合掌造りの小屋組み



風食が異なる壁面と柱。修理が施されていることが分かる。修理後も木材を使用し伝統的な形式を用いていることが分かる。



隣家との間の通路に扉が設けられている。屋根の瓦や扉の材料など伝統的な素材を用いていることが分かる。

19) グエン・タイ・ホック 92 (92 Nguyễn Thái Học)

等級 1 の国所有の家屋。1999 年に省の予算で修理した。

前家、橋家、後家で構成される。前家は 2 階建て。前家は店舗として使用されており、東側は土産物、西側は旅行代理店として使用されている。残りの部分は居住空間である。

(1) 構造

基本的に変更はない。前家 2 階東側の柱が一部欠けているが、全体的な空間構成に影響はなく、伝統的な形式を保つものとなっている。

(2) 中庭

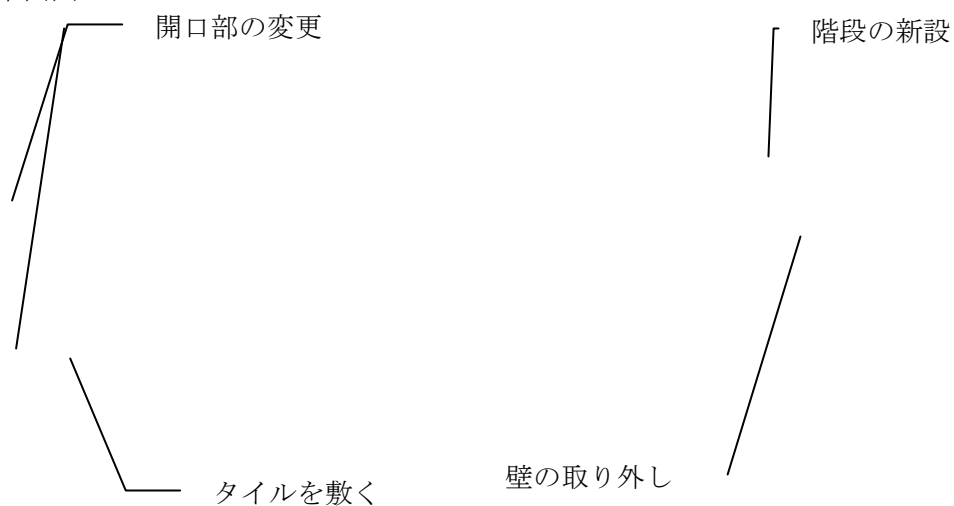
修理前後も変わらずに中庭があり、植栽等が維持されている。

(3) その他

後家の西側に階段が新設された。また、便所の開口部が内開きから外開きに変更されている。後家は壁が取り外されて居室が消失した。正面開口部の扉が折戸から中央を観音開きにし、両脇を蔀戸にして伝統的な形式を復元している。等級 1 の家屋は伝統的な形式を維持すると共に、伝統的な形式を復元している。2 階の変更はない。

修理前 1 階平面図

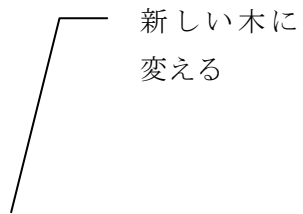
修理後 1 階平面図





修理前 2 階平面図

修理後 2 階平面図



断面図





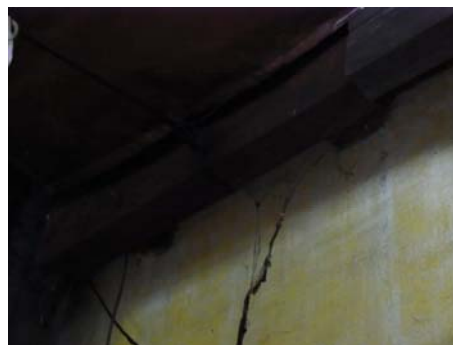
壁面や開口部は木材で作られ、修理後に伝統的な形式に変えたことが分かる。



西側から見ると切妻形式の屋根で妻はモルタル仕上げの壁で覆われていることが分かる。



下部に鍵型の継をしている。階段を設置する場合も階段にかからないよう配慮されていることが窺える。この家屋の中では数が少ない継方である。



梁が一部だけ材料が取り替えられている。構造材も旧材を多く遺すようする修理方針が窺える。



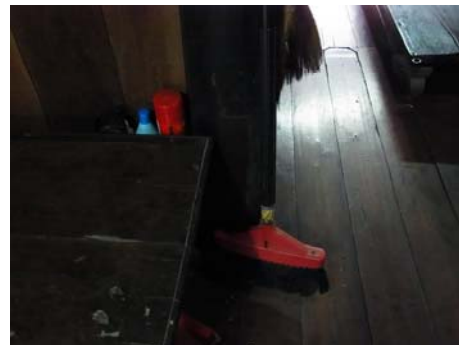
下部が取り替えられている。地面と平行に柱が切断されており、ベトナムの伝統的な手法を用いている。



同様に柱下部が新しい材料となっている。地面と平行に材料が切断されており、旧材を残すよう心がけているとはいえ、鍵型ではない手法が多く全体の費用を抑えたのではないかな。



小屋組み。合掌造りである。壁構造と柱構造の折衷であることが分かる。

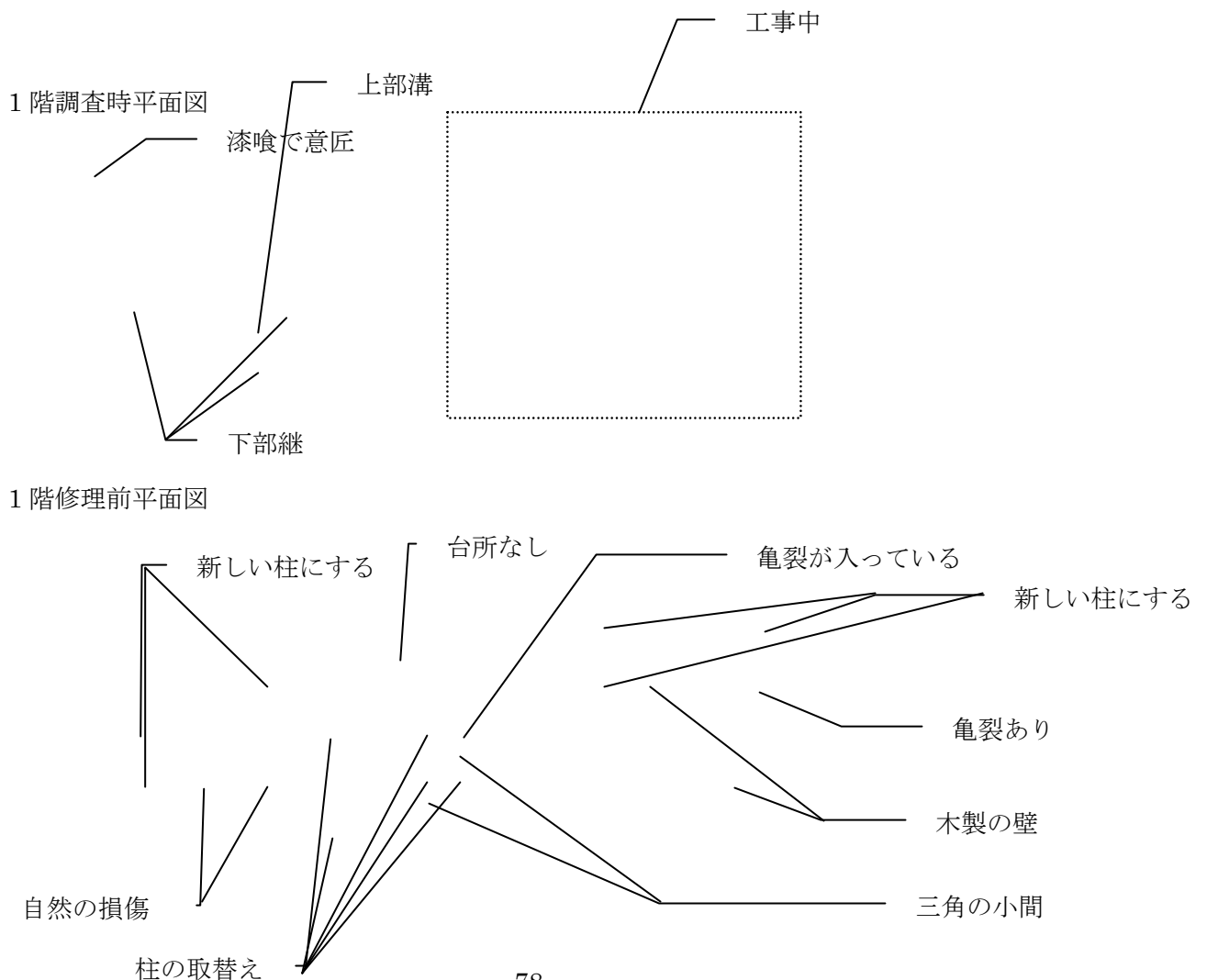


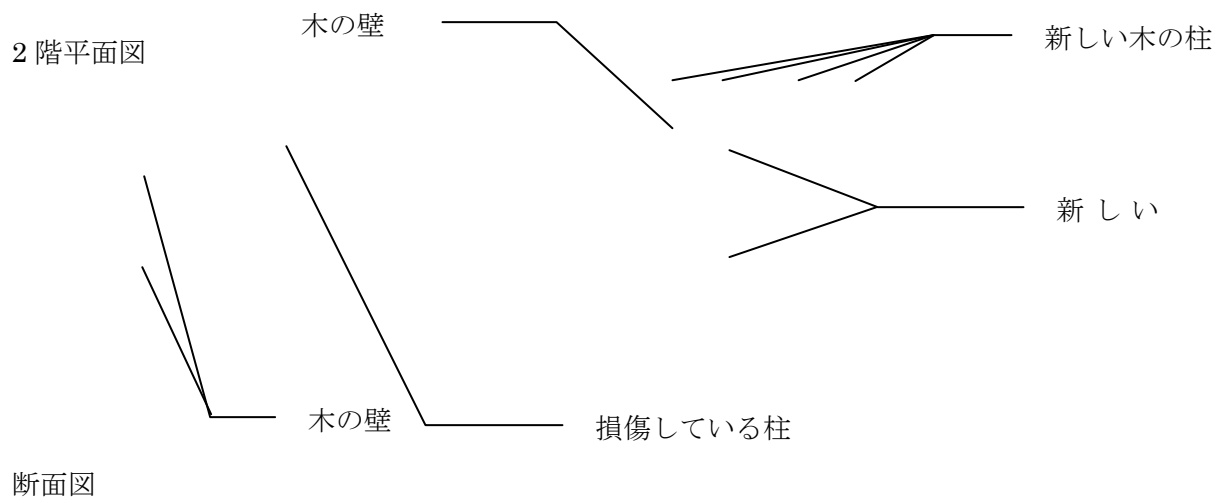
2階柱の下部に継がある。床面と並行に材料が切断されている。床も板材が見られ、修理後の室内も伝統的な形式を保持し、等級1の修理方針に従っている。

## 20) グエン・タイ・ホック 115 (115 Nguyễn Thái Học)

個人所有の等級 1 の家屋である。2000 年は JICA に、2001 年にはホイアン市の予算で修理された。当時の状況を報告書から引用すると「礎石の不同沈下および、煉瓦壁の傾斜等の構造的なゆがみに加え、蟻害や水腐れに依る木部の損傷や瓦の劣化がみられ、緊急に修理が必要な状態であった。修理に際しては、沈下していた礎盤・盤石を据え直すとともに、傾斜の著しかった東妻の煉瓦壁については、足元から 2 階床までを鉄筋コンクリート壁に依って補強をおこなった。柱・梁等の構造材のうち蟻害が大きなものは新材に取り替え、明らかに後世に形式を違えて取り替えられた斜め梁については新材で当初の形式に復原した。」

グエン・タイ・ホック通り (Nguyễn Thái Học) 側は 4 間弱、バック・ダン通り側は東側に少し広く 4 間ある。調査時は工事中だった。グエン・タイ・ホック通り (Nguyễn Thái Học) 側は丸柱が建てられているのは 3 間で、東側は壁で支えられており、店舗として使用されている。現状の平面は、1998 年竣工時と変わらない。柱や部材の継を見ると全体的に細やかに施されている。





左側にはモルタル壁があり内部は台所である。調査報告書の通り、この幅に合わせて建てたのではなく、移築されたことを示す。



前家付属屋小屋組みの束と梁は、材料の表面から修理後も伝統的な形式が保たれたのだと思われる。



付属屋と前家の間の柱。材料を多く遺すような継方をしていることが分かる。



屋根材が継がれていることが分かる。瓦も新しいため葺きかえられていることがわかる。雨が多いため、屋根は傷みやすい。



21) グエン・タイ・ホック 132 (132Nguyễn Thái Học)

2001 年にホイアン市とクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 1、国所有の家屋である。1 階前家は店舗として使用されている。



バク・ダン通りに面している。壁面はモルタル仕上げで開口部が木製。差湯の開口部は腰壁があるが、歴史的な建造物よりも高い。



前家 1 階から見る中 2 階の柱や手すり。いずれも旧材と新材を組み合わせ、旧材を多く遺すよう心がけていることがわかる。



小屋組みを見ると壁が上まで作られていることが分かる。構造は伝統的な形式を保つが壁は居住者の要望に応じていることが窺える。



前家付属屋と庭。庭は棟が増築されているものの、庭とし使われている。密集した市街地で庭が換気や採光を保つ重要な機能を持つものであることがわかる。

22) グエン・タイ・ホック 52 (52Nguyễn Thái Học)

等級 1、国所有の家屋。2002 年に個人の費用で修理された。

木彫りの置物を作り販売している。2 階は物置兼居住空間である。後庭は私的な空間であり居住空間として使用されている。前家、橋家、後家の構造ではなく。前家と付属屋があり、庭を有し、庭に水回りや倉庫が置かれている。前家、付属屋共に合掌造りの 2 階建ての家屋である。大きな変化は 1 階前家の壁が取り払われ空間を大きく使うようになったことと、後庭の便所や風呂、倉庫の設置である。他に全面的開口部の形式が変更されたことも指摘できる。基本的には構造材の腐朽や劣化に依る取替えが多く、それ以外の指示は出されていない。

(1) 構造

前家の後部分の梁と桁、柱が取替えと修理が施されている。前面の庇を支える柱も取替えられている。中央の柱と桁も修理が施されている。前家と付属屋の間の軒桁と桁が全て腐食したために取替えた。付属屋後庭側の桁や小屋梁、束も取替えが指示されている。2 階の柱は 3 本が取替えの指示を出されている。

2 回目の図面では、2 階の中央の柱も 5 本取替えの指示が出されている。

(2) 後庭

後庭にあった井戸などは消失している。3 枚目の平面図では、後庭にトイレと風呂、台所、倉庫が設置された。現在は、位置が変更されたが風呂、トイレ、倉庫が設置され住民の要求に応えた形である。

(3) その他

付属屋後庭側の扉は腐食しているため取替えが指示されている。前家庇は取り外された。

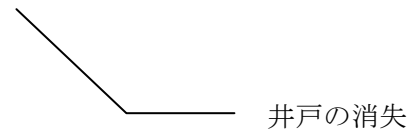
2 階は開口部の消失や、開口部の形式の変更が見られる。修理前は外開きの観音開きであった。調査当初は井戸などが見られたが、修理後には消えている。木製の階段は煉瓦造りの階段となった。また、ファサードの開口部の木材及び扉は変更された。2 階の床には洪水時に使用する荷揚げ用の蓋が置かれ、維持されている。ベランダの庇を支える部材も全体が傷んでいると書かれ、取替えが指示されている。後庭側の壁には亀裂が入っていた。

その後、前家では全面開口部の形式が変更されている。中央は 4 枚の板戸が設置され、両側は蔀戸と見られる。さらに、その扉や蔀戸は取替えが指示されている。木製の階段は取替えが指示され、床もタイル張りにすることが指示されている。1 階前家の中央部に設置されていた壁は取り払われ、一つの空間として使用され、現在まで続いている。開口部が減少したが、現在は開口部が復活している。

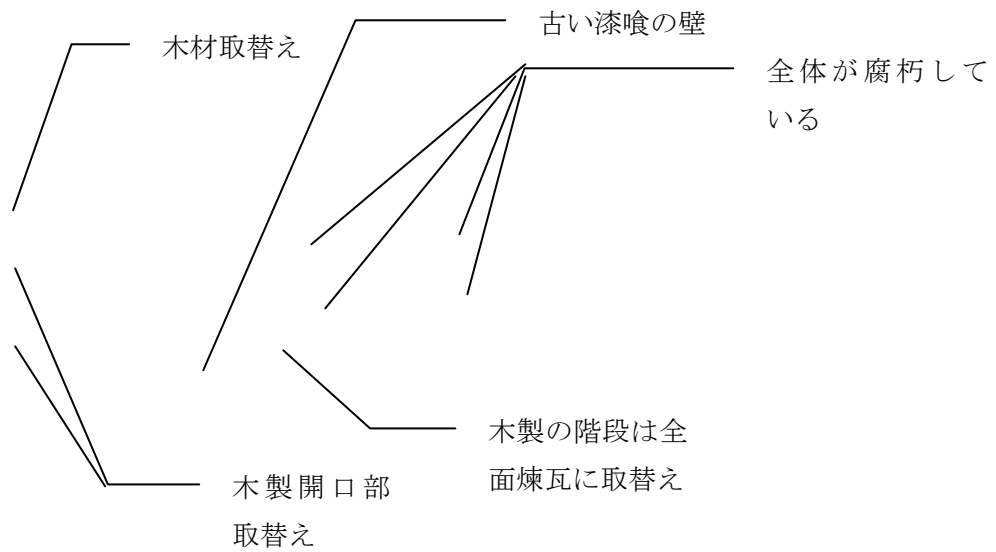
2 階は、荷揚げ用の床の蓋は維持されている。全面開口部は形式が変更され、中央は 4 枚の戸が設置され、左右は観音開きの扉である。両側の観音開きの扉は取替えが指示されている。木製の階段及び欄干は取り替えが指示されている。床も 70% の取替えが出されている。

る。開口部も増加した。屋根の指示は見られないが、屋根ぶせ図では陰陽瓦が使用されている。

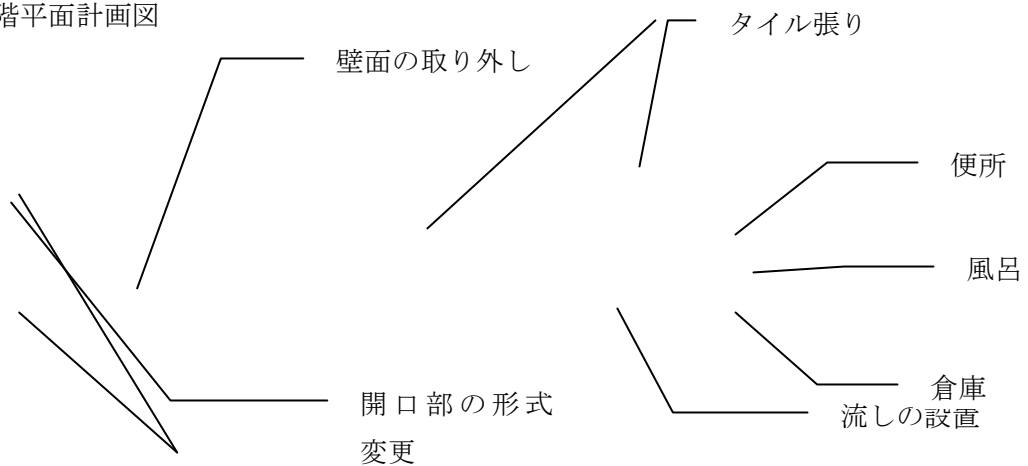
調査時 1 階平面図



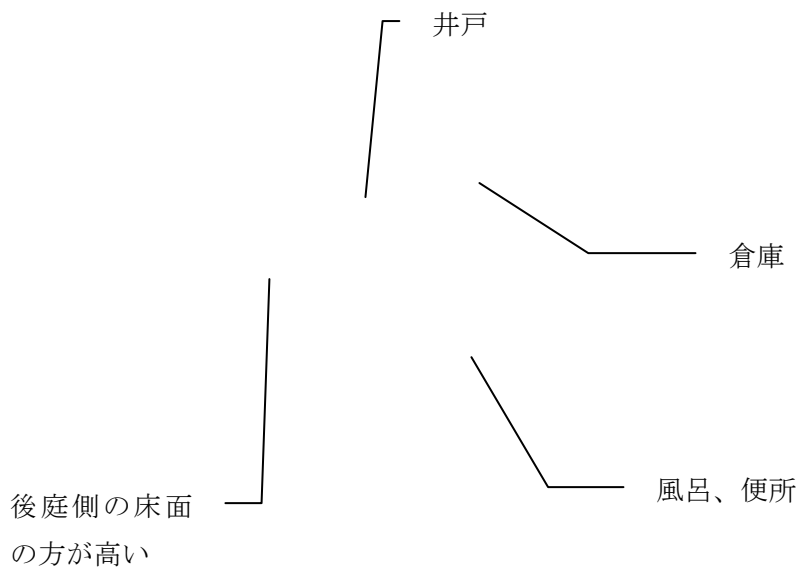
修理前 1 階平面現状図



修理後 1 階平面計画図

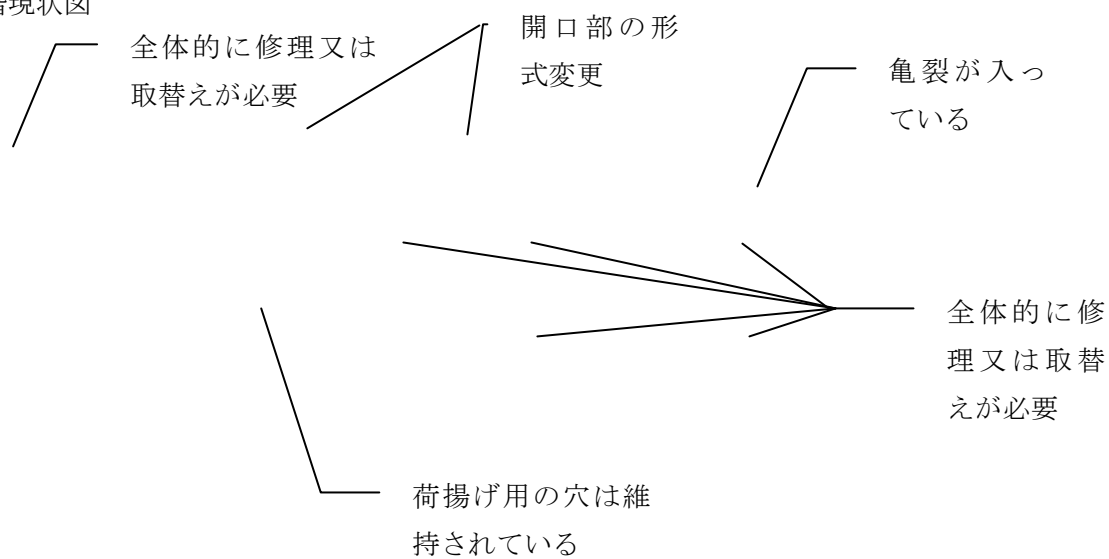


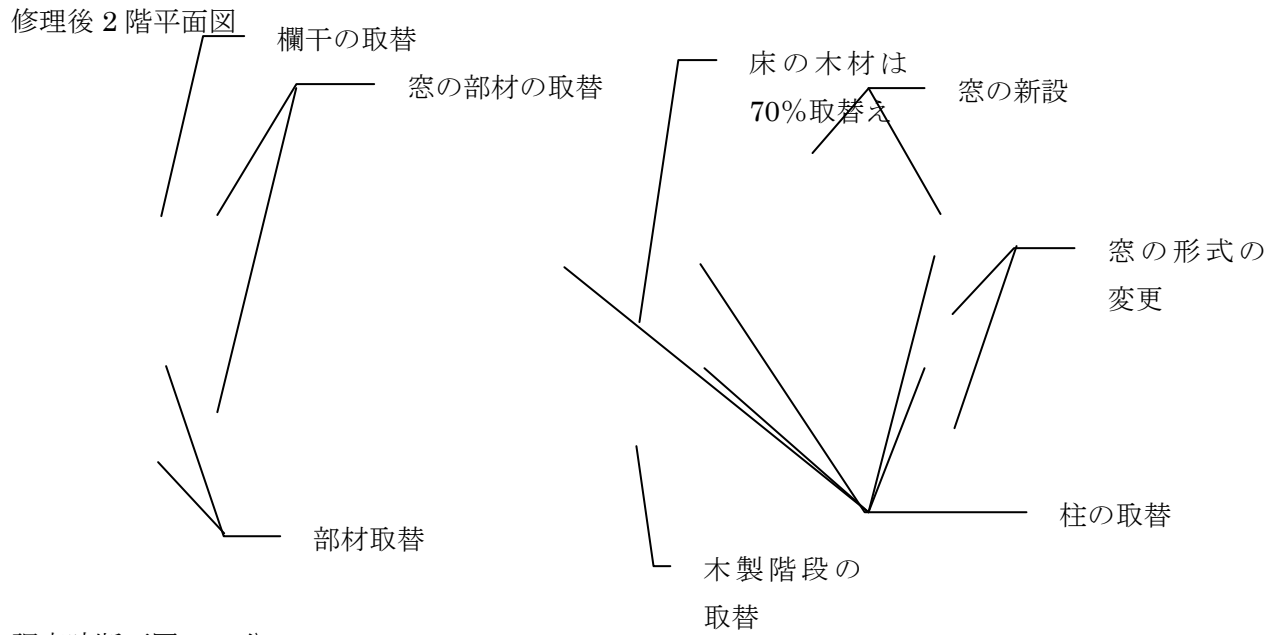
2010 年調査時 1 階平面図



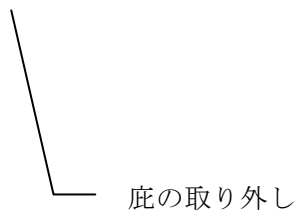
調査時 2 階平面図

修理前 2 階現状図

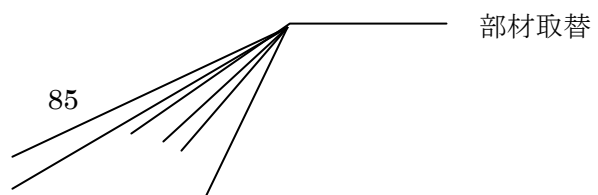
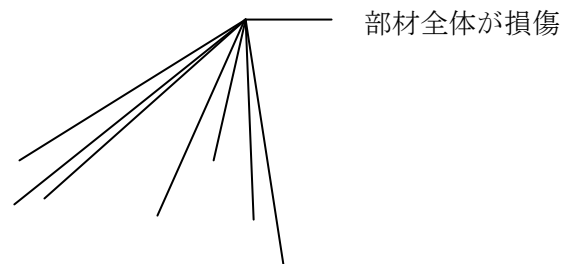




調査時断面図 100 分の 1



現状図 50 分の 1



修理後断面図



深い庇が切られ 2 階建になった。元々ベランダはなかったが、住民の利便性から設けられ現在に至るのだろう。



開口部は伝統的な蔭戸である。窓の部材は通常は外側に重ねて置いてある。



欄間と柱の色の違いから修理した時期の違いが推測できる。天井は装飾が設置され、保存しながら使うため所有者の意向も反映している



後庭は床面が高く、前家側は低い。敷地は南北方向に細長く、南側が入口で、地表面も低い。河の土砂が堆積して町が広がっていたことがわかる。





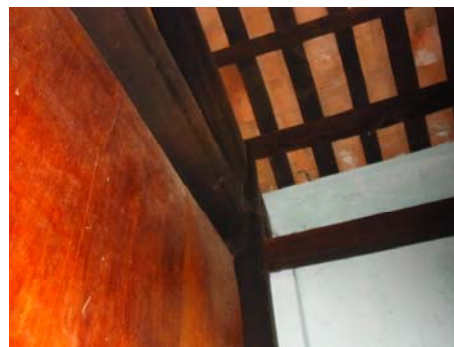
梁が旧材を多く遺す形で修理されている。



2階、道路側の開口部を見ると、伝統的な扉の形式であり、利便性と伝統の兼ね合いが図られている。



2階ベランダも木製の手すりが付けられている。



2階は天井が張られず小屋組みが見える。これも伝統的な形式である。







23) グエン・タイ・ホック 104 (104 Nguyễn Thái Học)

国所有、等級 1 の家屋。店舗兼住居として使用されている。前家、橋家、後家があり中庭もある。前家のみ 2 階建てである。2002 年に省の予算で修理された。土産物屋。服飾と陶器を扱う。全体的に手入れが行き届いている。

1 階平面図

2 階平面図

断面図

ファサード立面図



修理前から底は切れ高くなっていた。両側開口部も蔭戸が使われ伝統的な形式であった。



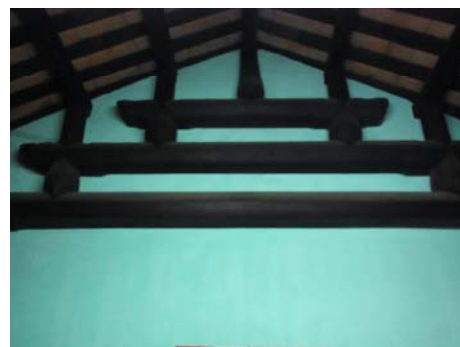
ファサード。陰陽瓦が葺かれ、中央開口部は内向きの観音扉。左右は落し戸。



前家の小屋組は合掌造りで天井が張られていない。通常の家屋では天井が張られているため。



壁は維持されているが、南北方向の壁は撤去されている。



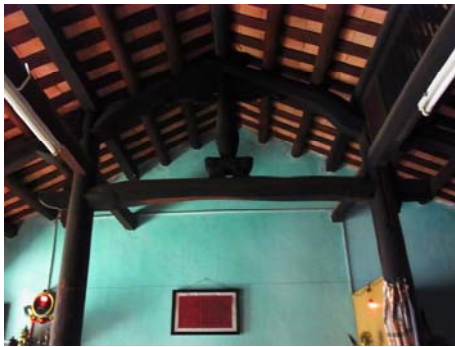
前家付属屋の小屋組み。壁構造との折衷様式であるため、こうした形式のものもある。



後家 2 階の床は板張りで、等級 1 の修理方針の通り伝統的なものは残していくということが表れている。



後家 2 階の小屋組みが見えている。天井を張らずに見せていることが伝統的な形式を保存するという等級 1 の修理方針と同様である。



同様に後家 2 階の小屋組みも天井が張られていず見える。瓦の風合いから、葺きかえられていることが分かる。天井がない方が手入れがし易い。


24) グエン・タイ・ホック 126 (126 Nguyễn Thái Học)

等級 1 の個人所有の家屋。2002 年に個人の資金で修理された。Nguyễn Thái Học（グエン・タイ・ホック）通りには、門が設置され、画廊として使用されている。細い路地を入ると庭を持つ家屋があり、住居として使用されている。家屋自体は農村型で、町家型以外の家屋の類型だと思われる。

付属屋が増築され、中庭も物置が増築される。しかし、増築を行っても、中庭は維持し、階だかを増やさずに伝統的な形式の棟の後に増築を行い生活空間としている。伝統的な形式の棟も生活の場として使用されている。

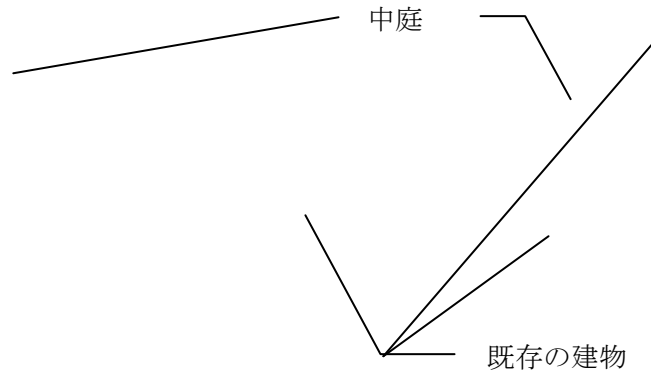
敷地図

平面図

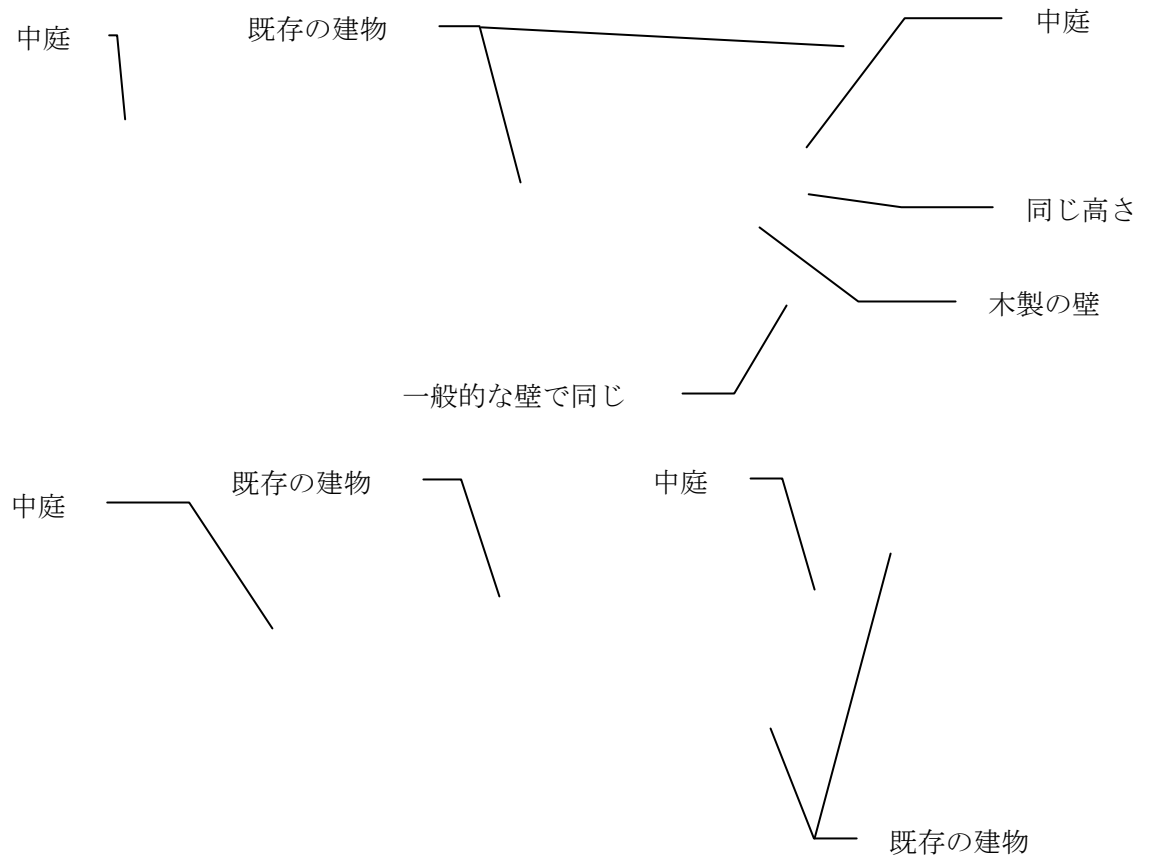
 木の壁

断面図

修理前 現状平面図

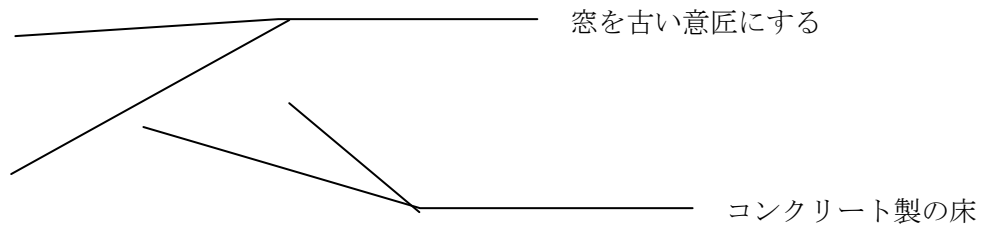


修理計画 平面図

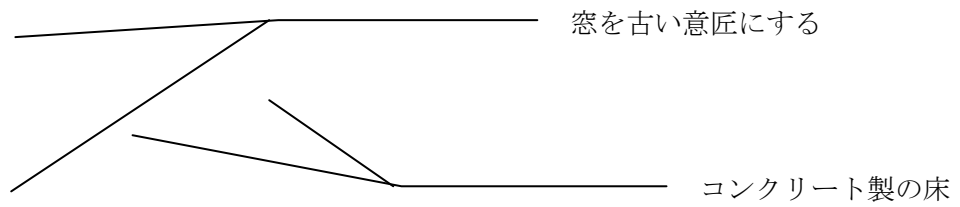


修理前 主屋現状平面図

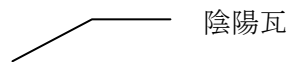
修理計画平面図



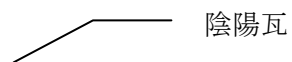
修理計画主屋平面図



修理前主屋断面図



修理後主屋断面図







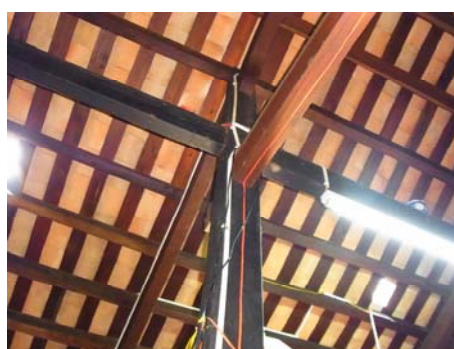
道路面からは門扉が見えるため、伝統的な形式ではあるが、他の家屋、町家とは異なる印象である。



柱の割れが生じている。蟻害でもあるが、そこに水が浸水する可能性もありさらなる腐朽を引き起こす。



前家小屋組みは合掌造り。棟木や垂木の一部が新しい材料に取り換えられていることがわかる。



瓦は葺きかえられている。湿気が多く雨も多い土地柄瓦は傷みやすい。



主屋の床はコンクリートが敷かれている。磚が敷かれている家屋もあるがこの家屋はない。



主屋前の空間。鉢植えが置かれている。門の東側の棟は台所として使われている。他の町家と比較すると余裕のある敷地である。



右側が門で左側が台所。中庭には植栽や泉もあり、伝統的な使い方をしている。



主屋の扉。色が異なり修理が施されたことが分かる。



門の小屋組み。壁構造のため垂木が壁に直接支えられている。

25) グエン・タイ・ホック 103 (103 Nguyễn Thái Học)

2003 年に JICA の予算で修理された国所有、等級 1 の家屋である。前家、橋家、後家と中庭、後庭から構成される総 2 階の町家である。全面店舗及び工場として使用されている。前家の 1, 2 階が店舗であり、後家の 1, 2 階は工場として使用されている。後庭は便所が設置されている。住居としては使われていない。

店舗経営者の意向に依り、店舗として使用されている前家 1 階及び 2 階、橋家 1 階、2 階の写真撮影は許可されなかった。後家 1 階及び 2 階のみ撮影できた。



ファサードの意匠は他にも類似のものが見られる。壁面に城が使われている点も伝統的な色を残しているといえる。ただし、黄色でも違反ではない。



西側から見ると屋根の形状と壁面の色がわかる。



後家 2 階バク・ダン通り側のベランダ。柱下部に継がある。河の増水時にこの高さまで浸水するためか、外部であるため腐朽しやすいのか。



後家 2 階の柱。下部が新材、上が旧材である。ベランダ側の柱が修理されていることは珍しいが、川沿いであるため、河川の増水だろう。





2 階後家の床に継があることは珍しい。2 階はタイルの床も多いが、内部の伝統的な形式を保つとした基準を保持している。



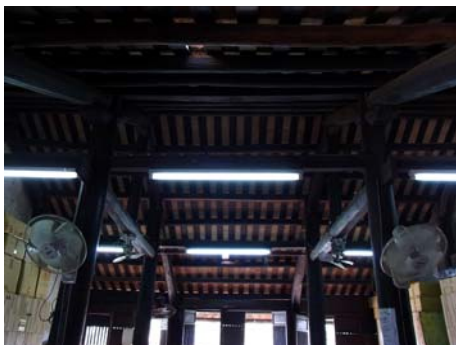
後家の小屋組み。等級 1 の小屋組は壁構造でも、壁際に小屋組みを設置するものが多い。



2 階後家。中庭側のベランダへの扉。一部が新材になっているが、旧材を残すようにしている。



後家 2 階。階段横の柱。下部が新材であることが分かる。



後家 2 階の小屋組も天井が張られず見えている。仕事場として使用しているが特に変更せず修理基準が守られている。



後家 1 階柱の継は高い位置にある。高さから判断すると、やはり河川の増水が腐朽の一因だと思われる。



後家 1 階中庭に近い場所の柱の継。下部が新材、上部が旧材。上部が取替えられるのは蟻害のためだと思われる。



後家 1 階の継。下部が新材、上部が旧材である。河川の浸水による腐朽が原因だろう。



後家 1 階、階段横の柱。右側が新材、左側が旧材。上まで継跡がある。継の大きいものは、浸水と蟻害両方の影響があると思われる。



後家 1 階の柱。手前が新材、跡が旧材。旧材を多く遺す継方である。



後家 1 階の柱。旧材を多く遺す継方であることが分かる。後家の柱はほぼ継があり、河川の浸水の影響を受けていると思われる。



後家 1 階の柱。右側に継ぎ目がある。柱を全て取り替えず接いでいるところから旧材をできるだけ遺して保存していくという考え方が窺える。



後家 1 階の柱にも継がある。旧材を多く遺す継方は国所有の家屋でありかつ JICA の予算を使用しているためか。



後家 1 階の継も旧材を多く遺す継方である。



後家 1 階の柱の継。床にはタイルが敷かれている。



後家 1 階の柱



中庭の床はコンクリートが敷かれている。段差は少ないがやはり中庭部分は低くなっている。



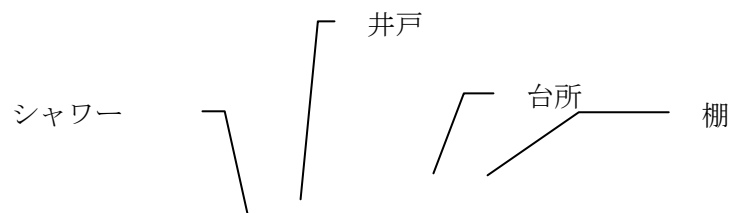
河に近い立地のため柱の継が多いともいえるが、部材を全て取り替えずに修理をしており、旧材をできるだけ遺すという方針が浸透していると思われる。

## 26) グエン・タイ・ホック 81 (81Nguyễn Thái Học)

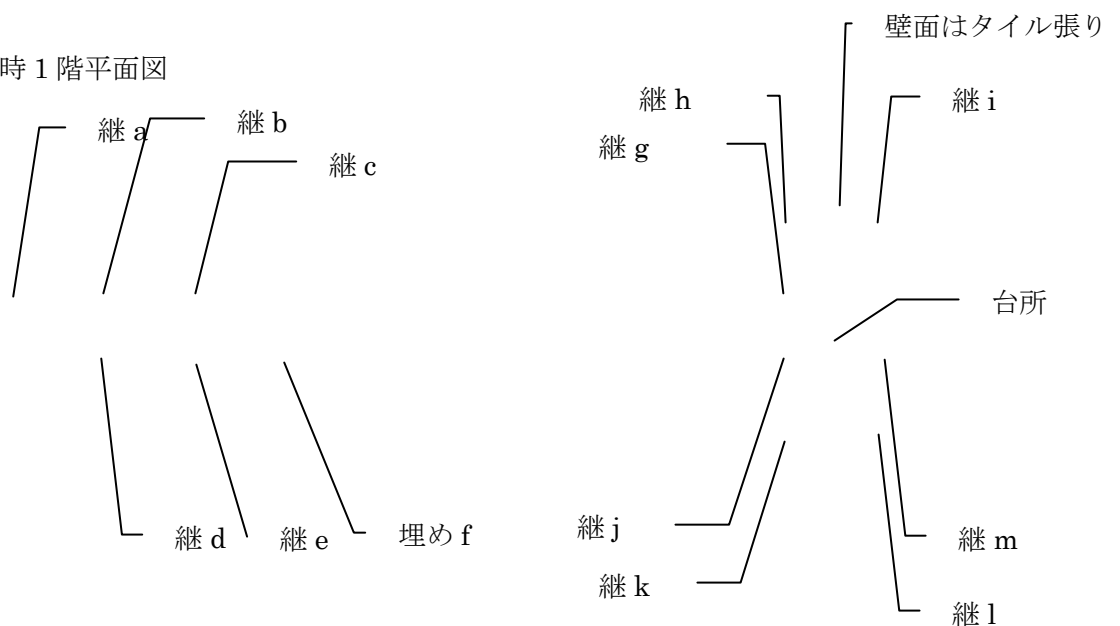
等級 1 の国所有の家屋で 2005 年と 2008 年にホイアン市の予算で修理された。

店舗として前家を使い洋服屋を営んでいる。前家のみ 2 階建てで、橋家及び後家は平屋である。中庭に井戸を有し、便所や風呂が設置され、後家は台所がおかれている。前家の柱は開口部と中庭に面した箇所以外は丸柱であるが、後家は壁際の 4 本を除いて角柱である。柱は部屋の中央に加え壁際にもあり、東西は煉瓦造モルタル壁で覆われている合掌造りの陰陽瓦葺きである。1 階天井には洪水時に荷物を 1 階から 2 階へ上げる荷揚げ用の穴が維持されている。空間の使用目的は変化しているが全体の構造は変化していない。

1 階平面図

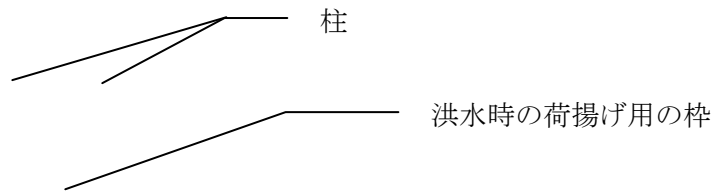


2010 年調査時 1 階平面図

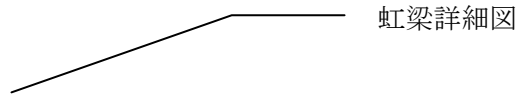




2 階平面図



断面図



ファサード



修理前のファサード。側壁は2階前壁モルタル仕上げで1階左右開口部の下部もモルタル仕上げと見られる。2階開口部は中央のみ木材で仕上げられている。



側壁はモルタル仕上げで前面は木材を使用した蔀戸となっている。図面上では縦に材料が入っているが、2005年のもののため。2008年に変更されたと考えられる。



a) ファサードの柱はできるだけ材料を多く遺した継方をしている。



b) 内部の柱も部材を多く遺すような継方をしている。



b) 同じ柱を別の方向から見たものである。国所有の家屋の場合は、旧材を多く遺す手法が用いられるようだ。



b) 同じ柱を別の方向から見たもの



c)同様に、材料を多く遣すための継方をしている。柱下部を取り替えたと思われる。



d)ベトナム従来の継方を使用している。



e)丸柱で、材料を多く遣す継方をしている。家屋の外側内側に関わらず旧材を多く遣す手法が用いられている。



f)部材を取り替えている。また、柱の一部が埋められている。



g)ベトナム従来の継方を使用している。一つの棟の中に異なる手法が混在しているのは、工期や予算の都合だと考えられる。



h)部材の一部分を補修している。旧材を残すという考え方が見られる。



h) 材料を多く遺す継方をしている。台所で傷みやすい個所だが木製の柱を残し、伝統的な形式を残す方針が窺える。



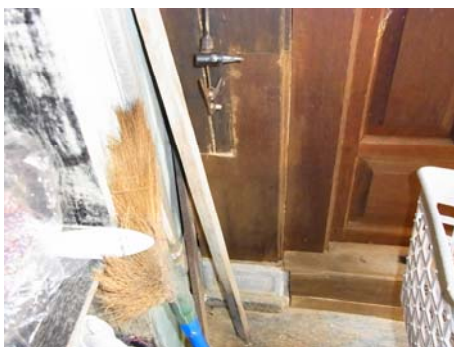
i) やはり、材料を多く遺す継方をしている。ベトナムの継方がほぼされていない。



j) ベトナム従来の継方を使用している。角柱が使われている。柱の形に依って継方が選ばれているわけではない。



k) 店舗として使用することを中心に考えれば修理するほど腐朽した柱を撤去する方針もあるが、伝統的な形式を残すという方針に沿っている。



l) 材料を多く遺す継方をしている。角柱が使われている。



m) 材料を多く遺す継方をしている。この家屋では旧材を残す継方が多くみられた。国所有の家屋であることが影響しているのではないかな。

## 27) グエン・ティ・ミン・カイ 6 (6 Nguyễn Thị Minh Khai)

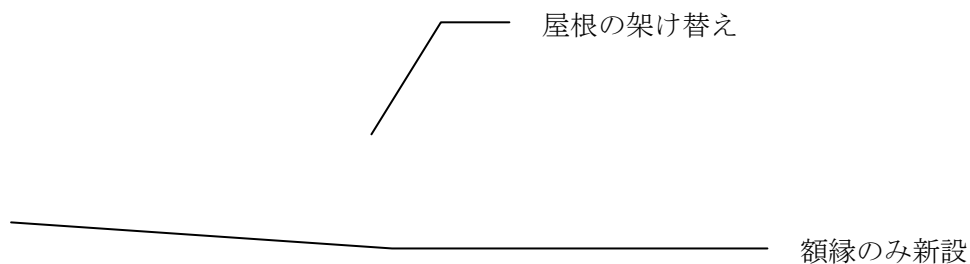
等級 1 の国所有の家屋。1999 年にホイアン市及び日本の大成建設の資金で修理された。ホイアン史跡管理事務所の管理下にある、土産物屋であるため、居住空間はなく全面が店舗として使用されている。前家、橋家、後家から構成され、後庭に便所が設置されている。

中庭は屋根が掛けられ室内化している。全体的に伝統的な様式を維持し、通常の家屋では前家以外は全てが生活空間となるため施設が増設され、伝統的な使い方とは異なる使用方法をされる中庭も、そのまま維持している。ただし、屋根が掛けられ室内化している点が大きく異なる。また、店舗の一部として商品が陳列されており、中庭であったことは分かりにくい。

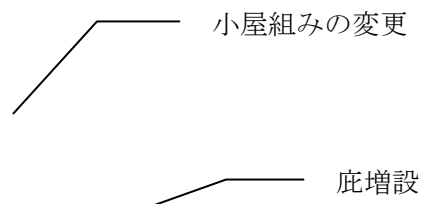
1996 年に作成された図面によると、部屋の増設のために壁を加え、集合住宅として使用されていたことが分かる。修理前は台所、便所共に一か所であり、後庭を有する比較的規模の大きい住宅であった。前家を全面的に受付として使用し、左右に柱沿いに壁を増設して部屋が作られ、東側には階段が増設された。さらに橋家と後家を隔てる壁は取り払われ、後家までつながる部屋が増設された。後家の東側も壁を加えて部屋が新たに作られている。後庭にある台所は 1 か所から 3 か所に増やし、中庭にも台所を作り合計 4 か所の台所を作った。2 階に配置されていた先祖壇は取り払われ、部屋に置かれている。吹き抜けがあったが、全て床で覆われた。橋家の柱 2 本のみが丸型だが、修理後は取り外されている。

現在と比較すると、1 階、2 階共に当初の状態に近い。前家前面には床が設けられている。中庭部分の吹き抜けも作られ、床が取り外されたことがわかる。後庭には、便所が設けられている。台所は取り外された。後家西側にある階段は移動されている。

修理前断面図

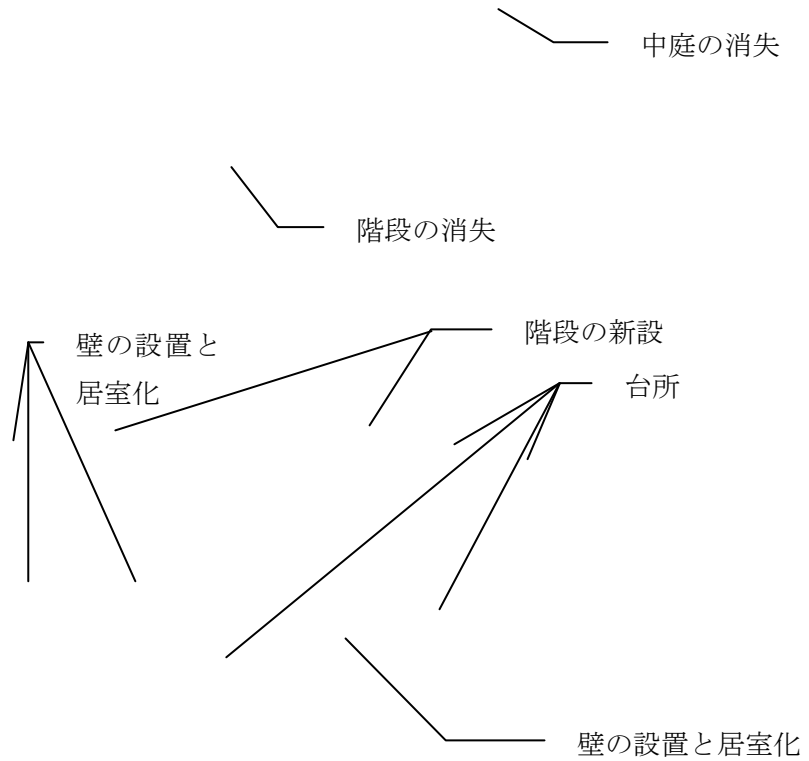


修理後断面図

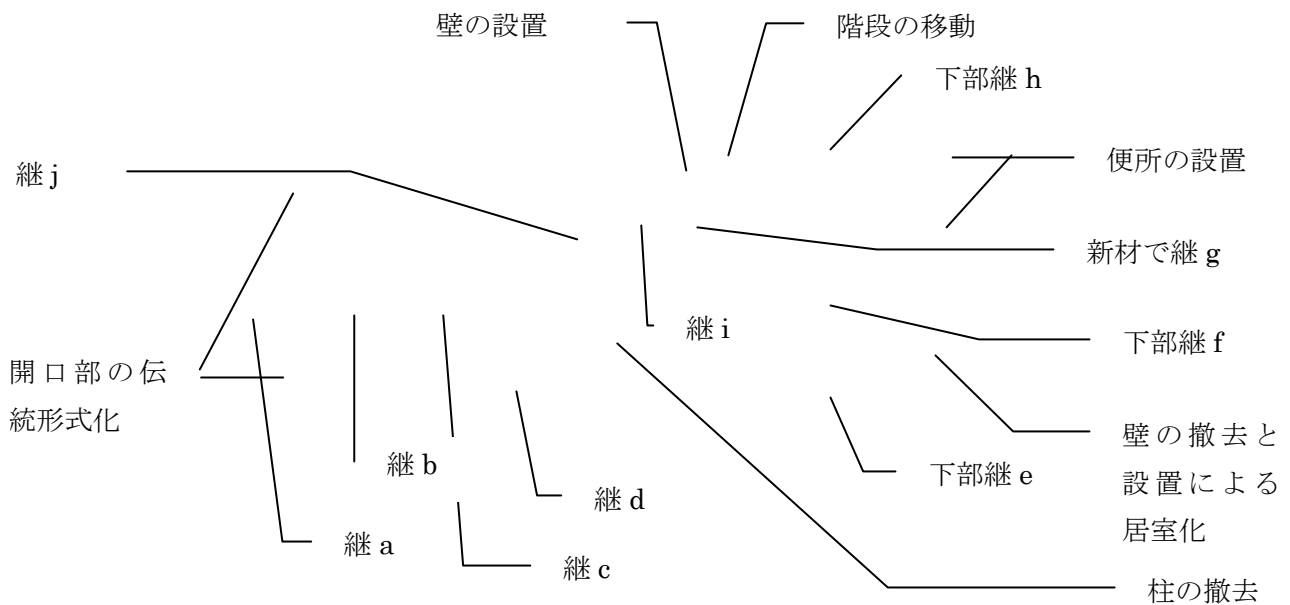




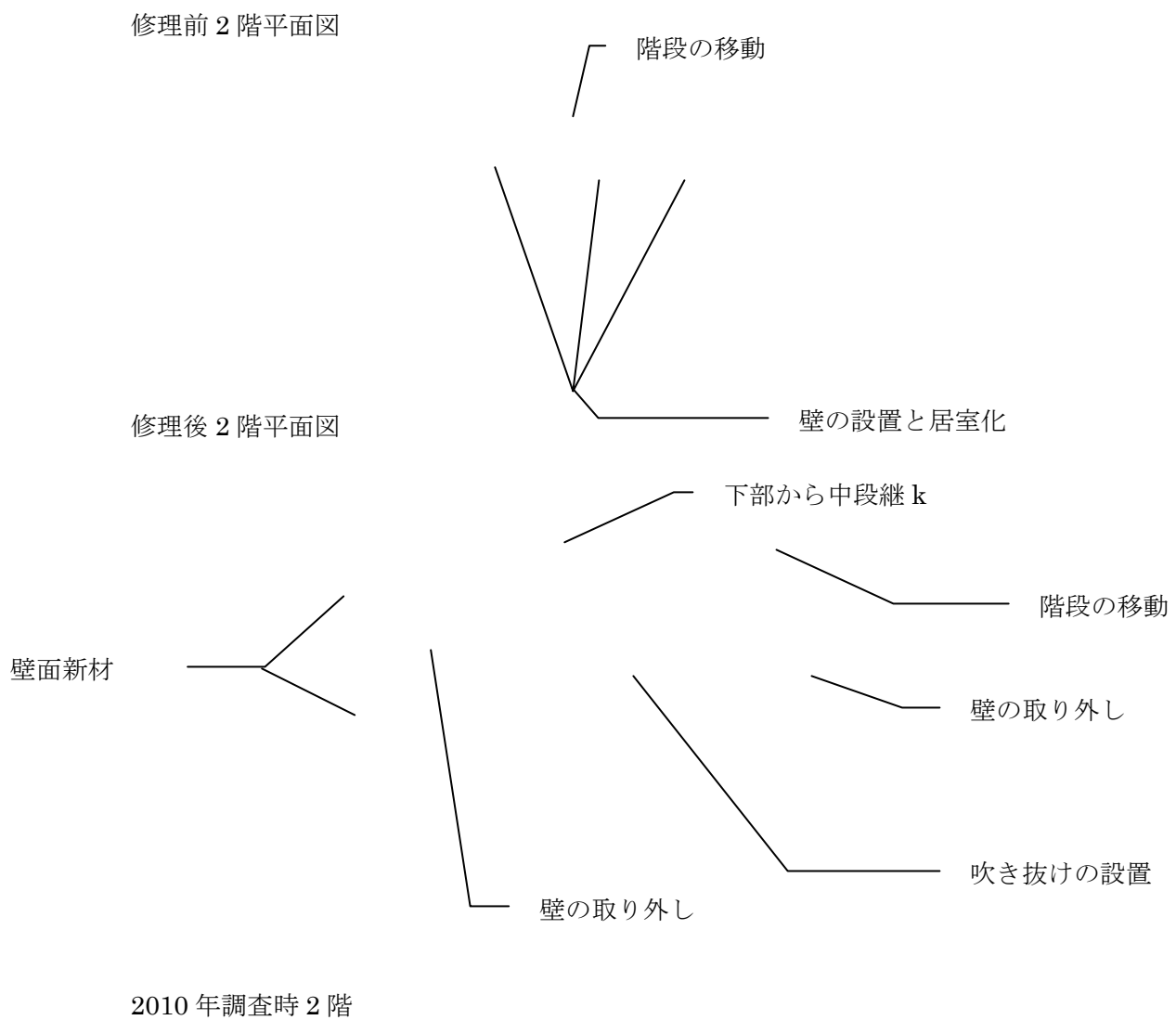
修理前 1 階平面図



修理後 1 階平面図



2010 年調査時 1 階平面図（全面的な壁の取り外しと個室の撤去）







ファサード。両側の開口部 1996 年時の図面と比較すると伝統的な様式に整備していることが分かる。



a) 左右の扉が継がれている。正面開口部に向かって左側。



a) 左右の扉が継がれていることがわかる。正面開口部に向かって右側。



a) 扉の一部が修理されていることが分かる。扉に張られているのは、個の家屋が文化財に指定された際の認定証。



b) 左側の柱に継



c) 新材と旧材が組み合わせられている。中央は装飾。



d) 壁側が継がれている。旧材を多く遺す継方をしている。



e) 手前の一部を取り替えており、材料を多く遺す継方をしている。



f) 下部に継がある。材料を多く遺す継方をしている。



g) 新材で継がれていることがわかる。古い材料を多く遺す継方をしていることが分かる。



h) 左側が旧材で右側が新材である。旧材を多く遺す継方をしていることがわかる。



i) 下部が継がれている。



j) 下部は材料を多く遣す継方をしていることが分かる。



k) 2 階の柱の継。



k) 同じ箇所の上部



正面向かって右側の柱。礎石と中心がずれている。

28) グエン・ティ・ミン・カイ 11 (11 Nguyễn Thị Minh Khai)

個人所有の等級 1 の家屋。2006 年に個人の資金で修理された。前家、橋家、後家の 1 階部分は土産物屋として使用されている。2 階があるのは前家のみである。後家の後部にさらに付属屋が置かれ、トゥ・ボン川沿いまで続いている。敷地は西側に緩やかに曲がり、南部の敷地は西側に突き出している。桁行 3 間、梁間 4 間の前家である。調査拒否のため内部の写真はない。

断面図

1 階平面図

2 階平面図



壁の色や開口部共に伝統的な様式である。

## 29) チャン・フー121 (121 Trần Phú)

1994 年と 1996 年に日本人専門家の協力により修理された等級 1、国の所有の家屋である。当時の状況と修理の概況は「前面の屋根瓦が大きく崩落し、随所に蟻害が見られて倒壊寸前の危険な状態であった。そこで、一旦解体して材料を保存して仮囲いを施し、2 年後に材料の繕いと組み立ての修理工事を実施した。修理に際して、東妻の煉瓦壁が内側に傾斜し建物の保存に影響があると考えられたので、基礎を含めて断面 L 字形の鉄筋コンクリート擁壁を 3 箇所、東妻の煉瓦壁に沿って建物内部に設けた。内部の柱には床や造作の痕跡があったが、それらの当初形式を完全に明らかにすることは困難であったこと、移築されたとすれば、現在地に来てから、これらの造作があったかどうかは不明なことと、所有者に土間床のままで使いたいという意向があったので、床の復旧は行わなかった。前面の柱間装置は地覆まで落とし込む形式であったのを、痕跡に基づいて、框と蹴込板を復し、板を框上まで落とし込む形式に復旧した。ただし、利用上、框と蹴込板は固定せず、取り外して使えるようにした。」<sup>注1)</sup>

現在は喫茶店兼飲食店兼住居として使用されている。喫茶店及び飲食店のみ調査ができた。チャン・フー通り (Đường Trần Phú) からグエン・タイ・ホック通りまで棟は連続しており、一軒のカフェ兼飲食店兼飲み屋であるが、日本人の修理協力が行われたのはチャン・フー通り (Đường Trần Phú) 側の棟のみである。グエン・タイ・ホック側はフレンチコロニアル形式のファサードを持ち内部も伝統的な形式ではない。敷地内で伝統的な形式を保つのは、チャン・フー通り (Trần Phú) 沿いの棟のみであり、チャン・フー通り (Đường Trần Phú) 側の店舗は伝統的形式に倣った建造物が建てられている。

## (1)構造

チャン・フー通り (Đường Trần Phú) から説明する。前家は合掌造りの陰陽瓦葺、橋家、後家は陰陽瓦葺合掌造りである。前家以外は修理時に追加で建築されたものである。

## (2)中庭

中庭はあるが、飲食店の座席の一部となっている。

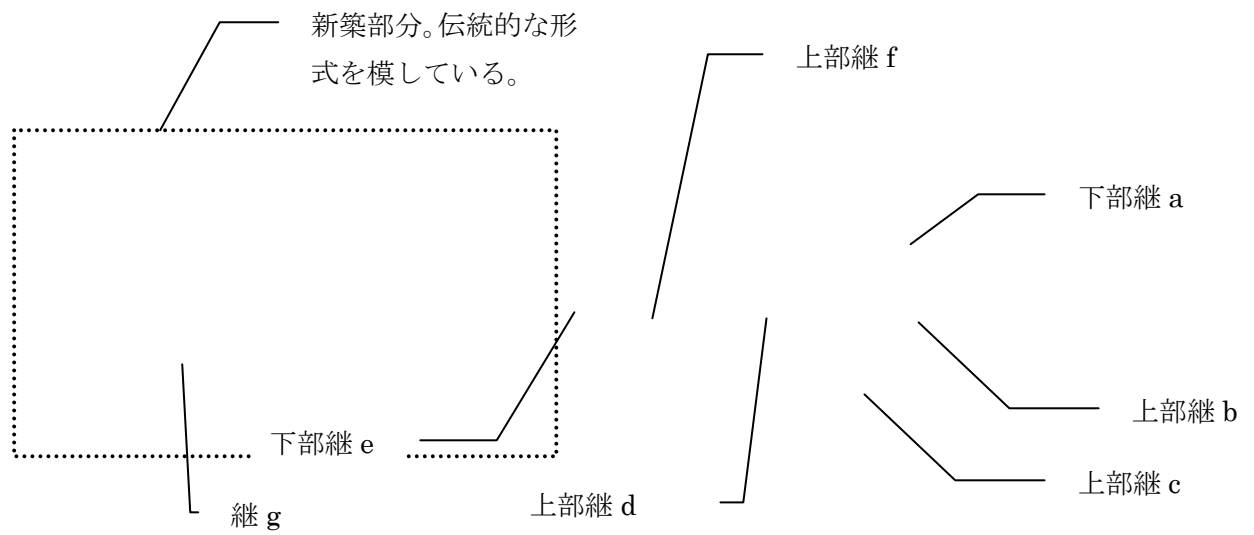
## (3)その他

チャン・フー通り (Đường Trần Phú) がわずかに低い。

注1 文化庁文化財部「旧国際商業港ホイアンにおける保存協力事業の記録」平成 15 年 3 月 p20



修理前平面図



2011 年調査時平面図

修理前断面図

修理後断面図



チャン・フー通り側のファサードは平屋で蔀戸、板壁で仕上げられた伝統的な様式である



グエン・タイ・ホック通り側のファサードは、2階建ての古都ホイアンのフレンチコロニアル様式である。



a) 下部継は日本型の手法を用いている。



a) 同じ箇所の裏側



b) 軒桁右側が継



c) 柱上部に継がある。



d) 柱上部が継。鍵型に腐朽した部分が切り取られていることが分かる。旧材を多く遺す継方。



d) 柱の下部。礎石の上に柱が置かれている



e) 下部継



e) 別の角度から



f) 柱上部に継が有る。日本型の継を用いている。



f) 同じ柱上部を別の角度から見たもの。



f) 同じ柱の下部。穴を木で埋めている。



g) ほぞ穴が埋められている



g) 同様に、柱下部にあるほぞ穴が埋められている。



前家小屋組み。合掌造り





後家小屋組みは合掌造りで壁際にも小屋組みが見られる。瓦は新しく葺き替えられている。



後家2階の床は板が張られている。



後家2階も飲食店として使用している。



後家2階に上がる階段の梁。柱はコンクリートだが、梁とその上の柱は木材を使用している。

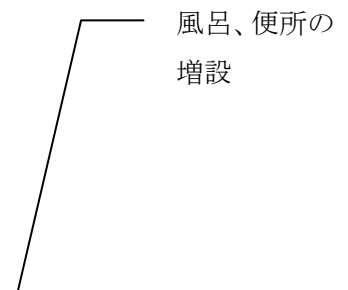


中庭にあたる空間の様子。他の町家とは異なり橋家は設けられていない。

## 30) チャン・フー142 (142 Trần Phú)

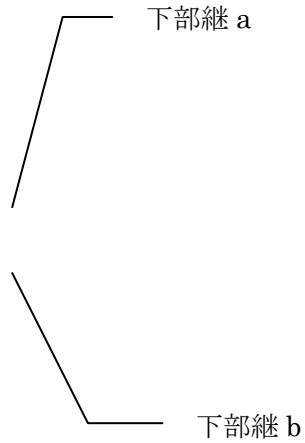
等級 1 の個人所有の家屋。1996 年に日本の資金と日本人専門家による修理が行われた。チャン・フー通りの南側に位置する。修理箇所は橋家と後家である。断面図は、後家を梁方向に見たものである。小屋組みが和小屋から壁構造に変更されている。平面図からは後家に風呂と便所が増設されたことが分かり、保存する部分以外は現代的な生活に合わせて所有者の要求を満たしているといえる。保存は全体的に行われるが、現代的なものは陰陽瓦を葺くという規制以外は自由度が高いといえる。前家が歴史的な価値の高い部分であり、修理時にファサードを木製に変え伝統的な様式とした。専門家の修理記録に出てこないため、修理方針は不明であるが、伝統的な部分は全て保存するという点と、伝統的な様式ではない部分を伝統的な様式に戻すという方針が採られているといえる。

現状図



修理計画図 修理箇所のみ





2011 年調査時平面図

現状断面図

小屋組みの変更。  
壁構造に。

修理計画断面図



庇が二段になっており、開口部は木製の折戸である。伝統的な様式を保ちながらも、開口部は修理前と変えず利便性を重視した。



修理前のファサード。屋根は陰陽瓦ではなく庇に飾りが付き、壁面もモルタル仕上げである。修理により木製の壁と開口部に変更され、伝統的な様式に戻すという修理基準に則っている。



a) 柱下部継。材料を多く遺す継方をしている。伝統的な棟は材料を多く残すようにし、文化遺産としての修理を心がけていることがわかる。



a) 同様の部分の内側。外側と形が違うため、腐朽箇所のみを取り除いた継方だと確認できる。



b) 柱下部に継がある。日本人専門家の協力の下、旧材を多く遺して行くという文化遺産としての保存を行ったことが分かる。



溝の残る材料。転用材、或いは梁等が設けられていたと推測される。溝を残した材料は他の家屋でも散見できる。



中庭と後家。中庭を配する点では伝統的な棟の構成を維持しているが、棟の意匠に伝統的な様式を用いず、意匠見本2に倣う様式となっている。

31) チャン・フー71 (71 Trần Phú)

等級1の国所有の家屋。2001年にホイアン市の予算で修理された。

前家、橋家、後家を有する家屋である。チャン・フー通りの南側に位置し、南北に細長い敷地である。桁行2間で井戸を有することも特徴の一つである。

家屋所有者と店舗の借り手は異なり、店舗は靴と鞆を扱っている。

1998年の調査以降に、1, 2階共に柱が増設された。2階は前家に柱と壁が増設された部屋が作られた。また、橋家と後家よりも前家の床は1段高くなっている。継は見られず、材料が更新されている部材が散見できる。等級1だが、材料を修理しながら建造物を保存するのではなく、材料を取替えながら伝統的な様式の保存を行ったことが窺える。旧材を多く遺すという方針はあるものの、現場の判断により材料の取替えを行っている可能性が指摘できる。

大学調査時1階平面図1

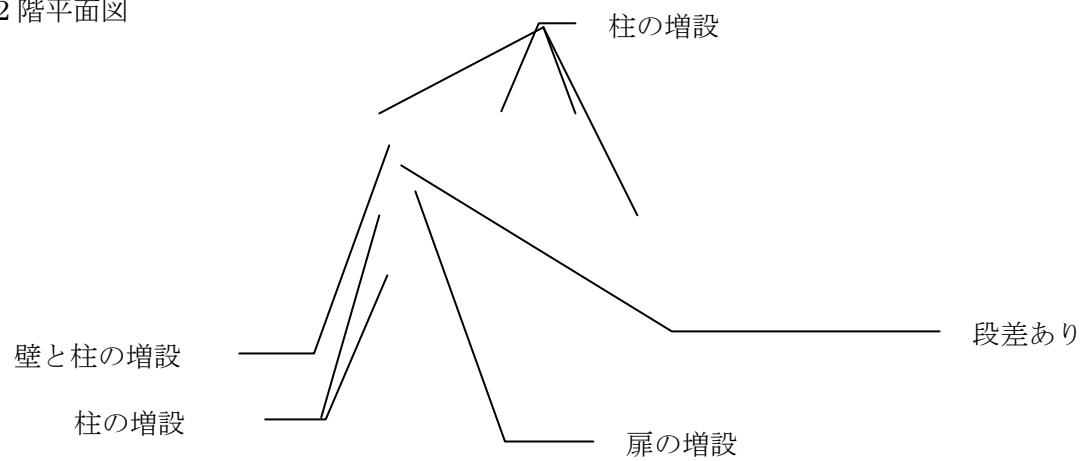
1998年1階平面図



2001年1階平面図

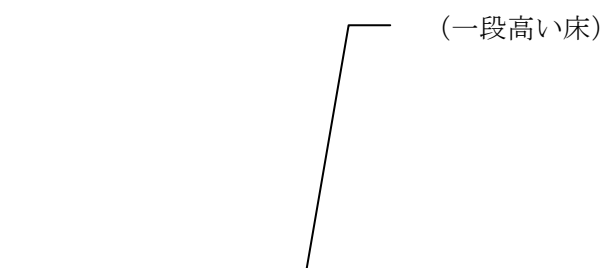
大学調査時 2 階平面図

1998 年 2 階平面図



2010 年 2 階平面図

大学調査時断面図



1998 年断面図



1998 年ファサード

修理前のファサードは、修理後とそれほど変わらないといえる。



ファサードは、修理後も変化していない。木製の板壁と開口部である。



扉を閉じた状態。右側が観音開きで左側が落し戸となっていることがわかる。



1 階橋家の壁の増設。屋根を掛け、居室化している。



後庭に屋根を掛け居室化していることがわかる。シャワーやトイレ、台所といった水回りを配置する際に利便性から屋根を掛けると推察される。



2 階橋家。奥が前家の 2 階。床面に段差があることが分かる。また、扉の表面仕上げからも、材料が伝統的な形式に倣うものではなく、生活要求のために設置されたものではないかと思われる。



壁面の柱は増設されたもの。





後家と橋家の接続部分。右側の柱は増設したものである。



2 階前家に増室した壁面と柱。



2 階前家の増設した柱と壁。下部。



居住者の利便性向上のために 2 階前家の壁面を増設したと考えられる。材料はいずれも伝統的な様式を保つために使われるものとは異なる。



2 階前家の増設した壁面。柱や壁面に影響があるのではないかと懸念される。

32) 117 Trần Phú (チャンフー117)

国所有の等級1の家屋。

2004年に省の資金で修理された。木彫りや陶器の工芸品を扱う土産物屋である。平面図によると中庭に井戸がある。

桁行3間、梁間5間の前家、橋家から構成される。中庭には井戸と個室、便所がある。

内部は調査拒否のため写真撮影、調査共に行っていない。

1994年9月調査時の平面図

1994年9月調査時の断面図



ファサード。左右の開口部は蔭戸となっており、伝統的な様式である。屋根は陰陽瓦を葺いている。

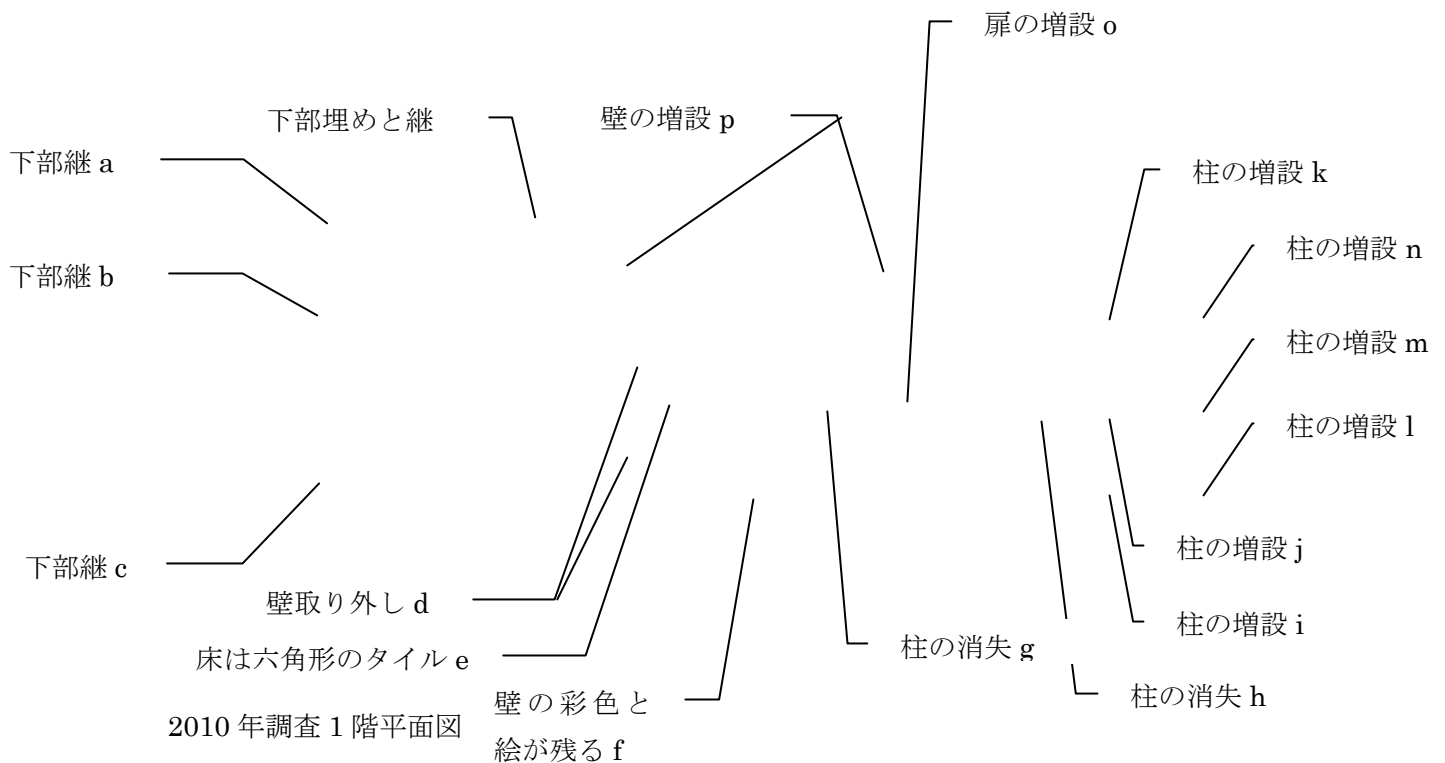
## 33) チャン・フー38 (38Trần Phú)

等級 1。国の所有である。2004 年に市の予算で修理された。前家、橋家、後家から構成され、中庭を配する。後家のみ 2 階建てである。

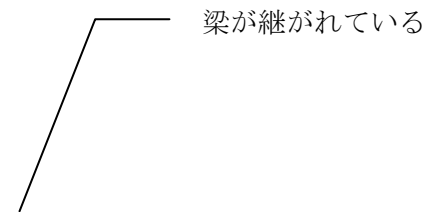
現在はレストランとして使用され、2 階は居住空間となっている。

後家の柱を増設し、内部の伝統的な様式に整備した。また、伝統的な様式を表す中庭の装飾と井戸は維持されており、等級 1 の修理方針や修理基準に沿ったものとなっている。飲食店として使用されていることから、伝統的な様式を保つこととお客を増やすことが両立しているといえる。

1994 年調査 1 階平面図



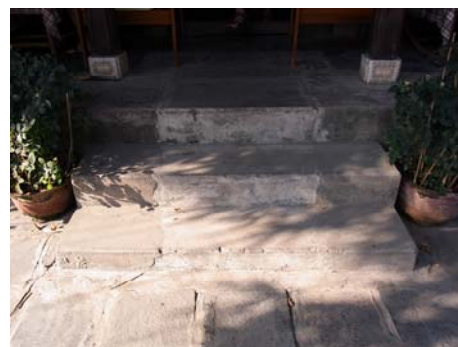
1994 年調査 2 階平面図



1994 年調査断面図



ファサードは木に覆われ見えにくい  
が、蔭戸を用いており、伝統的な様式  
である。



正面入り口に石段が設けられ、敷地の  
床面は道路よりも高い。古都ホイアン  
が河川の堆積に伴い拡大されたため  
河川側の土地の低いことを示すもの  
である。



a) 開口部の枠の下部に継がある。左右共に同じ高さに継があり浸水の影響だと思われる。



b) 同様に開口部下部に継がある。旧材を多く遺す継方はされていない。



c) 開口部下部に継がある。ab と同様の継方がされている。



d) 壁が外されて、飲食店として使い易くされている。



e) 床の仕上げは磚ではなく六角形のタイルが用いられている。全体的に床の仕上げ剤はモルタルかタイルが多く、磚が敷かれている事例は少ない。



f) 壁面に絵があり中庭が客を招いて茶を飲む空間であったことを伝えている。飲食店の客席として使用され、往時の用途を保っているともいえる。





g) 柱が取り外された箇所の上。中庭にかけられたベランダの下部で外された跡はない。



g) 柱が取り外された箇所の地面に跡はない。タイルが修理後に敷かれたものと考えられる。



h) 柱が取り外された箇所。写真中央部に柱があった。



h) 床面はタイルが敷かれており跡はない。やはり修理後にタイルが敷かれたと思われる。



i) 増設された壁際の柱。壁構造であり構造上必要なく、伝統的な様式に整備するために建てられたのだろう。



j) 増設された柱の下部。使用目的から見れば柱が少ない方が都合がよいだろうが、伝統的な様式に整備することを重視していると思われる。



j) 同じ柱の上部。天井が張られている。天井には現代的な材料が使用されているため台所としての機能を考えていると思われる。



k) 同様に増設された柱。やはり機能上は柱がない方が都合がよいと思われる。



l) やはり構造上は不要だと考えられる柱が増設されており、家屋全体を伝統的な様式に整備したと思われる。



m) 増設された柱はいずれも丸型である。



n) 写真中央が増設された柱



o) 新設された扉は写真左手に見られる。飲食店として使用され観光客にも見えるために全体を伝統的な様式にしたといえる。



p) 扉が取り外しできるようになっており、広い空間が求められる飲食店としての機能と、仕事後に家屋として使用できる機能を兼ね備えている。



前家小屋組みには天井が張られていない伝統的な様式である。



中庭に残る井戸も古都ホイアンの伝統的な様式の家屋に見られるものの一つである。



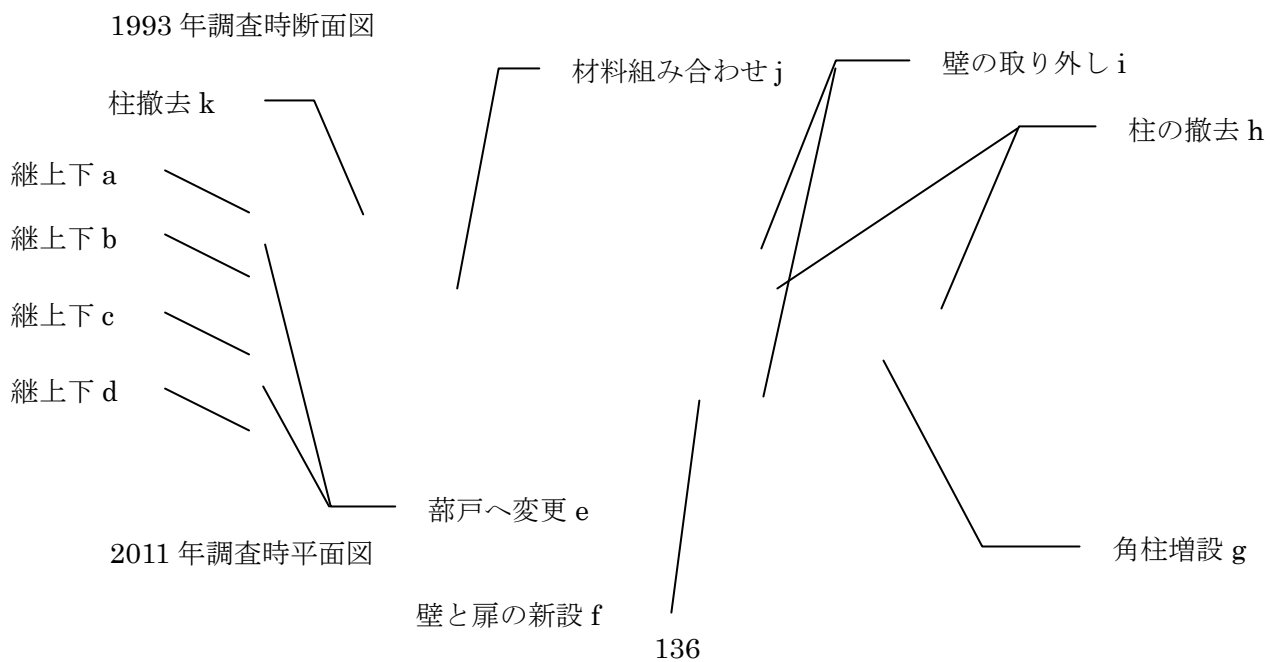
後家 2 階の小屋組みは合掌造りで天井が張られていない。お客に見える場所ではないが伝統的な様式を保っている。

34) チャン・フー53 (53Trần Phú)

国所有の建造物で土産物屋兼喫茶店として使用されている。前家、橋家、後家で構成され、前家のみ2階がある。2階は土産物屋の在庫を保管し、店員が休憩をする場所である。

2004年にホイアン市の予算で修理された。修理は道路面の柱と中庭に面した壁面の改造が行われ、傷みやすい個所と生活の変化に対応した修理が行われたといえる。

1993年調査時平面図







陰陽瓦が二段に葺かれ、つし2階となっている。開口部は中央が観音開き、両側が落し戸の伝統的な様形式である。



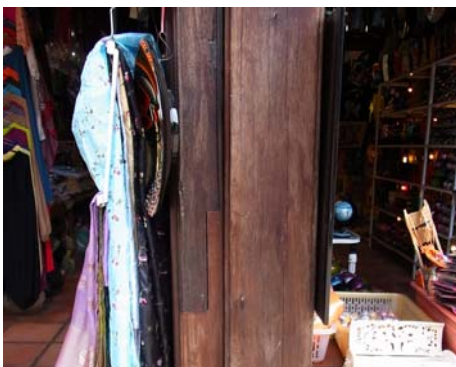
東側からの外観。前家、橋家と中庭、後家が並ぶ様子が分かる。



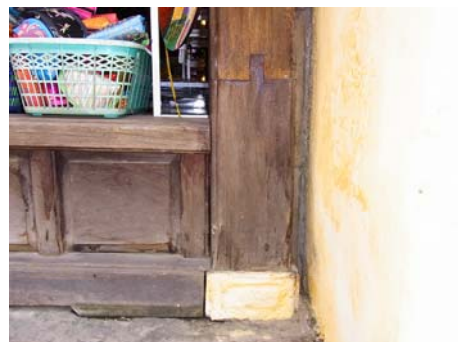
a) 前家ファサード最東部の柱。古都ホイアンの継方をしている。旧材を多く遺す手法ではない。



b) 同じく前家ファサード面の扉の軸部。継が鍵型になり材料を多く遺す手法が採られている。



c) 反対側の扉の軸部。同様に材料を多く遺す手法が採られている。



d) ファサードのうち最西の柱の継。ベトナムの手法を使用している。同じファサード部分の修理だが異なる手法が用いられている。



e) 東側の開口部。蔀戸が入れられており、店舗を開けている間は戸が外され開放的な様子が窺える。



e) 東側開口部のうち、最東部。旧材を多く遺す修理手法が取られているといえる。



e) 反対側の同じ箇所には修理が施された跡はないが、材料の表面から取替えられたと思われる。



e) 西側の落とし戸も同様に店舗の開店時間は全面を開いている。



e) 西側落とし戸の拡大したもの。大きく開けられた開口部を利用して商品を並べており、伝統的な様式と店舗としての利用が両立している。



f) 東側。壁と扉が新設され中庭に面して外部と接する場所は傷みが激しいと言える。





f) 西側の新設された扉と壁は東側と同様に外部に面しているからだと言える。



g) 角柱の増設は橋家を支えるために行われている。



h)i) 柱と東側の壁が撤去されていることがわかる。生活面から使用しやすいように換えたと言える。



i) 西側の壁も利便性を向上させるため、撤去されたと思われる。同じ等級1でもお客が入ってこない箇所のためか、他と修理方針が異なる。



j) 新旧材を組み合わせていることが、表面の風合いから判断できる。材料の組み合わせは他の等級1の家屋と同様である。



前家2階の小屋組み。合掌造りである。見えない部分だが伝統的な様式を残している。



橋家の小屋組みも、お客からは見えな  
い部分だが伝統的な様式である。



階段も木製で、伝統的な様式が見られ  
る。



1 階前家。新設された壁面の欄間。材  
料の表面の色が異なり修理されたこ  
とが分かる。前家は伝統的な様式で修  
理されている。



前家つし 2 階部分の小壁が修理され  
ている。こうした細かい部分も伝統的  
な様式で修理し全体の調和を図って  
いる。

35) チャン・フー62 (62 Trần Phú)

等級1の個人所有の家屋。土産物屋。

2006年に個人の資金で修理された。ただ、1994年の調査時と1998年の調査時には平面に変更がある。町家形式の家屋は中央が通路として使用されることが多いが、1998年時手根は、東側に壁が設置されている。

2011年の調査では、付属屋の後ろに増設された棟には中2階が設置されていた。外観を見ると片流れ屋根が、前家と付属屋よりもやや高くなっていることがわかる。

小屋組は前家、付属屋共に和小屋に近く、1994年の調査時から変更されていない。付属屋後ろの増設された棟は、壁構造で小屋組みがない。

中庭はなく、隣接するチャン・フー64に位置する中華會館の敷地と接続している。

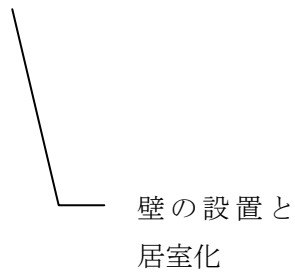
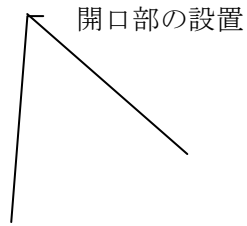
変更点としては、室内に風呂及び便所が設置された点、増設された棟に2階が設置された点が挙げられる。増設棟は、1994年の断面図と比較すると屋根高が2011年と異なるため、この間に2階が作られたと考えられる。増設棟は、1994年の調査時から平面図に表れているため、建築年はその前だと考えられる。

地表面は、北部が高く南部が低い。緩やかな勾配が断面図から見られる。

修理前平面図

1994年調査時

1998 年調査時平面図



板壁は後補。塗料や  
材料の質が他の部材  
と異なる。



2006 年修理後平面図

上部欄間の  
材料が新しい



1994 年調査断面図

1998 年調査断面図



平屋に陰陽瓦を葺いた屋根と伝統的な形式である。



後部から見た様子。手前は増設された棟。右側に見えるのは・・會館の門である。



a) 等級 1 の家屋であり、元々伝統的な様式の棟で柱を外したのは、個人所有であり個人の資金で修理されたからだろう。



板壁。材料、色共に伝統的なものではない。等級 1 だが、個人の資金で修理されると、こうした部分に修理方針の統一性が見られない。



付属屋部分の1階。奥に見えるのは會館の敷地である。柱がほとんどない。



付属屋の小屋組みは壁構造であることがわかる。屋根は、古都ホイアン共通の規制である陰陽瓦を葺いている。



前家は天井が張られず小屋組みが見えるようになっている。



36) チャン・フー33 (33 Trần Phú)

前家の東側が雑貨屋、西側が靴屋として使われている。店舗経営者の意向により調査ができなかったため図面とファサードの写真のみとなる。

前家と付属屋から成る伝統的な様式の家屋である。

平面図

断面図



正面は木製の扉と開口部で作られている。  
図面からは主屋と付属屋は伝統的な様式  
であることが窺える。

## 37) チャン・フー84 (84 Trần Phú)

等級1の共同体所有の祠堂である。Trần Phú (チャン・フー)) 通りに面したアクセス道路があるが、町家形式ではないため、前家、橋家、後家は見られない。主屋の後ろに祠堂が置かれ、祠堂の後は中庭となっている。祠堂は陰陽瓦であるが、主屋の底部分は陰陽瓦ではない。小屋組は主屋、祠堂でそれぞれ異なり、主屋は合掌造り、祠堂は和小屋に似た作りとなっている。主屋の扉や垂木など部材が部分的に取替えられている。店舗として使用されていない。ただし、内職で服飾品をミシンで縫う光景が見られた。主屋は生活空間として使用されているが、台所や風呂、便所は主屋後部に別に設けられている。

2007年から2008年、2009年、2010年にわたって個人の資金で修理が行われている。番付がいくつかの部材に残る。

## (1) 構造

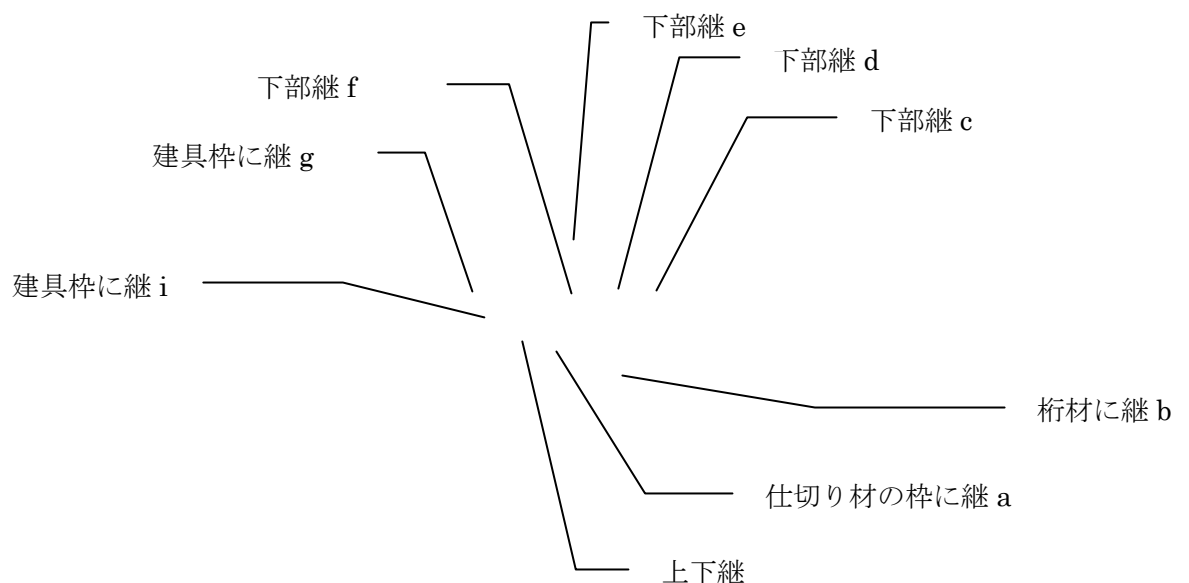
主屋は桁行3間、梁間3間の合掌造り。祠堂は桁行、梁行間の合掌造りである。主屋の前に壁を持たない空間が作られ、小屋組は貴族の邸宅であるレ・ロイ21 (21 Lê Lợi) と類似の形式である。

## (2) 中庭

中庭はないが、チャン・フー通り (đường Trần Phú) からアクセスする道路が細く、主屋前面に空間がある。また、祠堂と主屋の間にも空間があり装飾が施された壁面がある。

## (3) その他

地表面は、全体的に見て北部の方が高い。断面図によると祠堂は主屋より0.335cm高く、主屋と祠堂の間は0.19cm低くなっている。主屋前の道路は主屋より0.27cm低い。主屋は、生活の空間としてのみならず、前面が縫製の作業場となっている。



平面図

最下段は旧  
材、束も旧材

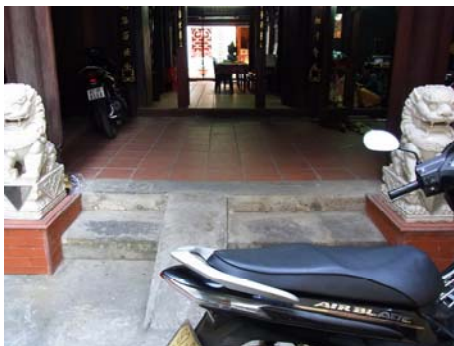
修理後断面図 1999年2月



チャン・フー通りに掲げられている祠堂の看板。李家の祠堂。下部はベトナム語表記である



主屋ファサード。下屋部分



主屋入り口部分の地面。石段が設けられ左右に狛犬のようなものが設置されている。主屋入り口はタイルが敷かれている。



a) 板壁の柱下部に継あり。周辺の材料と表面の色が異なり修理時期が異なる。ベトナムの伝統的な継方をしている。



b) 部材の表面の色が異なるため、修理した時期が異なると思われる。



c) 下部の継は、上部が旧材、下部が新材である。



c) 同様の材料を反対側から見たもの



d) この柱は材料を多く遺す継方をしている。同じ棟に二つの手法が混在しており、法則性もない。



e) 下部継。ベトナムの伝統的な形式を用いている。下部が新材、上部が旧材である。



f) 旧材を多く残す手法を用いている。中央は旧材を多く遺す手法を用いている。材料の腐朽の状況が異なるのか、棟で重視している部分に材料を多く遺す手法を用いるのだろうか。





g) 正面入り口扉の下部に見られる継はベトナムの手法が用いられている。場所による使いわけでもないようである。



主屋正面の材料の塗装が異なり、修理が何度も行われていることが分かる。



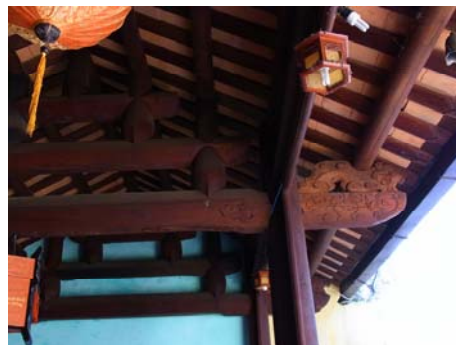
西側の主屋下屋には、他の家屋や祠堂と同様に束が建てられた和小屋の要素が見られる。材料の表面の色から修理されたと判断できる。壁際まで小屋組みがあるのは等級1に多い。



西側から二番目の主屋下屋は材料の表面塗装部位により異なり取替えられたことが分かる。



同じ箇所拡大写真。



東側から二番目の梁材。新材部分の彫刻が復原されており、伝統的な様式を保つために、取替えた材料にも彫刻が彫られている。



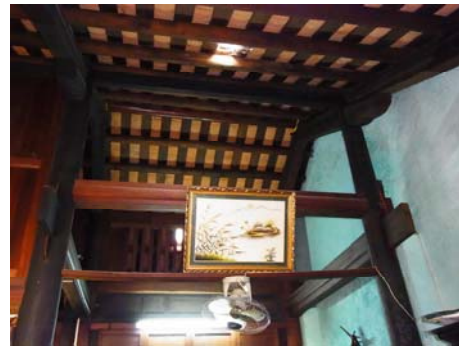
端部の彫刻の拡大。複雑な模様が彫られており、予算を割いていることが窺える。



同様に端部の彫刻が他の場所にも見られる。表面の色がそれぞれ異なり、作られた時期も異なると推測できる。



部位によって色が異なる。主屋内部。東側の間仕切り。板壁部分は上部小壁を除いて材料が取り替えられていることが色から推測できる。



主屋の小屋組みは和小屋の変形である。天井が張られていず小屋組みが見え、壁際にも小屋組みがあるのは等級1だからだといえる。



主屋に設けられた先祖壇。後庭に設置されている祠堂とは別に設けられており、それぞれ意味が異なるのだろう。



部材に残る番付を見ると、この部分は解体をしたことが窺える。全ての材料に残っていないので、どこまで解体が行われたのかは不明。





祠堂のファサードも塗装が施され、修理が行われていることが分かる。



祠堂内部から屋根を見る。陰陽瓦葺きではないようだ。内部の壁も木材ではなくモルタルで作られており、等級1ではないようだ。



祠堂の小屋組みは壁構造であり、壁際に小屋組は見られない。屋根も陰陽瓦で葺かれておらず、棟が異なると修理方法も全く異なるといえる。



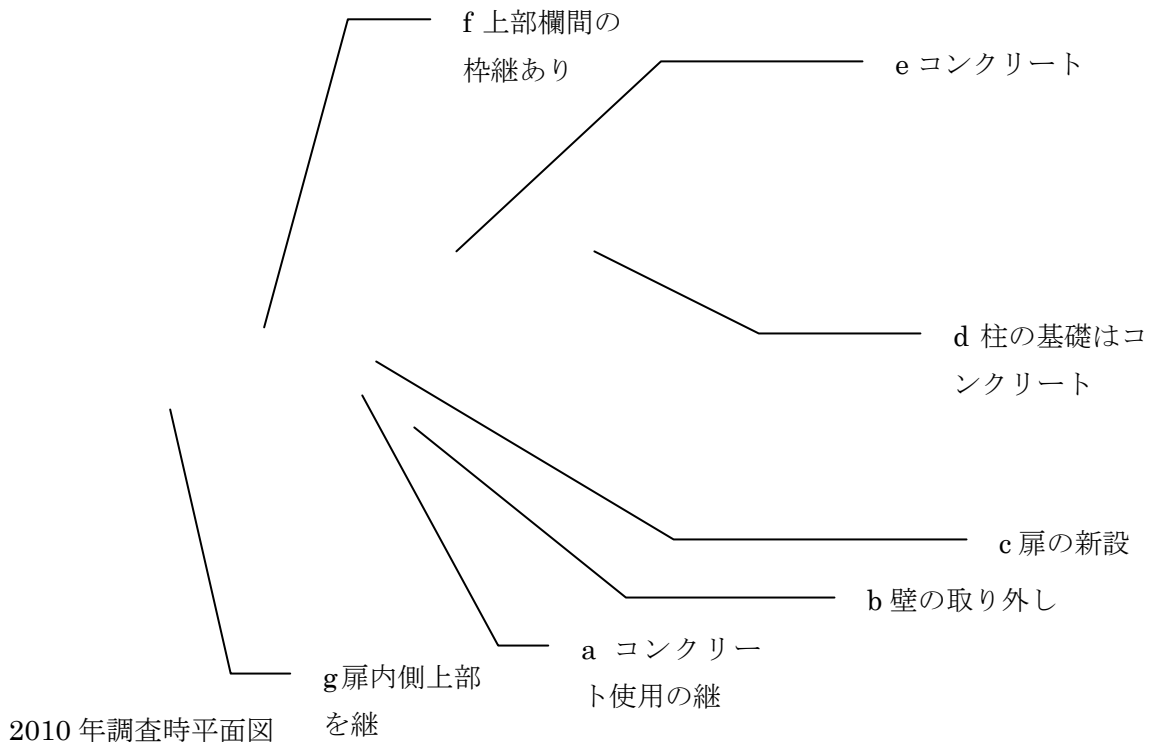
右側が主屋、左側が祠堂。正面奥には装飾を施された壁面と植物が配され、町家の中庭と同様に整えられている。

## 38) チャン・フー113 (113 Trần Phú)

等級1の個人所有の家屋。個人の資金で2007年に修理をした。

前家は店舗として使用され、後は居住空間である。東側は同じ番地で別の店が建てられている。柱の基礎にコンクリートを使用している。壁面の撤去や扉の新設などの若干の変更はあるもの、増築などの目立った変更はない。東側の棟は、図面上は西側の棟から出入りするようになっているが、2011年の時点では道路に面した部分に開口部が設けられた2階建てとなっている。後部は西側の棟の住人が使用している。

平面図1階





中央と左の棟は共にチャン・フー113である。中央の棟は平屋陰陽瓦葺きの伝統的な様式である。



a) 柱上部が継はベトナムの手法が使われている。個人の資金で修理した場合の予算の制約からの選択だと思われる。



b) 壁が外されて部屋が広く使用されている。利便性の向上と伝統的な様式を保つことの折衷案だと窺える。



c) 店舗部分と居住空間を区切る扉が新設された。家屋の使用目的に合わせた改変である。



d) 平らな石の上に乘せられていることが多いが、コンクリートの円柱の上に乗せられている。他の地域でも見られる事例である。



e) コンクリート製の円柱の上に乘せられた柱。文化遺産としての修理から見れば、コンクリートを外す方が望ましいが、構造上問題がないため、修理時に扱われなかったのだろう。



f) 欄間の枠に継があり、旧材を多く遺す手法を用いている。



g) 屋根の桁部分に継があり、旧材を多く遺す手法を用いている。



東側の棟。2階建て、陰陽瓦葺である。



39) バック・ダン 94 (94Bach Đằng)

川沿いに面するバック・ダン通りに位置し、1999 年と 2001 年にホイアン市の予算で修理された等級 2 の個人所有の家屋である。

1 階は飲食店として使用されており、中庭の装飾と井戸が残る。前家の柱や小屋組の材料は木造である。



前面は木製で底が切られて、陰陽瓦が葺かれていることが分かる。



店舗内部は合掌造りで、天井が張られず小屋組みを見せている。等級 2 の内部にはばらつきがある。



中庭から店舗を眺める。前家側の壁面や橋家は木材で仕上げられ、伝統的な様式を保っている。



中庭に残る装飾は、中庭がお茶を飲んだりお客をもてなしたりといった機能を持っていた当時のものだろうか。現在は客席の一部だが、お客に見せるために残しているのだろう。

40) バク・ダン 60 (60 Bạch Đằng)

2006年に個人の予算で修理された個人所有、等級2の家屋で店舗兼住居として使用されている。所有者の意向により内部は前家1階のみ調査できた。棟の構成は伝統的な様式であるが、モルタル仕上げを多用している点は、現代的であり、生活と文化遺産としての保存が行われている。



ファサードはモルタル仕上げの壁と木材を使用した開口部



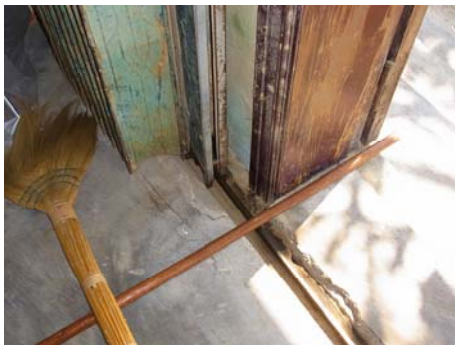
南北方向に走る道路から見た西面。前家、橋家、後家という伝統的な家屋の構成である。



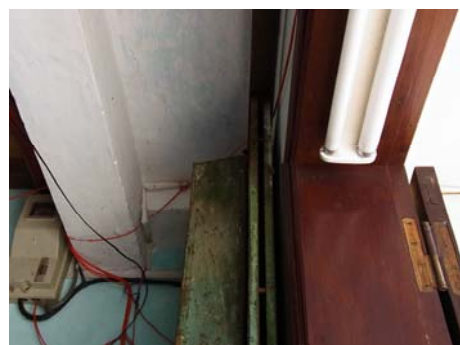
1階天井には根太が張られている。木材を使用している点が伝統的な様式だと言える。



1階内部は壁際に柱がなく中央に置かれ、床はコンクリート。



南側入り口はシャッターと木製の扉が併用されており伝統的な様式と利便性の向上が併存している。



南側入り口の上部の桁はコンクリート製で伝統的な様式ではない部分の復元は行わないことがわかる。



41) ホアン・ヴァン・トゥ 2 (2Hoàng Văn Thụ)

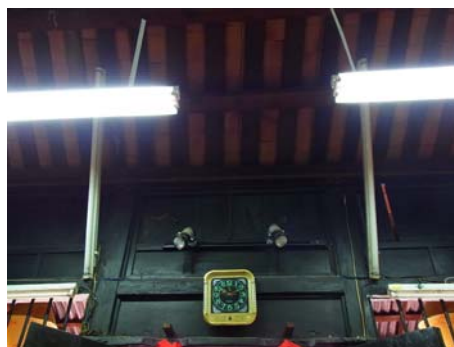
1997 年にホイアン市の予算で修理された国所有、等級 2 の家屋。ホアン・ヴァン・トゥ通り (Hoàng Văn Thụ) は、保存地区を南北に貫くため、家屋は東西方向に位置する。主要な通りは東西に通るために、南北の通りに面する家屋は敷地面積が狭い例が多い。

店舗として使用されている。床はセメント敷きであり、奥との堺には木製の扉が設置され、店舗の天井は新材で一部が覆われている。

調査は店舗部分のみだが柱の継は見られなかった。



庇がトタンで伸長されている。庇自体を伸長するのではない。



後側との仕切りとなる木製の扉。



天井は新材を使用して貼られ、小屋組は見えない。等級 2 では、小屋組みが見られるものは少ない。



床はセメントで覆われている。磚やタイルが用いられることもあった特級や等級 1 とは印象が異なる。出入り口付近に柱がない点も異なる。

42) ホア・ヴァン・トゥ 11 (11Hoàng Văn Thụ)

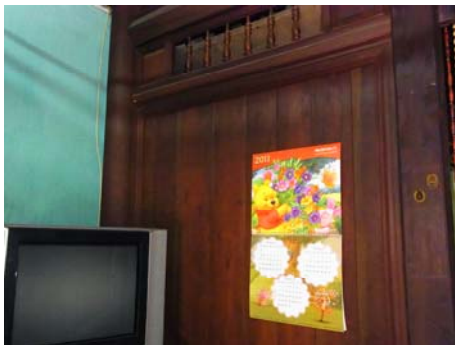
2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。店舗兼住居である。



正面は木材を使用した開口部となっており、歴史的な様式を保っている。



天井が張られず小屋組みが見えるのは歴史的な様式を保つという等級 2 の修理基準に沿っている。



板壁は、修理後も伝統的な様式を保っている。



正面入り口上部も木材が使用され、等級 2 の修理基準が保たれている。



正面入り口部分の床にはタイルが張られている。修理方法として床にタイルを張ることが書かれており、修理方針に沿っている。

43) ホア・バン・トゥ 21 (21 Hoàng Văn Thụ)

2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。柱はなく壁構造であり、根太が張られた 1 階の天井と、床板が見られる 2 階床、天井が張られていない小屋組みを見せている内装は、伝統的な様式を保存していると言える。



フレンチコロニアル形式のファサード。トタン板の庇がついている。



前家 1 階天井は根太が張られ伝統的な様式であると言える。



2 階は天井が張られずに小屋組みが見えている点も伝統的である。陰陽瓦も葺きなおされていることから、湿度の高い現地の様子が窺える。



2 階は木製の床で、伝統的な様式を維持しているといえる。



44) レ・ロイ 45 (45Lê Lợi)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。旅行代理店の店舗として使用されており住居空間はない。



西側、レ・ロイ通りのファサードは木製で仕上げられている。伝統的な様式が維持されている。



南側の外観はモルタル仕上げの壁に木製の開口部が設置されている。屋根の形が伝統的な様式であることが分かる。



南西の交差点から見ると、伝統的な様式の前家のみが使われていることが分かる。



内部の柱には棚が設けられ、パンフレットなどが置かれている。レ・ロイ通り側の開口部は伝統的な様式の落し戸であることがわかる。



レ・ロイ通り側は木材で仕上げられているが、他の壁面はモルタル仕上げでという古都ホイアンの典型的な作りである。



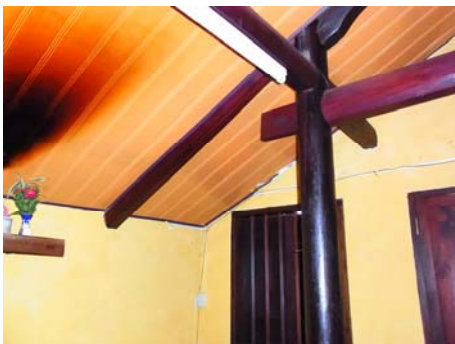
1階天井は根太が張られているが、他の家屋よりも細い。



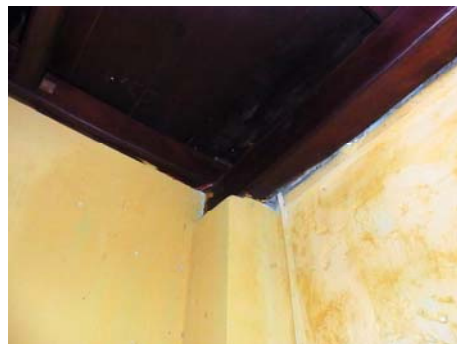
2階では天井が張られている箇所と張られていない箇所があり、使い勝手を重視したと思われる。



天井を張らずに小屋組みを見せているが野地板を貼り瓦が見えない。



野地板の壁面部分に接している様子。野地板を貼ることで雨水が浸透することによる小屋組みや2階の傷みを軽減できるのだろう。



柱はコンクリート、梁と天井は木製という組み合わせ。利便性と伝統的な様式の保存を両立させる手段だと思われる、この家屋以外でも見られる。



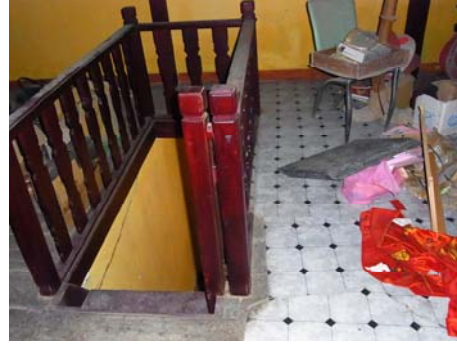
壁面は木材。小屋組みにトタンが張られており、耐久性を高めていることがわかる。小屋組は保存されているため修理基準は守られている。



2階の内部は壁構造であり、小屋組みがなくとも屋根を支えている。部材が壁を突き抜けているところも古都ホイアン内で利便性と伝統を両立する手段として散見できる。



2階の小屋組みは、壁際まである。ただ、トタンに上部が追われており、全体の形は見えない。伝統的な容姿をのこしつつも、



2階から1階へ下る階段の装飾は伝統的な形式であり、床にタイルが張られ、柱の数が少ないという利便性を求めながら、保存できるものを選択しているのだろうか。



小屋組は和小屋である。木材の色が異なるために修理の時期が異なることが分かる。



45) レ・ロイ 49 (49 Lê Lợi)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。店舗兼住居である。

敷地は間口が狭く細長い町家とは異なり、店舗部分はせまいが奥の住居部分は北側に広がっている。その敷地を使用して住居が建てられている。中庭を有するが、配置は町家形式や貴族形式とも異なる。



両側の壁はモルタル仕上げで開口部は木材を使用し、屋根には陰陽瓦が葺かれている点で伝統的な様式である。



店舗の小屋組みは壁際にも設置され陰陽瓦は新しくされている。



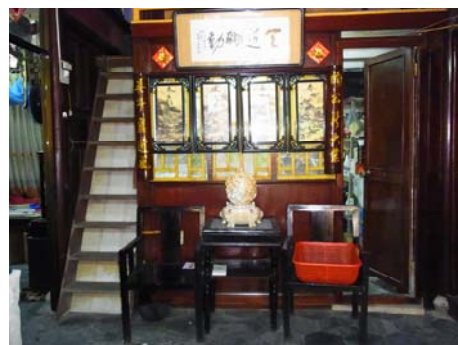
通常中庭は棟の床よりも低いのだが、この棟は同じ高さになる。



中庭への通路の扉も伝統的な様式であり、修理基準を満たしているといえる。



後にある棟は町家ではなく貴族住宅で見られる様式である。



コンクリートが張られた床と階段で伝統的な様式と所有者の利便性の向上の双方を満たした様子が窺える。

46) レ・ロイ 62 (62 Lê Lợi)

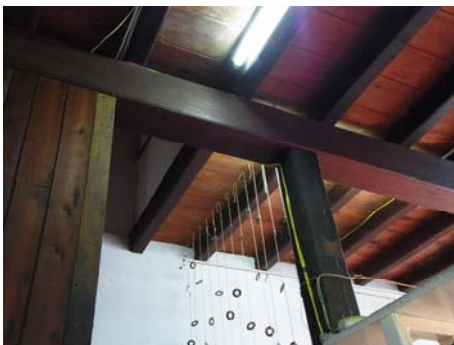
2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋で店舗兼住居として使用されている。前家のみで構成されている柱壁構造の折衷様式で中庭はない。



前家はモルタル仕上げで木製の開口部という伝統的な様式である。



柱には割れが生じている。床はタイルが張られ修理基準に沿ったものである。



1 階前家天井には根太が張られ木材が使用されており伝統的な様式である。



2 階は天井を張らずに小屋組みを見せる伝統的な様式である。



2 階の内部には壁の設置による個室が設けられ、所有者の利便性を図っている。



2 階の柱はコンクリートで小屋組みは木材という、古都ホイアン内の伝統的な家屋の中でも散見できる組み合わせである。



47) レ・ロイ 82 (82 Lê Lợi)

2006 年に個人の資金で修理された等級 2、個人所有の家屋で 1 階前家は店舗として使用されている。北側と南側で別の店舗が入っており、北側は貸し出している。前家のみで構成される。洪水時の荷揚げ枠や天井を張らない小屋組みなど伝統的な要素を保ちつつ、店舗と居住空間を分けるためにプラスチック製の壁を設置するなど、利便性と保存の両立が試みられている。



1 階は木製の開口部と壁面で、2 階はモルタル仕上げと木材の開口部



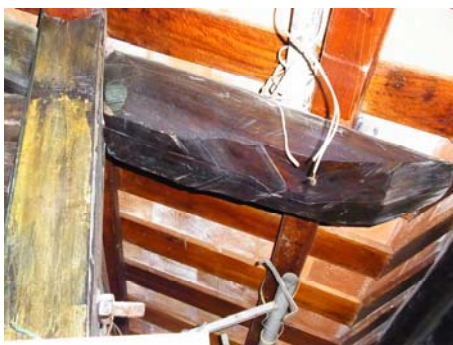
後部との仕切りはプラスチック製であり、伝統的な素材ではないが、生活面での必要性から使用されている。



洪水対策のための荷揚げ用の枠には格子状の蓋が嵌められ、伝統的な要素が維持されている。



2 階は天井を張らずに小屋組みが見られ、伝統的な要素が維持されている。



垂木の端部に施された彫刻



付属屋の屋根と下部に設けられた個室。個室の壁はモルタル仕上げで開口部にはガラスが嵌めこまれ、現代的なものである。

48) レ・ロイ 92 (92 Lê Lợi)

2006 年に個人の資金で修理された等級 2、個人所有の家屋で店舗兼住居として使用されている。前家のみで構成されている。



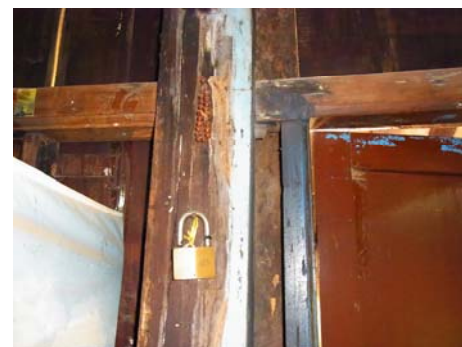
ファサードは木材で仕上げられ、開口部は 4 枚の扉が設けられており



2 階は天井を張らずに小屋組みを見せて伝統的な要素を保っていることが分かる。



2 階では柱が壁に埋め込まれている。壁構造と柱梁構造の折衷だからだろうが、工事の過程でやや配慮に欠ける



湿度が高く雨の多い気候のため、材料表面の劣化が散見できる。日々所有者による家屋の管理が求められていることが納得できる。



ベランダに残る装飾。虹梁が埋め込まれている。伝統的な要素を維持するのなら、内部に塗りこめることは避ける方が望ましい。



ベランダのひさし上部桁に穴が一定間隔で空いている。



2 階の床は家人による補修だと推測できる。軽微な劣化は所有者により手入れされるため、伝統的な要素を維持するためには、所有者の意識も重要であるといえる。



1 階の天井は根太が張られた伝統的な様式を維持している。



1 階天井。桁材が壁に埋め込まれている。梁にかかっておらず、壁に掛けられていることがわかる。柱梁構造と壁構造の折衷が、柱の省略で壁構造になっているか疑問が残る。



同様に桁材が柱に埋め込まれている、また、開口部の桁はコンクリート製の柱の上に乗せられている。



49) レ・ロイ 50(50 Lê Lợi)

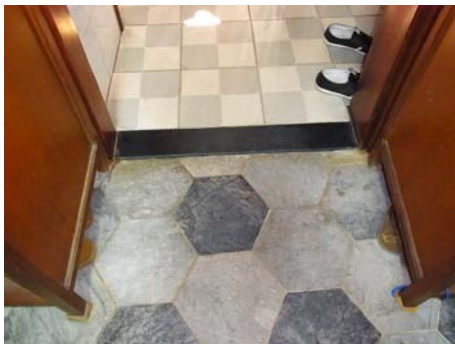
2007 年に個人の予算で修理された等級 2、個人所有の家屋である。店舗として使用されている。前家のみの構成だが、伝統的な要素はあまり見られず、等級 2 である理由が不明。



前家は木製の開口部とモルタル仕上げの壁、側壁もモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた屋根。等級 2 伝統的な要素が内部に多く残ると思われる。



内部には柱がなく、天井は新材が張られている。



床はタイルが張られている。このタイルも基準に則って選択されている。



天井に設けられている神棚の位置は他の家屋に見られるものと同様であり、形式は異なるものの、位置や機能は伝統的な要素が残る。



開口部は伝統的な形式ではないが木製である。



50) グエン・タイ・ホック 90 (90Nguyễn Thái Học)

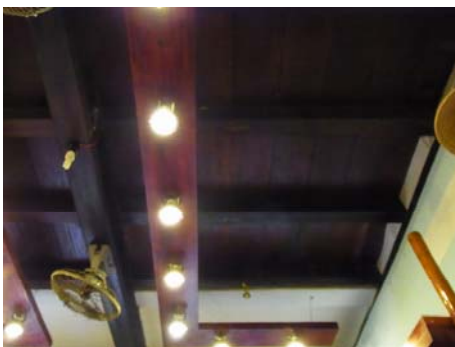
グエン・タイ・ホック通りの南側に位置する等級 2、国所有の家屋である。1997 年と 2004 年にそれぞれホイアン市と省の予算で修理された。ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式であり、道路の 1 階に面した部分は画廊として使用されている。



ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式で 2 階建て、屋根は陰陽瓦葺。どの時代を維持するかという点から植民地時代に作られた様式を選択している。



柱や梁は木製ではなくモルタルである。天井も右側は新材が張られており、特級や等級 1 のような木材だけのものとは異なる。



根太が張られは、伝統的な様式を維持或いは保存している。報告書がないが、材料の風合いから修理後だと思われる。装飾が付けられ、利用者の意向を重視している。



壁面もモルタル仕上げである。修理前にモルタルが使用されていたのだろう。伝統的な様式では木材を使用するが等級 2 では修理後も、モルタル仕上げが選択されている。

51) グエン・タイ・ホック 113(113 Nguyễn Thái Học)

1998 年にホイアン市と JICA の予算で修理された等級 2、個人所有の家屋である。店舗として使用されている。内部は全面が店舗として使用されているためか柱構造で伝統的な要素を多く維持している。等級 2 の状態の良い家屋である。



前家は木製の開口部とモルタル仕上げの側壁で屋根は陰陽瓦が葺かれ、伝統的な要素が多く維持されている。



柱はホイアンの継方で腐朽した箇所を切断して継いでいる。旧材を多く遺す継方は見られなかった。



小屋組は壁際まで設けられ、柱構造と壁構造の折衷である。



柱は上部の腐朽箇所。部材表面が剥離している。

53) グエン・タイ・ホック 100 (100 Nguyễn Thái Học)

1999 年と 2000 年に省と市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋である。前面は店舗として使用され、橋家、中庭、後家は住居として使用されている。店舗は左右で分かれています、2 軒の店が入っている。



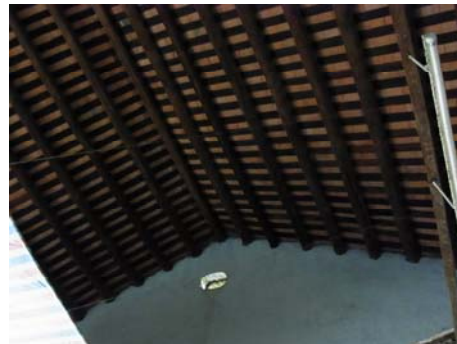
前面はモルタル仕上げで開口部も観音開きの扉が用いられている。



1 階天井と壁。ベニヤ板で店舗内が二つに区切られている。



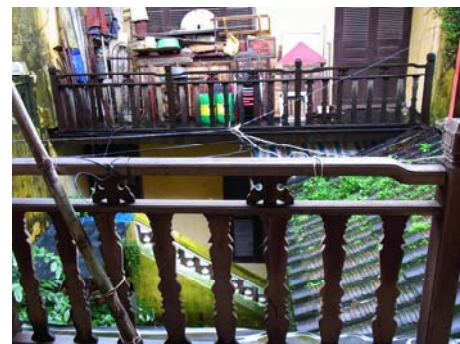
前家 2 階の床は木製で改造が少ない。



前家は小屋組みがなく、外観のみを伝統的な様式としていることが分かる。



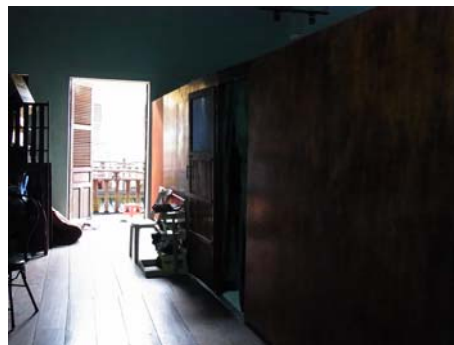
橋家。左手は中庭。橋家が中央で壁に依り区切られ隣接家屋と共有していることが分かる。



橋家は平屋で 2 階が設けられていない。中庭側のベランダは木製の手すり、伝統的な様式を保っている。モルタル仕上げが多い点が等級 2 である理由だろう。



1 階後家。天井には根太が張られ、床はコンクリートである。個室が設けられ、壁もモルタル仕上げで、外観のみ保存されていることがわかる。



後家 2 階。ベニヤ板で区切られた個室が設けられ、居住者の利便性の要求に応えている。



修理ができない個所は天井にビニルシートが張られている。秋の台風による河川の増水や風雪被害など、自然災害による腐朽があるため、常に家屋の手入りに気を配る必要がある。



54) グエン・タイ・ホック 28 (28Nguyễn Thái Học)

2000 年に省の予算で、2005 年に市の予算で修理された国所有、等級 2 の家屋。1 階前家のみ調査できた。店舗は仕立て屋である。



ファサードは周囲の家屋と同様のである。



1 階前家の天井の梁に番付が残る。解体されたことがわかる。



中庭へ抜ける扉は木製で伝統的な様式が部分的に保たれていることが分かる。



拡大した番付。小さい板に字が書かれたものが打ちつけられている。



柱と根太の継ぎ目。梁は古いが柱と 1 階の天井材は新しいことがわかる。



1 階にある荷揚げ用の枠。普段は格子状の蓋がされている。材料の取り換えが行われていると思われるため、伝統的な要素の継承である。

55)グエン・タイ・ホック 55 (55 Nguyễn Thái Học)

2000年に省の予算で修理された国所有、等級2の家屋。店舗は仕立て屋として使用されている。



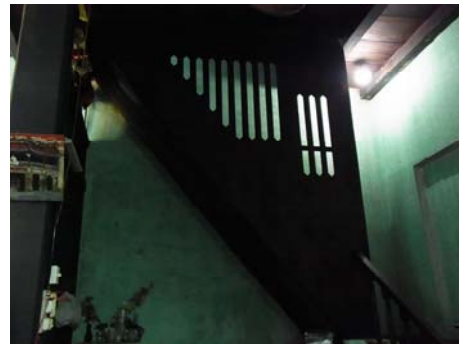
ファサードは独特で二階に装飾が施されている。修理時に伝統的な様式を保つとあるが、伝統的な様式に戻すことは行われていないようだ。



1階天井には根太が張られ、伝統的な様式である。



柱と壁も木製で材料は新しいと思われるため、伝統的な様式の維持だと言える。



2階へあがる階段は木製だが、手すりが設けられ利便性を優先させている。





1 階天井に見られる荷揚げ用の枠。格子状の蓋がされている。河川増水時の家具などを 2 階に避難させるために設けられており、実用性が伝統的な要素を保つ要因である。



1 階床に張られているのはタイルである。床も含めた伝統的な様式を保つという方針は見られず、所有者の意向が反映されていると思われる。

56) グエン・タイ・ホック 84 (84Nguyễn Thái Học)

2000 年に省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。



観音開きの扉と落し度の開口部、つし  
2 階と伝統的な様式を保つ。



前家の小屋組みは特級や等級 1 でも  
見られる伝統的な様式で、壁際まで小  
屋組みがある点も、同様である。



中庭側は板壁で伝統的な様式が保た  
れている。等級 2 は家屋により内部の  
状態が異なる。伝統的な様式は修理基  
準を等級 1 と同様に考えてもいいの  
ではないだろうか。

57) グエン・タイ・ホック 15 (15Nguyễn Thái Học)

2001年に省の予算で修理された等級2の国所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。前家、橋家、後家で構成され、いずれも2階建てであり、伝統的な家屋の構成を維持している。



モルタル仕上げで開口部は窓、扉も観音開きである。2階の窓も観音開きでベランダは付いていない。庇は浅く1階には庇はない。



1階前家には荷揚げ用の杵がある。実用面と前家の伝統的な様式は保存する方針から残したのだろう。荷揚げ杵の2階部分に手すりが設けられている。



荷揚げ用の杵が格子でふさがれている。また、材料の表面の色が異なり、旧材を一部使用していることが分かる。



橋家の柱下部にある継は毎年台風の時期に河川が増水し、浸水する影響だろう。等級2だが前家に加え橋家も保存していることが窺える。



後家の天井にも根太が張られている。  
また、天井に荷揚げ用の杵があり、格子で塞がれている。



1 階後家の天井は材料の色が異なり  
修理されたことがわかる。



2 階小屋組みは左右が壁で支えられ  
壁構造であることが分かる



2 階の床は板張りである。利便性から  
タイルを張る事例もあるが、文化遺産  
としての価値が高い部分は遺す方針  
が窺える。



58)グエン・タイ・ホック 17 (17Nguyễn Thái Học)

2001年に省の予算で修理された等級2、国所有の家屋。

店舗兼住居として使用されている。道路からの写真でもわかるように、通常は前家の位置が隣り合う家屋とはずれるが、この家屋がある棟から西側2棟は前家の位置が同じである。



中央、左右共に開口部は観音開きである。2階は中央にのみ開口部が設けられ、1階2階とも木材が使用されている。壁面はモルタル仕上げ。



棟が連続していることがわかる。対象は左から二番目である。古都ホイアン内で類似した棟が連続している場所は他にも散見できる。



扉は木製で床はタイルが敷かれている。



2階から見た前家にある荷揚げ用の桟。浸水時に使用する実用性と、等級2の前家の伝統的な要素は保存するという両方の点から維持されているのだろう。



2 階の柱。下部に継がある。床は板が張られ、伝統的な要素は残すという修理方針が窺える。



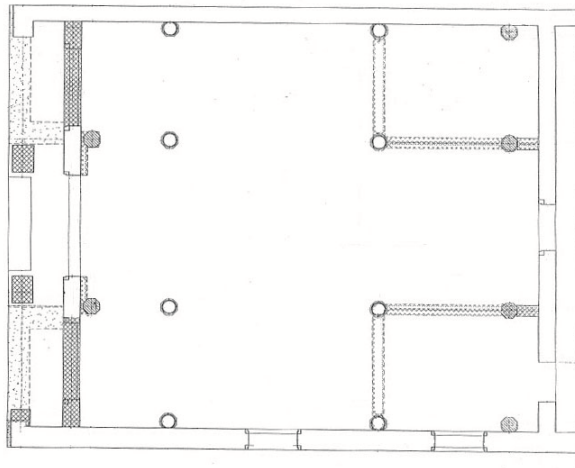
中庭側の扉は材料の表面の色が異なり、旧材が使用されていることが分かる。建具も伝統的な要素の一つとして保存されている。



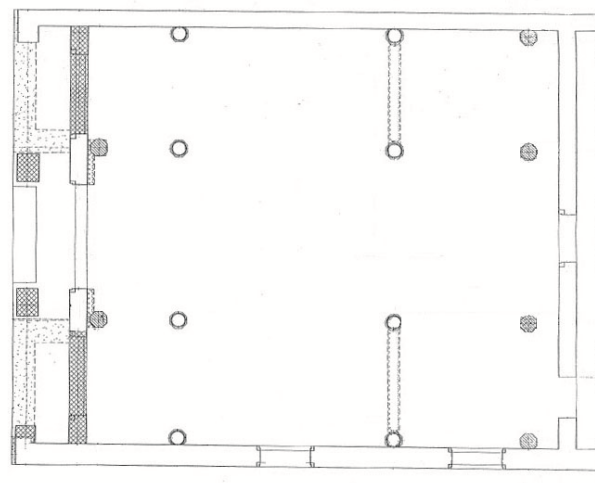
59) グエン・タイ・ホック 117 (117Nguyễn Thái Học)

等級 2 に分類され、2001 年、2002 年に JICA とホイアン市の資金でそれぞれ修理された個人所有の 2 階建て家屋である。2011 年調査時は画廊兼住居として使用されていた。前家に当たる部分のみで構成され、後部に水回りが集中し、1 階が画廊、2 階が作業場と生活空間であり、画家である所有者が子供と居住している。桁行 5 間、梁間 5 間、柱は全て丸柱である。グエン・タイ・ホック通り側に 950mm ほど庇が出ている。所有者は画家であり、2009 年頃に家屋を前の所有者から購入した。

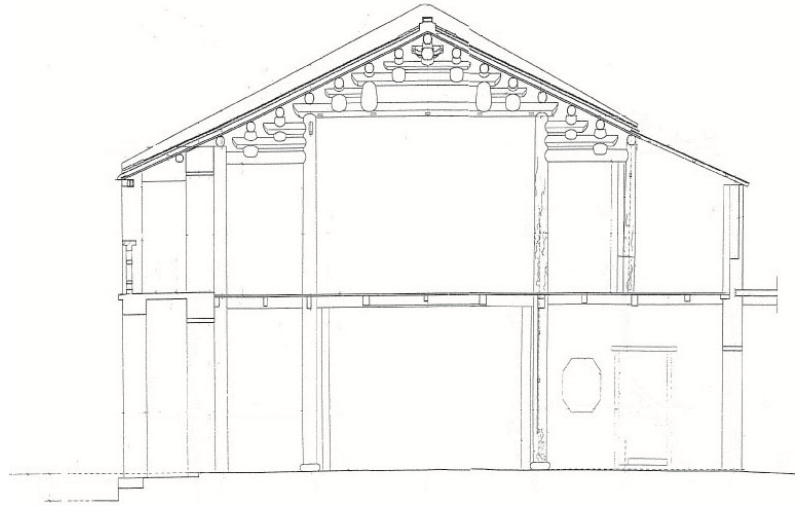
2001 年 8 月平面図



2010 年調査時平面図



2001 年 8 月断面図



1 階開口部はいずれも木製、左右の開口部は蔀戸で伝統的な様式である。2 階のベランダも木製である。



西側から見た外観。左右の壁はモルタル仕上げで、家屋は道路より高く盛られた土台に建つ。



道路との段差は大きい。河川の増水や河川に向かって傾斜のある土地を考慮したものだろう。



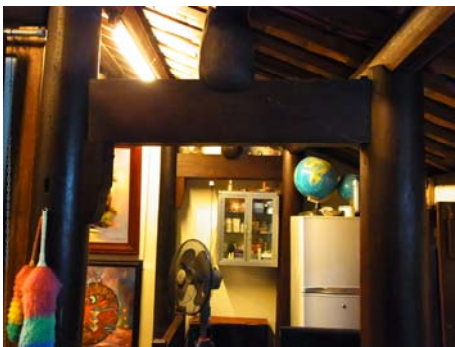
1 階の柱にある継。下部が新しく上部が旧材である。やはり、柱は下部が傷む。



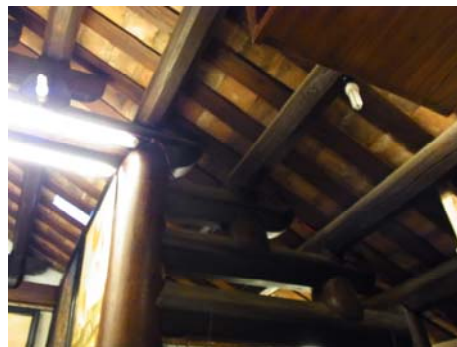
2 階の柱にある継。右側が新材であり、旧材を多く残す継方である。同じ家屋の中で継の手法は混在している。



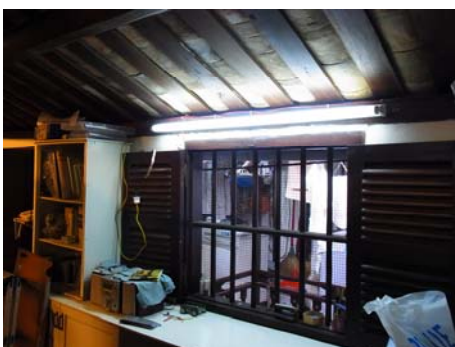
小屋組みは束のある形式が壁際に作られており、等級 2 の家屋の中では珍しい。



屋根の高さは低い。2 階を設けていない家屋もあるが、この家屋は床を張って 2 階を設けている。



屋根が高いため、小屋組みの高さまで部屋として使う。



前家後部にある水回り。通風や採光といった中庭が持つ機能を置いている。

60)グエン・タイ・ホック 53 (53 Nguyễn Thái Học)

2001 年に省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。全体が人民委員会としてに使用されている。前家、橋家、後家で構成され、全棟が 2 階建である。



正面は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式で、庇の前に柱が設けられ、2 階にベランダが設けられている。いずれもモルタルが使用されており、他の家屋とは異なる印象である。



前家 1 階の柱の周囲に取り付けられた補強。壁際に柱はなく、中央にある柱には下部にこうした補強が行われている。木製の柱と礎石という組み合わせとは異なる。



1 階前家から橋家に続く通路。柱、壁共にモルタルが使用されており、等級 2 だが他の家屋とは異なる印象である。



1 階前家天井には根太が張られており、この点は他の家屋と同様である。



2 階小屋組み。壁構造と柱梁構造の折衷である。天井を張らずに小屋組みを見せている点は等級 2 の伝統的な要素を維持するという修理方針に基づいていると思われる。



61) グエン・タイ・ホック 19 (19 Nguyễn Thái Học)

現在は使われていないため、内部調査はできない。2002年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級2、国所有の家屋である。



外観は1階中央に木製観音開きの扉、左右の窓も木製の観音開き。2階は中央に木製の開口部がある。壁面モルタル仕上げ。



北東からのファサードの様子。3軒が連なっていることが分かる。伝統的な様式とは異なるが、古都ホイアン内に散見できる連棟の一つである。



北西からのファサード。連なっている3棟はファサードの意匠がほぼ同じであることがわかる。庇も浅い。



62) グエン・タイ・ホック 130 (130 Nguyễn Thái Học)

2002 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋である。博物館として開館するために準備されているため、居住空間はない。前家、橋家共に 2 階建てで中庭を有する。中庭には井戸があり、伝統的な様式を保持している。ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式である。



1 階は中央に木製観音開きの扉、2 階はベランダがある。看板建築である。



西側から見ると切妻屋根が掛けられていることが分かる。



2 階前家は天井が張られ小屋組は見られない。



中庭は井戸を有したタイル敷きの床。東側（写真右手）の橋家は平屋建て陰陽瓦葺き。西側の橋家は 2 階建て。



2 階はベランダが設けられている。壁面はモルタル仕上げで階段が設置されているなど伝統的な様式を保ちつつ利便性を高めている。

63) グエン・タイ・ホック 98 (98 Nguyễn Thái Học)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、個人所有の家屋である。一階は飲食店として使用されており、前家 2 階は住み込みで働く従業員の生活空間である。階上には屋上が設けられ、チャン・フー通りからも入ることができる。



前面はモルタル仕上の壁と木製の開口部。2 階の開口部が青く塗られているのは、色の規制がはっきりとしていないためだろうか。



1 階前家の天井は新しい材料覆われており、根太はない。等級 2 の修理基準と照らし合わせると元々伝統的な様式ではない。



橋家に当たる部分も飲食店の内部となっており、中庭は見られない。壁面の仕上げはモルタルが用いられている。



柱には角材が使われタイルが張られている。



2 階の床は板張りで、伝統的な様式を保つという修理基準に沿ったものと言える。ただ、荷揚げ用の枠はない。



2 階には屋上が設けられ、中庭と同様の役割を果たしている。



チャン・フー通り側は建造物がなく、客席としてのみ使用されている。建造物が密集している中では変則的である



チャン・フー通り側の店舗の外観の意匠は伝統的な形式ではない。全体の保存や伝統的な様式にする必要がないために、所有者の利便性を優先させている。



1 階天井には根太が張られている部分もあり、伝統的な部分は維持するという修理基準に沿ったものとなっている。



64) グエン・タイ・ホック 48(48 Nguyễn Thái Học)

2004 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。前家 1 階は店舗として使用されている。



正面はモルタル仕上げの壁と木製の開口部。



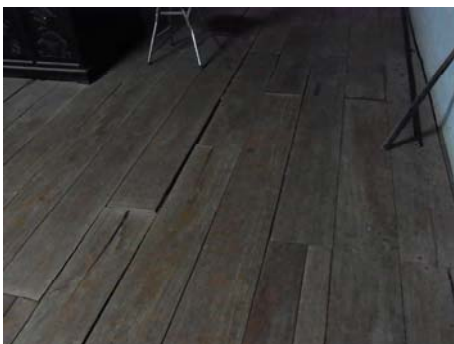
前家 1 階天井。根太が張られ、荷揚げ用の穴は格子で塞がれている。



入り口の外側はコンクリート、内側はタイルが敷かれ、修理基準に沿っている。



2 階前家は天井が張られず小屋組が見られる。ただ、小屋組みがなく壁構造である。また、瓦が取替えられていることもわかる。



2 階前家の床は板張りで、伝統的な様式を保つという修理基準に沿っていることが分かる。

65) グエン・タイ・ホック 50(50 Nguyễn Thái Học)

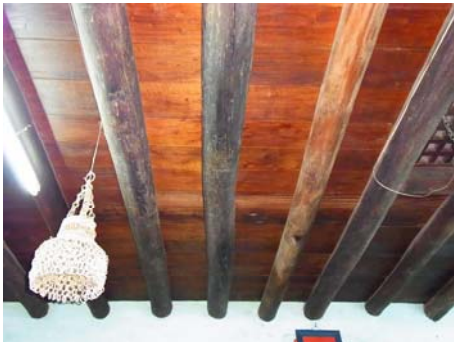
2004 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。



前家はモルタル仕上げの壁と木材を使用した開口部。



前家 1 階天井の荷揚げ用の枠は格子で塞がれている。伝統的な様式を保っている。



前家 1 階天井の根太が取替えられていることがわかる。根太天井という伝統的な要素を維持していることが分かる。



前家 2 階は壁構造で、陰陽瓦が葺かれ修理基準に沿っているものの、小屋組はない。この構造は等級 2 以下の家屋では散見できる。

66) グエン・タイ・ホック 61(61 Nguyễn Thái Học)

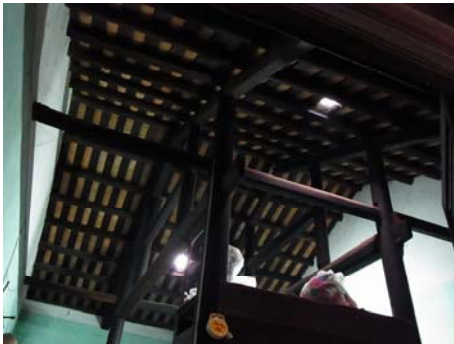
2004年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級2、国所有の家屋。1階は店舗、2階は住居として使用されている。



前家はモルタル仕上げの壁に1階、2階共に木材の開口部という等級2では散見できる様式である。



1階前家天井。根太が張られている



天井が張られず小屋組みが見える作りをしている。歴史的な様式を保つという修理基準に則っている。



階段の手すりは、修理後も伝統的な様式を維持していると考えられる。



橋家の瓦は新しく葺かれている。高温多湿のため傷みは激しい。



67) グエン・タイ・ホック 118 (118 Nguyễn Thái Học)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋で店舗兼住居として使用されている。前家のみで構成され、柱や梁などの部材にチョークで書かれた番号が残り、一度解体され組み立てられていることがわかる。



東側からの外観は、両側がモルタル壁で陰陽瓦を葺くという伝統的な様式が窺える。



前家の前面 1 階は木材で仕上げられている。左右の開口部も蔭戸が用いられた伝統的な様式である。



2 階は天井を張らずに小屋組みを見せている点が伝統的な様式を保つという修理基準に則っている。



2 階の柱に書かれた修理時の番付。「D8」と読める。



同様に柱に書かれた修理時の番付。「D9」と読める。



同様に番付の跡が残る。各部材に細かく打たれており、旧材をできるだけ遺すという、日本人専門家の考え方が活かされている。



こちらは小さい板に書かれ材に打ちつけられた番付である。番付手法が異なる理由は不明。



やはり、柱にチョークで書かれた番付で「E9」と読める。



材料色が異なり、修理されたことや修理後も旧材を使用していることが分かる。



壁に書かれたものの意味は不明。他にも例は見られない。電気等の設備が前家に設置されており、外観への配慮が必要である。

68) グエン・タイ・ホック 91 (91 Nguyễn Thái Học)

2006 年に個人の予算で修理された等級 2、個人所有の家屋で、前家 1 階は店舗として使用されている。調査できた前家 1 階には伝統的な要素が余り残っていないため、前家 2 階及び橋家や後家、中庭に伝統的な要素が多く残ると推測できる。



モルタル仕上げの壁面に木製の開口部という古都ホイアン内で多く見られる様式である。



3 軒が連なる様式は古都ホイアンで散見できる様式である。



1 階前家の天井は新材が張られ、荷揚げ用の杵はない。また、柱はなく壁構造であり、伝統的な様式はあまり見られない。



1 階前家正面左側の開口部を見ても、伝統的な様式ではない。等級 2 に分類されるということは、別の部分に伝統的な要素が多いと考えられる。

69) グエン・タイ・ホック 34 (34 Nguyễn Thái Học)

2007 年に個人の予算で修理された個人所有、等級 2 の家屋。店舗兼住居である。前家と後家から構成され、いずれも 2 階建てである。



側壁、前面の壁共にモルタル仕上げで間口も狭く伝統的な様式とは異なる。



1 階天井には根太が張られ柱がない。



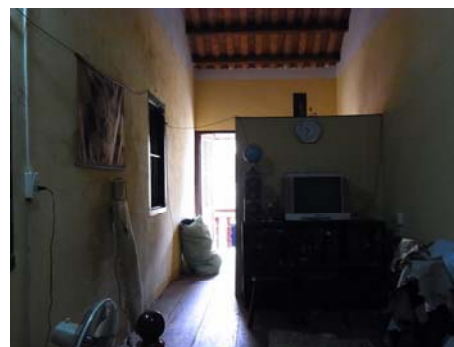
2 階床は板が張られ、伝統的な様式を維持している。



前家の小屋組はなく壁構造である。



後家の 2 階は壁により個室が作られている。



前家 2 階の内部には、モルタル壁で個室が作られている。居住者の利便性と文化遺産としての保存の両立手法だと言える。



70) グエン・タイ・ホック 59 (59 Nguyễn Thái Học)

2007 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。飲食店として使われており、居住空間はない。



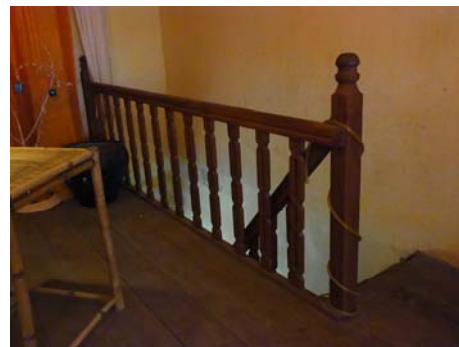
側壁、前の壁共にモルタル仕上げで開口部は木材を使用している。



1 階前家内部。柱はなく壁構造でタイルが敷かれている。



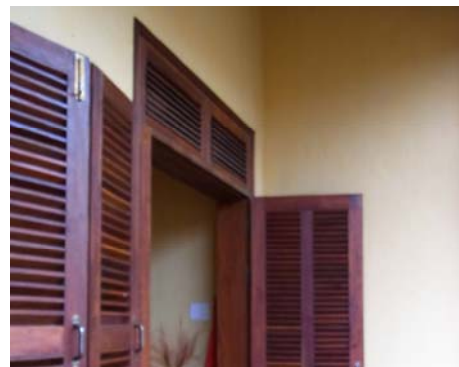
1 階天井。浸水対策時の荷揚げ用枠は格子で塞がれながら維持されている。



階段の手すりは伝統的な様式である。細部に伝統的な要素が見られる。



2 階。中央にあるのは浸水対策用の荷揚げ枠で、床も板材が使用され伝統的な要素が残されている。



2 階開口部は木材を使用しているが伝統的な様式ではない。



小屋組は見えない



2 階庇部分は野地板に直接瓦が載せられている伝統的な様式である。



2 階ベランダ部分の手すり。木製ではなくコンクリート製であり、古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の要素が含まれている。

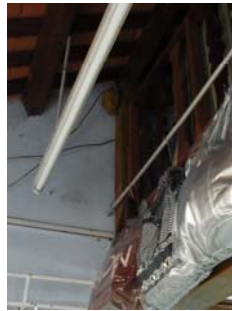


71) グエン・タイ・ホック 69 (69 Nguyễn Thái Học)

2007 年と 2008 年に個人の資金で修理された等級 2、個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されながら、内部の中庭や板壁、階段などは伝統的な様式が維持され、陰陽瓦で葺かれた屋根という修理基準も守られている。報告書がないが材料の風合いから修理後だと思われる。



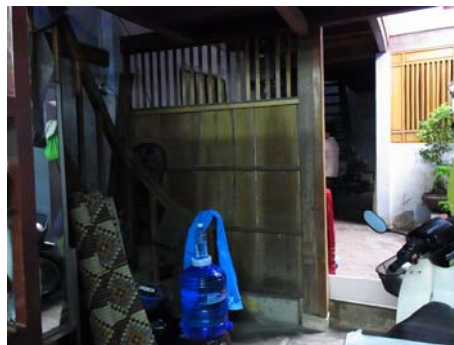
側壁はモルタル仕上げで、開口部は全面木製の扉が使用された伝統的な様式の変形だといえる。



前家は小屋組みが見えないが、中 2 階も含め伝統的な様式が維持されている。



前家小屋組みは、伝統的な様式を維持している。



中庭や仕切りの板壁など、伝統的な要素は維持されている。



階段は伝統的な様式が維持されている。



後家 2 階。小屋組はなく壁構造で、前家とは異なる。陰陽瓦が葺かれ、修理基準は維持されている。

72) グエン・タイ・ホック 72 (72 Nguyễn Thái Học)

2007 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。全面が病院として使用されている。前家は 2 階建てで中庭には便所が設置されている。階段の形や中庭が維持されている点などは伝統的な様式だが、内部は病院として使用されているため利便性や耐久性を重視してかモルタル仕上げが目立つ。



側壁、前面の壁共にモルタル仕上げで開口部は木製で内部が伝統的な様式だと考えられる



1 階前家内部。板で区切られた個室は診療室として使用され、伝統的な要素は見られない。



1 階前家天井。柱の上に梁が掛けられているがモルタルで仕上げられ伝統的な要素は見られない。



橋家に当たる棟は物置として使用されており、伝統的な様式ではない。



階段の手すり。伝統的な形式を残しながらも 1 階は木製、2 階部分はコンクリート製である。



前家 2 階内部には新材を使用した壁で区切られた個室が作られている。あくまでも病院としての使用を第一に考え、天井も新材で張られている。

73) グエン・タイ・ホック 108 (108 Nguyễn Thái Học)

2007年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級2、国所有の家屋である。

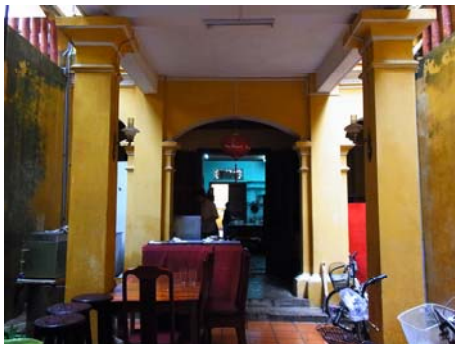
全面的に飲食店として使用されているため、居住空間はない。伝統的な構成を残しつつも、飲食店としての使用が優先されている。高さ規制のある中で元々高かったのか、3階建てで、修理の際に高さを低くすることは行われていない。



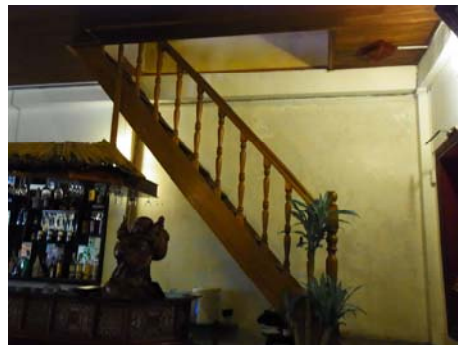
側壁と前面の壁はモルタル仕上げで開口部に木材が使用されている。



1階前家は新材が張られた天井とモルタル壁で構成され、開口部の形も現代的である。



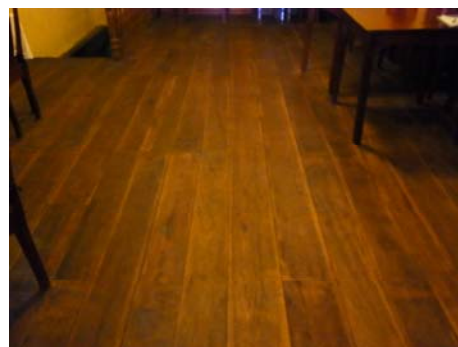
橋家はモルタルが使用され、フレンチコロニアル形式である。床にタイルが敷かれている点のみ修理基準に沿っている。



店舗部分にある階段は伝統的な形式を模している。



1階後家の調理場は、モルタル壁に新材の個室壁面と天井で仕上げられ、伝統的な要素は見られない。



2階の床は木製で伝統的な家屋の要素を残している。





2 階前家の内部に柱はなく、新材の天井で仕上げられている。



橋家。屋根は陰陽瓦で葺かれているが、基本的にはコンクリート造である。



2 階後家の内部には柱はなく、開口部の形式も演題的なものである。



3 階に上がる階段。伝統的な形式を模している。



3 階の内部にも柱はない。いずれの部屋の床も板が張られている点が伝統的な様式が保たれているといえる。

74) グエン・タイ・ホック 67 (67 Nguyễn Thái Học)

2008 年、2009 年、2010 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋である。全面が店舗として使用されているため居住空間はない。前家平屋、橋家、後家共に平屋だが、後家には中 2 階がある。棟の構成は伝統的だが、内部は



側壁がモルタル仕上げで前は全面木製の開口部という伝統的な様式の変形版



前家は天井が張られずに小屋組みを見せており、伝統的な要素が維持されていることがわかる。



床にはタイルが張られ、手引書の修理方針に則っている。



後家から橋家を見る。壁はモルタル仕上げ、床はタイルで、修理方針に沿っているが、伝統的な要素はない。



後家の小屋組はなく壁構造であることがわかる。陰陽瓦が葺かれ修理方針には沿っている。



階段も伝統的な形式だが壁はモルタル仕上げという部分的な保存である。



前家と橋家の間はモルタル壁で、梁が残され伝統的な様式は窺えるが、耐久性を鑑みてかモルタルが使用されている。



橋家の小屋組はなく壁構造だが、陰陽瓦が葺かれ、修理方針に則っている。



75) グエン・ティ・ミン・カイ 12 (12 Nguyễn Thị Minh Khai)

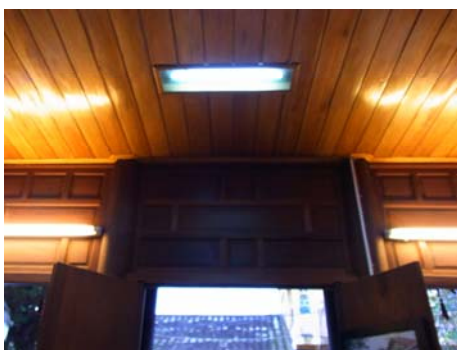
2006 年に個人の予算で修理された等級 2、国所有の家屋である。国所有の家屋が個人で修理されることは珍しい。調査は前家のみ行えた。調査できた前家において伝統的な様式は陰陽瓦とファサードのみである。



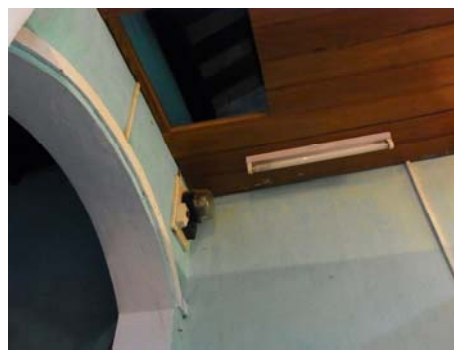
前家は壁、開口部共に木材で仕上げられ、モルタル製の壁と陰陽瓦が用いられている伝統的な様式である。



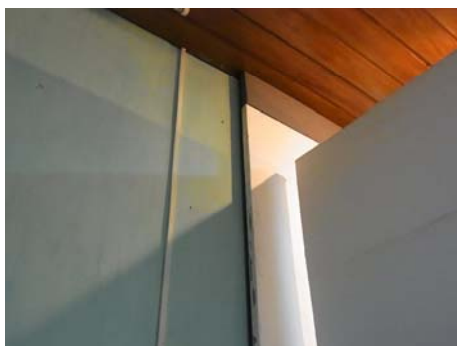
敷地は盛り土されており、正面開口部下部には階段がある。伝統的な様式ではないが、保存地区で散見できる。



前家内部は天井に新材が用いられている。



前家 1 階は天井材が張られているため小屋組は見えない。付属屋への開口部はモルタルで仕上げられ伝統的な様式ではない。



壁には薄いベニヤが張られ、店舗として使用し易いようにされている。柱はなく壁構造であり、伝統的な要素は外観のみとなる。

76) ファン・boy・チャウ 36 (36 Phan Bội Châu)

2001年に個人の、2004年にホイアン市の予算で修理された等級2、個人所有の家屋である。2011年の調査時点では店舗兼住居として使用されていた。



外観は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築だが、屋根に陰陽瓦が葺かれ、底に柱が建てられ回廊が作られている。



前家には天井が張られている。壁はモルタル仕上げで、天井材も新材である家屋が入っている点が、特級や等級1とは異なる。



前家から後部への通路。左側の壁は店舗との境界。取り外せるような設置方法である。床はタイルを敷いている。家屋の構造には手を加えず、伝統的な様式を残す一方で利便性を重視した。



後家の天井にも根太が張られており、等級2でも伝統的な要素は保っている。



床と柱。前家と異なり礎石と木製の柱を用いた伝統的な様式である。等級2は前家の保存が基準となっているが後家の伝統的な要素も保存されている。



後家の小屋組みはトラス風である。修理申請をした調査を行った家屋の中でこの小屋組は珍しい。



後家の別棟の小屋組は、壁構造である。陰陽瓦は葺かれているが、内部の形式は棟により異なる。



前家はやはり壁際に小屋組はなく、基本的には壁構造である。陰陽瓦は葺き替えられている。

77)79) ファン・ボイ・チャウ 33,35 (33,35 Phan Bội Châu)

2002 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された国所有、等級 2 の家屋である。ホイアン市観光局の事務所として 33 番、35 番の両方が使われている。中庭を有した古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の棟である。



2 棟を連続して使用しているため、道路面の開口部は広い。古都フレンチコロニアル様式のファサードに陰陽瓦が葺かれており、修理方針に沿ったものとなっている。



東側の前家の棟は天井が新材で張られ、柱上部に継がある。壁はモルタルで仕上げられ、木製の壁が用いられる伝統的な様式とは異なる。



室内の開口部は木製

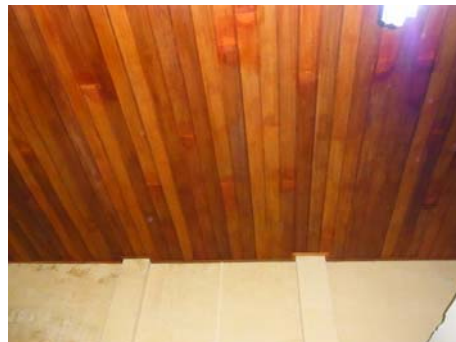


中庭。33 番と 35 番が連続しており、その中心に前家と後家をつなぐための廊下がある。





後家の内部。柱が壁に塗りこめられているのは、利便性からか。



平屋だが小屋組は見え、新材で天井が張られており、伝統的な様式ではない。



東側前家下部の柱には継が見られる。旧材を多く遺す継方をしている。



西側前家の柱の継も旧材を多く遺す継方をしている。



西側の執務室内部。

78) ファン・boy・チャウ 34 (34 Phan Bội Châu)

2002年にクアンナム・ダナン省の、2005年にホイアン市の予算で修理された等級2、国所有の家屋。全面が診療所として使われており、前家1階、橋家1階、後家2階建であり、中庭と後庭を有する。



フレンチコロニアル形式のファサードは、庇の周りに手すりが回されている。



屋根には陰陽瓦が葺かれ、看板建築のようになっている。



前家の天井は新材を使用しており、平屋だが小屋組みの見える伝統的な様式ではない。壁もモルタル仕上げである。



橋家に続く廊下との堺に建具はなく、壁面もモルタル仕上げで床はコンクリートが使用されている。診療所としての使用目的に沿った作りである。





中庭は維持されている。



棟は途切れることなく診療所として使われている。



後家 2 階の小屋組みは壁構造である。



床は板張りで階段の装飾も伝統的な様式である。

80) ファン・ボイ・チャウ 45 (45 Phan Bội Châu)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋で店舗兼住居として使用されている。他の家屋よりも間口の幅が狭い。所有者の意向により前家のみの調査である。店舗として使用されている棟は、壁構造で陰陽瓦が葺かれ、等級 2 としての伝統的な要素を十分に持つとはいえないため、中庭や後家にその要素があると推測される。



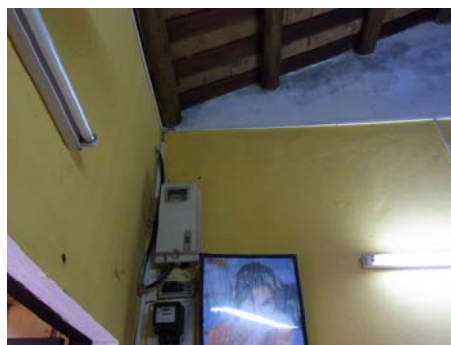
前面はモルタル仕上げの壁と陰陽瓦が葺かれている。



前家は小屋組みがなく壁構造である。



床は模様が描かれたタイルが使用されている。



壁面はモルタル仕上げで柱がない。間口が狭い棟は柱を持たない一因ではないか。



正面の庇。屋根は野地板の上に直接瓦が葺かれている。軒桁に当たる部分はコンクリート製。

81) ファン・boy・チャウ 38 (38 Phan Bội Châu)

2006 年に個人の資金で修理された等級 2、個人所有の家屋で店舗兼住居である。1 階前家は店舗として使用されている。



庇を伸ばしているのは日差しの強さだろう。



1 階前家は天井を張らずに小屋組みを見せている。瓦が葺き替えられている。



床はコンクリートが使われ、タイルを敷く修理基準とは異なる。



壁際には小屋組はなく壁構造であるが、木材を使用した壁が維持され伝統的な様式を維持している。



礎石と柱が建てられていることは、伝統的な様式の保存であるといえる。

82) ファン・チャウ・チン 21 (21Phan Châu Trinh)

2002 年、2007 年、2008 年に個人の資金で修理された、等級 2、個人所有の家屋である。祠堂兼住居として使われており通常は見学できない。祠堂の後ろに後庭がある。



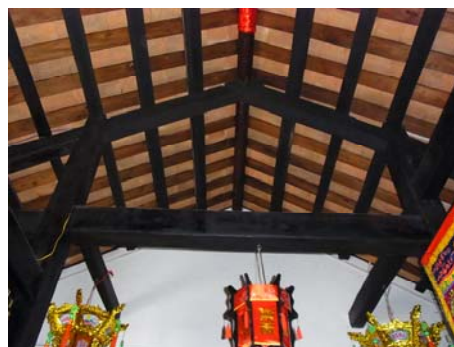
前面は扉、壁共に木製であり、陰陽瓦が葺かれ伝統的な様式である。右側の扉は後部への入り口である。



材料の風合いから、扉や木材を前面取り替えていることが窺える。



西側の入り口。屋根にトタンが葺かれている点は、等級 2 の修理基準として前家の伝統的な様式の維持以外決められていないためだと言える。



祠堂小屋組みは、和小屋のようである。天井が張られず小屋組みを見せるのは、伝統的な様式。陰陽瓦は葺きなおされており、当地の湿度が高く、材料の傷みの激しいことが窺える。





祠堂上部に設けられた装飾は、この祠堂独自のもののようである。



床には土間や磚ではなくタイルが張られ、利便性を重視している。礎石が薄く独特である。



壁面はモルタル仕上げだが窓は木製である。



屋根の垂木には継があり、旧材を残す手法が用いられていることが分かる。

83) チャン・フー115 (115Trần Phú)

1999 年と 2000 年に日本の予算で修理された個人所有の等級 2 の家屋で、店舗兼住居である。水回りは 1 階の後ろに設けられている。



周囲は平屋だが、2 階建てのため高さが目立つ。



後家から見た内部。前家が 2 階建て、中庭は室内化しており屋根が掛けられ、後家は平屋である。店舗としての利便性を優先させたものである。



前家から入り口を見る。天井に根太が張られており柱は木製の角型である。床はタイルが張られている。



1 階は一つの空間として設えてあるため、橋家から後家へあがる階段も、装飾の一つに見える。





中庭にかけられた屋根は開閉ができる。中庭は町家の換気や採光機能を持つため、こうした形で維持している。



前家 2 階は天井が張られず小屋組みが見えている。こうした部分は伝統的な様式が保たれている。



同様に前家 2 階。壁面も木製でできている。柱が建てられている。柱は丸型である。



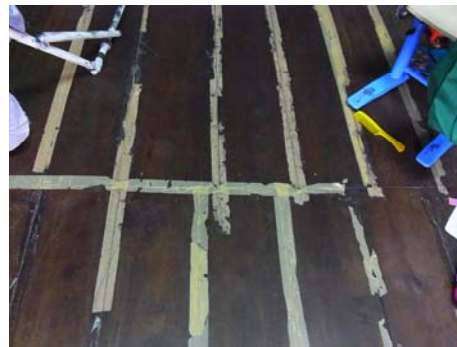
2 階の床は板が張られており、伝統的な要素を継承している。

84) チャン・フー125(125 Trần Phú)

1999年にホイアン市の、2000年に個人の予算で修理された等級2、国所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。



周囲に調和したファサードで、2階はモルタル壁で開口部が木製である。



2階の床の補修は所有者もしくは店舗経営者が一時しのぎのために行ったと思われる。



小屋組みがなく壁構造である。壁の剥離が激しいのは、湿気の多い気候と秋の台風による河川の増水の影響だろう。家屋の日常的な維持と管理の欠かせないことがよくわかる。



壁の劣化。表面に塗られたモルタルが剥がれ落ち、内部の煉瓦が表れている。2, 3年おきに塗り直すようにしても、間に合わない部分がある。

85)チャン・フー34 (34 Trần Phú)

2001 年に個人の資金で修理された個人所有等級 2 の家屋。店舗として使用されている。  
所有者が調査拒否をしたため、外観のみとなる。



庇の柱は木製で、壁はモルタル仕上げである。屋根は庇が浅いため、トタンを用いて伸長している。当地は日差しが強く、このように庇を別の素材で伸ばす事例が散見できる。

86)チャン・フー95 (95Trần Phú)

2001年に個人の資金で修理された個人所有、等級2の家屋。画廊として使用されている。住居の有無は不明である。2階のベランダはモルタル製であり、内部も天井に伝統的な要素を持つものの、利便性を重視した作りである。



開口部は出入り口が右側、左は木製の開口部である。中央に開口部のある伝統的な様式とは異なる。



1階天井は根太が張られ、伝統的な様式が残されている。



1階の天井は2階床の根太と梁が組み合わされている。根太の一部は材料が取り変えられており、できるだけ旧材を残す方針を窺える。

87)チャン・フー154 (154Trần Phú)

2001年にホイアン市の予算で修理された等級2、国所有の家屋である。外観は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式で、店舗として使用されている。内部の撮影は所有者が拒否したため、外観のみとなる。



中央に観音開きの扉が設けられ、左右は木製の開口部で陰陽瓦葺かされている。等級2の修理基準である前家の伝統的な要素を残すこと、陰陽瓦を葺くことは守られている。



後部は平入の家屋であることがわかる。



88) チャン・フー174 (174Trần Phú)

2002 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。隣家と壁を共有する連棟形式である。所有者の意向により調査はできなかった。



モルタル壁に木製の開口部が設置されている。庇は浅く、古都ホイアンに散見できる連棟である。



89) チャン・フー30 (30Trần Phú)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。入場券売り場として使用されており、居住空間はない。また、中庭や橋家、後家もない。



間口が1間分と狭いが、木材を使用した外観が保たれている。



1 階内部には柱はなく壁構造であることがわかる。床はタイルが張られている。



階段も木材を使用し、2 階の床も木材が張られているところは、伝統的な様式をできるだけ維持するという修理基準に則っている。



2 階内部にも柱はない。天井が張られているため小屋組は見えず、伝統的な様式の維持と天井を張る手段の折衷である。

90) チャン・フー91 (91Trần Phú)

2004 年にホイアン市の予算で修理された等級 2、国所有の家屋。理容室として全面的に使用されている。隣接する家屋の中庭も通り道として使用している。前家のみで構成され、中庭は隣接する家屋と共同で使用している。



木材を使用した開口部や壁面、陰陽瓦が葺かれた屋根は伝統的な様式をよく保っている。



小屋組は見えない。欄間の上部の赤い塗装は珍しく、伝統的な様式と所有者の意向の折衷だと推測される。



垂木端部の彫刻も残り、伝統的な様式を維持していることがわかる。



内部から。開口部は板を落とす形で伝統的な様式が残り床はコンクリート仕上げである。



同じく垂木端部の彫刻が残されている。

91) チャン・フー123 (123Trần Phú)

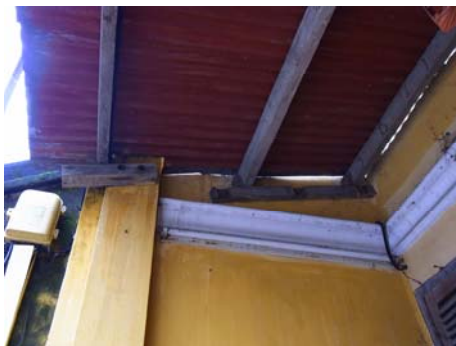
2004年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級2、国所有の家屋。前家1階は店舗として使用されている。モルタル仕上げで柱がない壁構造の家屋である。中庭と2階は所有者の意向により調査できなかった。前家1階には当初から残る部分が見られなかったが、等級2に分類されていることから、他の場所に残ることが推測できる。



モルタル仕上げの壁と木製の開口部は伝統的な様式ではない。



1階前家天井は根太や荷揚げ用の杵もなく伝統的な様式ではない。



正面の庇。トタン屋根は後から取り付けられた。元々は2階部分に庇が付いているのみだが、日差しを避けるために取りつけたのだろう。



1階正面入り口は観音開きの板戸であるが、伝統的な様式とは異なる。

92) チャン・フー172 (172 Trần Phú)

2004年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級2、国所有の家屋。前家1階は店舗として使用されている店舗兼住居である。壁構造で後庭には井戸がある。



前家は2階建てでモルタル仕上げの壁と木製の開口部という伝統的な様式と現代の生活の折衷である。



東側の外壁はモルタル仕上げであり、傷みが見られる。雨が多く湿度の高い地域のため、数年に一度塗り替える。



前家1階天井の根太が張られ伝統的な様式が保たれている。



前家1階天井の根太に見られた虫食いによる腐朽。内部から劣化するため表面に現れた時には中は空洞である。



橋家はトタン屋根が掛けられ半分室内化されているが、橋家と中庭という伝統的な様式は保たれている。



後庭に井戸がある。個別に文化遺産として指定されていないが伝統的な様式を構成する重要な要素の一つだといえる。



93) チャン・フー129(129 Trần Phú)

2006年にホイアン市の予算で修理された個人所有、等級2の家屋。保存地区内において観光対象となる家屋であり、住居でもある。観光場所として整備される前は3家族が住んでいたが、修理と共に引っ越し、今は家屋の所有者家族のみが居住している。通常は後家部分が生活空間となっており、特に後家2階と後庭は公開していない。前家と橋家は平屋で後家は2階建てである。全体が伝統的な様式で、ユネスコの保存の手引きの修理基準が守られている。



前家は木材を使用した開口部と壁が、両側はモルタル仕上げの壁という伝統的な様式である。



柱の継は旧材を多く遺す手法で、日本の手法と同様のものが文化遺産の修理として用いられている。



同様に別の柱でも旧材を多く残す手法が用いられている。



同じ手法が別の柱でも見られた。この手法が日本人専門家による協力が終了したのちも使われている。



こちらでも柱の継は旧材を多く遺す手法を用いられている。礎石は四角く床に半分以上埋められたもので、丸い礎石とは異なる。



下部は新材、上部が旧材。中央の色が異なる部分は埋められた溝という文化財の修理が旧材を残しながら溝を埋めて丁寧に行われている。



柱にある継の部分に寝台などに使われている台が柱にめり込んでいる生活に根付いた文化遺産の保存である。



小屋組は新しい材料を使用していることが表面の色が異なることからわかる。



小屋組みの材料が一部取替えられながら伝統的な様式を維持している。



中庭は植栽をし、泉があり、横には椅子と机を設えお茶を飲むという伝統的な形式を再現している。



後家の柱下部が新材、上部が旧材である。ホイアンに元々ある伝統的な手法で継がれている。





同じく別の柱でも柱下部が新材、上部が旧材という手法が用いられ、前家の修理方法とは異なる。



後家に設けられた伝統的な様式の階段。



前家入り口西側には、薬種問屋のような引き出しが置かれ、昔の仕事を再現している。



板壁だが壁の材料が新しく伝統的な様式を保ちながら修理されたと分かる。



橋家に設けられた椅子と机は伝統的な生活の再現をしている。



垂木端部に施された彫刻は、文化遺産として価値のあるものを保存するという修理方針が窺える。

94) バク・ダン 44(44 Bạch Đằng)

2001 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。前家 1 階は店舗として使用しており 2 階及び後家は居住空間である。居住者が店舗を経営している。



ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式だが、後ろは陰陽瓦を葺いた切妻屋根である。



1 階前家天井は根太が張られ伝統的な家屋の要素があるが、柱はなく壁構造である。



橋家は 2 階があるために根太天井となり、モルタル仕上げの壁は利便性を考慮したものとなっている。



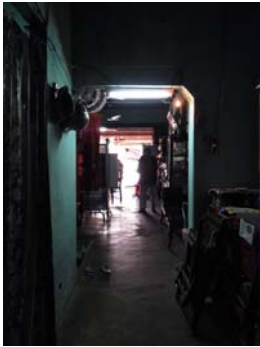
後家側の水回りはトタン屋根が掛けられモルタル壁であり、やはり利便性の高さを優先させている。階段もコンクリートで作られている。



後家側の床は柄の入ったタイルが張られ、所有者の意向を反映している。



後家の屋根にかけられているトタン屋根にも、灯りを採りが設けられている。



店舗裏側はモルタル壁で、開口部には扉が設けられていない。毎年浸水する状況に対応するためだろうか。



2 階へあがる階段と手すりは共に伝統的な様式ではないが、やはり川沿いで浸水しやすい場所のため、耐水性が重視されていると思われる。

95) バク・ダン 84b(84b Bach Đằng)

2001 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。



側壁がモルタル仕上げで前面は木材を使用した伝統的な様式。



1 階前家内部に柱はない。天井に張られている根太が伝統的な要素である。



入り口には底がなく、日除けのために蓆を 2 階からかけている。



2 階のベランダの床と 1 階開口部上部の欄間の材料の表面の色が異なり、修理されたことが分かる。木材の使用は伝統的な要素の維持への配慮だといえる。



96)97) バク・ダン 22,24 (22,24 Bạch Đằng)

2003 年及び 2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。  
通常は閉まっているため用途は不明で外観のみの写真となる。家屋の前に屋台が出ている。

看板には「クーラオチャム海洋保護区周りの持続可能な生計のコンポーネント」と書かれている。



壁面はモルタル仕上げで開口部は木製の古都ホイアンのフレンチコロニアル様式である。



出入り口には番地を示すプレートが貼られている。



開口部は、古都ホイアンで用いられる意匠見本を採用している。

98)ホアン・ディエウ 41 (41 Hoàng Diệu)

2005年に個人の予算で修理された個人所有の家屋。店舗兼住居として使われている。外観、内部共に伝統的な要素を部分的に残しているが、個人所有で個人の資金で修理されているためか、前面の壁はモルタル仕上げで内部に柱もなく、壁に垂木が埋め込まれ構造上の省略が見られるなど、伝統的な様式ではない。



側壁、前面共にモルタル仕上げで開口部は木製、陰陽瓦が葺かれている古都ホイアンにおいて典型的な意匠。



1 階前家内部の天井には根太が張られているが柱はない。



階段の手すりの材料は新しいが修理後も伝統的な様式が採用された。



小屋組みは木材とコンクリートの組み合わせ。プラスチックの壁で仕切られ、利便性を高めている。



垂木は壁に埋め込まれており、陰陽瓦が葺かれ、柱や梁が省略されている。



2 階前家のベランダの手すりは木材を使用し伝統的な様式を模している。



99) ホア・バン・トゥ 4 (4 Hoàng Văn Thụ)

2004 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。



側壁はモルタル仕上げで、開口部は木材、陰陽瓦を葺いた典型的な外観。



内部を 2 階から見ると、欄間に板が使用されていることがわかる。これも伝統的な要素の一つ。



内部は板壁で仕切られており、伝統的な要素といえる。床は修理基準に則りタイルが敷かれている。



中 2 階の床は板を使用している。素材から後から足した部分だとわかる。



下から見える根太が張られていない箇所は新材が使用され、現代的なものとなっている。



前家内部を見ると根太が貼られた天井と柱があることなど伝統的な要素がいくつか残る。

100) レ・ロイ 52 (52 Lê Lợi)

2001年に個人の資金で修理された等級3、個人所有の家屋。店舗として使用されている。陰陽瓦が葺かれ、中央と左右の三か所に開口部が設けられるという意匠見本の通りの外観を持ち、内部の仕上げは現代の素材を使用している。



側壁及び前壁はモルタル仕上げで開口部は木材、陰陽瓦葺きという意匠見本通りの外観である。



1 階前家室内に柱はなく天井も根太が張られているわけではない。



同様に1階前家内部。壁等は合板やプラスチックが使用されており、床はコンクリートで伝統的な要素は見られない。



1 階前家天井に段差が設けられている。全体的な統一感や仕上げの部分に感覚の違いがあるようだ。

101) レ・ロイ 29 (29 Lê Lợi)

2004年に個人の資金で修理された等級3の個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。



側壁はモルタル仕上げ、前は板を使用した落し戸で、両側に敷居を設けず全て解放するという、伝統的な要素を保ちながらも利便性を考慮している。



前家に付属屋がある。付属屋は2階建てになっており、修理基準を維持しながら、居住者の利便性を高めている。



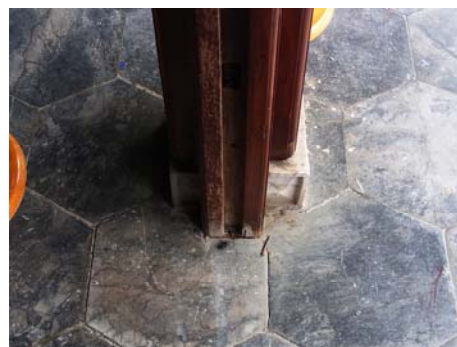
軒付け部分に飾りが付いており、所有者の意向を反映している。



前家の小屋組みを天井を張らずに見せている。小屋組みはトラスで、伝統的なものとは異なる。



壁の装飾も店舗経営のためと考えられる。等級3は、部分的に残る歴史的な要素は保存するが、後は変更可能という修理基準に沿っている。



正面開口部に設けられた蓐戸用の溝。床のタイルは六角形。また、蓐戸が下まで設置されている事例は伝統的な様式とは異なるが、利便性と伝統的な様式を両立させている。



102) レ・ロイ 61 (61 Lê Lợi)

2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋で店舗兼住居として使用されている。交差点の角に立っているが、南北方向の道路に面しているため前家と付属屋から構成される。調査は前家及び付属屋の 1 階のみである。

全体的に伝統的な要素は天井やその棟の構成、屋根の形にしか見られないが、現代的に作りかえられておらず、その点で等級 3 と判断されたといえる。



木が植えられ、正面からは外観が見えにくいですが、古都ホイアン内の植物を含む保存という点で保存条例に沿ったものである。



側壁、前面壁共にモルタル仕上げで、開口部は木材を使用し、陰陽瓦が葺かれた典型的な意匠である。



前家の天井は根太が張られ、伝統的な要素が維持されていると言える。



床に張られたタイルは修理基準に沿っている。

103)レ・ロイ 42 (42 Lê Lợi)

2006 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋である。前家前部はレ・ロイ 40 番の店舗の駐車場として、前家後部は社員の食堂や休憩所として使用されている。外観に側壁と壁、中央に観音開きの開口部があることなどが、わずかに伝統的な要素が見られる。個人所有の家屋で、個人の資金で修理された家屋の典型例である。



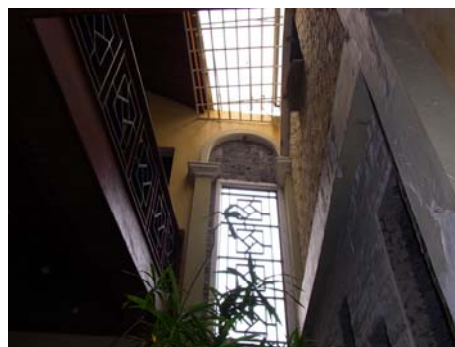
側壁、前壁共にモルタル仕上げで、開口部は三か所あり、木材で仕上げられている。



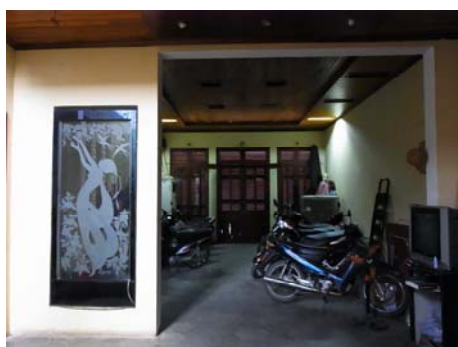
前家の天井は新材で仕上げられており、根太は張られず、伝統的な要素は見られない。



階段も伝統的な様式ではない。



隣接する店舗の建物との間に設けられた空間。屋根は採光を考えた素材である。



奥から室内を見ると、柱は全くなく、壁構造であることが分かる。ファサード以外は伝統的な要素が全くない。

104)レ・ロイ 80 (80 Lê Lợi)

2006年に個人の資金で修理された等級3、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。木材で仕上げられた内部は、根太が張られた天井は伝統的な要素があると言える。ただし、他は木材を使用しながらも現代的な手法を用いたり、合板を用いたりするなど等級3の修理基準に沿ったものである。



外壁はモルタル仕上げで古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築である。



1階天井には根太が張られており、伝統的な要素の一つが維持されていると言える。



左側は柱の上部が継がれている。右側は柱と梁の組み合わせ部分に継手がなく、他のものと異なる。



内部に壁を設けて部屋を作っている。内部の利便性を高めるためだが、天井をあけて部屋を作る手法は伝統的だともいえる。





天井が張られずに、小屋組みが見えるのは、伝統的な形式である



2階には別の個室があるが、合板が使われており、部屋の内装になじまない。



途中で切れている根太がある。歴史的な要素として残したのかと推測



小屋組みの端部には彫刻がなく、材料も細いため、復元はしていない。



2階上部から。壁を作り個室が作られていることがわかる。開放的な室内で個室を持つことが要求されている。



柱と梁の処理。伝統的な工法ではない。

105)グエン・フエ 14B (14B Nguyễn Huệ)

1999年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級3、国所有の家屋である。前家は店舗として使用されている。店舗経営者の意向により内部調査はできなかった。



前壁と側壁はモルタル仕上げで、陰陽瓦を葺き、開口部は木材で仕上げた典型的な外観である。

106)グエン・フエ 16 (16 Nguyễn Huệ)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。1 階前家は店舗として使用されている。外観は意匠見本に沿った伝統的な要素の利便性を高めた意匠で伝統的な要素は見られないが、等級 3 に分類され、国所有でホイアン市の予算で修理されていることから、内部に歴史的な要素を残したものと推測できる。しかし、店舗経営者の意向により内部の調査はできなかったため外観のみの調査である。



側壁と前家はモルタル仕上げで開口部が前面に三か所あり、陰陽瓦で葺かれた典型的なもの。屋根はトタンで伸長され、日差しが強く雨季に激しい雨の降る気候に合わせている。

107)グエン・フエ 20 (20 Nguyễn Huệ)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。1 階前家は店舗として使用されている。外観は等級 3 の典型的なものだが、国所有の家屋でホイアン市の予算で修理されているため、伝統的な要素が内部にあると思われる。しかし、店舗経営者の意向により内部の調査と撮影できなかった。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで開口部は前面に三か所あり、陰陽瓦が葺かれている等級 3 の外観整備の典型的な例である。

108)グエン・フエ 22 (22 Nguyễn Huệ)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。飲食店軒店舗として使用されている。国所有でホイアン市の予算で修理されているため、伝統的な要素が整備されながらも、飲食店として使用するために、利便性との兼ね合いが考えられている。ファサードも本来は庇の深いものだが浅く、左右の開口部の落し戸は、腰壁を持たない。店舗として使用する際に広く使うためだといえる。また、前壁も板ではなくモルタルで仕上げられ、全てが伝統的な様式で整備されているわけではないが、等級 3 の修理基準は満たしている。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、開口部は三か所、開口部の形式も中央が観音開き、左右が落し戸という伝統的な様式である。



前家の天井は張られず、小屋組みが見える伝統的な様式である。



庇をトタンで伸ばしているのは、南北方向の道路に面し、日差しが入りこむことや雨季の雨に対応するためである。



壁際の小屋組みは省略され、壁構造である。





部材には番付の跡が残り、一度部分的に解体されていることがわかる。



同様に番付の跡が残る部材が見られ、解体の規模を推測できる。



前家床にはタイルが張られている。柱は見られず、店舗としての使いやすさを優先させたと思われる。整備できる伝統的な要素と、生活者の利便性の折衷を試みている。



前家の店舗と調理場の間仕切りに棚が設えられている。飲食店としての利便性を高めている。



109)グエン・フエ 24 (24 Nguyễn Huệ)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。店舗経営者の意向で内部の調査はできないが、他の家屋で、国所有で且つホイアン市やクアンナム・ダナン省の予算で修理された場合は伝統的な要素が整備されているため、この家屋も同様だと推測できる。前壁が板ではないが、修理年の傾向によるものだといえる。



側壁と前面の壁がモルタル仕上げで、開口部が三か所あり、左右は腰壁のある落し戸、中央は観音開きで陰陽瓦が葺かれているという伝統的な様式。

111)グエン・フエ 12 (12 Nguyễn Huệ)

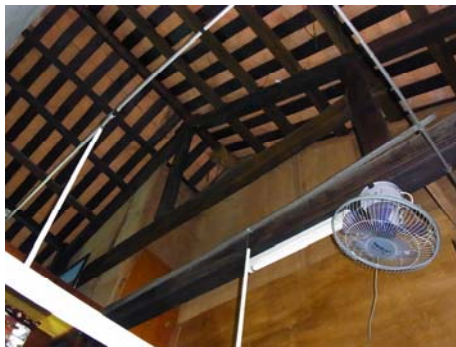
2006 年と 2008 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。前家は店舗として使用されている。北側（写真右側）の棟も所有している。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた典型的な例。



トタンを張り伸ばした庇は、日差しの強い気候で実用面から用いられている。



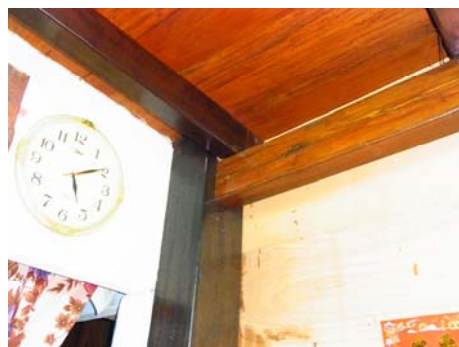
小屋組みは壁際ではなく省略され、陰陽瓦は葺きなおされている。



床に張られたタイルは灰色の六角形で、意匠見本で見られるものである。



木製の柱とコンクリートの柱が隣り合って立っており、伝統的な要素を保つ所と、現代的なところが同じ棟にあることが分かる。



柱や梁、天井は伝統的に整備されていない。塗装の色が異なり、修理された年代が異なることが分かる。

112) グエン・タイ・ホック 9 (9Nguyễn Thái Học)

建物全面が博物館として使用されている国所有、等級 3 の建造物である。グエン・タイ・ホック通りの南側に位置する。修理は、1999 年にクアンナム・ダナン省の予算で行われた。

等級 3 の家屋だが、全面的に木材が使用され伝統的な様式に整備されている。前家、橋家、後家で構成されており、後家と橋家は 2 階がある。後家の天井には洪水時の荷揚げ枠が見られる。なお、後家 2 階の床は段差が付けられており、上屋部分が高く下屋部分は一段下がっている。



ファサードには側壁がモルタル仕上げで、前面が木製の壁、陰陽瓦で葺かれるという伝統的形式が用いられている。



後家の小屋組みは合掌造りである。また、部材の色から工事により部材ごと取り替えられていることが分かる。



後家の床には段差が設けられているのは、地表面が河口に向かって傾斜しているからである。



柱の継には、下部を床と水平に切断して取り替えるホイアン型の修理手法が用いられている。



この柱には日本型の継の手法が用いられている。旧材を多く残すための鍵型に継がれている。



伝統的な要素の一つである荷揚げ用の枠に囲いを付けている。格子状の蓋を被せていることもあるが、常時開けている場合もある。



階段の上部と下部の材料表面の色が異なり、修理時に取り替えられたことが分かる。



1 階天井には根太が張られ、伝統的な様式を模していることがわかる。

113) グエン・タイ・ホック 76 (76 Nguyễn Thái Học)

2000 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋。1 階は全て店舗として使用されている。前家 2 階、橋家、後家で構成されており、中庭は屋内に取り込まれ、後庭はない。店主が内部の撮影を拒否したため写真は外観のみである。



側壁、前の壁共にモルタル仕上げで、開口部は木材を使用するという古都ホイアンの典型的な整備事例である。



114) グエン・タイ・ホック 38 (38 Nguyễn Thái Học)

2001 年に個人の資金で修理された個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。所有者の意向で 1 階の調査のみである。

1 階、2 階共にモルタル仕上げの側壁で陸屋根が用いられ、意匠見本 2 に倣ってもない。外観には伝統的な要素は見られないが等級 3 に分類されていることから、内部に伝統的な要素が残ると考えられる。



角地に建っているため二方向から出入りができる。伝統的な様式の家屋でも同様に二方向から出入りができるものはあるが、1 階全面が開口部になっているものはない。



2 階開口部はガラスが用いられ、伝統的な要素は見られない。



115) グエン・タイ・ホック 116 (116 Nguyễn Thái Học)

2002 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋で店舗兼住居として使用されている。伝統的な様式に整備されている理由に、国所有で省の予算で修理されていること、グエン・タイ・ホック通りという特級、等級 1、等級 2 の建造物が多く位置する通りにあることが挙げられる。



側壁はモルタル仕上げで前面は木材が使用され、陰陽瓦が葺かれた伝統的な様式である。



前家の小屋組みは天井が張られていない。



小屋組みの垂木は柱と色が異なり、取替えられていることが分かる。



柱下部に見られる継。下部が新材、上部が旧材のホイアン型の継、旧材を残すという考え方が窺える。



同様に柱の継は下部が新材、上が旧材のホイアン型の継が用いられている。



垂木の端部に施されている彫刻は材料の色から旧材だと推測されるが、外気に接する場所であるため、風食にさらされる箇所だともいえる。



前家と付属部分を区切る壁は材料の色が異なり整備されたことが分かる。



2 階階段の手すりにも伝統的な要素が見られ、材料の色から新しいことが分かる。



付属屋部分の小屋組みにコンクリートが使用されている。外観は伝統的だが構造面では現代の素材を用いている。また、中 2 階の手すりは伝統的な様式に整備されている。

116) グエン・タイ・ホック 35 (35 Nguyễn Thái Học)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。



側壁、前壁共にモルタル仕上げでファサードは古都フレンチコロニアル様式の看板建築である。



1 階前家天井には根太が張られ、2 階建ての伝統的な要素の整備といえる。



2 階の床に板が使われている点は伝統的な要素だともいえる。



屋根の垂木に継が見られ、旧材を保存する傾向が見られる。





小屋組みの材は太いが、材の形は現代的である。



屋根瓦は、湿度が高く雨の多い地域のため傷みやすい。



中庭に面したベランダの手すりは木材を使用し、伝統的な要素の整備だと言える。



階段の手すりは伝統的な様式である。等級 3 は部分的に伝統的な要素が整備されている。



正面のベランダ開口部は、伝統的な様式ではなく、古都ホイアンの意匠見本として推奨されているものである。

117) グエン・タイ・ホック 97 (97 Nguyễn Thái Học)

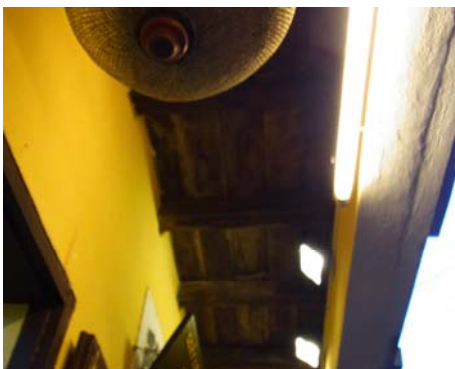
2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3. 国所有の家屋。店舗として使用されている。前家 1 階のみの調査であり、奥に伝統的に整備された箇所があるか、後家も現代的なものかはわからない。ファサードと 1 階の天井にのみ、伝統的な要素の整備が見られる。ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築であり、古都ホイアンの歴史を表しているとホイアン史跡保存管理事務所に捉えられている。従って、部分的に伝統的な要素が見られるという等級 3 の分類基準を満たしており、修理基準も前家に部分的に残る歴史的或いは伝統的な要素を残すということに則っている。店舗経営者は、祖父母の代に中国からホイアンへ渡ってきた。祖父は医療技術を持っていたとの談



切妻屋根には陰陽瓦が葺かれている。



壁際に柱はなく、壁構造である。天井に張られた根太が、2 階建ての伝統的な要素だといえる。



底を下から見る。伝統的な要素は整備されていない。

118) グエン・タイ・ホック 99 (99 Nguyễn Thái Học)

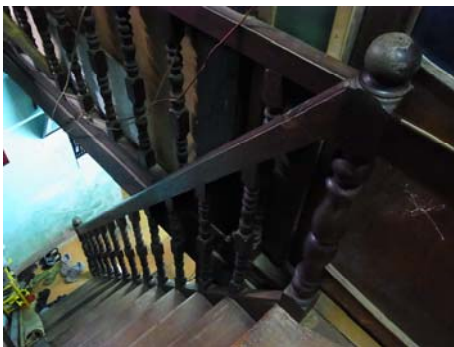
2003 年に個人の予算で修理された等級 3、個人所有の家屋。店舗として使用されており、中央に壁を設置して 2 店舗入っている。柱や荷揚げ用の杵といった特級、等級 1、等級 2 で見られた伝統的な要素の整備は見られないが、根太天井や階段及び手すりに伝統的な要素の整備が見られる。



古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築は古都ホイアンの歴史として捉えられている。



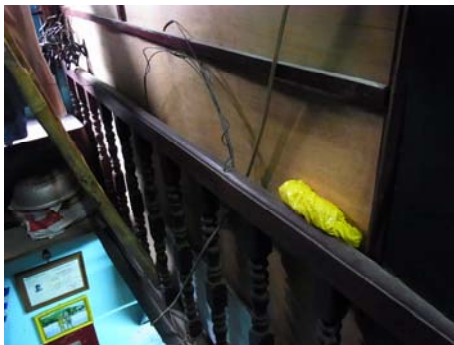
西側の店舗の天井には根太が張られおり、伝統的な要素の整備といえる。



階段の手すりは伝統的な様式であり、部分的に整備されている。



屋根の谷樋。屋根瓦の傷みが見られ、湿気や雨など水への対策が古都ホイアンにおいて重要であるといえる。



2 階手すりも伝統的な様式である。



東側の店舗の階段も伝統的な様式で整備されている。

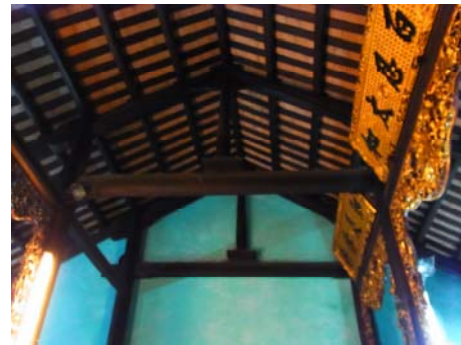


119) グエン・タイ・ホック 58 (58 Nguyễn Thái Học)

2004年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された国所有、等級3の家屋で全体が店舗として使用されている。前家と橋家、中庭、後家を有する。国所有で省の予算で修理された家屋であり、グエン・タイ・ホック通りに位置することから伝統的な様式に整備されている。整備工事の報告書がないため、保存されている箇所と整備された箇所の区別がつかない。



側壁はモルタルで仕上げられ、前面開口部は木材、陰陽瓦で葺かれている典型的な伝統的な様式への整備事例。



前家の天井は張られず、小屋組みを見せている点も伝統的である。



虹梁の彫刻は整備或いは保存されている。



前家と中庭の床はいずれもタイルが張られており、中庭は一段低くなっている。河口に向かって傾斜しているホイアンで散見できる。



中庭があり、中庭を囲むベランダも伝統的な様式に整備している。



後家2階の小屋組みは天井が貼られず、伝統的な要素への整備或いは保存が見られる。

120)グエン・タイ・ホック 23 (23 Nguyễn Thái Học)

2005 年にホイアン市及び個人の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。店舗として使用されている。国所有でホイアン市の予算で修理されているため伝統的な様式に整備されている。古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードを維持しており、手引書にもある通り、このファサードも古都ホイアンの歴史を表すものの一つとして扱われている。内部は、柱や小屋組み、板壁などの古都ホイアンの伝統的な家屋の様式に整備されている。全体が店舗として使用されているため、生活面での機能性は考慮しなくてよいことも、大部分で伝統的に整備出来た理由だといえる。



古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築で、側壁、前面壁共にモルタル仕上げ。



柱下部が新材、上部が旧材。材料を多く遺す継方をして文化遺産として扱われていることがわかる。



同様に柱の継。下部が新しく、上部が古い。河川の浸水が毎年あるために、柱の下部は腐りやすいため取替えられている。



柱下部には旧材を多く遺す日本型の継が用いられている。



柱下部が旧材、上部が新材。旧材を多く遺す日本型の継である。逆に、ホイアン型の継は見られない。



階段も木材が用いられ、伝統的な様式に整備されている。



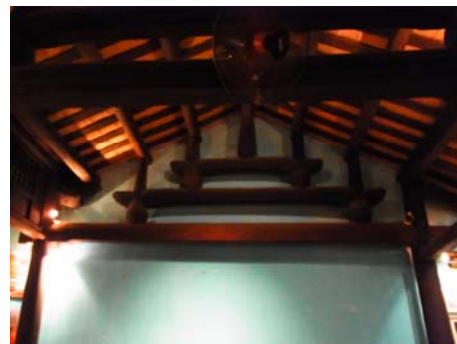
柱下部が新材、上部が旧材であり、下部の取替えが多い。



桁上部に継が有る。細かく部材の修理を行うのは、国所有でホイアン市の予算で修理されているからだといえる。



壁際に柱があり、柱下部が新材、上部が旧材で当初材が残されている。



前家の付属屋の小屋組みは伝統的な様式に整備されている。



前家の欄間と欄間下部の材料の色が異なり、修理されたことが分かる。



2階柱下部が新材、上部が旧材。旧材を多く残す日本型の継を用いている。



柱下部が新材、上部が旧材。



床に近い部分が新材、上部が旧材



121) グエン・ティ・ミン・カイ 31 (31 Nguyễn Thị Minh Khai)

日本橋の西側に位置する通りの南側に立地する等級 3 の家屋である。1994 年から 2002 年にかけて日本人専門家の協力により修理された個人所有のもので、画廊として使用されている。

内部は所有者の意向により調査できなかったため、ファサードの写真のみである。

伝統的な要素として捉えられている古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードに陰陽瓦を葺いた屋根で整備基準は守られている。



古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードと青く塗られた木製の観音開きの扉とガラスの入った窓。窓は外側に戸が設置されており、屋根は陰陽瓦葺。



122) グエン・ティ・ミン・カイ 20 (20 Nguyễn Thị Minh Khai)

2003 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋で店舗兼住居である。伝統的な様式への整備はほぼされていず、等級 3 であっても所有者や、修理の費用負担者に加え、立地で整備内容の異なることがわかる一例である。



側壁はモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれているのは伝統的な様式。底を支える柱がモルタル仕上げというのは、フレンチコロニアルや意匠見本 2 を用いている。



天井が貼られていないために、小屋組みが見え、壁構造であることが分かる。



手すりは伝統的な様式である。部分的に残る伝統的な要素を維持していると考えられるものの、材料からは整備されたといえる。



前家に柱はなく壁構造であることが分かる。

123) グエン・ティ・ミン・カイ 34 (34 Nguyễn Thị Minh Khai)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。前家を店舗、付属屋と橋家、後家は居住空間であり、後庭がある。配置及び棟の構成は歴史的な町家と同様である。

特徴として、井戸やトイレなどの棟は隣家と共有していることが挙げられる。また、中庭は居住空間として屋根が掛けられ室内化した珍しい例である。



古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築で、植民地時代に作られたものが伝統的な要素として捉えられている。



1 階店舗内部の柱はモルタルで塗りこめられ、伝統的な要素はない。



後家から見た橋家と前家。橋家に壁を設けず廊下のようにして、居住者の使い勝手を重視している。



橋家横の空間は洗濯物が干され外部から光が入り、中庭の機能が維持されている。これも伝統的な要素の維持だといえる。



橋家の小屋組は壁際にはないが陰陽瓦が葺かれている折衷様式である。



後家も隣家と連棟となっている。陰陽瓦が葺かれ、モルタル仕上げの壁は、整備基準に則っている。



風呂、便所などが配置された棟も陰陽瓦が葺かれている。後庭の中央はい一段低くなり、水が流れやすいように配慮されている。タイルは意匠見本に倣ったものを採用している。



後庭の井戸は隣家と共用しているためか壁が中央に設けられている。

124) グエン・ティ・ミン・カイ 35 (35 Nguyễn Thị Minh Khai)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、個人所有の家屋。所有者の意向で調査ができず外観のみである。また、店舗となっている前家以外は見られなかったため、等級 3 として伝統的な要素が残る場所、整備箇所は不明である。調査可能な場所から伝統的な要素を見出すとすれば、陰陽瓦で葺かれている点、側壁がモルタル仕上げである点、前壁はモルタル仕上げだが、開口部が三か所ある点などである。



庇の下にある桁は白く塗装されている点が珍しい。古都ホイアンのフレンチコロニアル様式に整備されている。



125) グエン・ティ・ミン・カイ 36 (36 Nguyễn Thị Minh Khai)

2003 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。店舗兼住居である。グエン・ティ・ミン・カイ 34 と連棟になっている。棟の構成は、グエン・ティ・ミン・カイ 34 と同様に前家、橋家、後家で構成され、中庭と後庭を持つ伝統的な棟の構成を維持している点に注目できる。住居として使用されているためか内部を伝統的な様式には整備されていず、小屋組みの一部を整備されている程度である。橋家や後家も階高を上げずに平屋である。等級 3 は居住空間を広くするために後部の棟の階高を上げる事例が多く見られるため、珍しい事例である。やはり、所有者と修理費用負担者の影響がある。



ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の看板建築が残されている。



付属屋の床はタイル張りで内部に柱はない壁構造である。



天井も新材が用いられ、伝統的な様式への整備は行われていない。



橋家は壁構造で陰陽瓦が葺かれている。





橋家の小屋組み。壁際に小屋組はなく、部分的に小屋組みが整備されている。



橋家の壁は通常板壁だが、モルタル仕上げにされた。底を支える柱から壁面に向かっている部材はモルタル壁の中に埋め込まれるという古都ホイアンによく見られる手法である。



後家を後庭から見ると、隣家と連棟であることが分かる。左側はグエン・ティ・ミン・カイ 34 である。



後庭。中央は一段低くなっており水を流しやすい。

126)グエン・ティ・ミン・カイ 18(18 Nguyễn Thị Minh Khai)

2006 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋。画廊兼店舗として使用されている。前家と後家から構成される。フレンチコロニアルの看板建築であり、歴史的な要素が維持されている。



側壁、前壁共にモルタルで仕上げられた古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードである。



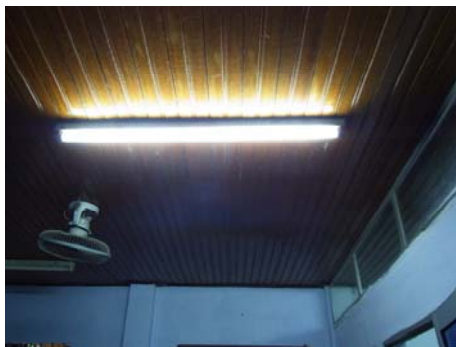
柱と 1 階根太。散見できるモルタルと木材の組み合わせである。



床には張られているタイルには柄が入る。意匠見本にはないため、個人の意向で用いられている。



2 階に掛けられた天井



後家の天井も新材が使用されており伝統的な要素は見られない。

127)グエン・ティ・ミン・カイ 44(44 Nguyễn Thị Minh Khai)

2006 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋である。ベトナム人向けの宿泊施設として運営されていたが、2010 年調査時には、住居として使用されていた。階段の手すりと陰陽瓦に伝統的な要素が見られるものの、基本的には現代的な家屋である。



側壁と前壁はモルタル仕上げで陰陽瓦を葺いた家屋である。



前家の小屋組は木材で仕上げられているものの伝統的な様式ではない。



1 階の天井も木材で仕上げられ、伝統的な要素は見られない。



後家 2 階の小屋組みと部屋。壁の素材は様々である。



1 階の床はタイルが張られている。



2 階の床は木製である。階段の手すりは伝統的な様式である。



128) ファン・チャウ・チン 7 (7Phan Châu Trinh)

1997 年はホイアン市の予算で、2007 年と 2008 年は個人の予算で整備工事が行われた。等級 3 の国所有の家屋で。店舗兼住居として使われている古都ホイアンに多く見られる連棟である。



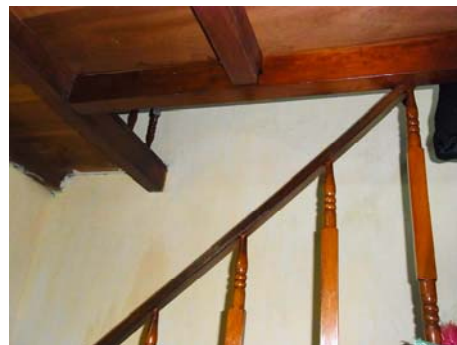
屋根は陰陽瓦葺が葺かれ、側壁、前面共にモルタル仕上げの壁があり、開口部は木製という等級 3 の典型的な例である。



壁構造で中 2 階が設置されている。天井には板が貼られ、小屋組みは見えない。木材を使用した中 2 階はこの規模家屋では散見できる。



床は模様の入ったタイルが張られ、保存の手引の修理基準とは異なる仕上げ。修理が 3 回行われており 2007 年より前に施工されたとすれば、その後基準に沿って直していないといえる。



中 2 階に上がる階段は材料が新しく伝統的な様式に整備された箇所である。

129)ファン・チャウ・チン 8 (8 Phan Châu Trinh)

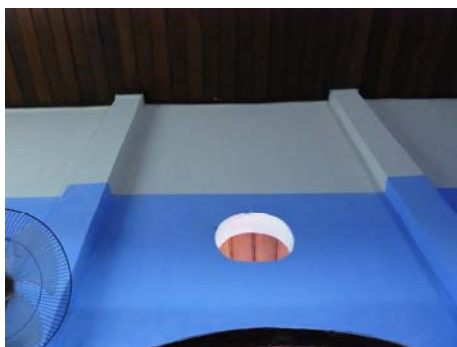
2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋である。飲食店と店舗兼住居として使用されている。前家は平屋建て。ファサードと棟の構成にわずかに伝統的な、な要素が見られる。国所有でありホイアン市の予算で修理されているが、他の同じ条件の家屋と大きく異なり、伝統的な様式に整備されていないのは、立地が理由の一つだといえる。



側壁及び前壁はモルタルで仕上げられ、開口部は三か所、中央の観音開きと左右の木製の扉、陰陽瓦が葺かれた典型的なもの。



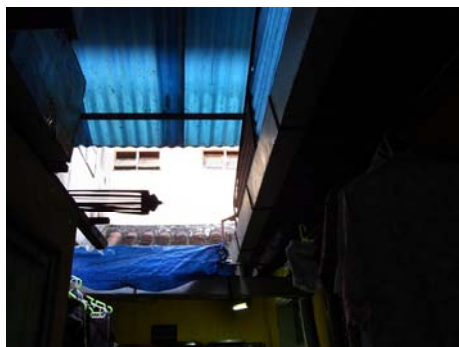
飲食店部分の床はタイルが張られ修理基準に沿っている。



柱はコンクリートで壁の中にあり、天井が張られて小屋組は見えない。



内部の意匠も伝統的なものではない。柱も壁に埋め込まれモルタルで仕上げられたもの以外は見られず壁構造となり、伝統的、歴史的な要素は見当たらない。



中庭にはプラスチックの屋根が掛けられている。中庭があるため伝統的な要素を維持しているといえる。



130)ファン・チャウ・チン 34 (34 Phan Châu Trinh)

2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。全面が店舗として使用されている。前家と橋家、中庭で構成され、庭には屋根が掛けられ室内化されている。棟の構成は当初のものを維持している。



側壁及び前面の壁、底をさえる柱もモルタル仕上げである。古都ホイアンのフレンチコロニアル様式とホイアンの伝統的な様式の折衷である。



前面の庇部分には新材で天井が作られ、下屋が見えない。



室内に中央は柱がなく天井は新材が貼られ、伝統的な様式への整備は見られない。



壁際の柱と梁はモルタルで仕上げられ、伝統的な様式への整備は行われていない。



橋家は陰陽瓦が葺かれている。橋家自体が伝統的な要素のため、壁構造でも、伝統的な要素が維持されているといえる。



橋家以外に庭を物置として使用するために屋根が掛けられている。

131)ファン・チャウ・チン 3(3 Phan Châu Trinh)

2006 年に個人の予算で修理された等級 3、個人所有の家屋。住居として使用されている。

内部は壁構造で柱はない。平屋の前家を有する点が伝統的な要素を維持しているといえ、ファサードは意匠見本 2 に倣い整備した家屋である。



側壁は隣の家屋と共有したメゾネット形式。前壁もモルタル仕上げである。



小屋組みは省略され、壁構造である。瓦も葺きかえられていることが分かる。



中 2 階に昇る階段の手すり伝統的な様式で天井は木製である。

132)ファン・チャウ・チン 28 (28 Phan Châu Trinh)

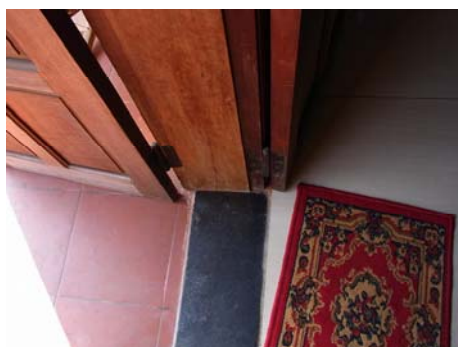
2006 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。住居としてのみ使用されている。ファサードは意匠見本 2 に倣い、内部は壁構造の現代的なつくりとなっている。



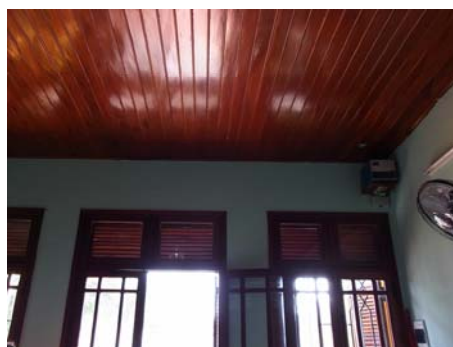
側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれている。



前家内部に柱はなく壁構造である



前家床の外側は茶色いタイル、内側は白いタイルが張られている。外側の茶色いタイルは、材料見本で展示されている。



開口部もガラスが使用されており、伝統的な様式への整備は見られない。

133)ファン・チャウ・チン 53 (53 Phan Châu Trinh)

2006 年、2008 年、2010 年にいずれもホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋である。全面的が公安に使用されている。外観は修理基準に沿い意匠見本 2 に倣い整備され、内部は現代的なつくりである。



切妻平入の平屋と、フレンチコロニアルのファサードを持つ 2 階建てが連続している。いずれも壁はモルタル仕上げである。



道路に面した棟のみで、付属屋や後家はない。



開口部は木製の扉が使用されている。



134)ティエウ・ラ (チャン・クィ・カップ) 31(31 Tiểu La(Trần Quý Cáp))

2006 年と 2008 年に個人の資金で修理された等級 3、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。前家、橋家、後家と中庭を有し、棟はいずれも 2 階建てである。ファサード正面にはベランダが設置され、中庭部分にもベランダが設置されている。全体的に歴史的、伝統的な要素が復元されている。



正面に建つ露店で使用する布が掛けられている。



1 階橋家と中庭、後家。柱は木材を使用しているが壁面はモルタル仕上げ。



2 階の橋家。やはり柱は木材を使用し壁はモルタル仕上げである。



小屋組みもあるが壁際は省略されている。



橋家 2 階の小屋組みは入母屋造りとなっており、伝統的な様式に整備されている。



前家側に設けられたベランダ。前家の壁は木材が使用されている。



135) チャン・フー152 (152 Trần Phú)

2000年に個人の予算で整備された等級3、個人所有の家屋。店舗兼住居として使用されている。ファサードや前家に伝統的な様式が一部見られるものの、前家後部の小屋組みにプラスチックの板を張り、雨漏りを防いだり、壁面の塗装と同じ色を開口部に用いたり、全てが伝統的な様式に整備されているわけではない。



側壁はモルタル仕上げで開口部は木材を使用している。陰陽瓦で葺いた屋根根は修理基準に沿っている。



東側店舗の前家は天井を張らずに小屋組みが見える伝統的な様式である。



東側店店舗の桁はモルタルの壁に掛けられている。古都ホイアンで多く見られる組み合わせである。



店舗を内部から見ると壁面に木材を使用しつつ欄間等に伝統的な要素が一部残されているが、現代的な工夫も見られる。



階段の手すりは伝統的な様式に整備されている。



左側の店舗の内側は、木材が使用されているが、伝統的な様式とは異なる。



柱は礎石の上に建つ。材料からは新材か旧材かの判断は行いにくい。



瓦は葺きかえられ、小屋組みに板が張られている。



後部の様子。天井にプラスチックの板が張られている。開口部は壁面と同じ色が用いられている。壁面は青いが、これは修理基準にはない色である。ただし、ファサードに用いた事例はある。



屋根の裏側にもプラスチックの板が張られている。雨漏りなどを防ぐためだと推測できる。

136) チャン・フー100 (100 Trần Phú)

2002年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級3、国所有の家屋。店舗として使用されている。前家は平屋で伝統的な様式だが、後家は3階建てとなっており、現代的なつくりである。全面が店舗として使用されている。115)グエン・タイ・ホック 116(116 Nguyễn Thái Học)と比較すると後の棟は現代的だが、前家の伝統的な様式への整備は国が所有し省の予算での整備工事を行い、チャン・フー通りという特級、等級1、等級2の建造物が通りの建造物数に対して多い場所という条件からだといえる。



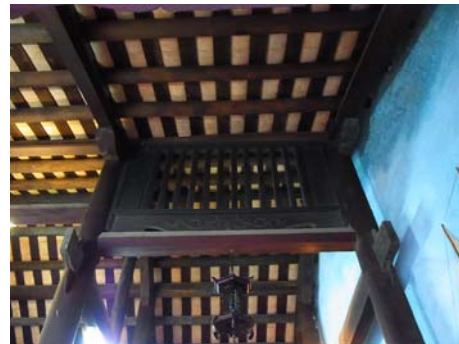
モルタル仕上げの側壁と、木製の壁、及び開口部。陰陽瓦が葺かれた屋根が整備である。



1階前家は天井が張られず小屋組を見せる伝統的な様式である。



1階付属屋小屋組みも見られる。



欄間には木材が使用され、壁面の塗装は青い。ホイアン史跡管理事務所職員によれば、外は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式で用いられている黄色を用い、内部を青く仕上げるのは、古都ホイアンで一般的である。





小屋組みの端部の一方は、材料の色が異なるため整備していることが分かる。このことから一部に伝統的な要素が残っていたことが推測できる。



後家はモルタルで仕上げられた 3 階建ての棟である。伝統的な要素もなく、古都ホイアン内で禁止されている 3 階に対して許可が下りた過程は不明である。



後家内部の床はモルタルで仕上げられており伝統的な要素は見られない。



後家内部階段の手すりも伝統的な様式ではなく、位置や意匠にのみ伝統的な要素が残る。床には柄のタイルが使われている。



後家内部の柱と天井はモルタル、床は柄のタイルで仕上げられ、伝統的な要素は見られない。



後家のベランダは、他の古都ホイアンのフレンチコロニアル様式と同様で、モルタル壁に木製の開口部を用いている。

137)チャン・フー54 (54 Trần Phú)

2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。前家は画廊として使用されている。板壁で腰壁のある落し戸、右側開口部は観音開きの扉、陰陽瓦を葺いた屋根で仕上げられ、チャン・フー通りのように特級、等級 1、等級 2 の建造物が通りの建造物数に対して 4 割以上を占める通りに立地し、国所有で省の予算で修理された場合は伝統的に様式に整備される。



開口部は二か所のみだが、側壁はモルタル仕上げ、前面は木材を使用した落し戸と観音開きの開口部という伝統的な様式である。



138)チャン・フー27 (27 Trần Phú)

2005 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。飲食店として使用されている。前家は平屋建て。個人所有であり、個人の予算で整備されているものの、他の等級 3 の整備事例と比較すると、伝統的な様式への整備箇所が多く見られる。個人の予算で整備されても、こうした事例があるのは、所有者の保存の意思は無論、飲食店という観光客に対してアピールするものがあると都合がよいという理由が挙げられる。



側壁と前面欄間がモルタル仕上げで、開口部は木製、陰陽瓦が葺かれ伝統的な様式に整備されている。



小屋組みは伝統的な様式であり、材料の色からも元々あったものと推測できる。



奥の柱の継は日本型の手法。等級 3 でも日本型の手法が用いられている。



柱に見られるちょう千切り



店舗内の床に排水口が設けられるなど、伝統の維持と、飲食店として経営する上での機能を両立させている。



母屋や欄間に継があることは材料の色からわかる。旧材を残す手法が個人の家屋でも行われている珍しい事例。

139)チャン・フー57 (57 Trần Phú)

2005 年と 2008 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋。前家、橋家。後家から構成され総二階建てである。保存地区のコンサルタント会社の事務所として使われている。伝統的な棟の構成が維持されているが、外観やモルタル仕上げは伝統的な様式ではない。一方、内部は木材が多用され、伝統的な様式への整備が行われている。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、2階のベランダも古都ホイアンのフレンチコロニアル様式が用いられている。



1 階内部は根太天井と柱が見られ、部分的に伝統的な要素が見られる。



礎石の上に建てられた柱にタイルが張られている。



根太の一部が継がれ、旧材を残す修理手法が取られている。



天井を張らずに小屋組みを見せる伝統的な様式への整備が行われている。



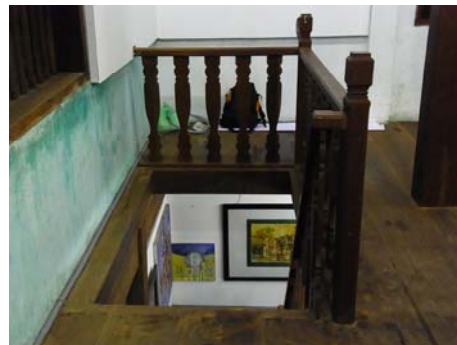
側壁はモルタル仕上げだが、内部の間仕切りは板壁を用いた伝統的な様式である。



中庭を囲むベランダは木材が使用され、意匠も伝統的な様式が見られる。



2階内部は柱が立ち、床には板が張られている。側壁はモルタル仕上げであるものの、室内に木材を使用する伝統的な様式である。



後家の階段の手すりは伝統的な様式である。



橋家の小屋組は片方がモルタル壁に掛けられ、柱が省略されている。



140)チャン・フー118 (118 Trần Phú)

2005 年にホイアン市の予算で修理された等級 3、国所有の家屋であり、チャン・フー通りに立地しているためファサードは伝統的な様式である。家屋は画廊として使用されている。調査は所有者の意向により前家 1 階のみ行った。



前壁は木材で仕上げられている。



前家の天井には根太が張られているが柱はなく壁構造である。



内部の扉は木製である。床にはタイルが張られている。扉は木材を使用しているが伝統的な様式ではない。



家屋の床の高さは道路よりも二段ほど高い。中央に見えるのは、バイクを室内に入れるために設けられたもので、現代の生活に合わせたものである。

141)チャン・フー89 (89 Trần Phú)

2007年にクアンナム・ダナン省の予算で整備した等級3、国所有の家屋である。飲食店兼住居として使用されている。前家は1,2階共に飲食店として使用され、後家は住居である。調査は前家のみ行った。棟の構成は前家、橋家、後家で構成され、伝統的な棟の構成が維持されている。さらに、ファサードは意匠見本2に倣い伝統的な様式への整備は行われていない。



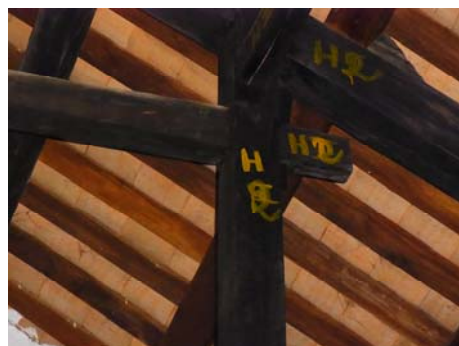
側壁、前壁共にモルタル仕上げで、陰陽瓦が葺かれた典型的なもの。



小屋組みは壁際が省略された壁構造である。



小屋組みに残る番付「T2」が読み取れ、解体されたことが分かる。



同様に番付の「HR」が読み取れる。



母屋の一部の色が異なる。修理或いは補修の部材として用いられた。

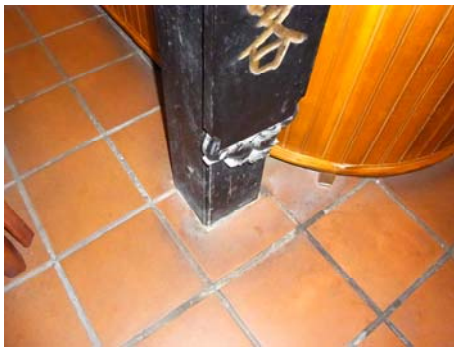




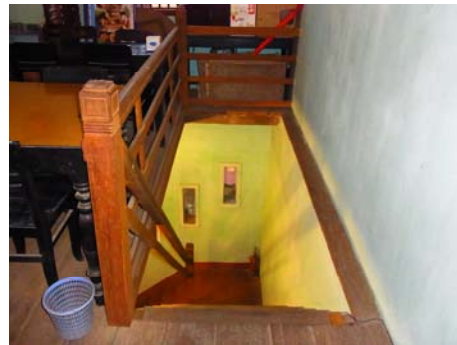
2 階には柱がなく壁構造である。天井が張られていない点は復元とも捉えられる。



1 階天井にある荷揚げ用の枠には格子蓋がされている。材料が新しく伝統的な要素が維持されていることが分かる。



1 階柱と床。柱は礎石を用いず立てられている。



2 階の手すりは伝統的な形式が復元された。



橋家と後家が見える。右手に見える中庭にはトタンで屋根が掛けられている。棟の配置にも歴史的な要素がある。

142) バク・ダン 46 (46 Bạch Đằng)

2004 年にホイアン市の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋で飲食店兼住居として使用されている。個人所有だがホイアン市の予算で整備されたためか、伝統的な要素の整備が見られる。例えば根太天井や荷揚げ用の枠、古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードなどである。また、前家、橋家、後家で構成されていることも伝統的な様式への整備である。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで開口部は木製。



前家の小屋組は省略され、壁構造である。陰陽瓦を葺くという整備基準は守られている。



後家の天井は根太が張られ、伝統的な要素とも見られる。



橋家の小屋組は省略されていないが梁がモルタル壁に掛けられ、柱の省略が見られる。



後家の小屋組みは壁際の部分は省略されている。



荷揚げ用の枠には格子蓋がされている。



143) バク・ダン 48 (48 Bạch Đằng)

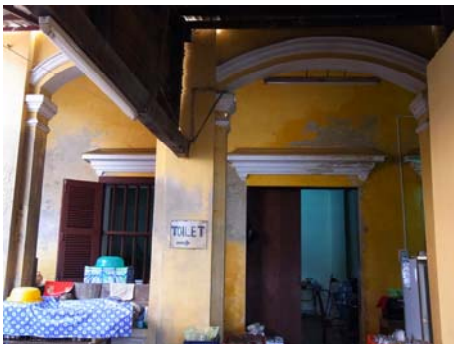
2004 年にホイアン市の予算で、2006 年に個人の予算で整備された等級 4、国所有の家屋である。飲食店兼住居として使用されている。洪水対策が伝統的なものも含め随所に見られる。外観は周囲と調和させるために、伝統的な様式に整備しているが、内部は後家の荷揚げ枠を除いて伝統的な様式に整備された箇所はない。ホイアン市の予算で整備しているが、現代的な生活の向上と古都ホイアンのフレンチコロニアル様式が優先されている。



側壁と前壁はモルタル仕上げで中央開口部は木製、陰陽瓦葺の外観。



前家の柱はモルタル仕上げで壁際のみ、床はコンクリート仕上げ、天井には新材が張られている。



橋家は壁、柱共にモルタル仕上げ。古都ホイアンのフレンチコロニアル様式への整備とも捉えられる。



トタンを庇にしている点は、利便性を重視したと推察される。



後家 1 階の天井に設けられた荷揚げ用の枠には格子蓋が設置されている。実際に浸水時に使用する。



後家 1 階。左側はコンクリートで作られた台。左手手前には浸水対策としてか、下部をコンクリートで、上部を木材で作った階段が見られる。

144) バク・ダン 42 (42 Bạch Đằng)

2006 年と 2008 年に個人の資金で修理された等級 4、個人所有の店舗兼住居である。1 階は店舗、2 階は住居として使用され、店舗部分は貸し出されている。前家のみで構成され、伝統的な様式への整備は根太天井とファサードに見られる。



古都ホイアンのフレンチコロニアル様式のファサードは、バク・ダン通りに多い。



1 階店舗の天井には根太が張られている。階段は住居に上がるもので、店舗側からは上れない。



床にはタイルが張られ、整備基準に沿っている。

145) バク・ダン 8 (8 Bạch Đằng)

2009 年に個人の資金で修理された、等級 4、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。家屋の正面は市場で露店が設けられ、ファサードは見えにくい。伝統的な様式への整備は行われていない。



1 階前家の開口部は木材が使用されているが、伝統的な様式ではない。



1 階前家には中 2 階が設けられ、増築できない保存地区内で居住空間を増やしている。



階段の踏み板が木材で片側だけに手すりがある意匠は伝統的な様式が変化したと推察できる。



2 階へあがる階段の踏み板と床板との取り合いはセメントで区切られている。



板が張られている中で一部モルタルが用いられている。



146) バク・ダン 54B (54B Bạch Đằng)

2009 年に個人の資金で修理された個人所有、等級 4 の家屋である。店舗兼住居として使用されている。所有者の意向により内部は撮影できない。奥の住居はフレンチコロニアル様式でモルタル仕上げの壁である。



建物の間に挟まれた通路を店舗として  
している。



奥に住居がある。

147) ホアン・ジェウ 19 (19 Hoàng Diệu)

2004 年に整備された等級 4、個人所有の家屋であり、店舗兼住居として使用されている。内部はモルタルで仕上げられた壁とコンクリートの床でしつらえてあり、1 階は店舗、2 階は住居であり現代的な構造となっており、伝統的な様式への整備は行われていない。



入り口は西に面しているため、1 階は日よけが張られる場合もある。



ファサードを南面から見ると、開口部は木製観音開きであることがわかる。



1 階天井はプラスチックが張られ、伝統的な様式への整備は行われていない。柱が壁際に残るがモルタルで仕上げられている。



1 階前家の床にはコンクリートが張られている。

148) ホアン・ディエウ 39 (39 Hoàng Diệu)

2008 年に個人の資金で整備された等級 4、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。北側の棟は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式であり、南側は古都ホイアンの伝統的な様式に部分的に整備しているが、内部は壁構造で現代的な作りである。



北の棟は古都ホイアンのフレンチコロニアル様式の外観である。



南の棟は古都ホイアンの整備後の典型的な外観である。



1 階天井は新材が張られている（北側の棟）



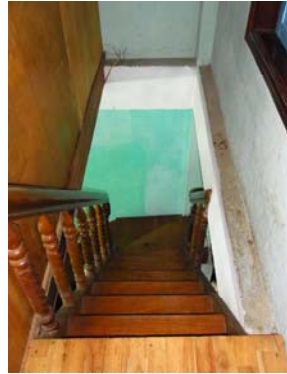
2 階の内部に柱はなく、天井が張られた現代的な作り（北側の棟）



1 階天井には根太が張られていない。（南側の棟）。階段の手すりが伝統的な様式である。



2 階に設けられている水回り（南側の棟）



階段（南側の棟）も伝統的な様式へ整備されている。



小屋組は省略され、壁構造であることが分かる（南側の棟）。



2 階に設けられている個室の壁は木造である（南側の棟）。



149) ホアン・ディエウ 13 (13 Hoàng Diệu)

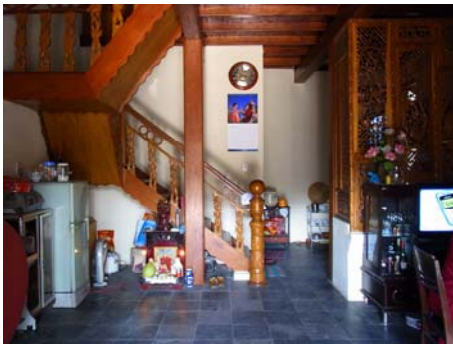
2009 年に個人の資金で整備された等級 4、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。内部は現代的な作りで、外観のみ陰陽瓦を葺き、開口部は意匠見本 2 に倣ったものを用いている。



側壁と前壁はモルタル仕上げで、開口部は木製の意匠見本に倣う典型的な事例である。



庇をトタンで伸ばし、日差しが強く雨季にスコールの多い気候に合わせている。



1 階前家内部。床はタイル張り、階段を支えるための梁を通す柱がある。天井に根太が張られている点は伝統的、な要素が用いられている。



南側の開口部には木材が使用されているものの、伝統的な様式ではない。



150) グエン・タイ・ホック 26 (26 Nguyễn Thái Học)

1997年に市の予算で修理された国所有、等級4の家屋である。人民委員会として使われている。1997年以降は修理を施された跡が見られない。棟の構成は前家、橋家、後家がわかるようになっており、板が張られた床や中庭の機能を受け継いだ吹き抜けが見られるが、意匠や素材の面で復元はほとんどなく、唯一、陰陽瓦が葺かれた屋根にのみ窺える。



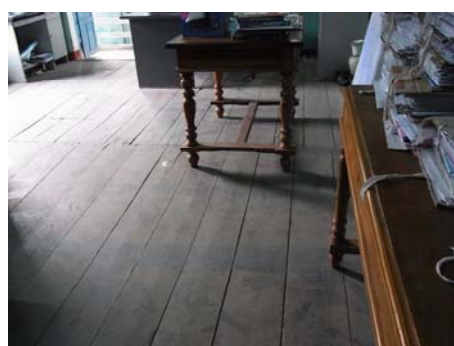
側壁、前壁共にモルタル仕上げで、ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式である。開口部は所有者の意向が反映されている。



屋根は陰陽瓦葺で一部ガラスが張られ採光機能を持たせている。



中庭は消失しているが吹き抜けがあり、中庭による換気や採光の機能が受け継がれているものの材料や意匠は異なるため、等級4だと思われる。



板張りの床は、等級3でも散見できた。



柄の入ったタイルがはられている床もある。



居室を仕切る壁は木製であるが、他の伝統的な様式の家屋のように装飾は施されたものではない。

151)グエン・タイ・ホック 78(78 Nguyễn Thái Học)

2003年に個人の予算で整備された個人所有、等級4の家屋。画廊兼住居として使用されている。等級4の修理基準により陰陽瓦を葺くこと、周辺と調和させる必要がある。グエン・タイ・ホック通りのように等級の高い家屋が多い通りに面しているために、ファサードが伝統的な様式に整備されたと推察される。



側壁はモルタル仕上げで、前壁は木材が使用されている。陰陽瓦が葺かれ、ファサードも伝統的な様式に倣っている。

152) グエン・タイ・ホック 51 (51 Nguyễn Thái Học)

2004年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された等級4、国所有の家屋である。前家、橋家から構成され、全体を服飾の工場として使用されている。国の所有でクアンナム・ダナン省のように公的組織の予算で整備された場合は、伝統的な様式に整備されることが多い。しかしこの事例は、工場として使用されるためか伝統的な様式への整備は棟の構成にのみ見られ、意匠や素材に関しては行われていない。ファサードを古都ホイアンのフレンチコロニアル様式にしているのみである。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、底を支える柱もモルタルが使用されている。



1 階の床にはタイルが張られており壁はモルタル仕上げ。



1 階前家には柱や梁が見られるがモルタルで仕上げられている。



1 階中庭に設けられた階段にも木材は使用されていない。



中庭から見た 2 階橋家は、ベランダの手すりもモルタル仕上げ。



橋家の小屋組みはあるものの、壁際は省略され、小屋組もトラス構造である。



2 階前家の中庭側の外観。開口部は木材だが壁はモルタル仕上げという、古都ホイアンの意匠見本 2 に倣うものである。



前家 2 階の天井も新材が張られており、やはり伝統的な様式への整備は行われていない。



前家 2 階の開口部は木製である。こうした木製の開口部は、等級 4 では散見でき、他の等級でも、側面や中庭に面した壁など道路から見えない部分に用いられている。



153) グエン・タイ・ホック 11(11 Nguyễn Thái Học)

2006 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。整備前と比較すると、整備後は周囲の家屋に合わせて復元したことがわかる。例えば、屋根の形状を変え、平入にして隣接する家屋との通路の屋根を外した。また、2 階正面にベランダを取りつけたことが挙げられる。



整備前の外観。整備後と大きく異なることが分かる。



側壁はモルタルで前壁は木材を使用し陰陽瓦が葺かれている。伝統的な様式に整備したもの。



天井には根太が張られ、内部も伝統的な要素が見られる。



柱はモルタルで塗りこめられ、中央にはない。



ファサードの柱。柱には落し戸用の溝がある。



欄間も木材で作られている。



154) グエン・ティ・ミン・カイ 42(42 Nguyễn Thị Minh Khai)

2006 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。前家は画廊として使用されている。陰陽瓦が葺かれ、開口部が三か所ある以外は伝統的な要素はない。所有者の意向により調査は外観のみである。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、陰陽瓦が葺かれている。底を支える柱もモルタルで作られ、古都ホイアンのフレンチコロニアル様式を取り入れている。



後家は 2 階建てである。



後庭が設けられていることが分かる。  
路地の様子。

155) グエン・ティ・ミン・カイ 53 (53 Nguyễn Thị Minh Khai)

2007 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。前家は店舗として使用されている。外観は陰陽瓦を葺くという最低限の修理基準が守られてはいるが伝統的な様式への整備は行われていない。



側壁、前壁共にモルタルで仕上げられ、陰陽瓦が葺かれた典型的なもの。



間口は他の家屋と比較すると狭い。

156) グエン・ティ・ミン・カイ 57 (57 Nguyễn Thị Minh Khai)

2007 年と 2008 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。画廊兼住居として使用されている。伝統的な様式への整備は、外観の修理基準である陰陽瓦を葺いている点と階段の手すりに見られる程度である。ファサードは意匠見本 2 に倣い、内部も前述した階段の手すり以外に伝統的な様式への整備はほぼ行われていない。



側壁と前壁はモルタルで仕上げられ、陰陽瓦が葺かれた意匠見本 2 に倣うもの。



壁際の小屋組は省略され、壁構造である。



床にはコンクリートが使用されている。



天井には根太が張られ、階段の手すりは伝統的な様式に整備されている。



壁はモルタルで仕上げられている。

157)ファン・boy・チャウ 64 (64 Phan Bội Châu)

2003年に個人の予算で整備された個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。等級3の伝統的な様式へ整備されていないものと余り差がない。



側壁、前壁共にモルタル仕上げ。ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式に整備している。陰陽瓦が葺かれベランダの手すりはコンクリートが使用されている。



外観を西側から見ると、切妻屋根で前家のみであることがわかる。



1 階前家の天井に根太が張られ伝統的な様式への整備だといえる。



天井を張らずに野地板が見え、小屋組は省略されている。



2 階床に木材が使用されている点は、伝統的な様式への整備だと捉えられる。



壁はモルタル仕上げで野地板まで高さがある。プラスチックを使用している点など、現代の素材を用いて、伝統的な様式と異なる手法を用いている。



158)ファン・チャウ・チン 2A (2A Phan Châu Trinh)

2004 年にホイアン市の予算で整備された等級 4、個人所有の店舗兼住居である。ホイアン市の予算で整備されたが、伝統的な様式への整備はほとんど見られない。周囲に等級の高い家屋が少なく、周辺に合わせると、それほど伝統的な様式へ整備しなくとも構わない。



壁がモルタルで作られ、側壁と前壁もモルタルで仕上げられ、陰陽瓦が葺かれている等級 4 の典型的な整備事例。



店舗側の外観はトタンが使用され、伝統的な様式への整備は行われていない。



住居側の内部。中 2 階の手すりは伝統的な様式である。



床のタイルは斜めに貼られている。また、扉は金属のシャッターである。



裏側に台所が設けられている。水回りを屋外に設ける点は伝統的な様式の家屋で現代的な生活を営むために田でも見られる。



柱には木材が使われていない。コンクリートの台座に平たい柱が特徴的。



159)ファン・チャウ・チン 133 (133 Phan Châu Trinh)

2004 年にホイアン市の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。全面が住居として使用されている。内部は所有者の意向により調査できなかった。



屋根に陰陽瓦を葺き、ファサードは古都ホイアンのフレンチコロニアル様式だが、壁面開口部などは意匠見本 2 に倣うものであり伝統的な様式に整備されていない。



西側からの外観。切妻平入のつくりであることがわかる。

160)ファン・チャウ・チン 14 (14 Phan Châu Trinh)

2005 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の工場兼住居である。屋根に陰陽瓦を葺き、周辺に多い切妻平入だが、ファサードや開口部の様式は意匠見本に倣わず、伝統的な様式への整備も行われていない。



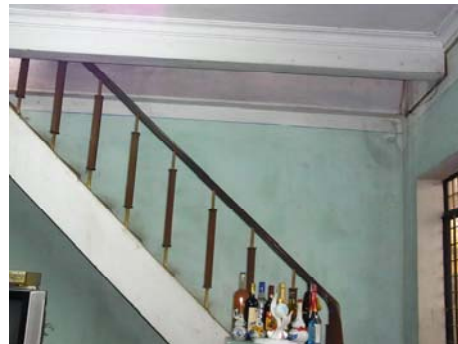
側壁と前壁はモルタルで仕上げられ、底を支える柱もモルタル仕上げである。陰陽瓦を葺いた典型的な事例。



小屋組みは省略され、壁構造である。



前面の底にはモルタルで支えられる柱が使用されている。



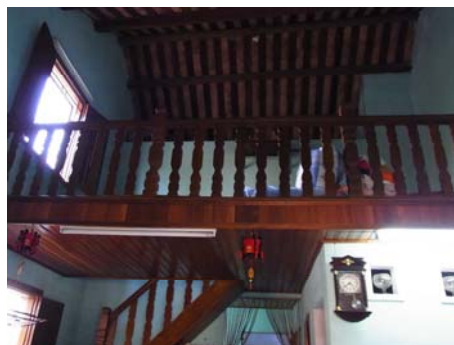
橋家にあたる室内で天井はコンクリートの梁が通っている。特に伝統的な様式へ整備されてはいない。

161) ファン・チャウ・チン 1 (1 Phan Châu Trinh)

2006 年に個人の予算で修理された等級 4、国所有の家屋である。平屋平入で陰陽瓦を葺いた外観は、意匠見本 2 に倣い、内部は壁構造で現代的な作りである。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、開口部が三か所あり陰陽瓦が葺かれている。保存の手引きのファサード例に倣っている。



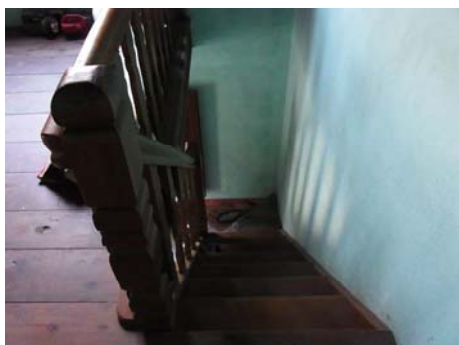
中 2 階が設けられ、階高を増やさず部屋を増やす工夫をしている。



小屋組みは省略され壁構造である。



壁は木材を使用せずにモルタルで仕上げられている。



中 2 階の階段は伝統的な様式ではない。ただ、片側の手すりや 2 階の床が板で仕上げられている点は、伝統的な様式を意識している。



付属屋と主屋の小屋組みは省略され、モルタル壁で屋根を支えている。

162) ファン・チャウ・チン 71B (71B Phan Châu Trinh)

2006 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。前家は店舗として使用されている。前家は、三か所の開口部に木製の扉が付けられ、平入平屋建てで陰陽瓦を葺くという意匠見本 2 に倣ったファサードであり、内部は現代的なつくりである。



側壁と前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれている。



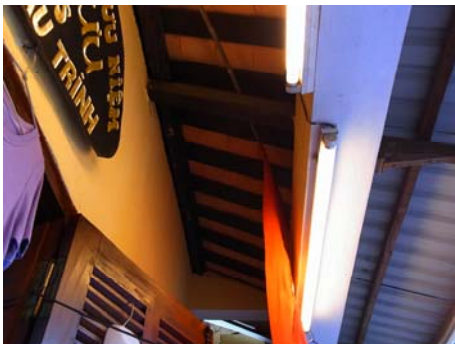
前家の小屋組みは壁際が省略された壁構造である。



瓦が葺きかえられていることが分かる。梁に電灯が付けられている。



床にはコンクリートが張られている。



庇も気候に合わせてトタンで伸長されている。



163) ファン・チャウ・チン 97(97 Phan Châu Trinh)

2006 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。全面が住居として使用されている。前家と後家、中庭があり棟の構成は伝統的な様式だが、内部は壁構造である。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた意匠見本 2 に倣ったファサードである。



小屋組みは省略され、壁構造である。



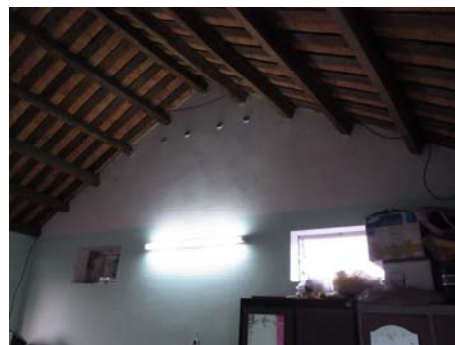
棟の構成が維持されているが、内部は伝統的な様式に整備されていない。



階段、天井共に伝統的な様式ではない。



後家ベランダからみた中には庭トタンで屋根が掛けられている。



後家の小屋組み。やはり壁構造で伝統的な様式への整備は行われていない。

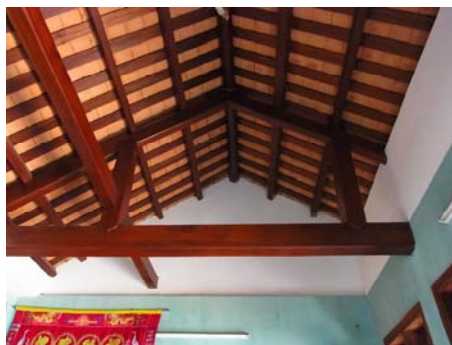


164) ファン・チャウ・チン 68 (68 Phan Châu Trinh)

2008 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。住居として使用されている。外観は、意匠見本 2 に倣っているが開口部の素材や内部は現代的である。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれ、意匠見本 2 に倣ったもの



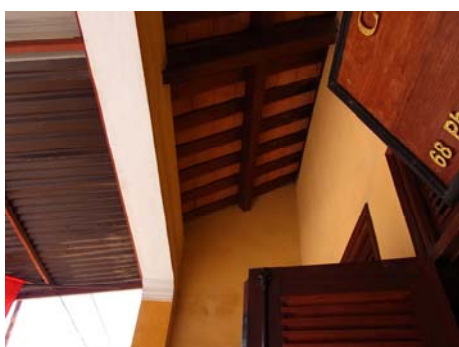
小屋組みの途中にモルタル壁が作られている。壁際は省略され、壁構造であることが分かる。



床には貼られているタイルの色は保存の手引きに沿っている。



天井、桁や梁はモルタルで仕上げられている。



前家の庇がトタンを用いて延ばされている。日差しが強く、雨季にはスコールがあるために、深い庇の方が都合がよいのだろう。

165) ファン・チャウ・チン 2B (2B Phan Châu Trinh)

2009 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。外観は意匠見本 2 に倣っているが、内部は現代的な作りで伝統的な様式への整備は見られない。



側壁と前壁はモルタル仕上げで陰陽瓦を葺いた意匠見本に倣ったもの。



小屋組みは省略され、壁構造である。



階高を増やさずに中 2 階を作り床面積を増やしている。



床はタイルで仕上げられている。



開口部は現代的である。



前面開口部は木材が使用されているが、伝統的な様式への整備は見られない。

166)チャン・フー63 (63 Trần Phú)

2002 年にホイアン市の予算で整備された等級 4、国所有の家屋である。ファサード及び内部の意匠は伝統的な様式に整備されているが壁構造である。例えば、開口部や壁、ベランダの手すりに木材を使用し意匠も伝統的な様式を用いるなど、個人所有とは異なる仕上げが見られる。



側壁はモルタル仕上げで、前壁は木材を使用した伝統的な仕上げに模した



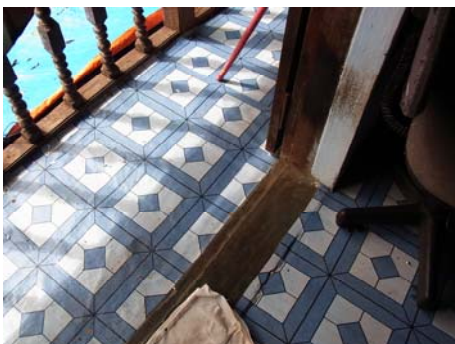
天井を張っていない。小屋組みは省略されている。



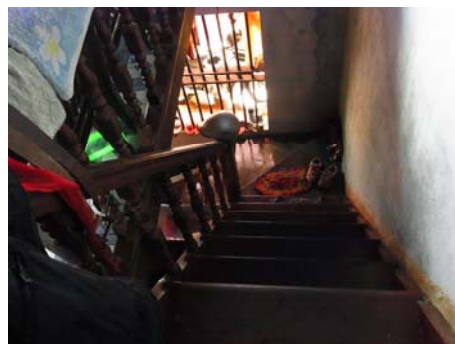
中庭へ続く開口部。壁は木材が使用され、床はタイルが張られている。



2 階ベランダの手すりに木材を使用し伝統的な様式に整備されている。



開口部には木材を使用している一方で 2 階床とベランダに柄の入ったタイルを張るなど利便性への配慮も見られる。



階段の手すりの意匠は伝統的な様式で木材を使用している。



167)チャン・フー51 (51 Trần Phú)

2004 年にクアンナム・ダナン省の予算で整備された等級 4、国所有の家屋である。店舗兼住居として使用されている。国所有で、クアンナム・ダナン省の予算で修理されているためかファサード及び小屋組みを伝統的な様式へ整備されている。16) ファン・チャウ・チン 133 (133Phan Châu Trinh) と比較すると、開口部や前壁、小屋組みを伝統的な様式へ整備したといえる。



側壁はモルタル、前壁は木材を使用し、陰陽瓦を葺いた。周囲に調和させたファサードである。



西側からの外観。切妻屋根に陰陽瓦が葺かれている。



内部も小屋組みを伝統的な様式に整備した。



開口部には木材が使用され、落し戸が使われており、伝統的な様式に整備した。

168) チャン・フー146 (146 Trần Phú)

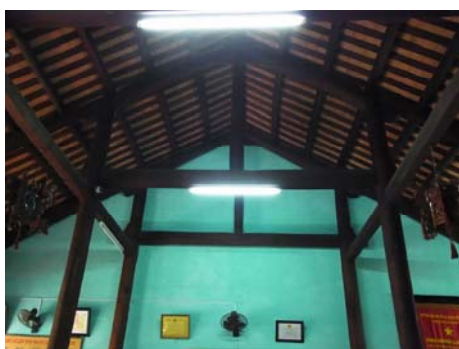
2007 年にクアンナム・ダナン省の予算で整備された等級 4、国所有の家屋である。全面的に人民委員会として使用されている。全てを伝統的な様式に整備している。



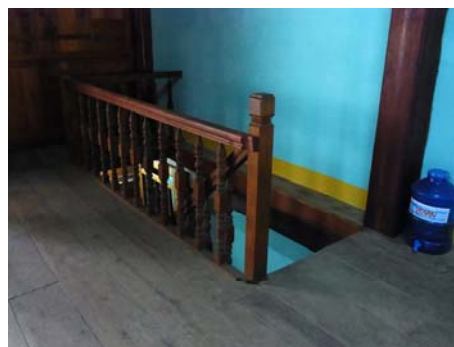
側壁はモルタル仕上げ、前壁は木材で仕上げられている。



柱下部に日本型の継が見られる。



壁際まで小屋組みがあり、柱構造と構造の折衷となり、伝統的な様式に整備している。



階段の手すりと階段も伝統的な様式に整備している。



床は、意匠見本のタイルが張られている。礎石に柱を立てる伝統的な様式である。



中庭囲む棟の 2 階にはベランダが設けられている。手すりも木製で、伝統的な様式である。



古都ホイアンの修理済み家屋（路地に面しているもの）

No.	住所	等級	修理年	用途	分類
1	NTM2/8	S	2006	祠堂	⑤-2
2	LL56-10	C1	2002	住居	③-2
3	PCT44-20	C1	2001	祠堂兼住居兼見学場所	④-2
4	TP50-3	C1	2001	住居	④-2
5	TP84/1	C1	2007	祠堂	⑤-2
6	LL19/10	C2	2006	住居	—
7	PCT44-12	C2	2002	祠堂兼住居	③-2
8	PCT71-14	C2	2002	住居	③-2
9	LL2-8	C3	2001	画廊兼住居	③-2
10	LL56-6	C3	2008	住居	③-2
11	LL56-8	C3	2008	住居	③-2
12	NTM63-2	C3	2005	住居	③-2
13	PCT51-5B	C3	2003	住居	③-2
14	PCT71-26	C3	2003	住居	③-2
15	PCT53-12	C3	2005/2008/2009	住居	③-2
16	PCT47-4	C3	2008	住居	③-2
17	PCT53-6	C3	2009	住居	③-2
18	TP132C	C4	2005	住居	③-2
19	BD12-3	C4	1997	住居	④-2
20	BD10-2	C4	2001	住居	③-2
21	BD12-19A	C4	2008/2009	住居	③-2
22	NTM10-5	C4	2010	住居	③-2
23	PCT51-3	C4	2001	住居	③-2
24	PCT71-22	C4	2001	住居	③-2
25	PCT71-28	C4	2003	住居	③-2
26	PCT71-36	C4	2005	住居	③-2
27	TP11-4	C4	2005	住居	③-2
28	TP12-8	C4	2006	住居	③-2

※住所は道路名の略称と番地の組み合わせ。

※No. 6LL19/10 は、所有者が不明なため、分類をしていない。

1) グエン・ティ・ミン・カイ 8/2 (8/2 Nguyễn Thị Minh Khai)

共同体所有の特級の家屋。2006年に個人の予算で修理された。祠堂であり、隣接する家屋に管理者が居住している。整備対象とされているのは祠堂のみである。また、祠堂は居住者らの提灯作成の場所ともなっている。梁間6間、桁行6間の正方形となっている。中央に祠堂を配置し、周囲を板壁で囲い正面に扉を配している。出入り口は北と南に1か所、東西に2か所ずつあり、対称的な配置である。

(1) 構造

地表面から数段盛り土した上に建てられている合掌造り。南側一間は虹梁が、その北側は下屋にさらに天井のように垂木が張られている。

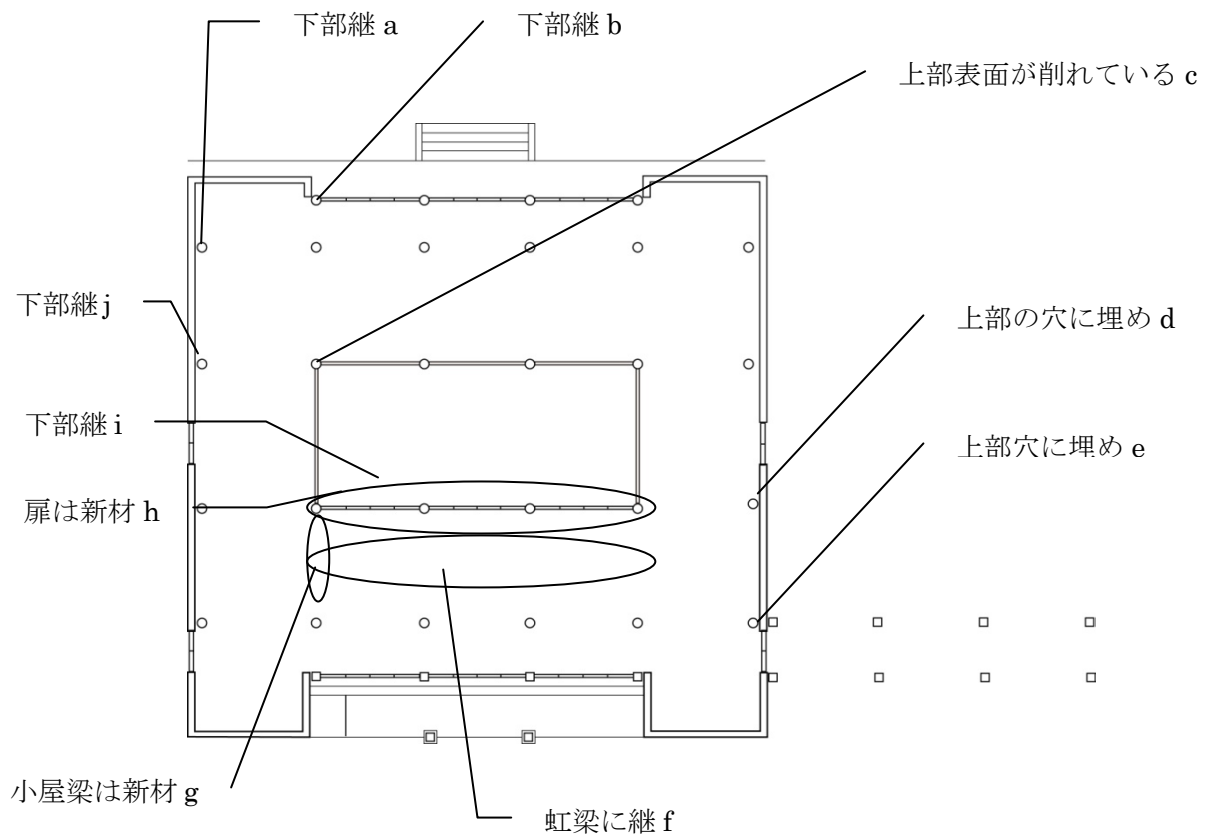
(2) 中庭

祠堂のため中庭はない。居住棟との間に空間はあるが、庭としての機能はない。

(3) その他

祠堂の東側に接して居住棟があり、さらに北部にも居住棟がある。祠堂を管理する住民が暮らす。

2011年調査時平面図





a) 下部に継。継の形から、ホイアン型の手法を用いていることが分かる。



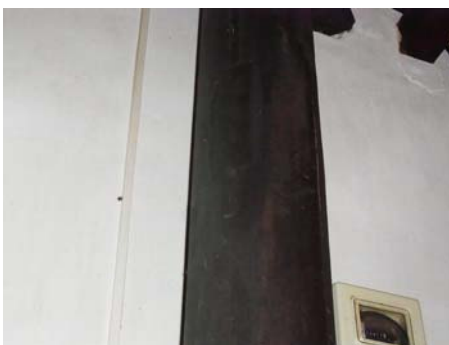
b) 外側から。下部に継がある。下部が新材、上部が旧材で、次の形から、旧材を多く残す手法と見られる



c) 上部腐朽部分を埋めている。こうした補強方法は数少ないが、いくつか例がある。



d) 柱上部の埋め。穴を埋めている。特級ならではの細やかな配慮だと見られる。



e) 同様に穴を埋めている。



f) 虹梁に継がある。左側は旧材、右側が新材であることが、材料の色からよくわかる。



g) 虹梁に継は新材で継がれている。柱の傷は腐朽による。



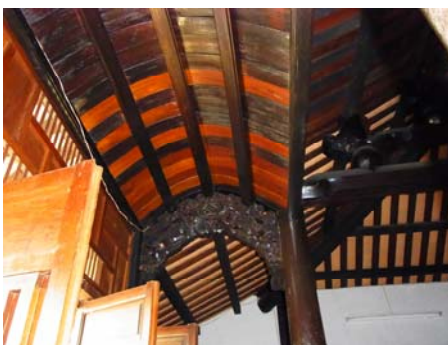
h) 中央祠堂を囲む壁材は新しい。写真に写っている扉は、伝統的な様式である。



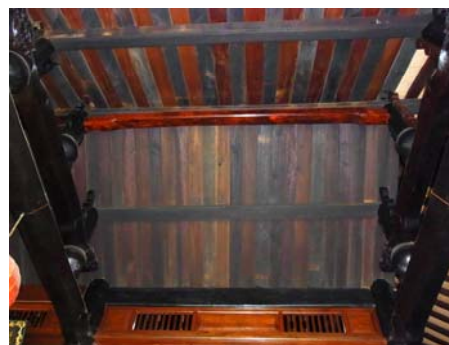
i) こうした形の木で修理されているものは珍しい。大抵は異素材で埋めている。



j) 下部の継。下部が新材で上部が旧材。裏側は平らなため、旧材を多く残す継方だとわかる。



虹梁のある部分の天井が一部新しい。塗装の関係か、新しい材料がよくわかる。旧材を残すように努めていることが分かる。



棟木が新しいことがわかる。2006年に修理され、2011年の調査時点での風合いなので、今後変化していくのだろう。



祠堂中央小屋組みは合掌造りで天井を張らずに見せている。



下屋部部分の小屋組みは束が用いられている。陰陽瓦は、葺きかえられている。



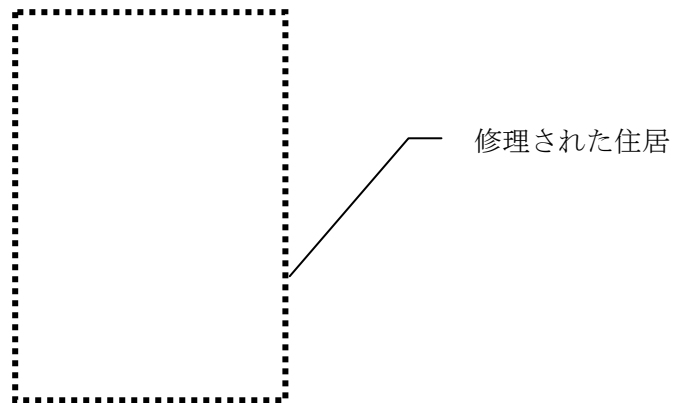
日本の平行垂木と類似したもの。壁はモルタル仕上げで、屋根を支えていることがわかる。



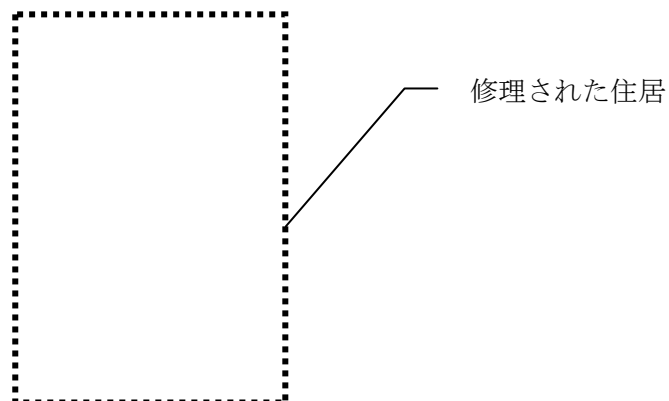
2) レ・ロイ 56-10 (56-10 Lê Lợi)

個人所有の等級 1 の家屋。2002 年に個人の予算で修理された。

敷地に祠堂と住居が建てられている。祠堂は桁行 5 軒、梁行 4 間となり柱は木製で煉瓦造りモルタル仕上げの壁で囲われ、屋根は陰陽瓦葺きである。修理されたのは住居として使用されている棟で祠堂は現状維持と書かれている。



1 階平面図



2 階平面図



伝統的な様式だが、扉が青く塗られている。等級1の場合は修理時に元の形式に戻す事例が多いが、所有者の利便性からか金属製の扉である。



内部も伝統的な様式である。狭いと中2階を作る家屋もあるが、別棟に居住し、この棟を保存しているのだろう。



桁方向に見た小屋組みは、町家のような壁構造と柱梁構造の組み合わせではなく柱梁構造である。



床はコンクリートが敷かれている。



底下の梁の彫刻。



壁を作らずに布をかけて部屋を区切っているのは、予算的な側面もあるが必要な時だけ個室が持てるという利便性もある。



後家と屋根の接続部分。コンクリートと木材の組み合わせはよく見られる。

3) ファン・チャウ・チン 20/44 (20/44 Phan Châu Trinh)

個人所有の等級 1 の家屋。2001 年に個人の予算で修理された。

ファン・チャウ・チン通り (đường Phan Châu Trinh) に面した家屋は南北いずれかに開口部が設けられている。しかし、この家屋は路地から入るようになっており、敷地は東西方向に長く、一方はファン・チャウ・チン通り (đường Phan Châu Trinh) に面した路地から入ることができる。古都ホイアンに多く見られる町屋形式ではなく、同規模の平屋の家屋が 2 棟接続している。棟の前には庭を有しており、一部が喫茶店として使用されている。一棟は門に対して正面を向いており (以下棟 1)、桁間 3 間、梁行き 5 間程度の平入である。もう一棟は (以下棟 2)、ファン・チャウ・チン通り (đường Phan Châu Trinh) に対して正面を向いており桁間 6 間、梁間 3.5 間の平入である。

床は六角形の瓦が使用されており、柱は棟 1 の後部を除き丸柱が使用されている。

継が使用されている箇所は見られず、木部表面の塗装の状態から判断すると、材料は部材ごと取り換えられている。

断面図

平面図

ファサード





主屋。前に庭を有する。町屋とは異なり余裕のある配置である。



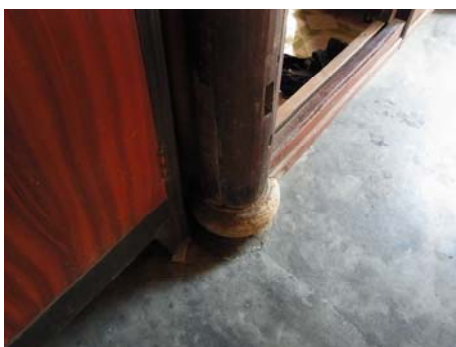
主屋に直角に配された棟。陰陽瓦が葺かれ、柱や壁に木材が使用された伝統的な様式に準じた意匠である。



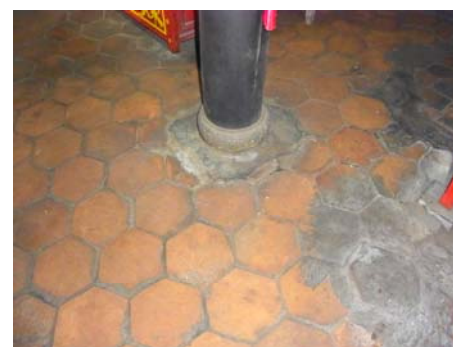
主屋前面付属屋の小屋組み



主屋小屋組み



住居棟の柱の継。一部だけが補修され、材料を多く残す継方をしている。付属屋だが、伝統的な様式である主屋に合わせた外観を持つ。ただし、床はコンクリートで仕上げられ、現代の材料を部分的に用いながら意匠を合わせる手法が取られている。



祠堂の床は六角形の瓦が敷かれている。大抵タイルやコンクリートが敷かれている中で大変珍しく貴重である。等級 1 の伝統的な様式を全て保存するという方針が窺える。



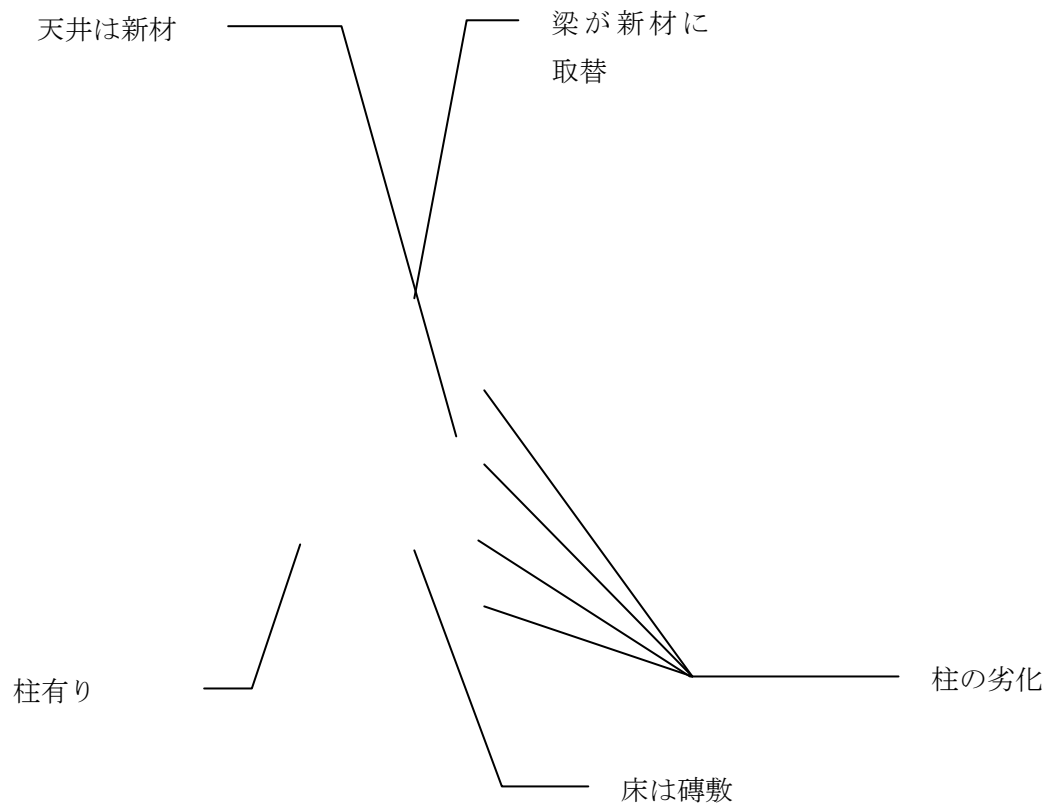
祠堂の内部。柱、梁、桁、柱間装置ごとに色が異なり、修理時期が異なることが窺える。



同様に柱と小屋組みの色は修理した年代ごとに異なる。

4) チャン・フー50/3 (50/3 Trần Phú)

個人所有の家屋。チャン・フー通りに面していず、路地に入るために、店舗としては使用されていない。2001年にクアンナム・ダナン省の予算で修理された庭を有する平屋の家屋で主屋のみで構成される。桁間3間、梁間4間であり、北側に台所等が付属され、主屋後ろに部屋が増設されている。中庭に増築は見られない。家屋の後ろに部屋を増設した理由は、等級1の修理基準である全体を保存するという方針と、部屋の数を増やしたいという居住者の要望を満たすためだと考えられる。また、深い庇はさらにトタンで伸長されている。下屋も生活空間として使用されているために、さらに庇を伸ばすことが、生活していく上で求められるのだろう。修理完成時にトタンが付けられていたとは思えないため、居住者によって敷設されたのではないだろうか。



現状調査図

断面図



前庭から見た主屋のファサードは陰陽瓦葺きで丸い柱がある伝統的な様式である。家屋前面に庭を有するという敷地内の構成自体も伝統的である。



門。チャン・フー通りは東西方向に走るが、枝番の番地は南北方向の道路に面し、町家形式ではないために門が設けられている。陰陽瓦が葺かれ、周囲の景観に調和させている。



小屋組みは合掌造りに一部天井が張られている。



床は、長方形の磚が敷き詰められている。伝統的な磚の形は不明だが、磚を使用していることが珍しく、伝統的なものは全て保存するという等級 1 の方針が窺える。



台所部分の床。同様に磚が敷かれている。形状は同じだが敷き方が異なる。主屋と異なる理由は不明だが、水回りをタイルやコンクリートにせずに線を使用していることが珍しく、全体を保存していることが窺える。



台所部分の小屋組み。柱がなく壁構造になっている。



南側の正面の扉は、伝統的な様式であり北側と共に伝統的な形式を保っている。



北側正面は、壁、扉共に木材を使用し、伝統的な様式を保っている。





主屋の底をトタンで伸長している。他の家屋でも窺えたが、等級1でも建造物にさし障りのない程度で、こうした生活上必要な改変を行っている。



前庭。植物が置かれ洗濯物が干されている。棟の増築を行わずに保たれている庭は、古都ホイアン内において珍しいが、等級1の修理基準により増築を行えないためだといえる。

7) ファン・チャウ・チン 44-12 (44-12Phan Châu Trinh)

2002 年に個人の予算で修理された等級 2、個人所有の家屋。通りに面していないため商店として使用されていない。前家は傷みが激しいが作業所として使用され、所有者は別棟に現代的な住居を建てて住んでいる。



隘路を通っていくと見られる。陰陽瓦が葺かれているが、開口部はガラスが使用された現代的である。



天井を張らずに小屋組みを見せているのは等級 2 の修理基準である伝統的な様式を維持することに沿っているからだろう。



小屋組みの材の傷みが見られる。湿度が高く、雨の多い気候のためか。上部の材料が劣化している事例は少ないため、原因が不明。



柱の表面が剥離している。床はコンクリートを敷かれ、居住者の利便性を高めている。



柱の下部に残る溝は埋められていない。溝を埋めているのは特級や等級 1 で見られた。



彫刻は施されていないが、端部が加工してあることは分かる。全体的に材料の傷みが見られる。



別の場所の下屋も、材料表面の劣化が著しい。ホイアン史跡管理事務所職員によると、数年おきに木部の表面を塗り直しているとあるが、1000 棟以上有る家屋の管理の手法は、基本的に所有者次第だといえる。



前面底部分である。左手に見えるのは底を支える柱である。伝統的な様式を維持する以外は、彫刻を施してはいず、修理後に等級 1 との差が激しい箇所である。



所有者が居住する家屋との境目である。伝統的な棟を保存しながら、住居は現代的な保存地区内の所有者に多く見られる事例。ただし、現代的な住居が隣接しているのは珍しく、路地だからだといえる。



8) ファン・チャウ・チン 71-14 (71-14Phan Châu Trinh)

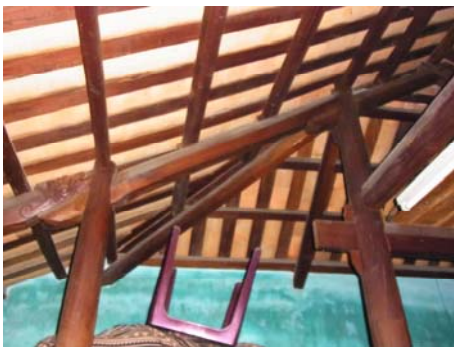
2002 年に個人の予算で修理された等級 2、個人所有の家屋。主要な通りに面していないが、飲食店が隣接し屋台の出る路地にあることから観光客も目にする場所に経つ。調査時は住居として使用されていたが 2011 年 8 月には貸し出し用の家屋となって家人は引っ越していた。裏側に庭がある。



門柱と壁がモルタル仕上げのため、家屋が伝統的であることがやや分かりにくい。



天井を張らずに小屋組みを見せている点は、前家の伝統的な要素を維持するという等級 2 の修理基準に沿った



先ほどの部材の色と比較すると、修理時期は同じだが、材料が新しいことがわかる。瓦も葺きかえられ、壁の内側が青という修理基準を守っているが、小屋組みは伝統的な様式とはやや異なる



端部の彫刻は、材料の色から修理後に設置されたものと判断できる。端部の彫刻は、全体的に良く残っているもしくは整備している。



礎石が二重に敷いてあり。湿気への耐性を高かめるためだろう。また、柱の表面に割れができています。



新しく修理した部分は表面の風合いが異なる。他の修理家屋と比較しても、異なる色合いであり、塗料の試行錯誤の過程が窺える。



小屋組みや瓦は全体的に新しい。旧材を残すことは、雨が多く湿度の高い気候では、残せる旧材が少ないのだろうか。



室内は木製の柱がある、伝統的な形式である。床はコンクリートが張られ利便性を高めている。



後にある台所や洗濯場などの水回りにはトタン屋根が掛けられている。家屋の裏手はモルタル壁でガラスの入った扉が使われ、伝統的な様式とは異なる。



9) レ・ロイ 8/2 (8/2 Lê Lợi)

2001年に個人の予算で整備された等級3、個人所有の家屋。画廊兼住居である。1階前家は画廊として使用されており、後家は居住空間である。後家は、陰陽瓦は葺かれているものの現代的な様式であり、利便性と保存を等級に合わせて共存させていることがわかる。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦葺きという保存の手引きに掲載されている意匠見本に沿ったもの。



左手が前家、右手が後家であり、棟の間の補修はトタンが用いられている。家屋全体を修理基準の通りに維持する予算上の難しさが窺える。



後家の室内はコンクリートだが欄間が設けられており伝統的な要素が推測できる。



2階ベランダ。後家2階の屋根も陰陽瓦であることが分かる。



2階天井はプラスチックが張られ小屋組は見られない。



2階へあがる階段は木材を用いているが伝統的な様式ではなく、所有者の意向を反映している。

10)レ・ロイ 56-6(56-6 Lê Lợi)

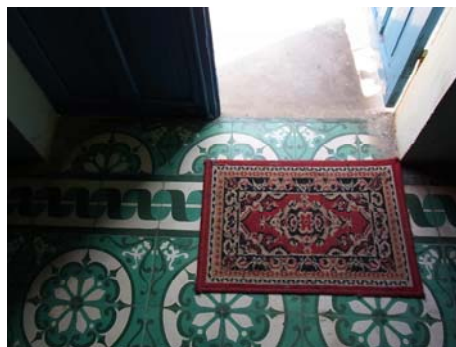
2008 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。住居として使用されている。柱はなく壁構造だが小屋組みが見られる。



ファサードは側壁、前壁共にモルタル仕上げで開口部は青く塗装された木材。



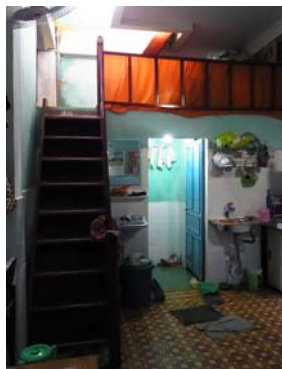
モルタルの壁に端部が埋め込まれた小屋組み。左手は中 2 階を設け、部屋を増やしている。



床には張られたタイルに柄が入るのは等級 3 だからか。



小屋組みの母屋が途中で継がれている。



台所部分にも中 2 階が設けられている。保存と生活のための要求の兼ね合いの結果である。また、柱がなく壁構造である。

11)レ・ロイ 56-8(56-8 Lê Lợi)

2008 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。住居として使用されている。平入で平屋の外観に伝統的な要素が見られるものの、内部は現代的な作りである。高さ規制により階高を増やせないために、中 2 階を設け家族構成の変化に対応している。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた等級 3 の整備後に多い外観。



小屋組みは歴史的なものと異な、壁際が省略された壁構造である。



高さ規制が掛けられているため。中 2 階が設けられている。



中 2 階への階段と梁。



内部に設けられた部屋の壁はモルタルで作られている。



床はコンクリートが用いられており、伝統的要素はない。



12)グエン・ティ・ミン・カイ 63/2 (63/2 Nguyễn Thị Minh Khai)

2005 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。住居としてのみ使用されている。個人所有であり、個人の予算で整備されているため伝統的な形式への整備はほぼ行われておらず、修理前から残っていた伝統的な要素を維持し、住居としての利便性を向上させている。なお、伝統的な要素とは棟の構成のみである。同じ等級 3 でグエン・タイ・ホック・23 (23Nguyễn Thái Học) と仕上がりが大きく異なる。



店舗を営んでいないためか、道路に面した明確な開口部もなく、他の町家形式の家屋と異なる。



前家は天井が張られず陰陽瓦が見えるのは伝統的な様式だが、小屋組みが省略され、中 2 階がある点は現代的なである。



後家と後庭へ抜ける通路。コンクリートが敷かれトタンが葺かれているものの壁はなく、半屋外空間になり、中庭のような機能も持つ。



1 階の天井は根太がなく壁構造である。小屋組みが省略され、天井が張られると伝統的な様式とは異なる仕上がりとなる。

13) ファン・チャウ・チン 51/5B (51/5B Phan Châu Trinh)

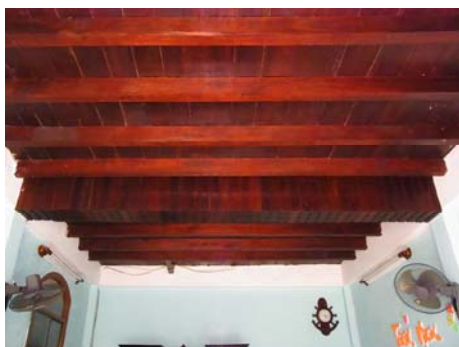
2003 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋。路地を入った場所にあるため、住居として使用されている。等級 3 に分類されているが、伝統的な要素はほぼ見られず、辛うじて 2 階に板の床が貼られている点、階段の意匠が挙げられる。等級 4 に近い印象である。



モルタルの側壁と前壁に、木材を使用した開口部。隣家との間に見られる細い棟は、町家型の家屋でも見られる。通路もしくは、家屋の拡張である。



北側から見る外観。切妻屋根であるが、外観に伝統的な要素はほぼ見られない。



根太が張られている天井は、わずかに伝統的な要素だと言える。



1 階床にはタイルが張られているが保存の手引きの基準とは異なる。2003 年に整備工事が行われたため、2007 年出版の保存の手引きとは異なる整備が行われたと言える。





階段の意匠は伝統的なものである。等級 3 に分類されていることを考えると、当初から残る伝統的な要素だと言える。



天井が張られず小屋組みが見え、壁構造であることがわかる。屋根を支える柱は小屋組みの中心からずれているが、壁構造のため問題ないと推察される。



2 階の床は板が張られ、伝統的な要素だともいえる。



板壁で区切られた部屋は等級 1、2 の伝統的な様式の町屋でも見られるが、棟の構造や位置が異なるため伝統的な要素だと考えられない。

14) ファン・チャウ・チン 71/26 (71/26Phan Châu Trinh)

2003 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋。住居として使用されている。居住者が不在のため、外観のみの調査と撮影である。主要な通りに面していないため、町家型ではない。門柱を持ち、庭を有する現代的な家屋である。等級 3 に分離されているということは、内部にいくつか伝統的な要素が見られるのだと推測できる。



前に庭がある切妻屋根の主屋は外観からは伝統的な要素は見られない。陰陽瓦を葺くことは、古都ホイアン全体の修理基準であるため、屋根瓦だけでは判断できない。



玄関前の門柱や玄関に伝統的な要素はない。

15)ファン・チャウ・チン 53-12 (53-12 Phan Châu Trinh)

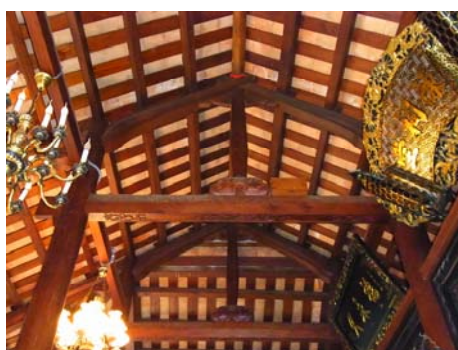
2005 年、2008 年、2009 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。住居として使用されている。敷地の中央に祠堂が置かれ、両脇に居住棟が並ぶ。祠堂は伝統的な様式で新しく建てられた。



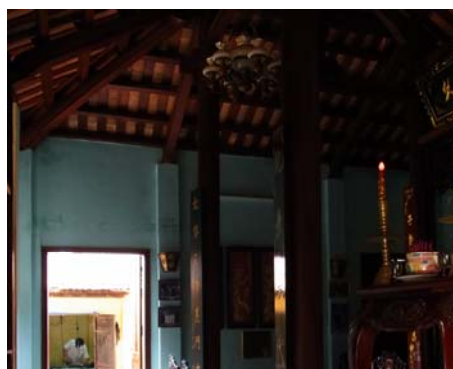
側壁及び前壁の一部はモルタル仕上げ、開口部は木材を使用している。



正面には住居棟が見られ、陰陽瓦が葺かれモルタル壁で仕上げられている。



天井が張られず小屋組みが見える伝統的な様式である。



一方で壁際の柱はモルタルが使用されており、伝統的な様式である。



垂木端部には精緻な彫刻が施されている。端部の彫刻は等級の高い家屋で散見でき、それに倣ったと思われる。



モルタル仕上げの壁。特級の祠堂と似た作りだが、柱がモルタル仕上げであるなどの相違点が見られる。

16)ファン・チャウ・チン 47/4(47/4 Phan Châu Trinh)

2007 年に個人の予算で修理された等級 3、国所有の家屋である。住居として使用されている。伝統的な要素は外観の陰陽瓦のみであり等級 4 と変わらない。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた典型的なファサードである。



小屋組みは省略され壁構造である。



右手は内部の個室の仕切りであり、外観は修理基準を満たし、内部は現代的な作りとなっている。



後家の小屋組みも壁際が省略されている。



17) ファン・チャウ・チン 53-6(53-6 Phan Châu Trinh)

2009 年に個人の予算で整備された等級 3、個人所有の家屋である。住居として使用されている。伝統的な要素が見られないため等級 3 に分類された理由が不明。



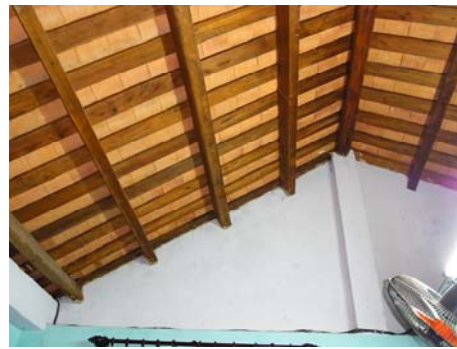
町家ではないため、屋根以外の意匠や棟の構成が異なる。



北側の棟の小屋組みは省略されて壁構造となっている。



北側の棟の床はコンクリートが張られている。



南側の棟の小屋組みも省略されて壁構造となっている。



南側の棟の天井には新材が用いられている。伝統的な様式の一つである根太が張られたものではない。



南側の棟の階段の手すりには伝統的な要素が見られる。



18)チャン・フー132/3 (132/3 Trần Phú)

2005 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。飲食店兼住居として使用されている。町家形式ではない。整備にあたり庭に飲食店を増設している。



飲食店の小屋組み



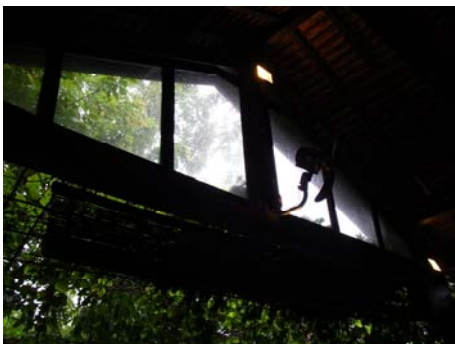
柱。敷石の上に木製の柱が使われている。床はタイル



飲食店の様子。壁は設けられない



便所周辺。



ガラスが破風に張られている。



中庭も客席の一部とされている。

19) バック・ダン 12/3 (12/3 Bạch Đằng)

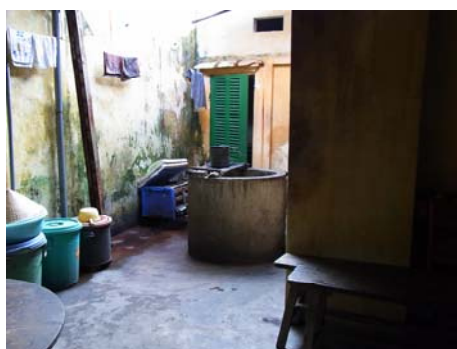
川沿いに位置するバック・ダン通りから南北方向に分かれている路地の一本を北上した場所にある。個人所有でホイアン市の予算で整備された家屋であり、店舗としては使用していない。棟の構造など全てにおいて伝統的な要素はなく、伝統的な様式の整備前後は行われていない。陰陽瓦を葺いている点は修理基準に合致している。



ファサード。敷地いっぱいに金網が張られ、門柱が建てられている。開口部は薄い緑色に塗られている。



天井には根太が張られている。柱はなく、壁構造であることがわかる。等級3でも同様に見られたが、町家型でも祠堂でも、貴族住宅とも異なるため等級4に分類されたのか。



裏手には井戸があり、今も使用されている。これを伝統的な要素と捉えることもできるが、等級4に分類されているのは、家屋自体に伝統的な要素がないためだろう。

20)バク・ダン 10/2(10/2 Bạch Đằng)

2001 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。住居として使用されている。前家と付属屋で構成されている。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、開口部は 2 階所あり、観音開きである。屋根は陰陽瓦が葺かれており等級 4 の意匠見本 2 に倣った典型的な整備事例である。



ファサードを南面から見ると、シャッターが使われており、屋根がトタンで伸長され、伝統的な要素は見られない。



前家の屋根瓦に陰陽瓦は確認できない。前家後部は 2 階建てになり、陰陽瓦、漆喰仕上げとなっている。

21) バク・ダン 12/19A (12/19A Bạch Đằng)

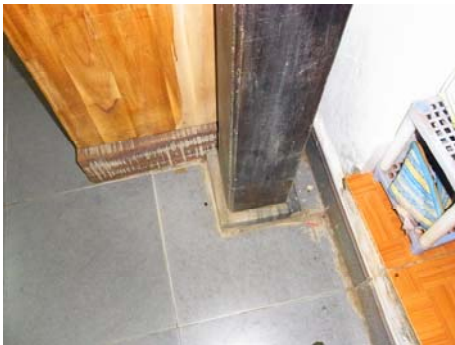
2008 年と 2009 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。住居として使用されている。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、底を支える柱もモルタル仕上げとなっている。



内部は床がタイル、1 階天井には根太が張られ、伝統的な様式に整備している。



タイルは灰色が用いられている。木の柱が使われ、壁構造だが伝統的な様式を部分的に用いている。



22)グエン・ティ・ミン・カイ 10/5 (10/5 Nguyễn Thị Minh Khai)

2010 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。住居として使用されている。1 階の天井に根太が張られている点は伝統的な様式の整備と言えるが、基本的に現代的な仕上げである。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで陰陽瓦が葺かれた意匠見本 2 を用いた典型的ない事例である。



北側からの外観。モルタル仕上げで伝統的な要素はない。



1 階天井には根太が張られ伝統的な要素だともいえる。



1 階内部。部屋はコンクリートで仕切られている。



小屋組みは省略され、壁構造で陰陽瓦が葺かれていることが分かる。



2 階内部。個室はモルタルと木材で仕切られているが、伝統的な様式への整備は見られない。



23)ファン・チャウ・チン 51/3 (51/3 Phan Châu Trinh)

2001 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。住居として使用されている。敷地は主要な通りに面さず細長い形状をしている。陰陽瓦が葺かれている。天井に根太を張ったり、中 2 階の床が板だったり伝統的な様式への整備と捉えられる箇所もある。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、屋根はトタンで伸長している。陰陽瓦を葺き修理基準に沿っている。



開口部は伝統的な様式ではない。



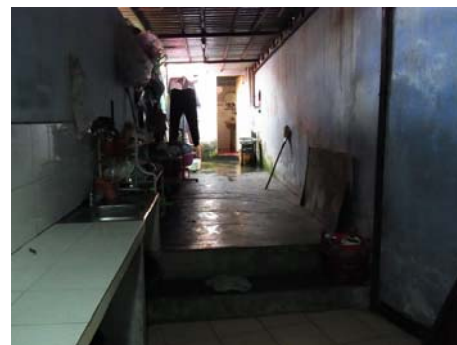
天井を張らずに小屋組みを見せているのは、階高さを増やせないために中 2 階を作っているからか。



同じ棟に中 2 階を作り、階高を増やせずとも居住空間を増やしている。



中 2 階の床は板を張っている。



敷地の形状や棟の構成から空いていた場所に建てたと考えられる。

24)ファン・チャウ・チン 71/22 (71/22 Phan Châu Trinh)

2001年に個人の予算で整備された等級4、個人所有の家屋である。同じ敷地内に2階建てのコンクリート造の家屋があり、そちらも使用されている。この棟だけでは等級3に分類できる。整備工事による伝統的な様式への整備は行われていない。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで開口部が三か所あり、陰陽瓦が葺かれている点では等級3に近い。



内部は天井を張らず、小屋組みが見える。壁面の劣化が激しく、湿気への対処が重要であることが分かる。



モルタル壁に支えられながらも小屋組みが残る。



柱表面の劣化も著しい。



モルタルが剥離し煉瓦が見えるほど腐朽している。約10年でここまで劣化が進行するほど手入れをしていない、もしくは湿度が高いことが窺える。



床はコンクリートが敷かれている。柱は礎石が見えず、歴史的、伝統的な修理が行われてはいない。



25)ファン・チャウ・チン 71/28 (71/28 Phan Châu Trinh)

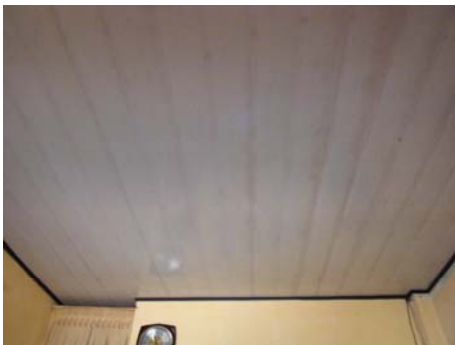
2003年に個人の予算で整備された個人所有、等級4の家屋である。家屋の手前は靴の制作場として使われている住居である。町家形式ではなく、また、主要な道路に面していないため、伝統的な様式への整備は行われていない。



側壁、前壁共にモルタル仕上げ。1階、2階共に開口部が2か所あり、伝統的な様式とは異なる。



トタンを用いて使い庇を伸ばしている点なども利便性優先であり、特に伝統的なものへの調和は考慮されていない。



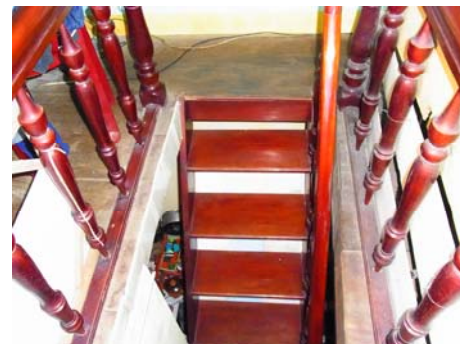
1階天井はプラスチックが張られている。



1階の床には柄のタイルが張られており、伝統的な様式への整備は行われていない。



2階天井にはプラスチックが張られ、柱はモルタルで作られている。



2階に上がる階段の手すりの意匠が伝統的な様式に近いものである。

26)ファン・チャウ・チン 71/36 (71/36 Phan Châu Trinh)

2005 年に個人の予算で修理された等級 4、個人所有の家屋である。路地の奥にあるため周囲に合わせる場合も、陰陽瓦を葺くのみで外観は現代的である。内部も伝統的な様式に整備されていない。



側壁、前壁共にモルタル仕上げで、陰陽瓦が葺かれている。ただし、前壁には煉瓦が使用されており、意匠見本 2 に倣っていない例である。



壁はモルタル、天井がプラスチックで張られており、現代的な内装。



床は部屋ごとに色や柄の異なるタイルが張られている。



木材の根太が張られている天井は伝統的な様式に整備されているともいえる。



壁際の小屋組は省略され、中央にのみ見られる。

27)チャン・フー11/4 (11/4 Trần Phú)

2005年に個人の予算で整備された個人所有、等級4の家屋である。居住者不在のため外部の写真のみとなる。



ファサードを北側から。



扉は木製だが伝統的な様式ではない。



ベランダの手すりは木製で意匠は伝統的な様式であるが表面の仕上げに塗料が塗られていない点が他の家屋と異なる。



家の手前にあるバイク用のスロープ



路地の様子



28) チャン・フー12/8 (12/8 Trần Phú)

2006 年に個人の予算で整備された等級 4、個人所有の家屋である。路地を入った場所に位置し住居として使用されている。わずかに伝統的な要素が見られるが基本的には現代的な作りである。



町家や祠堂とは異なる現代的な外観



1 階の居間に柱はなく壁構造であることが分かる。



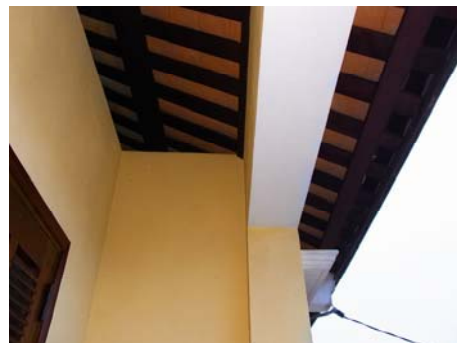
天井には根太が張られているが新しい。復元された。



小屋組みは伝統的、歴史的なものではない。



2 階の床は板が張られ、伝統的な様式を踏襲している。



ベランダ側の庇。桁や壁はモルタル仕上げで伝統的、歴史的な要素は見られない。

## 2. ドゥオン・ラム村資料の見方

表の番号と各家屋等の資料番号は対応している。家屋等の所有者別に掲載した。

- ・「日本人専門家の修理」「修理年」

修理を行った年。日本人専門家の修理に年が入っている場合は、日本人専門家が修理協力を行い、修理年に入っている場合は、ドゥオン・ラム村遺跡管理事務所のみで行った。

- ・修理年に「予定」と入っているもの。

これから修理を行うことが予定されているもの。

- ・「所有者による修理」に「済」と入っているもの

所有者自身が修理を行ったもの。

- ・名称

日本語表記（ベトナム語表記）とした。

- ・集落

ドゥオン・ラム村内にある集落名を日本語で記した。

ドゥオンラム村観光対象物件

No.	管理事務所による修理		所有者による修理	名称	集落	文化財指定
	日本人専門家の修理協力	修理年				
1	2008. 6 /2010	—	—	モンフー門(Cổng Mông Phụ)	モン・フー	国指定
2	2010	—	—	オン寺(Chùa Ôn)	モン・フー	指定なし
3	2010	2010	—	ザン・ヴァン・ミン祠堂 (Nhà Thờ Thành Hoa Giang Văn Minh)	モン・フー	国指定
4	—	2004-2005	—	モンフー集落集会所(Đình Mông Phụ)	モン・フー	国指定
5	—	予定	—	シック・ハウ(Xích Hẩu)	モン・フー	指定なし
6	—	—	済	ホ・ファン祠堂( Thờ Họ Phan)	モン・フー	指定なし
7	—	—	—	教会(Nhà Thờ)	モン・フー	指定なし
8	—	—	—	カムティン集落集会所(Dình Cam Thịnh)	カム・ティン	市指定
9	—	—	済 (2010)	ミア神社(Đền Thờ Bà Chúa Mía)	ドン・サン	指定なし
10	—	—	済 (2012)	ドンサン集落集会所(Đình Đông Sàng)	ドン・サン	指定なし
11	—	2000, 2009-2010	—	ミア寺(Chua Mía)	ドン・サン	国指定
12	—	—	—	ドアイザップ集落集会所(Đình Đ oài Giáp)	ドン・サン	国指定
13	—	—	—	フンフン廟(Đình Phùng Hùn)	カム・ラム	国指定
14	—	予定	—	ゴクエン廟(Đền và Lăng Ngô Quy	カム・ラム	国指定
15	—	予定	—	ゴクエン稜(Đền và Lăng Ngô Quy	カム・ラム	国指定
16	2008. 10	—	—	ハー・ヴァン・ヴィン邸(Nhà Cổ Ông Hà Văn Vĩn)	モン・フー	市指定
17	2008. 10	—	—	カオ・ティ・パイ邸(Nhà Cao Thi B	カム・ティン	指定なし
18	2008. 12	—	—	グエン・ヴァン・フン邸(Nhà Cổ Ông Nguyễn Văn Hùng)	モン・フー	市指定
19	2009. 2	—	—	ファン・ヴァン・トゥ邸(Nha Phan V	モン・フー	指定なし
20	2009. 2	—	—	チュン・ティ・ヌ邸(Nha Truong Thi	カム・ティン	市指定
21	2009. 2	—	—	ヴ・ティ・アム邸(Nha Vu Thi Am)	ドン・サン	市指定
22	—	—	—	トゥオン・ニエム・ク・ファン・ケ・ト アイ邸 (Nhà Cổ Ông Nguyễn Văn Hùng)	モン・フー	指定なし
23	—	予定	—	ザン・ヴァン・トゥアン邸(Nhà Cổ Ông Gian Văn Thuận)	モン・フー	市指定
24	—	予定	—	ハ・ヴァン・テ邸(Nha Ha Van The	モン・フー	市指定
25	—	—	済	ハー・グエン・フェン邸(Nhà Cổ Ông Hà Nguyên Huyền)	モン・フー	市指定
26	—	2012	—	グエン・ゴック・レ邸(Nhà Cô Ông Nguyễn Ngọc Lê)	モン・フー	指定なし
27	—	予定	—	ドゥオン・ティ・ラン邸(Nhà Cổ Bà Dương Thị Lan)	モン・フー	市指定
28	—	予定	—	カオ・ヴァン・トアン邸(Nhà Cổ Ông Cao Văn Toàn)	カム・ティン	市指定
29	—	予定 (2012)	—	キエウ・アイン・バン邸(Nhà Cổ Ông Kiều Anh Ban)	ドン・サン	市指定
30	—	予定	—	グエン・フィ・チュオン邸(Nhà Cổ Ông Kiều Anh Ban)	ドン・サン	市指定

No. 17, 20, 22 は所有者の都合もしくは不在により調査できなかったため資料はない。

### 3. タイン・チュオン邸の資料の見方

#### ・番号

写真の番号と対応している。

#### ・名称

ベトナム語（日本語）の順に記した。

#### ・移築元

タイン・チュオン邸のパンフレットに書かれている場合は記入した。

No.	名称(越語／日本語訳)	移築元
1	Cổng Việt Phủ(ヴィエツ・フー門)	—
2	Nhà Rối Nước(水上人形劇場)	—
3	Nhà Sàn(高床式の家)	ホアビン省モン族の農家
4	Tháp Sơn Tinh(ソンティンの塔)	—
5	Nhà Thanh Tĩnh(安らぎの家)	ナムディン省
6	Tháp Đa(塔)	—
7	Nhà Tranh vách đất(茅葺切妻土壁の家)	バクザン省
8	Cổng Đất	—
9	Bàn Thờ Mẫu(祭壇)	—
10	Thượng Phủ hiền Bò Tát	—
11	Nhà Thủy Đình(水の展示場)	タイビン省
12	Bàn Thờ Tiên(祭壇(現在も使用できる))	—
13	Vườn Đào(庭)	—
14	Ao Sen(池)	—
15	Nhà Tường Vân(良い予言の家)	フエ省
16	Nhà Hát Long Đình(ロン・ディン劇場)	—
17	Miếu Ngựa(馬の祠)	—
18	Cổng chàm(チャム族の門)	—
19	Lầu Mực Hương(東屋)	—
20	Nhà Đại Khoa(宮廷高級官僚の家)	バクニン省
21	Cửa Hàng Lưu niệm(土産物屋)	—
22	Trà Hương Quán	—
23	Nhà Giếng Cổ(古い井戸囲い)	—

1. Cổng Mông Phụ(モンフー門)



側壁はモルタル仕上げ、内部は木材が使用されている。



門近くの木。村の入り口にあり、門と共に象徴的である。



修理の跡が散見できる。材料の色から扉は取り替えられていることが分かる。



石の柱と壁に木材の小屋組み



門の小屋組み。天井が張られず瓦が見える作りである。



ドゥオンラム村に設置されている保存管理事務所の支所。階高は低いが外観が他の家屋とは異なる。



2. Chùa Ông(オン寺)



側壁と後壁はモルタル仕上げ、内部は柱構造である。



他の家屋や寺院と異なり田んぼの中に建っている。



後ろから見ると、モルタルで仕上げられていないため壁面の煉瓦積みが見られる。



小屋組みは奥の材料が取り換えられ、壁面は表面を塗り直されている。



小屋組は、材料を残しながら修理されている



梁を見ると、材料の色から修理で継いでいる。



別の梁の継。このように材料一つ一つをできるだけ多く残す配慮がなされている。



こちらも部材の色から一部継いでいることが分かる。



屋根板部分。白い部分があり、一部取替えられていることが分かる。



梁の一部が取替えられていることが分かる。



柱下部は一部色が異なり、取替えられていることが分かる。



正面右側の柱下部。色が異なり取り換えられていることが分かる。



右側壁面はモルタルで仕上げられているが煉瓦が見えてる。



庇の垂木部分の彫刻が一部取替えられている。



左側の壁際の柱。手前から二本の下部が一部取替えられている。

3. Nhà Thờ Thảm Hoa Giang Văn Minh (ザン・ヴァン・ミン祠堂)



祠堂正面。向かって右側の柱は赤く塗られている。



祠堂の小屋組みは、一部材料が取り換えられている。



祠堂主屋上部。垂木の色が一部異なる。



祠堂主屋下屋部分小屋組みのみ赤く塗装している。



祠堂主屋にかけられている額。額自体の経年変化は見られない。



別の小屋組みを見ると、取り替えた材料は白く、白木のまま使用していることがわかる。



3. Nhà Thờ Thăm Hoa Giang Văn Minh (ザン・ヴァン・ミン祠堂)



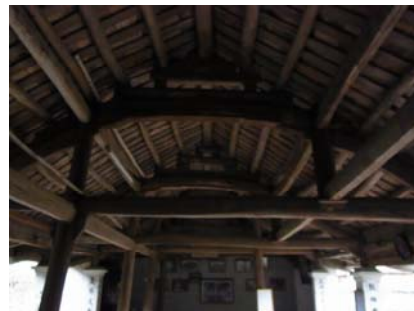
材料の風合いから主屋の下屋、及び梁と桁の材料を取り替えている。



祠堂手前にある棟。柱には文字が書かれている。



祠堂手前の棟にかけられていた文化財指定の証明書。



祠堂手前の棟の小屋組みは。祠堂と同じ和小屋。



祠堂手前の棟の垂木小口に留めている薄い板。



祠堂手前の小屋組み。他では見られる彫刻が施されていない。材料を取替えたためか、元々ないのかは不明。



3. Nhà Thờ Thăm Hoa Giang Văn Minh (ザン・ヴァン・ミン祠堂)



入り口にも屋根が掛けられている。門扉は木製の観音開き。



敷地の壁に埋め込まれている文化遺産を示す表示板。

4. Dinh Mông Phụ(モンフー集落集会所)



正面から中庭を持ち左右に反りのある入母屋造り。赤い瓦で葺かれている。



正面右側。舞台のように高さがある。



柱の補修の様子。腐朽した箇所は埋められている。



内側からの様子。



柱上部の垂木が白いことがわかる。



下部の材料の色が異なるため、材料が取り替えられながら梁方向の彫刻が残されていることが分かる。

#### 4. モンフー集落集会所(Dinh Mông Phụ)



梁の端部に施された彫刻。内部に空間がある。



小屋組みは材料を取替えながら、様式を保たれている。



小屋組み。垂木や桁の色が異なり部材を取替えていることが分かる。



柱上部にある補修の跡。茶色く塗装している。



下屋部分の垂木に彫刻が施されている。上部の屋根を支える桁が取替えられていることが分かる。



扉枠の下部に補修の跡がある。

#### 4. モンフー集落集会所(Dinh Mông Phụ)



扉枠上部に補修の跡がある。枠は白木だが、補修箇所は茶色く塗装されている。



桁、梁共に後補であることが、材料の色からわかる。



小屋組み。屋根を支える材料は茶色く新しいが、小屋組み及び主屋の柱は古い。



桁と垂木が交わる部分。



柱と梁。新しい部材は茶色い塗装が施されていることが分かる。



主屋の室内部分。欄干の一部が補修されている。補修された部材の色が異なる。

#### 4. モンフー集落集会所(Dinh Mông Phụ)



敷地外部の門。屋根瓦及び壁は新しく作られている。



物置として使用されている両側の棟。



主屋周辺の壁。石が積み上げられた壁は修理されていることが分かる。



5. Xích Hâu (シック・ハウ)



両側の壁はモルタル仕上げで内側が弧を描いている。



屋根の端部の装飾。



正面左側から。左側面にも同様に開口部がある。



材料の腐食が写真右側の柱上部に見られる。修理はされていない。

6. ホ・ファン祠堂 (Nhà Thờ Họ Phan)



正面入り口。左右の柱は煉瓦が積まれ、目地はコンクリート。



内部小屋組み。右側の柱下部が補修されている。



右側の柱の中部が材料を残しながら補修されている。



下屋の小屋組みも材料が新しいため、取替えられたとわかる。



側室部分。木製柱部分にモルタルが塗り込められた跡が見られる。



側室の屋根。瓦の色が異なる部分は葺きかえられている。



主屋小屋組み装飾部の一部が茶色く塗装されている部分がある。



小屋組みの白い材は取り替えられている。

7. 教会(Nhà Thờ)



内部は白い漆喰で仕上げられている。



内部の様子。正面から入り口側を見る。



床はタイルが敷き詰められ現代的なつくり。



外にある畑



教会そばにある休憩所



壁面の塗装がはがれ、煉瓦が積まれている様子が見える。



8. カムティン集落集会所(Dinh Cam Thinh)

カムティン集落に位置する集会所。他の集落の集会所と同様に門を有し、建物の前に広い空間を有する。入り口の柱はモルタル製。主屋は平屋である。主屋や木造の柱梁構造だが、同じ敷地内に建つ別の棟はモルタル仕上げの壁構造である。別棟の柱は絵が描かれるなど当初の状態が不明であるものの、伝統的な様式に修理されていない。ただ、ドゥオン・ラム村の家屋において壁面に装飾を直接描いた例が見られるため、これは同村の補修の傾手法或いは、補修に携わった人物や村の意向なのか、引き続き調査を行う。



正面は、他の集会所と同様である。



入り口。門はなく門柱のみ。



小屋組み。繫虹梁の表面の一部が白く、左の柱と色が異なる。



全体的に材料が新しい。



## 8. カムティン集落集会所 (Dinh Cam Thinh)



扉の色や彫刻が部分的に白く、取替えていることがわかる。



柱の下部が劣化している。端部からの劣化が多く見られる。また、モルタルと木材、瓦を組み合わせていることがわかる。



床は瓦を敷いているが剥がれて劣化している。柱下部には貫穴があり、かつて右の写真の様に空間が区切られていたことが窺える。



柱とは別に天井を支える棒が建ててある。劣化が進んでいるが補修が間に合わない。



継手部分の色が異なる。桁と共に劣化が進行していないため、取替えていることが分かる。



柱と床の接続部分。仕口が見える形である。

## 8. カムティン集落集会所 (Dinh Cam Thinh)



外側の柱。貫穴は木ではなくモルタルで埋められている。



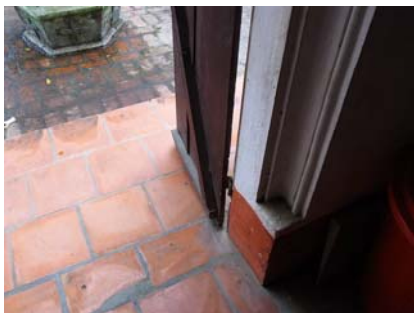
別棟はモルタルで仕上げられた壁と柱を有する。



小屋組、垂木、桁全て材料が白く細く新しい。和小屋である。桁が一部のみ塗装されている。



柱の装飾。しばしばホイアンの同郷會館で見られたが、ドゥオン・ラム村では珍しい。



開口部の様子。モルタルの柱に木製の扉が用いられ、一部の材料が耐久性のあるモルタルに移行している。



別棟。主となる棟以外はモルタルを多用しているが、敷地内の配置は、他の集会所と同様に壁と屋根を除き木材のみを使用している。

9. ミア神社 (Đền thờ Bà Chúa Mía)

ドゥオン・ラム村内においてミア寺と合わせて有名な神社である。調査時は修理中で、モルタルで仕上げられた壁面に象などの絵が描かれていた。



扉は板戸で、塗装が赤、緑、黄が使用されている。正面に向かって左側には象が描かれている。



境内を本殿から見る。



本殿虹梁。外側の端部から塗装が落ちていることが分かる。



別の場所の虹梁。入り口の装飾は内側のみ彩色が施されている。



本殿中央は壁面に装飾が施されている。



本殿小屋組。壁面にやはり飾り絵が施されている。





本殿内部。木鼻の彫刻と桁は表面が白く、後補または、劣化による表面剥離である。



桁に一部表面剥離が見られる。



本殿ではない。敷地内の壁面に塗装を施している。



神社横の参道の修理の様子



神社横の歩道の修理中。



修理後は瓦が新しくなっている。

10. ドンサン集落集会所 (Đình Đông Sang)

他の集落の集会所と同様に、モルタル製の柱が敷地の入り口に立ち、主屋前面に広い空間を有する。主屋はモルタル仕上げで黄色く塗装が施され、柱も赤く塗られている。また、屋根の装飾は、モン・フー集落と同様である。なお、敷地内の棟の構成は他の集落と同様で、主屋の手前に左右の棟が配置されている。共通している点は屋根瓦でありホイアンと同様に屋根瓦は保存対象の一つとなる可能性を思わせる。



正面。モルタルの壁と柱。瓦はドゥオンラム村に共通の赤い瓦が葺かれている。屋根の装飾は古都ホイアンの同郷會館と似ている。



柱とモルタル壁、タイルを敷いた床。ホイアンの等級4と同様の補修である。敷地内の構成は他の集会所と同様である。



入り口部分。扉は木製で上部には装飾が施されている。素材は異なるが木造と同様の意匠である。



敷地内から入り口を見る。床はコンクリートで仕上げられている。



正面右側。資材や物品置き場として使用されている。



正面左側の棟もモルタル仕上げの壁構造である。



10. ドンサン集落集会所(Dinh Dong Sang)



主屋。小屋組は木造。桁は一部白い。梁は曲り梁も使用している。



柱上部が削られており白い。部材表面から腐朽したのではなく、意図的に削られたと推察される。



垂木の一部が取替えられていることがわかる。上部の線は電気を引くためである。



虹梁の上部が別の部材により補修されていることがわかる。



物置の小屋組み。



大虹梁のみ表皮が剥がされている。

10. ドンサン集落集会所(Dinh Đông Sang)



奥の木鼻の色が手前と異なる。風食によるものか。



部材により表面に塗装が施されているかどうか異なる。



柱の下部が劣化している。また、不要な材料のものの置き場だが、ここから薪として使用する。



左下部、モルタルと木造が組合わされている。



材料が小屋組みにおかれている。



敷地内の庭。

10. ドンサン集落集会所(Dinh Dong Sang)



切りだされている材料。



加工中 1



加工中 2



11. ミア寺(Chùa Mía)

国指定の文化財とされている寺院のため、旧材を残す修理が行われている。用いられている材料は太く、他の神社や集会所といった公共施設とも異なる。



入り口の門は 2 階建てになっている。1 階の屋根は葺きかえられている。



門の左右壁面に装飾が施されている。



門裏側。露店が並ぶ。内部側の瓦は葺きかえられていない。



門の内側に並ぶ露店。果物や豆など参拝ではなく土産用に販売している。



手前の建物の屋根は葺きかえられている。また、途中に色の異なる瓦があり、葺き替えた時期が異なる。



本殿柱。下部が継がれていることが分かる。



比較的きれいである。塗装等も剥がれていない。



柱奥の下部の補修は、塗装が施されている。



柱下部は補修されている。



小屋組みも材料を残しながら修理され、屋根も葺きかえられている。



柱下部に補修があることが分かる。補修部分は上から塗装されている。



木鼻、劣化が端部から進行していることが分かる。修理時期のはざまに進行したものと推察される。





小屋組の大虹梁の補修。下部が後補で、瓦も葺きかえられている。



桁の柱下部に補修した跡と仕上げの塗装が見られる。



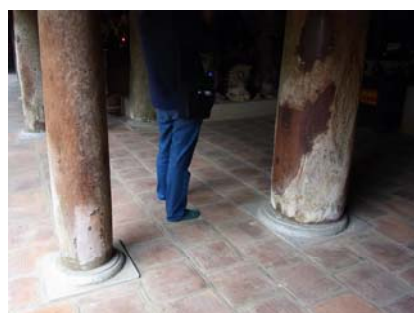
柱と梁は白木だが、桁と垂木は塗装されている。



左の柱表面の黴が劣化の要因となり得る。下部の円形の補修部分あり。



本尊が置かれている。両側の柱の修理や本尊周りの装飾なども経年変化が材料の表面の風食からわかる。



柱下部に色の対価や表面の剥離が見られる。



垂木、桁共に新しく塗装されている。小屋組は一部のみ塗装されている。劣化の進捗具合がわかる。



柱下部が補修され、塗装が施されている。



柱下部が補修されている。ミア寺では補修部分は塗装する傾向にある。



小屋組。垂木と桁は新しい。



廊下の小屋組み。茶色い塗装が施されている部分は補修されたことがわかる。



梁が一本異なる。補強のためか。



柱下部及び中断がモルタルで補修されている。木とモルタルを組み合わせる例は散見できる。



居住棟。屋根は伝統的な瓦を用い、他の部分は伝統的な様式を現代の材料で表している点はホイアンと同様である。



入り口横の壁面。ドゥオンラム村固有の煉瓦が使用されている。



12. ドアイ・ザップ集落集会所 (Đình Đoài Giáp)

他の集落の集会所と異なるのは、入り口に柱が設けられていない点、敷地が道路から低い点である。広場に磚が敷かれ、付近に大木がある点がドアイ・ザップ集落の特徴といえる。



正面には、他の集会所と同様に広い空間が設けられている。



小屋組は塗装が施されている部材と白木の部材がある。



柱に割れが生じている。奥の棟は扉が閉じているため入れない。



大虹梁に文字が彫られている。



中央の柱下部に継がある。左奥は、直方体のモルタル上に柱が載っている。中央奥は、モルタルで埋めている。



中央の柱の中段に継が見られる。また、右奥の柱も中段に継がある。

## 12. ドアイザップ集落集会所 (Đình Đoài Giáp)



継が見られる。形はホイアンのも  
のと同様である。



柱に曲がり材を使用している。直  
方体のモルタルを用いて下部の  
補修を行っている。



直方体のモルタルを用いて下部  
の補修を行っている。



柱下部がモルタルや木材で補修  
されている。下部の腐朽のしやす  
さと、補修方法が場合に応じること  
がわかる。



内部から正面側を見る。



木の柱が直接モルタルの台に接  
続している。前出の補修方法と同  
じ感覚である。



他の集会所と異なりモルタル製  
の柱は設けられず、低い台座のよ  
うなものがある。また、敷地横に  
は木が植えられている。



13. フンフン廟(Đình Phùng Hưng)

ドゥオン・ラム村出身の歴史上の人物を祀っている。国指定文化財である。例えば、瓦や扉など傷みやすい個所は取り替えられているが、小屋組みや柱などは修理跡がわかり、材料を残しながらの修理である。腐朽箇所は木くずで埋めて上から塗装を施している。



正面階段を上ったところに本殿がある。宗教施設の場合は、参道が設けられている。



本殿はやはり横に長い。



修理の跡は特に見られない。



本殿小屋組。桁、垂木と小屋組は色が異なり、部材が取替えられているとわかる。



部材表面が剥離し、白木になっていったことがわかる。



木鼻及び虹梁部分が茶色く、他は素木であることから、材料を取替えていることが分かる。

### 13. フンフン廟(Dinh Phùng Hưng)



柱下部の溝が埋められ、茶色く塗装されている。他の家屋や施設でも同様の手法が見られる。



部分的に茶色い。



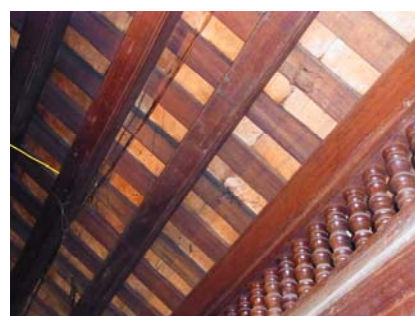
柱上部が部分的に茶色く、補修されていることがわかる。桁や垂木は茶色く塗装されている。



材の風食からすると、取替えている。その際、薄い茶色の塗料表面に塗られている。



扉に番号が付けられている。修理時のものか、普段取り外して使用する際に、入れる順番が書かれているかどうか。



垂木、桁、小壁の装飾全てが後補と判断できる。建造物の外側部分は補修の際に全面的に取替えているようだ。

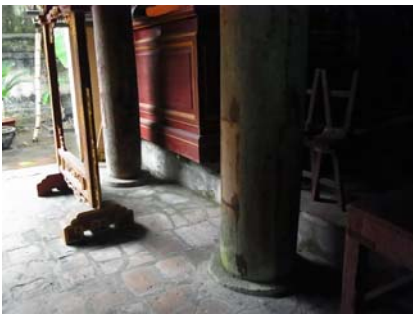
13. フンフン廟(Đình Phùng Hưng)



本堂後ろの棟



別の棟も同じように木造瓦葺である。



柱の下部に穴を埋めた跡がある。



柱下部に埋めがある。全体的に表面の劣化が進行している。



柱が切断されて接続されている。  
既存の材を残す手法が取られている。



柱、梁、下屋の部材と、屋根の垂木と桁を比較すると、屋根の方が茶色く取替えたことが分かる。



### 13. フンフン廟(Đình Phùng Hưng)



屋根の垂木と桁や茶色く新しい。柱と梁、桁、下屋の小屋組は既存の材を使用している。



柱下部に埋めが見られる。補修した箇所は色が異なって構わないようである。



床の瓦の大きさが他の家屋や施設と異なり細かい。劣化は進んでいない。



国指定文化財であることが書かれている。



この棟のみモルタル仕上げの壁面と柱に瓦葺である。

14. ゴ・クエン廟(Đền và Lăng Ngô Quyền)

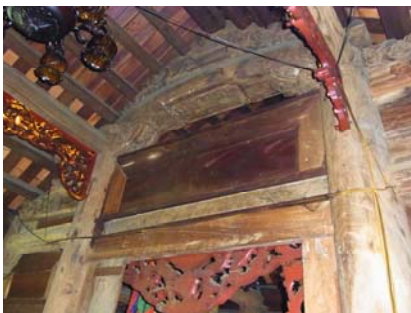
ベトナム史の中の人物を祀った廟である。主屋の底を支える柱はモルタル仕上げだが、内部は木製柱梁構造の瓦葺である。小屋組みに細かな彫刻が施され、修理後の部材にも同様に彫刻が施されている。部材ごと取り替える部分もあるが、劣化した虹梁の内部に補強材を入れるなど、旧材を残した修理も行われている。



本殿正面。敷地の奥に位置するのは他の公共施設と同様である。



本殿正面に線香立てがあり、線香立てを内部に置いている他の宗教施設とは異なる。



小屋組み。材料の表面の色が部材により異なる。また、装飾は部材の材質や風合い後補であることが明らかである。



部材により表面の色が異なり修理されていることがわかる。





茶色い塗装と白木の箇所がある。全体に共通している違いのため、修理時期が異なるのだろう。



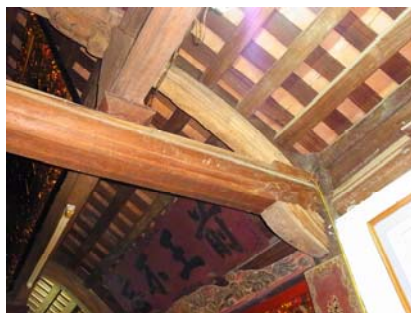
劣化した虹梁の内部に補強材が入っている。周辺は新しい材料が使われている。



別棟の正面扉は木製。修理跡は見られない。



小屋組みは木造で瓦を葺いているため屋根は伝統的なものだが、壁面はモルタルを使用している。



小屋組みの材料がた新しいことが分かる。28番と異なり表面の塗装が見られない。



扉も全て取り替えている。扉に番号が打たれているのは、外した際に順番が分からなくなるからである。

15. ゴ・クエン陵(Dền và Lăng Ngô Quyền)

ベトナム史上の人物の墓。集落のはずれにあるが、周囲は石畳が敷き詰められ、植樹やゴ・クエン陵を示す看板が設置されるなど、有名な観光地であることがわかる。石造りのため他の木造の施設とは異なる。内部には入れないため、外観のみの調査だが、特に修理の跡は見られない。ただ、この村が観光地として可能性を秘めている理由に、首都近郊であると同時に、元々村自体が著名である点も挙げられると感じる施設である。



正面参道と本殿。全体がモルタルで仕上げられ、修理の跡は見られない。



正面左側。階段手すりや門柱下部が黒く腐食している。



参道の一部には瓦が敷かれている。



別の参道の一部は煉瓦で舗装されている。

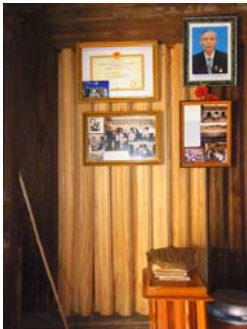
16. ハー・ヴァン・ヴィン邸(Nhà Cổ Ông Hà Văn Vĩn)



正面外観。底部分に壁をモルタルで設けている点に特徴がある。庭の床は煉瓦が敷かれ、使い易くしている。



中央小屋組み。上部の材料は白く取替えていることが分かる。



壁面一部取替え。白い部分と周辺音の材料の色が異なり、取替えられていることが分かる。



垂木が白く取替えていることがわかる。



底下部分の彫刻。垂木が白いこともわかる。



左右側室の天井に張られている板は、白く部分的に取り替えていることが分かる。



側室の柱。色が白く取替えている  
ことが分かる。天井はビニルシー  
ト等で代替している。



18. グエン・ヴァン・フン邸(Nhà Cổ Ông Nguyễn Văn Hùng)



主屋は横に長く、部屋が横に連なる。



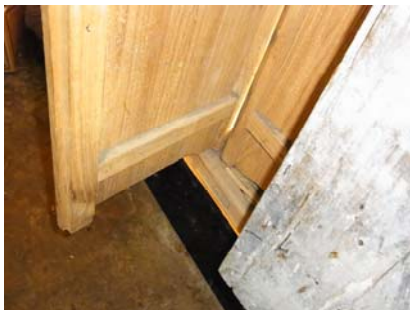
小屋組み。垂木、屋根板共に白く取替えていることがわかる。



側室小屋組みも同様に材料が取替えられている。



主室下屋彫刻が残されている。



側室と主室堺の扉。扉枠も白木であることから取替えている。



側室下屋。屋垂木及び屋根板が白い。柱と色の違いが分かる。





正面の上がり口にある敷居。モルタルの上に板が並べてある。



下屋彫刻及び垂木。外気に接するため色が変わりやすい。



同様に下屋の彫刻と垂木。

19. ファン・ヴァン・トゥ邸(Nha Phan Van Thu)



主屋。壁面がモルタル仕上げで開口部のみ板材が入る。底を支える柱は中央二か所のみ木製。



主屋。ホイアンでも類似の外観が見られる。屋根瓦以外は現代的な材料を使用している。



主屋小屋組み。白木であることから全面的に材料を取替えたことがわかる。



正面下屋。木材を使用した屋根垂木と、モルタルの壁の組み合わせになっている。



庭の部分には瓦が敷き詰められている。土のままの場合もあり、屋主の好みによるものか。

21. ヴー・ティ・アム邸(Nhà Vu Thi Am)



主屋小屋組。屋根板の色が一部異なるため、取替えていることがわかる。



主屋小屋組。桁方向から見ると垂木の色が異なり、取替えられているとわかる。



主屋の垂木部分の彫刻が施された材料の一部が取り替えられながらも彫刻が再度彫られている。



主屋祠堂部分。彫刻が華やかであり古くもある。



庭は瓦が敷き詰められ、庭木、泉の神を祀った祠が置かれている。

23. ザン・ヴァン・トゥアン邸(Nhà Cổ Ông Gian Văn Thuận 邸)

修理の際に材料が全て取替えられている場合がほとんどだが、取り替えた部材に彫刻を施しており、意匠は継承されている。また、旧材を多く残せるように、部分的に取替えられている部分も見られる。

敷地内の庭は磚が敷かれ、主屋以外の壁面は漆喰仕上げとなっている点から、増築部分は木材を使用していないことがわかる。



主屋を正面から見ると、軒先だけ瓦の色が異なり、葺きかえられたことが分かる。



水回り等は漆喰仕上げの壁である。



庭の植木部分以外は磚が敷かれている。他の棟はモルタル仕上げで、外観については、主屋のみ伝統的な様式である。



門扉は木製、門は他の家屋とは異なる様式を用いている。



主屋小屋組みの材料も一部だけ取り換えられている。



主屋小屋組み。部材の色が異なるため、材料ごと取り替えられていることがわかる。





主室と側室の堺の上部彫刻は残され、周囲の部材が取り換えられている。



側室上部の彫刻は、部材が新しいものの彫刻が彫られ、彫刻が継承されている。



側室上部の小屋組みは材料が白く、取替えたことが分かる。木造軸組みを維持している。



主室と側室の堺の壁。部分的に補修している部分は色が若干白い。



主室の小屋組み。桁方向から、部材の色が異なるため、修理時期が異なることがわかる。



垂木端部の彫刻は維持されている。





庇を支える柱の下部が、モルタルで補修されている。礎石は床面と同じ高さである。



別の柱下部の腐朽箇所。下部は腐り易く、モルタルは手軽な補修材料だと推察される。



室内床は瓦が敷かれている。伝統的な要素であり、かつ普通に使われている事例。

24. ハー・ヴァン・テ邸(Nhà Ha Van The')

全体的に、部材ごと取り換えられている。また、柱の下部をモルタルで作り、高さを上げるといった、他の集落でも見られる手法が用いられている。ドゥオンラム村や周辺地域の手法と推察される。



主屋は横に細長く、底を支える柱や主屋全体が木造である。



主屋の主室の小屋組み。白い垂木は部材ごと取替えられている。



主室の小屋組み。桁の一部が白いのは、腐朽により表面が剥がれているため。



主室の下屋部分の彫刻。左側の柱が白い。



主室と側室の堺の扉。枠と共に彫刻が施されている。



主室の柱の下部が白く剥がれている。



垂木、梁、扉の部材は白く材料を取替えたことが分かる。



後部はモルタル仕上げである。柱上部表面が剥がれている。



側室横の壁際の垂木は部材ごと取り替えられている。後の煉瓦が積まれた壁は劣化が進んでいる。



庭には瓦が敷き詰められ、家業の酒造りで使う壺が置かれている。



台所。中央の柱下部がモルタルで補修されていることが分かる。礎石部分から覆われている。

25. ハー・グエン・フエン邸(Nhà Cổ Ông Hà Nguyên Huyền)

調査した中でも規模の大きな家屋である。通常的生活空間と見られる主屋と、来客用の棟がある。庭には麴の入った壺が並んでいる。



主屋正面外観。中央は開口部、左右に出入り口が設けられている。



主屋正面垂木端部の彫刻。オン寺とも共通の部材である。



垂木端部の彫刻を下から見る。薄い板であることがわかる。



主屋の下屋庇。小壁が白く新しいことが分かる。



礎石の上に乗る柱は、下部から我当の劣化が生じている。



主屋の母屋小屋組み。桁の表面が剥離し一部が白くなっている。





主屋の母屋小屋組み。桁の一部が白く、取替えられたことがわかる。



梁上部に彫刻があるが、材料が違うため後補である。



主屋の主室、先祖壇がある場所。装飾に艶のある塗装が施され、他の家屋とは異なる。



主屋の下屋。桁が白く新しいため取替えていることが分かる。雨風に打たれる部分は取替えが多い。



主屋の後はモルタル壁である。柱上部はモルタルで受けている。垂木は一部モルタルに埋め込まれている。



主屋主室の先祖壇上部欄間。部材の色から取替えている。先祖壇周りも時期は違うが取替えている。





主屋の主室壁面。壁及び母屋桁が  
取替えられていることが分かる。



主屋の母屋壁面。壁と杵及び小壁  
と杵が新しく取替えられているこ  
とが分かる。



主屋の側室壁面と天井、垂木、桁  
が白く、取替えられていることが  
分かる。継は見られない。



主屋の側室。壁面と天井、柱が白  
く取替えられていることがわか  
る。



主屋の側室。モルタル壁と天井。  
天井は白く取替えているか後補だ  
とわかる。



主屋の主室と側室の堺。敷居がモ  
ルタルで仕上げられているが、劣  
化している。



客用の棟。他の家屋ではあまり見られない。敷地が広く裕福であることがわかる。



客用の棟の内部。ほぼ同じつくりだが、主室と側室の壁がなく広い。



客用の棟の小屋組み、取替え及び補修の後は見られない。



台所の柱は水を使用するためかカビが生えている。



水回りの棟。棟高が高く、主屋や客用の棟とは別の時期に建てられたのだろう。



門にも屋根が掛けられ、モルタル仕上げの壁がある。

26. グエン・ゴック・レ邸(Nhà Cô Ông Nguyễn Ngọc Lê)

敷地は狭いが主屋は主室と側室から構成される。台所や風呂などの水回りは外に設けられ、鶏小屋もある。柱にモルタルによる補修が見られるが、主屋は木製で左右及び後部は煉瓦積み漆喰仕上げと他の家屋と同様である。主屋は敷地よりも二段高くなっており、床には磚が敷かれている。



主屋は横に部屋が連なるために横に長い。



主屋。底を支える柱の下部がモルタルで補修されている。



同様に底を支える柱の下部が2本ともモルタルで補修されている。



主屋小屋組み。母屋桁が一部取替えられて白い。





主屋小屋組み。桁が白く部材ごと取り換えられていることがわかる。



主室と側室の仕切り。壁が設置されているが材料が白く後補とわかる。



主屋左側の台所部分。



庭の様子。農作物などの加工中のものが置かれている。



門扉は木製、他は煉瓦積みの漆喰仕上げ。



鶏小屋へ向かう門。



敷地内にある井戸。

27. ドゥオン・ティ・ラン邸(Nhà Cổ Bà Dương Thị Lan)



主屋は敷地よりも二段ほど高い。  
手前の柱はモルタルで補修が行  
われている。



庭には瓦が敷き詰められている。



主屋庇。垂木が若干白く取替えら  
れていることがわかる。



下屋桁が白く取替えたことが分  
かる。



敷居下部が黒く補修されている。  
修理済み家屋の中では珍しい。



主屋の庇。桁が白く取替えられて  
いることがわかる。



27. ドゥオン・ティ・ラン邸(Nhà Cổ Bà Dương Thị Lan)



主屋の先祖壇上部の小屋組み。梁が一部白い。



主屋の主室。



主屋の主室小屋組。母屋桁の一部が白い。



主屋の柱。表面が剥離している。



主屋の柱。表面が剥離している。



主屋の主室と側室の堺の扉。



主屋側から見た側室との堺。一部が白く後補。



主屋の先祖壇。材料の劣化度合いから梁が比較的新しいことが分かる。



主屋の梁に下げられているもの。梁と桁が白いことがわかる。



主屋の室内から下屋を見ている。垂木と桁が白く新しいことが分かる。



門はモルタルで仕上げられている。下部が黒く腐食している。



周辺の道路。下は瓦が敷かれ、壁は煉瓦が積まれている。

28. カオ・ヴァン・トアン邸(Nhà Cổ Ông Cao Văn Toàn)



主屋は中心と左右に出入り口がある。



庇。桁と垂木が白く新しいことが分かる。



庇。右側扉上部が白く新しい。扉全体ではなく一部の材料を取替えている。



虹梁の彫刻の一部が白い。上下と正面にわかれており、白い部分は後補ではなく、表面の剥離であり劣化の過程が窺える。



写真右手の梁が白く、部材が取替えられたことが分かる。母屋桁も色が異なり部材ごと取替えられている。



主屋下屋部分の桁もやはり部材ごと取替えられている。



側室と主室の境目は一部材料が白く取替えられていることがわかる。



柱下部にモルタルで補修された跡がある。



29. キエウ・アイン・バン邸(Nhà Cổ Ông Kiều Anh Ban)



主屋。平屋で中央に主室があり、両脇に側室を持つ。



主屋庇。桁が劣化により表面が剥離していることがわかる。



虹梁を正面から見たもの。赤い塗装が施されている。



主屋の主室小屋組み。桁が一部白く材料が取替えられている。小壁や梁も白く後補だとわかる。全体的に表面が剥離する木材の性質が分かる。



主屋主室小屋組を棟方向に見る。桁の表面の劣化度合いの相違や、大虹梁の彫刻と繫虹梁の色の相違がわかる。部材を取替えている。



主屋主室の小屋組。桁には曲がり材を使用し、表面が劣化に依り剥離していることがわかる。





主屋主室の後側、壁に装飾が描かれている。本来は木材を使用して作られるところを絵画で代用している。



同様に主屋主室の後側。壁面に装飾がある。



装飾の拡大図。精巧に描かれている。



主屋後側ではない箇所に装飾が描かれている。



主屋の主室の床材。柱の表面が剥離し劣化していることが分かる。



主屋の庇を支える柱下部。丸い礎石であり、柱表面には塗装がない。



主屋正面の庇を支える柱と床。柱下部が表面の劣化をして色が異なる。



主屋の壁はモルタルで仕上げられているが劣化して煉瓦が見えている。



主屋と別棟の屋根。左側の棟は瓦ではないもので葺いている。



敷地内に外側の壁に使用される石が切り出されている。



古い材料は処分するためにゴミ置き場に置いている。家屋の材料は保管すべき。

30. グエン・ファイ・トゥオン邸(Nhà Cổ Ông Nguyễn Huy Trường)



主屋。庇下の柱下部がモルタルで補修されていることが分かる。



主屋の母屋小屋組。全体が新しく、劣化や腐朽は見られない。



主屋の先祖壇部分。壁に装飾が描かれている。



側室の小屋組。瓦の普及状況が分かる。



主室と側室の堺。彫刻が美しい。



主屋の主室の小屋組。瓦の腐朽具合が分かる。



30. グエン・フイ・トゥオン邸(Nhà Cổ Ông Nguyễn Huy Trường)



主室と側室の堺上部の彫刻。細やかに施されている。



主屋後側壁面に直接描かれた装飾。本来なら、木造で作られ柱に取り付けられている。



主屋下部柱が補修され、継がれている。



主屋の底下虹梁。



文字の書かれた壁面は珍しい。



主屋の底を支える柱。下部がモルタルで補修している。腐朽した箇所をモルタルを埋め込んでいる。

30. グエン・ファイ・トゥオン邸(Nhà Cổ Ông Nguyễn Huy Trường)



底下の柱の腐朽を補修したもの。  
腐朽箇所をモルタルで補強している。



庭には煉瓦が敷き詰められている。



アクセス道路。電信柱と電線が見える。



アクセス道路。3階建てのモルタル造の家屋が見える。



## 【 謝辞 】

本論をまとめ、執筆するに当たり実によくの方にお世話になりました。

まず、ベトナム研究を始めるに当たり、調査隊に入れてくださった昭和女子大学教授菊池誠一先生、ホイアンに長年携わっている同大学教授友田博通先生、内海佐和子先生、准教授 Mark Chan 先生、鈴木弘三さん、千葉大学教授福川裕一先生がいらっしゃらなければ、ベトナム研究が始められませんでした。

筑波大学芸術系教授上北恭史先生は長期間にわたりご指導いただき、お礼申し上げます。副査としてお世話になりました同大学世界遺産学専攻長及び教授稲葉信子先生、同大学芸術系准教授伊藤弘先生、京都女子大学教授斎藤英俊先生、東京芸術大学客員教授日高健一郎先生は、大変お忙しい中時間を割いていただき、ご指導いただきました。

調査対象の中心となった古都ホイアンを管理するホイアン史跡管理事務所所長、副所長、情報室の Thuy さん、図面管理室の Tuoc さん、Phuong さん、青年海外協力隊員として赴任されていた石崎絵里さん、高田弥生さんを始めとしたみなさん、各家屋の居住者及び店舗経営者の方々の協力なくしては、調査ができませんでした。

JICA 専門家の安藤勝洋さんには、貴重な経験と知見、現地の情報を教えて頂きました。ほかにもドゥオン・ラム村の方々、資料を提供くださり、ご自分の経験を教えてくださった有限会社江島建築事務所代表江島明義さん、ロック地域計画事務所代表岩田正晴さん、当時青年海外協力隊員として赴任されていた山口依子さん、井上あい子さんにも感謝申し上げます。

文化庁の大和智監査官を始めとした文化庁文化財部参事官付（建造物担当）の方たちにはヒアリングを含め大変お世話になりました。文化財行政に携わる方々と直接お話しできた機会は、研究をする上で貴重であり励みになりました。外務省文化交流・海外広報課米谷光司課長（当時）、島田丈裕課長、文化無償班村樫真奈美班長、並びに同課の皆様にも心よりお礼申し上げます。

昨年 12 月 18 日に急逝された東京大学名誉教授櫻井由躬雄先生と関係者の方々には、東南アジア研究への姿勢を教えてくださいました。そして、ベトナム研究を始めるきっかけをくださった、政策研究大学院大学教授大野健一先生、林田篤子さん、ベトナム開発フォーラムの方々、調査滞在をするにあたり、生活面で大変お世話になりました株式会社アルメックの阿部朋子さん、ベトナムで知り合った在住外国人の方々にもお礼申し上げます。世界遺産学専攻の同級生や先輩、後輩には、学生生活を送るに当たり大変お世話になりました。社会の第一線で働く友人、知人たちとの交流は、研究の社会的意義を常に問うてくれる貴重なものでした。他にも、多くの方のご厚意と協力をいただいたことを記し、改めて感謝いたします。

最後に、こうした研究生生活を承知し応援してくれた家族がいなければ、研究を中心とした生活を送ることができませんでした。心から感謝します。ありがとうございました。

平成 25 年 7 月 29 日

飛田 ちづる